日本戯曲全集
第九巻

寛政期京阪世話狂言集

東京
春陽堂版

「双面」の浄瑠璃姿

（江戸系統の大日坊
解説など御覧下さい）

寛政六年四月河原崎座上演

「色垣衣娘售」

二世市川門之助の大日坊の靈　岩井喜代太郎のおそめ

日本戯曲全集第九卷目次

寛政期京坂世話狂言篇

京の女郎に
江戸の張り
難波の揚屋で
居續けして

思花街容性

五冊物

初演繪番附の表紙

思花街容性

序幕

上杉屋敷外の場
吉原の場

役名――上杉貞次郎。比良友之進。荒井官藏。野口久馬。關數右衞門。非人、車傳吉。松葉屋小紫。遣り手、おかね。傾城、花扇。同、大里。同、白菊。品川伊平太。質屋、三郎兵衞。仁木主計頭。松葉屋幾浦實ハ桃井息女園生。男達、更科金兵衞。實ハ平井權八。

造り物、二重舞臺、蹴込み石垣にて、一面の高塀。眞中よき所に松の幹、吊り枝下がり、すべて河岸屋體の裏手の模樣。臆病口の方に渡海造りの苫舟もやひあり、本釣り鐘、時の拍子木、太鼓、凄き合ひ方にて幕明く。

ト、東西より番人の侍ひ、拍子木を打つて出て行き合ひ

番甲　これは新五三どの、油斷なくお廻りなさるゝの。
番乙　貴殿もお役目、御出精でござるな。
番甲　左やうでござる。この度、足利家より諸家の寶檢めとやらにて、お使者御下向に付き、御家老よりの云つけにて、一家中の者ども、夜分の出入りを堅くお止めなさるゝ。それゆゑ我れ〳〵がこの役目。
番乙　イヤモ、足利のお使者と申すものは、嚴しいものでござる。十日程以前より御逗留ゆゑ、一家中はもて返し、殊に夜分の出入りまで止めらるゝとは、有やうは不自由なものでござる。
番甲　左やうでござる。夜出られぬと思へば、拙者馴染みの比丘尼めは、なんと致したと案じます。
番乙　成る程、手前も大根畑の君の事が、只心にかゝります。
番甲　イヤ、思はぬ話しで時が移ります。
番乙　もう廻りませうか。
番甲　左やう仕らう。
兩人　御苦勞に存じまする。
ト入れ替り、默禮して拍子木打つて双方別れ入る。始

終此うち合ひ方　矢張り靜かな本釣り鐘にて、橋がゝりより官藏、黑裝束、兜頭巾、忍びの形、龕燈持つてあたりを窺ひ、小石を拾ひ、塀の內へ投げ込む。ト塀の內より久馬、これも忍びの形にて松の木を傳ひ出て上より、

久馬　北方の手當は如何に。

官藏　らい〳〵。

ト下より云ふ、

久馬　らい〳〵。

ト塀の內へ知らせ、松の木を傳ひ、下へ下りると、貞次郞、友之進、數右衞門、何れも同じ忍びの形にて松の木を傳ひ、段々下りて來る。此うち官藏、久馬、東西を窺ひ居て、皆々顏見合せ、一所へ寄つて

友之　貞次郞どの、何れもの勸めに依つて

皆々　まんまと首尾よう

貞次　館を忍び出で、友之進さまを廓へのお供。

官藏　この度、都より寶物改めのお使者として、これにござる比良友之進どのゝ御舍兄、比良正右衞門さま、御同所の御下向。上杉家を御旅館との仰せゆゑ、若殿の廓通ひも、我れ〳〵がお供も叶はず。

久馬　裏門表門には番人嚴しく、館の出入りを留められしゆゑ、若殿のお心を思ひ遣つて

數右　お使者の御舍弟、友之進にお願ひ申せしところ

友之　都に育つた身共は粹、兄者人は足利の出頭、物堅いは四海の政道司。また我れらは戀の道も知り拔いてゐるゆゑ、貞次郞どのゝ思惑、吉原に深間のお的がある樣子、かねて聞いたに依つて、委細は官藏に云ひ付けて、今宵忍びのこの手段。

貞次　エ、、有り難い。友之進どのゝお情で、この間引絕えし太夫が顏を見ると思へば、此やうな嬉しい事はないわいやい。

久馬　時に官公、大切なお客人を、若殿の御名代同然のお供なれば、いよ〳〵云ひ合せし通り

友藏　コレ、氣遣ひない。廓の者は、アレあの船に。

皆々　ヤア、。

ト臆病口の舟、苫を上げ、遣り手かれ、禿、大勢、亭主太鼓持ち出て

かれ　官藏どのゝ云ひつけで、皆樣をお迎ひに。

禿ろ　疾からこの舟に

皆々　待つて居りますわいなア。

貞次　ヤア、田村屋の花車、亭主禿ども。
數右　迎ひとは、こりやけうとい。
かれ　皆様、ちやつと舟へお乗りなされませぬか。
貞次　そんなら、申し友之進さま。
友之　これより直ぐに吉原へ。
兩人　ずい行きの、ぐい呑み。
友之　善は急でぢや。
兩人　何かは舟で。
皆々　イザ、お客人には。
友之　これは堅いワ。廓通ひの付合ひは、それではいかぬ
畜類め、來をれ〳〵。
ト　しか〴〵あつて舟へ乗る。
久馬　コレ〳〵、常は貳挺立ちなれど、人數多し、急がね
ばならぬ、廓通ひ。官公、これへお出でなされい。
官藏　なにか〳〵。
久馬　ともの貳挺はお定まり、銘々に棹を携へ、餓鬼も人
數ぢや、滅多無性に、舟を押したく〳〵。
皆々　オツト心得。ヤツシヨイ〳〵。
ト　めい〳〵棹にて艪を押す。舟、眞中程まで來る。
官藏　アレ〳〵、若殿、御覧ぜよ。

ト　謠ひになり
客にも冴ゆる月吉原へ急がんとて
皆々　滅多無性に櫓を押しにけり。
大勢　イヤア、ハア、ホウ〳〵。
ト　皆々浮き立つ。
友之　ア、コレ〳〵、貞次郎どの、何れも、未だお屋敷近
邊なれば、密かに〳〵。
貞次　ほんに。シイ。
皆々　シイ〳〵、やつし〳〵。
ト　拍子にて艪を押す。舟、段々橋がゝりへ入る。返し。
右の二重舞臺を引込み、東西より高塀。眞中、廓の
大門。兩方に仲之町通り、高提灯立て。東西棧敷の
上、紅葉の吊り枝。ぶん廻しにて出ると、高欄打返
しにて、上げ簾。茶屋の印の提灯、間毎にパラリと
下がる。すべて吉原廓の模様、道具好みあつて、留
めの拍子木にて、江戸清搔彈き立てる。
ト　向うより小紫、禿二人を連れ、下男に箱提灯ともさ
せ、造り手おかれ付き、道中にて、華やかに出る。後
より傳吉、非人にて附いて出て

根本「戯場言葉草」挿繪

上に書いてある役割は再演の分

傳吉　アイ／＼最前からお願ひ申しまする通り、結構な全盛な太夫さま、押默つてお出でなさる御人體ぢやござりませぬ。

かれ　コリヤ／＼、アタしつこい。先刻から、附くな／＼と云ふに、聞分けのない。また後で惡口云ひ居つたら、聞く事ぢやないぞよ。

禿　コレ／＼、なんでも欲しくば、此方の內へござれ。妾には何にもないわいの。

傳吉　其やうに仰しやらずと、どうぞ貰うて下さりませ。

ト矢張り付いて本舞臺へ行く。大門の內より幾浦、花扇、大里、白菊、銘々傾城にて箱提灯ともさせて出て

幾浦　小紫さん、最前から待ちかねて居ましたが

皆々　今までござんしたかいなア。

小紫　幾浦さん、花扇さん、大里さん、白菊さん、お前方は、お早うござんしたなア。

白菊　アイ、今日は田中屋へ、一緒の約束、誘ひ合ふ筈なれど、急きに來るは揚屋の癖。

大里　それでわたしらは先へ來たれど、どうも心が濟まぬに依つて、ナア、花扇さん。

花扇　アイ、それで迎ひがてらに、お前を待合のこの辻へ來ましてござんす。

白菊　小紫さん、必らず氣惡う

三人　思うて下さんすなえ。

小紫　ナンノイナア。常からお前方の實心の程は、キッと呑み込んで居ます。殊にわたしが妹女郎の、その幾浦どのゝ事、まだ突出しから間のない新造さん、隨分おねんもじに賴みまするぞえ。

三人　そりや、互ひの事でござんすわいな。

ト傳吉、前へ出て

傳吉　ハイ／＼、最前から待つて居りまする。お遣りなされて下さりませぬか。

かれ　これはしたり、まだそこに居るかいなう。最前も云ふ通り、揚屋入りなさんす太夫に。

傳吉　イヤ、錢金を貰ふのではござりませぬ。

かれ　乞食だてら、錢金はいはずに、何を貰ふのぢや。

傳吉　ハイ、あの太夫さまのお情が欲しうござりまする。

かれ　ヤア。

傳吉　お無心でござりまする、どうぞお情を貰つて下さりませ。

ト小紫キッと向いて

小紫　ハテ、變つた事を聞くわいの。コレ、そこなお人、情が欲しいとは、なんの事ぢや。

傳吉　ハイ、御合點が參りませぬ筈でござります。私しはこのあたりに徘徊いたす、車傳吉と申す。御覽の通りの人。後の月の十八日、淺草へ御參詣なされたお前、人の噂を聞けば、この廓にて名高い、松葉屋の小紫さま、ハテ美しい、可愛ゆらしいと思ふも、首筋先からゾツとして戀風と云ふものか、土手の寢臥しにも只忘られず、所詮乞食の身が、全盛の太夫樣に惚れたとは、ほんのお月さまと鼈、佛の椀五器提げる身で、勿體ない、思ひ切らうと思うても、どうも思ひ切られぬは、因果といふもの、ア、せめてお杯のしたみでも、戴いたら、この世の思ひ出、直ぐに野垂れ死しても本望。斯う思ひ詰めて居る譯を、ちよつとでも申したら、あの乞食めは阿房な奴ぢやと、サア、また露ほどなりと、いぢらしい事ぢやと思し召されて、お情らしいお詞をおかけなされて下さりませうならば、小紫さま、太夫さま、厚うお有り難う存じまするでござります。

ト泣く。小紫もこなしあつて

小紫　ほんに、思ひ掛けない。その身の上で、わしがやうな者を、それ程にまで思うて下さんす志しは、キツと嬉しうござんす。成る程、ちよつとの杯なりともと思へども、その姿なお人と、途中と云ひ、この人目、なんぼう戀には上下の隔てはないとは云へど、あんまり過ぎ過ぎた事で、わたしもどうも云ひやうがござんせぬ。また折もござんせう程に、今度は乞食どの、マア、さらばえ。

ト行かうとする。

傳吉　ア、イヤ／＼、申し太夫さま。ハテ、おしをらしいお詞。有り難う存じますが、こんな形では逃げ過ぎて、云ひやうがないと仰しやりましたが、また私しが乞食でなくば、仰しやりやうがござりまするかな。

小紫　ハテ、變つた事に念を入れるお人。

傳吉　イヤ、念を入れにやなりやせぬ。私しもどうぞして、乞食をやめて常の人になりませうが、その時思ひを叶へて下さりまするか。

小紫　オヽしつこ。そんな事は知らぬわいの。

かれ　それ／＼、あんな者に相手にならずと、太夫さん、皆さんと一緒に田村屋へ。

大白　さうでござんす。小紫さま、幾浦さま。

幾浦　サア、早う行かうわいなア。

小紫　ほんに、ソレ。
　ト行かうとするを
傳吉　コレ、そんなら太夫どの、おれが思ひは。
小紫　叶ひませぬ。思ひ切つて下さんせ。
　ト唄になり、小紫初め皆々附いて、大門へ入る。傳吉一人殘り、跡見送つて
　エヽ、いま〴〵しい街妻めぢやわい。
　トこなしある。橋がゝりより友之進出て
友之　傳吉、兄者人のお頼み、小紫に出逢うたか。
傳吉　たつた今逢ひましたが、いける女郎ではござりませぬ。
友之　イヤ、兄者人の心をかけて居らるゝ小紫ばかりぢやない、身共がうッ惚れて居る幾浦めも、兎角ピンシヤンして心に隨はぬ。
傳吉　そんならあなたも、幾浦とやら云ふ傾城に。
友之　如何にも。恥かしながら。
傳吉　さては御兄弟ながら。
友之　ハテ、それゆゑにこそ、上杉貞次郎を煽てゝ、この間よりこの廓に居續け。誠に戀は曲者ぢやてなア。
傳吉　時に友之進さま、この間より上杉の館に旅宿してござる正右衛門さまに、桃井家の重寶、拙者が奪ひ取つて立退いた、東雲の香爐を、お渡し申して、拙者へは、この通りの慥かな證文。
　ト書いた物を出す。友之進取つて
友之　桃井家の重寶、東雲の香爐、某へ渡せし功に依つて都へ歸館の上、一廉の武士に取立て遣はすべきものなり。車傳吉、本名大佛十平次へ、良正判……ムウ、すりや兄比良正右衛門と本名を書かず。
傳吉　良正とお書きなされたは、密書同然。拙者も元は桃井家の武士、殿の病死に後目なく、追ッ付け家の滅亡に間がないと思ひしより、東雲の香爐を奪ひ取つて立退いたは、我が身ながら天晴れの孔明、たうとう家も潰れて家中も散り〴〵。これから正右衛門さまやあなたのお庇で、元の武士になる望みでござります。
友之　そりや追ッ付け兄者人へ申し上げて、取り立ててくれう。元は我れ〴〵も桃井家の家來、親人宗太夫どのを、小性上がりの平井權八めが討つて立退いたその後にて、兄者人の私慾顯はれ、兄弟ともに追放に會ひ、都へ登り、不思議に足利どのに取入り、兄者人は今の出頭。かゝる時節なれば、何卒權威を以て平井權八めを尋ね出し、討

ち捨てんと思へども、十ケ年以前の事、部屋住みゆゑ、面を見知らぬ。ところに兄者人の噂を聞けば似寄りの顔形。尤も今は元服いたし、老いくろしくなつたれど、上方より來て居る、更科金兵衛とやら云ふ男達が、どうやら權八臭いとの噂。其方も以前は、同じ家中。平井權八が面を見知つてゐるであらうな。

傳吉　イヤ、同じ家中なれど、十ケ年も後の事、小姓立ちの權八が事、しつかりと覺えませぬが、よし見知つて居ても、桃井の重寶を盗んだ私しなれば、滅多に彼奴に顏は合はされませぬ。

友之　ムウ、それは尤も。

傳吉　また上方から來てゐる更科金兵衛、まだ一度も出會はねど、樣子を聞けば、此奴が、彼の小紫が間夫ぢやげにござります。

友之　イヤ、その儀に氣遣ひない。身共がとくと俠の者に申し付けあり。ナニ傳吉、其方には、まだとくと申し聞かす事もあれば。

傳吉　宵の間は客の入込み。夜更けて密かに。

友之　田村屋へ。

傳吉　然らば、友之進さま。

友之　委細は後程。傳吉、行きやれ。

傳吉　ムウ。

ト傳吉、橋がゝりへツイと入る、友之進、こなしあつて

友之　これからは、幾浦めを。ムウ、さうぢや。

ト唄になり、友之進、大門へ入る。この唄、男達の出の華やかなる唄になり、花道、戸屋の内よりきほひ組を見事に取つて投げる。戸屋の内にて

小積なこ才め、おいらが斯う。

金兵　ハテ、猪口才な。

男達　アイタヽヽヽ。

ト始終、唄の内なり。金兵衛、着流し、壹本差しにて男達二人を捻ぢ上げ出る。一人、起き上がり

男甲　貳人の者、引け取つては江戸の名折ぢや。疊んでしまへ。

兩人　合點ぢや。

ト振り拂ひ、かゝるを金兵衛、立廻りながら本舞臺へ來る。三人、中へ引ッ挾み

男　待て、仕舞ひ付けねば動かさぬぞ。

金兵　アノ、おれがか。

三人　ナ、サ。
金兵　オ、怖い……、ハ、、、、、こなさん方も、マ、滅相な。なんの譯も云はずに、運不盡におれを投げにかゝつたり、どづことしたり、例へ仕合はせと、おれが臆病ようけかたんだらこそあれ、もし投げられて、どづかれて見たがよい。骨が砕ける事ぢやわいの。
男二　貴様は上方の達業、更科金兵衛ぢやな。
金兵　イヤ、達業とやらぢやないが、成る程、上方から来て居る金兵衛でごんす。
男三　その金兵衛ぢやに依つて
三人　貰ひたい。
金兵　そりや何を。
三人　ハテ、松葉屋の小紫を。
金兵　ヤ。
男一　イヤサ、様子を聞けば、小紫と深う云ひ交して居る貴様。
男二　小紫ばかりぢやない、妹女郎の幾浦にも、ちよこちよこと格子先で、ちよつぽくさ親しう話しして居る事も見て置いた。
男三　所の者は鼻明いて

男一　上方者に色を仕負けては、江戸の名折れ。
男二　勢ひ組が立たぬ。
男三　サア、更科金兵衛。
三人　小紫をくれるか、どうぢや。
金兵　イヤ、傾城は賣り物、金さへ出せば、どこの浦でもとは知れた古いせりふ。貰ひ引きは廓のお定まりなれど江戸へ来て、まだ馴染みはなけれども、ちつと譯のあつて、深う云ひ交して居る金兵衛、如何にも所の衆の頼み小紫を遣らう、と云ひたいが、マアならぬ。
三人　ヤ。
金兵　否ぢや、きつうならぬ程に、三人とも、さう心得てもらはう。これから色めが顔見に行かうか。
ト行かうとするを
男一　待て。手強う出た更科金兵衛。
男二　小紫を貰ひかゝつたおいら。
三人　畳んでしまうて、貰はにや置かぬ。
金兵　そりや、どうなりと。
男一　こま言云はさず、いつそ。
トかゝるを
金兵　なにを。

ト立廻りになり、いろ／＼よろしくあつて、三人抜いて切りかけるを、一々見事に投げる。ト、三人、敵はず、橋がゝりへ逃げて入る。

金兵　形もない態をさらして、うぬらを。

ト少し追はうとする所へ、禿文字野出て

文字　金兵衛さま、太夫さんの文。

ト狀を見せる

金兵　ドレ

ト取つて上書を見て

金兵　こりや幾浦どのゝ文。

文字　小紫さまに隠して、屆けに來ました。

金兵　ムヽ。

ト開き、口の内にて讀みしまひ

さうして、小紫は。

文字　一緒に田村屋へ。

金兵　見附けられはせなんだか。

文字　イヽエ。

金兵　ハテ、賢い文字野。錦繪買うて遣らう。おぢや。

ト手を引き、大門口へツイと入る。チヨン／＼にて返し。

大門板塀、上へ引き上げる。二重舞臺、見附け長暖簾、東西に折り廻し、塗り骨障子屋體。いつもの所に門口、田村屋と云ふ掛け行燈かけ、江戸騒ぎにて道具とまる。

ト唄にて

貞次　イヤ、聞かぬ／＼。

大勢　マア／＼、ようござんすわいなア。

ト貞次郎、幾浦、せり合ふを、白菊、大里、花扇、小紫、友之進を留めながら出て

友之　コレ、貞次郎どの、貴殿は何を其やうに腹立てさつしやる。

小紫　よい仲の戀いさかひと、貞さま、こりや幾浦さまとの口舌かいな。

貞次　イヤ、面白さうに口舌ぢやない。ほんまに腹が立つわいやい。

花扇　アレ、貞次郎さまが、きつい癇癪ぢやが、幾浦さん

白大　どう云ふ事でござんすぞいな。

幾浦　サア、わたしや何にも覺えはござんせんけれど、兎角殿樣が腹立てさしやんすのぢやわいなア。

貞次　イヤ／＼、覺えないとは云はさぬ／＼。慥かにおれ

がしつかりと見附けて置いた。

ト友之進、これを聞いて、ムッとして

友之　コレサ〳〵、貞次郎どの、貴殿が何ぢや、見附けて置いたと云はしやるが、さては彼奴めが、どいつぞと聞夫でも、切つたのか〳〵。

貞次　サア、また切つた所へは行かねども、文を認めて、ソツと禿の文字野に持たせて遣つたのを、見屆けました、それでも身共の怒るのが無理でござるか。

友之　そりや諾だ尤も。ア、、どうも濟まぬ〳〵。イヤ、幾浦、すりや其方に、貞次郎どのより外に、可愛い男が出來たのぢやな。エ、、見下げ果てた。さうとは知らずに、身共が……イヤ、貞次郎どのが云ひ交して居さつしやるゆゑ、こりや腹の立つ筈ぢや。この友之進までが、今ちよつと聞いて、腹が立つて〳〵、どうもならぬわいやい。

ト無理に怒る。

幾浦　イ、エイナア、二世までも互ひに云ひ交した殿樣の事を袖にして、なんのわたしが、仇心があつてよいものでござんすかいな。

貞次　コリヤヤイ、よいものなりやこそ、狀を書いて持たして遣つたぢやないか。

友之　オ、、なんで遣つた。自體傾城が遣ると云ふ事があるものかいやい。

白菊　幾浦さん、ちやつと云ひ譯をさしやんせいなア。

幾浦　それでも、どうも云ひ譯の仕樣がござんせぬわいなア。

小紫　幾浦さん、お前はわたしが妹女郎、濟まぬ事があれば、この小紫も濟みませぬ。どう云ふ事で、どこへ文を遣らしやんした。サア、曇り霞みのない事ならば、さつぱりと云ひ譯をさしやんせいなア。

幾浦　サア、その云ひ譯はなア。

貞次　なんの云ひ譯が出來やうぞい。遣つた狀の宛名は、慥かに更科金兵衛どのへ、幾浦よりと書いて遣つたわいなう。

小紫　エ、、そんなら、更科金兵衛どのへ。

ト恟りする。

友之　さては幾浦めも金兵衛に。

貞次　ぢやによつて、濟まぬのぢや。

小紫　こりやモウ、わたしまで默つては居られぬわいな。

友之　身共も胸がクラ〳〵してきた。

幾浦　小紫さん、堪忍して下さんせ。必らず身の徒らではござんせぬわいなア。
小紫　イエ／＼、お前、徒らでないものが、なんで金兵衛さまへ文遣らしやんした。
幾浦　サア、その文はな。
貞次　サア、どう云ふ譯か、云へ、聞かう。
友之　云はれぬと云ふが、臭いわいやい／＼。
小紫　斯う聞くからは、隱さんしても金輪際、問はにや置かぬ。サア、ござんせ。
ト幾浦を此方へ連れて來ると
貞次　イヤ／＼、小紫、マア、おれが聞かねば心が濟まぬわいの。
ト又こちらへ幾浦を連れて來るを
友之　ハテ、身共も腹が立つて堪らぬ。ちよつと。
トこちらへ引ッ張ろ。小紫引分けて
小紫　イヤ、わたしが樣子を聞かねば置かぬわいなア。
貞次　マア、この貞次郎が先ぢやわいなう。
友之　身共に聞かしてもらはねばならぬ。
ト三人して入れ違ひに幾浦を引ッ張り合ふを、白菊、大里、花扇、三人を留めて

白菊　小紫さん、いとしほなげに、幾浦さんを、其やうにせずと、マアとつくりと。
小紫　イエ／＼、構うて下さんすな。
ト振り拂ふ。
大里　貞次郎さま、マア、待たしやんせ。
貞次　イヤ、わいらが知つた事ぢやないわい。
ト振り拂ふ。
白菊　友之進さま、お前までが同じやうに。
友之　エヽ、なにを。
ト振り拂ふ。
小紫　サア、ござんせ。
ト引ッ張る。
友之　コリャ幾浦、此方へ來い。
貞次　ハテ、樣子は身共が聞かねばならぬ。
ト振り退けて、引ッ張り合ふ。此うち始終、大里、白菊、花扇とめる。三人聞かず、よき所にて花扇、幾浦が裲襠を脫がし、白菊に囁き、ソッと奥へ連れさして入る。それを知らずに小紫、友之進、裲襠を兩方へ引ッ張り、しか／＼云うて居る。貞次郎これを見て
貞次　ヤア、太夫は。

花扇　いんま奥へ。

貞次　あれを遣つては。

ト追ひかけ入る。

花次　申し、それでは。

ト両人も一緒に奥へ入る。小紫、友之進はそれを知らずに

小紫　幾浦さん、なんで金兵衛さまに文を遣らしやんした。

友之　斯うなつては、隠しても隠されぬ。金兵衛と間夫切つたに違ひはあるまいがな。

小紫　サア、様子をちやつと云はしやんせいな。

友之　なんの様子が。云はれまい。

小紫　それでも、わしや聞く。

友之　おれも聞く。

小紫　お前はマア。

友之　おのれはなア。

トこの時、互ひに心附き、襦袢見て

小紫　ヤア、幾浦どのは。

友之　こりや、藻抜けの殻ぢや。

小紫　そんなら奥へ。エヽ。

ト襦袢ぐじや〳〵にして行かうとするを。

友之　コリヤ、よい次手ぢや。小紫、貴様に云はねばならぬ事が。

小紫　エヽ、腹の立つ。知らぬわいなア。

ト襦袢を打ちつけ、ピンシヤンして奥へ走り入る。友之進、襦袢を取り上げ、小紫がしたやうにして

友之　エヽ、阿房らしい。たんの事ぢや。

ト襦袢を打ちつけて癇を立て、奥へ入る。と唄になり向うより伊平太、質屋三郎兵衛連れて立ち出で

三郎　コレ〳〵、伊平太どの、わしに如才はごんせぬわいの。

伊平　いま初めて様子を、聞けば聞く程打捨てゝ置かれぬ大切な品。殊に人手に渡して、よいものでござるか。

三郎　サア、それぢやによつて、こなさんに様子知らしたぢやごんせぬか。

伊平　成る程、日頃懇意に致す三郎兵衛どの、よう知らして下さつた。若殿はお大名気質、若気と云ひ、後先なしに、大切な一品其の許の方へ、質物にお差入れなされたでもあらうが、これと云ふも、大方側に附添ふ……これは格別、差當つて質物の日限り、今宵と云うてはあんまり火急な儀。何卒もう一両日、と云うても金づく。どう

その四五日の所を、これまでのよしみ、拙者が頼みぢや程に、待つて下さるまいか。

三郎　ア、、コレ〳〵、伊平太どの、此方も質商賣、常の懇ろは格別。

ト證文出し、開き

「一札の事、一つ日數十日限りと相定め、其許に松蔭の硯質物に差入れ、金子三百兩借用申すところ實正明白なり、然る上は、右日限過ぎ候はゞ、何方へなりとも勝手次第に賣り拂ひ申すべく候、その時一言の申し譯これなく候、念のため依つて一札件の如し。月日、上杉貞次郎、大黑屋三郎兵衛へ。」コレ、若殿の自筆と云ひ、慥かな印形。日數は昨日限り、今朝から今まで待つたは、お大名だけ、金が出來たら渡さうと、硯も爰へ持つて來ました。金が出來ねば、直ぐに此方へ賣る約束、どちらへなりとも伊平太どの、こなさん、しつかりと返事を聞かして下さんせいの。

伊平　如何にも、その證文を見れば、若殿の自筆と云ひ、慥かな印形。日限りとあれば、脇外へ賣られては、云ひ分はなけれども、大切なお家の重寶、殊更寶改めとあつて、都よりお使者のお下向。是非請け戻さねばならぬ品。コレサ、三郎兵衛との、口でまだ〳〵とは申さぬ。品川伊平太が、兩手を下げる。四五日がならずば、二三日……サア、それもならずば、せめてたつた二日。

三郎　伊平太どの、此方から頼みます。どうぞ料簡して下され。

伊平　すりや、二日がならずば、せめて明日一日のところを、日頃のよしみ、何卒聞分けて下されまいか。

三郎　何とも迷惑な事ではある。

ト頭を掻く

伊平　ハテ、常から伊平太が魂ひ、よく存じて居らるゝではござらぬか。

三郎　忠義一圖の貴殿の氣質は、よう知つて居るゆゑ、それで知らせましたのぢや。

伊平　サ、、、それぢやによつて、平に頼みに頼みます。

三郎　とんと氣の毒なものなれど、ようごんす。こなさんの如才ない事を知つて、明日一日とはならぬ、今夜一夜さ待ちませう。

伊平　ヤ。

三郎　ハテ、明六ツの鐘が限り。どうぞ今夜中に、金拵らへたがよい。

伊平　ムウ。すりや、今宵明六ッまでに。
三郎　金が出來ねば、硯は外へ賣りまする。
伊平　成る程、骨が舍利になつても拵らへにやならぬ。硯質請けして、三郎兵衞どの、こなたは宿へ。
三郎　イヤ、金拵らへるに勝手がよければ、今夜はこの廓に。
伊平　そりや幸ひ。今宵はこの田村屋にあれば、どうで屋敷へは歸らぬ。もし今でも金調達いたさば。
三郎　おれもこなさんに附合うて、京町の小松屋に
伊平　待つて居て下さるか。
三郎　片しまひ、壹歩貳朱をはずまねばなるまい。
伊平　そりや忝ない。後までキツと。
三郎　必らず違はぬやうに。
伊平　それまで、硯の事を。
三郎　ハテ、呑み込んで居る。
伊平　然らば、三郎兵衞どの。
三郎　伊平太どの。
伊平　明六ッ限りに
三郎　いづれ返事を。
伊平　待つてござれ。

ト唄になり、三郎兵衞、橋がゝりへ入る。伊平太一人殘り、こなしあつて
伊平　若殿の御放埒、後先なしに、松蔭の硯の事も……明六ツまでに貳百兩と云ふ大金、何を云うても小身者ゆゑ、ハテ、なんとしたものであらうなア。
ト思案をする所へ、傳吉、着流し、浪人者の形にて、橋がゝりより出かけ、聞いて居て、この時
傳吉　貳百兩の金、用立てませうか。
伊平　ヤ。
傳吉　イヤサ、御主人へ、忠義を思ひ、僅かな金に差支へ、當惑の樣子、承はつて氣の毒に存じ、幸ひ拙者が持ち合せし金子貳百兩。
ト抛り出し
お立替へ申す。
ト伊平太、恟りして
伊平　アノ、この金を。
傳吉　お心置きなう。
伊平　たければならぬ金の手詰め。思ひ掛けなう、貸さうとあ。この金は、轍の魚が水見た同然。ついぞお目にかゝらず、近附きでもない拙者に。

傳吉　取替へますも、貴殿の忠義の魂ひ、天晴れと存ずるから。拙者も浪人なれど、武士は互ひと、サア、申すは表向き。有やうは商賣でござりまする。

伊平　エヽ。

傳吉　イヤ、私しは少々の金を取引いたして、渡世仕る浪人者。それで、この遊所へ入込み、大盡金又は太夫金を貸しつけて、祇園ではなけれど、口錢立てに仕る。俗に云ふ口入れでござる。

伊平　ムウ、成る程、聞き傳へて居る金の世話役。口入れとやら。すりや貴殿は。

傳吉　口入れぢやに依つてお近附きでなうても貸しまする

伊平　忝ない。然らば、拙者がキッと借り受けます。

ト取らうとするを

傳吉　待つた。望みならば貸しまするが、歩口錢の應對。

伊平　そりや、後で如何やうなりと。

傳吉　ムウ、極めのは先引きなれど、初めてのお得意、上杉の御家來だけ、慥かに思へば、一札書いて遣はされい。

伊平　して、その一札は、

傳吉　ハテ知れた、預かり手形。

伊平　成る程。

ト硯を取つて來て、サラ／＼と證文を書く。

さうして、こなたの名苗字は、

傳吉　歩錢も貸すゆゑ、家名は車屋、名は傳吉。

伊平　車屋傳吉どのへ、上杉家の家來、品川伊平太、身共が書き判。これでよくござるか。

ト書いて見せる。取つて

傳吉　書き判だけにこみづなれど、自筆の一札、これで納めませう。

伊平　忝ない。お禮は追つて。火急の金子、一時も早う。

ト金取り上げ

して、こなたのお宿元は。

傳吉　返濟の節は、此方から受取りに參ります。

伊平　然らばその節。

傳吉　早う主人のお供を。

伊平　如何にも。過分に存ずる。

ト唄になり、伊平太、金を持つて奥へ急ぎ入る。後に傳吉こなしあつて、證文をシッカリと懷中へ入れ

傳吉　マア、貳百兩は濡まつた。これから、友之進どのにさうぢや。

ト奥へ入る、騷ぎ唄になる。向うより仲居・田村屋と

云ふ箱提灯とも出る。後より、主計、袴羽織にて、供大勢連れ、町人の振舞ひの體にて、仲居二三人連れて出る。金兵衛、主計に小腰かゞめ、一緒に附いて出て

金兵　これは思ひがけない所で、御尊顔を拝しましてござります。

主計　されば〳〵、御身も別條ない體で、先づはめでたい

金兵　有り難う存じ奉ります。して、何方へ、お越し遊ばされまするな。

主計　イヤ、今宵は掛屋方の振舞ひで、當所田村屋方へ招かれる。

金兵　即ち私しも、田村屋方へ參上仕ります。

主計　それは幸ひ、サア、同道せう。

金兵　お供仕りませう。

ト云ひ〳〵主計、金兵衛、皆々本舞臺へ來る。

仲居　サア〳〵、お客様をお迎ひ申しましたぞえ。ちやつと太夫様に迎ひましに遣つて下さんせ。

客方　大切なお客ぢや。なぜ亭主は出ぬぞ。

皆々　亭主〳〵。

主計　イヤ〳〵、苦しうない〳〵。ちと手前は、この男に訊ぬる事があれば、ナニ、仲居ども、皆を連れて、マ、奥へ〳〵。

皆々　イヤ、大切なあなたなれば。

主計　ハテ、大事ないと云ふのに。密かな儀なれば、行きやれ行きやれ。

皆々　左様ならば參ります。

ト皆々奥へ入ると、金兵衛、こなしあつて、主計が前に手を仕へ

金兵　仁木主計頭さま、思ひ掛けなうこの所で、お目にかかりまするは、願うてもない仕合せでござりまする。

ト辭儀する。主計もこなしあつて

主計　ア、其方が今の名は何とやら。

金兵　更科金兵衛と呼びまする。

主計　ムウ、金兵衛、いつぞやより此方屋敷へ、密かの願ひ、其方が古主桃井家とは、内縁ある某、外ならず存ずるところに、幸ひこの度、都足利どの、嚴命に依つて、武器財集錄と號する書を選み給はん爲、諸家の重寶を御上覽あり、その横目の役は佐竹氏、先達てより其方が願ひも、とくと申し入れた。なんぞ手掛りでもあるか。

金兵　憚かりながら、斯う云ふ事になり、名をも改め晝夜

廓へ入込みまするも、彼の詮議の爲。

主計　其方ことは國元にて、小姓立ちにて、家老分の者を殺め國遂。それも家を思うての儀とある。併し、其方に討たれし比良宗太夫が悴ども、今は足利家へ召出され、當時出頭の權威を以て、其方が行くへを探すと聞及ぶ。殊に比良兄弟の者、足利の嚴命にて、彼の寶を改めに當所へ參り居れば、必らず油斷なきやうに。また本名を深く包むが肝要。

金兵　御主人の御家門どのとあつて、重々の御厚志、有り難う存じまする。それに付きまして、兼ねてお願ひ申し置きましたる通り。

主計　ハテ、一旦紛失の東雲の香爐、詮議仕出さば、それを功に、滅亡したる家を取立てる、推擧は樂。して、桃井家の骨肉息女、園生どのはいづれに。

金兵　イヤ、園生どのには。

ト氣味あつて

私しが隱まひ居りまする。

主計　先達ての願ひと云ひ、其方は神妙な者ぢやなア。とても事に金兵衞、幸ひな儀がある。只今申す如く、足利どのへ諸家の寶御上覽あれば、何卒紛失の香爐、今宵中に尋ね出して手に入れまいか。

金兵　尤も、今まで相知れぬ寶なれども、桃井家を取立てる首尾とござりますれば、この身を骨に碎きましても、東雲の香爐、詮議いたして差上げませう。

主計　すりや、その詞に相違はないか。

金兵　拙者が日頃の願ひ、お家の再興。

主計　天晴れ忠臣。必らずともに。

金兵　幸ひ、この家に御入りあれば。

主計　明け方までに、キッと詮議し

金兵　差上げませう。

ト奧より仲居立ちかゝる。以前の皆々出て來て

仲居　申し、お客樣、皆樣が待つてゞござります。

皆々　どうぞ座敷へ、お入り下されませうならば

主計　イヤ、只今參らうと存じて居つた。

皆々　左樣ならば、申し。

主計　ハテ、行くと云ふに……コリヤ、金兵衞、今の儀を

金兵　キッと承知仕りました。

皆々　サア、お出でなされませ。

ト唄になり、主計、皆々、奧へ入る。金兵衞一人、「ムウ」と思案して居る所へ、奧より小柴出て顏見合せ、

ツンとして上座の方へ行くを、金兵衛、これを見て
金兵　小紫、昨夜は來うと思うたけれど、いろ〳〵用があつて。定めて待つて居やつたぢやあらうの。
ト小紫の側へ來て云ふ。小紫、物云はぬゆゑ
コリヤ、物を云へやい。ハア、物が云はれぬかえ。なんぢやゝら、莨ばつかりのんで居て、其方が莨のむに、此方が負けて居るものかい。
ト莨盆持つて出て
此方も莨のむワ。なんぢやゝら、へげ垂れのやうなおやまに、物云うてもらはいでも大事ないぢや。
ト莨のんで居る。
小紫　どこの國でも、浮き川竹の流れは一つ。分けてこの吉原の傾城は、張りと意氣地を專らにするといへば、上方まで噂があると聞いては居れど。
金兵　有り難い御法談が始まつた。
小紫　金兵衛さま、なんと云はしやんす。
金兵　坊樣がござつて、談議が始まつたと云ふ事よ。
小紫　ハイ、わたしや坊樣でござんす。
金兵　成る程、坊樣とは、よい思ひ付き。ドレ、顏見てやらう。成る程、坊主顏ぢや。剃りこぼつたら、青坊主ぢやあるぞい。
小紫　わしが又、坊主になつたら、どこやらの人も坊主にして、連れて行かねばならぬ。
金兵　成る程、こなさんの坊主は、はつち坊主ぢやによつて、大勢連れ立つて、ハツチと云うて歩くのであらう。ハヽヽヽヽ。
小紫　金兵衛との、それで濟むかえ。
金兵　強請り臭い。知らんわいの。
小紫　知らしやんせずは。わしが斯うして。
ト剃刀にて髻切りにかゝる。立廻つて
金兵　こりや何するのぢや。
小紫　お前を坊主にせねばならぬ。
金兵　こりや、惡い思ひ付きぢや。もう料簡して下さりませ。
小紫　お前をわしが。
トいろ〳〵立廻りにて、振り上げし手を足にて留める
足で。好かん。なんぢやぞいなア。
トいろ〳〵立廻りあつて、金兵衛、小紫が手を捉まへ兩人下に坐つて
エヽモウ、腹が立つてどうもならぬわいなア。

金兵　なんの事ぢや。譯が知れぬ。これには何ぞ樣子があ
いう。譯を云へ。どうぢや。
小紫　エヽ、胴慾にござんす。金兵衞どの。
金兵　なんの事ぢや、譯が知れぬ。品に依つたら髮は愚か
首でも切られてやらうが、マア、その譯を云へ。
ト奧より貞次郎、出かけ居て
貞次　その譯は、上杉貞次郎が云うて聞かさう。
金兵　ナニ、上杉の若殿樣が。
貞次　戀の敵の更科金兵衞、生けては置かれぬ、覺悟せい。
ト脇差を拔いて切りかける。
金兵　これは思ひ掛けない。聊爾なされまするな。
ト留める。小紫、剃刀取上げ
小紫　一旦云ひ交した金兵衞どの、お前の心が變つた上は
なんのわたしが生きて居られませう。
ト死なうとせる。
金兵　コリヤ、狼狽へ者、待て。
ト小紫を留める。
貞次　町人の金兵衞、手討にする。
金兵　これは御短慮。
小紫　南無阿彌陀佛。

金兵　コリヤ待て。
貞次　覺悟せい。
金兵　お待ちなされい。
小紫　イヤ放して。
貞次　それへ直れ。
金兵　マア。
ト兩方を留める。
皆々　マア〳〵〳〵。
ト始終立廻りにて、しつかりと兩方留めて
金兵　いま初めてお目にかゝつた上杉の若殿。
ト貞次郎の顏をキッと見て、また小紫を引起し、顏を
キッと見て
互ひに二世と云ひ交したる小紫が、この金兵衞への面當
てに、自害しようと云ふ樣子。また戀の仇ゆゑ手討と
は、マア、こりや何の事でござりまする。
貞次　何の事とは、金兵衞とやら、よう〳〵、おれが云
ひ交して居る、幾浦と不義したなア。
金兵　エヽ。
小紫　金兵衞どの、幾浦さんと譯ある事を、なぜ隱さしや
んした。わしやお前の女房ぢやと思うて居る者を、幾浦

さんに思ひ替へられて、わしやどうせうぞいなア。どうせうぞいなア。

金兵　ムウ、そんなら幾浦どのと、この金兵衛が、懇ろして居ると思うてござりまするか。

小紫　それぢやに依つて、いつそ。

　ト また死なうとする。

金兵　コリヤ。

　ト 留める。

貞次　ぢやに依つて、其方を手に掛ければ、貞次郎の腹が癒えん。

金兵　さては、云ひ交されし幾浦どのゝ心が、変つたと思うて、アノ上杉の若殿様が。

　ト また切りかゝる。よろしく

貞次　もう家国の事は思はぬ。腹が立つて／＼、どうもならぬわいやい。

金兵　小紫が心も。

小紫　何楽しみに生きて居りませう。

金兵　チエヽ、有り難い。若殿の思し召し。小紫が心底。

小紫　エヽ。

貞次　なんと。

金兵　命は萬寶の随一と、大智度論とやらにある通り、伊達や見得に捨つる者は、よもやござるまい。若殿、小紫、金兵衛へのお疑ひ、口でまだ／＼とは云はぬ。心を鎮めてこの文を。

　ト 返し前に禿が持つて来た状を出す。貞次郎、小紫、取上げ

小紫　金兵衛どの参る、幾浦より。

貞次　コレ／＼、それが最前の證據の文ぢやわいの。

金兵　ハテマア、読んで御覧じませ。

小紫　どうで厚かましい事ばつかりが書いてあらうぞいなア。

　ト 此うち金兵衛、臆病口へ心を附ける。

貞次　「まはらぬ筆にてしめしとり〳〵、誠に不思議の縁にて、御目もじなし、嬉しさ山々限りなう存じとり〳〵……コレ山々嬉しかつたといひなう。

　ト グッと腹立てる。小紫もこなしあつて

小紫　ドレ、わしが読みますわいなア。

　ト 引ツたくり

存じとり〳〵、兼ねてお頼み申しとり〳〵身の上に候へば、行く末長う便りとなり下され……こりや夫婦にならうと約束

しくさつたのぢやなア。

ト金兵衞を睨む。貞次郎、狀を取つて

貞次 便りとなり下され、上杉の若殿樣とは深き契りの約束いたし、行く末永々夫婦の結びを、神佛樣へ祈りまゐらせ候へば…ヤア〳〵、上杉の若殿樣とは深き契りの約束いたし、行く末ながく夫婦の結びを神佛樣へ祈りまゐらせ候へば、この上は一日も早く、貞次郎さま方へ參り候ふやう、主從のよしみに、御世話頼み入りまゐらせ候、猶また國元の事に付き、其方どのを附け覘ふ者、廓へ入込み候へば、隨分御身大事になさるべく候ふ、この事早く〳〵知らせたく急ぎまゐらせ候と。

小紫 そんなら金兵衞、お前は

金兵 一旦中絶いたせど、三世の奇緣盡きせず、不思議に巡り會ひし御主人の御息女。

貞次 ヤア。

トこなしある。幾浦走り出て

幾浦 小紫さん、疑ひは晴れましたかえ。

小紫 エヽ、幾浦どの。

貞次 すりや、其方は今の樣子を。

幾浦 樣子を聞いて、出るにも出られず

貞次 さうとは知らずに。

金兵 なんと不義ではあるまいがな。

貞次 コレ太夫、堪忍しや。

ト引寄せる。小紫もこなしあつて

小紫 金兵衞さま、何にも云ひませぬ。

ト金兵衞を拜む。

これでござんす。

ト下に居る。

貞次 して太夫、其方の素性は。

金兵 イヤ、上杉貞次郎どのと御緣を組んでも、恥かしからぬ氏系圖。足利の御家臣、桃井家の御息女園生さま。

貞次 さては修理太夫どのゝ御息女であつたか。

金兵 情なや、大殿御病氣の砌りには、お家に佞人あつて御跡目ないのと、寶紛失を申し立てに、家國の退轉、家中は散り〴〵。園生さまにも人に騙され、この廓の浮き沈み、思はず出會うて無念のお話し、樣子を聞けば、上杉貞次郎どのと云ひ交せしとの御事。まだしも嘆きの中の喜び。何卒寶を詮議し出して、桃井家のお家を取立てんと、千辛萬苦仕り、日頃この里へ入込むも、あなたのお身の上、又は寶の詮議の爲。

幾浦　幼ない時に別れ、不思議に巡り會うて、互ひに名乘る主從の緣とて、それより始終の心遣ひ。

小紫　嬉しや金兵衞さまは、桃井さまとやらのお家の

金兵　譜代の家來、本名は平井權八。

貞次　ヤア、その平井權八とは、小姓立ちにて朋輩比良宗太夫を手にかけて、立退いたと聞き傳へたが。

幾浦　それも矢ッ張り、家を大事と忠義ゆゑ。

金兵　宗太夫は家老なれども、佞奸をもつて殿に侫らひ、お下の百姓を虐げ、上に立つ身のあるまじき、强慾無道に政道偏く、生け置いてはお家の爲にならぬと存じ、私しの遺恨にもてなし、討つて捨てしは十年後。

貞次　コレ、大事の身の上。必らずその事を。

金兵　イヤ、寶を詮議し、お家を取立てるまでは、鵜の毛で突いた程も、この身に凶事は。

小紫　エヽ、情ない。そんならお前は

金兵　人殺しの科人、平井權八と聞いて、そちや緣が切りたいか。

小紫　エヽ、なんと。

金兵　ハテ、行く末詰まらぬ敵持ち。緣が切りたくば心任せ。

小紫　樣子知らぬ先は、夫婦になりませう。人殺しと聞いて、緣切らうと云ふ、そんな水臭い小紫ぢやと思うて、お前は末の約束して下さんしたか。

金兵　ヤ。

小紫　ソレ、最前の詞に、命に萬寶の第一とやら。伊達や見榮に捨てる者はござんせぬわいなア。

金兵　ムウ。

ト思案する。

貞次　貞次郎も又、太夫が身の上、聞いた上は、おッつけ身請けして夫婦となり、改めて媒人はこちら貳人。

金兵　有り難いお詞に隨ひ。

ト腰の印籠を外し、重ねを取つて

ソレ、小紫、夫婦の固め。

ト小紫へ抛つてやる。取上げて

小紫　こりや印籠、下の重ね。

金兵　肌身離さぬは、殿樣よりの拜領、その印籠の蒔繪は雌雄の鴛鴦、俗にも比翼の鳥と同樣に呼べば、いま別れて居ても、末で寄れば、この比翼の合ひ紋。

小紫　エヽ、嬉しうござんす。お前の心底。勤めの身なれば、例へ夫婦にならずとも。わたしが死んでも未來へ土

筐。
金兵　生死は不定、知れぬが天命。
小紫　土となつても離れぬ筐。
金兵　其方が勤めの操。
小紫　印を殘す比翼塚。
金兵　オヽ、出かした。
小紫　必らずともに。
　ト抱きつく。金兵衛、二人を見て、ちやつと小紫を抱
　き
金兵　お主の前の不作法者め。
　トこなしある。
小紫、氣の附かぬ。おのれが身の上の、事ばかり云うて
肝心のお二人の、マア仲を。
小紫　それ〳〵、こりやわたしが氣が付かなんだわいなア
申し、幾浦さま、お前も貞次郎さまを連れまして行かし
やんせいなア。
幾浦　それでも、どうやら改まつて、
小紫　なんの初心な。勤めして居るやうにもない。ほんに
その筈、お大名のお娘御。
金兵　コリヤ、それを云ふ事か。

小紫　それ、わたしとした事が。
貞次　兎角云はず語らず
金兵　互ひの胸に
貞次　更科金兵衛どの。
小紫　傾城の幾浦さま。
金兵　ドリヤ、粹を利かさう。
　ト唄になり脇見する。ト小紫、幾浦を勸めて、貞次郎
を連れさせ、奥へ入らす。金兵衛小紫顏見合せ
先づ一方は片附いた。
小紫　何を云はしやんすやら。お前にもわたしがナ。
　ト手を取つて行かうとするを、振り放し
金兵　コリヤ、何をするのぢや。
小紫　何しようぞいなア。ツイ知れた事ぢやわいなア。
　トまた手を取るを
金兵　エヽ、いま〳〵しいぢやわい。
　トこなしある
小紫　ツントモウ、常住そんな事云うてから。マア……ほ
んに辛氣な……ちつとわしが云ふ事も、聞いてくれたが
よいわいなア。
金兵　常住聞いて居るぢやないかいなう。

小紫　そんならツイちよつとなと。
　トこなしある。
金兵　イヤ〳〵、おりや寢る事は嫌ひぢや。
　ト片脇へ寄つて下に居る。
小紫　コレイナ、又そんな事云ふのかいな。あの殿樣見やしやんせ。幾浦さまがござんせと云はしやんすと、隱と云うて行かしやんしたぢやござんせぬか。又お前のやうな堅意地なお方はないわいなア。明日の晩から寢よとは云はぬ。今夜ばかりは、ちつと話さねばならぬ事がある
コレイナア、エ、エ。
　トもたれかゝり、こなしある。此うち奧より官藏・數右衛門出かけ居て
官數　イヤ、小紫。さうはならぬぞ。
小紫　エ、お前方は。
官藏　今宵は若殿の惣揚げ。どの傾城でも、自由に間夫は切らさぬぞ。
數右　それ〳〵、小紫にはまだ外に、友之進どのに頼まれた事もあれば、さう自由には
數官　我れ〳〵がさゝぬぞ。
小紫　オヽ笑止。お前方はいらぬ法界ぢやな。間夫切らうが、色事せうが、わたしが身で、わたしがする事、構うて下さんすな。
官藏　イヤ、常は格別、今宵は此方の揚げ詰め、それを又野良猫の盜み喰ひ。小隅や暗がりで、ちよぼくさと、囁いたり、抱きついたり、イヤモウ、胸が惡うて見られぬてや。
數右　左樣でござる。其奴が俳名を錢之亟と申し、また一名を蟲と名くれば、大方油蟲か、五器嚙りでござらう。
　ト金兵衛これを聞いて、こなしあつて
金兵　小紫、寢ようぢやないか。
小紫　エヽ。
金兵　アヽ、おりやきつう眠たうなつた。
小紫　さうでござんす。何ぢやゝら、アタ惜てらしい。其やうに云はんす程、意地惡う目の前で、これ見よがしに寢て見せる……色香。おぢや。
色香　アイ〳〵。
　ト禿出る。小紫囁く。
アイヽ。
官藏　ヤイ〳〵〳〵、最前から身共らが、此やうに云ふが恐ろしくないか。見事この太夫を抱いて寢るか。こな素

町人め、イヤ、うち蟲めが。
金兵　お見立ての通り、蟲でごんす。アイ、小紫が油蟲ぢやによつて、夜が明けやうが、日が暮れやうが、抱いて寝て〳〵寝抜くのぢや。
小紫　オヽ、さうぢやわいなア……ドレ、こんな物直して置かう。
ト紙入れや脇差を寝間へやる。
數右　ヤア、我れ〳〵が目通りとも憚からず、揚げの太夫を自由にひろぐ。いつそ、うぬを。
トかゝるを見事に投げる。
小紫　モシ、帯解かしやんせんか。
金兵　われ解いてくれ。
小紫　オ、辛氣。
數右　ヤイ〳〵、素町人め、最前から慮外の有り狀、その上、身共らを手酷い目に會はしたなア。
官藏　コリヤ、ヤイ、あの太夫は此方の揚げの内ぢや。見事うぬが自由にひろぐか。
官藏　茲な大盗人めが。
金兵　借りるのぢや。
官藏　ヤア。

金兵　借り貸しは廓の慣ひ、更科金兵衛が借りたがどうする。但し、貸す事ならぬかや。たらぬかいなう。
數右　コレ〳〵、官藏どの、ならぬとしつかり云はつしやれ。
官藏　オヽ、さうぢや、たらぬ……けれど、たつて入用ならば、後の損せんやうにして返しやれ。
數右　エヽ、歯痒いわいやい〳〵。
小紫　あのやうな人に構はずと、サア、ござんせ。寝よう。
金兵　ドリヤ、野良猫が盗みかけうか。
ト寝所へ行く。官藏數右衛門、柄に手を掛けキッと睨みつけて居る。
小紫　お前の手は冷たい手ぢやなア。
金兵　温めてくれい。
數右　アレ〳〵、あんな事を云ふわいの。
官藏　ヤイ小紫、うぬは其やうにひろいで、我れ〳〵が請合つた、正右衛門どのへの返事はどうするぞ。
小紫　モシ、正右衛門どのへの返事はナ。
官藏　返事は。
小紫　松葉屋の小紫には、更科金兵衛と云ふ色があつて
兩人　ヤア。

小紫　此やうにして居ると云うて下さんせ。
數右　アレ〳〵、あんな事をするわいの。官藏どの、御覽なされ。
官藏　言語に絕した不作法者め。
數右　そこ離れまいか。
官藏　立去るまいか。
兩人　離れまいか〳〵。
小紫　あれ見やしやんせ。あの阿房らしい顏はいなう。
兩人　エヽ、うぬを。
金兵　なんぢや。さらば閉帳いたさう。
ト唄になり、屛風を引き、障子を閉す。官藏數右衞門いろ〳〵思ひ入れあつて、それなりにグニヤ〳〵と下に居る。
數右　官藏どの、どうでござるぞ。
官藏　イヤモウ、どうのかうのと論議に掛つた事ではござらぬ。
數右　なんと、更科金兵衞と云ふ奴は、手强い奴ではござらぬか。
官藏　彼奴人の心まで惡く致す。イヤ憎い奴でござる。
數右　どうぞ仕樣はござらぬか。

官藏　どうと云うたら、コレ。
ト囁く。奧バタ〳〵にて、伊平太、傳吉が胸倉取つて出て來て
伊平　うぬ、どうしてこまさう知らん。
數官　そちや身が屋敷の品川伊平太。騷がしい。何事ぢや
伊平　御兩所、此奴めが……うぬ、憎らしう見せかけて、此やうな似せ金で、質請けがなるものか。大馬鹿め。
ト金を打ちつける。
傳吉　伊平太、わりやいかう急いで居るな。
ト小判を見て
おれが貸した金を、其方で摺り替へて、物云ひ付けて返さぬ。戾さにやよい。借かた證文書いて、砂にするなら、見事して見い。これぢや。
ト兩肌脫ぐ、下に襤褸着て居る。
伊平　ヤア、其方は。
傳吉　何を隱しませう、わしはこの吉原近邊に居る非人。
アイ、車傳吉と云ふ乞食でござりまする。
皆々　ヤア〳〵。
傳吉　上杉貞次郞とのと云ふ、お大名の御家來どのが、乞食の金を借つて、返濟せいでも濟むか。

伊平　ムウ。すりや其方は。
官藏　車傳吉、乞食は知れてある。それに證文書いて、金借りながら、貴殿、見事返さぬか。
伊平　サア、それは。
ト奥より友之進出て
友之　上杉の家來が、非人乞食の金子借用いたしたとは、言語道斷。兄正右衛門どのに申し上げたら、貞次郎へも咎めが行かう。
伊平　エヽ。
官藏　家來の越度は主人の越度。
友之　蟻の穴から堤とやらで
數右　僅かな金の才覺で
三人　上杉の主家を亂さず、下郎の伊平太。
伊平　イヤ、なんと。
友之　只今、火急にこの樣子、兄者人に訴へようか。
伊平　サア、それは。
傳吉　金戻すか。
伊平　サア、それは。
皆々　似せ金遣ひか。
伊平　サア。

傳吉　サア。
皆々　サア／＼……どうぢや。
伊平　何を云うてもこの場の手詰め、力業にも才覺にも、任せぬと云ふ磐石が、こりや押しかゝつたわい。
ト撞と下に居る。障子屋體の内より
金兵　その時は、おれが附けてやらう。
ト金兵衛出て來る。友之進見て
友之　ヤア、其方は。
金兵　上方下りの更科金兵衛。
友之　ヤッ
ト心意氣あり
傳吉　ドレ。
ト金兵衛を見て
ヤア／＼、覺えのある幼な
ト云はうとして、ちやつと口を塞ぐ。金兵衛こなしある。
金兵　聞き傳へて居る車傳吉と云ふ非人は、われか。
傳吉　見知りて居るか。
ト少しオロ／＼。
金兵　思へばどうやら。

傳吉 ト不承にいふ。傳吉も底氣味惡く
ト逃げようとするを
友之 コリヤ〳〵、傳吉どこへ行く。
傳吉 イヤサ、どうやら。
友之 ハテサテ、苦しうない、身共が居る。ハテ、コリヤ、
其方に貸し附けの金、取らねばなるまい。サ、ヂツと落
ちついて居よサ。
傳吉 ほんにさうぢや。金受取らう。
金兵 上杉の家來、品川伊平太どのとやら、貳百兩の金、
用達てませうか。
伊平 アノ拙者めに。
金兵 上杉と聞いて、はちつと由縁もあり。それは兎もあ
れ、金借つて居ては物が云はれぬ。最前から聞いて居れ
ば、鮫鞘見るやうな奴にきつい目に會うて居るの。兎
角金借つて居ては物が云はれぬ。
伊平 どう云ふ由縁か存ぜぬが、お禮は後で。
金兵 心措きなう遣はんせ。
伊平 忝ない。
ト傳吉が首筋を持つて、上の方へ抛つて、二百兩の金
を砂場へ抛り
コリヤ、騙りと知つて騙られる。貳百兩受取れ。
ト傳吉、慄へ〳〵取らうとする。
金兵 ドリヤ、納まりを見物しようか。
ト傳吉、始終金兵衛の方へ心意氣あつて
傳吉 オヽ、受取る。なんの、別に貸した物を取らいでぢ
や。
ト取上げては取落し、さま〳〵あつて、襤褸の袖を引ち
ぎり、みだけ小判をやう〳〵包み、ヂッとして居る。
伊平 金受取れば身共が一札は
傳吉 一札とは。
伊平 最前取つた預かり手形。
傳吉 そりや爰にござります。
ト袖の破れより手を入れ、懐中の證文を出す。
ハイ。
ト渡す。伊平太引ッたくり、傳吉友之進、三人を睨み
つけ、金兵衛の側へ寄り
伊平 男を研く更科金兵衛どのと承はれど、お目にかゝる
が今が初めて。どう云ふ由縁か存ぜぬが、拙者は昨今、
心得違ひの料簡もやと存すれど、この一札は拙者が自筆。

なんの間尺に立たねども、事の解るまで、暫らく預けたう存ずる。
　ト金兵衛もこなしあつて
金兵　ハテ、こなたのお心の濟む事ならば、如何やうとも
　ト證文取つて開き
一つ、桃井家の重寶、東雲の香爐、某へ渡せし功に依つて都へ歸館の上、一廉の武士に取立て遣はすべきものなり。
友之　ヤア〳〵、その一札は。
傳吉　南無三、間違うた。
　ト取りに行くを、伊平太突き廻して
伊平　動くな、非人め。
　トきめる。傳吉、金兵衛方へ後を見せて
傳吉　ムウ。
　ト息込む。
友之　そりや兄者人の。
　ト取りにかゝるを、金兵衛、ちやつと書き物持ち替へて
金兵　コリヤ、何を。
友之　イヤサ、それを。

金兵　なんと。
友之　サ、どうやら金子の預かりと違うた文言。
金兵　違うても此方の事。御大身のお世話にならぬ。
友之　ムウ。
　トこなし。
金兵　ハテ、貳百兩にによい掘出し。
伊平　ま一度とくと讀み上げて。
金兵　ソレ、「桃井家の重寶、東雲の香爐、某へ渡せし功に依つて、都へ歸館の上、一廉の武士に取立て遣はすものなり。」
伊平　して、その宛名は。
金兵　東傳吉、本名大佛十平次へ。
傳吉　それを。
　ト寄る。
伊平　ドツコイ。
　ト立廻り。
金兵　良正判。
　ト讀み上げる。
友之　それ讀まれては。
　ト金兵衛へかゝるを、立廻りにて入れ替り、金兵衛、

根本「戯場言葉草」插繪

古原の場

傳吉、伊平太、友之進とよろしくあつて、兩方一度に
シヤシときまり

伊平　友之進どのには、餘程の周章。
トきつと詰める。金兵衞、傳吉を引付けて

金兵　最前逢うても、しかと見覺えぬ筈。以前の事、この宛名は本名大佛十平次で、やう〳〵知つた國での朋輩、さてはお家の重寶、東雲の香爐は、うぬが盜んで人手へ渡したな。
ト傳吉、こなしあつて振り放し

傳吉　斯うなるからは、もう自棄ぢや。お家沒落の砌り、守護する者なき寶を持つて、立退いたが、なんとした。うぬは、御家老宗太夫どのを手にかけ、國法ひろいだ平井權八。イヤサ、幼な顏に見覺えある平井權八ぢや。

友之　平井權八ならば親の敵。遁がれはあるまい。

數右　我れ〳〵も助太刀。
ト金兵衞を取卷く。

伊平　寄つたら身共が、手は見せぬぞ。
ト圍ふ。

友之　尋常に勝負せい。
ト金兵衞こなしあつて、帶を締め直し、脇差を拔き、手の内を堅め、ぴらつかす。傳吉チツと後へ寄り、こなしある。金兵衞、拔き身を提げ悠々と友之進が前へ行きて

金兵　十年以前國元に於て、家老比良宗太夫を手に掛けし平井權八、其方が兄正右衞門は、見知り居れど、弟の友之進、逢ふは今が初めて。親を討たれ、さぞ無念にあらう。只今これにて勝負いたして、不便ながらも返り討ちや。その上にて寶の行くへ、詮議は十平次め、待つて居らう。
ト睨み付け、拔刀を取り出し、見事に構へて
サア、友之進、勝負せぬか。親の敵ぢや。打ち掛けぬか、後れを取つては武士が立つまい。サア〳〵、サ、、なんとぢや。
ト此うち三人、傳吉、おこつく。伊平太、鍔元寬ろげ圍うて居る。友之進、いろ〳〵思ひ入れあつて

友之　コリヤ、急くな平井權八。

金兵　イヤサ、附け覗ひし其方の親の

友之　敵討ちには殘すぞ。

金兵　ヤ、なんと。

友之　ハテ、場所と云ひ、折が惡い。

三人　イヤサ、それでは友之進どの。

友之　何を小癪な。助太刀叶はぬ。抑へて居らう。

伊平　友之進どの、盲龜の浮木、優曇華まさりの親の敵討ちを、延さうとある御所存はな。

友之　既に曾て曾我の五郎時宗、大磯の廓にて、敵工藤に出會ひ、時待ち得たる親の敵と、飛びかゝつて、祐經たつた一打ちと駈け行くを、草摺取つて引とゞめ、コリヤ兄よ、いま其方が祐經を討取つて、後に殘りし兄の十郎は、何者を親の敵と云うて討取るぞ、なぜ兄弟打揃ひ、本望遂げぬと朝比奈が、五郎への意見。思ひ合すれば、この友之進が身の上。現在兄正右衞門どのには、上杉の館にござれば、この所にて身共一人、權八を討取るは易けれど、後に殘りし正右衞門どのには、何者を敵と云うて討たつしやらうぞ。サ、義を見てせざるは勇みなし。權八、いま見遁がしても、どうで一度は身が刀の錆ぢやさう心得て、待つて居よ。

金兵　すりや、この場の敵は討たぬか。

友之　武士の詞に二言は無い。

金兵　ムウ。

ト思ひ入れあつて、刀を鞘に收め、傳吉を引立て、友之進が前へ突き出し

敵討ちを延した返禮に、此奴が詮議も延してやらう。

伊平　イヤ、彼奴を手離しては。

金兵　ハテ、この良正判が此方の性根。

伊平　成る程。

傳吉　その一札を。

ト取りに行くを、伊平太、何かと突き廻す。友之進、傳吉を引分けて

友之　萬事は身共が。

金兵　敵討ちには恥あるもの。

皆々　勝負は追つて。

友之　兄弟一緒に。

金兵　巡り逢ふまで。

友之　車傳吉、三人の者。

ト氣味合ひあつて

奥へ來い。

ト唄になり、友之進、傳吉、三人、奥へ入る。伊平太もこなしあつて奥へ入る。後に金兵衞、獨り殘り、こなしあると、障子屋體より小柴、頭の飾りなしに出て

小柴　金兵衞どの、今のは間に合うたかえ。

金兵　無ない。わが身の庇で間に合した。

ト頭の様子を見て

見りや、すつぱりとやつたな。

小柴　アイ、さうでなければナ。

金兵　せめて簪は残したがよい。

小柴　ナンノイナア、大事ござんせぬ。

金兵　その木鬘は、誰れに借つたのぢや。

小柴　こりや遣り手のかねに借つたわいな。

金兵　人も知つた松葉屋の小柴が、おれゆゑに借り物をするやうになつたか。

小柴　金兵衛さま、何を云にしやんすぞいなア。して、寶の事は、どうなつたえ。

金兵　ハテ、この一札さへあれば、上杉のお家は納まる。質請けの金がないと、肝心の寶が出ぬわいなう。

ト奥より主計出て

主計　イヤ、上杉家の寶でないぞ。

金兵　あなたは主計さま。

主計　金兵衛、只今佐竹どのより火急のお知らせ。明朝上杉の館へお入りあつて、都の使者と立會ひの上、寶改めとある。定日は明日末日。それまでに桃井の重寶、彼の東雲の香爐が手に入るか。

金兵　成る程、お喜び下されい。只今詮議の綱に取りつきました。

主計　それに重疊。何卒今宵のうちに。

金兵　キッと詮議して差上げませう。

主計　某が歸るに明六ツ。それまでに相渡さば、直ぐに佐竹どのへ差上げ、家再興の願ひの取次ぎ。

小柴　申し、金兵衛どの、あなたの仰せは大事の事ぢやが、その寶が、今宵中に詮議が出來るかえ。

金兵　氣遣ひしやんな。是か非まで、今宵中に詮議し出して、明六ツまでに。

主計　その詞に相違はないか。

金兵　イヤモ、キッと差上げませう。

主計　さすれば身共も安堵。

金兵　明六ツまでに。

主計　待つて居るぞよ。

金兵　心が急けば。

小柴　お客さん。

金兵　太夫、おぢや。

ト唄になり、主計、金兵衛、小柴、三人入る。橋がゝ

より質屋三郎兵衛出て

三郎　どうぞ友之進どのに會ひたいものぢやが。

ト奥より友之進出て

友之　質屋三郎兵衛、松蔭の硯、持參いたしたか。

三郎　あなたは硯を求めると仰しやる、比良友之進どので
ござりまするか。

友之　所詮上杉の者どもが、三百兩と云ふ金は、なんとし
て〳〵。最早日限も切れたれば、構ひはない。身に早く
賣る方が其方が仕合せ。

三郎　成る程、いづれからでも金さへたれば、ようござり
まするが、あなたはいよ〳〵。

友之　ハテ、望む硯をこれへ持て。

三郎　此方の義理は缺いても、金の早いが勝でござる。

ト云ひ〳〵袋入りの硯を渡す。取つてとくと改め

友之　松蔭の硯に相違ない。

ト懐中する。

三郎　友之進さま、私しも歸りたうござりますが、どうぞ
お金を。

友之　サ、その金子は。

三郎　早速只今。

友之　イヤナニ、その金子は、掛屋方へ調達に遣はしたれ
ば、おツ付け持參するであらう。

三郎　アヽ、申し〳〵、最前伊平太どのゝ、段々の頼みを
もどくも、ちつとなりと早う金にしたいからでござりま
する。

友之　ハテサテ、身共は大身。伊平太づれとは違うてある
わい。

三郎　でも、引替へでなければ心が濟みませぬ。マア、そ
の硯は此方へ。

ト寄らうとする。この時、伊平太、ツカ〳〵と出て、
三郎兵衛を突き廻し

伊平　三郎兵衛。

三郎　ヤア、伊平太どの。

伊平　明六ツまで待たうと請合ひながら、偽はり飾る素町
人め。

トきめる。三郎兵衛モヂ〳〵して

三郎　サア、そのお腹立ちは、御尤もでござりまするが、
何を云うても金づく。もしあなたより間違うて、此方も
取外すと、一も取らず二も取らずと云ふもの。そこで氣
の毒ながら。

伊平　黙れ。利欲に耽る、うぬが心に引くらべ、虚言吐く伊平太と思ふか。

ト此うち友之進、持つて居る硯と駒下駄と摺り替へ、懐中する。

三郎　成る程、硯を渡しませう。

ト友之進が側へ行き

サア、返して下さりませ。

友之　すりや、如何やうに云つても、この硯は。

三郎　三百両と云ふ物を、耳を揃へて引替へでござりまする。

伊平　然らば身共方へ。

三郎　イヤナニ、誰れからでもお金と引替へ。それまでは大事の代物。手離す事はなりませぬわいなう。

ト行かうとするを

伊平　すりや、今宵中に。

三郎　金さへ渡りや、誰れ彼れの見境はない。四角な硯は丸い金と引替へに渡しまするぞ。

ト硯を持つて向うへ走り入る。友之進、伊平太、こなしあつて互ひに顔見合せ

友之　ア、、上杉の重宝、身共が手へ請け戻して、貞次郎に進ぜうと思うたに、残念な。

伊平　イヤ、お世話にやならぬ。利を非に曲げても、この伊平太が請け戻さねばならぬ。

友之　でも、金子の調達を。

伊平　出来やうが出来まいが、拙者が思案にござる。

トこなしある所へ、橋がゝりより、比良の家来新吾、着附け股立にて、正右衛門が紋付きの弓張り提灯を持ち出て来り

新吾　友之進さま、これにござりまするか。

友之　家来新吾、何事ぢや。

新吾　お旦那正右衛門どのが、仰せられまするには、佐竹左之頭どのより、御内意にて、明日いよ／＼上杉家の宝改めの、日限と申し参りましたるゆゑ、この儀をあなたへ申せとの儀でござりまする。

ト伊平太ギックリ。友之進も氣味合ひあつて

友之　ムウ、アノ、明日横目の佐竹どのと立會ひにて、上杉の宝改めとな。それに肝心の硯。

ト伊平太を見て

ハテ、笑止千萬。新吾、参れ。

ト友之進、新吾を連れ、奥へ入る。後に伊平太、いろ

伊平　いろ思案して居て
伊平　明日佐竹どのと立會ひにて、寶改めとあれば……それ、もう一度、あの三郎兵衛に逢うて、とつくりと頼んだ上、聞き入れねば是非がない。彼奴を……さうぢや。
ト向うへ駈け出さうとする。奥より小柴出て財布を拋り出す。伊平太取つて
伊平　これは。
小柴　幾浦さまの結納のしるし。
伊平　エヽ、忝ない。
小柴　それ云うて居る間が。
伊平　心が急けば。
小柴　ちやつと行かんせ。
伊平　合點ぢや。
ト尻たんからげ、向うへ走り入る。小柴、二重舞臺にて見送る。チョン／＼にて返し。
造り物、見附け、塗り骨障子、屋體、椽付き、橋がかり、内に二階座敷、切り戸口、塀。すべて奥庭、奥座敷の模樣よろしくあつて、踊り三味線にて道具とまる。

ト切り戸口より友之進出る。奥座敷より金兵衛出る。兩人顔見合せ
金兵　比良友之進。
友之　平井權八。
金兵　幸ひあたりに人もなし、ちよつと逢ひたい。
友之　身共にか……ムウ、なんの用ぢや。
金兵　其許へ用事と云ふは。
友之　皆まで云ふな。最前の一札、東雲の香爐、戻してくれいと云ふのか。
金兵　この宛名の良正判に、貴殿の兄の正右衛門であらうがの。
友之　ヤ。
金兵　コレ、この良正のよしの字は、比良の良字と、また正右衛門の正の字。大概知れてある事ぢやわい。
友之　そんな事は知らぬわい。
金兵　イヤ、たつて詮議は仕らぬ。
ト金兵衛、思ひ入れあつて、提げ緒にて脇差の柄を括り、片脇へ拋り、友之進が前へ座して
金兵　サア、討たつしやれ。
友之　ヤ。

金兵　この年月の無念・親の敵ぢや。立寄つて本望遂げた
友之　ヤ、なんと。
金兵　人の知らぬを幸ひに、此方の望みを叶へてもらへば
その禮に權八が命一つを、御兄弟に進上仕る。
友之　ムウ、すりやその一札に記してある、東雲の香爐を
戻してくれい。すつぱりと親の敵に、討はれうと云ふ事
か。
金兵　命を捨てゝも頼むのは
友之　日本に一葉の香爐、破却せられては、桃井家が立た
ぬに依つてか。
金兵　表立たぬを幸ひに
友之　大切な命を替へ事。
金兵　お主のお家を立てたいばかり。
友之　離れで來るも。
金兵　事を無難に。
友之　寶を無事に
金兵　返して欲しさ
友之　こりや、どうやら面白い談合ぢやわい。
金兵　なんと友之進、得心して下されうか。
友之　返してやらう。

金兵　ヤ。
友之　と云ひたいが、ならぬ。わりやきつい嘘つきぢやわ
い。よう物を合點せい。香爐を戻してくれたら、如何に
も敵討たれうと云ふわれが、どの命を持つて桃井家を取
立てるぞ。
金兵　サ、それは。
友之　但し、われが命は二つあるか。
金兵　サア。
友之　そんな甘い事に乘る、友之進ぢやないわいやい。
金兵　ムウ。
友之　時に、相談を蒔き直さうか。
金兵　蒔き直さうとは。
友之　望みの香爐、戻して遣らう。
金兵　ヤ。
友之　敵討つ事も、マア／＼、ずつぺいよ。香爐戻すその
代りには、兒玉右衛門が惚れて居る傾城小紫、身共がぞ
つこん惚れ抜いた、あの菱浦、二人ながら抱かして寢さ
せい。
金兵　ヤア。
友之　二人の者を抱かせて寢かせたら、その上では、如何

にも香爐戻してやらう。
金兵　そればかりはどうも。
友之　ならぬと云ふのか。其方がならざア、此方もならぬ
ならぬと云うたら、定めてわりやア、この友之進を、生
けては置くまいがな。サア、さつぱりと討て。
金兵　ヤ、なんと。
友之　サア、返り討にさつぱりと殺してしまへ。おれを殺
したら、定めて香爐の行くへが知れるであらう。サア、
討て、殺せ〳〵。
金兵　これは友之進、どうしたものぢや。なんの手前が其
許を。
友之　討つ氣が無くば、二人の傾城、抱かして寢さすか。
金兵　そればつかりは。
友之　ならざア返り討か、
金兵　全く以て。
友之　香爐は直ぐに戻して遣るか。
兩人　サア〳〵。
友之　權八、大事の所ぢや。思案して返事せい。
金兵　すりや、幾浦どの、小紫に得心さしたその上で。
友之　如何にも香爐、戻して遣らう。

金兵　夜明けと限ろ、お家の大事。
友之　其方が早くば此方も早い。
金兵　今宵の手詰め。
友之　善惡二つが
金兵　二人の傾城。
友之　色好い返事を
金兵　成る程キッと
友之　權八、待つて居るぞ。
ト唄になり、こなしあつて、友之進、奥へ入る。金兵
衞一人殘り
金兵　ムウ。
ト兩手を組み、ヂッとなり、下に居る。二階にて、地
唄。
〽宿りもがなと夕顏の、それにはあらぬ小家の軒、垂る
木疎らに傾むきし、雪折れ竹の揚げ簀戸や、主は貧女と
思しきが、年も三五の玉簾、廂の雪を掻き落し、落せば
衿に袖口に、首筋元にひや〳〵〳〵、あゝ冷たやと手を
拭くも、下素近うして猶優し。
トこの淨瑠璃のうち、金兵衞、いろ〳〵思案して、硯
を取つて來て、淨瑠璃の「ひや〳〵」あたりに狀を書

き、文句案じても書けぬゆゑ、筆を抛り、また手を拱み、思案すると、奥より淨瑠璃の切れに、小紫、出て來て

小紫　金兵衞どの、爰にかいなア。

金兵　小紫か。

　ト顏キッと見る。

小紫　コレイナア、最前お前が云ひ付けさしやんした金を折よう伊平太どのに上げたれば、これはと恟りさしやんしたが、わしが斯う／＼ちやと云うたら、エヽ忝ない、早う行かしやんせと云うたら、合點ぢやと裾をグッと搦げてナ、ほんに宙を飛んで行かしやんしたわいなア。

金兵　そこ所ぢやない。小紫、得心してくれい。

小紫　エヽ、何をいなア。

金兵　幾浦さまはお主、どうも云はれぬ。せめて一人は得心さゝにやアならぬ。今宵の手詰めぢや。抱かれて寢てくれい。

小紫　いつにない金兵衞どのが、いろ／＼の事を、オヽをかし。改まつた、どうなりとするわいなア。

　ト笑ふ。

金兵　エヽ、さうでない。兼ねて其方に惚れて居る、比良正右衞門が心に隨うてくれい。

小紫　今夜はわたしを嬲つて樂しむのかえ。人を惡からさうと思うて、じやら／＼。嘘にも正右衞門が事は聞きともないわいなア。

　ト兩手にて耳を塞ぐ。

〽脇をお頼みなされませ、おいとしさまやと愛嬌ある。

　ト金兵衞、始終心の急いてある體にて

金兵　サヽ、さうわれが常から嫌つて居る事は、よく知つて居るけれど、なんでも得心してくれにやア、どうもならぬ仕儀ぢや程に、嫌であらう、嫌ひであらうが、また思ひ替へて見ると、そんなものでもあるまい、小紫。

〽どうやら時のはずみでは、鼻そげでもゐぐちでも、油斷がならぬと走り込む。

　ト小紫、ムッとして

小紫　金兵衞どの、そりやお前、眞實の事かえ。

金兵　ほんまの嘘のと云ふ平氣ではない。理を非に枉げても正右衞門に。

小紫　否でござんす。措いて下さんせ。わたしや傾城の勤めはして居れどもな、お前より外に又、ついぞ帶紐解いた事はござんせぬわいなア。それに最前から、あの正右

衛門に得心せいの、心に隨へのとは、エヽ、聞えた。こりやお前、俄にわたしが否になつたのかえ。

金兵　なんの、さうではない。

小紫　イエ〳〵、愛想が盡きたりやこそ、正右衛門に得心せいと云はしやんすのぢやないかいなア。

金兵　多寡でこれには。

小紫　イヤ、譯は聞きませぬ。現在夫の指圖で、斯うせいアイと得心しさうな女子が、三千世界にござんすか。

金兵　ヤ。

小紫　それ見やしやんせ。

〽天下を裁く御身にも、この返答は行き暮れて、佇み給ふぞ

ト金兵衛ヂツと氣を鎭め

金兵　小紫、おれが心の忙くまゝ、云ふ事が後先になつてある。とつくりと聞いてくれ。ソレ、最前主計どのに詞番うた通り、今宵中に香爐を差上げねば、桃井のお家は再興ならぬ。時に香爐は、友之進か正右衛門、兄弟のうち、マア友之進に詞を盡して頼んだりや、彼奴が惚れて居る幾浦どのと、兄正右衛門が心を掛けて居る其方を、得心さして抱かして寢させたら、直ぐに香爐を渡すとの堅い契約。幾浦どのはお主の事、せめて正右衛門に靡いてくれねば、無難に香爐は、こりや取返されぬわい。

小紫　ぢやと云うても、それがマア。

金兵　得心してくれるか。

小紫　否と云へば、お前の望みは叶はず。

金兵　アレ〳〵、次第に更ける夜。

小紫　こりや何とせうぞいなア。

ト小紫、オロ〳〵こなし。

金兵　サア、否か應か、小紫。

小紫　サア、これはな。

金兵　得心してくれるかいやい。

トいろ〳〵頼む。此うち傳吉出かけ居て

傳吉　權八頼むな。無駄事ぢや。

金兵　ヤア、十平次。

傳吉　コリヤ、友之進どのはあの二階で、幾浦を無理やりに。

金兵　ヤア

ト行かうとするを

傳吉　イヤ、滅多にやらぬ。われをぶち殺して、小紫を正右衛門どのへ。

ト切りかける。立廻りになる。とゴンと七ツの鐘鳴る

小紫　ヤア、あの鐘は。

金兵　南無三七ツ。

ト二階の内にて

菖蒲　否ぢや〳〵。わしやなんぼうでも心には隨はぬぞ。

友之　斯う抱いて寢るからは、得心せいやい。

小紫　ヤア、ありや菖蒲さまを友之進が。

金兵　もう破れかぶれぢや。

ト行かうとするを、傳吉留める。小紫、傳吉を支へて立廻り。金兵衞奥へ走り入る。此うち切り戸より友之進、頰かむり、官藏、數右衞門附いて、細からげの駕籠を舁かせ、ヒソ〳〵と出る。此うち二階、バタバタにて、障子蹴放し、金兵衞、主計を殺し居る。小紫、傳吉と立廻りながら見て

小紫　あの駕籠には。

官藏　菖蒲を早う。

ト皆々向うへ入る。小紫、傳吉立廻りのうち、二階へ遣り手、手燭を持つて出る。この灯火にて見て

金兵　ヤア、こりや主計どのぢや。

遣手　ほんにお客を。

ト云ふを、小紫下より

小紫　コレ、菖蒲どのを友之進が、連れて逃げたわいなア

金兵　南無三、それを。

ト二階より飛び下りる。傳吉、金兵衞に又かゝるを、小紫抑へる。金兵衞、向うへ走り入る。

ト黑幕切つて落すと、踊り三味線になり、向うより質屋三郎兵衞、硯を持つて出て來る。

トばた〳〵にて伊平太、走り出て、本舞臺にて三郎兵衞を引留め、息切れのこなし。三郎兵衞恟りして

三郎　ヤア、伊平太どの。爰へ來たは。

ト伊平太、氣を急いて物を云はれぬこなしあつて、三郎兵衞が懷中へ手を突ッ込む。

こりや無體に硯を取るのぢやの。さうはさゝぬわい。

ト振り拂ふ。伊平太また引付ける。

アレ、盗人ぢや。人殺しぢや〳〵。

ト慌てゝ逃げ廻はるを、伊平太、いろ〳〵追ひ廻して又捉まへ、硯を引ッたくる。

ヤア、その硯を。

伊平　ソレ、貳百兩の金。

ト抛り出す。三郎兵衞取上げ

三郎　ほんに、こりや金。悔りした。

ト橋がゝりへ逃げて入る。傳吉、出かけ居て

傳吉　その硯を。

ト取りにかゝるを

伊平　コリヤ、何ひろぐのぢや。

傳吉　この硯が欲しい。

伊平　なにを。

ト突き廻はす。立廻りになり、トゞよろしく傳吉、硯を奪ひ入る。と伊平太追ひかけ入る。返し。

黒幕切つて落す。小高き土手、大木の柳、吊り枝、見事に、これより本雨降る。

ト向うより友之進、高下駄、傘にて、最前の駕籠を吊らせ、官藏數右衞門を連れ出て

官藏　なんと心地よう參つたではござりませぬか。

數右　權八を、たうとう出し拔いて。

友之　幾浦を、〆め子の兎。うまい〳〵。

トこんな事を云ひ〳〵、本舞臺へ來る。とバタ〳〵にて、向うより金兵衞、逸散に走り出て、官藏數右衞門を突き廻し、駕籠の棒鼻と、また友之進が鐺を取つて

金兵　友之進待て。

官數　ヤア權八。

ト悔りする。

友之　不便や、てこねにうせたなア。

金兵　オヽ、死んでも香爐と幾浦どのとは、取返さにやア置かぬ。

ト駕籠を突きやつて、友之進を突き廻す。

友之　さう云や、殺して渡してやろ。

ト切り掛ける。官藏數右衞門もかゝるを、よろしく金兵衞切り拂ひ、駕籠の細引を切つて幾浦を出す。

幾浦　ヤ、權八か。

金兵　何にも云はずと、小紫を。

幾浦　そんなら。

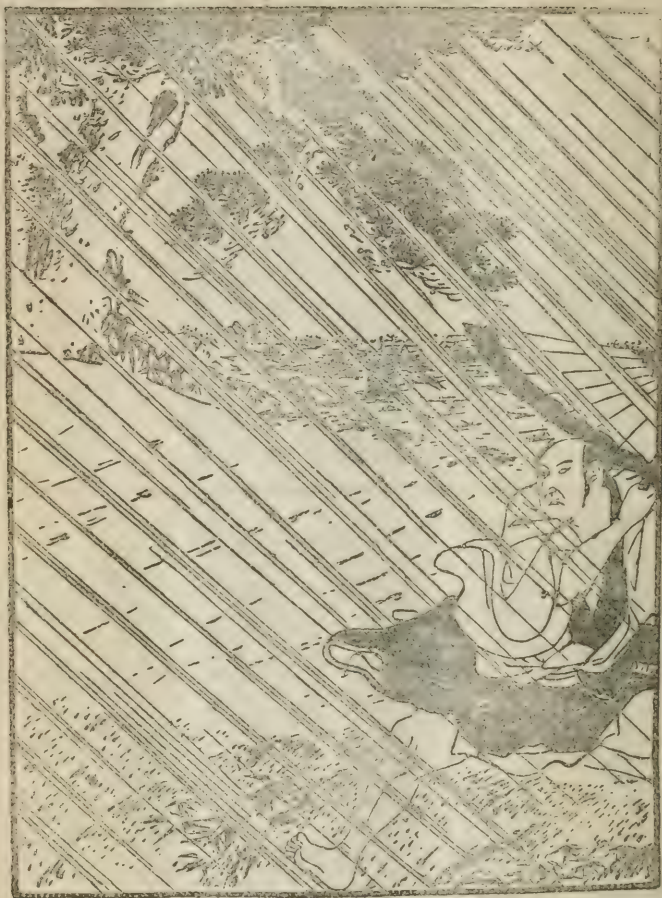
ト向うへ走り入る。友之進、官藏、數右衞門、それをト行くを、金兵衞また立廻りにて、シヤンととまりし見得。向うバタ〳〵にて、傳吉、息を切つて走り出て

傳吉　ヤア、友之進さまか。

友之　傳吉か。

官數　權八は今片附けるぞ。

根本「戲場言葉草」挿繪

日本堤の場

ト立廻つて居る。
傳吉　松蔭の硯をしてやつた。
友之　イヤ、身共が爰に。
傳吉　でも、たつた今。
友之　身共が疾から。
　ト互ひに懐中を教へ合ふ。金兵衛見て
金兵　嬉しや硯も香爐も、取返すぞ。
　トまた立廻り。
友之　兎角邪魔なは權八めぢや。傳吉も助太刀せい。
傳吉　合點ぢや。
　トこれより雨、だん〳〵烈しくよろしくあつて官藏數
　右衛門手を負ひ、橋がゝりへ逃げ込む。傳吉は臆病口
　へ走り入る。金兵衛、友之進を切り殺し、懐中より硯
　を取出し
金兵　ヤア〳〵、これは香爐ではなうて硯。すりや、彼奴が
　云うたに……ホイ
　トこなしある所へ、伊平太、向うより走り出る。金兵
　衛、この足音にて前へ出る。伊平太、本舞臺へ来て傳
　吉と思ひ、金兵衛にかゝる。金兵衛、振り切る。
伊平　傳吉、うぬ。

　ト切りかける。金兵衛、落ちてある傘にて留め、ちよ
　つと早い立廻り。傘にて突きかける。伊平太横飛び。
　金兵衛、花道の角へ行く。伊平太、うぬと擬勢。金兵
　衛、傘にて姿を隠し、向うへ入る。返し
　ト、ばた〳〵にて幕明く。黒幕、向うより傳吉、口明
　けの硯の袋を持つて走り出て
傳吉　ア、嬉しや。よもや爰までは来をるまい。貞次郎が
　質に置いた松蔭の硯、手に入れたは福徳の三年目。これ
　は正右衛門さまへ差上げて、御褒美にあづかる。うまい
　うまい。
　トこなしある所へ、また向うバタ〳〵にて、伊平太走
　り出て
伊平　傳吉、爰に居るか。
傳吉　、ヤア伊平太め、又うせたか。
伊平　うぬが持つて居るは、慥に松蔭の硯。此方へ渡せ
　ト切りにかゝるを、何かと傳吉立廻りになり、よろし
　くあつて、傳吉、橋がゝりへ逃げて入る。伊平太うぬ
　をト追ひかけ入る。返し。

幕

二幕目　　上杉屋敷の場

役名――上杉貞次郎、比良正右衛門。宮内女房、岡の谷。寺島軍藏。野口久馬。松葉屋小紫。同、幾浦。品川伊平太。同女房おさき。非人、車傳吉
佐竹杢之頭。

造り物、二重舞臺。見付け金襖、上の方に綟子張り障子屋體。此うち佛前あり、落ち間柴垣、松の木廻り模様よろしく。すべて上杉屋敷の體。二重の下手に宮内女房岡の谷、花を生けて居る。貞次郎、着付け羽織にて反り打つて、岡の谷を切らうとして居る。軍藏、久馬、その外小姓二人、貞次郎を留めて居る。この見得。琴唄にて幕明く。

久馬　若殿様には御短慮千萬、先づお待ちなされい。

貞次　留めな〳〵。當家には譜代の古老、山形宮内に連れ添ふ岡の谷、宥免して居れば、様々の諫言立て。某を惡口した女、そこ放せ〳〵。

久馬　マア〳〵、お待ちなされませう。若殿様、どう致したものでござります。御諫言申すは御家老の御内室ゆゑ

軍藏　殊に山形氏は、都在番のお留守。お屋敷を預かつてござる岡の谷どのでござれば、御意見召さるゝに無理はござりませぬ。

岡谷　一國の大名が、假令へ傾城遊女にお心を迷はされ、晝夜御遊興あるにもせよ、それを何と申しませぬ。併しながら、今日は大殿様のお祥月御命日なれば、あの如く位牌を供へ、御先祖を敬ふが即ち身の御祈禱。唐には三年の喪に籠ると申せば、せめてお逮夜御命日の兩日は、心をお愼みなされたがようござりませう。殊に又當館にお逗留ある比良正右衛門さまは、足利のお使者、諸家の重寶をお改めの役。さすれば他門のお客人もお入りと云ひ彼れこれ以てお身の愼み。御諫言申しましたが、さほどまでお心に障りませうとは存じませなんだわいなア。

軍藏　お聞きなされましたか。岡の谷どのの御意見、御得心が參りましたら、この以後お嗜なみなされたがようござりまする。

久馬　イヤモウ、我れ〳〵がお諫め申しても、お聞入れない若殿。あのやうに俯向いてござるは、流石は岡の谷さまのお詞、お用ひがなうて何と致さう。

岡谷　その身を損ひ破らざるを、孝の終りとすれば、お身お慎みあるが、即ち孝養でござりまする。

ト向うより侍ひ一人走り出で

侍ひ　ハツ、お客人正右衛門さまのお歸りでござります。

ト云ひ捨て入る。

軍藏　お客人のお歸りでござりまする。

岡谷　靱負主水、申しつけた茶の湯の用意はよいか。

靱負　掛け物も改めまして、爐の炭もつぎましてござりまする。

主水　お座敷お庭廻りの掃除は、當番の者に申しつけましてござりまする。

貞次　客人が歸らるゝとあらば、爰に居ては挨拶が面倒なおれは奥へ行かうわい。

岡谷　ナニサマ、あなたには左樣がようござりませう。

貞次　毛蟲の正右衛門が歸られぬうち、小姓ども來い／＼

ト小姓を連れ、貞次郎、奥へ入る。

岡谷　サア、御兩人もお出迎ひを。

兩人　ハツ、

ト合ひ方になり、出迎ふと、向うより正右衛門、着付け麻上下にて、家來連れ出て來て

正右　ムウ、これは岡の谷どの、御兩人。

岡谷　只今御歸館でござりまするかな。

正右　今日は方々の屋敷を經廻り、やう／＼只今。

岡谷　先づ／＼あれへ。

ト正右衛門、ズツと正座へ着く。皆々並よく並ぶ。小姓靱負茶を出す。主水、煙草盆持つて出て扣へる。

正右　イヤナニ、岡の谷どの、こなたの夫、當家の家老、宮内どのには、また歸國はないかの。

岡谷　京都在番、首尾よく相濟みし樣子。今日か明日は、是非歸國いたしませうかと存じまする。

正右　足利の出頭この正右衛門、この度使者に下向いたしたは、今度武將家より御所望に依つて、諸家の重寶を獻上ある、受取りの役目はこの正右衛門。横目として佐竹杢之頭參られ次第、立合ひの上、寶を受取る筈。當家の重寶は隱れなき松蔭の硯。横目の參らぬうち、身が内見を致さうと申せば、宮内どのゝ歸國あるまで延引してくれいとの儀。それゆゑお屋敷に逗留いたして、便々と相待ち居るが、斯樣に延び／＼になつては、拙者は構はぬが、武將家へ對して、上杉家の不忠、お家の瑕瑾でござるぞや。

岡谷　御尤もに存じまする。お横目お入りあらば、早速宮内有り合さずとも、違背いたしませうやうはござりませぬ。

正右　さうありさうなものでござるてや。

岡谷　お横目お入りには間もござりませう。それまでは奥へござつて、打寛いでお物語り遊ばしたがようござりまする。

正右　イヤ、話しの次手に、夜前吉原へ参つた者が申すには、彼の日本堤、衣紋坂の邊に、侍ひが殺めてござつたとの儀。江戸中はこの沙汰でござる。

軍藏　拙者も参つてござるが、武士とあれば、もしや當家中の内ではないかと、とくと聞き合せましてござる。討つた者も討たれた者も、在所知れぬとの儀。ナニサマ、浪人の類が口論と見えまする。

正右　例へ喧嘩口論にもせよ、武士たるものが刃物を抜き合せ、闇々と討たれると云ふは、日本一の大馬鹿の、犬死とはこの事でござる。どうで飢に疲れた風來者か。碌な者ではござるまい。

岡谷　仰せられます通り、仕官の身の上は、御主人へ差上げた命。私しの遺恨に身を果すは、不忠不義の第一でござりまする。

軍藏　左樣でござりまする。

正右　イヤナニ、拙者も今日は疲れもござれば、暫らく休息仕らう。

ト目禮して岡の谷、小性を連れ、奥へ入る。軍藏久馬あたりを見て

軍藏　正右衛門さま、今の岡の谷が云ひ分では、後程重寶を差上げうと申したが、ありやどうでござるの。

正右　貞次郎が質物に入れた松蔭の硯、この屋敷にあつてたまるものか。

久馬　それを差上げうと申した岡の谷、もし質物に入つてあるを氣取つて、他所から手を廻し、請け戻したと云ふやうな事ではないか。

正右　イヤ／＼、弟友之進が、彼の質屋を取込みたれば、他の者へ迂濶に請け戻さぬやう、弟が計らひ置いた筈ぢや。

軍藏　されば、その友之進さまが、未だお歸りないゆゑ、とんと心が落ちつきませぬ。

正右　弟が歸らぬは、この正右衛門が思ふ壺へ参つたのでござる。

兩人　とは、どう云ふ譯でござる。

正右　元我れ〳〵兄弟は、桃井家に仕へ居つた者。故あつて親宗太夫をば、近習の若者平井權八に討たれ、裁許に及んで我れ〳〵が私意、遁がれずとあつて屋敷を追放。時節至つて兄弟諸とも、武將家の見出しに預かり、只今の出頭。さるに依つて、車傳吉と云ふ乞食を語らひ、桃井の重寶、東雲の香爐を盜ませ、我が手へ受取つてござれば、案の如く桃井の屋敷は改易。その上には武將へ願ひ、どうやら斯うやら屋敷も知行も、兄弟が手に握りましてござる。

軍藏　それは聞えましたが、友之進さまのお歸りないを、思ふ壺へ行たと仰しやるは。

正右　そこぢやてや。彼の吉原を徘徊いたす、更科金兵衞と云ふ奴が、即ち親宗太夫を討つた平井權八に相違ないと、弟よりの内通。それゆゑ親宗太夫が敵、人知れず討ち放してしまへと、弟が方へ申し遣はしたところ、最前もお身達が噂の、日本堤に侍ひが討たれて居つたは、弟が歸らぬと云ひ、必定彼奴を討つて立退いたに相違ないこの上は、手に入つた東雲の香爐を、足利へ差上げ、事に依らば寶紛失を云ひ立て、當家も横領。我れ〳〵に恩信を運ぶおてまへ達も立身の基。立ち寄らば大木の蔭、その身の仕合せ。

軍藏　イヤモウ、比良正右衞門さまと申せば、當時日の出の御出頭。

久馬　飛ぶ鳥も落ちると云ふ、御威勢でござります。

ト奥より靱負主水出で

靱負　正右衞門さまに粗茶一服差上げうと、岡の谷さまの仰せ。

主水　圍ひへお入りあるやう、申し上げいとの事でござりまする。

正右　イカサマ、女儀の手前、御馳走に預からう。兩人も來され。

兩人　お相伴仕りませう。

正右　案内いたせ。

ト唄になる。正右衞門、軍藏、久馬を連れ、小姓案内して奥へ入る。と向うより傾城幾浦、走り出て、花道にて

幾浦　爰が殿様のお屋敷。昨夜の仕儀があんまり心ならぬに依つて、案内は知らねど、滅多無性に來たが、どうぞ殿様に逢ひたいものぢやが。

ト本舞臺へ行くうち、また向うより小紫、ウロ〳〵と
走り出て、幾浦に行きあたり、兩人恟りして

幾小　オヽ怖。

幾浦　誰れ樣ぢやぞいなア。

小紫　幾浦さまぢやござんせぬか。

幾浦　小紫さま。

小紫　小紫さまどころかいなア。金兵衞さまに預かつた大事のお前、今朝から廓に居やしやんせぬゆゑ、わしや心ならず、方々と尋ねて居るわいな。

幾浦　イヽエイナア、昨夜の仕儀、殿樣の事も金兵衞が身の上も、あんまり心ならぬに依つて。

小紫　サア、わたしもその事を思へば、どうも。

ト思ひ入れある所へ、また向うより、お崎、ウロウロ
走り出て二人に行きあたり。

さき　アヽ、お宥しなされて下さりませ。

小紫　イヽエ、わたしが不調法でござりました。

幾浦　イヤ、わたしが麁相でござりました。

ト互ひに顏見合せ

小紫　お前はお崎さま。

さき　さう云はしやんすは、吉原の小紫さま。

幾浦　ヤ、あの女中さまわえ。

小紫　あのお屋敷の伊平太さまと、云ひ交して居やしやんす、佐竹のお屋敷に宮仕へして居やしやんした、お崎さまと云ふのぢやわいなア。

さき　小紫さま、このお方わえ。

小紫　貞次郎さまのお相方。

さき　聞き傳へて居る幾浦さまぢやな。

幾浦　アイ。

さき　そんなら嬉しや。お前方に逢うたら、樣子が知れませう。噂を聞けば、昨夜廓で何やら騷動があつて、伊平太どのも居合はして居やしやんしたとやら、聞いたに依つて、それで忍んで、このお屋敷へ樣子を聞きに參じましたわいなア。

小紫　わたし等も、昨夜の事が心ならず

幾浦　それで爰へ來たのでござんす。

さき　そんなら伊平太どのや

小紫　金兵衞さま。

幾浦　寶の事も

三人　どうさしやんしたぞいなア。

ト皆々こなしあり、奥より

貞次　イヤ、大事ない、密かにちつと思案せねばならぬ事
がある。
ト云ひ〳〵出る。
幾浦　ヤア、殿樣、逢ひたかつたわいなア。
ト取りつく。
貞次　これは思ひがけない太夫、どうして屋敷へ……小紫
佐竹の腰元お崎、其方衆も。
小紫　アイ、昨夜の仕儀。
さき　どうも心なりませぬに依つて。
貞次　サア、某も伊平太や金兵衛が、便りを待つて居るわ
いなう。
幾浦　そんならお前も樣子を
小紫　御存じござりませぬかいなア。
ト向うバタ〳〵にて、傳吉走り出て、皆の中へドッサ
りと轉ける。皆々恟りして
女三　オヽ怖。何ぢやぞいな。
貞次　とんとビク〳〵して居る所ぢやに依つて、猶恟りす
るわいやい。
ト傳吉、そこらを見て
傳吉　ヤア、わりや上杉貞次郎、傾城ども。ヤア〳〵、わ
りや伊平太が下齒ぢやな。
さき　さう云ふこなたは、昨夜吉原で伊平太どのに似せ金
を貸した
傳吉　車傳吉。すりや、爰は上杉の館ぢやな。
小紫　モシ、憎てらしい奴が來たわいなア。
傳吉　幸ひ、爰に正右衛門さまがござれば、おれが身の上
は。
ト向うを見て
ヤア、南無三、又うせ居つた。こりや斯うしては居られ
ぬわい。
トまた一散に橋がゝりへ入る。
貞次　何の事ぢや。
幾浦　後先も云はずに、雲を霞に逃げて行たわいなア。
小紫　彼奴が事は構はずと、昨夜の別れの樣子が聞きたい
わいなア。
トまた向うバタ〳〵にて、伊平太、大童にて走り出る
皆々見て
貞次　ヤア、伊平太ぢやないか。
伊平　若殿。
さき　ほんに伊平太どの。よう戻らしやんしたなア。

伊平　わりや、どうして屋敷へ參つた。
さき　昨夜の樣子を聞かうと思うて。
　ト小紫、こなしあつて
小紫　コレ〳〵、モシ、伊平太さま、金兵衞さまは、どう
しやんしたえ。定めてお前が樣子を知つてゞござんせう
ちやつと聞かして下さんせいな〳〵。
貞次　イヤ〳〵、それよりは、コレ、大事の事がある。伊
平太、今日お使者、横目とお立合ひあつて、寶を渡さね
ばならぬが、質物の硯の事は、どうせうぞいの〳〵。
伊平　サア、その硯の儀につき、夜前よりこの通り。
小紫　イヤ、それよりは金兵衞さまの事はえ。
幾浦　ちやつと樣子を知らして下さんせいなワ。
貞次　それよりは硯の事が肝心ぢや。
　ト皆寄つて、伊平太を引ッ張る。お崎、引き分け
さき　ア、モシ、其やうにして下さんすな。大事の男が皺
くたになりますわいなア。
　ト此方へ連れて來て
アノナ、わたしやお前の事が氣にかゝつて、來にくい此
お屋敷へ來たもな。
伊平　エ、馬鹿め。それ聞いて居る隙はないわい。

　ト突き飛ばし
エ、コレ、殘念た車傳吉め。
小紫　その傳吉はたつた今。
伊は　行く先御存じか。
さき　爰へ來たれど、お前の影を見ると雲を霞に。
貞次　廣庭の方へ。
伊浪　さてこそ。
　ト行かうとすると、皆々留めて
貞次　伊平太、寶の事は。
伊平　それぢやに依つて。
さき　なんぞ樣子がござんすかえ。
伊平　譯云うて居る隙はないわい。
　ト振り拂ひ。
うぬ。
　トまた、橫がゝりへ走り入る。皆々後を見て
貞次　何ぢややら
女三　譯が知れませぬわいなア。
　ト内にて八ツの太鼓鳴る。
貞次　ありや八ツの刻限。
　ト向うより

向う　佐竹杢之頭さまのお入り。
貞次　杢之頭さまには、はや御入來とな。ハア。
　ト當惑する。
小紫　わたし等は、どう致しませうぞいなア。
　トウロ／＼する。
さき　サア、わたしぢやてゝ、あやの拔けぬ身の上、マア
マア、何ぢやあらうと殿樣のお居間へ。
　ト貞次郎、氣を變へて
貞次　皆の者、來い。
　ト貞次郎、幾浦、小紫、お崎を連れ、ツイと奥へ入る
と合ひ方になる。奥より正右衞門、岡の谷、軍藏、久
馬、小姓附き添ひ出かけ
正右　横目役杢之頭どの、到着とござる。
岡谷　お出迎ひ申されい。
軍藏　ハツ。
　ト軍藏、久馬、小姓出迎ふ。ト太鼓謠になる。向うよ
り杢之頭、衣裳上下、侍ひ二人、草履取り附き出る。
杢之　何れも出迎ひ大儀。これは比良氏でござるか。
正右　佐竹杢之頭どの。今日はお役目、御苦勞に存じます
る。

岡谷　杢之頭さまには御機嫌の體、先づ持ちまして、おめ
でたう存じまする。
杢之　山形宮内どのゝ御内室、岡の谷どの、その外家中の
銘々、揃はしやれて堅固の體、滿足に存じ申す。上杉貞
次郎どのには、拙者妹を以て、内緣を取組ましたには、
即ち上樣よりのお指圖、互ひに結納を取交しあれば、最
早姫も同然、お心安うお氣扱ひには及びませぬぞや。
岡谷　夫宮内在番の役目も濟み、歸國の砌りは、直さま御
祝言をさせませうと存じますれば、斯樣なお嬉しい事は
ござりませぬ。
正右　即ち武將の嚴命により、諸家の重寶受取るは拙者、
貴殿には横目の役。それにつきこの間より、この屋敷に
旅宿仕り、貴殿のお出でを相待ち居りましてござる。
杢之　それはお待ち久しうござつたであらう……この度足
利武將家に於て、武家重寶集と申す書をお選りなさるゝ
につき、諸侯の重寶を御上覽との儀、當家の重寶松蔭の
硯、正右衞門どの、拙者立合ひの上、内見いたし、直ぐ
に足利の上覽に供へる事、當家に於ても御達背はござる
まい。
岡谷　即ち當上屋敷の寶藏に秘め置きました松蔭の硯、御

内見に入れませう。

ト立たうとする、貞次郎走り出て、留めて

貞次　イヤ〱、松蔭の硯の儀については、上杉家の大事
に及びまするわいなう、

岡谷　サア、それはさうぢやけれど。

正右　貞次郎どの、扣へさつしやれ。

貞次　ハツ。

トこなしあり

岡谷　暫らくお待ち下さりませう。

ト岡の谷、奥へ入る。トこの時小紫出かけ

小紫　恐れながら、佐竹の殿様へお願ひがござりまする。

李之　そちや何者ぢや。

小紫　私しは、小紫と申す傾城でござりまする。御政道の
正しいお家柄を見受けまして、私しが願ひ、これに認め
置きましてござりまする。

ト願書を出す。

李之　これへ持て。

小紫　憚りながら。

ト李之頭取つて開く。

正右　聞き及んだ小紫。ハテ、美しい者ぢやな。

ト小紫、正右衛門を見て

小紫　ヤア、お前は。

正右　知らぬぞ。近付きでないぞ。

小紫　吉原に通はしやんして、わたしを度々。

正右　イヤ、コリヤ、似た名も顔も世界には幾らもある。
足利の直参比良正右衛門、傾城づれに近付きは持たぬぞ

小紫　ハテ、變つた所で…　近付きでござんせぬかいなア

ト此うち李之頭讀み終り

李之　願ひの趣き、追つて取上げるであらう。この一書、
此まゝに預からう。

ト懐中する。

小紫　エヽ、有り難うござりまする。

ト奥より岡の谷、寶の箱を持ち出る。小紫、下座へ扣
へる。右の箱を眞中に直し

岡谷　上杉の重寶、松蔭の硯、御上覽下さりませう。

正右　李之頭、内見いたすでござらう。

ト李之頭目禮する。正右衛門、蓋明けて見て恟りする

貞次　ハツ。

ト俯向く。

正右　こりや箱の内には

杢之　ござるまい。神代この方、斯やうな場所に及んで、寳のあつた例しがござらぬ。

岡谷　すりや松蔭の硯。

ト當惑する思ひ入れあり、貞次郎が側へ寄り

モシ、殿様、寳の行くへは、あなたならでは知り手のない筈。譯を仰しやれ。譯を仰しやりませいなア。

ト此うち正右衛門、箱の内より質札を出し

正右　元金二百兩、こりやコレ松蔭の硯を質に入れし質札ハテ、變つた物が入つてあつたなア。

貞次　さうぢや。

ト死なうとする。小紫留めて

小紫　モシ、殿様、お前がお果てなさるゝと、幾浦さまは生きてはござんせぬぞえ。それでは夫が、イヤサア、お果てなされずとも、申し譯はござんせぬかいな。

ト幾浦出かけ

幾浦　その申し譯は、わたしが死ぬれば事は濟みます。おさらばでござんす。

ト貞次郎が差添を取る。お崎出て留め

さき　ア、モシ、お前が死なしやんすには及びませぬわいなア。

貞次　死なねばならぬとは、この貞次郎。

ト腹切らうとするを小紫留める。

小紫　イエ〳〵わたしが。

ト死なうとする。お崎留める。

小紫　コレイナア、其方を頼みましたぞえ。

さき　なんぼうでも離す事ぢやござんせぬ。

ト兩方にて留める。杢之頭、お崎を見て

杢之　身が召使ひ居つた崎でないか。

さき　殿様、病氣を云ひ立てまして里へ下がり、それなりけりにお屋敷へ、歸りませぬは、深う云ひ交した、サア、何を申しまするも、皆わたしが不行蹟。例へこの場でお手討に逢ひましても、お恨みとは存じませぬ。

杢之　變つた所に居るな。

正右　コレサ、杢之頭どの。質札の表に、置き主上杉貞次郎とあれば、差當つて科に明白。

岡谷　イヤ、憚りながら、明白とは、そりや申されませぬ。

正右　斯ほど證據があつても。

岡谷　イヤ、寳紛失と云はゞ、誤りとも越度とも申しませうが、質物とあれば、例へ千金二千金、黄金を積んでも手に入れ、差上げまするでござりませう。

杢之　さうぢや、貞次郎どの。松蔭の硯を質物に入れさつしやつた、その質屋は何所、名は何と申す。
貞次　イヤサ、その事は、家來官藏が計らひ、質屋の所も官藏が知つて居りますれど、何を云うても、未だ屋敷へ歸りませねば、どこを目當に。
杢之　すりや、官藏は屋敷に居らぬとな。
貞次　ハツ。
杢之　ムウ。
　トこなしある。
正右　時刻が移る。松蔭の硯受取らうか。
貞次　サ、その儀は。
正右　黄金を積んで請け戻し、取上げると云つたでないか
岡谷　サア、それは。
正右　但し、潔白な云ひ譯があるか。
貞岡　サア。
三人　サア〳〵。
正右　なんとぢや。
貞岡　ハア。
　ト當惑する。橋がゝりの内より
伊平　松蔭の硯は、これにござりまする。

　ト伊平太、傳吉、摑み合ひ出る。
皆々　ヤア、品川伊平太。
岡谷　して、松蔭の硯があるとは。
伊平　即ち爰に。
　ト立廻り樣々あつて
傳吉　しつこい伊平太。おりや松蔭の硯とやらは知らぬぞ
伊平　知らぬとは云はさぬ。昨夜から、うぬを付け廻して居るも、大切な此方の硯は、うぬが所持して居る事知つて居るゆゑぢやはやい。
傳吉　われも、餘ッぽど根のよい者ぢやな。おれも昨夜から逃げた〳〵、晝夜を分たず走り廻つた。
伊平　こま言云はずと、早う硯を出せ。
傳吉　イ、ヤ、覺えはない。
伊平　覺えないと云や、カウ。
　トまた立廻り程よく、懷中へ手を差し込む。
傳吉　何さらす。
　ト懷中より硯の袋取り出し
伊平　さてこそこれが。
傳吉　それを。
　トよろしくあるを、ちやつと當てる。

質物に入れた松蔭の硯が、只今手に入りました。
ト正右衛門の方へひけらかし
どなたもお喜びなされませ。併し、上杉の滅亡を心がける方もあらば、寶が出たので、當の槌が違はう。御上覽濟んだ上、伊平太めがこの禮に持つて參らう。腰骨の用心して待つてござれ。
ト硯を直し、下へ下がる。此うち正右衛門、袋を開き見て恟りし
正右　コリヤ、上杉の重寶、松蔭の硯とはこれか。
ト出して見せる、皆々恟りして
伊平　すりや、それも似せ物、慥かにそれと見つけた硯。それが駒下駄になつてあるとは。ムウ。
ト思ひ入れあり、皆々伊平太を見て心意氣あり。此うち傳吉心付き
傳吉　そんなら、あれも吹替へであつたか。ハテナア。
ト伊平太、傳吉を引きつけ
伊平　サア、誠の松蔭の硯、爰へ出せ。
傳吉　おれも誠の硯ぢやと、大事にして持つて居たが、駒下駄と變つてあるは、おれも合點がゆかぬわい。
伊平　この仕儀もあらうかと、われが摺り替へて置いたのであらうがな。今一度この懷中を。
傳吉　捜せ／＼。なんぼうなりと捜せ。
ト伊平太、いろ／＼捜して見
伊平　こりや懷中にはない。ホイ。
ト當惑する。
貞次　サア、それぢやに依つて、貞次郎が。
ト柄に手をかける。お崎、伊平太留め
伊平　先づ寶の在所、黑白の分らぬうち、切腹あつて御先祖へ供養になるか。
幾浦　サア、それぢやに依つて、わたしが。
ト死なうとする。小紫留め
小紫　ア、モシ、お前は誰れあらう、桃井、イヤ、元の故鄕、お歸りあるまでは、死なれぬ命でござんすぞえ。
正右　誰れ彼れ云はうより、貞次郎の切腹召さるが、いつちよろしからう。
杢之　イヤ、惡からう。
正右　なぜ惡うござる。
杢之　サア、武將家御懇望の硯は手に入らず、貞次郎が首を、寶の代りに持ち歸つてござると、餘人は知らず、拙者は得申さぬ。

正右　すりや、こななには。

杢之　及ばぬまでも詮議いたすが、足利どのへ矢張り御奉公でござる。

正右　ハテナア。ヤイ、伊平太とやら、用がある。これへ参れ。

伊平　拙者に。

正右　如何にも。

伊平　ヘエイ。

ト前へ出る。

正右　苦しうない。これへ參れ。

伊平　ヘエイ。

ト側へ行くを、正右衛門引きつける。お崎寄るを

正右　なんぢや。何をヂタバタ。扣へて居らう。

ト睨つける。

ヤイ二才め、比良正右衛門を何者だと思ふ。下司下郎の分際を以て、人の臑にかけた泥下駄を以て、寶で候ふなどと、上使に立つた正右衛門を、盲目にひろいだな。殊に内見濟んだ上、お禮を持つて參る。腰骨の用心せよと我れ〳〵に當てつけ、よく云つたな。貴人に向つて出る儘の法外。併し、身に向つて大言吐くは、なか〳〵器量ある奴。出かす〳〵。われへは褒美に、これをくれう。

ト右の下駄を振り上げ

これをくれう。これを〳〵。

ト下駄にて散々に打つ。伊平太キッとなる。

伊平　正右衛門さま。

正右　なんぢや。

伊平　如何に出頭なればとて、伊平太めも武士ぢや、侍ひでござるわいなう。

正右　當時出頭の身共、武士の祿を食めば、すべて侍ひと思へど、譬はゞ鳥類でも、汝が雀なら、身共は鳳凰、大鳥だわい。その小鳥小雀の分で、慮外働らく大泥坊め。

ト踏み飛ばす。傳吉、直ぐに引きつけ

傳吉　ヤイ、昨夜わりや、よくも手ひどい目に合せたなアその返報は、斯うぢや。

ト引きつけ、喰はさうとする。伊平太、突き廻して

伊平　何ひろぐのぢや。お家の爲を思うて、正右衛門さまの悪口は聞いて居るか、うぬは何ぢや、以前は兎もあれ車傳吉と云ふ非人ぢやないか。

ト突き放す。

正右　扣へてくれう。

傳吉　エヽ。
正右　ハテ、どうで其方は……イヤサ、どうやら器量ありさうな骨柄。身共に奉公いたせ。ナ、奉公いたすからは正右衛門が家來。慮外いたす奴は討つて捨てい。
ト差添抛つてやる。傳吉、取上げて
傳吉　先達ての約束。イヤ、幸ひの仰せ、正右衛門さまの家來になるからは、うぬが。
ト柄に手をかける。伊平太、何かと突き廻す。
正右　ヤイ／＼、小雀の身で、鳳凰の下知に背くか。
伊平　事に依つたら、背かにやならぬ。
杢之　コリヤ／＼、大事の場所ぢやぞ。高で其方は小雀の事ぢや。鳳凰には負けて居れいサ。
伊平　ムウ。
トぢつとなる。
正右　傾城に鼻毛をよまれ、云ひ號けの娘に嫌はれ、よもや默つて居られまい。
杢之　そりやハヤ、鳳凰の仰しやる通りでござる。ナニ、貞次郎どの、此方の妹が緣組み變替へ仕る。
貞次　エヽ。
岡谷　アヽ、モシ、それでは。

杢之　越度ある貞次郎、内緣切つてお世話申すが、此方の潔白でござる。
トこの時、バタ／＼にて、比良家來當次、友之進が口明の死骸を乘せて持たせ出る。
當次　お旦那、これにござりまするか。夜前日本堤で友之進さまが。
正右　ハテサテ、コリヤ。
ト押へて
弟は他國いたしたな。彼の奴を首尾ようバッサリ……他國いたしたであらうがな。
當次　サア、その手段が後手になり、友之進さまがお討たれなされて。
ト正右衛門見て愕り。
正右　ヤヽヽ、何と云ふ。すりや、弟友之進は。
當次　日本堤で、敢へない御最期。即ちお亡骸。
ト眞中へ直す。正右衛門、いろ／＼見て愕り
こりや弟、友之進に相違はない。
ト當次を引きつけ
ナヽ、何者が手にかけた。相手は何奴ぢや。どうぢやどうぢや。

ト急いて云ふ。

當次　サア、殺した相手は何者ぢやら、落ち失せた後へ駈けつけ、見つけた死骸。その側に落ち散りありし、この一品。

ト袱紗包みを出す。正右衞門取る。

正右　幸ひの手がゝり。

ト袱紗を開かうとして氣を替へ

ムツ。

ト杢之頭へ目をやり、懐中する。

小柴　何かにつけて昨夜の仕儀。サア、この納まりは、どうなつたやら。

ト案じるこなし。杢之頭、死骸をいろ／＼見て

杢之　右の肩先より左の脇腹、胸板へ止めと云ひ、餘程手練せし者と見ゆる。こりや相手知るゝまでは、寶の詮議を延ばさずばなるまい。

正右　イヽヤ、そりや其方の得手勝手。使者に立つたる身共が目前、寶が無くば當家は滅亡。

杢之　イヤ、上杉の滅亡より、敵をお討ちあらずば、比良家の瑕瑾。

正右　すりや身共が。

杢之　敵討ちが先に廻つた。

正右　ムウ、さては弟を討つた奴を

杢之　詮議なされいでは、武士が立つまい、

正右　如何にも詮議仕る。

杢之　一災起れば二災起ると、ハテ、御苦勞な事ぢや。

正右　弟が死骸片づけい。

家來　ハツ。

ト橋がゝりへ持つて入る。その間に岡の谷、中二階の佛前にある位牌を取り

岡谷　金盛院殿榮入大居士、

貞次　そりや親人の御戒名。

岡谷　貞次郎、勘當ぢや。

貞次　エヽ。

岡谷　武將家より嚴命の御内縁を嫌ひ、その身の放埓、殊に寶紛失と云ひ、重なる越度、勘當ぢやと、サア、大殿御在世ならば、まツ此やうに仰しやるであらうと、位牌の勘當、御合點が參りましたか。

貞次　すりや勘當とな……ハア。

ト こなしあり、伊平太、思ひ入れあつて

伊平　ハツ、大殿のお位牌へ、お願ひがござります。何卒

さき　若殿の御介抱が仕りたうござります。お供の儀を御赦免下されうならば、有り難う存じまする。

さき　わたしもお供を、お願ひ申し上げまする。

ト杢之頭に云ふ。

岡谷　科人に供は叶はぬと、サア、これもお位牌の仰せ。

杢之　イヤ、兩人は不義者でござる。

さき　エ、。

杢之　主の目を掠め、他家の家來と不義いたした腰元の崎この場より勘當ぢや。

さき　有り難うござります。

岡谷　不義は同罪、伊平太、勘當ぢや。

伊平　待ち受けて居ります。

正右　用意の縕袍を持て。

侍ひ　ハア、。

ト家來、縕袍を持ち出る、軍藏取つて

軍藏　サア、殿、着替へさつしやれ。

ト當次、軍藏、兩人して帶解きにかゝる。伊平太、突き廻し、縕袍を引ッたくり、刀を拔いて方々へひろつかし、下の方へ突き立てる。傳吉、皆々後へ寄る。

伊平　勘當受けたりや、主なしの伊平太。腹立てひろぎや去にかけの駄賃、どいつ此奴も容赦はないぞ。

正右　阿房拂ひは、百杖打つが內海の式目。ソリヤ。

ト傳吉に指圖する。傳吉、家來が持つて居る割り竹を取り

傳吉　制法とあれば拔け憎からう。ちよつとカウ。

ト割り竹振り上げる。杢之頭、傳吉を突き廻し、割り竹を引ッたくり、きめる

傳吉　御上使、この割り竹も贔屓の御沙汰か。

杢之　イヤ、左樣ではござらぬが、斯やうな事には、それそれの役目がござる。拙者が申しつける者が外にござる

傳吉　外にあるとは。

杢之　岡の谷どの、この役目はこなたに申しつける。遠慮なく百杖打たつしやれ。

岡谷　エ、。

杢之　イヤサ、驚ろく事はない。家老の身で主を打つと思へば、慮外無禮がござらうが、矢張り大殿に成り代つて

岡谷　それぢやと申しても。

杢之　ハテ、家老の役目、否はなるまい。シタガ、持ちつけさつしやれぬ物ゆゑ、左樣仰しやるが、高が割り竹で人を打ちますは、何がなしに、擲う打つたものでござる。

ト傳吉を喰はす。傳吉ムッとして

傳吉　こりや身共を、なんで打たつしやる。

杢之　これは麁相な。手前はあの人に打ちやうを御指南申すのぢや。竹の先が餘つて、お身に觸つたさうにござる。竹の先がちよつと當つてさへ、あの通りでござる。力を入れさつしやつて、斯う打つと、格別痛みまするてや。

軍藏　杢之頭さま、我れ〳〵をなせ打たしやつた。

杢之　イヤ、打ちは致さぬ。打ちやうを教へる。形に致したのぢや。女中は何と申しても不器用にござる。岡の谷どの、なんの事はない、斯う打たつしやれ。

ト當次を打つ。

當次　こりや身共までを。

杢之　觸つたら御免なされい。よく手元を御覽なされや。斯う打つのぢや。斯うぢや〳〵。

ト三人を散々に叩き据ゑる。

この通りに打ち据ゑさつしやれ。

ト割り竹を岡の谷の前へ抛る。

岡谷　畏まりました。

杢之　いよ〳〵覺えさつしやれたか。

ト皆々起き上がつて

三人　こりや又あんまり。

杢之　岡の谷どの、もそつと教へませうか。

當次　イヤ、もうようござるわいの。

傳吉　とつくりと覺えさしやつたさうな。

杢之　左樣ならば、ようござる。

三人　とは云ふものゝ。

正右　ア、コレ、サ、物數云ふな。云ふ程屑が出るぞ。

ト三人ぎしむ。

幾浦　モシ、どうぞわたしも。

ト行かうとするを、杢之頭留めて

杢之　イヤ、其方には尋ね問ふ仔細あり。この傾城は小紫其方に預ける。

小紫　アノわたしに……成る程、預かりました。

伊さ　イザ殿樣。

ト三人立たうとする。

杢之　待て。腰元崎、暇の印くれう。

さき　ハイ。

ト下に居る。杢之頭、貞次郎が脱いだ上下の肩衣を取り、小姓に硯と云ひつける。小姓、硯取つて來る。杢之頭、此うちに歌を書き、兩方へ見せる。双方引ッ張

り

さき　忘れなよ、程は雲井に隔つとも

小紫　登ゆく月のめぐり逢ふまで。

ト杢之頭、差添拔いて肩衣を眞中より切り、小紫、お崎取つて

さ小　これは。

杢之　形見にしやれ。

伊平　この古歌の心は。

杢之　コリヤ、判斷はまだ早い。

伊平　ハツ。

正右　杢之頭どの、拙者は此まゝ敵討ちの門出、旅の用意。

傳吉　家來の役、助太刀は身共。

岡谷　杢之頭さまには今暫し

杢之　休息して罷り歸らう。

傳吉　思ひ廻せば。

杢之　割り竹の指南足りぬか。

三人　御指南に恐み入りました。

岡谷　イヤ、お二人樣

正右　案内召され。

幾浦　殿さん。

杢之　早くぼツ拂へ。

ト唄になり、貞次郎にお崎、伊平太附き、向うへ入る杢之頭、岡の谷、小姓侍ひ皆々、小紫幾浦を連れ奥へ入る。ト後に正右衛門、傳吉、軍藏、久馬、當次殘り居て

三人　ても手ひどい目に會はし居つた。

正右　新參の傳吉、其方を始め三人の者、とくと申し聞かす仔細がある。コリヤ。

傳吉　ハツ、仰せられませ。

軍藏　仔細はな。

ト正右衛門、思ひ入れあつて

正右　コリヤ。

ト囁く。

傳吉　すりや、後程。

當次　拙者はアノ

軍藏　我れ〳〵も

正右　ハテマア、奧へ。

ト合ひ方になり、傳吉、當次、軍藏、久馬を連れ、奧へ入る。正右衛門一人殘り、煙草のみ居る。ト橋がゝりよりお崎出で、おづ〳〵辭儀して

さき　正右衛門さま。
正右　そちや先程の女、崎とやらぢやな。
さき　左様でござります。
正右　屋敷へは何ゆゑ歸つた。
さき　わたしが歸りましたは、御奉公が申したさ。
正右　上杉の屋敷へか。
さき　イ、エ、夫伊平太はお家を追放。身の行く末を思ひ廻して、夫の事をフツツリと思ひ切り、爰へ歸りましたは、正右衛門さま、お前のお屋敷へ奉公がしたさ。
正右　身が屋敷へ奉公がしたいか。
さき　サア、腰元なりと、妾なりと。
正右　望み次第に。
さき　御奉公申しまして。
正右　其方が願ひを聞いてくれいか。
さき　エ、。
正右　貞次郎が身の上、上杉家に祟りのないやう、武將の御前を執成しくれいと、身共への願ひであらうが。
さき　御推量の通り、このお願ひを。
正右　如何にも、其方が願ひを、聞き屆けてくれう。
さき　アノ御眞實で。

正右　口說いて欲しい。
さき　そりや誰れをえ。
ト正右衛門、有り合ふ硯を取つて、サラ〳〵と文を書き、封じ、上書きして
正右　この艶書、屆けてもらひたい。
ト文を抛る。お崎、文を取り上げ
さき　由緣の色さま、貞正より。
ト思案して
由緣の色とは。
正右　吉原の傾城、松葉屋の小紫。
さき　そんなら、奥に居やしやんす小紫さまに。
正右　サア、人知れず忍び〳〵に、廓へ通うて振りつけられても、思ひ切られぬ心の輪廻。面目ないが、ぞつこん首だけ。
さき　すりや、色よい返事を取りましたらば。
正右　其方が願ひは身共がキツと。
さき　成る程、この文預かりました。
正右　萬事は後まで。
さき　正右衛門さま。
正右　返事を待つぞよ。

ト唄になる。ト正右衛門奥へ入る。お崎、右の文を見
て思案して氣を替へ、ツイと奥へ入る。あと合ひ方に
て、向うより伊平太、貞次郎を連れ出て
貞次　伊平太、杢之頭さまの古歌の心。
伊平　ハテ。
トこなしあつて
貞次　そんなら密かに。
伊平　コレ……何にも仰しやらずと、ござりませ。
ト伊平太、貞次郎を連れ、橋がゝりへツイと入る。と
ジャン／＼と暮れ六ツの半鐘鳴る。小姓、燭臺を持つ
て出て、よき所に直し入る。始終此うち合ひ方。小紫
出て、あたりを見て、思ひ入れあつて
小紫　金兵衛さまに頼まれた幾浦さまのお身の上、殿様と
夫婦にならしやんすやうに、わたしが願ひは最前……返
す返すも昨夜の仕儀、心にかゝれば。
トちつと思案して
斯う案じて居ても氣が濟まぬ。いつそわたしが。
ト立ち上がり、身拵らへして、向うへ行かうとする所
へ、奥より正右衛門出て
正右　小紫待て。

小紫　エヽ、正右衛門さま。
正右　これまでは、よくも辛う振りつけたな。其方がつれ
ない程、猶身共惚れ拔いた。情を飾り誠を磨く、傾城に
似合はぬ小紫、わりや聞えぬ者ぢやぞよ。
小紫　イヤ、聞えぬとはお前の事ぢやわいなア。
正右　なぜ／＼。
小紫　川竹の憂き節に、思ふ殿御へ立てられぬ心中。そこ
を立て拔くが、ほん／＼の心中ぢやもの。石より堅う結
んだ帶を、解いて心に隨へとは、お侍ひ様にも似合ひま
せぬ。アイ、小紫が解く帶は、三千世界にたつた一人ほ
かござんせぬわいなア。
正右　すりや、如何やうに云うても。
小紫　否と云ふが、わたしが返事。
正右　身請けせう。
小紫　エヽ。
正右　流れの身と云へば、定めなき舟の如く、何國の礒へ
寄るまいとは云はれぬ。身請けして妻女とすれば、云ひ
交した義理も消え失せ、天下晴れて添臥しがならう。
小紫　體は金に任しても、魂ひを任せぬが、勤めの意氣地
でござんすわいなア。

正右　さほど思はゞ、なぜ思ふ男に身請けはしられぬぞ。
小紫　サア、それはな。
正右　日蔭者ゆゑ、身請けの事は心に任せず、思ひを運ぶ互ひの心中、男への義理は立たうが、浮世の義理はそれでは立つまい。
　ト小紫こなしあつて、行かうとする。裾を鐺にて押へ
待て。どこへ参る。
小紫　浮世の義理か立てられぬに依つて、爰には居ぬのぢやわいなア。
正右　思ひ切らう。
小紫　エ。
正右　さほどに思はゞ、身が戀は思ひ切らうが、云ひ交した男を身共に逢はせい。
小紫　わたしが云ひ交した殿御に。
正右　逢うた上では疑念を晴らし、フッツリと思ひ切らう。
小紫　サア、それはさうでも。
正右　何所の住人、名は何と。
小紫　サア、それを爰では打明けて。
正右　云はれぬか。云はれずば武士の意地、口説き落して抱いて寝る。
小紫　それではお前。
正右　夫へ立たぬか。
小紫　殿御へ誠が立てたいばかり。
正右　すりや、一図に云ひ交した男を。
小紫　思はいで何としませう。一生連れ添ふ男ぢやもの。
正右　變らぬと云ふ誓紙があるか。
小紫　起請は互ひの胸の内に。
正右　イヤ、心の外と云へば、胸の起請は破ると云ふ時節があらう。
小紫　書いた起請は破れもせうが、胸に納めた誓紙の誓ひは、破るゝものぢやござんせぬ。
正右　萠え出づるも枯るゝも同じ野邊の草。
小紫　秋に逢はうが逢ふまいが、二人が仲は比翼連理、變らぬ誓ひと、わたしに下さんした、この印籠の底の一重は、浪に浮みし鴛鴦の模樣、番ひ離れぬ縁ぢやものと、思ふに變る昨夜の別れ、思はぬ難儀鴛鴦の、これが形見になりはせぬか。今日の一日が百歳千歳に思はれて、懐かしい／＼わいなア。
　ト思はず向うを見て泣き入る。正右衛門、印籠を取つ

て思ひ入れある。

正右　こりや覺えある身が所持の印籠。廻り廻つて其方へ渡りしは、身に隨へとある結ぶの神の引合せ。

ト側へ寄り添ふを突き退け

小紫　措いて下さんせ。その印籠は以前、國で殿樣から拜領あつたとの噂。いま町人ではあれど、仁義五常を面に立て、都の水に磨き上げた生粹の男、更科金兵衞さまぢやわいなア。

ト突つ込んで云ふ。

正右　ムウ。すりや印籠の主は。

小紫　以前は由ある武士の身の上。

正右　桃井家の浪人か。

小紫　エ。

トぎつくりする。正右衞門、懷中より印籠を出し合せ

正右　弟が死骸の側に落ち散りあつたと、家來が最前身共に渡した印籠の片方。模樣は鴛鴦、今この印籠としつくり合うたは。

小紫　何と云はしやんすえ。

正右　さては弟を殺めたは、更科金兵衞、彼れが本名平井權八、親宗太夫どのゝ敵と云ひ。目前重なる弟が敵も、平井權八めであつたよなア。

小紫　エヽ。

ト驚ろく。奥より杢之頭、岡の谷出て

岡谷　正右衞門さま。

杢之　敵の苗字が相知れ、滿足に存する。

正右　御兩所は委細の樣子。

杢之　承つて安堵いたしたが、こなたの御親父宗太夫どのを手にかけ、剰へ御舍弟までを手にかけた平井權八、なかなかこなた風情の手には。

ト正右衞門と顏見合せ、トこなしあつて

手に合ふか合ふまいが、親兄弟の敵討ち。のし切つてござらずばなるまい。

ト正右衞門、思ひ入れあつて

正右　參ります。只今討ちに參る所存ぢや。

杢之　それはハヤ御苦勞でござる。

正右　家來、挾み箱。

侍ひ　ハア。

ト橋がゝりより侍ひ大勢、挾み箱持ち出て、旅の裝束を出す。正右衞門、始終ムッとしたこなしにて、家來を叱り散らしながら、野袴、羽織足袋の拵らへになる。

此うち小紫、ウロ〳〵。

小紫　そんなら昨夜、日本堤の人殺しは、金兵衛さまであつたかいなア。さうとも知らいで、現在わたしが口から今の白狀。思はず夫の訴人になつたかいなア。ハア。

ト泣き落す。

杢之　今宵も最早、初更の月魄。

正右　夜中ながら出立いたさう。

ト奥より幾浦、橋がゝりより貞次郎、お崎、伊平太出て

四人　杢之頭さま。

杢之　引き分けし古鄕の心。

貞次　忘るなよ、程は雲井に隔つとも

幾浦　空行く月のめぐり逢ふまで。

貞次　時刻も丁度月の出汐。

三人　立歸りましてござります。

杢之　判斷召されて先づは重疊。

正右　イヤ、杢之頭どの、松浦の親受取るは拙者が役目、其許は横目役、寶も出ぬうち追放に逢うた貞次郎、なぜ屋敷へ引込ましやれた。

杢之　サア、諸家の系圖を受取る役目が、貴殿ちやに依つて、貞次郎を呼び寄せました。

正右　なんと。

杢之　足利の嚴命承つた貴殿が、只今より敵討ちに出立あれば、平井權八討ち取つて歸らつしやるまで、横目の拙者も待たずばなるまい。

正右　すりや、敵討ちの濟むまでは。

杢之　寶上覽暫らく延引。

皆々　エヽ、忝ない。

正右　敵討ちは私しの沙汰。寶の詮議は表向き、延び〳〵には罷りなるまい。

杢之　すりや、こなたには、武將の御前へそのお面で。

正右　出ます。ずんど出ます。

杢之　實父を討たれ、それのみならず、友之進どのを殺めたも、相手變らぬ平井權八。もしお上にお尋ねあらば、殺され損にして相濟みましたと、面を赤めて云ひ譯をさつしやるか。

正右　サ、その儀は。

杢之　寶の詮議、上杉の越度より、こなたの越度、云ひ拔けがござるか。

正右　サア。

根本「戯場言葉草」挿絵

上杉館の場

杢之　武士の闘討ちは恥辱の第一。但し、相手の名を聞いて尻込みでござるか。

正右　なんのマア。

杢之　然らば出立召さるか。

正右　サ、その儀は。

杢之　この儀逐一、言上いたさうか。

兩人　サア／＼／＼。

杢之　權八が首引ッ提げて戻らつしやれいの。

ト扇にて正右衞門が肩を叩く。正右衞門、思ひ入れあつて

正右　ムウ。

トぎつくりして

すりや、權八を討つて歸國したらば

伊平　その時が一生懸命。

杢之　倶不戴天の親の敵、殊に弟の仇。

正右　おやと云うて、身が手に合はぬ權八。

ト云ひ、また氣を替へ

ひよんな敵が知れた事ぢや。

ト困り入るこなし。

杢之　なんと、勇ましい御出立ではないか。ハヽヽヽ

岡谷　相手は名に負ふ平井權八、滅多に敵は……サア、めでたう敵討ちの濟むまでは、例へ一歳二歳でも、心長うに寶の詮議。

ト正右衞門キッと思ひ入れ。

正右　イヤ、この正右衞門が狙ふ敵、三日がうちに尋ね出し、首引ッ提げて罷り歸る。

杢之　すりや、三日がうちに。

正右　如何にも。

杢之　ハテ、手びしい事の。シタガ、彼奴もしれ者と聞き及ぶ。どうぞカヮ助太刀の二三十人も、語らうてござれサ。

ト正右衞門、思ひ入れあつて、庭前の松の木を拳にて叩き、枝を折る。正右衞門、その枝を杢之頭に突きつけ

正右　正右衞門の手の內、まッ此やうに平井權八を討つて見せう。

杢之　見事……が申さばこれは非情の松の木、打たれても腹を立てず、押默つて居らうが、平井權八、手もあらうし足もあらう、有情の人間、非情の松の木、手本には、危ない／＼。

正右　ムウ。
　トぎしみ、松の枝を打ちつける。この時小紫、思ひ入れあつて
小紫　さうぢや。
　ト伊平太が刀に手をかけ、死なうとするを留め
伊平　待つた。なんで死ぬるのぢや。
小紫　なんで死ぬるとは、これが死なずに居られませうかいなア。權八どのが友之進を殺めさしやんしたも、大切な寶の、イヤサア、田から行くも畦から行くも、お主のお家が再興したいばつかり。現在云ひ交したわたしが、力にそこはならずとも、打ち出して夫の訴人、權八どのへの云ひ譯、どうも生きては居られませぬわいな。
杢之　うろたへ者。權八が行くへは知れず、其方が相果て傾城幾浦は何者が貢ぐぞ。
小紫　エヽ。
杢之　幾浦と云ふは、桃井家の息女とは知らぬか。この杢之頭は推量いたしした。
　トぎつくりする。
さき　さては桃井家のお姫樣であつたかいなア。
幾浦　恥かしいこの身の上。

小紫　幾浦さまを權八どのゝ、古主の姫君と御存じの上は最前の願書。
杢之　杢之頭が取上げくれう。正右衛門どの、出して遣はされい。
正右　出せとは何を。
杢之　東雲の香爐を。
正右　樣々の寢言を聞く。東雲の香爐は桃井家の寶、身が所持して居ると云ふに證據があるか。
伊平　證據と云ふは、吉原で手に入れた。
小紫　ソレ、この一札。
　ト拋り出す。伊平太取つて開き
伊平　「桃井家の重寶、東雲の香爐、某へ渡せし功に依つて都へ歸館の上、一廉の武士に取立て遣はすべきものなり車傳吉、本名大佛十平次へ、良正判」
正右　イヤ、その一札認めた覺えはないぞ。
さき　イヤ、さうは云はれまい。最前小紫さまを口說いてくれと、こなさんの自筆の濡れ文。これを取らうばつかりに、夫伊平太どのと云ひ合した計らひ。由緣の色樣、良正より。
伊平　ドレ。

ト文を取り、引合して見て
こりや違ひもない同筆。良正は比良正右衛門。
小柴　そんなら、こなさんが。
トキツとなる。
伊平　逃がれはあるまい。香爐を出せ。
杢之　ハテサテ、他家の寶を、いらざる詮索。
伊平　でも、折角見出したこの手がゝり。
杢之　これへ持て。
伊平　ハツ。
ト右二通を杢之頭に渡す。
杢之　小柴、この二通は、われにくれう、
ト小柴にやる。二通を取る。
小柴　そんならこれで。
杢之　權八に廻り逢はゞ、ソレ、その狀に出合ひし事、其奴を捕へて、寶の詮議しやれ……とサ、此方から指圖はせぬぞよ。
小柴　エヽ、忝ない。
ト正右衛門、ムッとして
正右　みす／＼この正右衛門を側に置いて。
杢之　然らば、あの狀を、この場に於て役に立てませうか。

正右　サア、その儀は。
杢之　出すぐみせずと、お立ち／＼。
伊平　香爐の詮議しぬいたらば、それから釣つて、此方の家の寶も。
杢之　ハテ、その詮議も急くに及ばぬ。
伊平　エヽ、殘り多い。
ト此うち傳吉出かけ
傳吉　敵討ちの血祭りに、うぬ。
ト伊平太に切りかける立廻り
伊平　叶はぬ腕立て。
傳吉　所を。
ト立廻りのうち、杢之頭、松の木へ目をつけ
杢之　月夜を晝かと、阿呆烏め。
ト小柄を手裏劍に打つ。當次、下へ落ちて、直ぐに杢之頭に切りかゝる。伊平太、傳吉を突き廻す。此はずみに傳吉、杢之頭の方へ行く。當次を突き廻す途端にて傳吉、當次をボンと切る。
正右　こりや家來を。
杢之　盜賊の落着、正右衛門どのには當匿の身替り。
正右　ムウ、ヽヽ。ハテ、お世話をござつた。

伊平　血祭りも、これで濟んだ。
ト伊平太、傳吉を正右衞門が側へ投げる。
正右　ムウ。供せい。
傳吉　ハッ。
トへたりながら云ふ。
皆々　思へば。
トキッとなるな、杢之頭皆々を押へ
杢之　コリヤ……めでたう出立。
ト正右衞門、杢之頭、目禮する。よろしく

幕

三幕目　板橋高札場の場

役名――比良正右衞門。車傳吉。茶屋娘、おかね
荒井官藏。松葉屋幾浦。平井權八。幡隨長兵衞。

幕の内より木綿屋出る。
ト向うより飛脚、氣の急く見得にて出かけ、木綿屋に行き當り
飛脚　ア、、御免候へ／＼。氣が急くによつて。
ト云ひ／＼顏見合せ
木綿　どうぢや。知れたか。
トひそ／＼云ふ。
飛脚　イヤ、けぶらいも見えぬ。どうでも木曾の方へ行たかしらぬ。
木綿　イヤ／＼、この海道へ打出したと、仲間の者が云うたが、なんでも見付けさへしたら、しめたものぢや。
飛脚　アレ／＼、誰れやら來るぞよ。
木綿　やかましう云ふな。お代官ぢやわい。
トひそめく所へ代官家來連れ出て
代官　迂散らしい者は、未だ來ぬか。
飛脚　氣を附けて頑張るけれど、それらしい者に一向に參りませぬ。
木綿　私しどもや大勢が、血眼になつて氣を付けるからは見付け次第、御注進申しますが、あはよくばフン縛つて差上げまする。
代官　イヤ／＼、桃井家に於て劍術に達せし平井權八、滅多にわれ達が手には及ぶまい。何にもせよ、辯舌を以て蕩し込む、申し合はせた注文に合はゞ、人違ひでも苦しうない。早速に知らしたがよい。

飛脚　ぬかる事ぢやござりませぬ。
代官　申し渡したぞ。家來、參れ。
　ト家來連れ向うへ入る。
飛脚　サア、行かうか。
木綿　行け〳〵……縞木綿、上縞や丹後縞。
ト賣り〳〵、木綿屋、飛脚、幕の內へ入る。と在鄕唄
になり、幕開く。
造り物、一面の松原、臆病口に制札、開帳札などあ
つて札場の體、橋がゝりの方、折り廻し障子。次に
葭簀の圍ひ、床几直し、茶店の體。前に井戶。屋形
なしに振り釣瓶直しある。すべて板橋の札場の體。
在鄕唄にて仕出し旅人二三人出る。
旅一　サア〳〵、一服のんで行かうかい。
旅二　それ〳〵、餘ッぽどの大道であつた。サア〳〵、休
　んで行きませう。
旅一　これは店を明けて、どうしたものぢや。コレ、茶を
　一ッ下されや。
かれ　アイ〳〵。
　トおかれ、內より茶を汲み持ち出て

　どなたもお茶上げませう。
旅一　これは、例もながらお娘の花香でえすの。そして、
　この茶店は、お娘一人か。
かや　イエ〳〵、兄さんがござんすが、今日は王子の稻荷
　さまへ參られましてござんす。
旅二　留守で淋しからうの。
かや　イエモウ、近所から氣を付けて下さんすに依つて、
　氣散じな事でござんすわいなア。
　ト云ひ〳〵、釣瓶を取り、水汲むこなし。
旅一　イカサマ、在鄕と云ふものは、氣散じなものぢや。
　吉原や深川邊なら、もう金にする時分ぢや。
旅二　オット、その水一つ貰らう。なんと、爰な水は、綺
　麗な事ぢやないか。
旅二　利根川の水筋ぢやによつて、井戶水までが綺麗な。
旅三　江戶の水は吞み憎いと云ふが、爰らは淸水でよい。
かや　サア、取分けて爰らは水がよいと云うて、この立場
　は皆樣が、いつでもわたしが所で休んでゝござんすわい
　なア。
旅三　そりや水ばかりぢやない。お娘の器量がよいによつ
　てぢや。ナウ、皆の衆。

旅二　それ〱、イヤ、もう、去なうかい。
旅一　茶の錢は、爰に置くぞや。
かれ　アイ〱、ようござんしたえ。
旅二　サア、ござれ〱。
ト皆々橋がゝりへ入る。茶屋の娘、釜の下焚き付け居る。向うより荒井官藏、破れた着物に深編笠、破れ扇を持ち出る。
官藏　「夜は來れども晝見えず」
ト謠を謳ひ〱出かけ、花道にて
ア、、浮世ぢやなア。荒井官藏とも云はるゝ武士が、知行には放れる、天竺浪人の境界。蛙合戰を見て、睨みさうな形ぢや。
ト向うを見て
板橋の札場ぢやな。一服燻らして參らう。姐さま、茶々一つ賜はれ。
かれ　アイ〱、出花でござんす。
ト茶を差出す。その手を取り
官藏　見事、年は幾つ。
かれ　アイ、十四でござりまする。
官藏　十四……もう割つてもよい時分ぢや。
ト手をしめ、引寄せる。
かれ　こちや、そんな事は知らぬ。
官藏　知るまい〱。十四ではまだ知らう筈はない。なんでも一度覺えてからは、その味のよさと云ふものは、どうも斯うも云はれたものぢやない。君よ〱、此方へ寄り給へ〱。
ト引寄せ、抱き付くを、振り放し
かれ　エ、、つッと何ぢやぞいな。アタむさい形をして、こちやそんな事は知らぬわいなア。
トぴんとして、茶屋の内へ入る。
官藏　知つても知らいでも、割りかゝつたら割らにや置かぬ。
ト云ふうち、旅人二三人出て、迂散らしう官藏を見る。ちやつと笠を冠る。
旅一　コレ〱、お若いの、ちよつと逢ひませう。
官藏　なんぢや〱、何の用ぢや。
旅二　苦勞ながら、ちよつと來てもらひたい。
旅一　お目にかゝりたい用がごんす。
官藏　おりや、なんにも貴樣達に逢ふ用はないわい。
旅二　其方になうても此方にある。

旅一　合點のゆかぬ編笠。

旅二　細言云はすと、ちやつとごんせ。

官藏　ムウ、來いなら行きもせうが、どこまで行かう。

旅一　どこと云うたら、幸ひのあの葭簀の内。

官藏　面白い。どこへなりと行かうわい。

兩人　あよばんせ。

　ト合ひ方にて、葭簀の内へ入る。

かれ　ア、、何ぢややら、氣味の惡い。あの人は何ぞ迂散なんぢやないか知らん。また後で、きつい目に逢ふのであらう。ア、、笑止な事ではあるぞ。

　ト正右衛門、野袴、打裂き羽織。後より奴傳吉、附き出る。

傳吉　お旦那、板橋の札の辻でござりまする。

正右　暫らく休息して參らう。

　ト鉾臺へ來て、正右衛門・床几に腰掛ける。娘茶を持つて

かれ　お茶上げませう。

　ト正右衛門、茶碗を取る。

正右　もう何時であらう。

かれ　ハイ、七ツ下がりでもござりませう。

正右　暮れるに間もないな。

かれ　御ゆるりと休んでお出で遊ばせ。

　ト内へ入る。

傳吉　イヤ、正右衛門さま、此やうにまでもお尋ねなされても、敵權八が行くへの知れぬは、よくも御武運に盡きさつしやれたのでござりませう。

正右　ハテ、大事ない。いつまで知れいでも、路用に事はかゝず、金銀を丈夫に貯へて居れば、高で武者修行に出たと思へば、勿怪の幸ひぢや。

傳吉　それはさうぢやけれど、敵討が濟まにや、お國へ御歸參はなりませぬ。べん／＼とするうち、もし敵權八が病死でもするか、喧嘩口論をして、その場で死になどしたら、一も取らず二も取らず、理詰めでお前は浪人。私しも身上に離れると云ふものでござりまする。

正右　イヤ／＼、喧嘩口論に及んで、死ぬるやうな權八でない。

傳吉　でも、知れぬは人の命、どうぞ一時も早う尋ね出したいものぢやが。

　ト三人出る。

旅一　これは大きな人違ひを致しました。

兩人　眞平御免々々。
官藏　なんの〳〵、ある事でえす〳〵。
旅二　貴樣があんまり笠で顏を隱すに依つて、此方も氣が
　廻つたのぢや。
官藏　おれは又、なんぢやと思うて、あつたら膽が菜種に
　なつた。
兩人　ハヽヽヽ。イヤ、お別れ申さう。
官藏　さらば〳〵。
　ト兩人、入る。官藏、後を見て、世迷言云ひ〳〵
ムウ、さては今の樣子では、もう爰らへも配符が廻つた
のぢやな。ムウ、さうなけりやならぬ。友之進どのを殺
したより、仁木主計どのを殺したぼくが高い樣子。なん
でも見付けさへしたら、金になる。
　ト正右衞門を見て
ヤア、お前は正右衞門さまぢやござりませぬか。荒井官
藏が成れの果てゞござりまする。
正右　ほんに官藏どのぢや。むごい顏になつたなう。
官藏　お聞き下さりませ。いつぞや吉原の日本堤で、顏も
　體もそこらだらけ、鱠にいたやうにしられて、斯樣に
　疵だらけになりました。まだしも命一つが拾ひ物でござ
　りまする。
正右　さうあらう〳〵。權八が手並は、桃井家に仕へ居つ
　た時より、身も存じて居る。所詮身共などが手には
　ト云はうとして氣を替へ
イヤサ、人は知らず、身共は討つ。オヽ、例へ權八、鬼
神にもせよ、今に巡り合はゞ、名乘りかけてたつた一討
ち。コリヤ、その時は、われ達が、鬱憤も晴らすであら
う。喜べ〳〵。
傳吉　敵討が濟んだら、直さま歸國。さうさへなつたら、
　立身出世は見え透えた事ぢや。
官藏　それ〳〵、隨分と權八が在所を、嗅ぎ出すやうにし
　ませうわい。さうして、お前方は。
正右　これより上方へ志す積り。官藏、お身にはまだ話す
　事もあれど、何を云うても、爰は往還。これより王子稻
　荷へ參詣して、これへ歸るであらう程に、この邊に待ち
　合して居やれ。
官藏　何かの事は、暮れてから。
正右　これへ參るであらう。
官藏　そんなら、正右衞門さま。
正右　傳吉。參れ。

ト唄になり正右衛門、傳吉を連れ入る。官藏殘り

官藏　先づ、あの和郎に會へば、繼ぎ米は慥かぢや。時に、妾らで待つて居ずばなるまい。

ト編笠を着て

妾らは呑み酒屋があるな。一杯騙りたいものぢやが。

ト云ふうち、代官、家來連れ出て

代官　ソリヤ。

ト聲掛ける。家來、バラ／＼と官藏を取卷く。

家來　動くな。

官藏　ア、コレ狼藉な。何するのぢや。

代官　詮議がある。笠を取れ／＼。

家來　笠を取れ／＼。

官藏　イヤ／＼、ちと樣子があつて、この笠は。

代官　迂論な奴。ソリヤ。

ト家來、十手にて官藏を打ち据ゑ、笠を脫がす。

家來　こりや違うた。

代官　うぬが面は、なんぢや。

官藏　サア、笠を取られぬは、斯くの仕合せ。面目次第もござりませぬ。

代官　其方に尋ねう。もしこの邊で、三十餘り、色白にて太つたる男、見當りはせぬか。

官藏　そんな者に逢ひませぬが、モシ、それは平井權八と云ふ者ぢやござりませぬか。

代官　よく存じて居るな。

官藏　そんなら、公儀の御探索が嚴しうござりまするな。

代官　日本堤にて、大勢を殺めたその中にも、お上の役人仁木主計どのを殺めたが、お咎めの第一。其方も存じ居らば、見附け次第に知らしたがよい。お上への御奉公ぢや。合點か。

官藏　イヤモウ、有やうは此方も權八が在所を

ト云ひ、氣を替へ

隨分氣を付けるでござりませう。

代官　これより平尾邊を尋ねう。家來、參れ。

ト代官、臆病口へ入る。官藏、後を見て

官藏　ムウ、友之進どのを殺したが、朴が高い樣子。なんでも見附けさへしたら、どちらの道金になるが、マア、一杯呑んで來にやならぬ。

ト笠を提げ、橋がゝりへ入る。唄になる。向うより平井權八、槍持ちにて、後より飛脚居いて來る。

飛脚　オ、イ／＼。早い脚ぢや。連れ立たうと云ふのに。

権八　後から呼ぶやうに思うたれど、何か心が急く。宥せ宥せ。
ト連れになりとむないこなしにて行く。飛脚、向うへ廻り
飛脚　ハテ、同じ道を行くなら、連れ立つて行くわい。
権八　貴様は飛脚ぢやないか。飛脚の足に叶ふものか。
ト不精不承に連れ立ち來る。
飛脚　そんな者ぢやない。飛脚の足ぢやて、逢うた事はないわいの。
ト云ひ〳〵舞臺へ來て
権八　アイタ〳〵。
ト足の痛むこなし。
飛脚　なんとした〳〵。
権八　サア、脚氣が發つたさうな。貴様は先へ行て下され。おらはちと休んで參るワ。
ト鎗を持たせ、足の病むこなしにて、床几へ腰かける。
飛脚　おれも休んで行かうわい。
権八　貴様、急用ぢやないか。
飛脚　いつそ日を暮らして、夜道にする積りぢや。
ト槍持ちの側へ腰かけ

貴様、親方はどうした。
権八　聞いてくりやれサ。後の宿で、おらが酒屋へちよつと入つた間に、親方はツカ〳〵行かれる、おらはそれを知らず、强か入れしめて居た所が、親方は失うてしまうた。高は槍持ちの迷子だわい。
ト、この時木綿屋、荷を擔げ出て。
木綿　イヤ、一服吸ひ付けさしてもらはう。
ト槍持ちの側へ腰かける。槍持ちをヂロ〳〵見るこなし。
飛脚　どうぢや、商ひはあるか。
木綿　時節がらで木綿も賣れぬ。商人より、矢ツ張り屋敷奉公がよいなう、奴どの。
権八　イヤモウ、屋敷も屋敷ぢや。武士でも町家でも、何になつても金ぞ欲しけれぢや。ハ、、、、。
飛脚　なんと、よい男ぢやないか。
木綿　槍持ちにしては惜しい男前ぢや。
権八　じやら〳〵と、何云はるゝぞい。
木綿　貴様、生國はどこぢや。
権八　おらか。
木綿　どこ生れぢや。

権八　おいらに奥州、仙臺ぢやて。
木綿　仙臺はどこらぢや。
権八　サア、仙臺は鬼ヶ島でもなし、オ、それ、大町邊ぢや。
飛脚　仙臺にしては訛りがないたう。
権八　サア、そりやなんでえす。幼少から上方へ出て、上方の水を廿年も吞んで、それから江戸へ出たに依つて、そこで訛りがないぢや。
木綿　どうやら迂散な。
権八　ヤ、
　トこなしあり
木綿　イヤ、迂散な日和になつたわい。
権八　この頃の日和癖でえすわい。
飛脚　木綿どの、今の注文に。
　トいふを、木綿屋、咳拂ひに紛らす
木綿　注文の大手に、木綿の注文を早う渡さうわい。
飛脚　道まで連れ立たうかい。
木綿　サア、貴樣も行かぬか。
　ト権八、思ひ入れあつて
権八　イヤ〳〵、おいらは、ま一服のんで、後から行かうわい。
木綿　後からわせい。サア、飛脚どの。
　ト兩人、目配せして橋がゝりへ足早に入る。後にてこなし。
権八　今の奴らが素振り。爰らへも配符が。
　ト思ひ入れある所へ、傳吉出て、槍持ちを見て、柄に手をかけたり、いろ〳〵思ひ入れある。
友之進をばらしたは格別、足利のお役人主計どのを、
　ト云ひ、あたりを見て
間違ひとは云ひながら、これぱかりは一生の誤まり……なれども、香爐の詮議して、桃井の家を取り立てるまでは、蚤にも喰はされぬ體。その香爐の詮議する目當と云ふは、あの正右衛門。どうぞ彼奴に逢ひたい。
　トこなしあるうち、傳吉、いろ〳〵あつて、フト思案付いた思ひ入れにて、元の道へ入る。権八、空の景色を見て
もう日の暮れる間はあるまい。日の内は往來もならぬ。この邊で、日を暮らして行かう。
　ト槍をかたげ、こなしあつて
忠義とは云ひながら、假にも人を殺したれば、廣い世界

も狹うなる。
トちよつと愁ひのこなしあつて
ア、、愚痴々々。
ト行かうとする。橋がゝりより旅人の仕出し二人出て權八擦れ違ひ、目を付ける。權八、隱れるこなしにて、橋がゝりへ行き、ツイと入る。二人、後を見て、ひそめき
旅一　今のが
旅二　物臭い。
ト兩人、後を慕ひ入る。
傳吉　何吐かす事ぢや。どうでも彼奴、つままれたか知らぬ。
トこなしあつて
なんでも、あの權八め。ムウン。
ト手を拱き、思案して居る所へ、正右衞門出て
正右　家來傳吉。
傳吉　正右衞門さま、最前からの樣子は。
正右　物影より殘らず聞いた。
傳吉　日頃の念願。敵平井權八。
ト云はうとする。

正右　コリヤ。
ト押へ、あたりを見て
傳吉、先の宿で待ち合はう程に、後より參れ。
ト行かうとする。
傳吉　イヤ〳〵、お旦那、現在出ッ會した敵權八。
正右　出ッ會したによつて、身共は先の宿へ參る。
トまた行くを
傳吉　ア、コレ、權八は此あたりに居りますわい。
正右　それが氣がゝりなわい。
傳吉　とんと合點が參りませぬ。目前見附けた平井權八。
正右　出會つたが身共が不運。今にも權八に出會ひ、名乘りかけて勝負するはよけれども、然る時は敵討より、身共が手にある東雲の香爐の詮議が先へ廻つて、此方の破滅の基。さるに依つて、一先づ爰を遁がれ、折を見て騙し討にするより他はない。
傳吉　サア、それも聞えたが、とつと痛し痒しなものでござりまする。
ト困つたこなし。
正右　朝夕佛神を祈るにも、何卒敵權八に出會はぬやう、心を碎く身共が存念。

傳吉　香爐の詮議があればこそ、覘はれる權八が、此方の行くへ尋ねて居る。

正右　覘ふ身共は、遁がれう〳〵とする。

傳吉　勝手の違うてある敵討ち。

正右　ならう事なら、病死でもさせたいものぢやが。

ト傳吉思案して

傳吉　ようござります。お前の逢はれぬ平井權八、私しが討ちませう。

正右　われが權八を。

傳吉　行くか行かぬか知らぬが、爰に殘つて居て、へちまふ所へ、ウカ〳〵來るを合ひ圖、バツサリと云はしてしまひませう

正右　サア、それでは身共が歸國の種が。

傳吉　サア、そこぢやて。權八をばらして、私しが暫らくふけつて影を隱すワ。時にお前は、國へお歸りなされて、敵權八は闇討ちに會うて死ばつたゆゑ、是非なう立歸つたとあらば、高で相手のない敵討ち、それなりに濟みさうなものでござりますぞえ。

正右　ムウ、尤も。首尾ようしおほせたらば。

傳吉　直ぐに駈落ち。

ト正右衛門、懷中より金包みを出して抛る。

傳吉　これは。

正右　路用にせい。

ト暮れ六ツの鐘鳴る。

傳吉　ありや暮れ六ツ。して、其方さまは。

正右　便りを聞くまでは、上方の方へ。

傳吉　追ッつけ吉左右。

正右　コリヤ、目釘はよいか。

ト傳吉、鯉口を濕し

傳吉　お前から拜領の業物。

正右　スツパリと遣ッつけい。

傳吉　マア、ござりませ。

ト唄になる。正右衛門、向うへ入る。合ひ方。傳吉後を見て

世はさま〴〵と云ふが、現在付け覘ふ敵に逢ふまい逢ふまいとさつしやると云ふは、これも新らしいわい。

ト云ふうち、橋がゝりの方よりバタ〳〵にて、幾浦、走り出て、傳吉に行き當る。

幾浦　お免されて下さりませ。

傳吉　行き當るなら行き當ると、斷わつてから行き當つた

がよいわいの。
幾浦　お免されて下さりませ。氣が急きまするに依つて。
ト云ひ／＼顔見合せ
マア、こなさんは。
傳吉　傾城の幾浦。
ト幾浦、逃げようとするを引戻し
こいつ、よい鳥がかゝつたわい。
幾浦　そこ退いて、どうぞ通して下さんせいなア。
傳吉　イヽヤ通さぬ。そしてマア、女子の大膽な一人歩き。
何しに、どこへ行く積りぢや。
幾浦　さればでござんす。寶の行くへを詮議とあつて、殿様が屋敷出やしやんしたに依つて、それでお後を慕うて。
傳吉　ムウ。して貞次郎が行く先は。
幾浦　確かに。
ト云はうとして氣を替へ
慥かにそれと知れぬゆゑ、此やうに尋ねるのぢやわいなア。心も急きますれば、さらばでござんす。
ト行くを引留め
傳吉　雲を摑む貞次郎が行くへを尋ねるより、なんと相談ぢやが、おれにつるむ氣はないか。
幾浦　エヽ。
傳吉　サア、友之進さまが惚れてござつた幾浦、一度も抱いて寢ずに、殺された事なり、定めしわれには迷うて居やしやらう。そこを思うて、友之進さまになり變つて、おれが虐めると、これに上越す追善はないわい。爰へお出で。お出でいなア。
ト手を取り、引寄せる。始終合ひ方。
幾浦　穢らはしい。否ぢや／＼。あれえ／＼。
傳吉　喚いたとて人氣はない。有やうはおれも、たつた今頼まれた大仕事があるけれど、われさへ得心すりや、それはもう止めぢや。
ト懷中より金を出して見せ
見たか。小判ぢや。ナ、この小判を小遣ひにして、われと二人道行きして、上方へ駈落ちして行くワ。なんとよいか。先づこれは小遣ひよと。
ト金を懷中へ入れる。この間に以前の權八、橋がゝりより出て、幾浦を見て恟りし、窺ふ。傳吉、幾浦を捉へ
時に、一生の固め。祝言の替りに、口々をせうかい。

ト抱き付き、口吸はうとする。幾浦、いろ／＼あつて
腕へ噛み付く。
傳吉 アイタ／＼。
ト飛び退く。
幾浦 アタ嫌らしい。面々ぱつかり合點して、アタ舌たるい。何ぢやゝら、道行きをするのなんのと、お前のやうな好かん人と、誰れが道行きをするものぞ。
トぴんと云ふ。
傳吉 此奴が／＼。詞甘う云や付け上がりのした女郎め。否と云や、仕樣があるぞよ。
幾浦 例へ殺されても、否ぢや／＼。
傳吉 オヽ、品によつたら殺してしまふ。
ト幾浦を引寄せる。權八、心遣ひある。
それよりは、抱かれて寢ぬかい。
幾浦 いつまでも、否ぢや／＼。
傳吉 否と云や、仕樣がある。待て／＼。
ト幾浦を井戸の側へ連れ出て
サア、この井戸ぢや。否と云や、づぶ／＼ぢやが。
幾浦 殺すなら、殺せ／＼。
ト權八、柄に手を掛け、ヂリ／＼と側へ寄る。

傳吉 こりやモウ、酷い目を見ねばならぬわい。
ト幾浦を井戸側へ捻ぢ据ゑ、
サア、今が最期ぢや。ア、なんまみだ。
トこの途端に權八、拔討ちに傳吉が首をボンと切る。仕掛けにて、傳吉が體ばかり井戸側へ殘る。幾浦見て
幾浦 ヤ、其方は權八。
權八 ア、コレ。
ト爰にて合ひ方とまる。ト押へ、あたりを見て、傳吉が懐中の金を出し、路銀にと金をやる。幾浦取り
幾浦 そんなら權八。
權八 隨分御無事で、早う／＼。
ト幾浦こなしあつて
幾浦 さうぢや。
ト金を抱へ、向うへ走り入る。權八、遙か伸び上がり、それより右の死骸を井戸へ蹴込み、ホツと息を吐く所へ、木綿屋出て
木綿 うぬ。
ト後よりかゝる。立廻りの所を向うより幡隨長兵衞、着流しにて、小提灯を下げ出る。舞臺まで來る時分、權八木綿屋をボンと切る。この音に長兵衞、フツと提

灯を上げ、顔を見て

長兵　平井権八ぢやないか。

権八　幡随長兵衛どの。

長兵　権八。

権八　長兵衛どの。

長兵　マ、思ひがけもない……この血糊は。

ト権八、抜き身を袖に隠す。長兵衛提灯の灯を消す。

双方、途端にて、

幕

大詰

幡随長兵衛内の場

道行浄瑠璃の場

役名——平井権八。同母親。長兵衛女房、お澤。松葉屋小紫、同、幾浦。上杉貞次郎。比良正右衛門。品川伊平太。虚無僧、角右衛門。幡随長兵衛。

造り物、平舞臺、見附け赤壁、納戸口。上の方、二重舞臺にて折り廻り、橋がゝり境格子。いつもの所に、口、よき所に、疊廿疊程、積み重ねあり、その外荷物、長持、東西に並べ、幕の内よりお澤、世話女房の形にて、荷物の帳を付けて居る。馬方、仲仕、煙草のみ休みゐる。在郷唄にて幕開く。

馬方　お家様、親方は戻らずかいな。

さわ　もそつと先に出でさんしたわいなア。

仲仕　この荷物は、皆晩に出すのであらうな。

さわ　二棹ながら、松倉のお館から、上方へ行く大事の荷物。晩に問屋へ出さねばならぬ。送り状は、後に書いて置かう程に、後に取りにござんせ。

馬方　お家様、親方はまだかいなア。

さわ　オヽ、六蔵どのゝしつこい。此方の人は、まだ暇が無いわいなア。

馬方　そりや鈍な事ぢやな。おりや親方に、ちよつと逢はねばならぬ用がある。

皆々　また無心であらう。

馬方　違ひなしぢや。えらう負けたに依つて、頼まにやならぬ。

仲仕　おれもこの間の仕損しで、度々ぢやけれど、頼まねばならぬ。

仲仕　佛の顔も三度と、誰れも云ひ憎いけれど、いつ云う

ても人を潰さぬ。結構な親方。
馬方　ハテ、そりやその筈ぢやわい。恐らくこのお江戸八百八丁に、幡随長兵衛どのと云はれては、知らぬ者も滅多に無いわい。
仲仕　商賣は、人足廻し、どのお屋敷でも受けはよし。
仲仕　達引はよし。
仲仕　お內儀樣の器量は好し。
馬方　女夫仲は好し。
さわ　ア、コレ、お前方は何ぢややら、主やわたしが棚卸しをさしやんすかいなア。
仲仕　なんのいなア。惡う云ふのぢやなし。
馬方　好しづくしを云ふも、有やうは。
さわ　こちの人への無心は、わたしが好いやうに云うて置から程に、皆と一緒に、後に荷物を取りにござんせえ。
馬方　オッと忝ない。そんなら、お前を頼むぞえ。
仲仕　コリヤ、氣遣ひするな。通り者の內儀ぢやに依つてそこらは切れるわいやい。
馬方　そりや、よう知つて居る。申し、後に必らず。
仲仕　送り狀も一緒に取りに來るぞえ。
さわ　隨分早うござんせえ。

皆々　合點ぢやわいの。
ト　わや／＼云ひ／＼、橋がゝりへ入る。ト納戸より長兵衛母、三方に神酒徳利を載せ出で
母　娘お澤、聟長兵衛どのはどこへぞ。最前から聲を聞きませぬが。
さわ　アイ、主は最前、お屋敷へ奉公人の事で行かしやんしたが、追ッつけ戻らしやんしよぞいな。
母　ほんに、あの人も急がしい身の上ぢやなう。
さわ　イヤ申し、母樣、見ればお神酒を拵らへて、どこへ供へ申すのぢやえ。
母　ハテ、この所の氏神、神田明神樣へ供へて、聟どの息災なやうに、母が心願、其方、世話ながら、神棚へお供へ申してたも。
さわ　アイ／＼。
ト三方を取らうとして、思ひ入れあつて、懷中より守を出し、鼻紙の上に置き、手水鉢にて手を洗ひ、三方を取つて、神棚へ上げる。此うち母親、不思議さうに見て居る。お澤よろしくあつて
母樣、お供へ申しましたわいなア。
ト云ひ／＼、あたりを窺はうとする時

母　コレ、娘、合點のゆかね。その守は常から、片時肌を離さぬ其方が、今お神酒を供へて、わざ〳〵下に置きやつたは。
さわ　イヽエイナア、こりや大事の守ぢやに依つて。
母　そんなら結句、清浄でよささうなものぢやが。あのお神酒を供へるに、守は差合ひかいなう。
さわ　なんのいなア。さうではござんせぬ。この中にはちつと。
母　ちつととは。
さわ　サア、この中にはなア。
母　何ぢやぞいなう。
さわ　サア、この中にはアノ。
　ト云ひ惜さうにして
　アノ、起證が入つてあるさかいぢやわいなア。
母　ヤア〳〵、起證とは怖らしい。誰れがのぢやぞいなう。
さわ　ハテ、主とわたしと取替へた、起證でござんすわいなア。
母　アノ、長兵衞どのとか。
さわ　アイ。

母　でもマア、初心な人ではある。夫婦起證を取交して置いたと云ふは、ホヽヽヽ、あんまり嗜か過ぎた事ぢやなう。
さわ　サア、これもなア、いつぞやの國の騒動より、兄さまの行くへは知れず、それに、ひよつとわたしが去られたら、さぞお前の便りがあるまいと思うて。
母　アヽ、それで夫婦、起證を取交しやつたか。
さわ　アイ。
　ト母はお澤の手を取つて
母　ハテ、其方は孝行な人ぢやなう。
　トちよと泣く。お澤もこなしあり、此うち長兵衞、着付け羽織にて、向うより戻つて來て、内へ入りかゝり、思ひ入れあつて、門口にて様子を聞く。
さわ　これはしたり、母様、そりや何を云はしやんすぞいな。
母　サア、改め云ふには及ばねど、元は播州桃井のお家の歴々、過ぎ行かれし夫が、其方を小さい時から屋敷へ貰ひ、末では權八と一つにせうと思ひ、元服前に云ひ渡したりや、妹の兄のと云うた者が、どう女夫になるゝ者と、劍もほろゝ。憎い奴ぢやと思ふうち、家老比良宗

太夫を、手に掛けて國を出奔。尤も非道な宗太夫なれど、人を殺した科に依つて、屋敷も沒收。程なうお家も沒落。それから少しの知るべを求め、この江戶へ來て暮らすうち、義理ある其方に苦勞させ、病ひ者にしようよりは、いつそ外へ緣付くと、云ひ出した時のわしが悲しさ。その心を思ひやり、其方が濕なしう合點して、爰な長兵衞どのへ嫁入り、緣があつたか、夫婦相睦じう、わしまでも引取つて、樣々の氣扱ひ、現在實身の伜はありながら義理ある其方樣の世話になると云ふやうな、因果な身の上があらうかいなう。

さわ　コレイナア、また其やうな事を云うて、お痞へが上つたらどうしませう。少さい時からお世話になつた私し、矢ツ張り眞實の娘ぢやと思うて下さんせ。わたしや死んでも親子でござんすわいな。

母　オヽ、よく云うて下さつた。其方の志しを思ふ程、行くへの知れぬ權八めが、憎うて〱ならぬわいの。

さわ　ほんに兄樣も、どこにどうして居やしやんすやら。

母　十年この方便りは聞かず、どうで人を殺した身の上ろくな死はしをるまい。宗太夫の兄弟の子供が、付け狙ふとやら。もしどこぞで討たれはせぬかと、それが心に掛つて、慰みに見る本のうち、曾我物語も讀みませぬわいの。

さわ　わたしとても、兄樣が、どうぞ無事で戾らしやんすやうにと、朝夕念じる淺草の觀音樣。

母　今お供へ申したこのお神酒も、有やうは權八が身の上、祈りの爲。親は此やうに思うて居るに、子は惡黨で便りもしをらぬ。併し、ひよつと便りをして、付け狙ふ兄弟に見付けられて、親の敵を討たれうよりはましかいなう。

さわ　サア、さうでござんす。

ト此うち、長兵衞、こなしあつて、咳ばらひして

長兵　女房ども、今戾つたぞや。

ト內へ入る。お澤こなしあつて

さわ　オヽ、よう戾らしやんした。母さんが、待ちかねてでござんした。アレ、主が戾つてゞござんす。

母　オヽ、長兵衞どの、屋敷へと聞いたが、今かいなう。

長兵　さぞお待遠にござりませう。私しもツイ屋敷と云うても方々の事。イヤ、時に拔者人、女房ども、聞きや。今日屋敷での噂であつたが、廿日程前、吉原の日本堤で、

比良友之進と云ふ侍ひが、闇討ちに會うて殺されて居た
といなう。
母　アノ、殺されて居た。
ト寄りかゝつて聞く。
長兵　サア、この友之進が兄に、比良正右衞門と云ふのが
あるげなが、弟の闇討ちに合うたその科目で、追放とや
ら……イヤ、打ち首ぢや。
母澤　エ、、アノ打ち首に。
長兵　オ、、切られた〳〵。比良正右衞門、友之進と云ふ
兄弟どもに、もうこの世には居ぬとの噂。
母　アノ、そりや眞實。
さわ　ほんまの事かいな。
長兵　なんの、おれが嘘を云ふもので。
さわ　母樣。
母　娘。
さわ　思へば
母　これも明神樣のお庇。
さわ　觀音樣の御利生。
エ、、忝ない。
ト喜び拜む。長兵衞も思ひ入れあつて

長兵　なんのおれが、掛け構はぬ事ぢやけれど、兄弟の侍
ひが切られて死んだと聞いたりや、とんと胸が開けたや
うな。
さわ　わたし等も、心が晴れ〳〵して來たわいなア。母さ
ま。
母　それ〳〵、此やうな嬉しい事はござらぬわいなう。
長兵　ア、、胸が開けた加減か、腹がゲッソリ後へ寄つた。
母　ほんに娘、氣の付かぬ。なぜ長兵衞どのに膳を据ゑ
やらぬぞいの。
さわ　サア、拵らへてござんす。母樣も一緒に。
母　そんなら聟どの。
長兵　ドレ、下されませうか。
ト唄になり、母、長兵衞、お澤、納戸へ入る。最前の
馬方、仲仕出て、内へ入り、ウロ〳〵見廻し、奥を見
て、馬方、手で数へ、皆々表へ連れて出て
仲仕　長兵衞めは戻つて居る。
馬方　いよ〳〵今のに違ひは。コリヤ。
トちよつと囁く。
仲仕　そんなら直ぐに。
馬方　來い。

ト橋がゝりへ皆々入る。ト奥より

長兵　イヤ／＼、おりや向うでゆるりと食ふ。ソレ、母者人へ氣を付けて、替へて上げましたがよい。

ト云ひ／＼、膳と飯櫃を持つて出て、下に置き、こなしあつて、表の戸を閉め、積んである疊の側へ行つて、上の疊を一疊除け

さぞひもじうごんせう。

ト膳を疊の眞中と覺しき所へ入れ

ソレ、遠慮なしに參れや。

ト飯櫃を入れ、こなしあつて、疊を元のやうにする所へ、向うより、小紫、着流し、しどけなき形にて、走り出で、花道にて振り返り

小紫　嬉しや、追手の者は見失うたさうな。

ト本舞臺を見て

慥かにあの家が。

トつか／＼と門口へ來て

ちよつと明けて下さんせなア。

ト戸を叩く。内より

長兵　何ぢや。誰れぢや／＼。

ト云ひ／＼戸を明ける。小紫、ツカ／＼と内へ入り、奥へ行かうとするを

コレ待つた。どこへ行くのぢや。

小紫　幡隨長兵衞さまの所は、爰ぢやござんせぬかいなア。

長兵　それが何とした。

小紫　それぢやに依つて。

トまた行くを、長兵衞止める。小紫、ウロ／＼とそこらを見廻して居る。

長兵　コレ、貴樣は、狂人か。

小紫　エヽ。

長兵　ツイに見た事もない女子ぢやが、人の家へ入るや否、ツカ／＼と奥へ行かうとしたり、あたりをキヨロ／＼見廻して、何の用があつて來た。どこの女子ぢや。

小紫　アイ、わたしや小紫でござんすわいなア。

ト奥へ行かうとするを、長兵衞止めて

長兵　なんぢや。小紫。ムウ。

ト姿を見て

そんなら吉原の

小紫　アイ、松葉屋の小紫でござんす。

長兵　さてはアノ

ト奥の方を見て

ハテ、小紫ぢやの。

小紫　お前が、幡随長兵衛さまぢやな。

長兵　オヽ、サ。

小紫　そんなら、ちよつとわたしを、隠まうて下さんせいなア。

長兵　ヤア。

小紫　サア、云ひ交した殿御の後を慕うて廓を駈落ち。見付けられると闕破り。日頃情深い男氣なと、聞き傳へて居る長兵衛さま、それで隠まはれに來ました。二階へ忍ばうかえ。但し物置か。それよりはマア、押入れの内がよいわいなア。

ト押入れの戸を明ける。此うち長兵衛構はず見て居る。

ヤア、この内でもない。そんなら奥に

ト行かうとするを

長兵　イヤ、コレ、家探しせいでも逢はしてやろ。

小紫　エヽ。

ト立戻り

そんならわたしに。

長兵　サ、間に合してやろ。

小紫　なんと云はしやんす。

長兵　ハテ、駈落ちして來た傾城の小紫、追手の來るは知れて居る。その時おれが間に合してやらうと云ふ事。

小紫　そりや

長兵　ハテ、幡随長兵衛と聞き傳へて來たとあれば、去なされもせまい。

ト小紫こなしあつて

小紫　そりや忝なうござんす。サア、ちよつと人の知らぬ所へ。

長兵　その隠まひ所は、見立てのこの押入れへ。

ト小紫を押入れの内へ突き入れる。

小紫　イヤ、わたしや爰は。

ト出ようとする。

長兵　ハテ、居所に彼れこれ云はずと。

トまた押籠め

ヂツとして居やうてや。

トぴつしやりと戸を閉す。向うより廓の親方、男二三人連れ出て

親方　慥かに、向うの内へ入つたと云うたな。

男　さうでござりまする。

親方　サア、來い〳〵。

ト皆々連れて内へ入る。

サア、出してもらはう。

トやかましう云ふ。

長兵　何ぢや。貴様等は。何をザワ／＼と云ふのぢや。

親方　イヤ、おりや吉原の松葉屋の才兵衛、こつ方の抱への、小紫と云ふ太夫が、廿日程前から駈落ちして居る。それで方々尋ねるうち、最前ちよつとこの門口で見付け、様子を聞けば、この内へ付け込んだ。それで出してもらふのぢや。但し、でんどへ出ようか。無躰で渡すか。サア。どうするのぢや。

男　サア、どうするのぢや／＼。

ト口々にやかましう云ふ。長兵衛、相手にならずに、ニコ／＼と笑うて居る。このうち橋がゝりより正右衛門、羽織野袴にて出て来て、門口に様子を聞いて居る。

長兵　コレ／＼、親方どのとやら、如何に商賣柄ぢやと云うても、其やうに仰山に物を云はんすないの。

親方　イヤ、おれも吉原で、生き物を使ふ親方ぢや。納めたと云うて、手間延ばす松葉屋の才兵衛ぢやないぞ。

長兵　ハテ、恐ろしいお人ぢやの。

親方　エヽ、いま／＼しい。いつそ家探しして連れて去なう。サア、皆來い。

ト皆々奥へ駈け込まうとするを、長兵衛、一人々々首筋持つて引き退ける。

皆々　おい等を、なんとするのぢや。

長兵　アノ見事、おれが内を家探しするか。

親方　オヽ、する。

長兵　幡随長兵衛が内を。

皆々　エヽ。

ト皆々恟りして

親方　そんならお前が。

長兵　幡随長兵衛でごんす。

親方　ハヽヽヽ、これはマア／＼、お前様とも存じませず

皆々　段々の不調法。

親方　お宥しなされて下さりませ。

長兵　宥すも宥さぬもない。親方どの、成る程、小紫は譯があつて、おれが請け出したが、身請けすれば云ひ分ないぢやごんせぬか。

親方　成る程、左様、身請けに四百兩。どうぞその金を只今、お渡しなされて下さりませ。

長兵　イヤ、その金は待つてもらはねばならぬ。

親方　エヽ。
長兵　サア、おれも思ひがけない身請けの金、四百兩も投げ出して、身請けするやうな身の上なら、幡隨長兵衞、今日人足廻しはして居らぬわいの。
親方　成る程、御尤も。左樣ならば百兩なりと、五拾兩なりと、先づ手附けを遣はされませ。
長兵　イヤ、手附けの金も今はない。
親方　それではあなた。
長兵　ハテ、顏が手形ぢや。後から工面してやろ。
親方　イヤ、ふしの付いてある奉公人、これぼつかりは長兵衞さまのお顏でも
長兵　待たれぬか。
親方　いつそ奉公人を受取つて歸ります。
ト皆々立ち上がる。ト正右衞門、ツカ〳〵と內へ入り、一々引退ける。
親方　コリヤ、お侍ひ樣、どうするのぢや。
正右　ソレ、長兵衞どのゝ手附け金五拾兩。
ト投げ出す。親方取つて
親方　これは。
正右　男を磨く長兵衞どの、金子の手支へ、見兼ねて身共が。
長兵　アノ、ついぞお目にかゝらぬ私しに。
正右　それも仔細あつて、マヽヽヽ、苦しうござらぬ。
長兵　ムウ。
ト正右衞門を見て、思ひ入れあり
親方　後金は今夜の夜中に受取りに來ますと、新しう云ふも、長兵衞さまの顏だけ。ソレ、手附け證文渡します。
ト證文渡す。取つて開き見て
長兵　慥かに受取つた。
親方　後金は、いよ〳〵夜中に受取りに來ます。サア、皆來い〳〵。
ト親方、男連れ、橋がゝりへ入る。長兵衞、こなしあつて
長兵　お侍ひ、先づあれへ。
正右　御免下されい。
ト合ひ方。正右衞門、上へ、長兵衞、下に座に付いて
長兵　思ひがけない今の金子。仔細は後でと仰せられましたが。
正右　イヤ、その樣子と云ふは、いま當所で御高名なる、幡隨長兵衞どの。ちよつと折入つて身共が、お頼み申す

一儀があつて

長兵　私しに。

正右　如何にも。

長兵　して、その様子はな。

正右　助太刀いたしてもらひたい。

長兵　エ、。

正右　イヤサ、身共は親弟の敵討ち。

長兵　すりや、あなたは、比良正右衞門さまでございまするか。

正右　成る程、お聞き傳へ居れば、名乗るに及ばぬ儀。十ケ年以前に、國元にて親を討たれ、又もや當所に於て弟を、廿日以前に殺され、重ね〲無念止む事を得ず、親兄弟の恨みを晴らさんと思へども、何を云うても彼の敵。

長兵　平井權八の行くへが知れませぬか。

正右　イヤモ、草を分つて尋ぬれど、今に廻り合はぬは、身共が不運、よく〲侍ひ冥利に盡き果てたと存じ、それで町人の貴殿に、助太刀をお願ひ申す。例へ身共が居合さずとも、敵權八にお逢ひ下さらば、苦しうない、いつでも名代に本望を遂げて下さるまいか、長兵衞どの。

長兵　生れ付いたる氣象にて、例へ善でも惡でも人様が、賴むとある事、引かぬが幡隨長兵衞。成る程、賴まれませう。

正右　そりや、御承知あつて。

長兵　助太刀は愚か、差向ひでも平井權八を、スツパリと云はして見せませう。

正右　流石は長兵衞どの、忝なし。

長兵　さりながら、あなたのお賴みを聞くからは、私しも改めて、お賴み申さにやならぬ仔細が。

正右　イヤモ、そりや何なりと。

長兵　申し受けたい。

正右　そりや何を。

長兵　東雲の香爐を。

正右　ヤア。

長兵　こなた様の所持してござる事は、よう知つて居れば、その香爐が貰ひたい。

正右　アノ、今の手附け金の上にか。

長兵　千兩が二千兩、例へ萬々兩でも、人の命が買はれますか。

正右　ヤ。

長兵　サア、よう思うても御覽じませ。手強き權八、やり

損なうたら此方はピリ〳〵。ナ、すりや、地獄の釜の一足飛び。危ない仕事なれば、マア、目に見えた慾でなければ、滅多に請合はれぬかい。

正右　成る程。

長兵　エ、、

正右　サ、貴様が望みの東雲の香爐を遣はさうが、權八が首と引替へなれば、何時でも。

長兵　面白い。權八を仕止めたら、異變無しに。

正右　ハテ、今の五拾両の手附けは、矢張り手附け。

長兵　兎角、浮世はれそ次第。

正右　男を立てるも

長兵　武士を磨くも

正右　割つて云はねど

長兵　きつい好きの。

正右　長兵衞どの。

長兵　正右衞門さま。

正右　まだとんと下堅めを。

長兵　穢うはございますれど

正右　奥へ參らう。

長兵　御案内仕りませう。

ト唄になり、長兵衞、案内して正右衞門を連れ、障子屋體へ入る。彈き流しの合ひ方にて、納戸口より母、お澤を連れて出で

母　娘、今の樣子を聞きやつたか。

さわ　ハイ、今の侍ひがこちの人に。

母　サア、あの侍ひが比良正右衞門。最前聟どのの話しには、打ち首とやら、折角喜んで居る所へ

さわ　思ひ掛けなう、いま來たは、人の噂かいなア。

母　どうやら合點のゆかぬ、聟どのゝ話し口。マア、其方は奥へ行て、密かに樣子を

さわ　とつくりと聞きませう。

母　必らず油斷せぬやう、正右衞門に隱れて、張り番してたも。

さわ　合點でござんす。

ト障子屋體へ行かうとするを

母　コレ、矢張り勝手から。

ト　お澤心得

さわ　さうぢや。

ト唄になり納戸口へ入る。ト母親殘り、いろ〳〵思案して居る所へ、向うより伊平太出て來て

伊平　誰かに、この邊と聞いたが。

ト門口より

ちと物ゝ尋ねたい。御免下されい。

トづッと入る。母こなしあつて

母　尋ねたいとは、何でござります。

伊平　イヤ、この内は、幡隨長兵衛どのゝ宅でござるか。

母　左樣でござります。

伊平　すりや、長兵衛どのゝ宅とな。

トきつとあたりを見廻す。母も思ひ入れあつて

母　申し、この内は長兵衛宅でござりまするが、お前は

ト伊平太、これにて、心付き

伊平　ハヽヽヽ。イヤ、身共は矢ッ張り、當所のさるお屋敷に、勤め居る者でござるが、ちと長兵衛どのに、お目にかゝつて、お尋ね申したい儀が。して、其方は長兵衛どのゝ

母　ハイ、姑でござります。

伊平　然らばこの家に。

ト云はうとして

迂濶に。

ト又あたりを見て

ムウ。

ト思案する。母も伊平太に目を付ける體にて

母　お侍ひ樣、あなたが聟長兵衛に尋ねたいと仰しやる樣子は。

伊平　連れて歸る。

母　そりや誰れを。

伊平　科人、平井權八を。

母　エヽ。

ト惘りする。

伊平　阿母、この家に、サ、隱まうてあらうがの。

母　そりや、どうした緣で。

伊平　幡隨長兵衛が妻女は、平井權八が妹、姑とあるからは、こなたは權八が眞實の母親か。

母　桃井の家中、平井權左衛門が女房、權八が母でござりまする。

ト居直つて肩衣繕ろひ、こなしあり

伊平　サ、その緣に依つて、この家に隱まひある、平井權八をこれへ出さつしやれ。

母　十ケ年以前、お國に於て、同家中を殺め、國遠したる人非人。我が子とて庇ひませうか。今では音信不通。

伊平　そりや、武士の妻に似合はぬ、卑怯未練な。

母　イヤ、隱まはぬが潔白。また悴が、この家に居ると云ふには、何ぞ證かな。

伊平　證據あらば、尋ねに及ばぬ。直ぐに繩ぶつ。

ト捕り繩出して、キッとさばく。

母　ホヽヽヽ尤も、悴權八は人を殺め、立退きたれば、敵討ちの掟はあれど、繩掛けると云ふ科の次第が

伊平　イヤ、無いとは云はさぬ。廿日以前、吉原に於て、友之進は格別、即ち桃井の御家門、仁木主計さまを手に掛けた。

母　エヽ。アノ悴が。

伊平　如何にも。

母　ハアヽ。

ト思ひ入れ。

伊平　ぢやに依つて繩掛ける。四海の科人、早くこれへ出さつしやれ。

母　イヽヤ、例へこの家に權八が居ればとて、滅多には渡しませぬ。

伊平　すりや、悴を庇うてか。

母　イヤ、全く憎くい悴め、私しも武士の妻、繩にかゝつて、四海の仕置に會ふ事なら、成る程、手渡ししませうが、こなた樣には、悴を助ける心であらうがの。

伊平　ヤ、なんと。

母　それ、その捕り繩の寸法を見るに、死罪の科人縛むる繩にあらず、ツイ有合はせの貫差しの細引。

伊平　ヤ。

母　サ、繩かけるにも、科の輕重に依つて作法あり、五刑もそれ〳〵死罪の分ち、寸法の作法、何尺何寸と、夫の傳授も我が子に躾け。武家に育つた一德で、それその繩に作法の無いのは。

伊平　サア、これは。

母　なんと、悴を助ける心でござんせうがな。

ト伊平太、ギックリとなつて

伊平　ムウ、流石は平井の阿母、……誤まり入りました。

ト伊平太ヂッとなる。長兵衞出て

長兵　母者人、お氣遣ひなされな、權八どのは私しが、見付け次第に手に掛けます。

母　ヤア、聟どの。

伊平　すりや、貴殿が幡隨長兵衞どの。

長兵　お侍ひ、こなた樣は。

伊平　上杉の家來、品川伊平太。
母　聟どの、悴權八を手に掛けるとは。
長兵　ハテ、お前の思し召し、ちよつと聞いたが、なかなか御尤も。人非人の權八どの、緣があつたら猶の事、人手にかゝらうよりは、妹聟の長兵衞がバッサリ、ナ。
伊平　そりや、僞はりぢや。
長兵　なんで。
伊平　緣と義理とに引かされて、この家に隱まひある權八を、見付け次第に殺すとは、矢ッ張り助ける裏表。
長兵　なんと。
　トこなしあり、此うち一間の障子を開き、正右衞門、煙草盆を抑へ、樣子を聞いて居る。母も心意氣あつて
母　ナニ聟どの、長兵衞どの、アノこなたが悴權八を。
長兵　ハテ、お前の今のお詞、親の詞を背かぬが聟の道。
　トちよつと一間を見て、正右衞門が居るゆゑ、わざと
手に掛けます。オヽ、出合つたが最後、大袈裟か、胴切りか、てつぺいより唐竹割りに。
伊平　そりや町人の其方、合點がゆかぬ。
長兵　播隨長兵衞、まんざら無手でもない。
伊平　イヤ、手の内より、心の内が。

長兵　何がなんと。
伊平　サ、權八が身の上、身共を疑はずと、明かしくれい。
長兵　イヽヤ知らぬ。隱まうた覺えは、芥子程もないぞ。
　ト正右衞門へ聞えるやうに、强う云ふ。
母　ヤア、あの内は。
　ト押入れの内、バタ〳〵する。
長兵　ハテ、きつう鼠めが暴れ居る。
　ト伊平太、思ひ入れあつて
伊平　長兵衞、あれでも知られぬか。隱まはぬか。
母　聞えぬ聟どの、なぜこの母にも。
長兵　イヤ、コレ〳〵申し母者人。
伊平　コリヤ、長兵衞、母に准へ、サ、出すまい〳〵と、
古手な事云はさぬぞ。
長兵　そんなら又、新らしう
母　押入れ開いて
長兵　逢ひたくば勝手次第。
母　その詞を待つて居ました。
伊平　何にもせよ、權八に。
　ト押入れ開く、小紫出る。
母　ヤア、こりや女中。

小紫　伊平太さま。
伊平　こなたは。
小紫　權八さまに逢ひたさ。
母　思ひ掛けない、この女中は。
長兵　平井權八と深う云ひ交した、吉原の傾城小紫。
母　ヤア。
　ト長兵衞、小紫を引き付け
長兵　此奴を取込んだは、權八を釣り寄せて、始末を付ける大事のおとりぢや。
　ト始終一間へ掛けて云ふ。伊平太、小紫を引き立てる。
伊平　すりや、賴もしさうに見せかけて。
長兵　有やうに尻が危なさ。
伊平　ヤ。
長兵　マヽ、平井權八が幾人人を殺したぞ。
伊平　イヤ、そりや武士の意地、町人と魂ひが違ふ。
母　コレ、人を殺せば天の網と雖も、非道でしたとは又格別、お家お主を大切に、正直忠義にした事は、天道樣がよう御存じ。そんなら天の網も免れいで何としませうぞ。
長兵　母者人、そりやお前、きつう御未練におなりなされましたぞえ。
母　ヤア。
伊平　最前のお詞とは、打つて變つたお心。
母　燒野の雉子、夜の鶴。
　トぢつと泣く。
小紫　蘆の片羽の片思ひ、女子心は阿曾沼の、眞菰隱れの獨り寢ぞ憂き。
伊平　慮外があらばあやまり入る。長兵衞どの、拙者が心の逸るも、權八どのにお目にかゝり、上杉家の寶の有無承はらねば、お家の大事。佐竹さまのお情にて、事は延びれど、寶は今に在所は知らず、この行き先は、權八どのならでは、御存じなしと、此方は忠義、貴殿は緣に引かるゝ男の義理。
母　殺すと云ふも、助けたいばつかり。夜の目も合はぬ悴が身の上。
小紫　ツイ惚れたばかりで、片時忘れぬやうには思ひませぬ。例へこの身はどうなつてもいとひませぬ。どうぞ、ま一度お顏を、コレ、拜みます。
伊平　斯う打寄れば、皆々內輪。
母　十年以來、逢はぬ悴に

小紫　どうぞお前のお情で
伊平　逢へば事の解る一儀。
母　木にも萱にも心を置く。
伊平　現に明かさぬ心底は
母　頼もしい聟どの。
伊平　天晴れ男氣。
小紫　嬉しうござんす。
母　忝ない。
伊平　安堵いたした、さりながら、拙者が願ひ。
母　母が頼み。
小紫　わたしが思ひ。
伊平　一を打つて幡隨どの。
母　何もかも知つて居る聟どの。
小紫　コレ申し。
三人　どうぞ。
　ト取廻して頼む。長兵衛、思ひ入れあつて
長兵　母者人のお心根、伊平太どのゝ忠義、傾城に似合は
　ぬ心底。皆思ひ詰つて、長兵衛が
　ト此うち正右衛門、障子屋體より香爐を見せ、長兵衛
　に辭儀して居る。これにて長兵衛、キツと思ひ入れあ
　つて。
　イヤ知らぬ。
三人　ヤ。
長兵　時節柄ぢや。人を隱まうてよいものか。
三人　そんならどうでも。
長兵　見付け次第に、バッサリ。ナ、權八をしまふまで。
　ト正右衛門へかける。母、小紫、伊平太、こなしあつ
　て
母　コレ、聟どの。
伊平　長兵衛。
長兵　なんぢや。
伊平　これ程誠を明かして頼むのに
母　日頃に似合はぬ。
小紫　エ、胴慾な。
長兵　コレ、長兵衛も男ぢや……これには、イヤサ、内に
　は居ぬ。オ、、人非人の權八は……これからは、この小
　紫を餌に尋ね出して、ナ、サ、氣遣ひはない。
母　氣遣ひないとは。
長兵　ハテ、妹聟のこの長兵衛、權八を殺してしまへば、
　サ、殺してしまへば、祟りの來る氣遣ひはないわいの。

ト正右衛門の方へこなしあり、正右衛門、安堵して、うなづく。伊平太こなしあつて

伊平　江戸で口きく幡随長兵衛、男と思うて詞を盡して尋ねて見るに、その不實では、權八どのを隱まはぬに相違はあるまい。何を云うても義理を辨まへぬ町人根性、これからは、比良正右衛門が在所を探し、人知れず討ち放さば、權八どのゝ狙ひの根を斷ち、實の詮議もこれが近道。

長兵　イヤ、正右衛門どのを殺せば、敵討ちは遁がれても仁木主計どのを手にかけた、四海の科人。

母　子の罪、親にかゝると云へば、仁木さまを手にかけた科人は、この母が代りに四海の科人。

小紫　イヤ、あなたばかりは殺しませぬ。わたしも一緒に。

ト長兵衛、外へ心意氣あつて

長兵　すりや、命を捨てゝも

母　倅が身の上。

小紫　權八さまを

伊平　助ける所存。

長兵　どうも云ふに云はれぬ。

母　ヤ。

伊平　なんと。

正右　エイ。

ト伊平太を目がけて、手裏劍打つ。長兵衛、中にて叩き落し

長兵　ても、危ない事の。

伊平　すりや。

母紫　今のは。

ト皆々一間を見る。正右衛門、障子ピッシヤリ閉す。

伊平　ムウ、

ト行かうとするを、長兵衛、突き廻して、小紫を引き付け

長兵　サ、これでも、權八を隱まうたか。

伊平　ヤ。

ト母、小柄を差上げ

母　コレ、この小柄は。

伊平　ドレ。

ト小紫も一緒に見ようとするを

長兵　老人の刃物三昧。怪我の基ぢや。

ト長兵衛取る。

母紫　そんなら

伊平　この家に。

長兵　ハテ、權八は隱まはぬ。詮議の囮の小紫、二階へ拋り上げ、身動きさゝぬ。

ト また手を取る。伊平太も、思ひ入れあつて

伊平　大方讀めた。幡隨長兵衞。

母　母もどうやら

小紫　案じたよりは

長兵　有無は云はさぬ。マア。

ト 母、伊平太に目配せして、小紫に來い。

ト 唄になる。長兵衞、小紫を連れ、思ひ入れあつて、母、伊平太も一緒に奥へ入る。

ト 暮れ六ツの鐘打ち、向うより、荒井官藏、小幕の形にて、走り出る。内へ逃げ込み、戸をピツシヤリと閉め、片息になつて

官藏　ちよつとの間ぢや、爰貸して下んせ。盜みした者でも何でもごんせぬ。狂犬に追ひかけられたのぢや。ちつとの間ぢや〳〵。

ト こんなぼやき云ひ〳〵、あたり見廻し、人がゐぬゆゑ、心の付きたるこなし、ツツと戸を明けて見て、吐息つく。

ア、嬉しや〳〵。誰れも追ひ掛けては來なんださうな。ちいと人がワヤワヤ云ふと、おれが事かと思うて、ピリピリする。誠に足の裏の飯粒を拂ひ落して、笹原藥罐ぢやよなア。

ト 云ひ〳〵、ウロ〳〵見廻すうち、障子屋體より、正右衞門出て、顏見合せ

正右　荒井官藏。

官藏　正右衞門さま、爰はどこでござりまする。

正右　そちやこれへ、何しに來た。

官藏　さのみ用はなけれども、逃げ込みましたが、誰れが所でござりまする。

正右　幡隨長兵衞が宅サ。

官藏　そんなら聞き傳へて居る。長兵衞が所な。

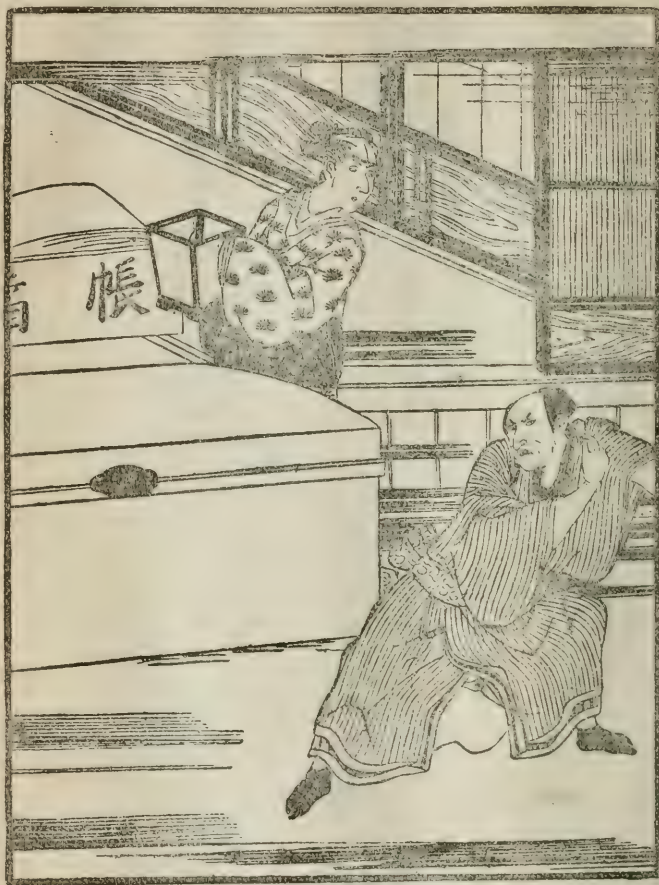
正右　官藏、して、板橋で頼んだ一件は。

官藏　今に於て、よう巡り逢ひませぬ。ちつと心當りがござりますれど、何を云うても、この薄着では、まさか出逢つた時に、脛が立ちませぬ。幸ひな所でお目にかゝつた。正右衞門さま。

正右　ムウ。

ト懷中より金一兩出し
ソレ、官藏。
官藏　これは。
正右　當座の合力。まだその上は、如何程たりと、其方が働らき次第。
官藏　どうでも正右衞門さま。時に、私しが働き次第とは。
正右　イヤ、その儀は。
トあたりを見廻し
ムウ、お祝ひのこの荷物、この中に、其方忍び居て、折を見合せ、コリヤ。
ト囁く。
官藏　すりや、この家に。
正右　コリヤ、密かに〳〵。
官藏　ムウ、心得ました。あなたのお指圖、わしが働らき。首尾よう行たら。
正右　以前の官藏に、百段の出世。
官藏　こりや忝ない。
正右　して、其方が心覺えは。
官藏　柄糸は切れたれど、グッシャリ突くには、手應へのだんびら。

正右　まだしも侍ひの性根が殘りある。後程、身共が合ひ圖せう。その時グッシャリ。
官藏　諸事は呑み込ました。
正右　早く。
官藏　ハッ。
ト東の方の長持を開き、內へ入る。正右衞門、元の通りにちよつと括り、封印閉める。こなしあつて奧へ入る。始終此うち合ひ方にて、よき所にて疊を上げ、下屋より權八出て、こなしあつて
權八　この間、思ひがけなう板橋にて、長兵衞どのに行き合ひ、無理やりに伴はれたこの家の內。せめてはこれまで不孝にした、母人のお顏、妹が樣子も餘所ながら。何を云ふも鼯鼠同然。これに付けても、小紫が身の上。賴んで置きたい幾浦さまと。
トいろ〳〵思ひ入れ
間違ひとは云ひながら、思ひがけないは、仁木主計さま。不調法とも、麁相とも、お詫びの種は仕置に會ひ、未來へ參つても、どうも申し譯のない仕儀。
トぢつと泣く。
この上は、長兵衞どのゝ情をもどき、名乘つて出ねば、

根本「戯場言葉草」挿繪

長兵衛内の場

桃井上杉の家はいつまでも。ムウ。
ト思案する。此うちお澤、納戸口より出かけ、權八を見て大きに驚ろき、奥へ行かうとして、ヂツと立戻り樣子窺うて居る。
どう思案して見ても、この家に居ては緣に引かれて、母や、妹、長兵衞どのゝ。
ト奥を見る、この時お澤と顏を見合す。お澤は襟を繕うたり、髱を直したりして、いろ〳〵思ひ入れあつて、最前の神棚の三方を下ろし、お神酒の土器にて、お神酒ついで呑むこなしよろしく
權八　ヤア、其方は。
さわ　兄樣、權八さま。
權八　妹のお澤。ても、老くるしうなりやつたなう。
さわ　わたしより、お前が元服さしやんしたのと、何か心勞があつたかして、餘程老けて見えるわいなア。
權八　そりやその筈、これまでのおれが……イヤ、おれよりは母人や、其方や長兵衞どのゝいかい世話。妹、忝ない。
さわ　なんのわたしが爲にも、母樣、禮受ける事はござんせぬ。
權八　イヤ、其方の孝行な事、影ながら聞いて喜んで居る。
さわ　そりや、眞實に喜んで下さんすかいなア。
權八　ハテ、なんの僞り。
ト お澤、こなしあつて、右の三方を權八が側へ持つて行く。
さわ　サア、杯して下さんせ。
權八　ムウ、兄妹久しぶりで逢うたに依つてか。
さわ　イヽエ、わたしと祝言の杯を。
權八　ヤア。
トぎよつとする。
さわ　十年この方、一人の母樣や、わたしが方へ、便り音信はたけれども、名や姿を變へて、吉原へ通ひつめ、聞きや小紫と云ふ傾城と、深う云ひ替した、お前の浮名。わしや羨やましいと思うてゐたわいなア。
ト權八へ寄り添ふを、ひどう突き退けて
權八　見苦しい。こりや、何するのぢや。
さわ　それ〳〵、久しぶりで逢うたわたしには、其やうな怖い顏して、小紫どのには愛らしい顏をさしやんすでござんせうな。
權八　妹、そりやマア、何を云ふのぢや。

さわ　何を云はうぞ。わしや腹が立つわいなア。
權八　そりや何が。
さわ　お前のつれない心が。
權八　ヤ。
さわ　それ、その元服さしやんした殿御振り見て、一倍思ひが増したわいなア。
權八　お澤、最前から其方が云ふを、てんがう偽はりと思うてゐたが、そりや、マア
さわ　眞實でござんす。
權八　たんと。
さわ　矢ッ張りお前に、恥かしながら惚れてゐますわいなア。

　ト取りつくを、胸倉取つて突き飛ばし、こなしあつて

權八　尤も、以前は云ひ號けなれど、兄妹同然に育つた我れ〳〵、夫婦になる事を恥ぢ、母に願うて兄妹分。それより國元にて宗太夫を殺め、立退いたあと母諸とも、この江戸へ來て居る樣子。何もかも詳しう知つて居る。コリヤ、今では幡隨長兵衛どのと云ふ男のある身分ぢやないか。すりや、血を分けた兄妹より、猶堅うせねばならぬぞよ。もし斯う云ふ事が、男を磨く長兵衛どのゝ目にかゝりや、あの人も立たず、權八も立たぬ。それにマア、あらう事か、兄を捕へてみだら千萬な　今は宥す。この後はキッと嗜なまうぞ。

　ト此方へ來る。お澤、引き留めて

さわ　コレイナア、わたしや、間男でも大事ござんせぬわいなア。

　ト權八猶ムッとして、物云はずむごう蹴り倒す。また取り付いて

コレ、拜みます。たつた一度。

　トいろ〳〵よろしくあり、權八堪え兼ね、脇差を拔いて、散々に胸打ちに打ち据ゑる。

こりや、何とさしやんす。
權八　こゝな畜生め。樣子を聞けば、母人の仰せ、嫁入りせい承知と、尻に帆かけて緣に付き、然も長兵衛どのゝ氣に入つて、夫婦合ひも睦まじう、最前もチラリと聞けば、起證とやらまで取交して居るではないか。さう云ふ浮氣から、また權八に乘り替へて見る心ぢやな。エヽ、おのれがやうな徒ら者を、妹と云ふも穢らはしい。長兵衛へ立たぬ。いつそ其方を。

　ト刀を振り上げる。お澤、留めて

さわ　コレ、マア〳〵待つて下さんせ。
権八　イヤ、面倒な。生かしては置かぬ。
ト いろ〳〵立廻りあつたうち、お澤、脱ぎかけの下、白無垢に袈裟かけてゐて
さわ　権八さま。これ見て下さんせ。
権八　その形は。
さわ　わたしや疾から尼になつて居るわいなア。
権八　その又尼で居る者が、今の仕儀と云ひ、夫婦の仲で起證とは。
さわ　その起證は、コレ。
ト 守より出し、権八に突き付ける。
権八　イヤ、面倒な。
ト こなしあるな、お澤、無理やりに突き付けて
さわ　マア〳〵、一くだりなと、讀んで下さんせ。
ト よろしくあり、権八是非なく
権八　一ツ、其方どのと、夫婦の契約いたし申さず。ヤア。
さわ　サ、とつくりと。
ト また無理に突き付ける。
権八　夫婦の契約いたし申さず候ふ、もし色がましき詞も申し候はゞ、日本六十餘州の諸神、諸佛の御罰蒙むり申し候ふ。お澤どの、長兵衞。ヤア、これは。
ト 内より
長兵　オヽ、起證の今一通は爰にあり。
ト 出る。
権八　ヤア、長兵衞どの。
長兵　権八どの、何かは後で。マア、これを見てもらはう。
ト 守より起證を出して渡す。権八取つて
権八　こりや、文言は此方の通り。宛名は長兵衞さま、澤。
長兵　なんと變つた起證であらうがの。
権八　ヤア。
長兵　平井権八どの、こなた、侍ひに知合はぬ、酷い心な人ぢやぞや。
権八　ヤア。
長兵　アレ、あのお澤が、此方へ嫁入りして來た晩に、おのれ何でもと思ひの外、涙を流して云はれるには、権八さまと少さい折から云ひ號け、末ではどうぞ夫婦にと、樂しんだ甲斐もない、祝言する段になつて、嫌はれて兄妹分、揚句の果には、朋輩を殺めて
ト 奥口へ心を付けて
斯う〳〵と云ふ譯で、國元から身分の事、詳しう聞けば

聞く程、貞女と云はうか、賢女と云はうか、ほんに優しい志し。アレ、あの姿も今度の縁付きの相談、身も世もあられぬ悲しさに、今日は死なうか、明日は死なうかと、思ひ定めゐますれど、さうあつては權八さまへの面當になり、また阿母様のお嘆きも思ひやつて、悲しさに女子の身で、とつおいつ樣子を聞けば、幡隨長兵衛さま……嫌な事ぢやが、人に知られたおれぢやによつて、一生尼で暮らす氣の嫁入りと、新枕の夜に、男と見かけて頼む程に、どうぞ色氣なしに隱まうてくれいと、段々の物語り。噂を聞いて居るあの器量、なんでも今宵はと、はずみ切つた所へ右の樣子、聞いて俄にぐんにやりと、首傾ぶけて思案をすれば、得心するも異なものなり、また否と云や、忽ちこれ/\。不便や、何も後生ぢやと、ハテ妹を取つたと思や濟むと、表向きは女房分、內證は坊樣あしらひ。この狹い內に蚊帳さへ二張り、寢所も別々に寢まずぞや。これも人の誠、お澤どのゝ心底があんまり切ないによつて、男同士の相對より、女子に頼まれた義理づくで、この長兵衛は、こなたの女房の、コレ、家守りをして居ますわいの。これもどうぞ、望みが叶へてやりたさ。寄り/\に行くへを尋ねる折柄、この間、フト板橋で出合ひ、幸ひと無理やりに連れて戻つて隱まふは、命を助けて女夫にせう爲。

ト權八を捕へて、いろ/\云ふ。お澤も始終俯向いて居て、チツと顏を上げ、恥かしきこなしにて

さわ　權八さま、堪忍して下さんせ。初めから嫌はれて居るわたし、是非ないと諦めて居るこの姿も、お顏を見て、エヽ、思ひ切れぬは女子の因果。

權八　さうとは知らずお澤が心底、長兵衛どのゝお志し、何にも申さぬ權八めが、兩手を下げるが千萬無量。

ト辭儀する。長兵衛こなしあつて

長兵　イヤ、それには及ばぬ。この上は、お澤どのゝ志しを立てさして、夫婦の結びを。

權八　ハテ、長兵衛どの、權八が身の上、よく御存じなされば詮なき事。

長兵　ハテ、その事も長兵衛が胸にあり、ツイ祝言の杯で、何もかもさつぱりと、三三九度ら云はぬて。おれに任して、幸ひのこの三方、蝶花形の神酒德利、仲人役やら酌人やら、萬に通ふ幡隨長兵衛。これで頼まれた男も立つ。サア/\、お澤どの。

ト三方をお澤が側へ持ち行く。お澤こなしあつて

さわ　ひよんな事をお頼み申して、お前のお心使ひ、權八さまの思惑。

長兵　なんの思惑どころか、遠慮はない。長兵衞が酌で、丁度〳〵。

　トしか〳〵あつて、お澤も思ひ入れあつて、土器を取上げる。長兵衞、注ぐ。此うち母親、納戸より出かけ、始終を立ち聞きして居る。長兵衞、權八が側へ三方を持つて行き

　サア〳〵、權八どの、嫁御の杯ぢや。

權八　仰せに從ひ。

　ト杯を取上げる。長兵衞注ぐ。權八、思ひ入れあつて

　この杯が。

長兵　二世の固めぢや。なんとこれで。

　ト母と顏見合す。

母　エ、。

　ト母、長兵衞を拜む。權八、この時

權八　ヤア、母者人。

　ト母親、暖簾を下ろし、内へ入る。

　ト官藏、長持の蓋を明け、顏見合せ、官藏ちやつと引ツ込む。長兵衞、こなしあつて

長兵　千秋萬歳の千筥の玉を奉る。

　ト思ひ入れある。橋がゝりより、歩き一人走り出て、門口より

歩き　申し〳〵長兵衞さま、何やら用事がござりまする。只今名主方へお出でなされませ。今でござります。早うお出でなされませ。

　ト云ひ捨て走り入る、

權八　あれは。

長兵　コレ。

　ト押へ、お澤を顏にて奥へ入れ、長兵衞、西の方の長持開き、權八を入れる。權八こなしあるを、長兵衞、無理に入れ、シツカリと蓋をする。此うち正右衞門、障子屋體より見て居て、頷き引ツ込む。よき所へ又歩き出て

歩き　これは長兵衞さま、どうでござります。皆待つてゞござります。

長兵　ハテ、いま行く。

歩き　イエ〳〵、連れ立つて歸ります。

　ト手を取る。

長兵　これは忙しない。

ト合ひ方。長兵衛と歩き連れ立つて、橋がゝりへ入る。
トちやん〳〵と夜半の半鐘鳴る。親方、男を連れ、駕籠吊らせて出て
親方　コリヤ、皆の者、道々も云ふ通り、最前の樣子、どうで金は出來ぬ。また長兵衛ぢやの、幡隨ぢやのと、もつれを付けられると邪魔ぢや。小紫を見付けたら、直ぐに引ッ立て去ぬるつもりで、それで駕籠も連れて來た。わいらも必らず油斷すな。
男皆　合點でござります。
親方　コリヤ、隨分靜かに入れ。
ト親方、皆々、ヒソ〳〵と内へ入る、忍んで居ると、奥よりお澤出て
さわ　長兵衛さまの男氣、權八さまと添はさうと、段々の心遣ひ、忝ないとも、嬉しいとも、詞に禮は盡されねど何を云うても權八さまは。
ト思ひ入れあつて
ア、兎角仕せぬ浮世ではある。
トぢつとこなしある。親方、男、窺ひ居て
親方　ソリヤ、小紫ぢや。合點か。
男　コリヤ。してやつたワ。

トばら〳〵とお澤を捕へる。お澤、驚ろき
さわ　コレ、滅相な。お前方は。
親方　こま言云はさぬ。これから廓へ引ッ立て去ぬのぢや。
男皆　サア、來い〳〵。
さわ　エヽ、そんならわたしを。
親方　よう駈落ちひろいだなア。ソレ、大方權八めが惡性根ぢやあらう。
さわ　そんなら。
親方　爰に居るゆゑ連れに來たのぢや。ちやとその駕籠を。
男皆　合點ぢや〳〵。
トお澤を無理に乘せる所へ、長兵衛戻りかゝり、小影へ寄る。
親方　ア、嬉しや、既の事に小紫を棒に振らうとした。
男皆　長兵衛が戻らぬうちに
親方　早う廓へ、小紫を連れて去なう。來い〳〵。
ト駕籠を追ひ立て、お澤を乘せて、皆々向うへ走り入る。長兵衛、向うを眺め、花道にて
長兵　可哀や小紫は又廓へ……わざと見遁がして去なしたは、お澤どのを睦まじう權八どのに
ト思ひ入れあつて

アヽ、女子心の一筋に、何れを何れと分け距てはせねど、廓に育つて捌けた者と、屋敷に生れて愚痴に思ひ詰めて居るお澤、酷いおれぢやと思うてくれな。後で又小紫。

ト思ひ入れ、こなしあつて

アヽ、まゝよ。

ト本舞臺へ戻り、内へ入らうとする。官藏、長持より出て、身拵らへする。長兵衛ヂツと扣へる。官藏出て、權八が長持へかゝり、蓋を明ける。權八、ズツと出て官藏を捕へる。長兵衛、内へ入る。門の戸、ピツシャリ閉す。官藏、權八を振り切り、奥へ逃げうとする。伊平太、納戸より出て突き廻す。

權八　ヤア、伊平太。

長兵　コレ。

官藏　うぬ。

ト權八にかゝる。突き廻して取つて押へ、締め上げ、猿轡はめ、長持へ打ち込み、蓋をする。心意氣あつて三人嘯き合ふ。長兵衛、官藏が今まで居し長持の蓋を明ける。伊平太、領き合つてその長持へ入る。長兵衛、蓋をする。權八、行燈の灯を吹き消す。始終此うち合ひ方。奥より小紫、探り出て

小紫　どう思ひ詰めてもわしが身の上、權八さまに添はれぬ義理詰め。添はれねばいつそ覺悟は、疾から極めてゐれど、どうぞま一度ちよと逢うて、死にたい〳〵、死にたいわいなア。

ト喰ひしばり泣き。長兵衛探り寄つて

長兵　滅多には殺さぬ。コレ、お澤どの。

小紫　エヽ。

ト悄りするを、ソツと捕へる。此うち權八、懷より硯を出し、隱れて認めあると云ふ書置を括り合して、奥の方へ向ひ、母に暇乞ひの思ひ入れ様々あるうち

長兵　コレ、お澤どの、死ないでも大事ない〳〵。望みの通り權八どのと、行く末長うおれが添はしてやる。また傾城の小紫めに、氣兼ねする事も何にもない。ありやほんの賣り物、金次第、權八どのに惚れて居るやうな顔しても、どなたへもあの通り騙すが商賣。譬へにさへ猫の鼻や、四角い玉子と云うてあるに、水臭い根性の惡い傾城の小紫に、權八どのが惚れて居やう筈がない。誠に最前小紫が來居つたれど、親方が引立てに來て、駕籠へ打込み、いんまの先、廓へ連れて去んだわいの。

トこれを聞いて、小紫泣き入るを

ハテ、氣の弱い、何を泣く事がある。よい〳〵、その涙は寢所で、泣き笑ひ顏にしてやろ。

ト探り寄つて、權八を連れて出て、兩人に囁き、無理に手を引かす。權八小紫こなしあり、長兵衞、二階の方へ突きやる。權八、小紫に右の硯と書置を押し込み、二階へ突きやり、小紫を入れ、ソツと下りて、梯子を引き、門口へ探り出て、こなしあつて、向うへツイと走り入る。此うち正右衞門も障子屋體より探り出て、長兵衞に行き當り、聲を潜めて

正右　官藏か。

長兵　ヤ。

正右　官藏々々、權八をしとめたか。

ト長兵衞も聲を潜めて

長兵　まだぢや。

正右　コリヤ、あの長持に居るを、なぜしとめぬ。

ト長兵衞、思ひ入れあつて、正右衞門に囁く。

尤も。

ト正右衞門、脇差を拔いて、長兵衞に渡し、刀拔いて長持の側へ寄つて

よいか、官藏。

長兵　一、二、三、で參らう。

ト聲變へて云ふ。

正右　合點ぢや。

ト一時に長持を突き通し

長兵　權八め、思ひ知つたか。

ト無性に抉る。この物音に母親、手燭を持つて出て

母　ナニ、權八を。

ト手燭を上げ

ヤア、正右衞門。

ト恟りする。

正右　婆めも一緒に。

ト切つてかゝるを長兵衞、突き廻し、脇差ヒラリと見せる。

正右　ヤア、今のは長兵衞、其方であつたか。

長兵　約束の通り、香爐申し請けう。

正右　サア、その香爐は。

ト切りにかゝる。長兵衞立廻り、正右衞門、長持の端へ追ひ詰められ

コリヤ官藏、大切な香爐ぢや。

伊平　合點ぢや。

根本「戯場言葉草」挿繪

「道行吾妻からげ」の場

ト取る。
正右　ヤア、伊平太。
伊平　コレ、長兵衛どの。
ト渡す。
長兵　段々御苦勞。
ト取るうち
正右　さてはコレ。
ト長持を明けて見て
ヤア、こりやどうぢや。
トぎよつとする。此うち小紫、二階より前へ下りて來
て、表より
小紫　コレ申し、權八さまは、この書置と硯を殘して、ど
こへやら。
ト二通を伊平太に渡す。
皆々　ヤア。
ト驚ろく。
小紫　わたしは後を。
ト向うへ走り入る。
正右　せめては、この硯を。
ト取つて駈け出す。

ト伊平太、それをト立廻り。正右衛門駈けて入る。
長兵　コレ、早う追ひかけて。
正右　合點ぢや。
ト追ひかけ入る。
母　どうぞ伜を。
長兵　それ。
ト行かうとする所へ、代官捕り手大勢連れ出て
代官　ソリヤ。
ト駈け出す。捕り手、バラ／＼と込み入り、長兵衛を
取卷く。
長兵　これは。
捕手　御上意。
ト十手、振り上げる。
長兵　なんと。
ト見得にて、よろしく。　　ひやうし幕
造り物、向う一面の富士の景、並木松、稻村。幕の
内より代官、虛無僧の腕を取り、引摺えて居る。家
來、十手振り上げ居る。バタ／＼にて幕開く

代官　細言云はずと天蓋を取れ。

虚無　ア、、申し〳〵私しは旅稼ぎの虚無僧、なんぼう見苦しい形でも、虚無僧の天蓋取るには、法式がござりますぞ。

代官　何を慮外者め。人を殺めた盗賊の詮議、面體を改めい。

捕手　ハア、。

ト皆々寄つて虚無僧を十手にて叩く。代官、この間に笠を取る。額に痣拵らへある。

代官　こりや、似ても似つかぬ似せ物。

ト虚無僧を突き飛ばし

思はぬ猶豫。者ども續け。

ト、家來を連れ向うへ入る。

虚無　なんの事ぢや。

ト思案して

ムウ。すりや、いよ〳〵平井權八めが姿を變へて、この邊を徘徊するに違ひない。彼奴さへ殺してしまや、この角右衛門が歸參の種。何にもせよ、さうぢや。

ト笠を提げ、橋がゝりへ走り入る。

黒幕切つて落す。

向う松原。うしろ浪幕。上座に道行の太夫並び居る。

道行の口上とめると、權八小紫出る。

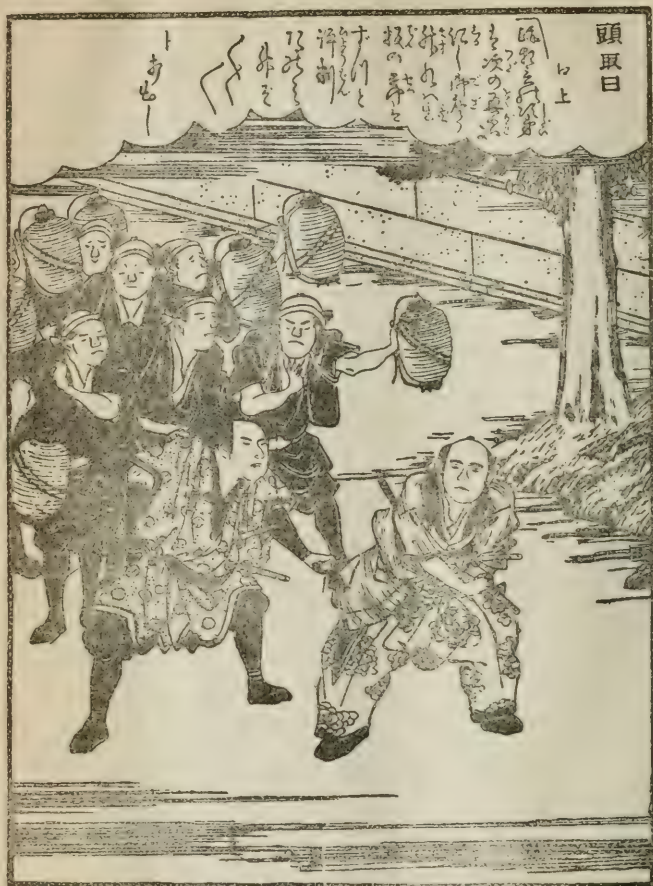
〽江戸紫や濃紫、色香うつろふ花染めの、憂き身の末の睦事も、仇に吹き行く夜嵐や、それは後に探り端の、戀ゆゑ身をば捨小舟、いづくを指して待つぞとも、知らぬ暗路の迷ひ道、都の空へをちこちの、東からげに權八が、包むとすれど人目せく、見やる二人が目の内に、戀の渡りを舟橋の、森はいづくぞ池上の、水洩らさじと誓ひしも、昨日と告げる鐘の音も、胸にほむらと極めたる、男の覺悟癪の種、死んだらなんの儘よとは、戀の習ひの派手詞、爰にも照らす朝日潟、伊勢路遙かに迷ひ出る、二つ並びし神垣や、お杉お玉が彈く三味線の、音色幽かに埋もれて、年は二八の相の山、姫御前の身で大膽な、江戸三界へ投げ參り、ほんにどちらぞ男なら、憂さが中なる樂しみに、晝は手を引き夜に入らば、枕二つにづる〳〵べつたり〳〵、べつたり〳〵ずる〳〵べつたり。

トお杉お玉出で、よろしく振り

たま　お杉さま。

すぎ　お玉さま。

根本「戯場言葉草」挿繪

大詰捕り物の場

たま　エ、コレ、どちらぞ男なら
すぎ　しやうもやうもあるものを
たま　鮑の貝の片思ひで。
〽あゝ儘ならぬ世の憂さを、餘所へ流して手もゆらに、やてかんゝ島さん紺さん中乘りさん、エ、大坂のさまお影でなア、投げたとさ、投げた顔して行く後へ、上り下りの肩癖を、揉みやわらげて來る夜半の、秋葉で云はゞ三尺の、帶を三種の神器より、家の寶と振りかたげ、身は輕衫の曲按摩。
〽棒振りかたげて急ぎ行く、八重一重、今日九重に名も高き、浪花に流行る派手姿、六角前のふしの子が、急ぐ夜道の濡れ草鞋、濡れにぞ濡れし二人がしよてい、扇鬘してやつちやうまいな。
ト權八小紫を見て
按摩　濡れおやる〳〵……我れは京都の六角前の曲按摩。御用をお頼み申しまするでござりますえ。ハアまだ〳〵へイハア、一つかへして、ハイハア。
〽人絶えすれば、後見送りて權八は、女の心思ひやり、
權八　コレ、小紫、其方と云ひ、長兵衛どのゝ志し、むそくにするではなけれども、所詮逃がれぬこの權八が命。其方は後に長らへて、おれが仕置になつた後、一遍の回向してたも。
小紫　權八さん、そんならどうでも、一人死ぬる心かえ。そりやお前胴慾な。
〽お前忘れて居さんすか、そも逢ひ初めしその時に、すつぱりとして可愛らしい、眞實さうな男氣と、廓の所謂お傾城の、手管もとんと脇にして、此方の主さま女房ども、これをどうしやあゝしやと、心安さの月と日を、指で數へていつしかに、身儘になつて眉とつて、主によう似た嬰兒産んだら、上野の花や淺草の、花見遊山を樂しみと、嬉しがらせて其やうに、死ぬる時にはわし一人、捨てゝ行くとはエ、胴慾な、お澤さまへの義理ならば、死出の旅路で文一つ、冥土の鳥にことづけて、半座を分けてござんする、思ふに如才なま中に、死ぬる今際の退去りは、聞えぬ男と一筋に、縈ふ泪は紫の、菖蒲も分かぬ泪雨、晴れ間を松の木蔭より、窺ひ寄つたる辻右衞門、こりやさせぬわとしがみ付く、心得早速の肩車、又打ちかゝる氷の刃、もぎとるはずみ拔討ちに、ばつと血煙、ア、怖と、心後れの亂れ髮、死骸の帶をくる〳〵と三度飛脚がすた〳〵と、來ると拔くとが一時に、こける

死骸の雨具おつ取り、夫婦が姿忍び寝に、大磯小磯化粧坂、飛脚姿のとりなりは、男なりけり小田原や、箱根峠も遥かなる、夜道畔道足早に、連れて行くへは。

ト文句の通り、虚無僧と飛脚を切り、兩人三重にて向うへ入る。橋がゝりより正右衛門、伊平太切り結び出る。

〽分ちなき、難所山坂嫌ひなく、比良品川が手練の太刀先、打てば開き、開けば早速の刃と刃、火花を散らして。

三重

〽挑みしが、こんづを流して伊平太が、忠義の刃金に正右衛門、受け太刀しどろに見えたる所へ。

捕手　正右衛門さま、これにござりまするか。敵權八を箱根の麓へ誘き出し、同勢を以て取圍み置きましてござります。

ト云ひ捨て走り入る。

正右　すりや、權八を

ト伊平太、正右衛門を突き廻し、行かうとする。立廻り。

〽心ならねば駈け出す、品川やらじと支ゆるを、正右衛門は一筋に、透を狙ひし脾腹の當身、たじろぐ伊平太見向きもやらず駈り行く、後に心は半狂亂、いづくまでもと一散に、後を慕うて。

ト伊平太、凛々しく追ひかけ入る。

返し。

うしろ打抜き宮居の模樣、松明高提灯にて、捕り手大勢、大童の權八を取卷きゐる。始終早太鼓にて立廻りあつて追ひ込む。

ト正右衛門出て

正右　珍らしや平井權八。

權八　比良正右衛門、うぬに逢ひたかつたわやい。

ト立廻りにて正右衛門を取つて押へる所へ、貞次郎、幾浦、小紫、長兵衛、伊平太、みな／＼出る。

一同　ヤア、平井權八

正右　何を小癪な。

ト伊平太を突きのけかゝるを、長兵衛よろしく

長兵　權八は上杉より命乞ひ、この場の勝負は叶はぬ／＼。

伊平　正右衛門、腕廻せ。

ト　かゝるを長兵衛押へ

長兵　赦許は御國の御沙汰、

一同　そんたら權八は。
長兵　命は助かつた。めでたうこの場は、お立ち〳〵。
ト打出し　ひやうし幕

思花街容性（終り）

去りし噂の
青江下坂
十人切子の
大一座は

伊勢音頭戀寢刃

四幕

文化十五年四月都座所演番附

伊勢音頭戀寢刃

序幕

相の山の場
妙見町宿屋の場
二見ヶ浦の場

役名 ━福岡貢。藤浪左膳。今田萬次郎。奴、林平。徳島岩次、實ハ藍玉屋北六。熊本角太郎。横山大藏。桑原丈四郎。黒上主鈴。御師娘、榊。油屋抱へお岸。同、小てる。禿。三よし。仲居千野。同、萬野。

造り物、一面の杉林、眞中に杉の葉にて屋根を造り小屋あり、お杉お玉、三味線を彈いてゐる。參宮の仕出し大勢あり、この中に比丘尼、びんざさら杓ふつて仕出しに附く事あり、すべて勢州相の山の體。大坂はなれての木造りにて幕明ける。

比丘 島サア紺サア中乘りサア、あちらの蝶サア、こちらの坊サア、爰ばかりぢやヤテカアンセ〳〵。

トこの間に仕出し、お杉お玉に錢を投げる事あつて、東西に別れて入る。花道よりお岸、萬野、千野、小照、禿の三よし、衣裳の上に練の浴衣を着て、參宮の形にて出る。

千野 コレ、お岸さん、もそつと靜かに歩かしやんせいなア。

萬野 なんぼ其やうに急がしやんしても、萬さまはちつとやそつとで。

きし また萬野が惡口かいの。この伊勢詣りの趣向も、この伊勢に勤めはしてゐれど、ツイに道中を歩いた事がないによつて、京大坂の參宮さんすお方が羨やましかつたが、歩いて見ると、なほ面白いによつて、つい足が早うなつたのぢやわいなア。

千野 そりや、道理いなア。萬さんの思ひ付きで、參宮をさせ、二見や淺間の遊山とは、なんと面白いぢやないかいの。

小照 お前方は面白いか知らぬが、わたしや、しんどうてならぬわいたア。

三よ　それ〳〵、お岸さん、ちと休んで行かしやんせぬかいなア。

きし　オヽ、さうであらう〳〵、内宮さまの八十末社廻りで、わしも餘ッぽど草臥れた。萬さまを爰で待ち合さうではないか。

すぎ　コレ、女中さん、そこ退いて下さんせ。錢儲けの邪魔になるわいの。

きし　ほんに、これは此方が誤まつた。萬野、お錢あげさんせいなう。

萬野　ツイ遣らうより、この錢投げて樂しまうぢやないかいの。

千野　こりやよからうわいの。サア、子供衆も、投げさんせ〳〵。

ト錢を皆々へ渡す。また木遣りになり、お杉お玉は三味線を彈きゐる。女達、錢を投げてやる。花道より萬次郎、大藏、丈四郎、衣裳の上に、練の浴衣を引ッ張り、駕籠を舁き出る。

萬次　エッサッサ〳〵。

丈四　さゝ豆こ枝豆こ。

萬次　枝豆こ。

大藏　サッサッサ。オッと肩ぢや。

ト息杖をする。後より林平、奴の形にて、柳樽に提げ重と、大小三ながれを三尺手拭にて括り、割りがけにて持つて出る。

林平　オヽイ〳〵。これはしたり若旦那、お遊びなさるゝとて、大概の事をなされませ、大藏さまも丈四郎さまも外聞の惡い。もうよしになされませ。

萬次　なんの、われが知つた事ぢやない。構はずとそれやれ。

丈大　合點ぢや。エッサッサ〳〵。

ト本舞臺へ來る。林平も氣の毒の體にて附いて來る。

萬野　エヽ、萬さまかいな。何をして居なさんすぞいなア。その形は何ぢやぞいなア。

萬次　何ぢやどころか、參宮人に施行駕籠ぢや。サア、皆も爰で休め〳〵。

丈大　オットセイ、ヨンヤサ。

ト駕籠を降ろし、皆々床几へかゝる。

きし　申し萬さま。お前もマア、駕舁きの眞似をせねば、遊ばれぬかいなア。もし怪我でもあつたら、どうせうと思はしやんす。もうよしにして下さんせいなア。

林平　さうでござります。おらが云うてもお聞入れがない
キツと云うて下さりませ。
萬次　サア、おれもどんな事ぢや知らぬけれど、大藏や丈
四郎が云ふには、わが身を參宮人の眞似さして、海道を
歩かすとよう練れるげな。それがきつい樂しみぢや程に
わしも練れるやうに駕籠舁けと云うたゆゑ、それでしん
どいけれど駕籠舁くのぢやわいなう。
きし　エヽ、お前方も大概な。惡洒落を教へたがよいわい
なア。
丈四　オツト腹を立て給ふな。この施行駕籠に數多の女を
乘せて、お岸女郎に比ぶれども、いつかた叶はぬ〳〵。
大藏　これと云ふも、其方の器量を、若旦那へ自慢せう爲
ぢやわいの。
萬次　それはさうと、今の娘は風俗と云ひ、ほつそりとし
た好い器量ぢやないかいなう。
丈大　左樣でござりまする。
萬次　あゝいふ奴を釣らねば役に立たぬ。
きし　その娘御が、お前氣に入つたかえ。
萬次　ムウ、氣に入つた。
きし　オヽ、憎。

ト萬次郎を抓る。
萬次　アイタヽヽヽ。
きし　誰れに逢ひたいえ。
萬次　今の娘に。
きし　まだそんな憎らしい事、云はしやんすかいなア、
ト萬次郎が胸倉を取る。大藏丈四郎、中へ割つて入り
丈四　こりや門中で、痴話喧嘩かいな。
大藏　こりや仲直りに、大道で藥助酒はどうであらうな。
萬次　よからう〳〵。酒を持て〳〵。
林平　ネイ〳〵。
ト件の樽と提げ重を持ち出す。仲居皆々手傳ひて、駕
籠の毛氈を敷き、その上に酒の肴を並べ、皆々によろ
しく住ふ事。
たま　こりや、あんまりぢやがた〳〵。最前から店先を塞
いで、どうするのぢやぞいなア。
丈四　えいワ〳〵、其方達には旦那より、金子を遣はさる
る。暫らくの間爰を貸せサ。ソリヤ、金子を遣はす。
ト林平の持ちし萬次郎の紙入れより、二兩金を取出し
お杉お玉にやる。
たま　ヤア、こりや小判ぢや。ホヽヽヽ、結構な旦那ぢや。

わいなア。
すぎ　アノお若いのが旦那様かえ、てもよい御器量。
たま　あれなら、娘があつたら、ナウお杉。
すぎ　それ〳〵、ずる〳〵べつたり〳〵。
両人　ずる〳〵べつたり〳〵。
ト矢張り右合ひ方にて、お杉、お玉、金を頂いて下手へ入る。
丈四　さて〳〵喧ましい奴らぢや。併し、今のを若旦那、お聞きなされたか。女の方からずるずるべつたりとは、秀句をやり居つたぢやござりませぬか。
大蔵　これお肴に、雲助様ぢや。
トこの時駕籠の内にて
榊　申し、どうぞ駕籠やつて下さりませぬかいなア。
ト振り袖、御前の娘の拵らへにて、駕籠の垂を上げる。
萬次　ほんに、とんと忘れてゐた。酒の相手にする。爰へ呼べ〳〵。
丈四　心得たりと云ふまゝに、駕籠より手を取り誘ひける。
ハ、ア、ヨイホウ。
ト丈四郎駕籠より榊が手を取り、萬次郎が側へ突きやる。
榊　わたしや耻かしい。堪忍して下さんせ。
ト逃げようとするを、萬次郎捕へて
萬次　オツト逃がしてよいものか。
きし　萬さま、そんなに今夜ほしやんした娘御は、此お方かえ。
榊　わたしが否と云ふ者を、無理に乗せてから。もう去なして下さんせ。
きし　コレ、性悪の悪性男、わたしが見る前で、見事その杯を、あの娘御にさして見やしやんすか。
萬次　オヽ、さす〳〵。斯う呑みかゝつたからは、さしてさして、さしぬくのぢや。サア娘、一つ呑んでくれ。男が立たぬ〳〵。
榊　わたしや否でござんすわいなア。
きし　イヤ、さゝす事はならぬ〳〵。
萬次　イヽヤ、さすのぢや。
榊　わたしや否ぢやわいなア。
きし　たらぬわいなア〳〵。
萬次　イヤ、呑まさにや置かぬ。
榊　堪忍して下さんせいなア。

ト榊、逃ぐるを萬次郎追はへる。お岸、萬次郎を追ふ
これについて皆々廻り、この一件ゴチャ〳〵になる。
林平、氣の毒なるこなし、橋がゝりより左膳、羽織袴、
吹きそらしの陣笠大小にて、仲間二人を連れ出る。榊
は左膳の蔭へ隠れる。

萬次　なんでも、この杯を呑まさにやア置かぬのぢや。
ト杯を持ち・左膳を見て悄り。
ヤア、あなたは。南無三。
ト逃げようとする。

左膳　コリヤ〳〵萬次郎、待て〳〵。見れば往來にて女を
捕へ、刀を帶せず、この有様は何事ぢや。
ト上手へ通る。大藏丈四郎、慌しく酒肴を片寄せ、林
平は女どもを圍ひ、件の大小を三人に渡す。

萬次　これは思ひも依りませぬ所で、お目にかゝりまして
ござりまする。あなた樣には輕々しく、いづれへお出で
ござりまするな。

左膳　當時鎌倉の執權職は、古今に秀し博學多才、昔の北
條時頼にも劣らぬ賢人ゆゑ、自身に諸國を巡檢あるとの
知らせ、それゆゑ我が支配内の地頭代官の者ども、邪曲
の計らひあつては、國の名折れゆゑ、身共が密かの見廻
り。其方は誰れあらうぞ、阿波の家老、今田九郎右衛門
が悴の身を以て、その身持は何事ぢや。して、青井下坂
の刀、手に入つたか、どうぢや〳〵。

萬次　サア、その刀の儀は。

大藏　アイヤ、恐れながら、その刀の儀は、所々方々と尋
ねましたれども、相知れませぬところ、大神宮樣へ祈
誓をかけし德により、やう〳〵この頃手に入りました、
其お禮詣り、それでこの出立ちでござりまする。

左膳　ハテ、それは仰々しい參宮ぢやな。其方が主人阿州
どのより、武將家へ差上ぐる下坂の刀、大切なる役目、
油斷なきやうに致したがよい。ムウ、見れば、それに居
るは孫太夫が娘の榊でないか。何ゆゑにこの所へ。

榊左　ハイ、貢さまが、松坂へお出でなされて、お歸りが
遅いゆゑ。

左膳　ハア、迎ひに來たか。ハヽヽ、案じるやうではある
わい。貢は身が用事あつて遣はした。追ツつけ戻るであ
らう。山田の宿屋で相待ち居れ。萬次郎、其方にはとく
と申し聞かす仔細がある。山田の宿屋まで罷り來やれ。

萬次　御用もござりませうならば・追ツつけ後より參りま
せう。先づお先へお出で下さりませう。

左膳　然らばさうせう。轎寄れ。家來、供せい。
　ト唄になり、上手へ轎を連れ、左膳入る。
萬次　ヤレ／＼、恐ろしや／＼。きつい所で小見どのに出會うた事ぢや。
きし　萬さん、今のお方は、お前の何ぢやえ。
萬次　ありや神領一萬石を支配する、藤浪左膳さまといふ御仁ぢやわいなう。
林平　それ御覽なされ。手前がおやめなされといふ時に、おやめなさると、藤浪さまに見付かる事もござりませぬ。今のやうに御意なされたれば、早うお出でなされずばなりますまい。
萬次　ほんにさうぢや。大藏丈四郎、われら達は、女子どもを連れて先へ行きや。わしは後から行く程に、早う行け／＼。
丈四　成る程、藤浪さまは氣嫌が惡い。然らば古市へ先へ參りませう。
きし　そんなら萬さま、早う來て下さんせえ。
萬野　待つて居りますぞえ。
萬次　合點ぢや／＼。早う失ね／＼。
大藏　サア、皆來やれ／＼。
　トわや／＼云うて、お岸、萬野、千野、小照、おまし、大藏、丈四郎、下手へ入る。
林平　イヤ申し若旦那、して下坂の刀は、どう遊ばしましたのぢやなア。
萬次　サア、その刀は買ひ取つたけれど、茶屋の入用金に詰つたゆゑ、山田の町人、闕腋の金兵衞とやらいふ者に質物に入れたが、その者は出奔して行くへが知れぬゆゑそれで此やうに去なずにゐるのぢやわいなう。
林平　滅相もない。左膳さまが刀の事お尋ねなされたら、何とせうと思し召すた。
萬次　サア、わしもそれが氣にかゝる。併し折紙はわしが持つてゐる。どうぞ刀を取戻す思案してたもいなう。
林平　こりや、とくと思案せねばなりませぬわい。
　ト矢鉦り木遣り唄になり、上手より黑上主鈴、撫付け鬘上下、大小、御師の形にて、下坂の刀を持ち出で、萬次郎、林平の前を通り、花道へ行きかける。橋がゝりより岩次、着流し大小の拵らへにて出で來り、兩人とも下手にて
主鈴　アイヤ／＼、卒爾ながら其許は、山田の佐野屋善兵衞方に、止宿なさるゝ御浪人ではござりませぬか。

岩次　如何にも左樣でござる。ムウ、して其許は、どなたでござるな。

主鈴　拙者事は、御長官の支配下、黑上主鈴と申す、御師でござるが、貴殿にはこの度名作の刀をお求めなさるゝとあつて、手前所持の下坂の刀を、半金五十枚に所望いたさせくれよと、作野屋善兵衞より段々の賴みゆゑ、只今持參仕る所でござる。

岩次　それは幸ひ。して、青井下坂の刀は、所持いたしてござるか。

主鈴　如何にもこれに所持して居りまする。

ト、此せりふを萬次郎林平聞いて、あの刀を取返してくれといふこなしよろしく

岩次　然らば宿許へ同道いたし、金子と引替へに致さう。

主鈴　左樣仕りませう。サア、お出でなされい。

岩次　御免下され。お先へ參る。

ト主鈴岩次連れ立ち、臆病口へ行かうとする。

林平　アイヤ〱、御兩所ども、ちとお待ち下さりませう。

岩次　手前の事でござるかな。

林平　如何にも左樣でござります。

岩次　お留めなされしは、何ぞ御用でもござるかな。

林平　イヤ、別儀でもござりませぬが、青井下坂の刀をお求めなさるとの儀。その刀は元、手前主人が、遠國より參りて求めました一振り、ちと仔細あつて人手に渡りしが、今その刀を外へやつては、主人の一命にもかゝはりまする。何卒その刀、此方へ所望させては下さるまいか。

岩次　そりやお心安い事。拙者はこの刀に限らず、名作でさへあればよい。御入用なれば隨分御勝手になされい。

林平　ナニ、お聞入れ下さりまするか。先づは大慶。して又、あなたは御得心か。

主鈴　イヤモウ、いづれへ遣はてしも、構ひはござらぬ。

林平　然らばその刀、ちよつと拜見仰せつけては下されぬか。

主鈴　何より心安い事。サヽ、御覽なされい。

ト主鈴、刀を林平に渡す。林平取つて萬次郎に見せる。

林平　お旦那、これ御覽なされませ。

ト萬次郎受取り、改め見て

萬次　こりや下坂の刀ではないわいなう。

林平　すりや、これではござりませぬか。

主鈴　アコレ／＼、貴様御覧せられた。下坂の刀に相違ない證據、折紙が此方にござる。これ見さつしやれ。

ト折紙を出して林平に見せる。林平見て

林平　ハヽヽ、それで化の皮が現はれた。その折紙は此方に所持して居るわい。

主鈴　ハヽヽ、下坂の折紙が、二枚あらうやうはござらぬわい。

萬次　イヤ／＼、その折紙は、身共が爰に持つてゐるが、なんとこれでもあらうがふか。

ト折紙を出して見せる。

岩次　ドレ、見せ下され。

ト双方の折紙を取つて比べて

ムウ、ハテよく似せ居つたな。

林平　して、この下坂は、いつ頃より所持めされたな。

主鈴　三年以前より、手前所持いたして居ります。

林平　ムウ、それでガラリと底が上がつた。當春當所支配人より詮議して、手に入つたる刀、人手に渡したは後の月、年月が相違いたしたわい。

主鈴　すりや、當所の支配人は知つてござるか。

林平　知れた事だ。

主鈴　南無三、しまうた。

ト逃げようとする主鈴を、岩次引ッ捕へ

岩次　うぬ、憎い奴。おのれ、騙りに相違ない。すんでの事に五十枚騙らうとひろいだ、大盗人め、うぬがやうな奴は、カゥ／＼。

ト岩次この間に折紙を摺り替へ、萬次郎の出せし本統の折紙を懐中する。刀にて主鈴を背打ちに打ち据ゑる事よろしく

主鈴　アイタヽヽ、ハイ／＼、お赦しなされて下さりませ／＼。ハイ／＼、フトした出来心でござります。あなたが佐野屋にござつて、刀をお求めなさるゝと聞いたゆゑの思ひ付き。これといふのも一人の母者人が大病、人參代に詰つたからの騙り事。どうぞ御料簡なされて下さりませ。

岩次　まだ／＼野太い奴の、うぬ、眞ッ二つに。

ト切らうとするを、萬次郎、割つて入り

萬次　マア／＼、お待ちなされませ。憎い奴とは申しながら、親孝行とあれば、命は助けておやりなされませ。

主鈴　ハイ／＼、命ばかりは、お助けなされて下さりま

せ。
岩次　うぬ、助け憎い奴なれども、お侍ひの御挨拶に免じ赦してくれる。さて、貴公のお庇で、すんでの事に騙らるゝ所を遁がれまして。サア、この折紙は二枚ともに、貴殿へお渡し申す。サ、しつかりとお受取り下されい。
ト折紙を林平に渡す。この時臆病口より家來一人出で來り
家來　ハツ、萬次郎さま、これにござりまするか。主人左膳お待ち兼ねゆゑ、お迎ひに參りましてござりまする。
萬次　成る程、それへ參らう。イヤナニ御浪人、あの者の事は幾重にもお赦されて下されい。
林平　ハテ、彼奴の事はお構ひなされず、早うお出でなされませ。
萬次　左樣ならば御浪人、重ねてお目にかゝりませう。林平、來やれ。
ト唄になり、萬次郎林平、家來を連れ臆病口へ入る。
北六　サア、うぬにはまだ詮議がある。
主鈴　ア、、お免されませ〳〵。
ト主鈴を連れ行かうとする。大藏丈四郎橋がゝりより出で、四人顏を見合せ

大丈　岩次どの。首尾はどうぢや。
岩次　コリヤ。
トあたりへこなし。
大丈　して、貴殿は如何でござるな。
岩次　まんまと折紙は摺り替へて、この通りぢや。
ト懐中より出して見せる。
大丈　うまい〳〵。
岩次　これといふのも、按摩の氣吟、大儀〳〵。
主鈴　もうよろしうござりまするか。
ト衣裳上下を脫ぐ。下に木綿の袷、大小上下を衣裳と一緒に引ツ括り、肩に引ツかける。
岩次　ソレ、骨折り代ぢや。大儀であつた。この場を早く早く〳〵。
ト岩次、紙入れより金を一分出してやる。主鈴取つて
主鈴　こりやお金、エ、、有り難い。こんな用なら何時なりと。
岩次　物數云はずと、早う行け〳〵。
ト主鈴、金を戴き、按摩の笛を吹きながら、橋がゝりへ入る。
先づ一方は片付いた。して、いよ〳〵刀の持ち主の行く

へは知れぬか。

大藏　されば、胴脈の金兵衛といふ奴に、預け置いたが、此奴かいくれ行くへが知れませぬ。

岩次　これとても、遠くは行かう筈はない。金さへやれば取戻される。して、阿波からの便りはなかりしか。

丈四　追ひ〳〵大學さまから、角太郎さまへの書狀が參れば、詳しい樣子は知れまする。

岩次　よし〳〵。まだ話す事もある。何かは宿屋で。コリャ。

ト兩人へ囁く。

大丈　心得ました。

ト兩人呑み込み、思ひ入れあつて、臆病口へ入る。あと本釣り鐘、暮れ六つゴンと打つ。

岩次　何かの手筈も、金儲けの蛭ではない、もう暮れ六ツ。ドリャ、宿屋へ行つて休まうか。

ト在郷唄になり、岩次、キッとこなし、橋がゝりへ入る。返し。

造り物、三間の間、常足の二重、上手附け屋體。見付け暖簾口、上下鼠壁、軒口に講中の目印札掛けあり、すべて山田妙見町宿屋の體。爰に角太郎、ぶッ裂き羽織、野袴、大小、代官の拵らへにて立ちかゝり居る。前の拵らへにて左膳これを留めてゐる見得。下手に百姓大勢ワヤ〳〵云つて、角太郎に詰めかけ居る。

百姓　濟まぬぞ〳〵。

角太　慮外な奴、手は見せぬぞ。それへ直れ、眞ッ二つに。

多作　なんぼお代官でも、云ふ事は云はにやアなりませぬわいの。

角太　ヤア、その頰桁を。

トこの時、左膳支へて

左膳　イヤ、角太郎どの、お待ちなされい。見ますれば百姓どもを相手に、立ち騷いて見苦しい。斯樣な事もあらんかと、自身に見廻る藤浪左膳。コリャ、百姓ども、樣子があらう、身共へ申せ。

多作　さてはあなたが、藤浪さまでござりまするか。さうとは存ぜず無禮の段、眞平御免下さりませう。

左膳　その斷りには及ばぬ。サア、早くその譯を云へ、どうぢや。

皆々　サア〳〵、多作どの、こなた、云はつしやれ〳〵。

多作　ハイ〳〵、私しどもは、御神領一萬石の百姓でござ

りまするが、紀州領と前々から水論がござりまして、この後のお役人の御挨拶で、其まゝに捨て置きましてござりましたが、あの角太郎さまがお捌きで、紀州領へ御贔屓のお捌き。

角太　ヤイ〱、そりや何ほざく。この角太郎が贔屓の沙汰とは、憎い奴の。

左膳　ハテ、云ふ事は云はしたがよい。さうして、どうぢや。

多作　この水論に負けましては、私しども難儀いたしまするゆゑ、お願ひ申し上げましたれば、金子三百兩出せ、あの方へ挨拶してやらうとあるゆゑ、その金を差上げましてござりまする。又もやその上に私しどもの田地に、角太郎さまが棹入れうと仰しやりまするゆゑ、お免されて下さりませと、お詫び申しましたを、慮外者とあつて、庄屋をお咎めでござりまするゆゑのせり合ひ。ハイ〱、どうぞよろしうお願ひ申し上げまする。

左膳　オヽ、聞き届けた。ナニ、角太郎どの、お身は百姓どもより、金子をば何ゆゑあつて取り召された。

角太　イヤアノ、その儀は斯樣でござりまする。此方の領分は長袖の事、相手は大名、禍ひは下からと、主と主との遺恨になつてはと、双方を檢め、あの方の侍ひ分へ賄賂を以て、事を無難に納めうと存じ、その金を百姓どもより取りましたのでござる。

左膳　して、その賄賂を致して、水論には勝つたか。どうぢや〱。

多作　イヤ、矢張り其まゝでござりまする。

角太　サア、そこでござります。鎌倉の執權職、巡檢に恐れ、賄賂を取る者一人もござらぬゆゑ、その金子を百姓どもへ返さうと思うてゐる所でござる。

左膳　して又、神領へ棹を入れるとは、其許が一存か。

角太　サア、それもさう聞けば、間違ひがござる。手前武將のお目鏡を以て、當所の代官を勤むる身が、國中を知らいではと存じ、棹を入れるではない、大樣を心得の爲當つて見ようと存じての事サ。

左膳　こりやさうありさうな事ぢや。この神領は昔より、藤浪が家の支配、例へ武將の御意でも、いざとあつて關白職へ申し上げなば、いづこへ飛沫が行かうも知れぬ。ムウ、ハヽヽヽ。然らば右の金子を、百姓どもへお返しあるか。

角太　ムウ、如何にもキッと返濟仕るて。

左膳　さうなくてな叶はぬ。コリヤ、百姓ども、いま聞く通り、金子は角太郎どのより返すとある。これより棹入れなぞは決してない。安堵して立歸れ。
畔六　エヽ、有り難うござります。コレ、皆の衆、聞かつしやつたか。藤浪さまのお捌きで、金は返して下さるといなう。
多作　その上棹入れる事はないと仰しやる。世界の理屈といふ石子詰めには敵はぬ事ぢや。
角太　エヽ、無駄を云はずと、キリ〳〵うせう。
皆々　理窟に詰まつて、頤立てるのか。
皆々　ヨウ、石子に詰められて様々。
角太　その舌の根を。
皆々　ハイ〳〵〳〵。
ト角太郎キッとなるを、左膳留める。百姓皆々ワヤワヤ云うて橋がゝりへ入る。
左膳　ハテサテ、百姓づれに見苦しい。今の一條も詮議いたさば其方の身の上。所存あつて今日は赦す。以後にキツと嗜みめされ。
角太　イヤハヤ、段々あやまり入りましてござる。
ト角太郎、情氣ることなし。在郷唄になり、向うより貢、着流し大小の拵らへ、宿駕籠に乗り、雲助兩人これを舁き出て來る。
雲助　ハイ、頼みますぞ。ハイ〳〵。
ト舞臺へ來り下手へ立てる。
オツト下ろせ。ハイ親方、急げと仰しやるゆゑ、早追ひにして、一散につけましてござります。
ト駕籠の垂れを上げる。内より貢出る。
貢　オヽ、早かつた〳〵。大儀々々。
ト錢三百文出してやる。
殘りの所は酒手ぢや。持つて行け。
兩人　エヽ、忝うござんす。
ト兩人の駕籠屋、橋がゝりへ入る。
左膳　そちや貢ではないか。
貢　オヽ、藤浪さま、これにござりまするか。
左膳　其方の歸りを相待ち居つたわい。
榊　オヽ、貢さん、戻らしやんしたか。あんまりお前の戻りの遅さに、わたしや迎ひに來てゐたわいなア。
ト榊、奥から出て來る。
貢　それはよう迎ひにおぢやつたなう。
左膳　貢、これへ〳〵。

貢　ハツ。

ト貢、三尺脚袢なぞを取り、よき所へ住ふ。榊これを直したり、茶を汲んで來たり、始終女房のやうな事をしてゐる。

左膳　して、申しつけしお客人に、對面いたしたか。

貢　されば の儀でござります。御意の通り松坂まで參りましたところ、未だお出もなく、それゆゑ津の本陣へ參りしが、早お立ちの所へ即ちあなた樣の御紙面を渡し、御返事を受取りまして立歸りました。即ちお客人は直ぐに、東海道へお越しなされましてござりまする。

左膳　オヽ、さうあらう。

トこの間角太郎目を付けて聞いてゐる。

貢　即ちこれが御返書。

ト左膳に文箱を渡し

まだ外に御口上は。

左膳　ア、コレ、

ト角太郎に目くばせして敎へる。

角太　アイヤ藤浪どの、見れば御內々のお話しもある樣子拙者はお先へ歸り、百姓どもへ金子を返して遣しませう。

ト下へ降りる。

左膳　それよりござらう。身は用事もあれば、後より歸らう。

角太　然らばお先へ。

ト唄になり、貢へ心殘して橋がゝりへ入る。

左膳　コリヤ榊、其方は先へ歸れ。

ト榊、貢に見惚れてゐる。

コリヤ／＼榊々、コリヤ榊々。

ト大きな聲でいふ。

榊　ハイ、御用でござりますかえ。

左膳　貢は用事があれば、後より歸す。其方は先へ歸れ。

ト件の狀を開き讀んでゐる。

貢　ほんに其方は先へ去んでたも。誰れぞちよつと頼みませうぞや。

ト手を鳴らす、奥より男一人出て來る。

男　何ぞ御用でござりまするかな。

貢　大儀ながら、この娘を、福岡孫太夫まで送つて下され。

男　ハイ／＼、畏りました。

榊　イエ／＼大事ござんせぬ。わたしや待つてゐて、お前と一緒に去ぬわいなア。

左膳　ハテ、歸れと云はゞ、先へ歸れ。

　ト　きつといふ、榊氣味惡さうにして

榊　ハイ、そんなら先へ歸ります。貢さま、どつこへも寄らず、早う戻つて下さんせ。

貢　ハテ、どこへ寄るものかいなう。

男　サア、お出でなされませ。

榊　オヽ、せはしない人ではあるわいなう。

　ト　榊、男に連れられて橋がゝりへ入る。

左膳　貢、近う〳〵。して、口上の趣きは。

貢　ハツ、この度伊勢參宮と云ひ立て、鎌倉へ參り直訴いたす思案、もしこの願ひ叶はずば、再び國へは歸らぬ心底、併し萬次郎、殿の御意を受け、青江下坂の刀をその地へ求めに參り、今に歸らず、もし身持ち惰弱もあらば某に成り替り、萬次郎へ勘當なされて、下坂の刀は貴殿御詮議なされよとの、御口上でござります。

左膳　ハヽア天晴れ、流石は阿波の家老、今田九郎右衛門程あつて、義臣と云ひ忠臣と云ひ、ハテ、阿波どのには善い家來を持たれたなア。

貢　藤浪さま、今度の願ひ叶はずば、再び國へ歸らぬとは、氣遣はしい。何ゆゑの儀でござりまするな。

左膳　貢、そちや何ゆゑ、それを尋ぬるぞ。

貢　何をお隱し申しませう、手前親は元、今田九郎右衛門さまの御家來の由、浪々行かれし[illegible]話し、仔細あつて幼少の時、志州の鳥羽へ引廻して人となり、いま福岡孫太夫どのの養子の私し、即ちお家へ御奉公、そのあなたのお妹御は、古主九郎右衛門さまの嫁君、かれこれ重なるお主筋、案じまするも、これゆゑでござりまする。

左膳　ハテ、思ひがけなき其方が身の上。始めて聞いて驚ろき入つた。然らば古主と云ひ、いま某が縁ある、九郎右衛門が家の爲ならば、身が頼む一大事、何によらず勤むるか。

貢　これはお詞とも覺えませぬ。御主人の御意と申し、殊に古主の爲とあるからは、一命に代はる事たりとも。

左膳　しかと左樣か。

貢　御意に及ばず。

左膳　ムウ、その魂ひを見るからは、申し付くるその仔細は、これを見よ。

　ト　貢が持つて來た狀を出し見せる。貢、開き見て恟りのこなし。左膳始終あたりへ氣を付ける。

貢　ムウ、すりや、阿波の伯父大學さまの野心に依つて。

左膳　サア、その如く國を押領せんとの企み、禍ひを除かんと、參宮の體にもてなし、九郎右衞門は鎌倉に下り、伯父大學を押籠め隱居の願ひ。其方が親孫太夫を、鎌倉表へ遣はせしも一家の某、御前體を首尾よく致さんと、内縁ある評定衆へ密事の使ひ。サ、頼みといふは茲の事。右萬次郎は忠臣の家を繼ぐべき身なれども、放埓にして一旦手に入りし下坂の刀を、質物に入れし不所存者、その刀の持ち主相知れず、某匿ひ置いては、家中の思惑、他門の聞え。何卒其方、某になり代り、萬次郎を匿ひ、右の刀を詮議仕出し、歸國させてくれなば、某が志も相立ち、妹に連る萬次郎は古主の片端れ、身共へ忠義、頼みといふのは、この事ぢやわい。

貢　私しをお見立てなされ、一大事を明かして、御主人樣の御身の上。例へこの身はしびしほになりましても、下坂の刀を尋ね出し、萬次郎さまを歸國いたさせませう。お氣遣ひなされまするな。

左膳　先づは安堵。併し、鎌倉表の首尾相知れるまでは、只何事も大學へ聞えては一大事、必らず他言無用。

貢　何しに他言いたしませう。

左膳　この上は汝に逢はす人こそあり、萬次郎、これへ參れ。

　ト奥へこなし。暖簾の内にて

萬次　ハア。

　ト奥より萬次郎、林平付いて出て來る。

左膳　イヤナニ萬次郎、それに居るは福岡貢とて身が家來、其方にも所縁の者、下坂の事もこれなる貢を頼み取返し歸國いたすやうに致せ。

貢　さてはあなたが萬次郎さまでござりまするか。私しはあなたの御親父……マア、斯樣なお話は追つての事。して、その刀は何者に、お預けなされましたな。

萬次　サア、わしは知らぬが、家來の計らひにて、山田の町人に預けたが、その預けた者は出奔して行くへ知れぬゆゑ、折紙ばかり此方にあるわいなう。

貢　して、その折紙は持つてござりますか。

萬次　林平、最前の折紙出してたも。

林平　ネイ。

　ト折紙二枚出して貢に渡す。貢、開き見て

貢　こりや二枚の折紙、どう致したのでござります。

萬次　こなたには分るまい。ドレ〳〵、わしが見分けてやりませう。

ト双方とも、よく〳〵見て悧り。
ヤヽ、こりや二枚の折紙が、眞赤な似せ物。ヤヽヽ。
林平　ナニ、折紙が似せ物とな。ヤヽヽ。
貢　さうしてマア、どういふ事で、折紙が二枚あるのでござりまするぞ。
林平　さればの事でござります。下坂の刀詮議せうと思ふ矢先、黒上主鈴といふ御師が、下坂の刀を浪人者に賣らうと申すをば聞き付け、その刀を此方へ賣つてくれいと望みしところ。
貢　アイヤ、その黒上主鈴と申す御師は、この伊勢中にはござりませぬが、ハヽア、大方それは騙りでござりませう。
萬次　サヽ、その騙りめが折紙を持つてゐたゆゑ、ツイ此方の折紙をば出して見せたれば。
貢　ハヽア、さてはその時の浪人者も同類で、掏り替へられたに違ひはござりませぬ。
林平　そんなら、其奴も騙りの同類。ムウ、さうぢや。
ト　きつとこなし。逸散に花道へ行くを
左膳　コリヤ待て、林平。血相變へていづくへ參る。
林平　騙りを捕へて一詮議。

左膳　ハテ、それほどの企みをする者が、汝が詮議に參らうかと、氣を長々と待つて居らうか。今は急く場合ではない。控へて居らう。
林平　ムウ。
ト齒ぎしみして後へ戻る。
左膳　金銀に眼をかけず、折紙を望むからは、下坂の名刀を望むものゝ仕業に相違ない。その書狀に、先達て大學が家來、徳島岩次といふ奴、當所へ入込みしと九郎右衞門が知らせ。察するところ、手を廻して下坂の刀を奪ひ取り、萬次郎に罪を拵らへ、親九郎右衞門に蟄居させん企みと見えた。
貢　して、その徳島岩次といふ奴を、御存じでござりまするか。
萬次　年の頃は廿八九、中肉にて色白く、眼中鋭く、慥か左の眉の上に、黒子があつたと思つたわいの。
貢　それさへ聞いて置けば、ようござりまする。
左膳　いま聞く通り、大學も當所へは犬を入れ置けば、油斷はならぬ。まだ外に、とくと談ずる仔細もあれば
貢　爰は端近、奧へ參つて
萬次　何かの仔細を

貢　左樣なれば藤浪さま。

左膳　兩人ともに、奧へ來やれ。

ト唄になり、左膳、萬次郎、貢、奧へ入る。林平は殘り

林平　エヽ、口惜しい。おらが付いて居りながら、騙られてはどうも申し譯がない。どうぞ騙りめを詮議したいものぢやなア。

ト手を組み思案してゐる。奧より足音する。これにて林平、思ひ入れあつて小隱れする。奧より大藏丈四郎出で來り

大藏　丈四郎どの。

丈四　大藏どの、最前からの樣子をば

大藏　殘らず聞いた。角太郎さまへこの事申し上げたいものぢやが。

トこの時、下手より角太郎出て來て、兩人を見て

角太　大藏、丈四郎。

兩人　角太郎さま。

大藏　申し合せた通り、たうとう萬次郎は馬鹿者に仕立てました。

丈四　下坂の刀がなければ差詰め勘當、親の九郎右衞門はこれを云ひ立て、蟄居いたさず手筈も上首尾。

角太　して、下坂の一腰は。

大藏　山田の町人、胴脈の金兵衞と申す者に預け置きましたが、出奔して行くへが知れませぬ。

角太　大馬鹿め、身共に渡して置けばよいのに。大學どのと心を合し、江戸表の首尾は身共が取繕ひ、事成就せば九郎右衞門が所領は、身共が拜領する約束。邪魔になるは藤浪め、今宵のうちにぶツ放す。して、その折紙は。

丈四　手を廻して騙り取り、岩次どのが持つて居らるゝ。

角太　それもよし／＼。この一通は大學どのより、岩次どのへの書翰、手渡してくりやれ。

大藏　心得ました。

ト大藏、手紙を受取る。

角太　して、藤浪めは。

丈四　アノ奧の間に。

角太　コリヤ。

ト大藏丈四郎に囁く。この間林平聞いてゐる。

合點が行たか。

大丈　心得ました。

角太　丈四郎、來やれ。

ト角太郎丈四郎、奥へ忍び入る。大藏、思ひ入れ。

大藏 夜明けぬうちに、この狀を。ムウ、さうぢや。

ト行かうとする。この時、林平出て立ち塞がり

林平 大藏待て。その狀おれに見せさつしやい。

大藏 何を、うぬらに見せる狀ではない。そこ退け。

林平 イヽヤ、大學さまより、密事の書狀。

ト取りにかゝる。

大藏 何を小癪な。

ト兩人、狀を取り合ひ立廻り。大藏、下手へ逃げて入る。林平、追ひ驅け入る。奥より萬次郎、左膳、貢、小田原提灯を持ち出で來る。

萬次 左樣なら藤浪さま、何かとよろしくお賴み申しまする。

左膳 いま申し付くる通り、萬次郎が儀、貢、賴んだぞよ。

貢 お氣遣ひなされまするな。二見村には私しが知るべもござりますれば、當分あの方へ預けてお置き申しまして、キッと歸國いたさせまする。サア、夜の明けぬ間に少しも早うお越しなされませ。

ト小田原提灯に火を移し、貢と萬次郎、下へ降りる。

萬次 藤浪さまには、隨分御無事で。

左膳 堅固でゐやれ。

貢 サア、お出でなされませ。

ト唄になり、貢、萬次郎、向うへ入る。バタ／＼になりて、下手より林平、手紙の半分を持ち、逸散に出で來り

林平 藤浪さまには、爰にござりましたか。

左膳 あわたゞしい、何事ぢや。

林平 ハッ、只今大學さまの密書をば、大藏が所持なせしを、此方へ取らうとする、彼方はやるまいと、爭ふはずみに引ちぎれて、まツこの通り。

ト左膳に片割れを渡す。左膳見て思ひ入れ。

左膳 宛名はちぎれてなけれども、詮議の手がゝり、萬次郎にほツついて手渡しせい。

ト林平に渡す。

林平 して、萬次郎さまは。

左膳 貢が供して、二見村へ。

林平 心得ました。

ト行かうとする所へ、丈四郎角太郎出て

丈四 その狀、此方へ。

ト丈四郎林平にかゝる。立廻りあつて

角太　藤浪覺悟。
　ト左膳へ切つてかゝる。左膳、角太郎を刀にて押へ
左膳　少しも早く。
林平　ハツ。
　ト丈四郎を見事に投げ退け、逸散に手紙を持ち、向うへ入る。左膳見送つて
左膳　下郎に似合はぬ。
角太　なにを。
　ト三人立廻つて、キツパリと好き見得にて、この道具上手へ引く。
　造り物、一面の二見ヶ浦の夜の景色、松の吊り枝にて、七五三を張りし二見ヶ岩、磯端の模様、本釣り鐘、浪の音にて納まる。
　ト矢張り、浪の音にて、貢先に小田原提灯を下げ、萬次郎を案内して出て來る。
貢　磯端で道が惡うござります。お氣をお附けなれませ。併し、もう七ツ半でもござりませう。夜の明けぬうち行きたいものぢやな。
　ト兩人捨ぜりふにて本舞臺へ來る。

萬次　ほんに貢、今よう思うて見れば、あの大藏丈四郎めが、下坂の刀を質に入れさし居つたが、それにマア、宵から顏出しもせぬは、合點がゆかぬわいなう。
貢　ハテ、それも私しが詮議いたしまする。お氣遣ひなされまするな。
　トこの時、以前の大藏、手紙の半分を持ち、花道より逸散に走り出で、貢に行き當り、萬次郎と顏見合して
大藏　ヤア、萬次郎か。
萬次　ムウ、大藏ぢやないか。
大藏　こりや堪らぬ。
　ト逸散に臆病口へ入る。
貢　何の事か、とんと狂氣の沙汰ぢや。
萬次　コレ〳〵、今のが大藏といふ、刀を質に置いた者ぢやわいなう。
貢　そんなら今のが。
　ト云ふうち、林平、逸散に出て貢に行き當り、萬次郎と顏見合せ
林平　萬次郎さまか。
萬次　オヽ、林平ぢやないか。
林平　いま茲へ大藏めが參りませなんだか、

萬次　たつた今この道筋へ。

林平　刀の手がゝり、この一通。

　ト萬次郎、手紙を渡し、行きかゝるを

萬次　さうして様子は。

林平　それ云つてゐる間はござらぬ。おのれ大藏。

　ト林平、逸散に臆病口へ入る。

貢　何の事ぢや、これも半狂氣ぢや。

萬次　マア、この狀讀んで見やいなう。

貢　秘札を持つて申し遣はし候ふ、いよ〳〵その地にて下坂の刀手に入り候はゞ、早速御歸國あるべく候ふ。後は破れて、[illegible]はなけれど、詮議の手がゝり、よい物が手に入つた。

　ト此うち丈四郎走り出で、萬次郎を見て

丈四　萬次郎、うぬを。

　ト萬次郎に切つてかゝるを、貢止めて

貢　萬次郎さまに切りかける、うぬには、詮議があるわい。

丈四　何、およこざいな。

　ト振り解き、立廻りのうち、萬次郎、提灯を持ち、うろついてゐる。臆病口より、林平大藏、狀を奪ひ合ひ出て來る。

萬次　林平、最前の狀の片割れは。

林平　その片割れは。

大藏　なにを。

　ト切つてかゝる。貢、丈四郎を投げ退け、大藏が持つてゐる狀を引取りしが、手紙見えぬゆゑ萬次郎へこなし。

貢　萬次郎さま、その提灯を。

　ト萬次郎思ひ入れあつて、提灯を差出す。この時丈四郎、提灯を切り落す。大藏は貢に切りかゝる。いづれもくらがりの見得になる。

萬次郎さま、お危なうございます。

　ト矢張り右鳴り物にて、大藏は狀を取らうとする。林平は大藏丈四郎を捕へようとする。丈四郎、萬次郎を切らうとする。貢は萬次郎に怪我をさすまいとする。この探り合ひ、危ふき立廻りあつて、トゞ貢、大藏丈四郎をしつかり捕へ、林平、萬次郎と探り合ひ

林平　若旦那か。

萬次　林平か、

貢　奴どの、爰は危ない。萬次郎さまにお供して、この

場を早う。

林平　合點ぢや。

ト三重になり、萬次郎の手を引き逸散に向うへ入る大藏丈四郎「ソレ」と行かうとする。貢、兩人をちよつと透かし見て

貢　萬次郎さま、お出になされましたか。ア、嬉しや、それで落ちついた。さてこの狀の宛名が讀みたいものぢやが、もう夜が明けさうなものぢやが。

ト狀を透かし見る。丈四郎大藏起き上がり

大丈　それを。

ト切つてかゝる。立廻りのうち、夜明け烏、所々に鳴く。正面の向うへ、四尺餘りの紅張りの日の出、だんだんに出る。

貢　ありやモウ夜明け。

大丈　なにを。

貢　嬉しや、日の出が。

ト丈四郎を押へ、大藏を捻ぢ上げし見得、狀を開きナニ、宛名は、德島岩次どの、蜂須賀大學より。

ト兩人振りほどき、起き上がるを見事に投げ退ける。又かゝるを見得よく押へ

讀めた。

ト膝を叩くを、チヨンと木を入れる。兩人おこつくを大藏を投げ、丈四郎を捻ぢ上げる見得、鳴り物一セイ浪の音にてよろしくキザミ。　ひやうし幕

二幕目　太々講の場

役名――福岡貢、猿田彥太夫、正直正太夫。胴脈の金兵衞。入方右介。孫太夫妻、榊。神子さゝち。貢伯母、おみね。油屋抱へ、お紺。

造り物、三間の間、三方折り廻し、向う唐紙襖、正面に大神宮の宮あり、小高き段に荒薦を布き、三方に神酒洗米萬度の箱、御祓鈴扇など飾りあり、この四方に竹を立て、これへ七五三を張りあり、上手障子屋體。下手、板塀、切り戸口、出入りある事、この前に木の常夜燈籠、いつもの所門口に福岡孫太夫と記せし木札掛けあり、すべて宇治御師內の體。白丁の禰宜大勢神前の左手に並び、神樂太鼓、小鼓、羯鼓、笛、土拍子、銘々に構へ、神樂の體、右鳴り

物にて幕明く。

ト障子屋體內より太々講頭同人、上下にて、三方に銀包みを載せたるを持ち出る　神子さよち、外に神子一人、孫太夫娘榊、これも振り袖の神子にて練りの白丁千早をかけ、これに禰宜三人附いて出て、神前の左右に竝ぶと、下の横より彥太夫、御師にて、萠黃の狩衣、刺貫折烏帽子、中啓を持ち、正太夫、同じく御師の拵らへ、貢も御師にて出て、舞臺端、見物へ背向き筋違ひに竝ぶ。右三人、神前へ車座になる。始終神樂にて、彥太夫立つて、神前へ向き、拍手を打ち拜み、それより太々講頭の側へ出て

彥太　これは〳〵御執行、おめでたう存じまする。

講頭　どなたも御苦勞にござります。

彥太　主人孫太夫は長官の用事につき、江戶發足の留守中。手前は孫太夫が弟、猿田彥太夫と申す者、留守を預かる名代でござれば、當主同然に御用を仰せ付けられい。

講頭　これは〳〵、久々太々も怠りました上、當年は講中も餘程殖えましたゆゑ、金子六貫の太々、即ち百兩持參いたしました。よろしう願ひまする。

ト三方の金を出す。彥太夫見て

彥太　御奇特に存じまする。然らば太々を始めるでござらう。

ト立つて三方を神前に置き、元の座へ付く。正太夫立つて神前へ叩頭して、洗米をあたりへ撒くと、太々の祝詞になる。

禰宜　オ、、、オ、、、。

ト皆々太々の模樣。さよち、鈴と扇を取り舞ふ。元の座へ付く。又一人立つて同じく鈴を取り、舞ふと、正太夫立つて榊を引ッ毟り、花道へ行く。

榊　アレ、また惡い事をしなさんすかいなア。

正太　やかましう云ふまい。いつぞや〳〵と思うても、あの貢どのが邪魔に出てどうもならぬ。皆太々で夢中になつて居る。この間にちよつと口せう〳〵。

榊　エ、、嫌らしい。否ぢやわいなう。

正太　ハテサテ、斯う見入つたら動かす事ぢやない。ソレ、新內節にも唄はぬか。咲くや此花梅田ばし、思ひに胸は板屋ばし。

ト唄ひながらしなだれかゝる。貢は向うを見て腹立てゐる。舞臺は太々の祝詞を打つてゐるこなし。

榊　アタしつこい。否ぢや〳〵。
　ト振り切り逃げるを引ッ捉へ
正太　ドッコイ〳〵、返事聞かして玉江ばし、抱いて寢た
　れば吉屋ばし。
　トいろ〳〵して榊を花道へ寢かす。
彥太　オ、、、。
禰宜　オ、、、。
　ト皆々祝詞を上げてゐる。貢振り返つて
貢　榊どの〳〵、正太夫どの〳〵。
　ト呼びながら貢、花道へ來り、正太夫を引分ける。
正太　オ、、、。
　ト素知らぬ顏して此方へ退く。
禰宜　オ、、、。
正太　オ、、、。
　ト返事と祝詞とゴッチャになり、正太夫、眞面目に舞
　臺へ來り、太々の中へ入る。
貢　榊どの、こなたも晝中に正太夫を捕まへて、じやら
　くらと、嗜なんだがよい。
　ト云ひ捨て此方へ來る。榊その袖を捉へて
榊　貢さん、正太夫とじやらくらとは、そりや聞えませ
　ぬわいなア。
貢　それを今云ふ事か。マア、放さつしやれ。
榊　イ、エ、云はにやならぬわいなア。鳥羽から養子に
　ござんしたお前、末々はわしと夫婦にすると、父さんの
　云ひつけ。
貢　ハテ、そりや云はいでも知れた事ぢや。
榊　そんなら女夫ぢやぞえ。
貢　オ、女夫ぢや〳〵。
榊　オ、嬉し。
　ト兩人抱き付く。この途端に
禰宜　オ、、、。
　ト祝詞を上げる。正太夫こなしあつて
正太　貢どのはどこへ行かれた。貢どの〳〵。
貢　オ、、、。
　トこちらへ退く。
正太　貢どの〳〵。
　ト呼びながら花道へ行く。
貢　オ、、、。
　ト返事を祝詞の拍子に合せて、舞臺へ戻り、太々の中
　へ來る。榊も附添ひ戻るを、正太夫引留めて

正太　これはしたり、榊さん、お前のつゝをにはだされて、鳩めがぐう／＼、まだ／＼ぐう／＼。

ト無理に抱き付く。

貢　正太夫どの／＼。

ト呼び立てる。榊振り切り、太々へ入る。

正太　オ、、、。

禰宜　オ、、、。

ト返事と祝詞とゴッチャにて、正太夫戻り、榊を捕へんとする。彦太夫隔てゝ

彦太　サテ、蒔き錢／＼。

ト講頭、かつら桶から錢を出し蒔く。禰宜皆々競り合うて錢を拾ふ。神樂しどろに打つて、袂へ錢を入れるをかしみ。正太夫皆々の取つた錢を引ッたくる。皆々これを追ふ。この間に貢は榊を連れ奥へ入る。正太夫皆々摑み合ふ。彦太夫、やかましいと支へる。この間へ捨ぜりふゴッチャに云うて競り合ひながら、この人數殘らず奥へ入る。彦太夫、跡より金包みの三方を持つて

彦太　これはしたり、靜まらぬかいやい／＼。

ト云ひつゝ續いて入ると、直ぐに正太夫、榊を引ッ張り出る。

榊　否ぢや／＼。しつこうしやると、父樣に告げて、聞く事ぢやないぞや。

正太　サア、その告げると云はしやる、親御孫太夫さまはお江戸の留守中。その留守事にこの正直正太夫、惡い事は云はぬ。マア／＼、下に居給へ／＼。

ト無理に坐らせる。

榊　エ、モ、否ぢやといふに。

正太　ハテサテ、惡い合點ぢや。なんぼおれを嫌つても、あの貢どのは、お前を嫌つてゐやるぞえ。

榊　エ、。

正太　それ／＼、貢どのゝ事を云ふと、忽ち顔色が變るぞえ。尤も親御孫太夫さまが、あの貢どのをこの家の養子にして、末々お前に娶すと云うてござる。あの貢どのといふは、元阿波のさぶの息子、落ちぶれて鳥羽の一家へ引取られ、今ではこの家へ養子。なんぼお前が女夫にならうと思うてもナ、古市の油屋に、こつてりとした馴染があるぞえ。

榊　ヤア、そりやマア、ほんかいなア／＼。

正太　ほんの噓のと、貢どのと衒妻の子の仲は、天にあら

ば比翼の鳥餅、地にあらば連理の擂粉木、並大體の仲かいな。

榊　エ、モ、とつとそんな事して、わたしへ濟むかいなア〳〵。

正太　オ、、道理ぢや〳〵。そこがあるによつて、この正直正太夫が思案といふは。

ト正太夫が胸倉を取つて振り廻す。

さよ　正太夫さん〳〵。

トこの時奥にて忙しなく呼び立てる。

正太　オイ〳〵〳〵。コレ、榊さん、おれが思案に乘る氣はないか。

榊　アタ嫌らしい、否ぢやわいなア。

ト奥へ行かうとする。

正太　ドッコイ〳〵、返事聞かぬうちは、やらぬ〳〵。

トいろ〳〵ある所へ、奥より神子さよち出で

さよ　モシ〳〵、正太夫さん〳〵、伯父御樣が呼んでござりまする。サア〳〵、お出でなされませ〳〵。

ト正太夫が手を取る。

正太　エ、、そこどころか、退いてけつかれ。

ト突き飛ばし、榊へかぢりつく。

さよ　でも連れて來いと仰しやるわいなア。

トまた手を取ると、突き飛ばして、右の通り、この模樣幾度もありて、トヾ正太夫、取違へて、さよちを引ッ張る。この間に榊は遁がれて入る。正太夫これと知らず

正太　何ぢやあらうと、斯うなつたら一生懸命、叶へてもらはにやならぬ。善は急げぢや、爰で〳〵。

トさよちに抱き付き、顏を見て恟り。

ヤア、さよちか。

ト突き飛ばす。

さよ　正太夫さん、わたしに叶へてくれとは、そりやお前眞實かえ。

ト寄るを突き飛ばし

正太　ナニ吐かす。そこどころかえ。

ト奥へ走り入る。さよち、起き上がり

さよ　正太夫さん、待たんせいなア〳〵。

ト神樂になり、追ひ駈け入る。向うよりお紺、着流し抱へ帶、丸帽綿子を着けて町風の拵らへ。左介、やつし一本差しにて附き出る。

左介　モシ〳〵、さうお仕立てなされた姿は、古市の色樣

とは見えませぬ。きつしりの町風々々。

こん　さればいなア、貢さまには急に逢はねばならぬに依つて、内の首尾を楽仲居に頼んで、斯うした趣向。

左介　お前は町風、入方のわたしが小者になつて、貢さまへの御奉公。アレ〳〵、あの燈籠が覺えの目印。マアマアござりませ。

ト始終神樂にて本舞臺へ來る。お紺、左介に囁く。これにて、呑み込み門口へ來り

頼みませう〳〵。

ト奥より、貢、着流し小脇差にて出で

貢　誰れぢや。どなたでござりまする。

ト云ひながら戸口へ出る。

左介　さう仰しやるは、貢さまでござりますか。

貢　オ、入方の左介か。マア〳〵、入りや〳〵、

左介　ハイ〳〵、御免なされませ。

ト内へ入る。

申し貢さま、來ましたぞえ〳〵。連れて來ましたぞえ。

貢　連れて來たとは、そりや誰れを連れて來たのぢや。

左介　誰れとはしら〳〵しい。お紺の君を。

こん　貢さん。

ト門口より招く。

貢　ヤア、お紺か。

ト恟りして奥へ憚ろこなし。

こん　貢さん、この間は久しう音信もなし、御家内に御用があらば、せめて文でなというておこしては下さんせぬ。あんまり氣がゝりぢやによつて、斯ういふ形で人目を忍び、逢ひに來ましたわいなア。

貢　サア、おれも行かうと思へど、春先で參宮人は多し、とんと出る首尾がなかつた。シタガ、古市からは餘程の所、ようおぢやつたなう。

左介　申し〳〵、何かの話は、ごゆつくりなされませ。渡すものは渡したら、わたしは先へ歸ります。

貢　左様々々、夜に入つたら、此方から送つて屆ける。コレ、待ちや〳〵。

ト紙入れより金を出して

今日の酒手ぢや。

左介　ヤア、一角仙人御來迎か。

こん　モシ、内の首尾を頼んだぞえ。

左介　そこはぬからぬ、お紺さま、久しぶりで、ゆるりとお話しなされませ。お暇申さうか。

ト橋がゝりへ入る。あと合ひ方になる。

こん　申し、誰れも叱りはせぬかえ。

貢　大事ない〳〵。さう仕立てたところは、とんと町の生女房ぢや。斯う出來たら。

トちやつと思案する事あつて

コレ〳〵斯うぢや。誰れぞが爰へ來て咎めた時は、あれは鳥羽から來た叔母ぢやと云ふ程に、その口を合したがよい。

こん　そんなら、叔母さんになるのかえ。

貢　さうぢや〳〵。時に叔母さんと斯う引ッ付いては居られぬ。マア〳〵、其方へ寄りや。

ト上手へやり、貢盆を持ち行き

これは〳〵、遠い所を叔母さまには、ようお出でなされました。

こん　ハイ〳〵、よう參じました。

ト慇懃に云ふ。貢あたりを見て

貢　それはさうと、この間おこした文に、田舍の客が何のかのと云ふさうなが、その事はどうなつたぞ。

こん　さればいなア、仲居の萬野が世話を燒いて、わたしを口說くと思はしやんせ。

貢　あの萬野めは、大抵の爪ぢやない。さうしてその客といふは、町人か侍ひか。

こん　アイ、侍ひでござんす。國は阿波とやら云うたわいなア。

貢　何といふ。阿波の侍ひぢや。阿波とあれば、もしや。

ト思ひ入れあつて。

さうして、その侍ひの名は何といふ。

こん　慥か岩とやら云うたわいなア。

貢　阿波の侍ひで、名は岩。

トこなしあつて。

脊恰好、年は幾つばかりぢや。

こん　サア、わたしもとつくりとは見ぬけれど、年は四十ばかりでござんせう。肥肉で色の黑い、髭のたんとある憎てらしい侍ひぢやわいな。

貢　ムウ、そんならそれでもない。マ、それはそれにして、その侍ひはまだ逗留してゐるか。

こん　居る段かいなア。わたしが否がる程猶附き纒つて、この頃は身請けして、國へ連れて去ぬるなんのと、無性にいぢるによつて、わたしやモウ、うるさうてなる事ぢやござんせぬ。

嘉永五年四月河原崎座上演　嵐璃寛のおみれ

八世市川團十郎の貢　岩井粂三郎のお紺

七世市川海老藏の金兵衛

貢　なんぢや、身請けするといふか。

こん　大事ござんせぬ。親方のおさきさまが云うての事には、本人の得心せぬうちは、どこへも身請けはさゝぬと云ひ募つてぢやわいなア。

貢　イヤ〳〵、なんぼ親方は粹でも、あの萬野めが口車にかけては、どうならうも知れぬ。

こん　そこもござんすわいなア。

貢　こりや一思案せねばなるまい。

こん　どうしたらよからうぞいなア。

ト思はず側へ寄る。

彦太　貢々

ト呼び〳〵彦太夫出る。兩人驚ろき、ちやつと左右へ分れるこなし。

彦太　貢、そこに居るか。さてマア、太々も滯りなく納まつた。殘物で一獻酌まう。サア〳〵、奧へ來やれ。

貢　それはようござりませう。マア、お先へござりませ。

彦太　ハテサテ、連れ立つて行かうてや。

トこの時お紺を見て

コレ貢、此方は誰れぢや。

こん　ハイ、わしかえ、わしや、アノ。

貢　ア、コレ〳〵、叔母ぢや〳〵。いま云うた通り叔母ぢや程に、必らずともに滅相な事云ふまいぞ。

彦太　エ、さては叔母かいやい。

貢　親仁様へは、かね〴〵お噂申した、鳥羽に居られます叔母貴でござりまする。

彦太　その又叔母貴が、何用あつてござりました。

こん　サア、私しが參りましたは、アノ。

彦太　何用でござつた。

貢　イヤ叔母が見えましたは、アノソレ、鬼の腕を見たいと仰しやつて。

彦太　羅生門が呆れるわい。

こん　斯うぢやわいな。

彦太　どうぢやぞい。

こん　この叔母が來ましたは、今日はお日和もよし、お岩の觀音樣へ參りましたによつて、次手に甥の殿の顏も見たし、養父孫太夫さまにお目にかゝつて、何かの禮も云ひたし、それでわざ〳〵寄つたのでござんすのでおちやり申すわいなう。

彦太　オ、さうか。ようこそ〳〵。シタガ、折惡い、兄孫

貢　太夫は他行、逢はしやれいで殘念々々。
　サア、その親仁樣が留守ぢやによつて、化の皮が現はれぬのぢや。
彦太　シタガ、叔母御にしては、花やかな形ぢやぞや。
貢　イヤ／＼、あのやうに見ゆれども、年は六十七になられます。
彦太　ハテナウ。
貢　一體に年より氣の若い、大派手者でござります。
彦太　さう見えるとも。マア／＼、何かの話もあらうし、幸ひあの小座敷へ連れまして、お枕も上げまして、お腰も揉んで御馳走申したがよいぞや。
貢　でも晝中でござりまする。
彦太　晝とて叔母と話しするに。誰れが何と云ふものぞ。
こん　さうでござんす。サア、ござんせ。
　ト貢が手を取るを、振り放し
貢　これはしたり。そんな嫌らしい叔母御がどこにあるもので。
彦太　ハテマア、叔母御から先へ。
こん　エヽ、辛氣な叔母御ではあるわいなア。
　ト老年のこなしにて一間へ行き、貢を招く。貢いやいやと頭を振る。
彦太　マア、御酒なとあげぬかい。
貢　イエ／＼、叔母貴は下戸でござります。
　トお紺、手を叩いて招く。
彦太　アレ／＼、御用があるさうな。行て來やれ／＼。
貢　ハイ／＼、これは又忙しない。
　ト障子屋體の側へ行く。
　御用でござりまするか。
こん　御用がある。爰へおぢや。
貢　ハイ。
こん　ハテ、おぢやいなう。
　ト貢を引込み、障子を締め、唄になる。彦太夫あと見送りこなし。
彦太　六十七とは見えぬ。まだみづ／＼してゐらるゝ。氣ほひ口にはいけさうな叔母ぢや。ハヽヽヽ。
　ト云ふ所へ、正太夫出て
正太　伯父貴、爰にか。
彦太　正太夫か。
正太　コレ、講頭が油斷を見て、してやつた代々の百兩。
　ト金包みを出す。

彥太　コリヤ。

ト　あたりを見廻し

兄孫太夫どのは、宇治の長官藤浪どのの家來、社中の內で格式ある家柄、おれが爲には舅のわれに、この家の娘を娶はせ、この跡式を遣りたい望み。所へ志州の鳥羽から養子にうせたあの貢、彼奴があつては何かの邪魔、越度を拵らへ、ぼいまくつてしまへば、その後はどうせうと心のまゝ。

正太　それについて德島岩次といふ、阿波のさぶが、この伊勢路で寶物に入れてある青江下坂、手まへてくれいと頼み。其方には侍ひに取立てくれんとのこの密書。

ト　狀を出して見せる。

彥太　そんならその下坂の刀を、手に入れて渡したら

正太　御師の跡式取らうより、一足飛びに大きな出世。

彥太　どうぞその刀を、手まへたいものぢやが。

ト　正太夫、落ちてある貢の紙入れを取つて見て

正太　こりや貢が紙入れ。百兩の盗賊を貢めに塗りつけるは、この紙入れを玉に使うて、コレ。

ト　囁く。

彥太　ムヽ、出來た〳〵。

ト　奥にて神樂になる。

正太　ありや、かへりまうしの太神樂。

彥太　どさくさ紛れに、何かの手筈。

正太　必らず共にぬかるまいぞや。

彥太　合點ぢや。

ト　彥太夫、奥へ入る。始終神樂にて、向うよりおみれ、着流し綿帽子にて、刀を風呂敷へ包み、持ち出で、花道にて燈籠の書付けを見て、愛ぢやといふこなしにて門口へ來る。此うち正太夫、紙入れを懷へ入れ、狀と金包みとを兩手に持つて

正太　この狀の刀を手に入れたら、出世の蕾り出し、此方では百兩の摑み取りとは今この時、うまい〳〵。

ト　此うち門口より

みれ　頼みませう〳〵。

正太　ドウレ。

ト　御山に云ふ。金を隱す事。

みれ　御亭主孫太夫さまは、御在宿でござりますかな。

正太　イヤ、亭主は江戸へ行かれて、留守中でござる。何ぞ御用でござりましたか。

みれ　私しは志州鳥羽に居りまする、貢が伯母でござりま

正太　すると、この通りお取次お頼み申しまする。

正太　エヽ、面倒な。取次いで進ぜう、待つてござれ。

ト云ひながら、二品を持ちウロ〳〵して、密書を懐へ入れ、それより神前の萬度の御祓を取り、金包みの封を切り、手早く解いて、小判を御祓の内へ捻ぢ込み、元の所へ置く。此うち外よりおみれ、ちやつと見る事あり、正太夫、いろ〳〵あつて

正太　ドリヤ、取次いたさうか。

トついと奥へ入る。これにて神樂やめる。

みれ　心得ぬ今の素振り。ハテナア。

トこなし。奥より彦太夫出て來り

彦太　ハテ、面妖な。貢が伯母とは。

ト云ひながら出て來り。

マア〳〵、これへ入らつしやりませ。

みれ　左樣なら御免下さりませ。承れば、孫太夫さまはお留守とござりまする。あなたはお内業でござりますかな。

彦太　イヤ、拙者は孫太夫が弟、彦太夫といふ者ぢやが、合點が參らぬ。只今貢が叔母と云うて參られた女中がござる。あの一間に話しの最中。又もや見えた伯母御、こりやどちらぞ紛れ者に極つたわい。

みれ　なんと仰しやります。わたしより先へ、貢が叔母と申して參つた者がござりますかえ。

彦太　あるとも〳〵、是非一人は騙りの伯母。並べて置いて詮議せうわえ。

トこの時上の障子の内より

正太　イヤ、伯母の詮議はおれがする。二人とも、うせろうせろ。

トばた〳〵にて、一間より貢お紺、しどけない形にて、正太夫引立て出る。おみれ、こなしあつて片脇へ寄る。貢、振り放し

貢　正太夫、こりや叔母貴を捕へて、何とするのぢや。

正太　叔母貴とは、どこへ叔母貴。吐かすまいやい、衒妻め、うぬは慥かに古市の油屋のお紺であらう。古狐の化の皮、キリ〳〵引ツ剝げ。

こん　コレ、麁相云はしやんすな。わしや貢の叔母に違ひはないわいなア。

彦太　コリヤヤイ、その手めはもう上がつた。志州の鳥羽から誠の伯母がわせたわやい。

貢　エヽ。

ト振り返り、おみれを見て
ヤ、、伯母人が、ホイ。
ト赤面する。
こん　そんなら、アノ伯母御さんか。
ト驚ろき逃げうとするを、正太夫引戻し引据ゑ
正太　動きやがるな、大騙りめ。賣女を引込み晝日中、社家を穢した天罰で、二人ながら神道の法に行ふ。マア、この女郎めを。
ト引付ける。貢とめる。彦太夫隔てる。おみれ、正太夫を留めて
みれ　コレ、待たつしやれ。
正太　エ、邪魔な。退かつしやれ。
ト突き退けてお紺を打つたり蹴たり、いろ／\ある。おみれ、押隔て留めながら、お紺を見て
みれ　ヤア、其方は妹のお雪ぢやないか。どうしてマア爰へおぢやつたぞいなう。二人とも麁相千萬な。こりやわたしが妹ぢやわいなア。
彦正　なんぢや、妹ぢや。
ト　お紺ウロ／\する。おみれ、お紺の袖を引き
みれ　ハテ、妹ぢや／\。うろたへて、姉の顔を見忘れたか。エ、、鈍な子ぢや、わしや姉ぢやわいなう。
ト二人を指さして、いろ／\仕方なして
ホ、、、この子とした事が、現在の姉の顔を見忘れるといふ事があるものかいの。。
ト呑み込ませる。お紺得心して
こん　ほんに、姉さんであつたものを、とんと見忘れましたわいなア、
正太　ムウ、そんなら古市の女郎ではなうて。
彦太　伯母御の妹。
彦正　ハテナア。
みれ　お聞き遊ばせ。鳥羽を出ましたは妹と二人連れ。往來の衆の仇口にも、どうでもあれば親子ぢやと申しました。云うたも道理、この子とわたしは腹變りの姉妹、年は十五の相違、貢の爲には叔母なれど、年は甥より五つ下。叔母甥のよしみとて親しう話すを、知らぬ目では夫婦ぢやと、思し召した方に無理はない。貢、なぜ有やうに云やらぬぞいなう、エ、、二人とも、辛氣な者ではあるぞいなう。
ト貢お紺と顔見合せ、面目なきこなしにて俯向く。
正太　エ、、持つて廻つた姉妹の因縁。どうやら味な、ナ

ウ伯父御。

彦太　ハテ、潔白な云ひ譯、もつれをつけるは此方の誤り
この場は此まゝ。

ト正太夫へ目配せして

二人の伯母御、爰でゆるりと。

ト正太夫おこつくを彦太夫押へて

ハテマア、よいてや。

ト唄になり、彦太夫正太夫に來いといふこなし、奥へ入る。あと合ひ方になる。貢お紺、伯母が左右へ坐り、ちよつと愁ひのこなし。

貢　伯母者人、わざと何とも申しませぬ。久し振りでお目にかゝり、好い事は聞かしませず、逢ふと其まゝお心づかひ、面目ないと有り難いとで、胸は二つに裂けるやうで、お詞を交すさへ、耻かしうてなりませぬ。

こん　わたしは古市の色里、油屋と申す方にて、お紺と申して勤めの身の上。貢さんとは末々まで、云ひ交した心の堅め。急な手詰めの談合で、逢はねば叶はぬ事あつて伯母樣の御名を騙つて今日の仕儀。あなたの爲には大事の甥御を、そゝのかすとお憎しみ遊ばさう、お叱りに悲しけれど、斯うなつた惡緣は、どうも思ひ切られませぬわいなア。

ト泣く。おみれこなしあつて

みれ　家内の衆が咎めるも道理、譯ある仲とは一目見ても知れるもの、大膽者いたづら者と、サア、叱るは一旦。世の中の有爲無常は、この伯母も知つてゐる。色も浮氣も若い同士、それをいかにと叱るやうな胴慾な伯母でもない。取分けてこの貢は、生れ付いた短氣者、その短氣を鎭めるは、連れ添ふ者の楫の取りやう。まだこの上にどのやうな辛抱、生きる死ぬるの場になつても、無分別な氣を持たぬやうに、ナウ、兩親もないこの貢、伯母一人甥一人、先祖は地行も取つた家筋、いま此やうに落ちぶれて、便りに思ふはこの伯母より外にはない。この後とても見捨てぬやうに、不便がつて下され、頼みましたぞや。

トほろりと泣くこなしあつて

淚次手に今一度、泣かねばならぬ事がある。その樣子と云ふは、

トあたりを見て表の戸を締める。合ひ方キツパリとなる。おみれ、風呂敷包みの中より刀を取出し

この刀、見知りがあらう。改めて見や。

貢　ト差出す。貢取つて

緣頭目貫まで、世の常ならぬ拵らへ。

トちやつと拔いて見て

ムウ、刃は濤瀾流し、無銘なれども疑ひもなき下坂、先頃山田に於て、藤浪さまより仰せ渡され、尋ね求むる折柄、仲仕者人、どういふ事で、お手に入りました。

ト鞘へ納める　おみれ、刀を取上げてちやつと泣き

みね　この刃物につき、悲しい話の一通り、お紺どのも聞いて下され。某我れらは阿波の家中、先祖は青井刑部とて、貢の爺様には祖父樣。お持筒の鐵砲大將、百五十石取つたお人。同家中に、籏田十平といふ千石取りの旗頭、祖父樣とは無二の入魂、或る時他所より賣りに來りしこの刃物。疑ひもなき下坂、祖父樣のお目にとまり、買ひ求めたい志し、彼の朋友の十平にも望みをかけ、代物問へば半金五十枚の折紙。當座の興とは云ひながら、十平の意趣の一言に、小身者の青井刑部、其方が風體でこの刀を求むるかと、フト言ひしが互ひの不運、苦笑ひしてその場所は濟んだれど、取沙汰は國一杯、いはれぬ刑部が刃物好き、高知行の十平どのと張合つて、人中で恥辱をうけ、あれでも武士か侍ひかと、口々譏るを祖父樣のお耳に入り、この刀を買はいでは、一分立たぬ武士の意地、武具馬具夜の物まで賣り代なして、望みの値に買ひ求め、青井の名字を其まゝに、青井下坂とこれを名づけ、明くれば五月四日朝、登城の道に待ち受け、十平やらぬと聲をかけ、尋常に打ち果し、屋敷へ歸つて、祖父樣は娘子供に暇乞ひ、命に替へしこの下坂、必らず人手に渡すなと、お腹へグッと押し立てゝ、右の脇腹一筋に、只一言の義に因りて、御身の上を果されたわいなう。其方の父御、わたしが爲には兄樣、その節よりお暇賜り、志州の鳥羽に緣を求め、鄕士となつて暮らすうち、兄樣は御病氣、貧苦には迫れども、遺言なればこの刀、假死にするとも放さじと、藥も服まず、祖父樣の三回忌、五月四日の月日も變らず御臨終。悲しいとも辛いとも、情なや阿母も歎き死。跡に殘るに伯母を其方、まだ九つの頑是はなし、三年に三人まで、同じ月に死ぬる事、不思議と思ふに氣が附いて、刃物の相性見る人に、刀の目利を頼みしに、祖父樣と樣同じ火性、刀は砂の流れ燒、以ての外不吉の刀、これを其まゝ持つならば、子孫まで祟るとの目利、力及ばず賣り代なし、其方はこの家へ養子となし、廻り廻つて十七年、古主の爲にこの刀、尋ね

ると聞きしを幸ひ、心を盡して買ひ求め、持つて來たは伯母が寸志。青井の血筋は代々祟るこの刀、手に觸れると早今の難儀。親祖父の命を斷ち、子孫まで落ちぶれしは、皆これゆゑと科のない刃物に恨みが殘り、折りても捨てたい心なれど、今では古主へ忠義の刀。善ともなり惡ともなり、吉凶は持ち手に依る。刃物の因縁、この身の懺悔、樣子といふは、この通りでござるわいなう。

ト兩方へ云ふ。貢こなしあつて

貢　家に祟る刃物のあらまし、承つたは只今が初め。とは云ふものゝ、祖父樣の魂ひ籠められしこの刀、爰で祖父親人にも、御對面いたすやう思はれて。

ト刀を見てハラ〳〵と泣く。

伯母者人のお志し、エヽ、忝ない。

ト戴く。

こん　伯母御樣のお慈悲なお詞、この上ともにわたしが事も。

みれ　なんの見捨てう。代が代であらうなら、青井刑部が孫の嫁取り、吉日よ良入れよと、時めくであらうものを。

貢　斯くまでに落ちぶれて

こん　お二人樣の御艱難。

みれ　嘆きの種はその刀。

貢　喜ぶも又この刀。

こん　伯母御樣。

みれ　貢。

ト二人が手を持つて引寄せ

ハテ、思ふに任せぬ

三人　世の有樣ぢやなア。

ト顏を見合せて泣く。各々こなし。この時向うより、胴服の金兵衞、金貸し、旅の形にて出で

金兵　カウッ、驛から五軒目に門構へ。爰ぢや〳〵。

ト門口へ來り、戸を明けんとしても明かぬゆゑ

なんぢや、眞中に戸を鎖いたワ。コレ、頼みませう、明けて下され〳〵。

ト叩く。これにて三人驚ろき、貢、お紺に囁き、障子屋體へ忍ばす。伯母は刀を風呂敷に包み、片脇へ隱す外では頻りに叩く。貢は戸を明ける、

貢　けたゝましい、誰れぢや〳〵。

金兵　イヤ、おりやちつと爰の内へ、尋ねる者があつて來た。

ト云ひながら内を見込む。この時おみれ、金兵衛を見て、悔りして逃げ出す。

貢　コリヤ待て。見付けたぞ〳〵、

ト　つか〳〵と行き、貢を引退け、おみれを引戻す。

コリヤ、おれを見て逃げらうと、さう旨くはさゝぬワ。大騙りの衒妻め、でんどへ引摺つて行く。うしやがれ。

ト引立てる。貢、金兵衛を引廻し

貢　コリヤ、何を致す。伯母者人を騙りぢやの、でんどへ引摺つて行くのと、エヽ、こりや人違ひであらう。左やうなら料簡する。とつとゝ帰り居らう。

金兵　ハヽヽ、けつかるワ。胴脈の金兵衛といつて、山では指のさし手もないお兄いさんぢや。様子あつて下坂の刀を、その衒妻に買つたところが、刀を取つて金を渡さぬに依つて、騙りと云つたが誤まりかい。

貢　すりや、何と云ふ。下坂の刀は。

ト　おみれにこなし。

みれ　サア、騙りと云ふに無理はない。其方の忠義が立させたいばつかりに。

ト貢ギックリとこなし。

金兵　いま聞くに、伯母者と吐かすからは、うぬも同類、退いてゐい。

ト貢を引退け、おみれを引付ける。貢、寄るを睨め付ける。

なんぢや〳〵、何をぎしやばるのぢや。あの刀は、さる侍ひから質に取つた代物、留めて置いては、ちつと手あの上がる事が出来たによつて、山田を逃けつて鳥羽の下、郷士の家を見込み、買うて貰はうとなり、カラリと手を打つて、所で百両の金は明日渡さう、マア、刀を渡せと云うたに依つて、ア、気ごさなと思うたれど、女子でも郷士といや、麁相もあるまいと呑み込んで、大枚の代物を預けたぞよ。明の日早う行たれば、家内の奴等が留守ぢやと吐かす。それから五六度も足をひかして、揚句には駈落ち同然。大方爰に睨んだによつて、跡を慕うて来たのぢや。サア、金渡せ。渡しやアがれやい。

みれ　サア、尤もぢや〳〵。道理ぢや〳〵。兄様は死なしやんしても、門を潰さぬ郷士の家筋、たんの非道な事をしませう。鳥羽の家へ帰つたら、着類をそけて売り代なしても、こなた様には損はかけぬ程に、腹は立たうが、そこを料簡して、去ぬるまで待つて下され。コレ、頼みますわいなア。

金兵　否ぢや〳〵。ならぬわえ。四も五もない。でんどへ引摺つて行く。うしやがれい。

トきつとなつて引立てにかゝる。貢留めて

貢　待て、金渡さう。

金兵　なんと。

貢　下坂を質に取つたとは、あやの抜けぬ山田の町人、キツと詮議。トさア云うては物がない。刀の代はこの貢が遣はさうが、それも今と云うてはなり難い。一兩日中にはキツと調達して濟まさう程に、爰は一つ其許が呑み込んで。

ト云ふうち、金兵衛、詞を打消し

金兵　コレ、コレ、コレ〳〵〳〵、やかましいワ。貴樣の顔で、一兩日は愚か、半日も待たれうか。御長官の家などと、帶刀は見せびらかしても、內證は素寒貧。アヽ、聞えた、こりや何か、伯母とぐるになつて、金になる刀を騙つたか。イヤサ、騙りやがつたか。アノこゝな大騙りめ。

ト貢ムツとして、脇差へ手をかける。おみれ留めて貢を拜み、何にも云うてくれなといふこなし。金兵衛尻込みして怖がりながら

金兵　なんぢや〳〵〳〵、扶持片棒をひねくつて、この金兵衛を切るか突くか。面白い、切られようかい。サア、切れ。サア突け。どこを切る。爰か〳〵。

ト體を突きつける。貢キツとなる。おみれ留めるゆゑ無念を堪えるこなし。

サア、切らぬか、どうぢやい。ヘヽエ、御長官の御家人樣でも、お力が强うても、理といふやつには勝てぬてな。サア、衒妻め、うしやがれ。

ト又おみれへかゝる、貢留めるを突き退け

エヽ、キリ〳〵とうせうてや。

ト引立てんとする。この時奥にてバタ〳〵騷がしく

彥太　太々の金が紛失した。家內の者、一人も動くまいぞ。

ト奥より彥太夫、正太夫、禰宜殘らず、娘神も附いて、ドヤ〳〵と出る。金兵衛、ウロ〳〵して下手へ寄る。

貢　彥太夫どの、太々の金がどう致したと仰しやりまするな。

彥太　サ、先に講頭から受取つた百兩の金、奥の帳箪笥へ入れて置いたを、錠を捻ぢ切つて盗んだ盗賊。外へ行かう筈がない。

ト　おみれを尻目にかけて。
そこらあたりが迂散なてや。
ト當て付ける。おみれ氣の毒さうにして下にゐる。貢もこなし。
禰一　役目で來てゐる我れ／＼も、身晴れぢや。
禰二　さうとも／＼、彦太夫どの。
皆々　吟味さつしやれ／＼。
彦太　ハテ、こなた衆より、兄貴から留守を預かつたおれが、潔白を立てにやならぬ。
ト御祓串を取つて來て火入れにて燒き、茶碗の水に移し持ち
サア、この御祓串を一人々々に呑んでもらはにやアならぬ。盗んだ者は忽ち血を吐いて死ぬる事は、皆知つてゐるであらう。
正太　イカサマ、熊野の牛王よりは慥かな誓言。こりや皆呑まずばなるまい。
彦太　正太夫、マア、われから呑んで廻せ。
正太　エヽ。
彦太　ハテサテ、おれが爲には、甥のわれぢや。身内の者に先へ呑ますが、おれが身晴れぢや。サア呑め。
ト茶碗を眞中に置く。
正太　エヽ、滅相な／＼。これはかりは、どうも呑まぬ呑まぬ。
彦太　なんぢや呑まれぬ。そんなら太々の金は、おのれが盗んだな。
正太　エヽ、コレ／＼／＼、伯父御々々々、そりや何を云はるるぞいの。なんのおれがそんな事をせう。名さへ正直正太夫、曇かすみはごんせぬわいなう。
彦太　そんなら呑むか。
正太　サア、それは何ぢやわいの。
ト術なき思ひ入れして思案を極め
オヽよい、おれが身の明り、スツパリと立てゝ見せう。
コレ、貢どの、ちよつと習ひませう。
貢　何の用ぢや。
ト貢、正太夫眞中へ出る。
正太　貢どの、なんとマア、天命は恐ろしいものぢやないか。もう斯うなつたら隱すにも隱されぬ。サ、有やうに云うてしまはつしやれ。
貢　コレ／＼正太夫、云うてしまへとは、何を云ふのぢや。

嘉永五年四月河原崎座上演

市川廣五郎の彦太夫　淺尾奥山の正太夫

正太　太々の金を、こなたが盗んだと云うてしまへ。

貢　默れ正太夫。コレ、寐とぼけて、何を云ふのぢや。アレ、伯母者人も聞いてござる。禰宜衆もござる。無實を云ひかけ、後であやまつたとは云はさぬぞや。

正太　云はんすないの〳〵。誰れぢやと思はんす。名さへ正直正太夫ぢやわいの。貴樣が盗んだといふ、慥かな證據があるわえ。

ト以前の紙入れを出して

これを知つてござるか。

貢　そりや、わしが紙入れぢや。

正太　サア、この紙入れに味な物が入れてあつたわや。先刻に思はず奥へ行つたれば、帳箪笥の錠が捻ぢ切つてある。合點がゆかぬと明けて見れば、金は紛失、あたりへ落ちてあるこの紙入れ、中から落ちたコレこの錠前。よくよく見れば捻ぢ切つた箪笥の錠前。さては盗賊は貢どの、取押へて詮議せんと、サア思うたれど、ア、誰れも若い身には覺えのある事、よく〳〵差詰まつた事であらう、まゝならぬ事は共々に、問ひ談合もせうし、とつくりと意見もして、金さへ戻れば波風立つまいと、心一つに納めて置いて、云はずに置いたる今の難儀、盗賊は貢ぢや、おれは云はねど、ソレ、大神宮樣が云はつしやる。天命は恐ろしいぞえ。斯うなつたら遁がれぬ。盗んだ百兩を、キリ〳〵爰へ出せ。

貢　イヤ、證據があらうがどうせうが、盗まぬといふ心が潔白。

正太　その潔白な貴樣が紙入れに、捻ぢ切つた錠が、どうして入つてあつた。

貢　サア、それは。

正太　盗まぬといふ證據があるか。

貢　サア。

正太　白狀するか。

貢　サア。

兩人　サア〳〵〳〵。

正太　こりや外の者を瞞すと違ふぞ。名さへ正直正太夫ぢや。叶はぬ所ぢや。何もかも云うてしまはつしやれ。

ト錠を打ち付けていふ。貢、錠を取上げ、おみれの方を見たり、皆々を見廻し、術なきこなし。

金兵　貢、わりやいがんだ事をするなア。伯母といふも大騙り。わりや段々と足が付いて、首が細つてくるわいやい。

彦太　サア貢、有やうに云へ。どうぢや。
　ト貢こなしあつて、御祓串の茶碗を取らうとするを、正太夫留めて
正太　コリヤ待て、貢。
貢　この場の誓ひ、神水を呑んで、血を吐いて死ぬるか死なぬか、おのれが身の明りを立てるのぢや。
　ト茶碗を取る。正太夫叩き落し、其まゝ貢を引付ける。おみれ、これを留めるを、同じく両手に引付け
正太　動さやアがるな大盗人めが。ヤイ、誓言立てるは、白い黒いの分らぬうちぢや。慥かな證據で分つてある。伯母といふも、いがみの相摺り、揃ひも揃うた大泥坊めが。
　ト悪口する。奥の障子を明け、お紺、堪え兼ね出ようとする。貢見付けて
貢　コレ〳〵出まい〳〵。出ては悪い。イヤサ、伯母者人、こなたには御存じないこの場の體裁、それに爰へ出さつしやると、よしない事に花が咲いて、誰れが身の難儀にならうも知れぬ程に、裏の切り戸から廻つて、この場を早う。
　トお紺へこなし、又おみれの方へ思ひ入れ。
伯母者人、お歸りなされて下さりませ。
　ト奥へかけて云ふ。お紺、是非なく障子を締める。
正太　イヤ、去なす事はならぬ。同類の詮議は後でする。
　トおみれを突き退け
ムウ、一應では云ふまい。いつそ斯うして。
　ト箒を持つて貢へかゝる。貢キッとなつて
貢　コレ待て。主に向つて、こりや何とするのぢや。
正太　イヤ、主ぢやない。わりや盗人ぢや。
　ト貢睨みつける。
なんぢや〳〵、なんぼ睨んでも盗人ぢや。ぢやによつて斯うする。
　ト貢が手をかけた箒を引ツたくり
カウ〳〵、斯うする。
　ト散々に打ち据ゑる、おみれ留めるを突き退ける。この立廻りにて、正太夫、以前の手紙を落す。おみれ、ソッと拾ひ片脇へ来る。この時榊出て、正太夫を留めて
榊　正太夫待ちや。
正太　榊さま、お前の知つた事ぢやない。退いてござりませ。

榊　イヤ待ちや。貢さんは、盗人ぢやない。

正太　アノ、これ程慥かな證據があつても。

榊　サイナア、例へどのやうな證據があつても、あの貢さんは父さんの養子、末々わたしと夫婦にして、この福岡の名跡を繼がさうと云うてござるぞや。なりや貢さんはこの家の跡取り、父樣の金は貢さんの金も同然、我が物を我が遣はしやんすを、盗人といふ法があるか。

正太　サアそれは。

榊　貢さんに曇りのない事は、どこまでもわしが證據ぢや。慮外しやると聞く事ぢやないぞや。

彦太　イヤ、孫太夫どのゝ留守中、社家の支配を頼まれたおれが役目、養子でも跡取でも、盗み根性がありや矯め直さにやアならぬ。正太夫大事ない。打つて〳〵ぶちのめして、金の在所を白狀させい。

正太　合點ぢや。退かつしやれ。

ト榊を引退け、また箒にて貢を打ち据ゑる。此うちおみれ、以前拾ひし狀を讀む事あつて、この時正太夫を留めて

みれ　マア〳〵、お待ちなされませ。

正太　また留めるかいやい。

みれ　イヤ、留めは致しませぬ。緣に繋がる貢が惡名、この場の明りを立てうと存じて。

正太　アノこの場の云ひ譯を。

みれ　サア、賣つて下んせ。

正太　賣れとは何を。

みれ　サア、元の起りは太々執行、此方へ買ひ取れば、金子の行端も、盗賊の吟味にも及ばぬ道理ぢやに依つて、今日の太々を、わたしが方へ賣つて下さんせ、と云ふのぢやわいなア。

正太　コレ〳〵、お伊勢さまへ、奉納の太々、端金ではいけぬぞや。しかも今日は六貫目の太々、コレ、大枚小判で百兩、貴樣の方へ買ひ取らうといふ金あるか。

みれ　成る程、その金子揃へませう。

ト思ひ入れあつて、側より風呂敷包みの下坂の刀を取出し、持つて出る。

彦太夫さま、ちよつとお目にかゝりませう。

ト貢こなしある。

彦太　おれにか。

みれ　御苦勞ながら。

ト正太夫こなしあつて片脇へ寄る。彦太夫、向うへ出で

て
彦太　何でござるな。
みれ　只今お聞きなされる通りの仕儀、御亭主の孫太夫さま御兄弟のあなた、なりや孫太夫さまも同然、紛失の百兩金探索いたすまで、質物に取つて下さりませ。
彦太　ナニ、質物とは。
みれ　サア、この刀は靑井下坂の正銘、半金五十枚の折紙附き、身に替へぬ大切の品なれど、實は身のさし合せ、どうぞこの刀を質物に取つて、今日の太々をお讓りなされて下さりませ。
貢　イヤ／＼伯母者人、その刀を渡しましては。
みれ　ハテ、惡うはせぬ、默つてゐや。
ト貢こなしあつて扣へる。
なんと御得心はござるまいかな。
彦太　なりませぬ。名作は大名道具、社家の家では三文にもならぬ代物。百兩の代りに取る事否ぢや。否でござる。
ト云ふうち、正太夫思ひ入れあつて
正太　コレ／＼伯父貴々々、靑井下坂とあれば、彼の岩印から頼まれた注文の、明いた口へ持ち込んだ質物。こりや太々を賣る方がよからうぞや。
ト貢この詞に氣を付けこなしあり、彦太夫呑み込み
彦太　オヽ、成る程さうぢや。下坂に相違がなくば、質物に取つて、太々を賣つて進ぜう。
みれ　すりや、いよ／＼此方へ讓り受けますぞや。
彦太　ハテ、此方に異變はござらぬわいの。
みれ　左樣ならばこの刀。
ト風呂敷包みの刀を渡す。
彦太　慥かに受取つた。
みれ　斯うすれば、アノ貢に、盜賊の惡名はござりませぬぞえ。
彦太　なんのあらう、疑ひ晴れました。
榊　伯母御樣のお世話で、この場の納まり、わたしも落ちつきましたわいなア。
金兵　其方が濟んだら、おれが方の百兩、工面が出來ずば御長官へ引摺つて、せりふする。サア、歩め。
みれ　尤もでござんす。指圖の通り、いづこへなりとも參りませう。
金兵　エヽ、キリ／＼來いやい。
彦太　此方の譯は立つた。もう用事はない。歸らつしや

れ。
みれ　イヤモウ、指圖ならても、歸らうと存じて居ります
る。
　ト矢張り神樂にて思ひ入れあつて、神前に飾りある萬
　度の御祓を持ち行きかける。正太夫、悔りして留め
正太　ア、、コレ／＼、こりや、どうするのぢや／＼。
みれ　ハテ、太々を讓り受けた上からは、萬度の御祓は、
此方へ持つて歸ります。
正太　ア、、コレ／＼滅相な／＼。これをやつて堪るもの
か。
みれ　ホ、、、太々の施主故、御祓を持つて歸るに、やる
まいとはどうでござる。
正太　イヤサ、それはとんと鈍な事ぢやわえ。
　トいろ／＼踠く。
彦太　正太夫々々々、御祓の百や二百は遣つてしまうたが
よいてや。
正太　ハテサテ、こなたは何にも知らぬによつてぢや。あ
の御祓は先刻の
　ト云はうとしてウヂ／＼踠きて、
エ、、とつとどうなつても、この御祓はやらぬ／＼。や
る事はならぬぞ／＼。
　トいろ／＼踠く。
みれ　たつてならぬと云はしやんすは、この御祓に様子あ
つてか。
正太　全くなんの。
みれ　名さへ正直正太夫さま、よもや胡亂はござんすま
い。
正太　なんの胡亂があらうぞい。
みれ　サア、それぢやによつて、持つて歸ります。
正太　イ、ヤ、渡さぬ／＼。
みれ　ハテサテしつこい。
　ト兩人いろ／＼揉み合ふ。これにて御祓の内より、本
　小判バラ／＼と百兩落ちる。貢集め取つて
貢　こりや凡そ百兩ばかり、この中にあつたは、ハテナ
ア。
　ト正太夫を見てこなし。
彦太　そんなら太々の金を、あの中へ。
　ト肝を潰す。正太夫立つたり居たり術ながる。貢、手
　早く紙に包み、おみれに渡す。
みれ　矢ツ張り神隱し、金子出たれば、太々を買ひ取るに

も及ばぬ。彦太夫さま改めてその刀、此方へ求めませう。
彦太　イヤこれは。
正太　伯父貴々々々、一旦買ひ受けた刀、賣り戻す事はなりませぬ。
彦太　オヽさうぢや。戻す事はなるまいぞや。
貢　ムウ、金に換へて、下坂を欲しがる正太夫、われが胸に一物あらう。眞直に白狀しろ。
正太　ハヽヽヽ、こりやをかしいわえ。我が胸に引比べ、なんぢや白狀せい。鈍な事吐かすな。曇りかすみのない正直正太夫ぢやぞ。
みれ　その正直なこなさんの懷中から、落ちたこの密書。
ト出して
正太夫どのへ岩印より。
正太　南無三それを。
ト取りにかゝる。貢、引廻し、立廻りあつてちよつと當てる。正太夫タヂ／＼と上手へ行つてウンとなる。
みれ　貢、讀んでみや。
ト狀を抛る。貢取つて開き
貢　密書を以て申し入れ候ふ、彼の靑井下坂の刀所持いたし候ふ山田の町人、國遠いたし行くへ知れず候ふ間、見當り次第彼の刀をば奪ひ取り相渡さるべく候ふ、首尾成り候ふ上は、國元の伯父大學どのへ申し達し、武士に取立て申し候ふ。四月廿日。正太夫どのへ岩印より。
ト讀んで。
ムウ、先月二日二見の浦にて、手に入つた密書の文體。
トまた手紙を見て
國元の伯父大學どの、こりや詮議の蔓に取付いたわえ。
ト正太夫心付き顏を上げ、これを聞いて、ちやつとへたり、氣の付かぬ體。金兵衛ウヂ／＼する。彦太夫こなし。
彦太　下坂の刀賣らう。
みれ　御得心かな。
彦太　密書の譯は知らねども、もつれの來さうなこの刀、元へ戻せば出入は五分々々。ぢやに依つて、この刀賣らう。
みれ　さうなうては叶はぬ事。サア、紛失の百兩。
ト彦太夫へ渡す。刀をおみれへ渡す。
彦太　斯うすれば、この彦太夫に、云ひ分はあるまいの。
金兵　金が濟んだら、下坂はおれが。
ト取りにかゝる。貢引廻して

貢　イヽヤこの場の落着、詮議のかゝつた正太夫、何もかも云はさにやア置かぬ。

ト正太夫を目がけ行くを、彦太夫隔てゝ

彦太　イヽヤ、正太夫は死んだ。くたばつてしまうた。

貢　なんと。

彦太　脾腹の中身に正氣を失ひ、アレあの如く目を見詰めて、くたばつてしまうた。密書の宛名が死んだれば、外へ詮議がかゝらぬ筈ぢや。

ト貢こなしあつて

貢　ハテ、死んだとあれば是非がない。御師を殺めた云ひ譯は、この密書を以て、後の捌きはおれがする。穢れた亡者は、土地に置かぬが伊勢の作法。イヤ、禰宜衆、正太夫が死骸を國境の山へ投げ上げ、火葬にさつしやれ。

ト正太夫悸り。

禰宜　それがよいく。サア皆、佛を持ち出しませう。

皆々　合點ぢやくく。

ト寄らうとする。正太夫慌てゝ、彦太夫の裾を引ツ張り顰む。彦太夫、皆々を留めて

彦太　ア、コレくく、待たつしやれく。例へ呼吸を引取つても、二十四時は見合すが定りぢや。火葬も外ぢやささぬ。伯父ぢやわいの、一家ぢやわいの。

みれ　イヤ、一家にもせよ、法式は破られまい。こりや矢張り火葬がよからう。

ト正太夫、術ながる。彦太夫もウロくする。

貢　亡者に未練はかけぬものぢや。一時も早う持ち出したく。

皆々　合點ぢやくく。

貢　氣の毒ながら、所の作法ぢや。ドレ、それ死骸を。

トまた皆々正太夫にワヤくとかゝる。彦太夫あせり留めて

彦太　待つたくく。この死骸を買はう。

貢　なんと。

彦太　サア、死骸さへ買ひ取れば、火葬も土葬も此方の勝手ぢやによつて、死骸買はう。

みれ　成る程、こりや尤もな云ひ分。死骸さへ買ひ取れば密書の詮議にも及ばぬ道理。兎角波風立たぬやうに、この佛は賣るがよからう

貢　如何にも賣らうが、亡者の價は金百兩。

彦太　アノ、死んだものが百兩か。そりや又あんまり。

みれ　お氣に入らずば、火葬がよからう。
貢　エ、面倒な。葬つてしまはう。
彦太　アヽ、コリヤ〳〵待つてくれ〳〵。是非に及ばぬ、
ソレ百兩。
ト件の金を打ち付ける。おみれは金を取上げて
みれ　それで死骸に云ひ分ない。
彦太　アヽ、嬉しや〳〵。
ト正太夫も落ち付く。この時下手の切り戸の内より、
お紺出て外に窺ひ居る。
金兵　して、おれの方の達引は。
みれ　ソレ百兩。
ト投げる。金兵衛は受取りにかゝる。
金兵　慥かに金は受取つた。
ト金包みを取る所を、貢、金兵衛が胸倉取つて引付け
る。
貢　うぬ、先程の法外、云ひ分のある奴なれど云はぬぞ
よ。
ト彦太夫の方を尻目にかけ
云ひませぬぞや。義理ある養子の血筋でなくば、詮議の
仕樣もあれど、血を血で洗ふこの場の詮議、何も云は
ぬ。
トかけて云ひ
トツトと歸れ。
ト金兵衛を突き飛ばす。
金兵　エヽ、思へばその
ト寄らうとする。貢キツとして
貢　云ひ分あらば相手にならうか。
金兵　それには及ばぬ。ドリヤ、うまい土場へありつから
かい。
ト神樂にて金兵衛、金を手玉にして向うへ入る。
彦太　ほんに思へば今の金。
ト刀を目がけ寄るを
みれ　詮議の落着、切れ味を試みようか。
彦太　サア、それは。
みれ　なんとでござんす。
トきつと云ふ。暮れ六ツの鐘鳴る。
貢　ありやモウ暮れ六ツ。
ト貢、右の密書をちよつと見て
詮議の目當は徳島岩次。
トおみれへ密書を渡す。

みれ　片時も早うこの刀を。

ト刀を貢へ渡す。

貢　これより直ぐに萬次郎さまへ、お渡し申さん。

ト刀を持ち、外の戸を開ける。この時お紺出て

こん　貢さんか。

貢　お紺か。

榊　そんなら、外に。

ト榊、表を見る。正太夫、起きようとする。おみれ見るゆゑ、ちやつと寢る。彦太夫は貢の持ちし刀へ目をつけ、立ちかゝるを、おみれは留める。貢この途端に戸をパッタリ締める。

貢　伯母者人。

みれ　早う行きや。

ト貢お紺を連れ、三重にて向うへ逸散に入る。正太夫堪え兼ねて起き上がり

正太　うぬ、貢め。

ト門口へ走つて行きかけるを。

みれ　蘇生返つたら、密書の宛名讀み上げうか。

正太　ヤヽ。

みれ　一々詮議せうか。

正太　そんなら死んだ。

ト行き詰まり、グンニヤリとなつて寢る。彦太夫はおこつく。おみれはソロ〳〵と出かけながら

みれ　初めて參つて、いかい御馳走。

彦太　思へば〳〵。

ト無念のこなしにてかゝる。引廻す。正太夫、顏を上げる。おみれ見て笑ふ。

みれ　おさらばでござりまする。

ト門口を立て付け、會釋のこなし、双方よろしき仕組み、キザミにて。

ひやうし幕

三幕目　油屋の場

役名——福岡貢。料理人、喜助。今田萬次郎。徳島岩次實ハ藍玉屋北六。藍玉屋北六實ハ徳島岩次。次郎助。若い者、丈八。同、佐助。油屋、おきの。油屋、お紺。同、お岸。同、お鹿。同、おきぬ。仲居、萬野。同、千野。同、吉野。

造り物平舞臺、向う茶屋暖簾、上の方中二階、前に三重段梯子かゝり、格子、門口に油屋と云ふ掛け行燈に灯ともしあり、騒ぎ唄にて幕明けると、向うより客次郎助、女郎おきぬ、仲居千野、同吉野、粹の丈八、同定七連れ立ち出る。奥より油屋おきの出る。

次郎　戻つたぞよ／＼。

皆々　お歸りなされたぞえ／＼。

きの　オヽ、次郎助さん、今でござりましたかいなア。

次郎　さればいの、今日は古市の芝居見物に行たところが、何が初日の事ぢやによつて、果が遲うて今になつた。

定七　おきのさま、お前もお出でるとよいに。

丈八　今日の初日は、えらいはずみであつたになア。

きの　さうして、岩次さまやお紺さまは、まだでござりますかえ。

千野　岩次さまは、お紺さまと二人、芝居茶屋の大坂屋で呑んで居やしやんすわいなア。

吉野　わたし等は先へ去ね、後からお紺さまと連れ立つて去ぬると云うてゞござんした。

次郎　ハテ、お紺と二人大坂屋で、コツソリと旨い目せうと云ふ企みを睨んだゆゑ、我れら粹をきかして戻つたてや。

きの　そりや、ようお歸りなされました。

次郎　さうして北六どのは。

きの　今日は芝居へもお出でなされず、日がな一日おきしとたつた二人奥座敷で。

次郎　いづれを見ても戀の世界ぢやなア。

きの　今宵は舞の會をお望みなされましたによつて、その用意を致して居りました。岩次さまも芝居から直ぐにお歸りなされませと、先刻に使ひをあげましたがなア。

千野　アイ、その使ひは來ましてござんす。追つッけ去なうと仰しやつてゞござんした。

次郎　ドレ、そんなら又奥で、舞を見物して呑まうかい。

きの　さうなされませいなア。

皆々　サア／＼、お出でなされませ。

ト騒ぎ唄にて皆々奥へ入る。跡合ひ方になると、萬次郎、着流し手拭頬被りして向うより出て來て、門口より内を覗くこなし。此うち奥よりお岸出る。

きし　どつこへも行きやせぬわいなア。ちよつと表を見て

來るのぢやわいなア。
ト云ひ〳〵出て、出合ひ頭に萬次郎と顏見合し
きし　ヤア、お岸か。
萬次　ヤア、萬次郎さま、逢ひたかつたわいなア。
ト走り寄り抱きつく。
萬次　わしも其方に逢ひたうても、先度の別れより貢の世話になつてゐるによつて。
きし　何を嘘ばつかり、この四五日はどこへ行かしやんしたやら、お行くへが知れぬと云うて、ほんに貢さまは狂氣のやうになつて、毎晩々々お前を尋ねにござんす。お前はマア、どこへ入つてゐやしやんしたぞいなア。
萬次　そんならおれが行くへを毎晩々々尋ねに。
きし　あんまりうろつかしやんすのが、いとしいわいなア。
萬次　それ程までにおれが事を。
ト向うを見て
貢、堪忍してたも。譯を云うて出なんだがおれが誤り。コレ、お岸、皆の者にそゝのかされ、大切な下坂の刀、質に置いたはおれが放埒。それゆゑにこの流浪、殊に折紙まで盗み取られ、何卒この二品を取返さうと、樣々に苦勞をしてたもるあの貢、せめて一品なと助けうと思うて、山田の金兵衞が所へ行たら、ちやんと駈落ち。なんでもこの伊勢中は元より、鳥羽と云ふ所まで歩いて搜せども、かいくれ所在が知れぬ。詮方盡きて戻つて來れど、この四五日も戻らなんだ事ぢやによつて、貢の手前も氣の毒さに、マア、其方に逢うて樣子を聞いてから、貢に逢はうと思うて來たのぢやわいの。
きし　よう戻つて下さんした。もう追ツつけ貢さんが、また尋ねにござんす程に、待つてゐて、連れ立つて去なんせいなア。
萬次　そんならさうせうわいの。
トこの時奥より
萬野　お岸さま〳〵。
きし　エヽ、悪い所へ萬野が來るわいなア。
萬野　どうせうぞ〳〵。
きし　お前を見付けたら、また北六に悪告げをするわいなア。お前は大林寺に待つて居て、もそつとしてから來て下さんせ。
萬次　そんなら追ツつけ來る程に、貢がおぢやつたら待たして置いてたもや。

きし　そりや合點でござんす。さうしてアノ
ト抱きつきながら囁く。
萬次　サア、わしも其方に。
ト囁くうち萬野、奧より出て來て
きし　お岸さま／＼、
ト云ひ／＼門口へ行くと大きな聲で云ふ。お岸悧りする。萬次郎逃げそゝくれ小蔭へ隱れる。萬野見ぬこなしにて
萬野　お岸さま、お前爰に何してぢやい。
きし　サア、わしやアノ、オヽ、それ／＼、螢が飛んで來たに寄つて、あんまりしほらしさに、詠めて居たわいの。
萬野　螢が來たかえ。
きし　アイ。
萬野　成る程、晝は顏出しがならぬ身の上。夜になるとウロウロと飛んで來る螢め。
ト萬次郎の方を尻目にかけて
コレお岸さま、あんな蟲を見ずと、ちやつと内へ入らしやんせ。女郎の甘味を吸ひにうせる、ならずの螢めが。
ト萬次郎氣色する。お岸顏にて押へる。
何ぢや／＼。その面なんぢや。螢め、夜に入つてまい／＼と、人の門口へ飛んでうせて、女郎の甘味を吸ひにうせると、引ッ捕まへて踏み躙つてこますぞ。
トまた萬次郎腹立てるを、お岸顏にて押へる。
何をびこしやこさらすと、わしが又引ッ捕まへて
ト行かうとするをお岸、萬野を留めて
きし　コレ、萬野、もう螢は飛んだわいの。
萬野　エヽ。
きし　先刻の時飛んで行けばよい事を、ちやつと大林寺の方へ飛んで行て、また後に爰らへ飛んで來たがよいわいの。
ト萬次郎にかけて云ふ。萬次郎領き手拭にて顏隱し、向うへチョコ／＼走りて入る。お岸胸撫で下ろす。萬野この體を見て
萬野　エヽ、命冥加な螢ぢやな。
北六　萬野々々、お岸はどこへ行た／＼。
ト云ひ／＼奧より出で、後より次郎助おきぬ千野吉野附き出る、お岸を連れ萬野、内へ入る。
萬野　あんな悪い蟲に構はす、お客の側へ行かしやんせ。
トお岸を北六の方へ突きやる。北六直ぐにお岸が手を捕へ。

北六　お岸、おれ一人奥に置いて、拔けそとは聞えぬわいやい。今日も行きたい芝居へも行かず、わが身と二人寢ようとすりや、腹が痛いの頭痛がするのと、其やうに酷うあしらうたものぢやない。よく／＼に思へばこそ、阿波三界からこの伊勢に流連して居るのもわが身ゆゑ。風來者の萬次郎とは違ふ。藍玉屋北六、阿波一番での金持ち。應とさへ云ふと、請け出して連れて去ぬるが、なんと次郎助、さうでないか。

次郎　さうとも／＼。應とさへ云へば其の身の仕合せ、打出すと云ふものぢや。褄も解いてぐつたりと抱かれて寢て、好い果報に逢うたがよいわいの。

萬野　コレお岸さん、お前は果報が嫌ひかいなア。

きし　アイ、否でござんす。なんぼう果報が嬉しとて、否なお客に請出さるゝ事は、好かんわいなア。

北六　エヽ、忌々しい。ならず者の萬次郎めに心中立てが胸が惡い。ドレ、その酒々。

千吉　またあがるかいなア。

北六　けたいぢや／＼。いつそ飲んで／＼、飲み据ゑてこますのぢや。

次郎　それがよかろ。暴れ飲みにして、暴れ次第に取つてしめたがよいてや。

次郎　オヽ、お岸を斯う側へ引付けて、否がる代りに何杯も助けさせて、酒責めにしてこまそ。

きし　イヽエ、わしや、えゝ飲まぬわいなア。

千吉　お岸さまは下戸ぢやわいな。

きぬ　もう堪忍してあげなんせいなア。

北六　イヽヤ、飲まさにや聞かぬ。サア酌げ／＼。

ト騷ぎ唄になる。お岸を引付け鍋の鉢を差出す。萬野酒を酌ぐと、向うよりお紺、着付け派手なる前垂れ。右はこの地の風にて伊勢女中係所行の形にて出で來る、後より岩次、阿波侍ひの着付け羽織大小にて出で來たる。

岩次　オヽイ／＼、お紺、マア待てやい。

こん　イヽエ、わしや早う去んで、郷の會が見たうござんすわいなア。

岩次　サア、見たくば一緒に見るわいやい。われぱかり行かうとは胴慾ぢや。なぜ手を引合うて行てくれぬぞいやい。

ト　お紺が手を取る。

こん　それでもそんな事をすると、人が見て笑ふ。

岩次　なんの別に、容が女郎と手を引いて歩くを、誰れが笑ふもので、殊に夜に入つてあれば、構ふ事はないてや。

こん　それでもわしや耻かしいわいなア、

ト振り放し本舞臺へ來る。

岩次　コリヤ、マア、待てサ〳〵。

ト云ひ〳〵後より來る。此うち北六一杯飲んで、お岸に飲め〳〵といぢつて居る。萬野もこみ付けて飲まさうとする。お岸嫌がる。おきぬ千野吉野、挨拶の捨ぜりふある。お紺ズツと入る。

きし　ヤア、お紺さま、戻らしやんしたかいなア。

ト　お紺の側へ行く。

こん　舞の會があると聞いて、戻つて來たわいなア。

ト云ふうち岩次も續いて内へ入り

北六　オヽ、岩次さま。

次郎　今お歸りなされましたか。

岩次　オヽ、サ、舞の會があると北六が使ひゆゑ。

北六　イヽヤ、直さまとは云はさぬ。芝居果から大坂屋の内で、お紺とたつた二人で、出來ましたな〳〵。

岩次　何を云ふぞいやい。此方が出來てもあつちが出來さし居らぬわい。

次郎　イヤ、さうは拔けさせぬ。この次郎助や皆を先へ戻したは、曰くがなけにや叶はぬ。

萬野　イヤ、また岩さまが思ひ込み遊ばしたも尤も。外の色里でない餘所行きの前垂れ姿、なんとどうも云へぬぢやござりませぬか。お紺さまもマア、岩さまのお側へお出でなさんせいなア。

こん　オヽ、萬野、岩さんの側へ行きたけりや、わしが行くほどに、あんまり差出て下さんすないの。

萬野　がそれどの、女郎さん方も氣儘には困り入るぢや。

ト奥よりおきの出て

きの　オヽ、岩さま、お歸りなされましたか。北さま、もう舞が始まりますぞえ。アノマア初手が葵の上、その後が保名物狂ひ、その後が伊勢音頭の座敷踊、どうで今夜は夜明しでござりまする。サア皆、奥へお出でなされませ。

岩次　身共はその以前音頭が望みだ。國元の土産に致す。お紺、其方が手で文句を書き留めてくれい。サア、一緒に行かう〳〵。

ト　お紺が手を取るを、素氣なう振り放す。岩次ムツと

して、刀の柄に手を掛ける。

きの　ソレ、萬野、お腰の物をお預かり申しや。

萬野　アイ〳〵。申し岩ごさま、お腰の物は、わたしがお預かり申します。

ト腰の物に手を掛ける。

岩次　でも。

萬野　ハテ、里の習ひ是非がない。何事もわたしにお任せなされ。よいやうに致しますわいなア。

ト岩次の大小を取る。

きの　サア、お紺もお岸も、皆一緒に奥へ〳〵。

皆々　サア、ござんせいなア。

ト騒ぎ唄になる。この一件皆々奥へ入ると、直ぐに葵の上の唄になる。向うより貢、黒羽二重の袷、黒縮緬の単衣羽織に、右の下へ下坂の刀を差し、足早にツカツカと出て來て花道に立ちとまり

貢　此やうに詮議詰めても、萬次郎さまのお行くへ知れぬと云ふは、イヤ〳〵、どう思うても油屋へ見えねばならぬ。マア、なんでも油屋へ行て。

トこなしありて本舞臺へ來て、門口へ入らうとする。奥よりお岸出て

きし　ヤア、貢さま。

貢　お岸どの、

きし　コレ、萬次郎さまがござんしたわいなア。

貢　ヤア。して、どこにござる。

きし　サイナア、もそつと先にござんしたによつて、この間からお前が、毎夜々々尋ねてござんす事を云うてゐるうち、意地惡の萬野が出て、何のかのと惡體口を云ふゆゑ、もしひよつと萬次郎さまの短氣でも起れば惡いと思うて、大林寺の裏門の方へ、ちつとの間やりましてござんすわいなア。

貢　ムウ、そんなら大林寺の裏門に。

ト行かうとするを留めて

きし　コレイナア、まだ何やかや云ひ殘した事もあり、萬次郎さまも、わたしに用があると云はしやんしたれば、是非追ツつけ戻つて見えるわいなア。

貢　ハテ、其やうにぺん〳〵とした事ぢやない。この四五日行くへの知れぬも、元は下坂の刀ゆゑ。その下坂の刀が手に入つたわいの。

きし　エ、。

貢　即ちこれに差してゐるのが下坂の刀ぢや。これを一

時も早う、萬次郎さまのお手へ渡さうと思うて、毎晩毎晩尋ねてゐるのぢや。マア、大林寺へ行て。

ト また行かうとするを留めて

きし　お前が行かしやんした跡へ、萬次郎さまがござんして、わたしが逢へばよけれども、また間違うて、せんぐり跡へ／＼と、尋ね廻らねばならぬわいなア。

貢　イカサマ、そこもあるわい、

きし　どの道わしに逢ひにござんすほどに、ちつとの間待つてあげまして下さんせいなア。

貢　そんならさうせずはなるまいが、エヽコレ、氣の揉める事ではあるぞ。

きし　そりや道理でござんすが、わたしも大抵氣の揉める事ぢやござんせぬ。コレ、貢さま、アノ奥へ來て居る阿波の客が、わたしもお紺さまも身請けして、明日は國へ連れて去ぬると云うて居るわいなア。

貢　すりや、お紺もこなたも身請けして。

きし　アイ。

貢　明日は本國阿波へ出立。

きし　どうぞお紺さんもわたしも行かぬ、好い思案はあるまいかいなア。

貢　ムウ。

ト 手を組み思案するこなし。奥より千野吉野走り出て

千吉　お岸さま／＼、爰にかいなア。

きし　オヽ、千野吉野、何ぢやぞいなう。

吉野　何ぢやどころかいなア。舞の會の始まつてあるのに、お岸はどこへ行たと、北さまがやかましう云うてござんすわいなア。

千野　オヽ、どなたぢやと思うたら貢さま、ようお出でなされましたなア。

貢　そんなら奥の舞の會があるか。

千野　アイ、伊勢音頭で座敷踊がござんす。

吉野　阿波のお客のお望みでござんす。

千野　また御機嫌が損じたらやかましい。サア、お岸さん、ござんせ／＼。

きし　サア、行くわいなう。申し貢さま、今の思案を頼んますぞえ。

千吉　サア、ござんせいなア。

ト 兩人無理に伴れて入る。此うち始終合ひ方にて、貢こなしあつて

貢　先達て藤浪さまのお心添を以て、仰せ下されし本國

阿波の伯父御、蜂須賀どのの謀叛に荷擔の武士、徳島岩次、城下の町人藍玉屋の北六、この者ども窃かに伊勢へ入込み、萬次郎とのに害をなし、殿より仰せ付けられし下坂の刀を奪ひ取り、萬次郎さまの越度より、殿をば取つて罪に落し、阿波一國を押領せんとの伯父御の企み。折紙を騙り取つたも皆この手筋。引ツ捕へて詮議とは思へども、何を云うても岩次と云ふ侍ひ、藍玉屋北六と云ふ町人、兩人ともに人相恰好、藤浪さまより聞いたるとは拔群の相違。何にもせよ、これには仔細のありさうな事。その上お岸お紺兩人とも身請けして、明日は本國へ歸るとの事。もし彼奴等が伯父御大學どのゝ廻し者ならば、國へ歸しては、先達て騙り取つたる折紙を、伯父大學へ渡すは治定。さすれば折角手に入つたこの下坂の刀も、折紙なくては何の詮なき鈍刀同然。その折紙は正しう阿波の岩次と云ふ侍ひが。こりや今夜は爰を動かれぬわいやい。

トこなしあつて、

萬野　何ぢや、貢さま來てぢや。ドレ／＼わしが逢うて、お斷わりを云ふはいな。

ト云ひ／＼奥より出で、

オヽ、貢さま、お出でなされ。

貢　萬野、この間は逢はぬなう。

萬野　毎晩々々お出でる噂は聞いたれど、この間は阿波のお客で、とんと座敷が離されぬによつて、ようお目にかかりませぬが、貢さま。アヽ、お氣の毒ぢや、今夜もお紺さまはな。

貢　そんなら矢ツ張り阿波の客で。

萬野　アイ、今日は芝居の初日で、お客と連れ立つて見物に行かしやんしたが、戻りに大坂屋で立てぢやといな。

貢　そんならお紺は、まだ戻らぬか。

萬野　アイ、まだでござんす。

トこなしあつて云ふ。

貢　エヽ、ちよつとお紺に逢ひたいものぢやが、萬野、どうぞ働らいてはくれぬかい。

萬野　そりやモウ、お馴染のお客様の事ぢやによつて、どうぞしてあげたいけれど、お客は阿波のお侍ひ、モウモウねちみやくで、粋と云ふものはこれ程もござんせぬ。所詮ちよつとの首尾もなりますまい。マア、今夜はお歸りなさんせ。

貢　サア、そんならお紺には逢はれずば逢はいでも大事

ないが、ちつと爰で待ち合さねばならぬ事もあり、コレ、萬野なんと、奥の舞の會を見ても大事あるまいか。

萬野　イエ〳〵、そりやなりませぬ。奥のお客は猶席狹いお方でござんすによつて、外のお客と座敷を一緒にしたら、大抵やかましい事ぢやござんせぬ。舞の場へ顔出しやなぞしておくれなえ。わたしらが迷惑するわいなア。お前、今宵中待つて居たとて、所詮お紺さまには逢はれぬほどに、ちやつと〳〵去になされ。一文にもならぬ客に付合うてゐるのも鬱陶しいものぢや。

ト貢ムッとするこなし。

ホヽヽヽ、わたしとしたことが、ひよつかすか。貢さん、必らず氣にさへておくれなえ、シタガ、其やうに爰にゐたきや、誰れぞ代りの女郎さんを呼ばしやんせいなア。

貢　そりやモウ、どうなりとせうが。

萬野　ムウ、代りを呼びなさるか。ヤレ〳〵、ようお出でたなア。そんならマア酒でも出さうわいな。

トそこに在るとさん銚子を持つて出る。

貢さま、お遊びなさるなら、お腰の物を、預かりませう。

貢　アノ腰の物を。

萬野　オヽこの里の習ひを知らぬか何ぞのやうに、ドレ、お預かり申しませう。

ト貢が一腰に手をかくるを突き退け。

貢　イヤ、腰の物は滅多に預けぬ。

萬野　そんなら去にされ。

貢　ヤア。

萬野　ハテ、伊勢の茶屋の腰の物を預けるは昔から。それに預けられぬとあれば、此方もお客にはしにくうござんすほどに、早うお歸りなさんせ。

貢　イヤサ、ちつと爰に。

萬野　用があるなら、腰の物を預かりませう、

貢　でも、この。

萬野　預ける事が否ならお歸り。

貢　サア。

萬野　預かりませうか。

貢　サア。

萬野　お歸りなさるか。

貢　サア〳〵〳〵。

萬野　エヽ埒の明かぬ。キリ〳〵去んでもらひませうぞ。

嘉永五年四月河原崎座上演

岩井粂三郎のお紺　八世市川團十郎の貢

ト慳貪に云ふ。貢ギツクリ思案のこなし。

喜助　イヤ、その腰の物、私しが預かりませう。

ト喜助、料理人の姿にて出る。

貢　オヽ、料理人の喜助か。

喜助　貢さま、毎晩お出でなさるゝさうにござりまするが、私しもこの間は居續けのお客様で、一向忙しうござりまして、お目にかゝりませぬ。

萬野　コレ、喜助どん、そんならこなたが預かるか。

喜助　ハテ、貢さまも今でこそ、藤浪さまの御家來なれど、元はお歴々のお侍ひ様と聞き及んでゐる。ぢやによつて、輕はずみに女子のこなさんへは、お渡しなされまいと推量して、身こそ卑しい料理人の喜助なれども、男の端くれ、おれが預かる。ハイ、私しがお預かり申しますからは、お氣遣ひはござりませぬ。

貢　ムウ、然らば其方に預ける大事の一腰、麁末のないやうに頼むぞよ。

喜助　しつかりと預かりましてござりまする。

萬野　ドレ、そんなら小口の茶の間へやりますやうに、喜助どん、後から連れましてごんせ。お紺さまの代りに、わしがよい女郎を世話してあげようか。

ト奥へ入る。喜助こなし、門口を見る事あつて

喜助　イヤ、申し貢さま、憚りながら、ちよつと申し上げたい事がござりまする。

貢　おれにか。

喜助　どうぞちよつとあれへ。

貢　オヽ。

ト合ひ方になる。貢喜助向うへ出で下に居て

喜助、何の用ぢや。

喜助　ハイ、いま改めて申し上げまするは如何なれども、私しが親どもは、あなたの御親父様の仲間奉公。親旦那のお供して、阿波より志州の鳥羽へ御逼塞。それゆゑ親ども奉公を引き、この伊勢に僅かの暮らし、老病の枕元へ私しを呼び寄せ、いま福岡孫太夫どの、御養子貢さまは、我れ〳〵親子が古主の若旦那、隨分蔭ながら心を付けて忠義を盡せと親どもの遺言。この事はあなたにも、よう御存知の儀、申し出しましたは、及ばずながら此やうに、毎日毎晩遊所へお出でなされましては、お身の禍ひを招く道理。もしひよつとあなたの越度にもならうかと、古主を大切に存じますから、ちよこざいな御意見、貢さま、必らずお心に障へられて下さりますな。

貢　下樣に似合はぬ、古主を忘れぬ其方が意見、悪うは聞かぬ。忝ない。その心を存じて居るゆゑ。それその一腰も其方に預ける。何を隱さう、その一腰は、この度本國、阿波より、今田萬次郎さまへ、殿の御意を以て求め歸れとある、青江下坂の刀。

喜助　エ、アノこれが。

ト此事萬野出かけ聞いて、恟りしてツイと入る。

貢　伯母者人の志しを以て、貢が手に入つたこの刀を、萬次郎さまに持たせ、本國へお供申さうとは思へども、刀の折紙を騙り取られ、この詮議をせう爲に、毎晩々々これへ來るのぢや。必らず放埒ではないほどに、心遣ひは無用々々。

喜助　ムウ、そんならこの折紙を騙つた奴が、この油屋の。

貢　サア、しかとは知れねど、もしやと思ふは彼の

ト喜助に囁き。

ぢやて。

喜助　そんならアノ。

貢　コリヤ、大事の詮議、密かに〳〵。

ト喜助氣を變へ

喜助　申し、奧で一つあがりませぬか。

貢　イカサマ飮まうか。

喜助　サア、お出でなされませ。

ト奧にて小袖物狂ひの靱猿の唄になり、貢喜助、奧へ入る。矢張り右の合ひ方に鼓入る。奧より萬野次郎助北六、右三人窺ひ出で向うへ出で

萬野　申し、今の樣子お聞きなされましたか。

北六　貢が差いて居る一腰が青江下坂とは、これを盜めと云はぬばかりの今夜の首尾。

次郎　この次郎助が盜んで、國元へ高ふけりとしませうか。

北六　イヤ〳〵、それでは詮議の足がつく。ハテ、どうしたものであらうな。

萬野　そりや斯うせうわいな。わたしが盜んで爰を駈落ち。ハテ、二三日も影を隱すワ。其うちにお前方は、國元へお歸りなさんせ。そこへわたしが下坂を持つて下つて、お渡し申したらよいぢやないかいな。

北六　さう手番ひが行けばよいぢやて。

次郎　萬野、あぢようやるかよ。

萬野　やらいでわいな。申し、あぢようやつたゝ、ズッシリとおくれるであらうな。

北六　そりや知れた事いやい。內外の事まで打明けて置いたわれが事、此方の望み成就したら、褒美どころぢやない。阿波へ引取つて、一生樂々と暮らさすわいやい。

萬野　エ、有り難い。それ聞いたら、一倍精を出さねばなるまいわいな。

次郎　そんなら貢めが逃げぬうち。

萬野　イヽエ、滅多に去ぬ事ぢやござんせぬ。奧の舞のドサクサの間に、やりかけうわいな。

北次　早う〳〵。

萬野　合點でござんす。

ト矢張り右の合ひ方にて、三人こなしあつて入ると、入違うて岩次、我が刀と貢が腰の物を兩手に持ち窺ひ出で

岩次　まだな事を云ふ奴等ぢや。この刀の寸尺が丁度合ふを幸ひ、身を入れ替へて置きやよい事を、馬鹿らしい。

ト云ひ〳〵兩方の目釘を拔き、刀の身を入れ替へる。この時喜助ソッと出かけ、この體を見て恟りし、又ちやつとすッ込む。岩次、右の刀を入れ替へて、元のやうにして兩手に持ち

貢めが去にをる時、その先刻の預けた刀をくれいと吐かすワ。我が物ぢやによつて取つて差し居るワ。去に居つた跡に殘つたこれ、この刀の身は靑井下坂。うまいうまい。

トこなしあつて岩次、二腰を持ち奧へ入ると、貢奧より出で

貢　このまた萬次郎さまはモウ見えさうなものぢやが。

ト云ふうち奧より女郎お鹿、着付け、扱帶にて、手に小杉を持ち、出て來て

しか　貢さん、どこへ行きぢやいなア。マア下に坐りいなア。

貢　お鹿、變る事もないか。

ト貢が手を取り下に置き、煙草盆引寄せ煙草をのむ。

アイ、よう問うて下さんした。

ト吸ひつけた煙管を貢へ差出す。貢取つてのむ。

しか　貢さん、キッと嬉しいぞえ。

ト貢合點のゆかぬこなしあつて又心付き

貢　ムウ、そんなら萬野がアノこなたを。

しか　アイ、お紺さんと云ふ馴染のあるお前に、何のかのと云うたは、皆わたしが惡性なれど、どうも思ひ切られぬ。度々あげた文の御返事、見る度每にわたしが嬉しさ、

推しておくれいなア。

ト聞いて貢、合點のゆかぬこなしにて

貢 何ぢやゝらどぎ〳〵とをかしい物の云ひやう、こなたの方から狀の來た覺えもなし、此方から返事した覺えは猶ないぞや。

しか エヽ。

ト驚ろきたるこなしにて氣を替へて

ホヽヽ。オヽ笑止。わたしとした事が、なんのマア今爰で、改めて臺詞せいでもよい事を、お紺さんと譯をつけて、わたしに逢うてやらうと、云うて下さんした時の嬉しさ。どうなりとしてお氣に入らうと思うて、云うておこしなさる度毎に、一度も只の返事をあげなんだが、ちつとなりと可愛がつてもらひたさでござんすわいなア。

貢 とんと合點がゆかぬ。一體そりや何を云ふのぢや。

しか 何を云はうぞいなア。一體お前に、わたしが云うてあげた事、得心しておくれぢやないかいなア。

貢 何をいの。

しか イエ〳〵、其やうにしらッ〳〵しう云はしやんすな。お前の方から返事をおこさしやんしたぢやないかいなア。

貢 何日いの。

しか 慥かな返事をおこして置いて、今更そんな事を云はしやんすは、そりや胴慾でござんす〳〵わいなア。

ト貢の膝に取付き泣くを突き退け

貢 さま〳〵の事を云ふわいの。

トこの時奥より

岩次 サア〳〵、來やれ〳〵。

ト岩次、お紺が手を引き、後より北六、おきしを伴れ次郎助おきぬ定七丈八千野吉野出る。貢、お紺を見て

貢 お紺。

こん 貢さま、きつう派手な事ぢやなア。

岩次 ハテ、それをナニ其方が構ふ事。サア、爰で呑まう呑まう。

千吉 アイ〳〵。

トとさん銚子を持つて行く。上の方へお紺岩次北六おきし次郎助おきぬ丈八定七千野吉野クルりと並ぶ。舞臺先皆々の眞中に貢お鹿ゐる。

貢 そんならわがみは内に居たか。

こん 知れたことといなア。

貢　ムウ、内に居るものを、まだ戻らぬと、なんの爲に嘘をつかすのぢや。

こん　わしや知らぬわいな。そりやお前の心からぢやわいな。

貢　おれが心からとは。

こん　この開帳にござんすお客様で、間違うて逢はぬを幸ひ、ちやんとモウ代りを呼んで、ほんに殿達ほど水臭いものはない。岩さま、さうでござんせうなア。

岩次　ハテ、淺相な。身共はあんなむちやはせぬてや。ナウ、さうぢやないか。

北六　さうとも／＼。こちらがやうに、一人を此やうに守つてゐる者は少いてや。

次郎　ちよこ／＼顏を替へるも、また面白からうわい。

定七　イエ／＼、あれもこれも掃き歩くと、箒客ぢやと異名をつけまする。

皆々　なんぢや箒。

ト貢の顏を見て、ハヽヽヽと笑ふ。貢ムッとして又こなしあり

貢　イヤコレお紺、この鹿はおれが方から呼んだのぢやない。この間からわがみにちよつと逢はねばならぬによつて、毎晩々々來て見れば、流連で逢はれぬゆゑ、今夜待ち合して逢はうと思うて、萬野を頼み、奧の舞を見せてくれいと云へば、ならぬと云ふ。酒一つ呑まうと云や、誰れなりと呼べと云ふ。呼ばねば今夜は去んでくれいと、追ひ出すやうに云ふによつて、是非なく誰れなと酒の相手に呼べと云うたら、この鹿をおこした。何にも譯のある事ぢやない。わが身に逢はうと、ほんのせう事なしに呼んだぢやわいの。

ト聞いてお鹿ムッとして

しか　コレ、貢さま。

ト貢が胸倉を取つて

お紺さんの前ぢやと思うて、そんな事云はしやんすと、皆様の聞いてぢや手前でなりと、有やうに云はにやならぬわいな。ならぬわいな。

ト振り廻す。貢又お鹿を突き退け

貢　有やうに云ふとは何を云ふのぢや。

しか　云はいでかいな。コレ、皆様も聞いて下さんせ。わたしや此お方に惚れました。アイ、文付けました。その時貢さん、なぜに否ぢやと云うて下さんせぬ、生中そもじの志し嬉しいの、イヤ近いうちに逢うて、しつぽりと

話しせうのと、可愛らしい返事して置きながら、今さら覺えがないとは、そりやお前卑怯でござんす。さもしいわいなア。

貢　ほんにマア、まざ〳〵しい事を云ふわい。

こん　如何にわたしへの當付けぢやと云うて、お鹿さんを呼ぶとは、ほんにあんまりの事で、なん、と皆さんをかしいぢやないかいなア。

北六　イカサマ、蓼喰ふ蟲も好き〴〵と云はうか。

次郎　餘ほどのへちもの喰ひ。

丈八　ほんに、こりやをかしうござります。

皆々　ハヽヽ。

ト笑ふ。お鹿腹立ち、ズツと行き、お紺が側へとんと坐る。

しか　お紺さん、お前の目からは成る程をかしうござんせう。アイ、わたしが顏が皆さんもをかしからう。シタガ何ぼう不器量でも、見事人並に商ひもして通る。また切れることも切れやんす。コリヤ、この首で商ひをするのぢやない。云ふに云はれぬよい所があるゆゑ、ついぞお客に一度もはかれた事はないわいなア。その大勢のお客さま方へ、無心のたら〳〵云ひさかして、身付きの着替へもござんした。簪まで工面のなりたけ仕盡して、ほんに今では、わしや貢さまゆゑに、大體不自由な目をしてゐるわいなア。

ト貢お鹿を引廻して

貢　大概な事は女子と思ひ聞捨てにもせうが、大勢の中で貢に金をやつたとは、そりや何日、ド、どう云ふ事で金をおこした。聞捨てにならぬ。サ、その譯云へ〳〵。

ト焦いて云ふ。

しか　イヽエ、譯を云はうより慥かな證據は、お前からおごさんした文見せうか。

貢　オヽ、見よう。

しか　いま取つて來る。待つてゐさんせ。

ト奧へ走り入る。

岩次　アヽ、爰で文存まうと思ふたら、しゆんだ臺詞で理に入つた。コリヤ、その枕おこせ。

吉野　アイ〳〵。

ト枕持つて行く。岩次横になる。

北六　ハテ、この臺詞を肴に呑めるではないか。

きし　そんな意地の惡い事は云はぬものぢやわいなア。

トお鹿、狀三本程持つて走り出で

しか　慥かな證據は、今、讀んで聞かすぞえ。
ト文を開き讀み、此うちお紺、寢轉んで岩次に凭れかかり、煙草のんでゐる。
ようぞやお文下され、淺からぬ御しんもじのほど嬉しく存じ候ふ、左やうに候へば、ちと〳〵手支へ致し候ふ事候ふまゝ、御無心ながら金子五兩おこし下され候へば山々喜び申し候ふ、この文には五兩。又この文には三兩、又は二兩と、ほんに文の來る度々に、無心を云うておこさんせぬ事はないぞえ。その度々に一兩も斷わり云うた事はないわいなア。
ト此の文讀むうち貢、お紺が顏見ると、お紺ツンと顏を背け煙草をのんでゐる、貢お岸と顏見合せ、お岸氣の毒なこなし。貢方々の顏を見たりいろ〳〵あつて
貢　ドレ。
ト文を取つて殘らず見て
こりやおれが手ぢやない、似せ筆ぢや。
しか　エヽ。
貢　元より金の無心云うた覺えはない。一體こりや誰れを頼んだのぢや。
しか　中立ちは仲居の萬野でござんす。

貢　萬野を爰へ呼べ。
しか　呼ばいでかいな。萬野〳〵萬野々々。
丈定　萬野々々。
萬野　アイ〳〵。
ト奥より萬野出る。貢、萬野を引付け
貢　萬野、マア、下に居や。コレ、其方が仲立ちで、お鹿から文の來た覺えもなし、まして金を取つた覺えはないが、たんであんな事云はんすのぢや〳〵。
トお鹿、萬野を引付け
しか　コレ萬野、其方を頼んだは、今やこの頃の事ぢやないぞや。後の月の初め、マア文をやれと云やつたによつて、耻かしながら書いてやつたら、直ぐに返事が來て、その次へコレ〳〵、五兩の無心狀。それから後へ二兩三兩、云うて來る度々に、皆其方に渡したが、その金は、どうしやつた〳〵。
萬野　コレお鹿さま、何をウカ〳〵した事お云ひぢやぞいなア。お前から受取つた金は、殘らず貢さんに渡したわいなア。
貢　ヤイ〳〵萬野、どこに金を受取つた。
萬野　ソレお前に。

貢　ヤア。
萬野　エヽ、しらくしいこと云ひないな。お前があれ程受取つて置きながら、アヽ聞えた、お紺さまがそこに居なさるによつて、それで其やうにとぼけかいなア。そりやお前、無得心ぢやぞえ。折角お鹿さまがあげなさつた金を取らぬとは、あんまりしらにせではあるわいの。
貢　覺えもない貢に、わりや云ひかけをするのぢやな。
萬野　覺えのない者がこの無心狀。
貢　こりや、おれが手蹟ぢやないわい。
萬野　サイナ、お前の方で人に書かしておこさんした事、わしが知ろかいなア。
ト ずつけり云ふ、貢堪え兼れ、萬野の方へ行かうとする。
きし　アヽコレ。
ト留めに行かうとするを北六、お岸を留め
北六　何にもわれが構ふ事はないわい。
萬野　お前の云ひ譯がないとて、わしが知らうか。サアヽどうなとさんせく。
ト 體を貢に突きつける。貢摑みつかうとしてこなし、氣を變へ

貢　女を相手にするは大人氣ない。この禮は重ねて云ふ。萬野、さう心得てゐい。
ト 胸を靜め坐る。
しかし萬野、今の一言で其方の疑ひ晴れた。ほんに女郎が客を騙すはお定まり。それに女郎を騙すとは、アノ爰な男傾城めが。
ト 貢を睨めつける。
北六　ハヽヽヽ、皆聞いたか。おいらは田舍者なれど、藍玉を商ふお庇で、見ん事金も澤山に持つてゐる。こちらが國で云ふには、伊勢と云ふ所は、無性に錢金を欲しがると聞いたに違はず、お山を騙して金を取るとは、ハテ變つた流行なア。
次郎　取分け御師の中で薄い奴等は、錢金見るとヒリくと震ひさらす。大方あれが伊勢乞食と云ふのであらうぞい。
丈八　アヽおれも男がよか女郎を騙して、金貰ふになア。
北六　ても、厚い奴等ぢやなア。
皆々　ヘヽヽヽハヽヽヽ。
ト 皆々貢を見て笑ふ。

しか　ほんにマア、どうしたら腹が癒ようぞ。いつそ喰ひ
　ついてこまそ。
　ト貢に武者振りつくを取つて引付け
貢　身不肖なれども福岡貢、女を騙かり、金を取る所存
　はない。馬鹿な奴の。
　トお鹿を取つて突き放す。
こん　イヽエ、滅多に潔白には云はれますまい。
貢　そりやなぜ。
こん　お鹿さんと譯もなし、金も借らしやんせぬお前が、
　なんで今夜、お鹿さんを呼ばしやんした。
貢　それもアノ萬野が。
こん　サイナア、今夜お鹿さんを呼ばしやんしたばつかり
　で、お鹿さんと譯もあり、無心狀を遣らしやんしたも、
　金を取らしやんしたも、皆お前ぢや。
貢　ヤア。
こん　とサア、斯う云ふわたしから思ふもの、外のお方は
　猶の事。
貢　でも。
こん　それ程手詰めの金なら、マアわたしに云うてくれた
　がよい。僅かな金を見とおない仕方、所詮わたしに云う
　ても埒は明くまいと思うての事かえ、そりやモウ腑甲斐
　ないわたしでござんすによつて、さう思はしやんすも尤
　もでござんす。忝ならござんす。よう隔てゝおくれた。
　きつと禮云うたぞえ。これから隨分、お鹿さんをいとし
　ぼがらしやんせ。わたしへの面當てぢやと云うて、同じ
　内の女郎を捕へ、何のかのと、まだその上の金の無心。
　ほんに見下げ果てたと云はうか。殊に女郎は互ひに張り
　のあるもの、欺されたの騙られたのと、大勢の中で藤山
　立てゝ、側で聞いて居るその辛さ、ほんにあんまりさも
　しい事さしやんしたと思や、口惜しいやら恥かしいやら、
　わしや今爰へ消えたうござんしたわいなア。
　トこなしあつて泣く。
貢　イヤサ、例へどのやうな事があつたとて、女を騙し
　金を取るやうな、貢と思ふかい。
こん　イエ〳〵、もう何にも云うて下さんすな。聞きたう
　ござんせぬ。お前の方から隔てゝ置いて、今さら何を云
　はしやんしても、わたしが耳へは入らぬわいなア。
貢　サヽヽ、その腹立ちも尤もぢや。こりや正しうあ
　の萬野めが仕業、と云うて女の事、云へば云ふ程馬鹿に
　なる。何にも云ふ事はない。追ツつけ國へ歸ると元の身

に立歸る。その時其方を請け出し、武士の女房。

こん　否でござんす。

貢　ヤア。

こん　お前、國へ去んで侍ひになると云はしやんすが、わしやその侍ひがき、つい嫌ひでござんす。

貢　ナニ、侍ひ嫌ひぢや。

こん　アイ、わたしが父樣も元は侍ひ、朋輩の讒言とやらで永々の浪人、常々云はしやんすには、コリヤ必らず侍ひと二世の約束などすなと、くれ〴〵とのお詞。それぢやによつて、わしや侍ひは否でござんす。

貢　そんなら初めからさう云はぬ。今となつてなんで侍ひが否になつた。

こん　ハテ、初めから云はうにも、お前は御師、何時なりとわたしが身儘になつたら、御師を止めさせまして町家住居、町人と女夫になれば、父樣のお詞も立つ。わしや侍ひが嫌ひ、町人がよいわいなア。

ト貢こなしあつて

貢　ムウ、おかぐすも云へば云はるゝと、出來ぬ事を云ふは、こりや何ぞ急に思案が變つたな。そんならいよいよ女房になる事は否ぢやな。

こん　イヽエ、否ぢやないぞえ。ハテ、侍ひを止めて町人にならしやんしたら、例へ貧しい暮らしでも得心でござんすほどに、町人になつて下さんすか。

貢　ぢやと云うてそれがマア。

こん　ならぬかえ。お前がならにや、わたしも否でござんす。ナア岩さま、さうぢやないかいな。コレ、寢た顏せずとお聞きいなア。

ト岩次に凭れかゝり、こなしある。貢この體を見てこなしある。

貢　よいワ。われが侍ひ嫌ひなら、おれも町人は嫌ひぢや。否な侍ひに今までよう附合うてくれた。忝ない、禮はまた緩りと云はう。

トずつと立つ。

こん　そんならいよ〳〵、これ限りでござんすぞえ。

貢　念には及ばぬ。勝手にしをれやい。

トお紺の方へ行かうとするを萬野留めて

萬野　コレ、大事のお客の付いたお紺さま、指でもさえてもらひますまい。こなたのやうな無法者は間夫客にはせぬ。キリ〳〵去んでもらひませうぞ。

貢　オヽ、去ぬる。例へ居いと云うても爰には居ぬ。先刻

に預けて置いた腰の物をおこせ。

ト喜助刀を持つて出で

喜助　オツト、お預かり申したはこの喜助、ちやつと差いてお歸りなされませ。

ト岩次が刀を貢に渡す。貢腹立ち紛れに引ツたくりて差す。

萬野　エヽ、去ぬるならキリ〳〵去んだがよいわいの。

ト表へ突き出す。

しか　コレ、わしを騙した譯立てさんせ。

ト貢に取付く。

貢　エヽ、知らぬわい。

ト蹴飛ばし

マア、萬次郎さまに逢うて。

ト云ひ〳〵向うへ走り入る。喜助後より門口へ付いて行く。花道際にて貢が後を見送り、マアあれでよいと云ふこなしあつて、ちよつと天を拜し、ツイと奥へ入る。

萬野　ほんにマア、きつい短氣者ではあるぞ。

しか　たうとうわしをさゝはさにしくさつた。

きし　アヽ、どうぞ今のお方に逢うて下さんしたらよいが。

北六　エヽ、又ならずが事か。コリヤ、わいら、お岸を奥へ伴れて行て寢所へ入れて置け。そこへ行くぞ。

千吉　畏まりました。

丈定　サア、お鹿さまもお出で。

しか　わしも奥で酒でも飲も。

萬野　よいわいな。わしが臺詞してやるわいな。

千吉　サア〳〵ござんせいなア。

ト合ひ方になる。千野吉野お岸を連れて入る。丈八定七お鹿萬野入る。岩次起きて、三人お紺が側へ寄り

岩次　お紺でかした。よう貢を退いてくれたなア。

こん　そんなら今の樣子を。

岩次　寢た顏で殘らず聞いた。

北六　貢と今の詞詰め。

次郎　えらいものぢや。

岩次　貢とさへ手を切つたら、身共が請け出し、國元へ連れて歸り、コリヤ、德島岩次さまと云ふ、お侍ひの奥樣だ。喜べ〳〵。

こん　オヽ、辛氣。今云うたを、何と聞かしやんしたぞいなア。

岩次　何と聞いたとは。

こん　わしや侍ひは大嫌ひでござんすわいなア。

岩次　サア、それは貢と手を切る爲の僞はりでないか。

こん　イヽエ。

岩次　そんなら眞實に侍ひは嫌ひか。

こん　アイ、ほんまに侍ひは嫌ひでござんす。申し、お前もわたしを請け出し、女房にせうと思うてなら、侍ひを止めて町人になつて下さんせ。

岩次　ハテ、變つた物好き。お紺、すりやこの岩次、武士を捨て、町人になつたらば、いよ〳〵そちや女房になるぢやまで。

こん　町人にならしやんしたら、女房になるわいなア。

岩次　しかとさうぢやぞよ。

こん　オヽくど。

ト岩次北六次郎助、三人顔見合し、

北六　戀が叶うて、さぞ滿足にあらうな。

岩次　岩次さま、お紺があの心底を聞いては、こりや化の皮を顯はさねばなりませぬ。

北六　オヽ、町人ならば女夫にならうとは、よい壺へ持ち込んだそれが仕合せ。身共が指圖の通り、よく岩次に成りおほせた。でかした〳〵。

岩次　この褒美には國へ歸りましたら、藍玉を買ひ込んで、ズッシリと儲けまする。此お願ひ、御前よろしう頼み上げまする。

北六　氣遣ひしやるな。伯父大學どのは身共次第、その願ひは聞き届けて遣はさう。

岩次　エヽ、有り難うござります。

北六　お紺、其方が望みの通り、北六は町人。

次郎　藍玉屋の女房に、お紺とはキッシリと極つた。

北六　エヽ、爰な。

岩次　あやかり者め。

ト背中を叩く。

こん　マア〳〵待つておくれいな。わしやとんと合點がゆかぬ。藍玉屋の北六さまと云ふは、お前ぢやないかいな。

北六　さればサア、藍玉屋の北六と云ふ町人になつて居たには、深い様子ある事サ。

こん　ムウ、そんなら阿波の御家中、徳島岩次さまと云うたは。

岩次　誠はお出入りの町人、藍玉屋の北六ぢや。

こん　何の爲に其やうに、入れ替つて居やしやんしたのぢやえ。

岩次　これには段々曰く因緣、藍玉屋北六が岩次さまと入れ替つて、この伊勢に逗留するその譯は、あの貢めが古主今田萬次郎め、殿の仰せを請けて、青江下坂の刀を求めに、この伊勢へ出立、又おいらは伯父御大學さまに頼まれ、その下坂の刀を横合から引ッたくつて、國へ持つて去んで、伯父御の手から武將へ差上げさつしやると、大學さまは上首尾、殿は不首尾。その誤りで萬次郎めはれこさ。併し、伊勢支配藤浪、萬次郎とは緣者、そこで阿波淡路と隔てゝ、また萬次郎が岩次さまを、ろく／＼に知らぬを幸ひ、道中から入れ替つて、この北六が岩次さまに成りおほせ、まんまと伊勢路へ入込んだ。所に萬次郎が身の上を世話する福岡貢め、此奴ぐるめにしまうてくれうと、樣々に手を廻して、大方十が九ッ、二人ながら命はない。時にあの貢めを、此やうに意趣遺恨を含む、元はと云へばお紺、われぢやて。逗留のうちにフト油屋へ來て、われを見ると、えらう惚れたによつて、とつくりと萬野に聞けば、われと深い馴染ぢやげな。それからモウ／＼、けたいが悪うなつて、おのれ貢めを片付け、われを女房にせうと思うた、願ひが叶うて此やうに、有り難い事はないわいやい。

こん　とんとそれで樣子が知れたわいなア。アノ、そんなら、いよ／＼わたしを國へ連れて去んで、女房に持つて下さんすかえ。

北六　ソリヤ北六、お紺が方から女房に持つてくれるかと、詞詰めだぞよ／＼。

次郎　今までヒン／＼したとは引替へて、お紺の方から急き來たぞや／＼。

岩次　こりやモウどうも堪えきれぬわいやい。

ト　お紺に抱きつき

岩次さま、この喜びに金はなんぼでも續けまする。お前もお岸を請け出さつしやりませ。

北六　こりや過分な。これまで段々世話になる其方ゆゑ、身共も遠慮いたして居つた。さうしてたもれば、身が戀も叶ふといふものだ。

こん　イヤ、北六さまえ。

岩次　ヤア／＼。

こん　わしやまだお前に、問ひたい事がござんすわいなア。

岩次　何なりと、問うたり／＼。
こん　外の事でもござんせぬが、お前の懐に大事さうにしてゐやしやんす袱紗包み、ありや何でござんすえ。
岩次　ヤアあれか。
こん　何やら書いた物さうな。ちよつとわたしに見せて下さんせぬかえ。
岩次　イヤ、ありや女子の見る物ぢやない。ありやソレ、オ、さうぢや。琴平さまの守ぢやわいの、
こん　ても、きつい嘘々。
岩次　なんで／＼。
こん　あのやうに肌身離さず、大事にかけてゐやしやんすからは、ありやどうでもお前の色さんの起證と、わしや思ふわいな。
岩次　ハテ滅相な。
こん　さうでなか見せて下さんせ。
岩次　でも、これはどうも。
こん　見せさしやんせぬは、矢ッ張り起證ぢや。
岩次　なんのマア。
こん　見せとむなか措かしやんせ。ようござんす。其やうにお前の心にかけごがありや、わたしがなんぼう誠を盡したとて、何の役に立たぬ事。エ、／＼、辛氣な事ではあるわいなア。
　ト腹の立つこなし。岩次、眞面目になる。北六次郎助氣の毒がり
北六　コレサ北六、お紺があのやうに實を盡すに、なぜ物を隠すぞい。その懐中な袱紗包み、出して見せてやりやいなう。
次郎　心が變らぬうちに、出したく／＼。
岩次　エ、、二人ながらやかましい。コレ、この懐な袱紗包みは彼の折紙。
北次　ヤア。
岩次　ナ、折ナ、紙々のお札やお守でござるわいなう。
北六　ムウ、それなれば迂濶に出されぬも尤も。
こん　よいわいなア。見せられぬものを、見ようと云うはわたしが無理ぢや。北六さん、もうわたしや請け出さるる事は否でござんす。女房になりやせぬぞえ。變替へつてござんす程に、さう思うて下さんせ。こんな所に居ると、一倍腹が立つ。こちや二階へ行て、ドリヤ寐ようか。
　ト二階へ行かうとするを、岩次とめて

岩次　コリヤ待つてくれ。てもさても、女郎に似合ぬ悋氣深い奴。大事の物なれど、其方の疑ひ晴らしに、袱紗ロ渡す程に、爰で明けるともしひよつと、外の者が見ては大事ぢや。二階へ持つて行て、ソツと明けて見やいの。

ト渡す。

こん　そんなら、二階へ行て

岩次　明けて見て疑ひ晴らしや。

こん　待つてゐるぞえ。

岩次　早う行きや。

こん　アイ。

ト唄になり、お紺、右の袱紗包み持つて中二階へ上がる。

北六　時に北六、あの折紙があつても、肝心の下坂がなくては、明日出立もならぬ。今夜中に貢めを殺らして、下坂を奪ひ取る、手短かな思案をせずばなるまいてや。

岩次　オツト、そこらはぬからぬ、我れらがあぢようしておいた。

北次　あぢよう出來たか／＼。

岩北　生文珠が智惠を振うた／＼。

北次　出來た／＼。

ト奥より萬野、大小を持つて出て

萬野　コレ、してやつたぞ／＼。

三人　何ぢや。

萬野　先刻にお紺さまと貢と、口舌の後が喧嘩になり、何が去ぬると云うて預けた腰の物を、おこせと云ふ所へ、喜助が持つて出て渡したは、岩さまのお刀。貢はうろたへ眼で、岩次さまの刀を差いて、ツイと去につたわいな、跡に殘つたはこの刀。こりや貢が差いて居つた下坂の刀。なんと手を濡らさず、此方へせしめたは、めでたいぢやござんせぬか。

トこれを開いて岩次、大いに仰天のこなし。北六喜び刀取つて見て

北六　成る程、こりや北六の刀とは相違。すりや貢めが取違へ、此方の刀を差いて青江下坂を置いてうせたか。

次郎　折紙と云ひ、下坂まで手に入れると云ふは

北六　これも萬野が働らき。

萬野　えらからうがな。

北次　えらい／＼。

萬野　祝うて一つ打たうかいな。

三人　ヤア、しやん／＼、も一つせい、しやん／＼、祝う

て三度、おしやしやんのしやん。

ト此のうち岩次、皆を突き退け

岩次　エ、、違うたわいやい〳〵。

ト踠く。

次萬　何が違うた。

岩次　先刻に貴達様の知らぬうちに、貢めが預けた下坂の刀と此方の刀と二腰とも、ソツと盗んで出で、丁度寸尺の合ふを幸ひ、貢が下坂の刀の身を、此方の鞘へはめて置いたれば、その刀の身は矢ツ張り此方ので、貢めが取違へて差いて去にをつたが、誠の下坂ぢや。

三人　ヤア、。

ト恟り。

岩次　折角物した物を、また元々へ戻してのけた。

北六　エ、、忌々しい。

ト持たる刀を打ちつける。

岩次　活文珠を、らりにしくさつた。

萬野　大事ござんせぬ。仕様がござんす。コレ、喜助どん喜助どん。

喜助　オイ〳〵。

ト奥より出る。

萬野　コレ、こなたも大概の事したがよいわいの。

喜助　何ぢやいの。

萬野　コレ、岩次さまのお刀と、貢の刀と取違へて渡したぞや。

喜助　エ、。

萬野　行て取返してござんせ〳〵。

喜助　ようござりまする。わたしが一走り行て取返して參りませう。

北六　コリヤ、この貢が刀を持ち行き、其方が麁相でござると云つて、此方の刀と取替へて戻り居らう。

喜助　ハイ〳〵、畏りました。

皆々　早う〳〵。

喜助　オツトまかしよとな。

ト刀を腰に差し、尻からげ花道の眞中程まで行き、舞臺を見送り、皆々の顔を見て舌を出し、ニツタりと笑ひ、いかい白痴めと云ふこなし。向うへ走り入る。萬野、思ひ出したこなしにて

萬野　ア、、鈍な事をしたわいな〳〵。

三人　何ぢや〳〵。

萬野　よう思へば、あの喜助は、貢が家來筋と、チラリと

三人　聞いたわいな。

萬野　下坂の刀と知つて、取違へた顏で貢に渡しくさつたわいな。

三人　ヤア。

萬野　よい／＼、わしが行て取返して參じませう。

北六　イカサマ、此方の顏出しては後日の邪魔。

岩次　追ひかけうにも腰が膽抜け玉になつた。

萬野　お前方は思ふ色さまを抱いてゐさんせ。その間にわしは。

北六　そんなら北六。

岩次　我れらは先へ御免々々。

次郎　萬野、一時も早う／＼。

萬野　合點でござんす／＼。

ト萬野向うへ走り入る。北六次郎助は奥へ入る。岩次は二階へ上がる。

トこれより川崎音頭になり、内にて踊り子大勢の聲々にて、よい／＼／＼よいやさ、と掛け聲するを、向うよりバタ／＼にて貢、一散に走り出で、ツカ／＼と内へ入り

貢　喜助、萬野／＼。

ト方々を呼び喚き

ムウ、此やうに呼んでも、二人ながら出て來ぬは、さては二人とも、件の奴等と一つになり、此方の心急くまゝ似せ物を摑ませ居つたのぢやわいやい。

ト云ふうちお紺、二階の障子を明け

こん　貢さん、又ござんしたか。

貢　おこん。

ト下よりキツと見上げる。

こん　わしやどうあつても侍ひは否でござんす。書いて置いたこの起請、これ取つて置かしやんせ。

ト卷紙の中へ件の折紙を入れ抛りつける。貢取上げ開き、折紙を見て恟り。

貢　すりやコレ。

トお紺ピツシヤリと障子を鎖す。貢行燈の明りにてとくと見る。

こりや先達て騙り取られた誠の折紙。エヽ、忝ない。

ト懷へ入れ右の狀を見て。

人目繁く候ふゆゑ退き文と見せ認め參らせ候ふ、先程はお鹿づらと譯あるやうに申し、その上金まで騙し取

文化十五年四月都座上演　尾上松助の貢

りになされ候ふやう申し候へども、さら〳〵お前に覺えのない事は、わたしがよう存じ居りまゐらせ候ふ、皆これは萬野とお鹿が馴合ひ、お前に惚れたと云ふも、金を遣つたと云ふも皆嘘にて、誠の事は阿波の客に頼まれ、お前に無實の難を云ひ掛け、顏の立たぬやうにして、わたしに愛想を盡かさせ、お前と手を切らせ、國へ連れて去なうと云ふ企みにて候ふ、その事推量いたし候ふゆゑ、わざとお鹿づらの事を云ひあがり、その上俄に侍ひは否ぢやと難題を申し掛け、わざと緣を切るやうに見せかけ候ふを、阿波の客も心を緩し、いつぞや萬次郎さまの騙られなさつた折紙を取返し遣はしまゐらせ候ふ。また折紙持つてゐ候ふ徳島岩次と云ふ侍ひは嘘にて、實は藍玉屋北六と云ふ者にてござ候ふ、また北六と申す者は徳島岩次と云ふ侍ひにて、皆國元の伯父御の廻し者とやら、わざと町人と入れ替つてゐたのに候ふ、眞實緣を切る心にてはござなく候ふまま、必らず〳〵御心變らせ下されまじく候ふ、願ひ上げまゐらせ候ふ、かしく。

貢　ムウ、すりや彼奴等が身の上を聞いて知らさう爲、まつたこの折紙を取返さうばつかりに、素氣なう云うたか。お紺、さうとは知らず踏み打擲、堪えてくれ。其方が志し過分なぞや。マア、折紙は手に入つた。これから下坂の詮議、腹立ち紛れ氣の急く儘、そこへ付け込んで外の刀を渡し居つたは、大方萬野めが仕業に極まつた。

ト向うより萬野バタ〳〵にて走り出で貢を見付け

萬野　ヤア、この刀を。

ト貢が一腰に手をかけるを留めて

貢　萬野、此方の一腰も返さず、よう似せ物を渡したなア。身が刀を出せ〳〵。

萬野　オヽ、何云ひぢやいなア。お前の刀は喜助が預かつたぢやないかいなア。それをわしが知らうかいなア。マア、その刀はお客樣のぢや。此方へおこさんせ。

ト取りにかゝるを兩方より引ッ張り

貢　おれが刀から出し居れやい。

萬野　知らぬわいなア。

貢　知らぬとは野太い奴の。

ト持つたる刀の鞘とも萬野を叩く。

出し居れ〳〵。出し居らうて。

トさん〴〵に叩き据ゑると、仕掛けにて鞘割れて思は

ず萬野を切る。萬野ひやりとするゆゑ、撫でゝ見て、血だらけになりしゆゑ悔りして

萬野　ア丶、切つた〱〱。

ト貢キツとなつて

貢　おどぼね立てな。

トぽんと切る。萬野、一刀に死ぬる。次郎助、奥より寢ぼけ顔にて欠伸しながら出る。此うち貢刀を搜しに奥へ行かうとする。次郎助、萬野の死骸に蹶き見て

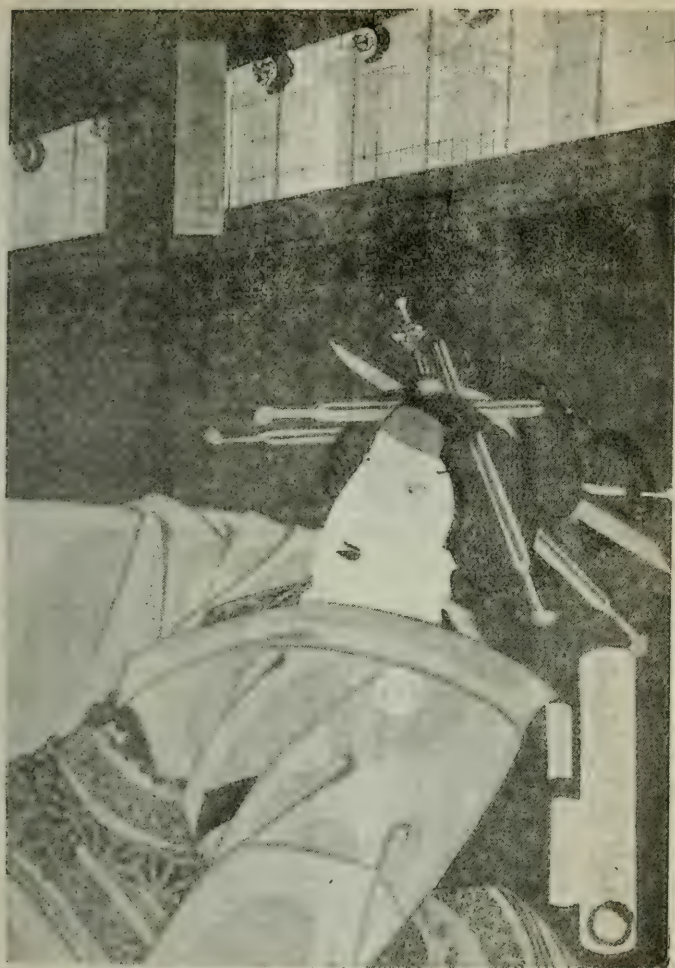
次郎　ヤア、切つたワ。

ト云ふ聲に貢切つて行く。次郎助いろ〱うろたへ逃げ廻り、トゞ一刀切られ逃げて入る。これより貢、正面の暖簾を下ろすと、内にけん簞笥のやうな戸棚あり、この鏡戸を外し、内にある刀掛けに客の腰の物三本掛けあり、これを持ち出でゝ行燈の火にて一々改め見てさうでないと投げ捨て、また血刀提げて二階へ行かうとする。此うち北六奥より出で、貢を後抱に抱き、よろしく立廻りあつて、トゞ貢、北六が眞向を切り割る。北六ウンとこける。此うち岩次二階より下りて、貢に切りかゝるを、立廻りにて岩次が片腕を切り落す。岩次ウンと倒ける。北六起上がつて又貢にかゝるを切り立つる。北六二階へ上がる。貢後より北六が尻こぶたを切る。切られながら二階に逃げ込む。貢續いて二階へ追ひかけ入る。チヨン〱引き道具。

此うち始終奥にて川崎音頭踊の掛け聲、右切る度々に本蘇袍にて見え物凄く、道具段々東へ引いて中二階廻るなり、それより後は奥座敷へ行く廊下の見え、この廊下のよき所に大きな手水鉢に、餘り高うない小柴垣これともに引出す。廊下の留りは奥座敷の體、道具とまると中二階よりお紺飛び降り、廊下を走り、あちこちとうろたえる事ありて庭へ飛び降り、柴垣へ隠れると、北六これも中二階より廊下へ飛び下り、手水鉢の後へ隠れると、二階の内よりヮツと云うてお鹿、一かせ切られ、飛んで下り廊下へ逃げるを、貢續いて飛び下り、廊下にてお鹿を切り殺す。これよりまた定七丈八出て切らるゝと、踊り子大勢・花笠絆縮緬の拵らへにて奥より逃げて出る。

皆々　あれい〱〱〱。

ト廊下を走る。貢この者どもへ抜身を觸まいと身を避

明治六年八月　澤村座上演

岩井紫若のお紺　澤村訥升の貢

けろこなし。このあとへ千野吉野おきぬ逃げて出て、これも逃けろこなしにて、怪我にちよつと手を負はせろこなしよろしくあつて、皆々逃げて入る。おきの、後より出る。

きの　貢さま、待たしやんせ。

ト抱き留めるを、ハテ退かしやれと振り解く。機にておきのが横腹を突く。ウンと倒ける。貢見て南無三寳と心緩む所を、北六椽の下より貢が足に取付き下ろさうとする。貢、北六を蹴飛ばし續いて庭へ飛び降り、立廻りにて又北六を一かせ切る。北六、切られながら柴垣へ逃げ込む。お紺驚ろき逃げて出るを、北六と思ひ疊みかけて切り付けるをお紺、あつちこつちと逃げ廻りトゝ身を縮め手を上げて震うてゐる。貢、拔身を振り上げながらお紺を見て、ギックリとなつて、チッと心を落しつける體。お紺慄ひ〳〵貢が後へ廻り、脊中を撫りおろす。貢氣を落し付け、顏にてお紺に先へ逃げいとして見せる、お紺いらへ、この體を見て、先へは逃げぬとかぶり振り泣くを、貢、足手纏ひぢやと呵ろこなし。そんなら先へ行く早うござんせと、兩方物云はずに始終こなしにて、お紺慄ひ〳〵前後見送り見送り向うへ入る。貢ツカ〳〵と花道の角へ行き、お紺が後を、見送る。此お紺が足音、貢と思ひ、北六、顏も體を眞赤に蘇枋だらけになつて、柴垣よりヌッと出で、手水鉢へヨロ〳〵と取付き、切られて聲の出ぬこなしにて。

北六　人殺しぢや。

ト悲しい聲にて云ふ。貢これにてキッと拔身を構へ、北六を見る。北六、身を縮める。貢見えよく幕。但しこの幕引くと直ぐに雷、夕立の音凄まじく鳴る。此うち道具飾り替へ、早幕にて明けると、鳥羽の伯母の内になるなり。

四幕目　福岡貢切腹の場

役名──福岡貢。藤浪左膳。今田萬次郎。料理人、喜助。奴、林平。次郎助。貢伯母、おみね。

造り物、二重舞臺、上の方折り廻し障子屋體。向う押入れ赤壁、納戸口、橋がゝり牽垂れ入り口ありて物置の體。いつもの所に門口。舞臺先、車井戸、右の

二重舞臺よき所に簞笥直しあり、幕の内より雷、大
夕立の趣向激しくあつて、よき程に幕明ける。
ト雷やんで、夕立ばかりの音にて、向うより次郎助、
米俵を被ぎ、夕立を凌ぐ體にて走り出で、花道よき所
まで來ると夕立止む。次郎助とまり俵を脱ぎかけて

次郎　ヤレ〳〵、えらい夕立であつた。雷の嚴しさ、ヤレ
恐ろしや〳〵。シタガ、それより恐ろしいはあの貢、跡
から追ひ駈けてうせるやうに思はれて、滅多無性に逃げ
て來たが、爰はどこぢや知らぬ。ア、まゝよ、どこでも大
事ない、夜通しに逃げたによつて、體がばんやのやうにな
つた。どこへなと入つて、ちつとの間寢たいものぢやが。
ト云ひ〳〵本舞臺へ來て、物置を見て
よいワ、こいつ物置さうな。暫らく爰へ入つて、グツタ
りとやつてこまそ。よし〳〵。
ト戸を明け入ると合ひ方になる。本釣り鐘、明け六つ
の鐘、方々にて鷄の聲すると、向うへバタ〳〵にて貢、
右の姿にて拔刀提げ走り出て、本舞臺門口へ來て立ち
とまりこなしあり、拔刀を下に置き、草井戸の釣瓶を
取り、水を汲み上げ、刀の血を洗ひ、我が腕に付いて
ある血汐を洗ひ落し、頰冠りにしたる汗手拭にて刀を
拭ひ、右の拔刀を引卷き腰に差し、門口をソツと明け
内へ入り、二重舞臺へ上がり、件の拔刀を隱さうとす
るうち、納戸より

みれ　誰れぢや〳〵。
ト云ふ聲に、貢そこにある簞笥の抽出へ、拔刀を入れ
る所へ、おみれ、納戸より云ひ〳〵ズツと出る。貢、
手早く簞笥を締めて、おみれと顏見合せ

貢　伯母者人。

みれ　貢、おぢやつたか。

貢　ハイ。

みれ　今やう〳〵夜が明けたが、夜道をおぢやつたは、何
ぞ火急なことであらう。氣遣ひな事ぢやないかや。

貢　イエ〳〵、なんにも氣遣ひな儀にござりませぬ。

みれ　それに又、夜のうちにおぢやつた樣子は。
ト貢ギツクリとするこなしあり

貢　イヤ、お案じなされる事はござりませぬ。めでたい
事でござります。

みれ　なんぢや、めでたい事ぢや。

貢　さうでござります。

みれ　ヤレ〳〵嬉しや、今日は五月の節句、朝早々からめ

でたい事とは嬉しい。さうしてその、めでたい事とは、どのやうな事ぢや。ちやッと聞かしてたも〳〵。

貢 サア、そのめでたいと申すは、彼の、オヽソレ、先日あなたより受取りました下坂の刀、萬次郎さまの御手に渡し、卽ち今日、本國阿州へ出立、私しも萬次郎さまのお供仕りまする。それゆゑちよつとお暇乞ひに來りましてござりまする。

みれ それは誠にめでたい〳〵。が貢や、見れば其方の着物は、しつぽりと濡れてある。先刻の夕立に、雨具の用意もなしに滅相な。其やうなもの着てゐると、きつい毒ぢや。幸ひ〳〵。

ト簞笥へかゝる。貢は件の拔刀を見られうかと心遣ひのこなし。おみれ、抽出より貢が紋付きの單衣物、帶ともに出し

イヤナニ貢、この簞笥のこの單衣物は、其方の父御の定紋、其方へ送つた形見のうちで、せめてこの單衣一つはわしが方に留め置いたるは、朝夕兄さまのお顏を見る心。紋も幸ひに同じ事。サア、これを着て、めでたう萬次郎さまのお供しや。ドレ〳〵、わしが着せてやりませう。

貢 それはお慮外。左やうならばお借り申しまする。

みれ オヽ、借りるの貸すのと、親の物は子の物ぢやないかいなう。

ト云ひ〳〵着せる。貢、帶を解く。この時懷中より折紙とお紺が退き狀落ちる。ちやつと隱し、着替へて帶仕替へる。おみれ、貢が脱いだ袷を袖疊みにする。この時袖口裾などに血の付きあるを見て、悧くりのこなしあつて、貢に見せぬやう疊みて、片側へ寄せて

オヽ、それでよい〳〵。てもさても、親子とて、よう似合うた事わいの。それにつき、其方に見せる物がある。待ちや〳〵。

ト障子屋體を明ける。内に毛氈を布き、机の上に刀掛けに大小掛け、その前に本膳平、燒物つけて供へある。

コレ、爰に飾つたは、其方の父御の差し料。昨日は五月四日、祖父樣と云ひ、其方の兩親の祥月命日の精進日。今日は又武家方に祝ふ端午の節句、一人の下女は親許へ二三日私用あつて去ぬる。せめて心ばかりの祝ひ日と思うて、七つ起してわしが手づから膳の拵らへ。所がらとて生鰹の煎燒き物、斯くの如く大小を飾り、御膳を据ゑたも、其方の武運、勝つてかつをの門出よし、夜のうちにおぢやつたれば、朝飯もまだであらう。祝うてこの膳に

坐つて行きや。給仕は伯母がしませう。サア〳〵早う。
　ト右の膳を取つて、貢に据ゑる。
貢　左樣ならば、わたしが自由に仕りませうもう。お構ひ下さりますな。
みれ　イヤ大事ない、遠慮しやんな。お汁がぬるうなつたであらう。盛り替へて來てやりませう。サア、ちよつと喰べかきやいなう。ドレ〳〵。
　ト汁椀を持ち入る。貢跡見送り
貢　何も知らずと、伯母者人、お宥されて下さりませ。
　トちよつと手を合せ納戸の方を拜み
親人の差し料とは、幸ひ〳〵。
　ト飾りある大小を取つて、差添を差し、刀を側に置き膳に坐る。おみれ、丸盆に汁椀載せて持つて出て
みれ　サア〳〵、お汁も温つた。ちやつと喰べや〳〵。
貢　ハイ〳〵、左樣ならば。
　ト飯椀取つて喰ひかけるこなしあつて、汁をかけ、かサ〳〵かき込む。
みれ　其やうに急いで喰べるは、大きな毒ぢやわいなう。靜かに喰べや〳〵。
　ト云ふ間に、貢喰ひしまひ

貢　御馳走でござりました。もうよろしうござりまする
みれ　もそつと喰べやいなう。
貢　イヤ、心急きにござりますれば、もうこれでよろしうござります。時に伯母者人に御無心がござりまする。この親人の差し料は、何卒拙者に暫らくお貸し下さりませう。
みれ　オヽ、改つた事云やるわいの。親の物は其方の物、差いて行きやいなう。
貢　左樣ならば、申し請けませう。エヽ、忝ない。最早萬次郎さまにもお待遠ね。拙者はお暇。
みれ　そんならもう行きやるか。
貢　伯母者人、おさらばでござりまする。
　ト刀を差し、表へ行かうとする。おみれこなしあり
みれ　貢、待ちや。
貢　イヤ、心が急きますれば。
　トまた行かうとする。
みれ　それでもう云ふ事はないか。死んで再び物は云はれぬぞや。
　トきつと云ふ。貢ギックリと立ちとまり
貢　エヽ。

みれ　死ぬなら、なぜ潔う、伯母にも暇乞ひして行かぬぞ。

ト貢ツカ／＼と戻り

貢　なんと云はつしやる。

みれ　其方は人を殺さうがの。

ト貢キツとして

貢　なんと。

みれ　知つたはコレ、この着替へ。

ト貢の脱ぎし袷を出して

袖にも裾にも血汐の滴り。

ト貢ギツクリとなる。

なんと、人を殺しやらうがの。

ト貢ホイと俯向く。おみれ、貢の胸倉を取つて

コレ貢、身にも命にも替へて、大切に思ふこの伯母に、なぜ物を隠してたもるぞいなう。夜道を來るに丸腰にて、着物はヒツソリ血だらけ、御飯を喰べかねて、お汁をかけた一膳ぎり。科人の牢舍の時、鉢椀に一杯ぎり、その。心であらうがの。サア、どう云ふ譯で人を殺したぞ。樣子を云うてたも。その樣子によつて助かる術もあらう。何の樣子も云はず。此まゝ爰を出て、切腹する覺悟と見たゆゑ呼び留めた。貢、伯母に隠して死なうとは、そりやならぬ。胴慾ぢや／＼。胴慾ぢやわいなう。

ト泣く。貢、打明けて樣子を云はうか、イヤ／＼云うてはと、いろ／＼こなしあつて、胸を据ゑたる體。

貢　御尤もぢや。成る程委細打明けて申しませぬは拙者が誤り、如何にも人を殺めましたが、何も氣遣ひはござりませぬ。その樣子と申しまするは、先達て萬次郎さまが、下坂の折紙騙り取られた盜賊どもが、夜前古市の油屋と申す遊所に居る事を存じ、難なく折紙は取返し、手向ひ致せしゆゑ殘らず切り殺し、即ち取返したる折紙は、これにござりまする。

ト懷中より、折紙を出して見せる。

みれ　ムウ、そんなら、この折紙を騙り取つた者どもを、切りやつたのか。オヽ、出來した／＼。それなれば幾人切つても大事ない。折紙さへ手に入れば、其方に渡して置いた下坂に添へ、國へ行きやると萬次郎さまは御歸參、其方も元の通り親の家名を引起すといふもの。そんならいよ／＼下坂を、萬次郎さまにお渡し申して置きやつたの。

貢　左樣でござります。

みれ　そんなら一時も早う、この折紙を持つて、萬次郎さまと一緒に國へ持參しや。ア、、嬉しやなう。さう云ふ事とは知らず、もしやと思うて、大抵案じた事かいの。

貢　左樣ならば、直さま出立仕りませう。

みれ　大儀ながら、さうしや〳〵。

ト云ふうち、橋がゝりより、左膳、萬次郎に案内させ出て來て、ズツと兩人門口へ入り

萬次　ヤア貢、爰に居やるか。

貢　萬次郎さま、左膳さま。

左膳　貢、さて〳〵出來した〳〵。

ト兩人上へ通る。この時表の物置より、次郎助ソツと出て、戶口に立聞きする。

夜前、古市に於ての樣子、委細聞き屆けた。よくも德島岩次、藍玉屋北六兩人ともに打つて捨てた。併し今一人次郎助といふ奴、逃げ失せしとの事。彼奴等三人は伯父大學よりの廻し者、一人にても國へ歸り注進させては、家老今田九郎右衞門の忠誠も水の泡。さるによつて次郎助めは、身が家來に申し付け、見付け次第に討ち放す手配。

トこの事を聞いて、次郎助仰天して、また物置へ逃げ込む。

萬次　コレ貢、下坂の刀が、其方の手にある樣子、お岸に聞いたによつて、藤浪さまを御同道申したわいの。

左膳　下坂の儀に付き、心勞いたした伯母とは其方であらう。まだ對面はせねども、某は藤浪左膳、女ながら古主へ忠義を立つる志し、過分々々。

みれ　これはマア、有り難い御意にあづかりまして、これと云ふも貢、其方の忠義ゆゑ。オヽ、出來しやつた〳〵。

左膳　イヤモ、國へ對して大功ある福岡貢、萬次郎が爲には氏神も同然。貢が事、仇おろそかに思はぬがよいぞよ。貢、オヽ、大儀〳〵。

ト扇を煽ぎ立つる。貢、術なきこなし。おみれ共に喜ぶ。

して、岩次を手にかけ、取返した折紙は。

貢　卽ちこれが折紙でござりまする。

ト左膳取つて見て

左膳　ムウ、成る程正眞の折紙。して、下坂の刀は。

貢　サア、その刀は。

左膳　其方が所持いたして居るではないか、

貢　サア、その刀は。

萬次　コレ、ちやつと出してたもいなう。
貢　サア、その下坂は。
左膳　どう致した。
萬次　コレ、その折紙と一緒にして、早う國へ去にたいわいなう。
貢　サア、それは。
ト　うぢ〳〵云ふ。おみれ側よりあせろこなしあつて
みれ　コレ〳〵貢、いま其方が云ひやるは、下坂の刀は先達てから、萬次郎さまへお渡し申して置きやつたぢやないかいの。
萬次　イヽヤ、わしやまだ受取らぬわいの。
みれ　エイ。
ト聞いて左膳、貢が側へグッと寄つて
左膳　貢、下坂の刀は、ドヽどう致した。いま聞けば、萬次郎へ渡して置いたと、何やら紛らはしい、下坂は何と致した。
貢　サア、その刀は。
みれ　どうしたぞいやい。
貢　サア。
萬次　出してたもいなう。

貢　サア。
左膳　なぜ出さぬ。
貢　サア。
三人　サア。
貢　サア。
四人　サア〳〵〳〵。
ト三方より取卷く。
左膳　又ぞろや、奪ひ取られたか。
ト　きつと云ふ。貢。左膳、おみれ、萬次郎三人を見てこなしあつて
貢　ハアヽ。
ト俯向く。左膳、おみれ、萬次郎三人顔見合せ
三人　ホイ。
ト當惑の體にて、左膳、直ぐに貢の首筋取つて引付け
左膳　こなうろたへ者、騙り取られし折紙を取返しても、肝心の下坂なくして役に立たうか。あの刀がなくては阿波淡路兩國の騷動、殿の瑕瑾、萬次郎は切腹といふ所へ心が附かぬか。女ながらそれなる伯母が、古主の爲と云ひ、さま〳〵と心勞いたして買ひ求めしと聞き及ぶ。女すら古主を大切に思ふ志し、それに一旦受取りし刀を、

ドヽどういふ仔細で奪ひ取られしぞ。サア、眞直に仔細を云へ。サア、どうぢや〳〵。

ト突き放す。おみれ、貢に詰めかけ

みれ　今あなたの仰しやる通り、國の騷動、萬次郎さまのお身の上、それ知らぬ其方でもない。伯母の苦勞して買ひ求めた事は是非がない。どう云ふ事で其方ほどの人が、あの大事の刀を取られた事ぢや。サア、ちやつと譯を云うてたも。譯はどうぢや〳〵。

ト貢俯向いて物を云はぬゆゑ

左膳　ムウ、斯程まで尋ぬるに、一言の云ひ譯せぬは、さては噂に聞き及ぶ通り、古市の遊所に性根を奪はれ、茶屋狂ひの金に手支へ、大切なる刀を賣り拂うたな。

貢　イヤ、全く左樣では。

左膳　左樣でなくば、刀を出せ。

貢　サア、それは。

左膳　出さねば、其方が放埒ゆゑ。こな見下げ果てた不屆き者。天晴れ事を仕損じまじきものと思ひ、大切の儀を申し付けたは、某が一生の不覺。ハテ、是非に及ばぬ。

みれ　藤浪さまが今のやうに仰しやつても、云ひ譯をしやらぬからは、そんならいよ〳〵遊所の拂ひに

ト貢の胸倉を取つて

この間孫太夫さまでの體裁、けれうその場へわしが行たればこそ、若い女子を叔母でござると僞はり事。戀はその身の妨げと心が付かぬか。エヽ、淺ましい性根ぢやなア。

ト突き放す。貢いろ〳〵こなしあつて、親の刀に手をかける、左膳留め

左膳　刀で切腹とは武士の行儀。不忠不義の身で野太い奴の。

ト引ツたくり、おみれの方へ拋ると、貢こなしあつて、また差添にて死なうとするを、おみれ直ぐに差添を引取つて

みれ　この差添も親の魂ひ、穢さす事はマアならぬ。

ト貢、いろ〳〵口惜しきこなしあつて

不忠者の貢、萬次郎さまへの申し譯、伯母甥の緣切つた勘當ぢや。

ト件の大小を抱へズツと立つ。

左膳　某とても主從でない。

ト萬次郎を引立て門口の方へ行く。おみれ、上の方へ入れ替り

みれ　御兩所樣。

左膳　さらば。

ト貢、兩手にて、左膳とおみれが裾を扣へ、兩人の顔を見る。

みれ　出て行け。

ト刀の鞘にて拂ひ退ける。

左膳　人外め。

ト蹴飛ばす、と唄にて、おみれツイと奧へ入ると、左膳、萬次郎を引立てツイと橋がゝりへ入ると、唄一くさりあつて、後しめやかなる好みの合ひ方になると、貢起き直り、左膳とおみれの方を見て、覺悟極むるこなしあり、そろ〳〵立つて簞笥へかゝり、最前の手拭に卷きたる拔刀を取出し、平舞臺の眞中へ坐り腹切るこなしにて、件の拔刀を左の腹へガバと突き立つると、納戸よりおみれ走り出て、貢に取付き

みれ　ヤア貢、腹切つたかいなう。其方に凶事させまい爲に、大小を取上げ勘當したも、まこと色に耽る所存があらば、勘當受けたを幸ひに、この場を立退くであらうと思ひの外、この刃物はどこにあつたぞ。エヽ、情ない事してたもつたなう。

ト取付き泣く。

貢　伯母者人、大切な下坂の刀を、萬次郎さまへお渡し申さうと思うて、二見の知るべへ行たれば、萬次郎さまは折紙の詮議に、お出でなされお目にかゝらず、大方古市の油屋へと、この四五日が間行て見ても行て見ても、間違うて後へんばかり。やう〳〵昨夜油屋へお出でなさると聞いたによつて、待ち合すうち、仲居の萬野といふ女、里の習ひなれば腰の物を預からうと云ふ。大切な下坂の刀ゆゑ、預けまいと云へば歸れと云ふ。是非萬次郎さまを待ち合さねばならず、所へ料理人の喜助が預からうと云ふ。この者は親人の家來筋ゆゑ、しかと預け置いた所に、彼の萬野め、阿波の客に頼まれ、お紺と貢が手を切らせ身請けせんと、お鹿といふ女郎と馴れ合ひ、この貢が金子を騙つたと無體を云ひ掛け、その事より馴染んだお紺と縁も切れ、腹立ち紛れに預けた刀おこせと引ツたくつてぼツ込み、萬次郎さまをあちこち搜すうち、フト見れば腰の物が變つてある。南無三方と立歸つて、喜助と萬野を搜せども、二人とも行くへ知れず、なんでも客の腰の物と、もしや取違へはせぬかと、一々吟味するうちコレこの一通、こりやお紺が手管を以て、騙り

明治六年八月澤村座上演　中村壽三郎の喜助

取られた折紙を取返し、即ち徳島岩次と云ふは、伯父大學どのの出入りの町人藍玉屋北六、また今まで北六と云うたは誠の徳島岩次、兩人とも入れ替り、伊勢路に滯留せしも、下坂の刀折紙とも奪ひ取つて、明日は國へ出立の樣子、告げ知らせしはお紺が働らき、それもその狀に詳しう認めござる。

ト此うちおみれ狀を讀んで、悔りのこなし。

所に萬野めを見附け、サア最前預けた刀を出せと云へども、知らぬとあらがふゆゑ、是非なく持つたる刀にて打ち据ゑるはずみに、鞘に碎けて、只一刀にて萬野は最期。それより彼の岩次北六兩人ともに腕を切り落し眞向切割り、家内の者には怪我させじと避けるをうろたへ、向うより肩先、肋、指、脊中、皆かすり傷ながら夜中の騷動。騷ぐ間に家内を殘らず詮議すれども、口惜しや下坂の在所知れず、詮方盡きて表へ出れば、ヤレ人殺し、盜賊よと、所の者どもの立騷ぐを、やうやう切り拔け古市を立退くところ、神領に血をふやす、穢れに流す大夕立、激しき雷を構はずこれへ參つたは、伯母者人、所詮運命盡きたる貢、申し譯には腹かッさばく覺悟でござつたわいの。

ト泣く。向うバタバタにて、喜助、逸散に走り出で、貢が體を見て

喜助　ヤア貢さま、早まつた事なされましたなア。

ト貢に取付き泣く。貢、喜助が首筋取つてひしぎつけ

貢　おのれ、ようも皆と馴れ合ひ、似せ物を渡し居つたなアなア。それゆゑに身が切腹、主殺しの大罪人め。

喜助　エヽ情ない。コレ、岩次が刀が、即ち下坂の刀でござりまするわいなう。

貢　ヤヽヽ。なんとなんと。

喜助　申し、お前樣に預かつた下坂のお刀を、岩次めが盜み出して、おのれが刀と身を入れ替へ、また彼奴が刀の身は、下坂と仕替へ居つた事を、ちよつと見付けました。所で、預けた刀おこせと仰しやつたゆゑ、どうも彼奴らが側では云はれず、取違へた顏で、岩次の刀を渡しました。拵らへは岩次の刀、中の身は下坂でござりますわいなう。

貢　ヤヽヽヽ。

ト貢、おみれ驚ろく。

喜助　その事を申上げうと、跡から追ひ駈けましたれど、間違うてお目にかゝらず、跡へ戻つて見れば家内の騷動、

こりやなんでも鳥羽の伯母御樣へと、飛んで參りましたが、一足遲かつたばつかりで、大事の〳〵御主人樣に、御切腹させました不忠者は、エヽ、この下郎めだ。此奴だ〳〵此奴だ。

ト泣く〳〵握り拳にて、我が額を擲き、頭を散々に喰はし、身内を搔き挘り、鬢の毛を引拔き、いろ〳〵踠き泣くと、貢こなしあつて突き込んだ刀を引拔き

貢　すりやこれが。

トきつと見ると、奥より左膳、萬次郎を連れ、ツカツカと出て、貢が持つたる刀の手を持ち替へ、急ぎ見て

左膳　燒刃は正しく砂流し、

萬次　これこそ誠の靑井下坂。

貢　すりや、これが。エヽ、忝ない。

みれ　そんなら御兩所樣。

左膳　歸りし體にて、裏道より忍び入り、委細は聞いた。

萬次　この刀を疾に下坂と知つたならば、貢に腹は切らすまいもの。

ト左膳、貢の傷を見て

左膳　氣遣ひない。急所は外れた。養生叶うぞ。

み喜　エヽ、忝ない。

ト橋がゝりよりバタ〳〵にて、林平、飾り馬の口を取り、後より上下侍ひ、ぶッ裂き羽織の若黨大勢附き、走り出で

林平　御兩所樣、これにお入り遊ばされまするか。

左萬　林平、その體は。

林平　只今國家老九郎右衛門さまより、早打參り、鎌倉表の首尾よろしく、伯父大學どのは押籠め隱居、萬次郎さまには、早う御歸國あらせられませいと、お迎ひの引馬。

侍ひ　我れ〳〵もお迎ひ。

ト此の時次郎助、物置より出で

次郎　萬次郎、うぬを、

ト萬次郎へかゝらうとする。林平引ッ捕へ、貢の方へ投げ付け、また立ち上がるを、貢、持つたる刀にて切る。仕掛けにて胴切りになる。

皆々　見事。

みれ　そんならいよ〳〵

貢　靑井下坂。

左膳　二つ胴の正銘。

萬次　二品揃ふ上からは

喜助　お岸さま、お紺さまもめでたう身請け。

林平　お國入りはこの場より。

左膳　急いで出立。

侍ひ　ハア、。

トこの見得よろしく。

ひやうし幕

伊勢音頭戀寢刃（終り）

えんにつながる女房の誠きくかきかぬはやぶいしやのさぢかげん
きつとほんぷくしあげたれうぢ胸にせまつたかりのはゝ親

梅川
忠兵衛

戀飛脚大和往來　二幕

義理にからんだ女郎の誠つくしたかはせの女の封いん切るか切らぬは今宵の
切端すゑは野となれ身うけさうだん情にせまつたほんのてゝ親

文政七年三月市村座上演錦繪

戀飛脚大和往來

序幕　茶屋の場

役名――槌屋、梅川。井筒屋、おゑん。傾城、艶絹。花車・おかん。傾城、道芝。槌屋治右衛門。太鼓持、長八。口入れ、由兵衛。大盡、伊山。同なかば。丹波屋八右衛門。亀屋忠兵衛。

造り物、向う一面の花やかな長のれん、門口に井筒屋と書きし掛け行燈、新町茶屋の體。幕の内より、伊山、なかば、二人とも大盡の拵らへ、艶絹・道芝の傾城と、禿二人を側に置き、酒宴の體。長八、善八、二人とも太鼓持ち、執持つてゐる。おゑん、茶屋の内儀にて、何か文書いてゐる。若い者五兵衛一座してゐる。

二階にて唄のさらへ講の心にて、舞臺に構はず聞えてくる。皆々唄聽いてゐる。

〽せめて一夜は來ても見よかしなア。

胡弓入りの唄にて幕明く。唄とまると

皆々　ヨンヤ〳〵。

　ト手を打つ。この間におゑん、文を書きしまひ

ゑん　コレ〳〵、五兵衛、わが身大儀ながら、槌屋へ一走り行て來てたも。行きやつたらの、川さまをソッと呼んで、この文を人の見ぬやうに渡して、今宵は是非とも見えてぢややうに云うて、返事を聞いてたも。

五兵　ハイ〳〵、畏まりました。

　ト五兵衛は狀を持つて向うへ入る。

なか　コリヤ〳〵おゑん、わが身が今云うてやつたは、梅川が方への便りか。アヽ、どうぞ埓明けてくれゝばよいがなう。

〽僞りの無き世の里の四つ紋を、泣いて別れて心も濟まず。

　ト舞臺に構はず唄つてゐる。

善八　「白糸」とは有難い。サア、これで一つ上がりませんかい。

伊山　頂戴いたさう。

ト酒盛りになる。

仲居　艶絹さん、泣いて別れて心も濟まずとは、尤もな唄ぢやないかなア。

艶絹　咽喉が通らぬ蒲焼とは、深い思惑ではあるわいなア。

道芝　さうぢやわいなア。

伊山　時におふんさん、献し申さうか。

ふん　ほんにわたしとした事が、大事のお客をほつたらかして、得手勝手な用ばかり。免してくれなませえ。

なか　免して上げう。サア、飲みやれ〳〵。

ト向うより梅川、仲居おかんと五兵衛を連れて出てくる。

梅川　ほんにおかん、五兵衛さん、大儀ぢやなう。

五兵　なんのお前、川さまの用なら、幾度でも參じます。

梅川　それは嬉しい心ぢやなう。

かん　なんの、口さばかり堪能させて、此方へに廻りが惡い。それといふも、あの貧乏神が退かぬうちは、川さまも埒明かんわいの。

ト梅川、聞かぬ振りにて

梅川　おふんさんも待つてであらう。ちやつと行かう。ナウ、五兵衛どの。

五兵　サア、お出でなされませ。

ト合ひ方にて三人は門口へ來て

サア、川さまを引ツ立てゝ來た。なんと、どんなものぢや。

皆々　出來た〳〵。

梅川　おふんさん、皆さん、遲かつたかえ。

ふん　遲かつた段かいなア。

皆々　待ち兼ねてゐたわいなア。

なか　サア〳〵、そちらへ講も中入りと見える。奥へ行つて、おれが淨瑠璃を聽かさう。

伊山　それは根ッから面白からう。長八が、江戸風のめりやすを唄ふとの噂。それを花に、サア梅川、お出でなさい〳〵。

梅川　サア、そこへ行くけれども、わたしは少つと爰に

ふん　オヽ、それ〳〵、お前方のお頼みやら、川さまへの註文は山々。追ツつけそこへ上げまする。

なか　それは近頃忝ない。我れ等が事も頼むぞよ。

長八　座敷は我れ等にお任せ。

艶絹　川さま、待つてゐるぞえ。

梅川　サア、そこへ行くわいなア。
なか　行くとは有り難い。
皆々　サア、行かしやんせいなア。
　ト賑やかな三味線にて、皆々奥へ入る。梅川とおゑん
　殘る。
梅川　心も知らぬ田舍の客衆、お前もほつとりさんしたで
　あらう。
ゑん　あの云うてぢや事わいなア。わしがほつとりより、
　お前の顏、矢ツ張り氣合が惡いかえ。
梅川　忠兵衞さんが身請けの手附け濟んで、田舍の相談も
　消えて、嬉しやと思ふうち、後金も出來ぬ上、手附けの
　日限りも今日限り。僞はり云うて當座遁がれ。その中へ
　あの意地惡の八右衞門から、昨日から身請けするとても
　てかへす。情なさにまた癪が胸に
　　ト泣いて
　推量して下さんせいなア。
ゑん　ソレイナア。聞きました樣子が、忠兵衞さまは養子
　とやら。堅い母御の手前もあり、金の才覺出來ぬ時は、
　突き詰めた男氣なお人、ひよつとした事があらうかと、
　贔屓に思ふ心から、大抵案じた事ぢやないわいなア。

　トこの時、奥より「鳥邊山」の唄、聞えてくる。
　へ死にゝゆく身の後ろ髮、彈く三味線は祇園町。
梅川　よう云うて下さんした。今日で丁度十日あまり、忠
　兵衞さんの顏も見ず。お前に逢ふのがせめてもの樂しみ
　あまり心が濟まぬし、表向きからござんしたら、日限り
　の切れた後金の催促。ちよつと忍んで、顏なと見せて下
　さんせと、最前人を遣つたわいな。
ゑん　さうして返事があつたかえ。
梅川　オヽ、辛氣やの。
　ト唄は矢張り聞えてゐる。向うより忠兵衞、袖頭巾に
　て出てくる。
忠兵　ハテ、「鳥邊山」を謳うて居る……梅川が手附けの後
　金、出來ぬさへあるに、手附け證文の日限りは切れ、ど
　の面下げて治右衞門に逢はうぞ。所詮すたつた忠兵衞の
　この顏が、立たぬといつて人體らしう、小二歲か何ぞの
　やうに、梅川連れて道行もなるまい。おれさへ思ひ切つ
　てやつたら、結局梅川の方が附く、というて八右衞門に
　引かされては、どうも男の意地が立たぬゆゑ、顏押し拭
　うて今日來たのは、梅川にたつた一言、暇乞ひやら云ひ
　譯やら、迎ひに來たのを幸ひに、來た事は來たが、どう

ぞ逢はしてくれゝばよいが。

ト云ひ〳〵舞臺の門口へ來る。その間に梅川とおゑんは、火鉢へ火箸で灰の穴明けたり、疊算置いたりしてゐる。忠兵衛、門より覗いて

川とおゑんが疊算置いてゐるさうな。ぼつかりと入り憎い。あの疊算は、誰れを待つてゐるのであらう。おれぢやと思うて、ほか〳〵行て、十日も逢はぬその間に、御時節柄で、金持ちの八右衛門に乘り替へて、今日おれを呼びに來たのは、スッパリと退いてくれいといふやうな事ぢやないかしらん。

ト花道へまた戻り

イヤ〳〵、さうでもあるまい。貧すれば鈍すると、得て大きな間違ひが出來るものぢや。ちつとやそつとはお粗末ながら、梶原源太はおれかしらん。

ト舞臺へ戻つて門口より

おゑん、おゑん、おゑん。

ゑん　ござんしたか。

ト二人とも表へ駈け出す途端に、奥よりおかん

かん　川さん、なんでお出でないなア。

ト大きな聲にて云ひ〳〵出る。恟りして忠兵衛、小蔭へ隱れ、梅川は表の方を隱す。

ゑん　恟りしたわいなア。

かん　恟りどころかいなア。お客樣方はお待ち兼ね。爰に何してゐなます。どうでヒソ〳〵と、ろくなお話しぢやあるまい。何ぞそこらへ來てゐやせんかえ。

トうそ〳〵見廻す。

ゑん　オヽ、氣の惡い人ぢやわいの。何が來てゐやうぞいの。川さま、お前はたんと酒が過ぎたさうな。ちよつと座敷へ顏出して、緣先へ行てな……風に吹かれてな……待つてゐなされ。何かはわしが、呑み込んでゐるわいなア。

ト呑みこませる。梅川うなづき

梅川　萬事よろしう頼むぞえ。

ゑん　サア、えゝわいなア。

かん　アタ氣の惡い。合點のゆかぬ川さま。……川さま。

ト恟りして

梅川　何ぢやいなア。

かん　サア來なませ。

ト梅川の手を取り引摺つて入る。梅川、忠兵衛に心殘して入る。おゑん、その跡を覗いて、表へ出て忠兵衛

を小手招ぐ。

ゑん　ようお出でたなア。

忠兵　悪い間であつたなア。ついに今まで、此やうにそゝくさした事は嫌ひなおれが、何の態ぢや。其方の手前も面目ない。

ゑん　えゝ、何云ひなますぞいなア。

　トあたりを見て

コレ

　ト囁く。

忠兵　そんなら裏口の切り戸から

ゑん　ちやつと廻りいなア。

忠兵　とんと和事のひんぬきをしくさる。

ゑん　オヽ、よい機嫌やの。

　ト脊中を叩く。また唄聞えてくる。おゑん、急がしさうに奥へ入る。忠兵衛、ソロ／＼と廻り舞臺の外を西の方へ歩く。

　道具は靜かに東の方へ廻る。だん／＼離れ座敷の舞臺出てくる。上手に二階家。庭に一面の飛び石、植込み、石燈籠、手水鉢などあり、忠兵衛、切り戸を明けて中へ入る、眞中に二重の亭。屋體あり、二階にて

大勢　ヤンヤ／＼。

　ト褒める聲ドッとする。其うち又何か彈き出す。奥よりおゑん、梅川を連れ出て、囁く。梅川手水鉢の方に忍ぶ。おゑん、庭下駄を穿き、褄を取り、ソロ／＼と切り戸の方へ行き、窺つて

ゑん　待つてぢやあらう。

　ト切り戸を明けて忠兵衛の手を引ッ張り

　兎角はわたしがゐる程に、案じる事はない。コレ川さま役に立たぬ事云はずと、とつくり相談して、忠兵衛さまも合點かえ。

　ト二人うなづく。

　後に逢はうえ。

　ト奥へ入る。二人、向うへ出て、手を取りあひ

梅川　幾日逢はなんだえ。

忠兵　急がしさに、忘れてのけた。

　トこなしあつて

梅川　わしや男になりたい。あるが中にも女子ほど、淺ましいものはない。歸らしやんしたその日から、日限りの

切れるのが、身を切るやうに思はれて、十一日がその間

忠兵　ア、、コレ〳〵、今もおゑんが云うたでないか。役にも立たん事ばかり。手附けの日限りも昨日限り、後金が調はねば、廓へとて顔出しのならぬこの忠兵衞。今日は屋敷へ、叶はぬ用と行きかかる所へ、太助が状を持つて來て、幸ひと爰で逢うた、ヤレ來い、どう來いと引ッ張るゆゑ、來られぬ事は知りながら、來いといふには樣子があらう、定めて其方もつまらぬゆゑ、譯立てうといふ心か。ハテ、さうなればせう事がない、マア、逢うての上の事と、押し拔うて來たのぢや程に、脇道から云はずと、スッパリと云うて聞かしや。

梅川　エ、、淺ましい忠兵衞さん、例へお前が、どのやうにならしやんしたとて、其やうな梅川ぢやと思うてか。

ト この時、二階で「三勝」の唄を彈き出す。

アレ、あの唄を聽かしやんせ。外の男に添ふ心なら、なんの斯うした

ト 忠兵衞を引据ゑて

苦勞をしませうぞいなア。

忠兵　そんならえゝわい。おれも金は調はず、むしやくしやするゆゑ、どうで物云ひも慳貪にあらう。こりやおれが生れ附ぢや。時に

ト 云ひかけると、二階にて

伊山　さて宵は眞暗で何も見えぬ。酒で口がムチャ〳〵する。

ト 嗽ひして

イヤ又、井戸水は冷たいぞ。

ト 殘りの水を外へこぼす。梅川忠兵衞は一緒に寄つてゐるゆゑ、この水、二人へかゝる。二人、悄りする。伊山は障子をしめ

ヨウ、うまい事〳〵。

ト 大聲で云ふ。二人は我が事かと思ひ悄りする。

三味線の名人め〳〵。

ト これにて二人額見合せ

忠兵　エ、、悄りさしくさつた。

ト この時、おゑん縁の障子を明け出る。二人、隱れようとする。

ゑん　ア、コレ、わしぢや〳〵。

ト 梅川に囁く。梅川ニッコリこなしにて忠兵衞に囁く。

忠兵　何を、そこ所かい。

おゑん　えゝ可哀さうに。
梅川　お出でいなア。
　ト梅川、忠兵衛の手を取つて、上手へ入る。おゑん見
　送り
おゑん　オヽしんど。
　ト緣先へベッタリとなる。舞臺返し。
　前の表座敷の道具に戻る。傾城仲居、禿なぞ集まつ
　てゐる。二階は大勢の聲にて
〇　さらへ講もこれまで。祝うて一つ打ちませう。
大勢　しやん／＼／＼。
　ト手を打つ音聞える。
仲居　なんと皆さん、面白かつたぢやないかいなア。
艶絹　染さまの「白糸」音さまの「鳥邊山」が、よかつた
　わいなア。
長八　なんと、我れ等が江戸唄は、どうでござりまする。
　ト此うち禿、向うを見て
禿　アレ／＼、向うへ旦那さんがござんすわいなア。
善八　ドレ／＼……ほんになア。梅川さんの事であらう。
　氣の毒な事聞かうより、外さうではあるまいか。

仲居　それがようござんせう。
　トこれより竹本になる
〽よかろ／＼と打つれて、さゞめき奥へ入る跡へ。
　ト皆々、連れ立つて奥へ入る。
〽梅川が親方、槌屋治右衛門、門口からさし覗き。
　ト治右衛門、遊女屋の親方の拵らへにて向うより出て
　來て、内へ入り
治右　これはしたり、誰れぞ居らぬかい。
仲居　アイ／＼。
　ト仲居三人、奥より出て來て
　これは旦那さん、ようお出でなんした。
治右　さらへ講かしまやつたら、おれもちやつと來うと思
　うたなれど……これはさて、おゑんは奥にゐるか。梅川
　が來てゐる筈ぢや。ちよつと逢にしてくれ。急に逢はね
　ばならぬ。おゑん／＼。
おゑん　アイ／＼。
〽思ひに沈む梅川を、伴ひ來るもいつきせき。
　ト奥よりおゑん、梅川を連れて出てくる。
〽治右衛門は屈托顔。
治右　おゑん、さて今日は逢はなんだ。何やらかやらで大

安政元年八月中村座上演　八世片岡我童の忠兵衞

四世坂東彦三郎の治右衞門　岩井粂三の梅川

取込み、と云うて外の事でもないが、知りやる通りあの梅川が身分、田舍の客が身請け談合、外へはやらぬと忠兵衛さまが、五十兩の手附け金、其方も共に、段々と頼みやるゆゑ、先をやめて、後からの忠兵衛さま、極めたところ、後金も今日まで渡らず、手附けの日限りも昨日ぎり。ア、、これは難儀ぢや。先によい身請けがあつたものをと悔んで見るも金ゆゑ、出來ぬも金の習ひ。マアこれは退けて置いて、梅川、最前の八さまの事ぢやて。其方の立つたその跡で、是非今宵は埒明けてくれ、追ツつけ金子渡さうと、きつい急きやう。此やうに方々から身請け／＼と云うてくるは、其方も大慶、おれも仕合せ。川、こりや八右衛門さまの方へ、行てもらはねばなるまいマア、さう心得て、支度しや。

〽案じる最中へ親方が、行てくれいとの一言に、はつと返事も涙ぐみ。さし俯向いてゐたりしが、迚も云はねば叶はぬ事と、心を定め。

梅川　申し、旦那さん、お前の前で申し憎いけれど、忠兵衛さまとは深い仲。外の客の害にもなる、親方さんへも不奉公、その手前もあれば、今のお話し、否とは云はれぬ義理なれど、八さまと忠さまとは、かねてわたしが身の上を、せり合はした仲なれば、その八さまと方附いては、どうも世間へ立ちませぬ。幸ひ忠兵衛さまも、思ひがけない大金が、手に入つたといふ便り、今宵中に見えませう。ならう事なら此方へやつて、八さまの方は、變替へして下さんせいなア。

〽一寸遁がれの間に合せも、親方騙すも辛さのあまり。治右衛門うなづき、呑みこみ顏。

治右　四年此かた忠兵衛さまは、其方の蟲。あの人ゆゑ、大分儲け損なひ、泣きたい心になつてゐる、親方へ云ひ憎い事を、よう云やつた。天晴れ女郎ぢや、義理知りぢや。これで日頃の恨みは晴れた。が今夜限りに立てねばならぬ金があるゆゑ、八右衛門へ約束はしたれども、義理を缺いて變替へして、其方の詞立てゝやらう。一生持つ男を、否と思うては添はれまい。持丸長者になるにもせい、むごい親方ぢやと云はれては、この治右衛門の顏が立たぬ。

〽慈悲と義心で打ちかたむる、槌屋は男一疋なり。折節表へ肝入り由兵衛、井筒屋の門口から。

ト由兵衛、金貸しの拵らへにて出て來て、直ぐに表より入り

由兵　お免されませ。治右衞門さまはこれにかな。

治右　誰れぢや……フウ、由兵衞か。

由兵　ナニ由兵衞か。由兵衞かどころかい。コレ、請け判した金はどうして下んすぞ。世話した金の日限を延しては、どうも銀主へ口がきかれぬ。それで前方から念を入れて置いたに、今日の、明日のと云うてござるは、ちと御人體にも似合ひませぬわいの。

治右　オヽ、尤もぢや〳〵。シタが、先にも全く如才はないが、何やかや取込んでの延引。不請ながら、マア〳〵一兩日待つてやりや。

由兵　イヤ申し、そりやどう弄らしやりますのぢや。先の人々は構はぬぞえ。おれが請けに立つたらは、先の相手が不埒なれば、此方から濟ます。日でも延したら、たんとある女郎のうち、どれなりと望み次第、連れて去ねとまで仰しやつたお詞、よもや忘れはなさるまい。

治右　ハテ、なんの忘れうぞい。コレ、爰にゐる梅川も、知りやる通り此方の抱へ、二百五十兩で請け出される約束。その金が出來次第、高が百兩、はした金、わしから取返して濟ましてやる。金の來るまで、待つたがよいわいの。

由兵　ハテ、その金がいつ來るやら、延びるやら知れぬ事當てにはえゝせぬ。目の前にあるこの女郎、さつぱりと渡さつしやれ。

治右　うまい事を云ふたわけ者。金の方に女郎をやつて、この治右衞門が立つものか。あんだら盡せ。

由兵　イヤ、あんだらの、白痴のとは、口が過ぎるぞよ。

治右　何を猪口才な。

〽臂はりかけてせり合ふ折柄、通り筋から横切りに、頼んだ金を懷中し、いそ〳〵來る八右衞門、ずつと入つて大あぐら。

ト向うより丹波屋八右衞門、羽織着流しにて出て來て門口を入る。

八右　サア、約束の通り、梅川が身の代二百五十兩、改めて受取りや。

ト小判ザク〳〵列べる。

治右　二百五十兩、さして有り難い事もない。そして何ぢや、我が遊ぶ茶屋でもないに、女子あるじと侮つて、案内もせず座敷へ踏ん込むは、なんと不躾ぢやあるまいか。この治右衞門が世話焼いてゐる事は、誰れ知らぬ者はない。そんならおれが妾とも、女房とも、何方から行ても

主がありや、貴樣方に踏みつけさす事は、おれがならぬ。五文と五文の治右衞門が、鼻の先で大胡座、其やうな不躾な者に、子も同然の女郎は、マ、え、やらぬ。金はいらぬ、持つて去にや。

八右　ヤア、こりや味い事にもくろみ付るな。この八右衞門は男ぢやぞ。男が極めた身請け、鞘替へにあうては立たぬわい。

治右　ハテ、紺屋鞘替へ常の習ひ。金は其方の。女郎は此方の。別に損も得もない。金の代りに女郎は、金輪際否ぢやぞ。

由兵　オヽ、損得のない事なら、此方は百兩貸したのぢやサア、金渡しやるか、このお山連れて去なうか。

治右　また阿呆盡すわい。二百五十兩持つて來てさへ、やらぬ女郎、僅か百兩の抵當にやらうかい。

八右　コレ、治右衞門どの、イヤサ治右衞門、そりや我ままといふものぢや。手形があれば、事に依つて、十兩の抵當にでもやらざなるまい。今この金で身請けさせれば、三方四方の仕合せといふものぢや。但し又、さうして金をいぢり上げるのか。そりや、むさいぞよ。

治右　ムウ、何といふ八右衞門。廓は勿論、大坂中で名を賣るこの治右衞門、人に頼まれたに依つて、無理も云ふ氣儘も云ふ。身の爲にむさい事する治右衞門ぢやないぞ。コレ、梅川、何を泣くのぢや。エヽ、おれが、敵をの愚痴涙か。コレ、大事ない。キナ〳〵しやんな。

八右　ムヽ。人に頼まれたとは、何か、ならず者の忠兵衞に頼まれたか。ア、治右衞門、惡い合點ぢやぞや。尤も千兩や二千兩は、取扱ふやうなれど、ありや皆他人の物ぢや。ハテ、金は一夜の宿貸す飛脚ぢや。手金と云うては家屋敷、家財かけて、二十五貫目には足らぬ身代。それにマア、二百五十兩、盗みせう事は知らず、逆樣にして振うたら、鼻血が出やうが、金は出ぬ。差當つて、その手附けに渡した五十兩、どこから出たと思し召す。おれが所へ來る江戸爲替、中でくすねた盗み物。その尻が割れて催促すりや、とこぼえ廻つて手を合し、佛のやうな我れ等を騙し、渡しもせぬ金に受取りさせ、横に寢た大騙り。あの上は親の勘當、追ツつけ侯の着物を着やうぞや。

〽惡口たら〳〵聞きかねて、おゑんはツッと側へ寄り、

ゑん　コレ八さま、いとほしなげに忠さまの、日頃の氣質は知つてゐる。そんな心の人樣ぢやない。梅川さんが手

に入らぬ、その戀の意趣ばらしか。あたりに人も聞く。結局お前の人體がすたりませうぞえ。廣い廓で誰れ一人惚れ手のないお前樣と、禿遣り手に至るまで、贔屓に思ふ忠兵衞さまとは、一口には云はれまい。如何に蔭の間ぢやとて、あんまりな譏りやう。ちと嗜なんだがよいわいなア。

〽存分ひゐきな心から、涙一ぱい目に持つも、煙管の火皿灰吹も、醉はぬばかりに梅川が、胸一ぱいに突つかゝる、涙に聲も忍び泣き、疊にくひつき泣きゐたる。短氣は損氣、氣をいる忠兵衞、三人よれば滿座の仲、恥面かゝされその上に、側にゐる梅川が、心は死んでもしまひたかろ。

ト二階の障子明くと忠兵衞、無念の顏色で立つたりゐたりすることなし。

忠兵　この懷の三百兩を、投げ出して、存分云はうか。

ト懷の財布を出して

アヽ、イヤ／＼、こりやお屋敷の爲替金、母の御恩、無下にもならず。

〽というて胸に突つかゝる、この口惜しさがどうならうと、懷へ手を幾度か、入れたり出したり氣はうろ／＼、性根なく雁水鳥の、陸にまどへる心地して、いすかの端のくひちがふ、心を知らぬぞ是非なけれ。八右衞門はしたり顏。

八右　なんと、どうぢや、友達さへ騙る忠兵衞、もうあれからは、巾着切りか家尻切り、しまひには首を切られう。さうでなくば、女郎の衣裳を盜むか、借りるか、片小鬢を剃り落され、大門口に晒されて、友達までの面よごしもう梅川も、よい加減に思ひ切れ。治右衞門も相手になりやんな。爰の內にも寄せぬがよい。盜みせうも知れんぞや。どこぞでは、火をつけ居らう。

〽口わんざんに梅川は、悲しいと口惜しいと、刃物があらばこの胸を、突いてなとも死にたいと、身をもだゆれば忠兵衞は、元來短氣の肝癪か、胸先へさし込んで、我れを忘れてツッと出で。

ト忠兵衞こなしあつて、二階より駈け下り、八右衞門の前に立ちはだかり

忠兵　全盛を張る廓で、忠兵衞が身代の棚おろし。忝ない。

ト懷から受取を出し

八右衞門、渡さぬ金に、なんで受取を書いた。成る程、

一旦われが金を借りんではない。そりや互ひに男づくで一禮云うたその上で、五十兩は返したぞよ。サア、盜みするの火をつけるのと、わりやどの口で吐かした。引裂いてもくれう奴なれど、場所が場所ゆゑ料簡する。コリヤ、盜まいでも騙らいでも、大和からたつた今、持つて來た三百兩。これ見て置け。

〽これ見ておけと財布の紐、解くより早くどさ〳〵包ほどけて玉の緒の、封じが切れて投げ出した、男の意氣地是非なけれ。

ト忠兵衛、懷より手荒く財布を出す。その拍子に中より金落ちる。封じ目切れて、三百兩の小判散る。忠兵衛、立ちすくむ。

〽八右衛門氣を吞まれ、治右衛門はじめ梅川も、おゑんはあまりの嬉しさに、物も云はれず三人は、顏見合せて居たりける。八右衛門立ち上がり。

八右　イヤ忠兵衛、見事ぢやわい。よる夜中でも方々から持ちかけるは商賣がら。この金も何ぞぢやないかよ。まかり違ふと

ト手で獄門の眞似して

れそぢやぞよ。かゝり合ひにならぬうち、ドリヤ、お暇申さうか。

〽側に落ちたる上包み、そつと拾うて懷中し、そらさぬ顏して出で行く。

ト八右衛門、封じの上包み紙をソツと拾ひ、表へ出て行燈の灯にて見て驚ろき、こなしあつて向うへ走り入る。

〽梅川はじめおゑんも浮き〳〵、忠兵衛は二百兩、治右衛門が前に置き。

忠兵　サア、先達ての五十兩、都合二百五十兩。八右衛門への面當てなれば、ちつとも早く梅川を、連れ立つて歸りたい。其許の御深切、お禮にゆるりと申しませう。

治右　イヤモウ、お前よりわしが嬉しい。好いた所へ川をやれば、これ程の喜びはござりません。

ト金を改めて包みゐる。此うち忠兵衛、五十兩をおゑんの前に置き

忠兵　これまで梅川が身揚りやら、呑みこんでもらうたわしが拂ひ、如才には思はぬ證據、算用も覺えてゐる。丁度四十兩でよいであらう。何かのお禮は、ほゝばつて口では云はれぬ。サア、取つて置いて下され。

ゑん　ほんにマア〳〵、その堅い氣なお前樣を、主もわた

しも、よう知つて居りまする。なんの、これに及ぶ事かいなア。

梅川　イ、エイナア、さうぢやござんせん。八右衛門が聞く手前もある。取つて上げて下さんせ。お前方の志しはわたし等二人が死んだとて、土になつても忘れうか。忝けなうござんする。

〽ものが云はすと忠兵衛が、心の内の暇乞ひ、治右衛門は金とり納め。

治右　サア、これからは門出が急ぐ。先づ、おめでたい〳〵由兵衛も附いておぢや。わが身の金も此方で渡す。おゑん、祝ひ事のお杯。忠兵衛さまの、もうこれからは梅川ぢやない、お梅さまへ。おうめでたうござりまする。

〽口合ひたら〴〵だらくゞが、いらくらとして門出の首尾、調へにこそは出で行く。

ト治右衛門、由兵衛を連れて向うへ入る。

ゑん　サア〳〵、お杯持つておぢや。一時に嬉しうなつた。内中の燭臺に灯をともせ。料理人も、仲居も、子供も、一人も殘らず、皆おぢや〳〵。

忠兵　ア、、コレ〳〵、祝ひ事は後からする。ちつとも早う歸りたい。ア、、この門出はまだかいの。

ゑん　イエ〳〵、身請けは濟んで、親方も判切つて、宿老で水帳を消し、月行事から札取らねば、大門は出られますまい。シタガ、氣の急くのも御尤も。わたしがちよつと行て參ぜう。かんも、五兵衛も、お濱もおぢや。

皆々　アイ〳〵。

ゑん　マア〳〵、宿老から月行事、手分けして行かう。

皆々　アイ〳〵。

梅川　そんなら早う頼むぞえ。

ゑん　いんまの間に、行て來るわいなア。

〽草履片した駒下駄も、踏みちがへたい嬉しさの、しどろになつて走り行く。

トおゑん、仲居と若い者連れて、足早に向うへ入る。

〽忠兵衛門口ピッシャリしめ。

忠兵　サア〳〵、この間に身拵らへ。べた〳〵した形とりおいて、裾も揚げて。エ、、さりとては、かいしよのない形ではある。

〽滅多に急けば不審にて。

梅川　四年この方廓へ來て、門出の譯も知つたお前。なんで其やうに急かしやんす。

ト忠兵衛、梅川を見てヂッとなり

忠兵　急かねばならぬ、道が遠い。
梅川　そりや又どこへ、行くのぢやぞいなア。
　ト忠兵衛、最前の紙の破れを出し
忠兵　今の小判はお屋敷の爲替金、封印を切つたれば、もう忠兵衛がこの首は、おれが物ではないわいやい。
梅川　ヒエヽ。
忠兵　随分堪えて見たれども、男氣な親方の手前といひ、八右衛門めが悪口、雑言。人中に其方まで恥面かゝす口惜しさ。フッと金が手に觸り、引くに引かれぬ男の意氣地。離れかぬれの封印は、地獄の上の一足飛び。サア、梅川。
へ覺悟きはめて死んでくれいと、恩も情も外聞も、辨まへてゐる魂ひの、飛び立つばかり梅川は、男にひしと抱きつき。
　ト梅川驚ろき、忠兵衛に縋つて
梅川　大事の殿御をわしゆゑに、ひよんな事をさせました堪忍して下さんせ。死んでくれとは勿體ない。わしや嬉云うて死にますゐ。……それは悲しうなけれども、どんな在所へなりとも連れて行て、せめてもの三日なりと、女房よ、こちの人よと云うた上で、どうぞ殺して下さんせいなア。
へそればつかりがと女氣に、無理ではないと忠兵衛が、
忠兵　そりや道理ぢや／＼。母やお諏訪へ云ひ譯の、たゝずみ所もない身の上。
　ト懐より五十兩の金を出し
コレ、爰に五十兩。この金のあるうちは逃げ隠れて、それから跡が命の切れ目。
梅川　さぞ母御様やお諏訪さまが、わたしをお恨みなされませう。恨まれても、どうしても、離れられぬが互ひの悪縁。
二人　お免しなされて下さりませ。
　ト向うを伏し拜む
へ詫びる二人に詫びらるゝ、その人々も雪氷、所々に隔つとも、解けては同じ涙なり。かゝる嘆きを露知らぬ、おゑんが門より勇み聲。
　ト向うよりおゑんは、以前の皆々を連れて、急いで舞臺へ歸り
ゑん　サア／＼、どこもかも埒が明いた。門出の勝手、近いがよいと、西口へ札が廻つた。
へ札も西向く知らせかと、二人は心わな／＼。それ

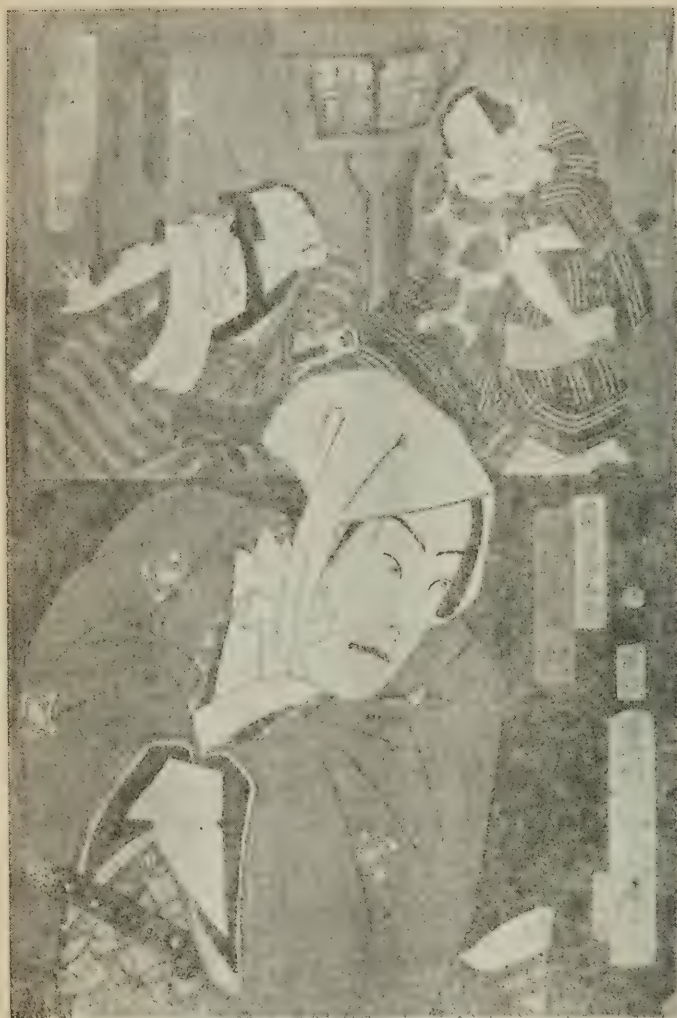
とも知らぬ傍輩女郎、ばら／＼と走り出で。
ト奥より艶絹道芝に、禿二人附いて出て
艶絹　梅川さま、聞きました。
皆々　さぞ嬉しうござんせうなア。
梅川　嬉しいやら、悲しいやら、推量して下さんせ……皆
皆まめで。ゐさんせえ。
仲居　めでたいと申さうか。
太鼓　お名殘惜しいと云はうか。
ゑん　そりやモウ、千日云うても盡きぬわいなア。
忠兵　その千日が、行く先へ。
〽燒場の土になるまいかと、云うて出るのが廓の名殘。
ト梅川、忠兵衛の袖を扣へて
梅川　見送つて下さんす、あのさん方へ。
ト忠兵衛こなしあつて、十兩出し
忠兵　おゑん、爰に金が十兩ある。梅川が門出の祝ひ。跡
ねんごろに弔うて……イヤ、祝うてたも。
ゑん　有り難うござりまする。
皆々　有り難うござりまする。
梅川　おゑんさん。
ゑん　川さま。

皆々　ヨウ／＼、嬉し涙樣。
〽しばしの榮華も人の金、果は砂場を打ち過ぎて、跡は
野となれ大和路へ。
ト忠兵衛、梅川の手を引いて花道へ行く。
皆々　お近いうちに。
忠兵　近日、近日。
〽足に任せて。
ト兩人、一散に向うへ入る。舞臺の皆々、いそ／＼し
てゐる。三重にて　　ひやうし　幕

大切　　新口村の場

役名──龜屋忠兵衛。槌屋梅川。久六女房。針立
道庵。弦掛け藤次兵衛。荷揚げ、瘤の傳婆。樋の
口水右衛門。勝木孫右衛門。
一面の淺黃幕。竹本の太夫座あり。
幕明くと口上出て、道行の口上よろしくあつて引ッ
込む。

明治七年六月中村座上演

八世岩井半四郎の梅川　中村宗十郎の忠兵衛

〽すめる世の、掟たゞしく、畿内近國追手かゝり、中にも大和に生國とて、十七軒の飛脚問屋、或ひは順禮古手買ひ、節季候に化けて家々を、覗きからくり飴賣りと、子供に飴をねぶらせて、口をわしるや罠、鳥、網代の魚の如くにて、遁がれがたなき命なり。

ト淨瑠璃切れると、節季候二人、順禮、古手買ひ、一人づつ出て、眞中で出合ひ

古手　鹿藏源助、どうぢや、足が附いたか。

節一　たんでも忠兵衞は、この新口村には實の親の在所とあれば、是非うせふには極まつた。

節二　殊に女を連れて居れば、高飛びはなるまい。

順禮　サア、木津の出口で街道を、駕籠に乘せたと、雲助が口上方。

古手　なんでもこの通りへ來ねばならぬ。隨分氣を附け、手配して出口を張れ。

皆々　合點ぢや〳〵。

古手　コレ。

ト四人、囁き合ひ、兩方へ別れて入る。チョン〳〵にて、淺黄幕を切つて落す。

舞臺中に藁葺きの百姓家、れんじ窓に障子〆めてあり。向う並木の松、稻村。一ぱいに雪つもりし體。隨分綺麗にかざりつける事あるべし。

〽落人の爲かや今は冬枯れて、薄尾花はなけれども、世を忍ぶ身は跡や先、人目を包む頰かむり、隱せど色香梅川が、馴れぬ旅路を忠兵衞が。

ト花道より、忠兵衞、梅川、對の小袖頰かむりにて、菰にくるまつて出る。

〽いたはる身さへ雪風に、こゞへる手先懷に、暖められつ暖めつ、石原道を足引きの、大和は爰ぞ古里を、心ざしてぞ落ちて行く。

ト兩人よろしくあつて舞臺へ來て、百姓家の前に佇み

忠兵　爰までは落ち來たれども、お屋敷の爲替の金、封金切つて遣うたれば、所詮助からぬ我が命と、覺悟極めたこの忠兵衞。科なき其方は長らへて、明日にも我れが召捕られ、死んだ後での、香花を

〽取つて袂に涙ぐみ、頼むといふも哀れなり、梅川は涙ながら、今こなさんが其やうな、憂き目を誰れがさすぞいの、味な一座の附合ひに、思はれ染めて思ひ染め、いとしつかへに可愛いが癪、逢ひたい見たいが病ひ、戀しい顔が藥より、按摩さんより灸より、氣合がような

りや悪うなり、身儘になつて儘ならぬ、同じ浮世に同じ花、吉原初瀬のとこ度に、櫻が咲くぢやあるまいし、雪は白うてお月樣は、いつでも丸いぢやないかいな、たとへ掟にたがうても、二人一緒に未來でも、これ此やうにこの如く、手に手を取つてと寄り添へば、共に道理と悔み泣き、滅入る心を取り直し、忠兵衞あたり見廻して。

忠兵　コレ爰はわしが生れ在所。四五丁行けば實の親孫右衞門さまの所なれど、不通といひ、繼母なり、殊に今の身の上を、お目にかけるは不孝の第一。又この藁葺きは久六と云うて親達の家來同然、腹の內からの馴染み、賴もしい男なれば、マア、久し振りで逢ひたうもあり、ちよつと尋ねて見ようかいなう。

梅川　成る程、さうさしやんせ。

忠兵　そんならちよつと尋ねて見よう……久六どの、宿にか。久しうお目にかゝりませぬ。

〽ずつと入れば主のおかゝ、納戸より立ち出でゝ。

ト久六の女房、襷がけにて出る。

女房　どなたぢや、誰れさんぢや。主は今朝庄屋どのから呼びに來て、行かれまして、今は留守でござんす。

忠兵　ムウ。久六どのにお內儀はなかつたが、こなさんは留守人か。

女房　イヤ、わしや藪際の次郎兵衞後家の仲人で、近い頃爰へ來たゆゑ、前方の近附きは知りませぬが、もし大坂の衆ぢやないか。此方の親方、孫右衞門の息子どの、大坂へ養子に行て、けいせいとやらいふもの、たんと買うて、人の金を盜み、其けいせいを手に下げて、走つたとやら、すべつたとやらで、代官所からきつい御詮議。孫右衞門さまは久離切つてあれば、お上のお構ひはなけれども、血を分けた親子なれば、いとしや年よつてきつい案じ。こちの人も馴染みゆゑ、此あたりにうろたへて、見附けられはさつしやらぬかと、いかい氣苦勞、庄屋どのからは呼びにくる、ヤレ寄合ひぢや、イヤ印判のと、節季師走に爰らあたりは、けいせん事でにえかへる。アア、うたてのけいせんや。

〽知らねば遠慮はなかりけり。二人はハッと胸に針、うちうなづいて。

忠兵　成る程〳〵、大坂でもその評判、わし等は女夫づれの年籠りの參宮、なつかしさに寄りましたが、立ちながら逢うても去にたし、大坂者と云はずに、ちよつと呼んて來て下されぬか。

文政七年三月市村座上演

五世岩井半四郎の梅川　三世坂東三津五郎の孫右衛門

女房　オヽヽそれは易い事、一走り行て來ませうが、京のお寺が、鎌田村の道場へお下り。それでは餘程わしが戻りも遲い。コレ女中さん、飯仕掛けて、焚きつけてある程に、出來そこなはぬやう、さしくべて下さんせや。

〽襷はづして出でゝゆく。

ト女房氣輕くトツカワと向うへ走り入る。

梅川　モシ、忠兵衞さん、ほんに爰は劍の中、斯うしてゐても大事ないかえ。

忠兵　ア、イヤ／＼、男氣な久六、頼んで今夜は爰に泊り、死ぬるとも、故郷の土になる心ぢやわいなう。

〽涙の雨の横しぶき、袖にあつめて窓を打つ。

梅川　アレ、又降つて來たさうな。

ト兩人内へ入り、れんじ窓の所へ行く。

〽西受けの竹のれんじ窓、反古障子を細目にあけ、見やる野風の細道畔道、うしろしぶきの吹雪には、かたげて走る阿彌陀笠、道場參りぞ續きける。

トこれより床の合ひ方にて、弦掛けの藤次兵衞、お傳が婆、樋の口の水右衞門、針立道庵なぞ、いづれも段段に出て、忠兵衞のセリフに合せて、よろしく出入りある。雪ひどく降る。

忠兵　アレ見や、ありや在所の知つた衆。先なは樋の口の水右衞門、ひどい呑み手ぢやわいの。その次は、荷持ちの瘤の傳が婆。あの黒い頭巾は、大貧乏であつたが、年貢に詰つて、娘を京の島原へ賣つて、よい客に請け出され、金持ちの奥樣になつて、聟の庇で田も二丁、藏も二ケ所の俄分限。その次の親仁は、弦掛けの藤次兵衞とて八十八で一升の飯を殘さぬ達者者、今年で丁度百ぢや。その次へ仔細らしい坊主は、針立の道庵、彼奴が鍼で母者人を立て殺した。思へば／＼親の敵。

梅川　アヽもうよいわいなア。いま腹立つたとて、なんの役にも立たぬ事。

忠兵　アレ／＼、あそこへ見えるが親仁樣。この世の別れお暇乞ひ、せめて外ながらお顔を拜まう。はる／＼來た念願が叶うて、エヽ有り難い／＼。

梅川　エヽあの綟の肩衣が孫右衞門さまかいなア。ほんに親子は爭はれぬ、目許なら、鼻筋なら、お前によう似た事わいなア。申し、わたしは嫁でござりまする。

〽夫婦は今をも知らぬ命、百年の御壽命過ぎて後、未來でお目にかゝりませうと、口の内にて獨り言、夫婦もろとも手を合せ、むせび入つてぞ嘆きける。

ト向うより孫右衞門、足駄がけ、傘をさし、杖を突きよぼ〳〵と出る。

〽孫右衞門は老足の、休み〳〵門を過ぎ、野口の溝の薄氷、すべるをとめる高足駄、鼻緒は切れて横ふしに、撻とまろべば南無三方。

ト孫右衞門、百姓家の前にて、足駄をふみ返して倒れる。

〽忠兵衞もがけど出られぬ身、梅川あわて走り出で、抱き起しつ裾しぼり。

梅川　申し〳〵、どこも痛みは致しませぬか。お年寄りのお危ない。お足を洗ひ、鼻緒もすげてあげませう。マアマア、こちらへ。

〽腰膝なでゝいたはれば、孫右衞門は氣の毒さ。

孫右　ア、いたゞきます〳〵。どなたか知らぬが忝ない。お庇で怪我も致しませなんだ。ア、若い女中のお優しい。年寄りと思し召して、嫁御もならぬ御介抱、モウモウ、手を洗はしやつて下さりませ〳〵。幸ひ爰に藥もあり、鼻緒はわしがすげまする。

〽懷さがし取り出す塵紙。

梅川　ア、申し、爰によい紙がござんす。紙撚ひねつてあげませう。

〽延紙を裂くその手許、不思議さうに打ちまもり。

孫右　爰らあたりに見馴れぬ女中。マアこなさんは、どなたなれば此やうに、ねんごろにして下さりまする。

〽顏つれ〳〵とながむれば、梅川いとゞ胸つぼらしく。

梅川　ハイ、わたしは旅の者、わたしが連合ひの父御樣、丁度お前の年配、風俗も生き寫し、外のお人にする奉公とは、さら〳〵存じませぬ。お年寄られた舅御樣の介抱、抱きかゝへは嫁の役、御用に立つて嬉しいもの。さぞ連合ひも、飛び立つやうにござりませう。又その紙とこの紙と、替へてわたしが申しうけ、父御によう似た親仁樣の、形見にさせたうござりまする。

〽塵紙袖におし包む、涙にそれと知られたり、詞の端に孫右衞門、さてはさうかと恩愛の、盡きぬ涙を押し隱し。

孫右　ムウ、こなたの舅にこの親仁が、似たと云うての介抱か。

梅川　アイ。

孫右　エヽ、嬉しうござる、が腹が立ちまするわい。わしも年たけた倅があるが、樣子あつて久離切つて、大坂へ

養子にやつたが、傾城とやらいふ魔がさして、人の金を盗んだとやら、揚句に所を走つたとの噂。この大和は生國なれば、十七軒の飛脚仲間、お上からの隠し目附け、この在所に詮議最中、それも誰れゆゑ、その傾城の嫁御ゆゑ。

へ近頃不埒な事ながら、世の譬へにも云ふ通り、盗みする子は憎からで、その縄取りが恨めしいとはこの事よ。久離切つた親子なれば、善からうが惡からうが、構はぬ事とは思へども、大坂へ養子に行つて、悧發で器用に身を持つて、身代もよう仕上げた、あのやうな子を久離切つて、養子にやつた親は大きなたわけ者と、指さしして笑はれたら、その嬉しさはどうあらう。今にも探し出され、縄かゝるのを見るなれば、アヽ、孫右衛門はよう勘當した、出かしたと、褒められるやうな事があらうかと、それが悲しうて〳〵、一日も早く往生がしたいと、拝み願ふは今參る、如來樣、御開山の、佛に嘘がつかれうか。

へ撞とひれ伏しもだえ泣き、梅川も聲を上げ、忠兵衛は格子より、手を出して伏し拝み、身を揉み嘆くぞ道理なる。孫右衛門、涙を押し拭ひ。

孫右　樣子聞いたか聞かぬか知らぬが、子を釣り出さうとお上の計らひ。養ひ親の妙閑どのは、一昨日牢へ入れられたげな。

梅川　エヽ。

孫右　サア、それでつく〴〵思ふには、實の親を便りにして、もし忍んでは來はせまいか、來たらばなんぼう不便でも、養ひ親への義理あれば、縄かけ出さねばならぬ。アヽ、どうでも來てくれねばよいが、爰らあたりをまひつきはせまいかと、四年この方逢ひもせぬ子の顔を、見ぬやうに〳〵と、願ふも伜が不便さから。アヽ、とはいふものゝ、若死するも人の一生、義理ある親を牢へ入れ、オメ〳〵逃げ隠れは、末世末代不孝の惡名、所詮遁がれぬ命なら、一日なりと、妙閑どのを、牢から出すのが誠の孝行。覺悟きはめて名乘つて出い。シタガ、どうぞそれも、我の目にかゝらぬ所で、縄にかゝつてくれい。サア、現在血を分けた子に早う死ねと教へるも、浮世の義理ぢや、是非もない。なぜ前方に内證で、斯う〳〵した傾城に、斯うした譯で金がいると、便りでもしたら、久離切つても親子ぢやもの、隠居の田地賣つてなりと、首へ縄はかけまいもの。皆彼

奴が心より、その身も狹う、苦をしをつて、いとほしなげに嫁御にまで、思ひもよらぬ憂目を見せ、知音近附き親にまで、隱れるやうに身を持ちなし、ろくな死もせぬやうに、この親は生みつけぬ。エヽ、憎い奴ぢやと思へども、可愛うござる、可愛うござるわいなう。
〽可愛うござると泣き沈み、分けたる血筋ぞ哀れなり、涙のひまに巾着より、金一包み取り出し、
これは京のお寺樣へ、上げようと思うた金なれど、嫁御と思うてやるのではない、只今のお禮の爲に、これを路用にちつとなと、遠い所へ行て下され。
梅川　お心の附いたお金、逆さまながら戴きます。
〽大坂を立退いても、わたしが姿目に立てば、借り駕籠に日を送り、奈良の旅籠屋、三輪の茶屋、五日六日の夜を明かし、廿日あまりに四十兩、遣ひ果して二分殘る、金ゆゑ大事の忠兵衞さまを科人にしたはわたしから。さぞ憎からう、お腹も立たうが、因果づくぢやと諦めて、お免しなされて下さりませ。親子は一世の緣とやらこの世の別れにたつた一目、逢うて上げて下さりませ。
〽立つを引とめ、孫右衞門。
孫右　アヽ、勿體もない。たつた今も云ふ通り、詞は例へ交さいでも、顏見合せたら繩かけるか、又おれが口から訴人せにや、養ひ親への義理が立たぬ、と云うて親の手づから、どうマア繩がかけられう。
梅川　それでもこれがこの世の別れ。
孫右　イヤ〳〵、どうも逢うては妙閑どのへ、おれの心が濟まぬ、と云うて嫁御の志し、久し振りで逢ひたうもあり。オヽ、斯うしませう、目を塞いでさへ居れば、逢はぬも同然、せめて手先なと觸つたら、それが本望。必らず連合ひに、物云はして下さるなや。
梅川　そんなら逢うて下さりまするか。エヽ、忝ない。
〽喜ぶうちに忠兵衞も、嬉しさ餘り駈け出でゝ、親子手に手を取り交せど、互ひに親とも我が子とも、云はず云はれぬ世の義理は、涙湧き出る水上も、身も浮くばかり泣きかこつ。
ト孫右衞門、梅川の手拭ひにて目隱ししたまゝ、忠兵衞と手を取り合ひ、愁ひのこなし。
〽かゝる所へ久六が女房あわてゝ駈け戻り。
女房　申し〳〵最前のお方、久六どのが云はれるには、そのお客人を必らず出すな、何ぢや知らぬが大勢が、女子連れなら人違ひでも大事ない、引ッ縛れと、役人らしい

者が來る、覺えはないか、さうならちやつと逃がせと申されましたわいなア。

孫右　ヤア／＼、そんならもう捕り手、衆が……コリヤ、早う逃げてくれ／＼。

忠兵　お氣遣ひなされまするな。この場は一旦落ちのびまする。梅川、親仁樣は危ない。お供して其方は先へ。お内儀、頼む。

女房　合點でござんす。

ト梅川と女房、孫右衛門を連れて、百姓家へ入る。

〽云ふ間程なく以前の節季候、順禮もろとも一手になり、なんでも慥かにこの道と、尋ぬる目先へ出でたる忠兵衛、そりや逃がすなと兩人打連れ、かゝるをすかさず刎ねとばし。

ト以前の四人出て、忠兵衛をバラ／＼と取卷く。

忠兵　こりやうぬ等、何とするのぢや。

古手　オヽ、何とするとはこの國へ、入り込んだお尋ね者代官所へ連れて行く。うせう。

忠兵　ヤア、急用あつて通る旅の者。そこ退かぬと、爲にならぬぞ。

節季　爲になつてもならいでも、人違へでも大事ない。こま事云はずと、サア、うせう。

〽サア／＼うせうと一時に、かゝるを心得すくひ投げ、又くる節季候、順禮二人がまつかせと、右や左のお長者かゝり、同行二人に手の内は、振り拳で御報謝と、ほらほら納めの谷つゝじ、こりや叶はぬとわれ先に、後を見ずして逃げかへる。

ト忠兵衛この文句のうち四人を相手に立廻りある。四人、逃げて入る。忠兵衛が追はうとする所へ、内より孫右衛門梅川出て

孫右　アヽ、長追ひは無用／＼。この間に早う、逃げのびてくれ／＼。

忠兵　そんなら親仁樣。

ト兩人、顔見合せ、こなし。爰へ又四人走り出て、パラ／＼と忠兵衛を取卷き

四人　動くな。

ト忠兵衛、兩人を圍つて、キッとなると、口上出て、まづ今日はこれぎり

戀飛脚大和往來（終）

今年やほうれんほにほがさかえ爰やかしこの茶のみ話し汲み分けた
戀の出ばなき〻目はあり〳〵持ちつたへた相州正宗

銘作切籠曙

絹張一對

寶永年中伏見の喧嘩
聞いたか〳〵月は十六夜

たろやおせんは伊達しやでござる武士と町人二人のをとこだき
しめた闇の初もの踊はありや〳〵染めあげた血汐帷子

天保八年七月市村座上演番附

銘作切籠曙

上の巻

長岡天神社の場

役名――鷹津左市郎。同家中、横非惣左衛門。同若黨、里見伊助。奴、梅助。高岡息女、松江姫。同家中、戸田半左衛門。同、中津萬五郎。奴、出來助。松ヶ端の五作。同娘、おため。樽屋娘、おせん。腰元おまつ。同、おすぎ。同、おせき。同番頭、長九郎。

造り物、長岡天神の境内。好き所に、藁葺き風雅なる茶見世、上手、社へ通ひの玉垣、石燈籠、臺幹など取合せよろしく、御遷宮と記せし提灯を立てある。檀尻太鼓にて、幕明く。

ト車遣ひ大勢、揃ひの襦袢にて、地車に寄進の俵を積み、綱を曳き

大勢　てうさぢや／＼。

ト喧ましう云うて、花道へ出る。

世話　待て／＼。もう爰が長岡の天神様ぢや。これから神主の所まで、そろ／＼とやりかゝらうかい。

皆々　合點ぢや／＼。

世話　ヤアイ、若い衆、頼むぞ。

皆々　ひんよい／＼。

世話　よいもつとぢや頼むぞ。

皆々　ひんよい／＼。

ト木遣り拍子になり、皆々、車を曳いて、上手へ入る。あと庭神樂になり、向うより、樽屋おせん、他所行き振り袖にて、腰元おまつ、おまき、番頭長九郎、下女おすぎ、御所袋と日傘を持ち出て

長九　これが長岡の御境内、御遷宮で茶見世が出てある。暫らく休んで參りませう。

せん　さうしようわいなア。

ト始終、庭神樂にて、本舞臺へ來て、方々の床几へかける。

長九　イカサマ、御利益が多ければ参詣も多し、夥しい賑ひぢや。

せん　伏見からは陸程の道、其方衆も、さぞしんどい事であつたらうなう。
まつ　イエ〱、野を見晴らしたり、川の景色を見まするので、氣が晴れてようございまするわいなう。
まき　私しどもは格別、お孃樣は、遠い所をお駕籠にも召さず、ようおひろひなされましたなア。
すぎ　また私しは、よい男の見飽きをせうと思ひましたなれど、それ相應な男もないものでございまするなア。
長九　お前の詮議で、男の詮議も呆れるわい。ハ、、、、。イヤ申しお孃樣、途中にてこんな事を申すも、異なものでございまするが、私しが申しまする事を、悪うお聞きなされまするなや。伏見の両替町で、樽屋おせんさまと云うては、隠れのないお娘御。あちらこちらから嫁に貰ひたいと云うて參りますれど、後家御のお干枝さまも御得心なされず、又お前樣も嫁入りの噂と云ふと、受けがお悪いげなやで。
せん　コレ長九郎、又しても嫁入りの話し、わしやそんな事は否ぢやわいなう。
長九　そりやお否でもあらうが、お耳に障らうが、こりやコレ、お家の納まりを思ふ、番頭の役目でございまする。

せん　アレ、まだいなう。云ひたくば其方一人云つて居や。わしやお宮へ參詣せう。サア、おおやいなう。
　ト立ち上がる。
まつ　ほんに、今日の御參詣に、降つて湧いた番頭さんのお供。
まき　月に叢雲と云はうか。
すぎ　花に毛蟲と云はうか。
長九　何を吐かすぞ。黙つて居をれ……併しなア、この番頭が、お爲を存じて申す事、お氣に入らねば是非がない。
　ト莨盆を拭へ、そこらを眺めて居る。
せん　長九郎、後からおぢやや。
三人　サア、お越しなされませ。
　ト唄になり、おせん、皆々を連れ、上手へ入る。長九郎、殘り
長九　縁組みの噂をすると七里けつぱい、嫌がるお娘御、いよ〱推量の通り、出入り屋敷の若黨に、思ひ込んで居ると見える。こりや一思案せねばならぬわい。
　トちやつとこなしあつて
さて〱著い事ぢやなア。
　ト扇遣ひをする。庭神樂になり、橋がゝりより、中津

萬五郎、帷子上下、澁の日傘、奴出來助、付き出る。
萬五　それに居るは、長九郎ではないか、
長九　中津萬五郎さま。
萬五　幸ひの所で逢うた、
長九　マ、これへござりませ。
　ト床几へかゝる。
して、どれへお越しでござりまするな。
萬五　されば、この度當長岡天滿宮御遷宮に依つて、主人豐岡主膳正さま、警衞の儀を蒙むり給ひしゆゑ、御神事の間は役目に付き、神職方に滯留いたして居るのサ。
長九　それは暑い時分に、御苦勞でござりまする。
萬五　ナニ長九郎、其方も知る如く、鷹津の伯父御監物どの、一國を押領せんず大望の企て。この萬五郎も一味いたせし、その根ざしと云ふは、此方主人の御息女松江姫どのに、身ども執心なれど、鷹津の若殿左市郎どのへ云ひ號けが極りあり、何卒この緣邊を妨けん爲め、これなる出來助に申し附け、頼み遣はす右の一儀、承知であらうな。
長九　成る程、お姫樣をよく〳〵御執心に思し召さばこそ。町家の番頭風情へ、委細のお頼み、心得ました、と呑み込んで、お世話申すも、この事が首尾よう參らば、私しも又あなたに、お頼み申す事がござりまする。
出來　その儀もお旦那に申し置きました。働らき次第で、おぬしの願ひも叶ふと云ふもの。
萬五　汝が頼みと云ふは、主人の娘おせんとやらを、手に入れて女房に持ちたい望み。
長九　お前樣も御主人の、お姫樣に氣のある話し。
萬五　武家と町家と變れども、同じ振り袖箱入り娘。
長九　手に入れやうとの念願なれど、細工の仕上げはどうなりませうか。
萬五　都合よくやりたいものぢやて。ハヽヽヽ。
　ト笑ふ。出來助、思ひ入れあつて
出來　時に、彼の緣邊に付きまして、結納替りに主人豐岡どのへ、鷹津家より送り越すべき正宗の刀を
萬五　コリヤ、爰は往來。もし他人が聞くならば、我れ我れの身の上なるぞ。
長九　まだ諜し合すこともござりますれば、社内の茶屋にて、一獻頂戴いたしませう。
萬五　ムウ、よし〳〵、田樂酒でもはずまうか。
出來　イヤ、また呑めると云ふものぢや。

長九　馴染みの茶屋へ御案内申しませう。
萬五　然らば長九郎。
長九　サア、ござりませ。
　ト始終、神樂にて、三人とも上手へ入る。松ヶ端の五作、娘おため、在所者の拵らへにて、連れ立ち出て
ため　父さん、もそつと靜かに歩かしやんせいなア。
五作　エヽ、若い者の癖に遲い足ぢやな。もつと大股に歩きやれやい。
　ト云ひながら、本舞臺へ來て
ため　申し父さん、次郎松さんが奉公に行かしやんした、伏見のお屋敷へ行たれば、今日は殿樣のお供して、この長岡へござんしたとの事。それで此やうに後を慕うて來ましたが、どうぞ間違はぬやうに逢ひたうござんすわいなア。
五作　オイヤイ、悴次郎松も、今は名が替つて里見伊助とやら云ふげな。おれも年は寄る、便りがないから、姪のわれを引取つて、悴がお暇を願うて、われを夫婦にして、僅かなれども田地田畑を讓り、ちつとも早う初孫の顏が見たいと、この五作が願ひぢやわいやい。
ため　中途でお暇を願ふ事ぢやに依つて、殿樣がなんとお叱りがあらうやら、わたしやそれが案じらるゝわいなう。
五作　何を吐かすぞい。親の後を立てますのぢやと云うたら、なんのお叱りがあらうぞい。喜んでお暇下さるぞや。
ため　モウ、さうなつたら、大抵嬉しい事ぢやござんせぬわいなア。
五作　オヽ、さうであらう〳〵。併し、まだ悴は爰へ來ぬと見えるわえ。
ため　殿樣のお供とあれば、どうで道草もあらうし、此方が早かつたと見えるわいなア。
五作　さうであらう。この間に御遷宮を拜んで、願ひ事の叶ふやうに、天神樣を拜んで來ようわい。
ため　ほんに、それが肝心でござんすわいなア。
五作　コレ、おため、そちやひだるうはないか。爰に飴がある。一つ頰ばつて行かんか。
ため　何をわッけもない。
五作　ハヽヽヽ。サア、來い〳〵。
　ト始終、神樂にて、上手へ入る。神樂打ち上ぐると、大小入り誂らへの合ひ方になり、向うより、鷹津左市郎、袴、小さ刀、菅笠を冠り、釣り竿をかたげ、川狩

りの見得、小姓、玉網を持ち、里見伊助、家來大勢、
茶辨當、毛氈を持ち、提げ重を持ち、附き出る。
伊助　御前、今日は大分漁がござりましたな。
左市　されば、先刻釣り上げた鯉は、淀の七年ものと見ゆる。
伊助　この長岡のお池にも、凄まじいのが居るさうにござりまする。
左市　オヽ、さうであらうとも。アレ、あれへ行て、暫らく休息いたさうか。
ト本舞臺へ來る。家來、床几へ毛氈を掛け、左市郎かかる事。
ムウ、餘程涼しき濱の景色、これにて一獻酌まう。
伊助　ソレ、お小筒を持たつしやれ。
小姓　ハツ。
ト小筒を持ち行く。
伊助　何れもには、堤へ參り、休息召され。
皆々　ハア、畏まつてござりまする。
ト橋がゝりに入る。左市郎、杯取上げ、小姓、酌をする。
左市　ナニ伊助、昨日其方へ申し附けし手紙、彼の樽屋の娘に屆けくれしか。
伊助　ハツ、早速持參いたしましてござりまする。
左市　ムウ、杯をくれう。
ト小姓、杯を持ち行く。
伊助　これは餘りの憚り、殊に拙者めは
左市　下戸なれば、氣儘に致せ。
伊助　ハツ、左樣なれば、御免下さりませう。
ト杯を取上げる。小姓、酌をする。
左市　コリヤ伊助、戀は忍ぶこそ面白けれと、樽屋おせんと某が事に付きては、誰れも外に話す者もなし、折節の通ひ路、又は文の遣り取りなど、其方ならで外にはないぞ。
伊助　ヘイ。
ト氣の濟まぬこなし。杯を持ち、モヂ／＼して居る。
左市　コリヤ、苦しうない。その杯これへ持て。
伊助　なれども餘り。
左市　ハテサテ、堅い奴ではあるぞ。
ト杯を取り、小姓に酌がせ、呑んで居る。伊助、こなしあつて
伊助　御前樣のお指圖ゆゑに、おせんどの方へ忍びのお供。

又は折々御状のお使ひ、參ります事は參りまするが、ようう思し召して御覽じませ、あなた樣は誰れあらう、鷹澤峯之頭さまの御跡目の若殿。あのおせんどのと申すは、由緒もなき町人の娘、當座のお戲むれとは申しながら、斯樣な事が御家老御用人樣方へ相聞えましては、御身のお爲に惡からうと、心痛いたし居りまする。

左市　すりや、何と云やる。某がおせんとの仲、家老どもが聞きたらば、惡しいと申すのか。

伊助　お家の瑕瑾とも、相成らうかと存じまする。

左市　ハ、、、。物堅れたやうにもない、偏屈な事を申すものぢや。未だ部屋住みなれど、追ひ〳〵家督相續をすれば、一國の主ではないか。家老どもが兎や角と申さば、知行を召上げ、改易を申し付けるわい。

伊助　左樣ではござりますれど、お云ひ號けのある閨閣のお屋敷へ、相聞えましても。

左市　實に濟まぬ縁邊、例へ輿入れを致すとも、直ぐに離緣いたすまでの事……ア、、由ない事にて氣欝いたした。重ねて申すと、其方が爲にならぬぞ。

伊助　へイ。

左市　意見いたすか。

伊助　イヤ、全く。

左市　意見をせずば、もう一つ呑め〳〵。

ト杯を差出す、小姓、持ち行く。

伊助　お銚子を下され。氣根にたべまする。

ト小筒を取り、手酌にて呑む。この時、松江姬・茶見世の娘にて、茶を酌み出て

松江　お茶を差上げませう。

ト差出す、左市郎、茶碗を取りながら顏を覗く。松江姬、振り袖にて顏を隱し、あちらへ行く。

左市　ハテ、美しい。

ト伊助へこなしあつて

イヤサ、あの濱邊の杜若、今を盛りと咲くと見えて、どうも云へぬではないか。ナウ伊助。

伊助　御意の通り、春秋は元より、夏は濱邊の杜若、四季ともに眺めある手間の庭前、何とも云へぬ景色でござりまする。

左市　伊助、其方は神職齋宮方へ參つて、庭前の杜若を、一本所望したい、苦しかるまいかと尋ねて參れ。

伊助　畏まつてござりまする。

左市　早う行け〳〵。

伊助　ハツ〳〵。左様なれば行て参じまする。
ト上手へ入る。あと合ひ方になる。
松江　茶店を捨て置いて、このマア姉さんの、何をして居やしやんす事ぢやなア。
ト向うを見て居る。左市郎、酒に酔ひたるこなしにて、側へ行き
左市　時を忘れぬ花の色、果報な花とも申すらん。
ト謡ひながら、顔を見ようとする。反けて逃げようとするを立ち塞がり
あら美しの杜若。
ト顔見合せ、こなしあつて
其方は、この水茶屋の娘か。
松江　アイ、姉さんの見世でござりまする。ちやつと用があつて、そこらまで行きましたに依つて、留主を致して居りまする。
左市　其方が姉なれば、器量もさぞよからう。其方は何歳ぢや。
松江　十七でござりまする。
左市　十七。これへ参れ〳〵。
松江　イエ〳〵、滅多には寄れませぬわいなア。

左市　ナニ、寄れぬと云ふ事があるものか。其方の器量が好いゆゑに、身共は好い話しをして聞かすのだ。
松江　好い話しとは、どのやうなお話しにござりまする。
左市　其方が苦しうなければ、身が屋敷へ参らぬか。
トこの以前より、おせん、腰元を連れ、上手より出かかり、この模様を見て、腹の立つ思ひ入れ。
松江　お屋敷へ上がりまして、どうなさるのでござりまする。
左市　さればな……身共が可愛がつて遣はさうと思つて。
松江　イエ〳〵、其やうに仰しやつても、殿御のお心は変り易いものぢやに依つて。
左市　此奴が。もう左様な口舌を申すか。一生見捨てぬと云ふ誓ひに、何なりと證據を遣はさう。さうして、何を遣らうぞ。
トあたりを見て、杯に目を付け
オ、、幸ひ〳〵、コレ、この杯の模様の梅ヶ枝、天満宮の御愛樹なれば、神慮に任す験の印、これを證據に遣はさう。
ト杯を遣る。
松江　そんなら、このお杯を。

左市　替らぬ心の二世の固め。

松江　エヽ、お嬉しう存じまする。

トこの時、おせん、出ようとする。皆々留める。橋がかりより、横井惣左衞門、戸田半左衞門、帷子上下。若黨、家來大勢、鋲打ち乘り物を吊らせ、出かゝってこの時、顏見合せ

左市　其方は横井惣左衞門。

惣左　若殿樣、豐岡家の姬君と、御内約の儀式調ひ、千鶴萬龜、只々おめでたう存じまする。

左市　ヤア。

惣左　これに在しますこそ、お云ひ號けある豐岡の御息女松江姬さまにござりまする。

半左　拙者は姬の附き人、戸田半左衞門と申す者。

左市　ムウ、なんと云ふ。然らば茶見世の娘と云ひしこの女は、アノ

松江　二世の御緣が結びたくば、斯うノヽせいと皆の衆の、指圖を受けて、あられもないこの姿、お恥かしうござりまする。

ト俯向く。おせん、腹を立ち、行かうとするを、腰元折が惡いと仕方して囁き合ひ、皆々入る。

左市　すりや、聞き及びし豐岡の息女、松江どのであつたか。ハテ、深い手段に掛りしよな。

惣左　兩國の御緣邊は、假初めならぬ鎌倉武將よりの御媒介、即ち御結納として、お家重代正宗の一振りを、豐岡どのへ送るべき御約諾、半左衞門どのにも承知でござらう。

半左　成る程、此方の殿より、小倉の色紙を引出として進ずべき兼ねての御契約。然るところ、お輿入れ延引に付き、添はれぬ御緣かと姬が案じも一方ならず、思案を以て窃かに爰へお供申し、横井氏を相賴んで、斯く計らひしも姬が願ひを叶へん爲。惣左衞門どの、何かの媒介、過分に存ずる。

惣左　只今遣はされし杯こそ、取りも直さず御夫婦固めの三々九度。お姬樣にもさぞ御安堵。兩國の大殿にも御滿足あらんと、如何ばかり喜ばしう存じまする。

左市　假初めの戲むれにもせよ、今さら違變もなるまい。吉日良辰を選み、表向きより呼び迎への沙汰を致すであらう。

松江　そのお便りを必らずともに、待つて居りまするぞえ。

惣左　大殿峯之頭さまには在鎌倉、近々御入國、御婚禮の

天保八年七月市村座所演番附

喜びに取交ぜて、領内に踊りを催ふし、五穀の神をいさむるがお家の吉例、先づ今日は御内々の儀なれば、半左衛門どのには姫君を誘ひ、一先づ歸國いたされるが、ようござらうと存じまする。

半左　拙者も左樣存ずる　嫁入りの御儀道具、第一はこのお杯、姫君へ納めるが色直しの御壽き、お姫樣、イザお乘り物へお召しあられませう。

惣左　若殿には神職方へ。

左市　然らば松江どの。

松江　左市郎さま。

ト心の殘る思ひ入れ。

半左　イザ〳〵。

ト乘り物の方へやる。

惣左衛門どの。

惣左　半左衛門どの。

兩人　お別れ申す。

ト頭になり、左市郎、惣左衛門、小姓付いて上手へ入る、姫は乘り物へ乘り、半左衛門、供廻り付いて橋がかりへ入る。あと三味線入り大拍子になり、伊助、出て

伊助　ヤレ〳〵、神主の根問ひ葉問ひには、ホッと弱つた。

トあたりを見て、

これはしたり、御前はどれへお出でになつたか知らん。

ト云ひながら、尋ねるこなし。この時、おため、出て

ため　この父樣は、どこで逸れた事ぢやしらぬ。

ト伊助と顏見合せ

ヤ、お前は次郎松さんぢやござんせぬか。

伊助　オヽ、おためどのではないか。

ため　嬉しや、お前に逢はうと思うて、先刻から尋ねて居ましたわいなア。

伊助　大方、長岡の御遷宮で參つたのであらう。連れでもあつてか。

ため　アイ、連れと云ふは、父樣ぢやわいなう。

伊助　して、親仁どのは、どれにござる。

ため　サイナア、お前に逢はうと、伏見のお屋敷へ行たれど、この長岡の天神樣へと聞いて、直ぐに尋ねて來ました。次手に勿體ないが、お宮へ參つて、そこ爰とするうちに、父樣に逸れてのけたのぢやわいなア。

伊助　なんぢや、親仁樣にはぐれたのぢや。それはさぞ一

生懸命に尋ねてござらうわえ。
ため　わたしも氣が氣ではござんせぬわいなア。
伊助　こりや、てつきり船場へ出さつしやるであらう。爰に居ては間違ふ。堤の茶店へ行て待ち合すがよい。早う行きや〳〵。
ため　アイ、さうしようわいなア。サア、次郎松さん、お前もござんせ。
伊助　イヤ〳〵、今日は御主人のお供先ゆゑ、お目にかゝりませぬと、親仁樣に申し上げてくりやれ。
ため　イエ〳〵、今日は是非逢ひたいと、伏見のお屋敷へ行かしやんしたのぢやわいなア。
伊助　主人の屋敷へは、何の用で。
ため　サイナア、お前のお暇を貰ひに。
伊助　エヽ。そりや又どう云ふ譯で。
ため　在所へ呼び歸して、娌のわたしと女夫にすると云うて、父樣も得心、わたしも得心ぢやわいなア……さうして、お前も大方得心でござんせう。マア、ちやつと父さんに、逢うて下さんせ。サア、連れ立つて行きませうわいなア。
伊助　ハテサテ、益體もない。身共に談合も致さず、お暇を願ふなぞとは、埒もないお人ぢや。マア、思案をして、此方から返事を致さうと、親仁樣へ申してくりやれ。
ため　お前が直に逢うて云うたがよいわいなア。
伊助　お供先だから、行く事はならぬと云ふに。
ため　ツイちよつとぢやわいなア。
伊助　ちよつとでもならぬと云ふに。
ため　マア、ござんせいなア。
　ト無理に引ッ張る所へ、おせん、左市郎を連れ出る。
せん　サア〳〵、お掛け遊ばしませいなア。
　ト伊助、おためを退けて
伊助　これは御主人、おせんどの。
左市　女の縒れる黒髮には、大象も繋がるゝ。
せん　どうせ云ひ號けのお姫樣のやうにはござりますまいわいなア。
左市　そろ〳〵御託宣が始まるぞ。お神樂〳〵。
せん　何を好い口な事云はしやんす。
　トぴんとする。
ため　次郎松さん、そんならあなたが。
伊助　御主人の左市郎さまと申すのサ。
ため　そんなら、お暇の事を直々、お願ひ申さうわいな

ア。
伊助　滅相な。それを申し上げて堪るものか。
左市　伊助、その女は。
ため　ハイ、云ひ號けの女房でござりまする。
伊助　これはしたり、其やうな事は云はいでもよい事を。
左市　ホヽウ、それでは伊助は、疾より惡性を働らいて居
　つたのぢやなア。
せん　イエ〳〵、伊助どのよりは、あなたの惡性、吟味を
　せねばなりませぬわいなア。
伊助　さうとも〳〵。こりや云はねばなりますまい。
ため　アイ、云ふぞえ、金輪際云はにやなりませぬわいな
　ア。
伊助　われは默つて居やれと云ふに。
せん　イヽエ、わたしは申します。
左市　耳の役ぢや。聞き遣はさう。
せん　あなたにはお忘れでもござりませう、去年の秋の高尾
　山の紅葉狩、折節の時雨空、わたしがさした傘へ、お寄
　りなされた雨舍り。お出入り申すお屋敷の、若殿樣とは
　夢にも知らず、ほんにマアいとしらしい殿御ぢやと思へ
　ば、あなたもあのゝものゝと、お懇むれが、いつの間に
　やら誠となつて
左市　伴ひ寄りし地藏院。怪しき夢を手枕の、云ひ交した
　るさゞめ言。
せん　よく〳〵聞けば、鷹津家の若殿樣と、そぐはぬ御縁、
左市　それなり伊助に申し付け、假の媒介、雁金の罠に從
　る交の傳手。
せん　それから深うなりました、仰せは覺えて居りまする
　わいなア。
ため　ほんにマア、他所の事より私しの事。モシ、次郎松
　さん、思ひ直して、どうぞ在所へ。
伊助　ハテサテ、何を申す。扣へて居れと申すに。
ため　そりやお前、心強いと云ふものぢやわいなア。
左市　心さへ替らずば、緣と時節を待つのが樂しみ。伊助
　其方もさうは思はぬか。
伊助　御意の通りにござりまする。
せん　それでもお姫樣へ、二世を固めの杯まで上げたを、
　よう見て居りましたゆゑ、わたしや思ひ切りまするが、
　云ふに云はれぬこの身の懷胎。
　　ト左市郎驚ろき
左市　そりや其方は懷胎とな。

伊助　ナニ、おせんどのには殿のお胤ぢや。ムウ。

ト愕りこなし、

ため　さうぢや。

ト伊助の刀を手に取りかゝるを、よろしく留めて

伊助　コリヤ待て。何を致すのぢや。

ため　なんと云うて、在所へ戻つて下さんせにや、わたしやこの場で死にまする。

伊助　ハテサテ、それは短氣千萬、マア〱待て。

せん　母様にまで包み隠せし事なれば、わたしも生きては

ト左市郎の刀へ手をかける。

左市　コリヤ待て、最前姫へ申せしは、ありや當座の僞り言。疑ひ晴れずば、某とても生きては居ぬ。この場に於て切腹いたす。

トおせんを退け、腹を切らうとする。伊助、留めて

伊助　これは御短慮、先づ〱お待ちなされませ。

ため　どうあつてもわたしは。

伊助　早まるな。待て。

せん　殿様より矢ッ張りわたしが。

伊助　イヤ、待たつしやれ。

左市　イヤ、某が切腹。

伊助　お待ちなされい。

ため　矢ッ張りわたしが。

ト死なうとする。伊助、留める。左市郎、刀を抜く。おため、伊助が脇差を抜く。おせん、左市郎の刃物へ縋る。伊助、三人をいろ〱留め。ト、両方の白刃を摑んで留める。左市郎、驚き、手が切れるから放せと云ふ。伊助、切れてもよいと云ふ事、いろ〱あつて

伊助　お急きなされるな……われも急くな……マヽ、お待ちなされませう。

ト白刃を握る見得。五作、この時出かゝり居る事、

左市　白刃を摑み、平氣の有様、伊助、其方は如何いたしたのぢや。

五作　イヤ、その譯は私しが申し上げませう。

ト上手より出て、合ひ方になる。

伊助　ヤ、あなたは親仁様。

ため　父さん。

五作　おため、われに逸れて、さま〱と探して居つたわい。

左市　して、その者は。

伊助　拙者が親どもにござりまする。

ト左市郎、刀を引き、伊助と一緒に納める。五作、おためを連れ、伊助も下へ下りろ。左市郎、おせんを連れ、上手の床几へ行きかゝる。

五作　殿様へ申し上げまする。私しは松ヶ端の五作と申して、この伊助が親めでござりまする。伊助が前の名は次郎松、幼少い時から頑丈な奴で、畑へ出まして鋤鍬の荒仕事、怪我をせうが膝頭を擢り剝かうが、どう云ふ事にやら、とんと血が出ませぬ。これは變な事おやと、庄屋どのへ行つて尋ねましたら、それは大力不死身と云ふのであらうと仰しやる。さてはさうかと悴にも云ひ聞かせ育てるうちにも、たつた一人の祕藏子、段々と成人を致すうち、力業は何事でも、なか／＼負ける事ではござりませぬ。アヽ、いつやらでござりました。大殿様がお鷹野にお出でなされた時、悴めの力業が、計らずお目に、留まりまして、直ぐにお屋敷へ御奉公、里見伊助と名を改めましたは、悴が十八の年でござりました。

伊助　只今親どもが申されまする通り、大殿様のお目鏡に叶ひ、若殿左市郎さまのお側近く、若黨の役目を申し付くる間、隨分大切に仕れと、有り難い御諚命。素性卑しき身の上で、冥加に叶ひました御奉公、朝夕の起き臥しにも、御主人大事御奉公が大切だと、これのみを心がけ居りまする。所に圖らず庄屋の娘御に、お目をかけられ、お大名様でも、こればかりは別なもの、世間を包むお忍び合ひ、そのお供やら、又はお文のお使ひ、アヽ、好からぬ事だと存じましても、御意見を申せばお氣に逆らひ、もしこの事が親殿様のお耳に入らば、伊助が出ない事を取持つゆゑと、お叱りも大抵ではあるまい。詰まらぬ事だと存じながらも、過ぎ行く月日。所に只今おせんどのが、殿様へ恨めの數々、生きては居ぬと刃物三昧、これはと留める其うちに、あの女が死なうと申し、こちらを宥め、あちらを留めるその拍子に、思はず知らず摑んだ白刃。

五作　お目に留まつて、お尋ねにあづかりました悴が身の上、不死身の因縁、様子と申すは、ハイ／＼、斯くの通りでござりまする。

左市　初めて聞いた伊助が身の上。ハテサテ、不死身であつたるよな。

伊助　拙者よりは、驚ろき入つたるおせんどのゝ懷胎。斯うなる上は、どこまでも伊助が、お世話を仕るでござりまする。

左市　すりや、今までのやうに意見も致さず、取持つ心か。

せん　殿樣と添はして下さんすかえ。

伊助　假にも殿樣のお胤を宿し參らせし上は、折を見合せ、御家老柿川傳十郎さまへ申し上げ、お部屋樣に致させまする。命が物種、何事もお心長う思し召して、お出でなさるゝが、よからうやうに存じまする。

左市　それ聞いて余も安堵。伊助、ときに頼むぞよ。

ト此うち、おため、五作が袖を引く。今の事を云へと云ふこなし。五作、呑み込みこなしあつて

五作　イヤ、其方の御用が濟んだら、此方の用も聞いてもらはにやならぬ。その譯と云ふは、殿樣にお願ひ申し、お暇を貰ふのは、どうやら我まゝのやうなれども、在所へ戻つて、親の後式を立てる事は、世間にはいくらもある。なんぼう御奉公を大事にしても、根が百姓の悴、武家の役には立たぬ勝ち、譬への通り、川育ちは川で果つるのぢや。在所へ戻り、このおためを女房に持つて、睦まじう暮らしてくれよ。おれも早う樂がしたい。コレ、われも共々勸めおれい。

ため　在所に育つて不束なわたし、お氣に入らう筈はなけれども、父樣へ孝行ぢやと思うて、どうぞ在所へ戻るやう、お願ひ申して下さんせいなア。

伊助　成る程、親仁樣の思し召し、至極尤もに存じまする。さしたる御奉公もなく、お暇を願ふは、如何とも存じますれど、後目を立てるは親への孝行、いづれの道お暇を願うて、在所へ歸らうと存じまする。

ため　アレ、父さん、在所へ戻らうと云うてぢやわいなア。

五作　そんなら戻つてくれるか。出かした／＼。幸ひ殿樣も、これにござれば、お暇の願ひを、ちやつと申し上げたがよいわえ。

ため　早うお願ひ申して下さんせいなア。

伊助　親仁樣、そこでござりまする。

五作　そことは、どこぢやの。

伊助　元來大殿峯之頭さまの、お見出しにあづかり、御奉公に出ましたでござりますれば、右の仔細を打明けてお願ひ申し、兎も角も御承引がなければ、心濟みが致しませぬ。その大殿樣は在鎌倉なれども、この七月には御歸國、御機嫌を見合せ、御家老衆よりお暇の儀、御披露お願ひ申さうかと存じまする。

五作　ムウ、これも尤もぢや。イヤモウ、得心さへすれば

一月や二月遅うなつても、仕方もないてや。
ため　さうでござんす。シタガ、ちつとも早うお願ひ申して下さんせえ。
伊助　オ、サ〳〵、來月の下旬には、是非在所へ歸るであらう。
五作　それ聞いて、おれも安堵ぢや。
ため　わたしも落ちつきましたわいなア。
ト此うち、おせん、爰では話しがならぬ、あの茶見世に來いと云ふ思ひ入れあつて、手を取る。伊助、見て取つて
伊助　イヤ、御前樣には、何かのお物語りもござりませうあの茶見世の座敷へ、暫時御休息あられませう。
左市　ムウ、然らば暫時休息して歸らうか。
伊助　それがよろしうござりまする。
ト左市郎、先におせん附き、上手の障子屋體へ入る。
ア、御懷胎の事を承り、今更お引分け申す事もならず、ハテサテ困つた事になつたなア。
五作　コレ悴、さうして來月、キツと在所へ戻るかの。
ため　ほんに念を押して置かぬとなア。
伊助　イヤ、何かの儀は、書狀にて申し上げませう。先づ今日はお歸りなされませ。
五作　オ、さうか。去なう。シタガ、悴、必らず今云うた事を違へぬやうに。
伊助　ハテ、御念には及ひませぬ。
五作　それなれば安心ぢや。これと云ふも、天神樣の御利益。ア、有り難い〳〵。
ト上手を拜み
そんなら、そろ〳〵行かうかい。
伊助　堤へござつたら、下り船がござりませう。おためどの、親仁どのを氣を付けて下されや。
ため　アイ、父さんの事は案じさつしやんな。シタガ、來月はキツと在所へ。
伊助　ハテ、此方に如才はない。待つて居やれ。
ため　アイ〳〵、それまでは、お前もおまめで。
五作　エ、もうよいわえ。それよりは早う船場へ。
ため　アイ〳〵。
ト唄になり、五作、おためを連れ、向うへ入る。あと伊助殘り居る。この時、萬五郎、出來助を連れ出て
萬五　里見伊助に縄打て。
出來　心得ました。伊助、腕廻せ。

トかゝるを立廻つて

伊助　ついに見請けぬお侍ひ、拙者に繩かけいと仰しやるは、一圓合點が參りませぬ。

萬五　身共は豐岡の家中、中津萬五郎と云ふ者、主人の息女松江姫さまと、緣邊定まる其方の主人、出入りの町人、樽屋與左衞門が娘と不義密通。この媒介は里見伊助、其方であらうがな。

出來　三寸繩に括し上げ、糺明をば致すのぢやわい。

伊助　ハテ、いかいお世話だなア。何は格別、御主人に町家の娘と不義もなく、元より媒介を致せしなぞ、眞以て覺えはござらぬ。麁忽を仰せられて、後で後悔し召さるな。

ト此うち、長九郎、窺ひ出て

長九　さうは云はさぬ。慥かな證據がある。

伊助　お身は樽屋の番頭長九郎。

長九　伊助どの、嫁入り前のお孃樣を、疵物にしたは、こなたの取持ち。この事を後家御のお千枝さまに申し上げたら、喜ばるゝか知らぬが、このおれは怪體が悪いワ。キツと返禮せにや置きませぬぞ。

伊助　番頭、そりや何を云ふのぢや。てまへに屋敷へお出入りの樽屋なれば、内外とも入魂にいたす間柄ではないか。その身共が、なんで左樣な事を致さうやうがないわサ。

長九　イヤ、云はんすな〱。この長九郎が一目睨んだら、證據はあるのぢや。それゆゑに萬五郎どのへ申し上げたのぢや。

萬五　サア、伊助とやら、申す詞があるか。

伊助　サア、それは。

萬五　不義の取持ち、繩かけるのが誤まりか。

伊助　サア、それは。

長九　サア。

萬五　サア。

三人　サア〱〱。

萬五　伊助、なんとぢや。返答いたせ。

ト思案の思ひ入れ。

長九　エヽ、面倒だ。この障子の内を。

萬五　出來助、早く。

出來　ハツ。

ト兩人、障子屋體へ行くを、伊助、支へる。この間に長九郎、ツカ〱と行つて、障子を明ける。内に、惣

左衛門、袴形にて、其のみ居て、長九郎を捻ち上げる。

長九　アイタヽヽ。

萬五　ヤア、貴殿は横井惣左衛門どの。

伊助　誠に、あなたは惣左衛門さま。

出來　こりやどうぢや。

ト合ひ方になり

惣左　武士の面前、素町人の泥足を踏み込み、何ゆゑのこの狼藉。

長九　サアそれは。

惣左　不埒の奴め。

ト平舞臺へ見事に投げる。

長九　アイタヽヽ。慥かと思うたに、ハテ、面妖な。

ト伊助も心得ぬこなし。

萬五　手前屋敷の扶持人、伊助を捕へ、何か詮議のあるやうな。横井惣左衛門、それへ參つて承るであらう。

ト刀を提げ、平舞臺へ下りる。

萬五　惣左衛門どの、御存じなくば、耳を洗つてよく聞かつしやれ。此方の主人の御息女松江姫さまと

惣左　此方の若殿左市郎さまと、御縁組みの儀に、申さずとも相知れた事サ。

萬五　サア、その御縁組みの極まりし身を以て、町家の娘とは不義密通。此方の姫を左様な所へ縁付け、御主人の面皮が立たうか。とくと實否を糺した上、屋敷の掟を相立て申す。

惣左　ハヽヽヽ。そりや其方の手前勝手と申すもの。お云ひ號けは極まりあれど、未だお輿入れもなされず、譬へ又御縁中に極まるにもせよ、妾めかけは大身には間々ある事。それになんぞや、下賤の者同様に、不義密通なんぞとは、萬五郎どの、こりやアちと御粗相かと存じまする。

萬五　默り召され。斯様な事を吟味せよと、鷹津どのゝ伯父御たる、監物さまより身共への御内意、詮議を遂げるを、粗相とは申されまい。

惣左　すりや、伯父御様の指圖を以て。

萬五　如何にも。

惣左　伏見領内一國の政事は、老職たる梶川新十郎どのゝ計らひ。分地にござる伯父御様より、御差配はこれなき筈。たつて詮議を召さるゝと、事を好む伯父御の胸中、内意を請けし萬五郎どの、底の企みを吟味なさうか。

萬五　イヤサ、その儀は。

惣左　手前の殿に遺恨あつてか。
萬五　イヤ、全く以て。
惣左　此方から詮議せうか。
萬五　サア。
兩人　サア／＼／＼。
惣左　萬五郎どの、斯樣な事より得て屑の出るもの。差出ずと扣へさつしやれ。
萬五　なんとせう、これは拙者の出損ひでがなござらう。
出來　イヤサ、お旦那、この詮議をなされいでは、兼ねての手筈が。
萬五　ヤイ／＼、何をうぬが差出た。すッ込んで居らう。
長九　イヤ、餘人はすッ込まうが、手前はすッ込んでは居らぬのぢや。この番頭がお供したお孃樣を、いづれへか忍ばされては、世間が濟みませぬ。ハイ、憚りながら緩怠ながら、この詮議ばかりは、どこまでもし拔くのぢや。サア、お侍ひ樣、さう思うてもらひませうかい。
惣左　ムウ。して若殿が、不義をなされし證據があるか。
長九　仰しやんな。證據は二人が慥かにこの內。しかと見拔いたこの番頭。
惣左　して、若殿はどれにござる。

長九　そこぢやて。いつの間にやら入れ替つて。
惣左　この所にござらねば無證據同然。
長九　サア、それはな。
惣左　おせんとやらは、どれに居る。
長九　それは。
惣左　若殿はいづれにござる。
長九　サア。
惣左　サア。
兩人　サア／＼。
惣左　どうぢや。
　ト睨め付ける。長九郎、慄へながら
長九　侍ひ風を吹かしても、脅しを喰ふやうた番頭ぢやござらぬ。透かした所は茶見世の脊戸口。踏み込んで引出して見せう。
　ト駈け込むを引き廻し
惣左　おのれ、踏み込まば手は見せぬぞ。
出來　面倒な。いつそ。
　ト惣左衛門へ切つてかゝる。萬五郎も拔いて切りかゝる。伊助、長九郎を引き留める。惣左衛門、萬五郎出來助の白刃を引取り、二人とも背打ちを喰はせ

惣左　身動き召さると、ぶち放すぞ。

伊助　ア、申し、惣左衛門さま、御神事の場所と申し、只何事も穩便に。

ト長九郎を投げる。

惣左　事明白に糺しなば、血で血を洗ふ伯父御の惡心。

トこなしあつて

斯く手籠めに會うて、武士道が相立たずば、後日の試合はいつなりとも、手前が屋敷へ推參しやれ。

ト拔身を拋る。此うち、長九郎、伊助へかゝらうとして、氣を替へ、逃げて入る。萬五郎、ソツと拔身を取り、惣左衛門が前を摺り拔け、あちらへ行つて

萬五　出來助、如何いたさう。

出來　拍子が惡い。先づ出直して參りませう。

萬五　成る程、一旦恥辱は請けるとも、始終の勝ちこそ本望ならん。惣左衛門どの、今日の返報は重ねてキツと。

惣左　念には及ばぬ。何時なりとも。

萬五　詞を番ひましたぞ。

出來　とは云ふものゝ。

萬五　コリヤ、何にも云はずに、來い。

トづいと橋がゝりへ走り入る。

伊助　サア、これからが番頭ぢや。貴樣には又、この伊助が。

トあたりを見て

こりや逃げつたか。逃げ足の早い奴ぢやハヽヽ。

惣左　里見伊助、近う參れ。

伊助　ハツ。

ト合ひ方になり

惣左　陪臣ながら其方が實義を見込み、申し附ける役目がある。一大事の儀ぢや。しかと相勤めるか。

伊助　御恩を蒙むる鷹津のお家、一大事とござりますれば、伊助めが一命に替へましても

惣左　しかと勤めるか。

伊助　毛頭違變はござりませぬ。

惣左　とても事に誓言が見たい。

伊助　御尤も。

ト金打をする。

惣左　申し附ける役目と云ふは、この度兩國の御緣邊の儀に付き、豐岡家へ結納の印として、差送るべき正宗の刀何者の仕業にや、疾より紛失。

伊助　ナニ、お家重代の正宗の刀が紛失とな。ムウ。

トこなし。

惣左　家老職たる梶川新十郎どのゝ内意に依つて、斯く云ふ某、忍び〳〵に詮議いたせど、今に於て在所知れず。結納送らざれば、御縁組みは破るゝ道理。元來鎌倉武將よりの御媒介なれば、この儀首尾よく調はざる時は、兩國斷絕の基。他聞を憚り、密かに詮議を遂げん爲、種々に心を碎き居るわえ。

伊助　存じ寄らざるお刀の紛失。この頃家中の風說と云ひ、もしや伯父御樣の。

惣左　サ、これとても證據を取り得ねば、迂濶になし難し。それに付き、鎌倉に在します大殿樣より、火急の御書面。某彼の地へ發足して、引出結納の取交し、今暫らく日延べの願ひ。さるに依つて、下樣ながら其方が器量を見込み、申し付ける刀の詮議、在所を求め手に入るやう、彼の地にて吉左右相待ち居るぞよ。

伊助　等閑ならぬ大切の役目、粉骨碎身仕つて、刀の在所、詮議仕るでござりませう。

惣左　家中の内にも心を付け

伊助　毛筋程でも手掛りを取り得なば

惣左　それを手繰つて詮議の約諾。

伊助　刀が出ればお家長久。

惣左　其方が忠義も空しからず、萬事に氣を付け、油斷なきやう。

伊助　承知仕つてござりまする。

トこの時、暮れ六ツの鐘鳴る。上手より、左市郞、小姓付き出て

左市　おせんと某を、裏道へ廻せし惣左衞門の計らひ、感心いたした。併し、其方は鎌倉へ發足いたすとあるが、大儀ぢやなア。

惣左　大殿の御歸國、お迎ひ萬端、御前には、隨分御健勝にて。

左市　オ、、其方も達者で歸國を待つぞよ。

伊助　日脚もたけましてござりますれば、御前には急き御歸館あられませう。

ト家來皆々出る。

左市　左樣いたさう。然らば惣左衞門

惣左　これにてお別れ申しまする。ナニ伊助、只今の一儀を。

伊助　後より吉左右、お聞かせ申しませう。

左市　伊助、供せい。

ト唄になり、左市郎、小姓付添ひ、伊助思案のこなし、供廻り付いて向うへ入る。惣左衛門、見送るこなし。

梅助　橋がゝりより、奴梅助、箱提灯を持ち出て
お旦那、夜道をかけて御發足とござるゆゑ、お供廻り何かと相調へてござりますれば、お屋敷へお歸りあつて、お旅立ちの御用意あられませう。

惣左　ナニサマ、立歸つて用意いたさう。
ト梅助、提灯を持つて花道際へ行く。
待て〳〵。
ト封の切れし狀、落ちてあるを拾ひ上げ
心得ぬ一封、灯を持て。

梅助　ハツ。
ト提灯を差出す。狀を讀み

惣左　ナニ〳〵。「お賴みに依つて、長岡天神の參詣の折柄、樽屋の娘を仲間の者に云ひ付け引ツ浚ひ、彼の隱れ家へ連れ行き、匿まひ置くべき事……長九郎どのへ、御存じより」
ト讀み、こなしあつて
若殿のお情を蒙むる、樽屋の娘に用事ある時は、若氣の御短慮。もしや殿の御身に。ハテ、何とがな。
ト考へる。この時、上手にて

皆々　ようさや、てうさ〳〵。
ト大勢の聲する。惣左衛門、見やり、こなしあつて、梅助にちやつと囁く。兩人小蔭に隱れる。庭神樂になり、幕明きの大勢、おせんを引立て出る。腰元皆々支へるを突き放し

まつ　お嬢樣を、どうするのぢやぞいの。

皆々　評判娘のおせんさんを、おいら達が貰ふのだ。

すぎ　エヽ、女ばかりと侮どつて、滅多な事をしなさんすと、聞く事ぢやないぞや。
ト日傘を振り上げる。皆々女達を手籠めにする、爰へ梅助出て

梅助　うぬら、さう巧くはさせねえぞ。
ト女形は皆々おせんを圍ひ居る。

世話　ヤア、邪魔な奴め、叩き締めろ。

皆々　合點ぢや〳〵。
ト棒切れにて、打つてかゝる。神樂早め、ト刀を拔いて切り捲り、追つて入る。長九郎、頰冠りにて、出て來り、腰元を引退け、おせんを引立てようとする。梅助、惣左衛門、出て、長九郎を引き廻し、投げる。梅助、

引返し出て

惣左　梅助大儀。

梅助　ハツ。

ト刀を納める。神樂止む。

せん　ヤ、あなたは先刻の。

惣左　コリヤ、何にも云はずと、この場を早う。

まき　サア、お孃樣。

トおせん、皆々、花道へ行く。長九郎、起きて行くを惣左衞門捻ち上げる。

梅助　其奴が顏を。

ト提灯を差附け見るを

惣左　吟味に及ばぬ。火急の發足。

梅助　然らば此まゝ。

せん　段々のお情。

惣左　禮には及ばぬ。

ト長九郎を投げて

行きやれ／＼。

ト神樂の三味線入りにて、女形皆々向うへ入る。この見得よろしく。　ひやうし幕

下の巻

伏見樽屋の場
小倉堤盆踊りの場

役名――鷗津左市郎。家老、梶川新十郎。樽屋後家、お千枝。同娘、おせん。同腰元、おまつ。同おまき。同下女、おすぎ。同丁稚、三太。同番頭、長九郎。中津萬五郎。同奴、出來助。岩瀨十平次。石塚甚平。若黨、里見伊助。

造り物、二重見付け世話襖にて、上手、折り廻し數寄屋障子、橋がゝり後へ寄せて、障子屋體、低き塀いつもの所門口、小さき切籠燈籠を吊り、上手、植込み、高燈籠、すべて、用達樽屋見世の體、上手に、番頭長九郎、帳合ひをして居る。腰元おまつ、おまき、下女おすぎ、丁稚三吉、寢はら這ひ、女形は踊りの揃ひを縫うて居る。この見得、よろしく、稽古唄にて、幕明く。

三吉　おまさどん、お前はもう大方仕立て上がりましたなう。

まき　イエ〳〵、針は悪し、モウ〳〵手間取れる事ぢやわいなう。

まつ　さうしてお杉どん、もうお前のは縫ひ上がつたかいなう。

すぎ　イエ〳〵、お前方は上を勤めて居なさるに依つて、仕事はお手の物ぢやが、わたしどもは臺所ばかり働らく役廻りゆゑ、手は荒れてあるし、こんな仕事の手傳ひは出來ませぬわいなア。

三吉　ほんに、そりやアお杉どんは尤もぢや。なれどもお出入り屋敷からの急御用ゆゑ、お前にも手傳はせろと後家御様の云ひ付け。マア、こぼさずに縫うたがよい。

まき　ほんに、晩方にはお屋敷へ納めぬと、お叱りを受けるとの事ゆゑ、精出して縫ひませう。

まつ　その代り、お嬢様と御一緒に、踊りに行かれる事ゆゑ、それが樂しみでござんす。

すぎ　オヤ、そんならお嬢様と一緒に、踊りに行かれるかいの。そりやマア嬉しや。今から仕事が手に付かぬわいなう。

長九　エヽ、喧ましい女郎どもぢや。一昨日の杯勘定、長家の家賃から金利まで、ちやんと算用して置かうと思へど、べちやくちや〳〵耳障りがして、算用の出來る事ぢやない。お杉、お前は早う仕舞うて、行水の湯を、よう沸かして置きやれ。

三吉　番頭さん、そりや可哀さうぢや。

長九　何が可哀さうなのぢや。

三吉　何がと云うて、今日は七月の十六日、地獄の釜の蓋さへ明く日ぢや。遊ばしてやらつしやれ……シタガ、閻魔大王は、この世には居ぬと思へど、矢ツ張り居ると見えるわえ。

長九　そりや、どこに居る。

三吉　ソレ、お前の事ぢやて。

長九　ナニ、おのれ、閻魔ぢやと吐かし居つたな。

ト算盤にて打つてかゝるを、皆々留めて

女皆　もう長九郎どん、よいわいなア。

ト宥める。この時、納戸より、おせん、出て來り

せん　コレ長九郎、母さんが寐て居やしやんすゆゑ、靜かにしやいなう。

長九　ヘイ〳〵、餘り番頭が馬鹿に致しますゆゑ、思はず高聲を致しまして、眞平御免下さりませ。

トこの時、橋がゝりより、町人、出て來り

町人　お頼み申します。
三吉　ハイ、どなた様でござります。
町人　虎屋萬十郎、中元の御祝儀申し上げまする。
三吉　有り難うござりまする。
　ト町人、元へ入る。
せん　さうして、お屋敷の御用は、大方片附いたかや。
女皆　ハイ、大體片付きましてござりまする。
まつ　お孃樣、今宵はお供をして、踊りに參じませう。
せん　サイナウ、母さんのお許しが出たに依つて、わしも行くのぢやが、今やう／＼昨日の反物を、奥で縫ひ上げたわいなう。
まき　それはマア、あなた御自身にて。
せん　お前達も、忙がしい事ゆゑに。
長九　ア、モシ／＼、踊りにお出でなさる事は、止しになされませ。
せん　そりや又なぜにえ。
長九　さればでござりまする。今年は怪しからぬ豐年でござりまして、在も町も踊りで押し返して居りますゆゑ、さう云ふ人込みの中へお出でなされては、碌な事は出來ませぬ。それゆゑ踊りにお出でさるゝのは、徒らの元ぢや。こりや止しになされませ。番頭の長九郎、惡い事は申しませぬ。
せん　サア、其やうに云やれば、そんなものかいな。
まき　イエ／＼、大事ござりませぬ。お家樣のお許しではござりませぬか。
三吉　さうぢや／＼、行きなされ／＼。既に以て釋迦如來も、踊れ／＼踊れやれ踊れ、踊らぬ者は阿房なり。
長九　エヽ、默れ。餘計な口叩かずに、この縫ひ物奥へ持つて行て、茶なと沸かして置けい。この阿房めが、何を痴言を盡すのぢや。
女皆　オヤ／＼、こりや大分に浪が荒うなつて來た。
　ト縫ひ物を持ち、皆々奥へ入る。おせんも行かうとするな
長九　ア、モシ／＼、ちよつとお孃樣。
せん　なんぞ用かや。
長九　用かとは餘所々々しい。マア、お坐りなされませ。
　ト下に居させて、合ひ方になり
先度も云うて口説けど、云はねばならぬ浮世の義理。こりやコレ番頭の役目でござりまする。この内方に男のお子と云うてはなく、天にも地にもお前樣一人、聟さんを

取つて、この内を納めようと、後家御さんの思し召し。そこで私しが、お舅さんをお取りなされませと勸めても、お聞入れもなし、それに付きましても後の月、長岡の天神さま、お前様ゆゑにはこの番頭、大抵や大方苦勞を致して居りまする。それもいとひは致しませぬが、お孃樣はこの大振袖では居られまいぞえ。

せん　サイナウ、母さんが常々、その事を云うて、叱つておやけれど、おつゝ願ひがあつて、わたしや一生殿御は持たぬ氣ぢやわいなア。

長九　持たぬ氣も凄まじい。一生男を持たぬ氣のお前樣が、お出入り屋敷の若殿左市郎さまと、どう云ふ事で云ひ交してお出でなされまする。

せん　そんなら疾よりその事を。

長九　番頭の長九郎、一日睨んだら身動かしもさせる事ではござらぬ。それもよけれど、お主も同然の殿樣と云ひ交し、末はどうする積りでござりまする。

せん　ア、コレ、其やうに大きな聲をして、母さんに聞えては惡いわいなう。

長九　ようござりまする。云うて惡くば申しませぬが、お孃樣、所詮お前樣の願ひは叶ふ時節はござりませぬ。ハテ、お大名の御子息と町人の娘、譬へを云はゞ提灯に釣り鐘、釣り合はぬは不縁の元。ソレ、忠臣藏の九段目にも出てあるではないか。それより似合ひ相應な、ツイ鼻の先に、どんな發明な好い男があるまいとも申されませぬ。なんと、私しが云ふ事を聞く氣はござりませぬかいなう。

せん　其方のやうに云はれると、どうも云ひやうがないわいなう。こりや母さんに打明けて。

　ト立たうとするを留めて

長九　ドッコイ／＼、奧へやつては物がない。日頃からこの番頭が、あのゝものゝと云ふを、びんしやん／＼となさるゝ。私しも其やうにされては男が立ちませぬ。サア、なんとか云うて下さりませ。

せん　エヽ、それぢやと云うてお前には。

　トこの時、町人、また出て

町人　お頼み申します。

長九　ドウレ。

町人　荒物屋六兵衛、御祝儀申し上げまする。

　ト云ひ捨て入る。この間におせん、逃げようとする。

長九　ドッコイ、逃がしてよいものか。この長九郎が生靈

は、鬼になつても通さいで置かうか。
せん　アレ、誰れぞ來ておくれいなア、
ト逃げ廻る。この時、醫者、供を連れて出て
醫者　頼まう。
長九　エヽ、忌々しい……ドウレ。
醫者　原養氏、お禮申す。
ト云ひ捨て入る。
長九　勝手にさらせ……さりとては　さうつれなう逃げる
ものではござりませぬ。
トいろ／＼追ひ廻す。此うち、伊助、若黨の拵らへに
て、出て來り
伊助　お頼み申す。
長九　又かいやい。
伊助　お千枝どのは在宿でござるかな。
ト云ひながら内へ入る。此うち、おせん、ソツと納戸
口へ入る。伊助と顔見合せ
長九　ヤヽ、いつの間にやら伊助どの……イヤ、酷い目に會
うてのけた。
ト奥へ入る。
伊助　ハヽヽ、こりや番頭どのには、まるで狐付きのやうぢ
や。ハヽヽヽ。
トこの時、おせん、奥より出て
せん　伊助どの、待ち兼ねました。ようござんしたなア。
伊助　成る程、この間中は御用繁多にて、お尋ねも申さな
んだ。先づ暑さのお障りもなうて重疊々々。
せん　お前樣にも、御機嫌よいかえ。
伊助　随分息災でござる。
せん　さうして、アノ、お噂のお嫁御は、見えはせぬか
え。
伊助　なんの／＼、あの方からはお輿入れの催促は度々な
れど、兎や角と申してお延しなさるゝ、左市郎さまの底
意は、あなたへの心中。なんと嬉しいか／＼。
せん　それを聞いて、ちつと落ち付いたわいなア。
伊助　落ち付いた次手に、この間參つた文の御返事。ソレ、
お渡し申すぞ。
ト狀を渡す。
せん　此やうにお文の遣り取りするも、皆お前のお庇。こ
の御恩は忘れませぬぞえ。
伊助　サア、町家とは違うて、物堅いお屋敷を勤めながら、
此やうな媒介をするは、よからぬ事とは存じながら、何

を申しても若氣の出花。一寸先は闇の世界だ。

ト此うち、おせん、封を切り、卷讀みにして居る。奥より

長九　伊助どの〳〵。

ト叫けながら出る、文を隱す。

コレ〳〵、お家さんが逢ひたいと云うて待つてござる。奥へ行てお目にかゝつたがよい。

伊助　然らば奥へ行て、お目にかゝらう。シタガ、番頭どの、先頃は長岡の天神で

長九　痛いお世話にあづかつた。

伊助　ハヽヽヽ。ドリヤ、奥へ行かうか。

ト奥へ入る。

長九　と云うて邪魔は拂うたと云ふものぢや。

せん　そんなら、母さんがお逢ひなされないと云うたのは。

長九　先刻の邪魔の意趣返しぢや……モシ、おせんさん、どうぢやいな〳〵。

せん　わしや知らぬわいなア。

ト行かうとする。この時、伊助、出て來り

伊助　イヤ、お千枝どのは寐てござるのに、よく嘘をつく和郎ぢや。貴樣行て、起し申してくりやれ。

長九　貴樣起したがよいわえ。

伊助　ハテ、行てたもれと云ふに。

長九　エヽ、面倒なお人ぢやなア。

ト奥へ行く。兩人、並び住ふ。また長九郎引返して來て

ドッコイ〳〵、お孃樣ばかりの所へみだら千萬。お前も此方へござりませ。

トおせんの手を取るを、伊助、引分け

伊助　人を咎むる番頭どの、おぬしもどうやらみだら千萬。

せん　ほんにモウ、大抵のみだらぢやござんせぬわいなア。

長九　アヽ、コレ〳〵、詞多きは品少なし。云はぬが花ぢや〳〵。

伊助　その花を荒さうとする野良猫の番頭、嫁入り盛りの花鰹、引きにかゝつた今の騷動、後家御の耳へ入れようか。

長九　アヽ、コレ〳〵、滅相な。それを云はれて堪るものか。

伊助　それもさうだ。詞多さは品少なし、云はぬが花だ花だ。

長九　エヽ、おつう人の云ふ事眞似くさる。アヽ忌々しい。

　トこの時、奥より、後家お千枝、出て

千枝　これは〳〵、伊助どのには、ようこそお出でなされましたなア。

　トおせん、母の側へ坐る事。

伊助　これはお千枝どのには、目が覺めましてござりまするか。

千枝　知つての通り旦那どのは、この春過ぎ行かれましたで、新盆の事ゆゑに、精靈祀りの忙しさ。昨夜佛達を送りましたので、今日は思はぬ疲れ、寐て居たので、こなたの見えたを、とんと知りませなんだわいな。

伊助　精靈祀りは殊の外草臥れるものださうにござる。イヤ、手前奥樣よりの御口上には、この度大殿樣御入府のお喜びに付き、當所小倉堤に於て、踊り場をしつらひ、家中の女中方、又は町家在方の娘子供に、踊りを始めさせ、殿樣には御上覽との事。それゆゑ女中方の踊り衣裳、屋敷が物堅いから、風流が少ないゆゑ、幸ひの御用達のこの家へ、右の衣類を、染め地より仕立てまで、萬事のお誂らへ。今宵の間に合ふやうに屆けよとの、御口上にござりまする。

千枝　成る程、是非日暮れまでに間に合ふやうにと、家内の者が、それのみにかゝつて居りまする。

伊助　それは重疊。御苦勞千萬にござりまする。

千枝　イヤナニ、伊助どの、改め云ふではござりませねど、この家は元、松ヶ端の在所で、桶小桶樽などな職として、僅かに渡世して居たところ、過ぎ去られた與左衞門どのが、身代を段々仕上げて、遂にはこの伏見へ引ッ越し、職仕事も止めにして、今では鷹津家の御用を聞く程になつたるは、運の來たと云ふもの。家名を樽屋と云ふも、昔を忘れぬと云ふ印。その與左衞門どのも過ぎ去らるゝし、まだも樂みはこの娘、好い聟を取つて、この跡を濟し、その上でこの頭も下ろしたい、わしが念願でござりますわいなア。

伊助　成る程、拙者が親里もこの松ヶ端、幼少の時大煩らひを致し、既に死すべき所を、與左衞門どのが、段々とお世話下され、人參代の金までお立替へにあづかり、助かつた命の御恩、樽屋どの御夫婦を、大事にかけよと親どもの云ひ付け、與左衞門どのは死なつしやるとも、後

に殘る阿母樣、又おせんどのへ御恩の程は、里見伊助、一生忘れは致さぬ心體。如何なる儀でも遠慮なう、仰せられて下されい。

千枝　イヤモウ、女子主の事なれば、どうで何かと頼まねばなりませぬ。マア〳〵、御酒一つ進ぜませう。奥へござんせ。

伊助　イヤ〳〵、心遣ひは御無用に召され。

千枝　ハテ、馳走はしませぬわいなう。長九郎。

ト此うち、長九郎、おせんに見惚れて居る。

コレ〳〵〳〵、コレ、長九郎いなう。

ト呼ぶ。これにて、長九郎、恟りして

長九　ハイ〳〵、なんでござりまする。

千枝　この人は、何をキョロ〳〵して。伊助どのに酒を進ぜて下されいなう。

長九　伊助さん、お前呑む氣かえ。

伊助　サア、御馳走なら呑まうかえ。

長九　暑いのに止しにさんせ。

伊助　これは、いかいお世話ぢやなう。

千枝　サア、娘、奥へおぢや。

せん　伊助さん、ござんせいなア。

長九　アヽ、この番頭には、物の云ふ人もなし。

伊助　ハテ、きつい述懐ぢやなう。

ト唄になり　お千枝、おせん、奥へ入る。伊助、長九郎を見て、こなしあつて、後より入る。長九郎、ムッとせしこなしにて

長九　エヽ、忌々しい。この間に帳合ひなとしてこまさう。

ト帳箪笥の前にて、算盤を置いて居る。この時、向うより、中津萬五郎、奴、出來助、出て來り、門口へ來て

萬五　長九郎、それに居やるか。

ト入らうとする。

長九　アヽコレ、悪いぞ〳〵。

ト算盤をパチ〳〵云はして紛らし、あたりを見て、表へ出る。合ひ方になり

萬五郎さま、何かの首尾は。

萬五　されば、身共が心をかけし彼の松江姫、今宵小倉堤の踊りを見物とあつて、他所へ參る筈。定めし混雜の儀なれば、身も踊り場へ參つて、折を見合せ引ッ浚ひ、知るべの方へ預け置き。夜な〳〵通ふ妾宅とはどうあらう。

天保八年七月市村座上演番附

長九　人の心は九分、十分。私しも惚れて居るお孃樣、今夜の踊りから引ッ淺ひ、知るべに預ける同腹中、併し、爰に一つの難儀と云ふは、彼の里見伊助め、兎角邪魔をひろいで、思ふ壺へ嵌りませぬて。
萬五　氣遣ひするな。その伊助めも、何とか物云ひ付けてぶち放してしまふわサ。
出來　成る程、高の知れた下郎め。邪魔をひろがば息の根を留めるがよくござる。
長九　して、彼の刀は。
萬五　この差添に仕込み置いた。併し、これより小倉堤へ參りなば、多くの人の群集にて、顯はれては一大事。長九郎、明日まで預け置かう。
　ト刀を渡す。
長九　しつかりと預かりました。まだお話もあれど、途中の儀なれば。
萬五　オ、サ、夕暮れにならば、彼所で申し合さうわえ。
出來　手筈次第、この出來助が呼びに參らう。
長九　何かは後に。
萬五　萬事ぬかりのなきやうに。
長九　心得ました。

萬五　後刻逢はう。出來助參れ、
　ト唄になり、橋がゝりへ入る。
長九　ア、、先づこれでよいワ。
　ト内へ入らうとして
時に、飛んでもない物を預かつた。差しては居られず、どこに置いたものであらう。
　ト思案のこなし。この時、奥より、丁稚三吉出かゝり
三吉　長九郎どん〳〵。
　ト呼び捨て入る。
長九　オイ〳〵、今そこへ行くぞ〳〵。
　ト刀を懷ろへ入れて見たり、いろ〳〵置き所に困る思ひ入れ。フト高燈籠を見付けて
オ、。あるぞ〳〵、好い物があるわえ。
　ト高燈籠を下ろし、燈籠と一緒に下げ緒にて括り付け、奥を見ながら、ソッと引上げ、こちらへ來て見て
よし〳〵。とんとこれでは觸り手なしぢや。
すぎ　長九郎どん〳〵。
　ト呼びながら出て來り
長九　オイ〳〵。
すぎ　これはしたり、お家さんが呼んでござるわいなア。

長九　エ、忙しない。いま行くと云ふのに。

すぎ　サア、キリ〳〵とござんせいなう。

ト長九郎、ぼやき〳〵、おすぎ、捨ぜりふにて入る。稽古唄になり、向うより、梶川新十郎、家老の拵らへ、若黨付き出て

若黨　頼みませう。

ト内より、おすぎ、出て

すぎ　どなたでござりまする。

新十　梶川新十郎でござる。

トずつと入り、上手へ通る。

すぎ　申し、梶川さまがお出でにござりまする。

ト奥より、お千枝、出て

千枝　これは〳〵、新十郎さま、ようお出で下さりました。

新十　お千枝どの、先づ中元の御祝儀。

千枝　お互ひにおめでたう存じまする。

トおまつ、莨盆、おまき、茶を持ち出る。

まき　お茶を召し上がり下されませ。

新十　イヤ、これは忝ない。構やるな〳〵。

千枝　して、今日は、どれへお越しでござりまする。

新十　されば、今日は先殿本覺院さまのお祥月命日。深草の御菩提所へ佛參を致し、只今下向いたしてござる……ナニ、其方達は、暫時暇を遣はすから、勝手へ參り休息いたせ。

若黨　ハツ、畏まつてござりまする。

ト皆々下手へ入る。

千枝　娘、どこに居やるか。御挨拶をせぬか。おせんおせん。

せん　アイ〳〵。

ト出て來り

これは新十郎さま、ようお出で遊ばしました。

新十　オ、おせん、久々打絶え申した。コレ、阿母、大分成人いたしたの。

千枝　イエモウ、一向頑是がござりませぬ。

ト奥より、伊助、長九郎、箒を持ち、せり合ひながら出て來り

伊助　イヤ、料簡はならぬぞ〳〵。

長九　料簡ならぬと云うて、家の内を箒で掃くのは法度かいの。

伊助　掃くのは構はぬが、身共を歸したがつて、なぜこの

箒を逆樣に立てた。
長九　どこに逆樣に立てた。
伊助　今われが立てたではないか。
　トせり合ふ。
千枝　長九郎、お客のあるのに、ちと嗜なまぬかいの。
長九　ヘイ。
　ト振り返り見て
　これは〳〵、ようお越しなされました。
　ト坐る。伊助も見て
伊助　これは御家老樣。御免下さりませう。
新十　ホ、オ、奥方よりのお使ひかの。
伊助　左樣でござりまする。
新十　其方事は、若殿左市郎さまに付け置かるゝ、お守りの若黨。先頃橫非惣左衛門方より、申し附けし內意の趣き、承つたであらうな。
伊助　成る程、惣左衛門さま御發足の折柄、仰せ置かれし大切の役目。彼の一品…… 毛頭油斷は仕りませぬ。
新十　ムウ、左樣であらう。
千枝　して、これへお立寄りの御用の筋は。
新十　されば、少と折入つて談じたい事があるゆゑ、佛參の歸りがけ、わざ〳〵立寄り申した。阿母、なんと身が申す事、聞入れてはくりやるまいか。
千枝　ハテ、何かは存じませぬが、身に叶ひました御用なれば。
新十　ずんとその身に叶ふ事ぢや。別儀でもない、それなるおせんを、身共にくりやるまいかと申す事ぢや。
千枝　エ、。
新十　承知ならば、只今召連れて歸りたい。
千枝　これは又、替つた事のお望み。エ、、聞えました。殿樣お着きに依つて、大奥のお手廻りにでも。
新十　イヤ、左樣の儀ではない。此方屋敷に、內々おせんを執心な者があるゆゑ、貰はにやならぬ儀があるゆゑ、拙者が娘に貰ひ受け、執心の方へ嫁入りさする存念。申さば立身の筋、よもや違變はあるまいの。
せん　申し、母さん、お前は得心でも、わたしや否ぢやぞえ。町人の娘が、お侍ひの奧樣になると云ふやうな、そんな間違うた事が、どこの國にあるものぞいなア。
長九　イヤモウ、さうとも〳〵、卽ちその養子郎も、マアマア半分は、ソノ極つてござりまする。おせんさま、爰ぢやわいなう。爰があるに依つて、ソレ、日頃から。

伊助　日頃から、どうしたのぢや。

長九　イエナニ、どうもせぬ。どうぞなされませせと、勧めて居るのぢや。

せん　母さん、ちよつくりお断わり申して下さんせいなア。

千枝　ヤア〱、よい、默つて居や。ナニ、新十郎さま、娘が出世を思し召して、御深切の段は、有り難うござりまするが、御存じの通り、子と云うては一人の娘。好いた聟を持たせたいとの母が願ひ。お世話下さる先様は、どなたかは存じませねど、武家と町人は、第一縁が不都合なやうに存じまする。

新十　イヤ、不都合ではあるまい。おせんが爲には似合ひ相應。

千枝　似合ひの緣と仰しやりまするは。

新十　當殿の御惣領たる左市郎さま、當時は部屋住みなれども、近々鷹津家の跡目相續になるれば、一國の御主。尤もお云ひ號けもあれど、武家には許しの本文。連れ歸つて添はせんと云ふは、若殿左市郎さまサ。

トお千枝、おせん、伊助、顔見合せ、俄かに嬉しきこなし。

せん　母さん、わたしや行くぞえ。お屋敷、お宮仕へなら譬へ水仕でもいとひはしません。まして左市郎さまのお側に居る事なら、早う行きたい。ちやつとやつて下さんせいなア。

千枝　なんと云やる。若殿様なら、やつてくれと云やるゝか。

せん　アイ。

千枝　今まで縁組みを嫌うた其方が、俄かに行きたいと云やるのは、ハテナウ。

伊助　イヤ、こりや斯うでござらう。若殿の御意に相叶ひ萬一お胤でもお宿しなされば、その身は格別、家の譽れ、母御への孝行と思うて、それゆゑの儀でござらう。ナウ、おせんどの。

せん　アイ、母さん、お前への孝行ぢやわいなう。

伊助　イヤそウ、近年の孝行、二十四孝そこのけぢや。ナウ番頭。

長九　知らんわいなう。なんぢややら、否ぢやと云うたり、應と云うたり、譬へ又、お家は得心でも、樽屋家内の又括りする、番頭が承知いたしませぬ。どこまでもお断わり申しまする。

新十　コリヤ長九郎、身共が媒介、其方が妨げ致すか。

長九　イヤ、妨げは致しませぬが、町家の娘と、お大名の若殿様とは、泥鼈にお月様ほど違ふぢやござりませぬか。

新十　ハヽヽヽ、唐土に宿瘤と云へる女、賢才あるを以て、その國の王閔王后となす。まつた日本にては、薺つみの后なぞ、代々の記錄にても殘る。女は氏なくして玉の輿、心正しきを以て系圖となす。梶川新十郎が計らひ、差出ずと扣へてよからう。

長九　ヘイ。

新十　阿母、承知なるか。有無の返答、聞き届けたい。

千枝　成る程、大守の若殿様へ、お宮仕へさせまするは、家の譽れ、娘も得心の事なれば、如何にも差上げるでござりませう。

新十　承知とな。その儀なれば、直ぐに召連れ歸りたい。おせん、用意いたせ。

せん　アイ／＼、母さん、得心の上は、なんの否やがござりませぬ。申し、ちよつと用意させて下さんせいなア。

まつ　お長様の日頃の願ひ。

まき　さぞお嬉しうござりませう。

千枝　娘、ちとあなたへ、折入つてお話しもあれば、女子どもを連れて、奥へ行きやいなう。

せん　ほんに、髪も結ひ直さねばなるまいし、何かの用意も。

千枝　ちやつと行きやいなう。

せん　アイ／＼。

まつ　サア／＼、お越しなされませ。

ト　おせん、イソ／＼して、腰元兩人付添ひ、奥へ入る。

千枝　伊助どの、こなたも座を避けて下され。

伊助　何かは存じませねど、高が下様の下郎。承はつても苦しかるまいかと存じまする。

長九　コレ／＼、人をお避けなさるゝは、どんな密々の御用かも知れぬ。爰に居ては邪魔にならう。ドレ、勝手へ參りませう。

千枝　暫らくの間頼みまする。

伊助　どうでも參れかな。左様なら參りませう。

トこなしあつて、下の屋體へ入る。正面の障子を明け、ちよつと心意氣あつて締める。

千枝　長九郎、其方も奥へ行きや。

長九　イヤ、私しは番頭の儀なれば。

千枝 なんであらうと、マア奥へ。
長九 でも番頭でござりまする。
千枝 さりとは、行きやと申すに。
長九 へ、イ。
トこなしあつて、納戸へ入る。あと合ひ方になり、お千枝、あたりへ思ひ入れ、新十郎の側へ寄り
千枝 新十郎さま、娘おせんは元養子、委しい譯はあなた様にも、御存じでござりませう。
新十 大殿嶋津峯之頭さま、御本妻に出生ありし左市郎さま、その後お端下にお手かけ給ふ、この女お胤を宿し、産み落せしは即ち女子、奥方の手前、一家中の思惑も如何と、身共が實父新五右衛門に御内意あつて、藁の上より當家へ養女として、不通に下し置かれし事、この儀存ぜし者は、此方親子とお家の主、御身ならで外に知る者なし。今が今まで包み隠せしお家の密事。
千枝 水子のうちに養うて、成人の今日まで、譯を云はねば、實の娘と思うて暮らすあのおせん、元は正しく殿様のお胤、さすれば左市郎さまとは、腹こそ變れ、胤は一つの同胞でござりますぞえ。
新十 サ、それゆゑにこそ、召連れ歸るは、深き所存あつての事。
千枝 イヤ、その意を得ませぬ。譯を御存じありながら、左市郎さまへお宮仕へ。その媒介をなされうとは、同胞に妹脊の縁を結ばせて、畜生の名を取れよと、云はぬばかりの思し召し。そりや餘り御胴慾でござりまする。
新十 イヤ、改め縁は結ばずとも、はや御同胞は、畜生道へ落ちてござるわサ。
千枝 エヽ。
新十 若殿左市郎さまと、疾よりおせんと云ひ交し、情なや因果のお胤を、はや五月の岩田帶。
千枝 エヽ、そんなら娘は、アノ疾より。
新十 ソレ、これを見やれ。
ト狀を出し渡す。お千枝、見て悄り、讀む事あつて
千枝 こりや、娘が手蹟。若殿様へ上げた文。
ト奥を見て當惑のこなし。
新十 サ、、その驚ろきは尤もおやが、その艶書が手に入りしゆゑ、猶も様子を試さんと、手廻りの腰元を呼び尋ねれば、いよ／＼密通に相違なく、殊に懐胎との儀。文の通ひ路は里見伊助、憎い奴とは云ひながら、荒立てれば事の破れ、如何はせんとつおいつ、この新十郎が

心の苦しさ、どのやうにあらうと思ふ。是非に及ばず。召連れ歸るが極意の思案。

千枝　して、娘を連れて立歸ると仰しやる、あなたの思し召しはな。

新十　豐岡家へ結納として、送るべき正宗の刀は、先達て紛失。この儀に心を苦しめる折柄、又ぞろやこの難儀、召連れ歸つて、添はれぬ譯を明らさまに云ひ聞かせ、得心せずば絶體絶命、たつた一打ち。

千枝　エヽ。

新十　科なき娘を手にかける無成敗、結納たる刀の紛失、何もかも身に引受けて、腹かツさばくが波風立たぬお家の納まり。所存は一決いたし居るわえ。

　ト　お千枝、泣く事あつて

千枝　ほんにマア、因果と云うて、この上の因果があらうか。藁の上から貰うた娘は、殿樣のお胤なれば、義理もあり、不便もあり、十六年の春秋を、蝶よ花よと守り育てし今日の今、殺さるゝと知りながら、やらねばならぬ浮世の義理詰め。ひよんな事に成り行きましたなア。

　ト　あたりを憚り、泣く事あつて、氣を替へ

これも返らぬ悔み事。お指圖に任せ、娘はお渡し申しませうが、どうぞ暫らくの御猶豫をなされて下さりませいなア。

新十　成る程、申さば親子一生の別れ。暫しの猶豫は兎も角も致さう。

　ト　お千枝を見て

嘆きは尤も。只何事も定まる業。

千枝　今日は七月十六日、十萬後願女性靈地の

新十　功德となるは一遍の經陀羅尼。

千枝　これがほんの弔ひ嫁入り。

新十　老少不定。

千枝　若木の花の散り行くも

新十　定めなきこそ浮世なれ。

千枝　新十郎さま。

新十　御覺悟。

　ト　お千枝、ワツと泣かうとするを

ア、コレ……案内しやれ。

千枝　斯うお越しなされませ。

　ト　唄になり、兩人、こなしあつて、上手へ入ると一黑幕一の唄になり、知らせにて、この道具上へ引いて、下手の屋體前側、世話障子にて、眞中へ引出す。

うた〽黒髪の結ぼれかゝる思ひをば。

ト合ひ方になり、奥より、以前のおせん、おまつ、おまき、おすぎ、三吉、出る。

皆々　サア／＼、お孃樣、お越し遊ばしませいなア。

ト云ひながら出て

まき　お孃樣、おめでたうござりまする。

せん　アレ、又おだてるかいなう。

まつ　アノ、日頃から焦れてござる御緣を結ぶは

すぎ　御家老樣のお媒介。

三吉　此方に思ふ壺と云はうか。

皆々　こんなおめでたい事はござりませぬ。

せん　これまで深う云ひ交して居ながらも、賤しい町人の娘なら、所詮夫婦にはなれまいと、こればかりを案じて居たが、此やうになると云ふは、餘り嬉しうて、夢ではないかと思はれるわいなう。

まき　なんの、これが夢でござりませう。

三吉　今朝起きて、茶漬まで喰うてしまうた。

すぎ　聟樣がお大名だけ、石打ちもなるまいし

三吉　女房呼んだかとも云はれず、奥樣呼んだか、川へぼツこまざアなるまいと、字餘りでやらずばなるまい。

まつ　何ぢや知らぬが、わたしらまで嬉しうて

すぎ　心がイソ／＼致しまする。

せん　わしが嬉しさは、どのやうにあらうぞいなア。

すぎ　ほんに、あの嬉しさうなお顏つき。

三吉　あんまり嬉しうて、腹がへつたわえ。

すぎ　何を阿房らしい。

〽解けて寐た夜は枕にも、獨りぬる夜の仇枕、袖はかたしくつまぢやと云うて。

トおすぎ、捨ぜりふのうち、前側の障子を明ける。内に伊助、煙草盆を抱へ、思案して居る。皆々これを見て

すぎ　オヽ、伊助どの、嫁入りの噂を聞かしやんしたであらうなア。

せん　伊助どん、こなさんには、取分け禮を云はねばならぬわいなう。

すぎ　それ／＼、結ぶの神の伊助大明神樣々。

三吉　近う寄つて御拜遂げられませう。

すぎ　とつくりと仰しやりませいなア。

ト女形皆々奥へ入る。

せん　この禮が、ついやちよつとで濟まうかいなう。こなさんの世話甲斐があつて、今日と云ふ今日、日頃の願ひ

この事は死ぬるまで忘れませぬ。コレ、伊助どん、嬉しうござんすぞえ。

ト伊助、いろ〳〵こなしあつて、この時、おせんの顔をヂッと見て

伊助 これまでお世話申したを、さほどまで嬉しう思はつしやるか。

せん これを喜ばぬ者は、どこにあらうぞいなア。

伊助 サア、その嬉しいと思うてござる心があれば、叶へて下さるまいか。

せん ナニ、叶へてくれとはえ。

伊助 拙者が戀を。

せん エ、。

〽愚痴な女子の心を知らず、しんと更けたる鐘の聲。

ト伊助、おせんを留めて、立廻りよろしくあつて

伊助 今の今まで色目にも、出した事はござりませぬが、眞底から惚れ抜いて居るこの伊助。若殿のお使ひで、初めてお文を持參した時から、ても好い娘だ、御主人よりこのわしがと、思うた煩惱、もう云はうか、もうぶちまけようかと、幾度か思うたなれど、イヤ〳〵、この事が御主人の耳に入つたら、思ふ事に叶はぬのみか、お暇の出るはお定まり。さすれば顔見る事も出來ぬやうにならうかと、心一つに口へは出さず、上部を作る戀の取持ち。まだも頼みは轟岡家の御縁邊、御祝言が調うたれば、そこでこそこなたを引分けて、身共が望みを叶へようと、こればつかりを樂しんで居た。然るに今日、新十郎さまの計らひに依つて、屋敷へ引取り、若殿樣のお部屋樣と定まれば、身共が思案は鵙の觜、途方に暮れて打明ける伊助が所存。おせんどの、人を思ふも身を思ふとやら、コレ。

ト思ひ入れあつて、打俯け

情は人の爲ばかりではござらぬわいの。

せん エ、知らぬ〳〵、知らぬわいなア。

〽昨夜の夢の今朝覺めて、ゆかし懷かしやるせなや、積ると知らで積る白雪。

ト唄のうち、伊助、おせんの帶の端を取り、兩人見得。

ほんにマア、思ひがけないと云はうか。今の今まで深切に、世話をして、頼みに思うたこなさんが、惚れて居るのなんのと、左市郎さまがお聞きなされたら、大抵な事ぢやあるまいぞえ。見かけに依らぬ、愛想の盡きたお人ぢやなア。

ト思ひ入れあつて云ふ。おすぎ、出て來り、ヂツとして、おせんと伊助の眞中へドツカと坐り

すぎ　コレ伊助さん、日頃から目顔で知らす、わしが心を知らぬかなんぞのやうに、其やうにお孃樣と見替へるとは、そりや聞えぬ、胴慾ぢやわいなア。

トこなしあつて泣く。三吉、出て

三吉　コレ〳〵、おすぎどん、そりやお前無理ぢや。マア、鏡と相談をさんせいなう。

すぎ　エヽ、何を云ふのぢやえ。

ト身を背けて泣く。

伊助　人間僅か五十年、思ふ事が叶はねば、生きて居て詮ない事。云ひ出すからは伊助が體は、投げ出して居るのサ。

せん　エヽ、そんならお前は、それ程までに。

伊助　おせんどの、べん〳〵と長うは口說かぬ。否か應かの一口商ひ。人の花と眺めさうより、こなたを手にかけ、おれは不死身だから、淵川へ身を投げて、くたばつてしまふまで。コレ、あたら命を果さうより、わしが心に隨つて下さるか。

せん　サア、それは。

伊助　サア、その身ばかりか、ソレ、その腹の子も闇から闇。

せん　エヽ。

伊助　ぶツ放して身共も共に。

せん　サア、それはな。

伊助　うんと云うて隨ふか。

せん　サア。

伊助　サア。

兩人　サア〳〵〳〵。

伊助　返事をさつしやい。ド、どうぢや。

せん　エヽ、畜生に返事はせぬ。否ぢや〳〵、否ぢやわいなア。

ト逃げようとするをキツと留め

伊助　イヽヤ、この座は立たさぬ、と云うて爰で返事もなるまい。わしが行く所へござれ。

トこの時、女形皆々出て、留める。

すぎ　コレ、伊助どの、お孃樣を、どこへ連れて行くのぢやぞいなア。

伊助　ハテ、伏見ばかりに日は照らぬ。江戸長崎へでもつツ走り、貰はれて女房にするのサ。

女皆　イヤ〳〵、さうはさゝぬわいなう。
三吉　根付の巾着で、あかん事ぢや。止しにさつしやれ止しにさつしやれ。
ト支へるを、首筋を取り、抛り付け
伊助　邪魔せずと、そこ退け。
皆々　イヤ、ヤ、退かぬわいなア。
伊助　エ、面倒な。
ト引退け、おせんを引立てにかゝる。皆々捨ぜりふにて支へる。伊助、引退け、引ッ立てようとする。新十郎、ツカ〳〵と出て、おせんを囲うて刀を抜き、背打ちに打ち据ゑる。皆々傍へに寄り居る。新十郎、伊助の胸倉を取り
新十　茲な人でなしめが。元おのれは松ヶ端にて、僅かの土民の倅なりしを、殿様お鷹野の折柄、お馬先にて小児の戯むれ、とり廻しの凛々しきがお目に留まり、役にも立つべき奴、武士に取立て得させよとあつて、親どもに貰ひ受け、幼少よりお屋敷への奉公。役目も輕き若黨なれども、御不便厚く蒙むりしは、大殿様の莫大の御高恩。實義ある若者と思ふがゆゑ、頼み置きたる正宗の詮議。それさへ等閑に致し、若殿左市郎さまへ寸志の忠義も盡さず、屋敷表の作法を亂す不義の段々。それのみならず、おせんが色香に迷ひしなぞとは、云ひ所もなき不所存者。この儀大殿のお耳に入らば、どの面下げてお目にかゝらうと思ふ。言語に絶えし人畜めが。
ト突き放す。伊助、こなしあつて
伊助　新十郎さま始め、大殿峯之頭さまの御高恩は、なかなか以て忘れは致さぬ。なれども戀路の道は心の外、今となつては、どうも思ひ切られませぬ。恥かしき事ながら、里見伊助は、戀慕の闇に迷ひましてござりまする。
新十　すりや、斯程までに恥辱を與へても。
ト伊助を見て、こなしあつて
此奴、取り所もなき大馬鹿者。斯様な奴に、刀の詮議を申し付けたは、此方の不覺、この場に於て手討ちとは存ずれども、刃物の立たざる不死身なれば、またしも冥加。御主人に成り代り、暇をくれる。帯刀も相叶はぬ。
ト大小を引取り
以前の如く、土ほぜりが身分相應。早くこの場を立ち去り居らう。
トきつと云ふ。暮れ六ツの鐘を打つ。
最早暮れ六ツ。

ト内にて音頭になる。新十郎の家來、大勢提灯を持ち出る。

三吉　アレ〳〵、近所でも踊りが始まつたわいなア。

ト音頭かすめる。奥より、お千枝、出て來り

千枝　あれから聞いて居りましたが、伊助どのは、氣の毒な身の上になりましたなア、

新十　おのれと胸を苦しめる、煩惱の犬畜生に構ひは無用。おせん、用意がよくば同道せう。

せん　アイ〳〵、母さん、直ぐに行きませうかいなア。

千枝　ア、、可哀や、なんにも知らずに。

せん　エ、。

千枝　イエサ、夜に入れば、小倉堤の一踊り。

新十　殿にも上覽。おせんも仕組みの人數へ加へ、若殿樣と御祝言、千代の初めの一踊り。

せん　そんなら母さん。

千枝　ま一度顏を。

新十　ア、、コレ〳〵、早く行きやれ。

せん　アイ〳〵。

ト花道へ行く。

千枝　これがこの世の

新十　ハテ、宵の間の踊りの只中。盂蘭盆供養の、あと懇ろに。

トおせん、花道より振り返り

せん　母さん、明日お目にかゝりませう。

新十　その明日の日も、計り知られぬ生死不定。

せん　母さん行くぞえ。

トお千枝、顏を上げて泣くを、新十郎、扇を開き覆うて

新十　サア、行きやれ〳〵。

ト音頭キッパリとなり、おせんに右の人數付添ひ、家來、提灯を持ち、新十郎、行きかゝり、伊助を見て、こなしあつて、氣を替へ、靜かに皆々向うへ入る。お千枝、延び上がり、愁ひの思ひ入れ、伊助を見て氣を替へ、ツイと奥へ入る。納戸より、長九郎、行燈を灯し、持ち出て

長九　腹立ち紛れに、茶碗で五六杯ひッかけたら、ヤレヤレ、醉うたぞ〳〵。ムウ、伊助、まだ去なぬか。ホオ、見りやア丸腰で居るが、失策じつたか。お御足が上がつたら、そんな奴は此方の内に置く事はならぬ。出て行け出さつしやれ。エ、、キリ〳〵と出て行かつしやれ。

ト伊助の首筋を取り、表へ抛り出し、戸をピッシャリ締めて

アヽ、大分咽喉が乾いて來た。ドレ、醉覺めに、鹽茶なと呑まうかえ。

トまた晉頭になり、茶を吞みに行く。伊助は大小を取られしゆゑ、どうせうと云ふ思ひ入れ、思案をしながら花道へ行きける。知らせに以き、道具下手へ引出し、元の通りになる。

ト向うより、奴出來助出て來る。伊助、摺れ違ひ、心得ぬこなしにて、戸屋口に立ちどまる。出來助、小石を拾ひ、戸口へ打つ。長九郎、茶碗を持つたまゝ、合圖を聞き、戸を明けて

出來 長九郎か。

長九 差合ひはない。入らつしやい。

ト出來助入る。長九郎、戸を締める。伊助、ソロ〳〵戻り、門口に立聞きする。

して、踊り場の手番ひは、何もかもようござりまするか。

出來 よいとも〳〵。主人を始め、伯父御へ一味の一家中、踊り場のドサクサ紛れ、若殿左市郎さまを闇討ちにする申し合せ。

長九 それはよいが、入組んで同士討ちせぬやうに。

出來 こはぬかりぬ。雀踊りと振り袖に、張子鬘が味方の目印。

長九 出來た〳〵。そんなら直ぐに踊り場へ。

出來 早く來やれ。

ト兩人、行かうとする、長九郎、こなしあつて

長九 イヤ、まだ行かれぬ。最前萬五郎さまから預かつた正宗の刀を、あの高燈籠へ、どめて置た。今にも後家が火を灯せと云うたら亂騒ぎ。符の闇は內で張り番。

出來 然らば後より。

長九 踊り場へ行きませう。

出來 おれは先へ行かう。

ト表へ出る。伊助、出來助を抛り込み、スッと入り、戸をさす。

長九 伊助、まだ去なぬか。

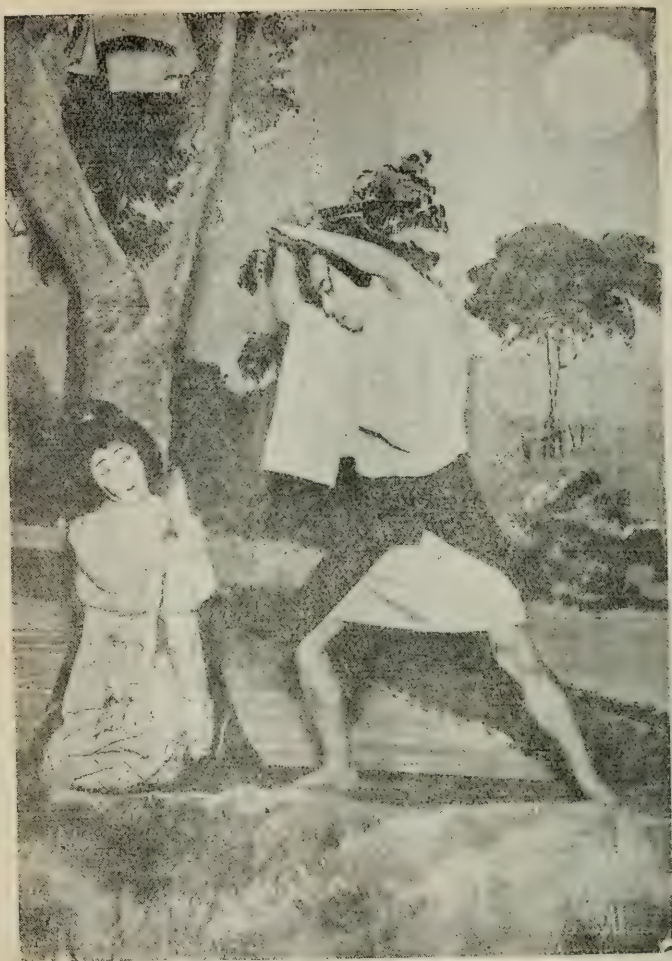
伊助 伯父御へ一味の侫人めら、先づ第一正宗の刀、爰へ出せ。何もかも聞き拔いて居るのぢや。

長九 オヽ、聞いたとあれば是非がない。如何にも正宗渡さう。

出來　アヽ、コリヤ、滅相た。それを渡しては。
長九　サア、よいてや。ソレ、その正宗をな。正宗をスッパリと遣つてしまはんせ。
ト出來助、仕方を呑み込み
伊助　オヽ、サ、斯うして渡さうわい。
ト切り付ける。伊助、拔身を摑み
伊助　何をひろぐ。おらは不死身ぢやわい。
長九　よいワ。これ喰へ。
ト長九郎は締、出來助は刀にて、打ち据ゑんとする。立廻りよろしく、長九郎を二重へ拋り上げる。行燈に當り火消える。忍び三重になり、三人、暗がりの立廻り、いろ〳〵あつて、長九郎、探りながら燈籠の側へ行く。伊助、捕へて投げ戻す。出來助、透かし寄つて、伊助へ切り付ける。細引切れて燈籠と刀落ちる。伊助、刀を取上げ
伊助　さてこそ正宗。
ト押戴く。
長九　それを。
トかゝる、立廻りのとまりに初夜の鐘を打つ。
伊助　踊りの場所は小倉堤。
ト立廻り、長九郎を投げて、表へ行かうとする。出來助、留めるを長九郎の方へ投げる。長九郎、伊助と心得、出來助を取つて押へる。伊助、前へ出て、戸を閉す。踊りのシヤギリになり
オヽ、さうだ。　　　よろしく幕
ト尻引ッ絡げ、向うへ走り入る。この見得、誂らへの鳴り物にて。

ト後の道具、見計らひ、知らせの木を入れ、向う戸屋口より、幕の外へ、中間、箱提灯を持ち、松江姫、振り袖にて踊りの形、腰元二人、中間、付いて出で來り
腰元　申し姫君様、人混みでござりますれば、お氣を付け遊ばしませ。
松江　今宵の踊りで、云ひ號けの殿御に逢ふと思へば、此やうな嬉しい事はないわいの。
中間　併し、日頃姫君に心をかける、中津萬五郎どのも見えます様子。
松江　その萬五郎に、逢はぬやうにしてたもいなう。
中間　ヘイ、氣を附けて居ります。

腰元　モシ、踊り場へ少しも早く。
松江　サア、行からわいなア。
ト皆々、幕の内へ入る。始終踊りのシヤギリを打つて居る。向うより、中間、箱提灯を持ち、萬五郎、岩瀬十平次、石塚甚平、三人とも振り袖の着付、女形の張り子の鬘にて、出て
萬五　何れも、怪しからぬ賑ひでござるの。
十平　大殿の御上覽とあるゆゑ、我れ一と花を飾り、言語に絶した事でござる。
甚平　して、雀の手合ひは最早踊り場へ。
萬五　申し合せし通り、ぬかりのなきやう。
兩人　心得ました。
萬五　併したア、中津萬五郎とも云はるゝ武士が、縱なればこそ振り袖に、張り子の鬘。斯うした所は、なんに似たものであらう。
甚平　悉皆猿芝居のお染猿見るやうな。
萬五　ハヽヽヽ、似合ひますれば侍ひを止めて、歌舞伎役者にならうと存じて。
皆々　ハヽヽヽ。サア、參りませう。
萬五　提灯やれ。

ト皆々、幕の内へ入る。シヤギリ打上げ、直しの木にて幕明く。
造り物、一面、淺黄幕、小倉堤の體。左右半御簾の掛け茶屋。日覆より、灯入りの切籠燈籠數多下げ、花笠の子供大勢並び、囃子の人數、掛け茶屋に居て、頭取、音頭あつて、仕組み踊り一通りあつて入る。次に立役、思ひ付きの仕組み踊り、次に女形の踊り雀踊り、右よろしくあつて、あと入組みの踊りになり、松江姫、腰元、おせん、その外腰元、丁稚三吉、右の人數に交り踊り居る。お千枝、頰冠りしておせんを尋ねる心。左市郎も同じ思ひ入れ。萬五郎、十平次、甚平、出來助は松江姫を捕へようとする。踊りの人數邪魔になる模樣。長九郎は下手へ出て、おせんを尋ねながら踊り居る。三味線早めて踊り忙しくなると、向うより、伊助、頰冠りにて、顏を隱し、ウロウロ出て踊り場を見やり、おせんを尋ねる心にて、この中へ交り、大勢を引分ける。敵役は姫と若殿を目がけ居る。長九郎、伊助はおせんを尋ねる思ひ入れ、各々踊のうち、よき程に伊助おせんに出逢

大正六年七月帝國劇場所演

澤村宗之助の伊助　森律子のおせん

ひ、刀を抜いて切りかける。

せん　ヤア、お前〳〵。

ト逃げるを肩先へ一かせ切り付ける。これにて踊りの人數は四方へ散亂する。お千枝は驚ろきながら群集に隔てられ遠ざかる。早太鼓になり、敵役、皆々切つてかゝるを、伊助、切り捲り、この立廻り、伊助不死身にて、刃物立たぬ模樣、入り亂れ、踊りの人數大騷ぎ。法被の中間、棒を持ち、伊助を伏せようとする。これを切り捲り、橋がゝりへ追ひ込む。アリヤ〳〵の聲、踊り子逃げ廻る。皆々よろしくあつて、双方へ逃げて入る　この時、正面の淺黄幕を切つて落す。山城の遠見、城下馬場先、釣燈籠の澤山ある灯入り遠見になり上手より、おせん、腰元に介抱され出ると、橋がゝりより、伊助出て、切り立てる。皆々逃げて入る。伊助、おせんを切らうとする。

せん　こりや、どうでも殺すのかいなア。

ト本釣り鐘、凄き合ひ方になり

伊助　オヽ、切らにやアならぬ。どうでも生けては置かれぬに依つて。

トまた振り上げる。

せん　この身は少しもいとはぬが、お腹の嬰兒は大切な。

伊助　サア、その大切な子の爲に。

ト振り上げてこなし。

せん　イエ〳〵、わたしや、死にともない〳〵。

伊助　こま言云はずと、くたばらつしやれ。

せん　あれえ。

ト逃げ廻る。伊助、切りかけるこなし。隙を見て、おせん、逃げ出す。また引き戻し

伊助　もう百年目ぢや。

ト肩先へ切り付ける。おせん、韓紅になり、ウンと倒れる。長九郎、後より組み付く。振り解き、長九郎を切る。萬五郎、十平次、甚平、出來助、皆々出る事あつて、立廻り、一々切り倒し、萬五郎に止めを刺す。雀踊りも一々切り倒す事。バタ〳〵にて、向うより、新十郎、野袴、ぶッ裂き、捕り方の拵らへにて、出て

新十　法外の暴れ者、梶川新十郎、捕り方に向うた。腕廻せ。

伊助　毒喰はゞ皿まで。どなたでも切捨てだぞ。

ト新十郎、ツカ〳〵と寄つて

新十　捕つた。

ト十手にて打ち据ゑようとする。伊助、切つてかゝり、立廻りあつて、ト、新十郎、十手にて伊助の利腕を打つ。刀を落す。伊助、また拾ひ取らうとするを、新十郎、突き廻して刀を取り、手早く伊助の肩先を切る。

伊助　ウンと反る。また切りかゝるを好き程に留め
　不死身は愚か、岩をも通す正宗の切れ味、とくと御覽なされしか。

ト新十郎、キッとこなしあつて、血を拭ひ、改め見て

新十　はじき跡に記せし正銘、今の切れ味、疑ひもなき相州正宗。

伊助　御結納の一振り、正に御落手下さりませう。

ト新十郎、抜身を持ち替へ、伊助を引起して

新十　さほどお家を忘れぬ汝が、何ゆゑにかゝる仕業。仔細を語れ。どうぢや／＼。

ト合ひ方になり

伊助　おせんどのは若殿と御同胞、それゆゑにあなた様には、まッ斯うなして御切腹と、お覺悟召されし御樣子を小影より承り、日頃の御恩この時と、我が身に引受け、この有樣。伯父御へ一味の佞人ばらも、我が手にかけしはお家のお爲。たゞ何事も、お家を無事に納めん爲。

新十　ヘテ、健氣にも計らひしよな。

ト鞘を拾ひ、刀を納める。此うち後へお千枝出て、泣いて居る。おせん、反り返るを、伊助、抱へ

伊助　オヽ、苦しからう、苦しうござらう。ひよんな御緣を結ばせし、その憂き恥を包ます爲、心にもない不義放埒。殺さにやならぬ義理詰めで、振り上げは上げながらお一人ならず胎内の、和子まで刀の錆になすかと、思ひ廻せば拳もなまり、殺さるゝこなたより、殺す身共が五體は惱亂、四十四の骨々も、碎くるやうにござつたわいなう。父御へは未來で云ひ譯、この世の母御、又は御主人左市郎さまへ、くれ／＼も新十郎さま、よろしう御披露願ひ上げまする。

ト泣いて云ふ。お千枝、忍び泣き、新十郎もよろしく感心のこなしあつて

新十　下樣ながら天晴れな魂ひ。惡人の根を絶ち、結納の御刀まで、斯く手に入れば、御祝言も、相調び、兩國ともに萬代不易。これと申すも汝が忠義。殿の御前はよきに推擧いたすであらう。

伊助　すりや、忠義に相成りまするか。

新十　云ふにや及ぶ。天晴れの忠臣。
伊助　エヽ、有り難い。そのお詞が智識の引導。この世の本望。チエヽ、忝ない。
ト拝み泣く。この時、左市郎、松江姫、腰元、侍ひ、警固して出て來り
左市　結納の刀、手に入りしとな。
新十　ハツ。
ト刀を渡す。
左市　伊助が忠義、忘れは置かぬ。たゞ不便なはおせんが最期。
トお千枝、前へ出て
千枝　それ〻即ち若殿様のお爲、娘、必らず成佛してたもや。
せん　そんなら殿様とは同胞にて、添はれぬ御緣でござりましたかいなア。
左市　さうとも知らず緣を結び、畜生道へ落入りしは、一生の不覺、親人への申し譯。某も切腹いたす。
ト刀の柄へ手をかける。
松江　ア、コレ申し。
ト留める。

新十　御短慮千萬。この世の御緣は、それなる松江姫さま、親子兄弟は一世と申さば、未來の契りは誰れ憚らす、二世の御緣。
左市　とは云ひながら不便の有樣。おせん、半座を分けて待つて居よ。
せん　エヽ、お嬉しうござりまする。
伊助　死出のお供は、この伊助め。
長九　うぬ、左市郎め。
ト長九郎、切つてかゝるを、伊助、投げる。新十郎、取つて押へ
伊助　急いでお仕置。
ト手を廻す。
新十　繩目に及ばぬ。後日の裁許。この場はめでたう、お立ち〳〵。
トよろしく、
打出し幕

銘作切籠曙（終り）

こきんさんこうのでんにあけて云はれぬ奥さまのはつめいそれを見ぬいた
むほんの旗あげしゆその噂をきいたかく\〜きのふのこまいぬあまの手わざ
に身うけ千金櫻が枝のつき鐘は名にひゞいたる寝覺の關守

百千鳥鳴門白浪

入汐
七灣

御客は若阿波の大盡
此契情は先の夕霧
間夫は優男紙衣の大盡
此傾城は後の夕霧

すいてうこうけいのさゞめ言に思ひそかけしお姫さまのはつこひそれと
悟らぬ家老の善惡ゆきの捨子はこたへたく\〜あけがたのかんこゑ旅の
てうどに兄御のしんせつ柳がもとの石ぶみは世にうたうたる馬町の隱家

根本「百千鳥鳴門白浪」挿繪

百千鳥鳴門白浪

大序

住吉社家屋形の場
住吉神社の場
同難波屋の場
同三文字屋表の場
同松原の場

役名——石原三位國景。藤屋伊左衛門。森國平。山伏、觀善院。海女、お浪。宇田要助。蒲田玄蕃。小栗主膳。大野典膳。朝倉外記。松山丹波。淺川求馬。西園寺花英丸。早川帶刀。岩成主税。濱田織部。濱田出雲。神職、知守藤春。三谷島九平次原主水娘、木幡。扇屋夕霧。同、淺澤。同、住の江。同、此町。同、遠里。藝子、岸野。同、姫松。難波屋松八。吉田屋女房、おきさ。野口藏之進。萩塚鳴戸之助。

造り物、平舞臺、見付け狐格子、牛簾、竹の節。上の方、高屋體、高欄付き階。橋がゝり、後戸。すべて、住吉社家の屋敷寝殿の體。幕の内より、伶人三人、舞樂の模樣、後口に、公卿三人並び、早川帶刀、衣裳長上下にて、結構なる狛狗を、白木の八足臺に載せ、前に置き、下手の方に、知守藤春、烏帽子形にて並ぶ。この見得、音樂にて幕開く。

ト舞樂一くさりあつて、よき所にて、チャンと三味線に受け、樂入りの所作模樣よろしくあつて、納む。

呼び 勅使。

ト眞の神樂になり、高舞臺の御簾を一面に巻き上げる。西園寺花英丸、束帶にて、高蒔繪の舞臺に箱を三方に載せ、兩手に捧げ立つてゐる。この側に石原三位國景、同じ束帶にて並ぶ。隨身二人附き添ふ。

皆々 ハア、。

ト平伏する。

國景 勅使たる西園寺花英丸、幼年によつて、介添として石原三位國景、勅を蒙むり下向のところ、前々の吉例。饗應の舞樂は

帶刀　依つて當時の武將、眞柴大領久吉公、心願の趣きに依つて、早川帶刀上使の役目。

公卿　我れ〳〵とても、和歌奉納の爲。

同　申し合して勅使の供奉。

藤春　遠路の所、御苦勞の至り。拙者は當社住吉の神職、知守藤春。勅諚の趣き、仰せ聞け下さりませうならば、有り難く存じ奉りまする。

國景　綸命の趣き、餘の儀にあらず、例年の如く、天下泰平五穀成就祈念の爲、當今御製の御色紙、住吉大明神へ奉納し、卽ち神前に捧げ、猶も豐作長久の祈り怠りなく、相勤められてよからう。

帶刀　まつた大領久吉公、兼ねて當社御信仰あつて、この度從一位の左大臣に任じ、四海やうやく穩やかになるも武力擁護の威徳なりとて、斯く一双の狛狗を、神前に納め、武運長久の幣を奉らんと、嚴命の次第、あらかじめ斯くの通りでござる。

藤春　委細承知仕つてござりまする。

國景　今日の饗應の役目、萩塚の一子萬治郎、外に申し達すべき仔細もあれば、急ぎこの所へ呼び出し召されい。

藤春　ハツ。

　ト花道に向ひ

萩塚萬治郎どの、勅使の御召し、此方へお通りなされい。

伊左　ハア、。

　ト序の舞になりて、向うより伊左衞門、萬治郎になつて束帶。野口藏之進、半素袍、龍神卷にて、三方に寶の箱を載せ、附き添ひ出で丶、花道にとまり

伊左　御勅使として兩卿の御下向。帶刀どのにも、お役目御苦勞に存じまする。拙者萩塚鳴戸之助が弟、同苗萬治郎。

藏之　家臣、野口藏之進、先例に任せ、四位の侍從は一座の法令。荒くれ武士の冠り裝束、武骨の段、偏平御高免乞ひ願ひ奉りまする。

國景　これは〳〵叮嚀の挨拶、痛み入る。誠に其方ことは、先達てより、多病の由にて、國隱居の願ひを立て、別腹の兄、鳴戸之助どのを以て、萩塚の家督相續。禁庭の在番の身なれば、今日の饗應司、相勤め難く、さるによつて部屋住みながら、其方を以て、臨時の儀を相調のふ。ナニ帶刀、萬治郎へ申し渡さる丶一條、詳しくこれにて演舌召されい。

帶刀　ハツ、イヤ萬治郎どの、この度武將、東山銀閣寺に

於て、持仁親王へ御茶獻上につき、諸國の列侯より、數々の名器を借用あらせらるゝ。別して萩塚の家の重寶、千鳥の香爐は、お床飾り第一の器物、先達て京都に於て、舍兄鳴戸之助へ、その執權の人々より申し達し、定めて委細御承知でござらう。

國景　宮御招待の儀に於ては、一方ならぬ武將の規模。寶物改めの役目は、斯くいふ國景。千鳥の香爐、內見いたさう。

伊左　ハツ、上意の次第、兄鳴戸之助より申し越してござれば、卽ち、香爐持參仕つてござりまする。

國景　さこそ〳〵。その品、これへ。

伊左　藏之進、これへ持て。

藏之　ハツ。

ト藏之進、三方を渡す。伊左衞門取り、この時兩人とも、本舞臺へ來る。國景、高屋體より下りて、よき所へ座につく。伊左衞門、國景が側へ三方を持ち行き、座を下がる。藏之進橋がゝりの方へ扣へる。國景、思ひ入れあつて

國景　すべて諸大名の名器、菊池に吳道子が墨繪の龍、上杉に唐畫の皿、大道寺に高麗刷毛目の茶碗、江州佐々木に惠遠禪師の達磨の像、いづれ愚はなけれども、別してこの千鳥の香爐は、凡そ三國に只一つ、萩塚家には、ハテ、結構な品を御所持召さるゝなア。

藏之　仰せの如く、そもこの香爐は、唐土周の成王、銅雀臺の黃金を以て理忠賓に命じ、これを作らしむる。理忠賓、心を凝らし、鑄上げしところ、一心の感通にや、忽ちこれに千鳥群がり、香爐にその音を發す。蜀紅の錦を以て覆ふ時は、音を止めて塒に歸る。南都東大寺淨家律師、入唐の時、明の平帝にまみえ、帝、律師の行德を愛で、寄附あつて本朝に渡る。いま大領久吉公、乞ひ求めて、四海の寶としたまふ。

伊左　拙者が父、萩塚將監、小坂部追伐の軍功により、殊に茶道に妙あるゆゑ、下し賜はり、只今にては我が家の重寶、畏れながら、御內見の儀、偏へに願ひ奉りまする。

國景　誠に由緒と云ひ、不思議といひ、大切の器物。これにて披見いたすであらう。

ト衣紋つくろひ、こなしあつて

藏之　萩塚の家來、野口藏之進とやら。

國景 名器只今、內見に及ぶぞよ。

ト藏之進を見る。藏之進、國景を見て、互ひにこなしあつて

藏之 よろしく、乞ひ願ひ奉りまする。

ト國景、箱の蓋を取り、錦の袱紗に包みながら改める模樣。伊左衞門、藏之進思ひ入れ。國景改めて

國景 蜀紅を以て覆ひ包む千鳥の香爐、內見濟んだ。ハテ、天晴れの道具ぢやよなア。

ト伊左衞門、藏之進、安堵のこなし。

公卿 承り及んだる秋塚の寶物。

同 幸ひの折柄なれば、我れ〳〵にも

皆々 拜見の儀を。

ト皆々立たうとする。伊左衞門、藏之進、心遣ひのこなし。

國景 これは各々方、何事でござる。武將より親王へ御馳走の一品、他見に及んでは、當座の晴れにならぬ。お控へなされ〳〵。

公卿 御尤もに存じまする。

同 イヤナニ萬治郎、親將監は風雅の達人とあれば、貴殿にも、なぞん心がけてあらう。

同 珍らしき大名の和歌、當座の一首、所望いたさうか。

伊左 これは〳〵、存じも依らず、水に住む蛙、花に鳴く鶯、和國の世風と腰折れは仕れども、殿上人の御覽に入れますやうな儀は、なか〳〵以て。

公卿 和歌望みなくば、鞠はどうぢや。

同 なんと、一くれ參らうではあるまいか。

伊左 聊かの心がけ、御遊の節は、御詰め仰せつけられ下さりませう。

公卿 舞樂の嗜みがあるなれば、横笛なりとも笙なりとも

同 この宰相は連管を仕らう。

同 これサ、宰相との、貴卿、笙も瓢簞も、お稽古はなされまいがな。

同 イヤサ、武德樂でも、春鶯樂でも

同 餘り太平樂は云はつしやるな。

國景 コレ〳〵。各々、何をザワ〳〵と。萬治郎を武士と侮どり、優にやさしき殿上の樂しみは、心掛けあるまいと思うての嘲弄か。ハテ、不埒の至り。彼の宗任が梅の如く、却つて耻辱を蒙むるもの。お控へなさるが禮でござる。

帶刀　寶内見相濟む上は、早く眞柴家へ献上の手筈が肝要でござる。
伊左　畏まり奉つてござりまする。
國景　この上、宸翰の御色紙。
帶刀　奉納の狛狗もろとも
國景　急いで四社の神前へ。
知守　御案内仕りませう。
帶刀　萬治郎、大儀。
伊左　ハツ。
國景　最早、退出してよからう。
藏之　饗應の儀は、御旅館に於て。
國景　後刻、馳走にあづからう。
伊左　兩卿には、イザ、神前へ。
皆々　お入りあられませう。

トチョンにて返し

前淺黄幕下りる。葭簀圍ひの茶見世、突き出す。在郷唄にて道具とまる。

ト橋がゝりより、仕出し三人出て

仕出　ヤレ〳〵、ホッとした〳〵、なんと、ちつと休んで行かうか。
同　それもよからう。

ト三人、床几に腰掛ける。橋がゝりより、茶見世の亭主九助出て

九助　ハイ、お茶あげませう。
仕出　イヤ、茶より、なんぞよい肴で一呑みさして下され
九助　ハイ〳〵、畏まりました。只今あげませう。

ト葭簀へ入る。在郷唄になり、向うより三谷島九平次、駕籠舁き權、觀壽院、さんすいな山伏の拵らへにて、駕籠に乘りて出づる。

九平　サア、約束の住吉ぢや。下ろせ〳〵。
駕權　オット、合點ぢや。

ト駕籠下ろす。

九平　サア、山伏さん、もう來ました。下りさつしやれませ。

ト觀壽院を見て

駕權　でも、重たかつた筈ぢや。他愛もなう寢てゐらるゝ。
九平　サア、駕籠へ乘ると、ブラ〳〵とやつてゐられた。
駕權　どうでもこの和郎は、よさり寢ぬ和郎ぢやさうな。
兩人　山伏さん〳〵。

根本「百千鳴門白浪」挿繪

住　吉　社　家　の　場

ト起す。

観壽　エヽ、やかましいわい。目の舞うた者かなんぞのやうに、仰山な奴等ではあるわい。

九平　約束の住吉ぢや。目を覚まして下さりませいなう。

観壽　なんぢや、もう來たか、嘘ぢやないかよ。

ト駕籠の内より首を出し、見廻して

オヽ、さうぢや。ドリヤ、下りてちつと休まうわい。

ト駕籠より出る。此うち九助、とさん、肴鉢、持ち出で、皆々捨ぜりふにて酒を飲む。

ヤレ／＼、窮屈な事であつた。狹い駕籠で、肩も腰もメリメリいふ。ドリヤ、一杯ひッかけうか。

ト三人の眞中へ腰を掛け

皆さん、許さんせ。相してやらう。

ト仕出しの飲んでゐる茶碗を引ッたくり、酒をつぎ、飲み、肴を摑み喰うて

エヽ、この酒は鬼殺しぢや。蛸も腐つてけつかる。こんなもので喰はれるものか。

仕出　こな和郎は、なんぢやいの。人が頼みもせぬ相をしてからに。

同　その上、肴まで喰うて、まだ、こみづ云ふのか。

観壽　相したらなんぢや。こみづ云うたらどうする。

三人　エヽ。

観壽　どうぞしてみさるかい。

ト突きかゝる。

九平　山伏さん、駕籠賃やつて下んせ。

観壽　駕籠賃とは、なんぢや。

九平　ハテ、今宮から爰まで乘つて來た駕籠賃の事ぢや。

観壽　ハテ、わいらは、人を駕籠に乘せて錢取るか。

九平　コレ、和郎は何を云ふぞい。錢取らいで女房子が養はれるものかいの。

観壽　養はうが、踏み殺さうが、うぬらが女房子の事。おれが知らうかい。

駕權　そんなら貴様、錢が無いのか。

観壽　又わいらも、よう物を思うて見い。なにがこの風左衞門で、ちやん一文あるゝのか。只ぢやと思うたに依つて、乘つてこました。錢取るのなりや、乘りやせぬわい。

九平　ムヽ、こりや白化けで駕籠賃騙るのぢや。エイワ、錢がなけりや、いつそこの息杖で算用するワ。

駕權　オヽ、さうぢや／＼。どつきなとして、腹癒るのぢや。

兩人　いつそ、斯うして。

ト兩方より息杖にて叩きにかゝる。

仕吉　ソリヤ、喧嘩ぢや〳〵。

ト逃げて入る。

觀壽　うぬら、こりや手短かにうせたな。オヽ、駕籠代だけカウ。

トまた叩きに行く。觀壽院、息杖引ッたくり、權を叩き据ゑる。

駕權　アヽ、痛々々。こりや堪らぬ。

ト橋がゝりへ逃げて入る。後にて觀壽院、九平次、息杖にて打ち合ひながら、あたりを見廻し。

九平　觀壽院。

觀壽　三谷島九平次さま。

ト合ひ方になる。

九平　皆の奴等はまいてしまうた。

觀壽　今日は、思ひも依らず、よい所でお目にかゝりました。

九平　斯く姿をやつして徘徊するも、我れ〳〵が組頭、濱田出雲どの、萩塚を一圓手に入れ、これを根城として、あはよくば四海を一呑みにせんと、兼ねての大望。

觀壽　陀祇尼天の法術に達したる、この觀壽院、出雲どのの謀叛に一味合體。

九平　然るに今日、眞柴大領久吉より、この仕吉へ狛狗奉納するよし。これ幸ひ

ト懷中より袱紗を出し

こりやコレ、殿鳴戸之助、武將久吉より拜領の小柄。世の人よく知るところ。

觀壽　イカサマ、五三の桐の象眼は、紛れもない久吉の紋どころ。

九平　この小柄を以て、武將奉納の狛狗へぶち込み置けば、調伏の大罪によつて、鳴戸之助は切腹。この役目は其方へ、申し付けよと出雲どののお指圖。大切の役目、必らずともぬかるまいぞ。

觀壽　イヤ、モウ、さういふ事には、手馴れてゐる觀壽院、お氣遣ひなされまするな。首尾よう、やッ付けてお目にかけませう。

九平　まだこの上の一大事は。コリヤ。

ト囁く。

觀壽　イヤ、その儀は在郷へ、とつくりと、どめて置きました。

九平　夜に入らば、出雲どのもこの所へ、忍びにて入來の手筈。
觀壽　お目にかゝつて、お手渡し致しませう。
九平　隨分、人目に立たゝやう。
觀壽　先づそれまでは
九平　身共は、暫らく所を隔て。
觀壽　左やうなれば、九平次さま、ではない、海道の雲助。
九平　觀壽院ではない。旅のお客。
觀壽　酒でも飲んで休みや。
九平　なにを。酒手もくれずに
兩人　ハ、、、。
九平　ドリヤ、戻りでもあらうか。
　ト在郷唄になり、橋がゝりへ入る。
觀壽　この間の不仕合せ、どちこになつてゐる所へ、また金の蔓に取り付いた。うまい〳〵。
　ト太鼓なしの神樂になり、向うより娘木幡、屋敷の拵らへにて、中間一人連れて出で
家來　左やうでござります。怪しからぬ賑はしき儀でござりまする。
　ト云ひ〳〵本舞臺へ來る。
木幡　コレ、わしは、ちよつと隙が入らう程に、明神樣へでも。
家來　ヘイ〳〵、左やうなら、後程。これまで、お迎ひに參りませう。
　ト橋がゝりへ入る。木幡、觀壽院を見て
木幡　申し、あなた、ちよつと物が尋ねたうござりまする。安立町の難波屋へは、どう參りますな。
　ト觀壽院、こなしあつて
觀壽　難波屋にツイ向うぢやか、見りや、美しい娘。貴樣國はどこぢや。
木幡　アイ、阿波の德島でござりまする。
觀壽　なんぢや、あはとは、アハヤ有り難い。殊に富島とあれば、おれに突かす氣はないか。お娘、どうぢや〳〵。
　トしなだれる。
木幡　そりや、なんの事でござりまするえ、
觀壽　なんの事とは、貴樣の富を突かうと思うて。アレアレ、錐めがムラ〳〵する。松の小影で、ついちよこ〳〵。
　ト手を取りに行く。
木幡　ほんに、怖い坊さん。惡い事さしやんすないなア。
觀壽　でも、この錐めが。

木幡　エヽ、もうツツと

ト跳らへの住吉踊りの合ひ方になり、木幡、逃げ廻る。觀壽院追ひ廻す。向うより、吉田屋のおきさ、揚屋の女房の拵らへにて、手に菅笠を持つて出て

きさ　大事の子達を預かつて來て、わしとした事が、先へ難波屋へ行つてならよいが。

ト云ひ〳〵本舞臺へ來て、この體を見て、こなしあつて觀壽院を引きのけ、眞中へ入る。觀壽院、おきさに抱き付かうとして

觀壽　これは、女中の女の女郎の衒妻、なんでおれが色事の邪魔するのぢや。

きさ　イヤ、袖の振り合せも、他生の緣とやら、幸ひの所へ來かゝつて、わたしや、この戀の取持ちがしたいわいなア。

觀壽　ハテ、物好きな女子ぢやなア。併し、取持ちとは面白い。

きさ　申し、女中さん、お前は慥かに、こちの内へ、夕霧さまを尋ねてござんした。

木幡　ほんに、新町の吉田屋のお内儀さん。

きさ　サア、まんざらの見ず知らずでもない、このお子、わしが取持ちせうわいな。

觀壽　ハヽア、そんなら近附きぢやの。

きさ　近附きと云ふ程の事ではなけれども、ほんの一目知る人。併しお前のやうに、晝中に海道で、このお子を追ひかけ廻さんすと、人が追剝か、巾着切りのやうに思ふわいなア。

觀壽　イヤ又、あんまり退いた仲でもないて。

きさ　とても の事に、とつくりと得心させ、小宿へでも連れていて、抱いて寢るがよいわいなア。さうぢやあるまいか。

觀壽　成る程、そりやそんなものぢや。

きさ　時に、斯う見たところが、どうやら血氣盛んな山伏さん。

觀壽　お目利きの通り、龍角、車輪は愚か、恰も鐵のまろかせ、火にしたやうになつてけつかる。

きさ　まだ年もゆかぬ此お子を、抱かして寢かしたら……

イヤ〳〵、こりやモウ、取持ちは、よしにせうわいな。

觀壽　アヽ、コレ〳〵、それは胴慾ぢや。隨分と辛抱してあしらうて參るわい。

きさ　辛抱が出來るかえ。

観壽　する〳〵。キッと辛抱するぞ。
きさ　イヤ〳〵、それも、とつくりと、試して見ねば、合點がゆかぬわいな。
観壽　なんなりとも、試しなされい〳〵。
ト おきさ、こなしあつて、あたりを見て、肴鉢に茶店の水桶の水を、なみ〳〵と汲み來て
きさ　そんなら、これを持たしやんせ。
ト観壽院、鉢を取る。
観壽　これを斯う持つてどうする。
きさ　さればいなア。お前がその、なみ〳〵と汲んだ水を持つて、凡そ一時ばかり、そこにヂッと立つてゐやしやんして、一雫でも、溢さぬ辛抱が胴試しぢやわいなア。
観壽　そんなら、この水の、なみ〳〵とある鉢を持つてゐて、辛抱したら。
きさ　見屆けた上、取持ちするわいなア。
観壽　忝ない〳〵。
きさ　雫でも溢してゞあつたら、知らぬぞえ。
観壽　滅多に溢してよいものか。さらばこれより水行を始めませう。
ト仔細らしう、水の鉢を持ち、ヂッと見詰めてゐる。

おきさ、こちらへ來て
きさ　イヤ、申し、女中様、お前は夕霧さまの御一家と云ふやうな事でござりますかえ。
木幡　一家と云ふではなけれども、まんざら縁のない事もござりませぬ。もと私しは、郡山の家中、宇田要助と申すものゝ妹。藁の上から萩塚家の、原主水さまへ養子國の姉様は新町の扇屋で、夕霧といふ太夫になつてぢやと聞いたばかり、いつぞは、母さんの筐、同胞三人一つの裂れ。コレ
ト首に掛けし守り袋を出し
この鳥だすきの守り袋を證據に、名乘り合はうと思うてゐるうち、風の便りに様子を聞けば、その夕霧さまはこの春、お果てなされたとの事。恟りと云はうか、大抵の悲しい事ぢやござんせぬわいなア。
きさ　成る程、さうでござんせう。眞實の姉御の事、お力が落ちいでならうか。わたしの所に、藤屋伊左衛門さんとて、深いお客があつて、揚げ詰めでござんした。それで、わたしは姉妹同然に、念頃にした夕霧さま、死なしやんした時は、わたしや、泣いてばかりゐたわいなア。妹女郎の初花さまといふのが、名を貰うて、今では二代

目の夕霧さま。先の夕霧さまの遺言で、伊左衛門さまの相方。相變らず、わたしが所へ、一のお客でござんすわいなア。

觀壽　其方の身の上話しより、此方の事は、どうぢやぞいやい。

きさ　何を云はしやんす。たつた今の事を。マア、チツと辛抱してゐやしやんせいなア。

觀壽　これは、しんどい事ぢやぞ。

きさ　さうして、今の夕霧さまに逢ひたいと仰しやる。その御用わえ。

木幡　サイナア。お目にかゝつて直々に、お話し申さにやならぬ譯といふは、お耻かしい事ぢやが、同家中の濱田織部さまと云ふお方と。

きさ　忍び逢うたといふやうな事かえ。

木幡　アイ、さうでござりますわいな。

觀壽　ヤア／＼、まだお初かと思や、もう開けてけつかるか。エヽ、いま／＼しい。

きさ　オツト、溢れる／＼。

觀壽　ドツコイ、溢さぬ／＼。

木幡　さうなると程もなう、殿樣をお迎への爲、御上京なされしに、大阪に逗留して、新町のお傾城夕霧さまとやらに通ひ詰め、お身持ちも放埒との事、父御樣の御機嫌惡しく、お案じのあまり、御病氣といひ、わざ／＼登つて參じましたも、夕霧どのにお目にかゝり、何分お話し申したその上、織部さまの御放埒も止まるやう。また二つには、私しが身の上も、お頼み申したさでござんすわいなア。

きさ　ほんに姫御前の身で、よく／＼に思うてなりやこそ可愛らしい御心底。その織部さまの事は、わたしも聞いて居りまする。夕霧さまは、伊左衛門さまへ心中立て、逢はぬとの事なれば、どうなりとして夕霧さまに逢うてぢやあつたら、御相談も出來ませうぞいなア。

ト此うち、觀壽院、右の守り袋、ソツと取り、懐中に入れる。九助出る。

九助　コレ、山伏さん、侍ひがお前に逢ひたい。ちやつと呼んで來てくれと云うてぢやぞえ。

觀壽　なんぢや、侍ひがおれに逢ひたい。

きさ　ソレ、溢れる／＼。

觀壽　ドツコイ、溢さぬ／＼。

ト九助、右の鉢を見て

九助　こなさんの持つてゐるのは、そりや、此方の見世のぢやないか。エ、、一ぺんと探してゐた。ドレ、おこさんせ〳〵。
ト取らうとする。
観壽　ア、、コレ、觸るな〳〵。溢れるワ〳〵。
九助　なんの事ぢや。今いるのぢや。おこさんせいなら。
ト取らうとする。
観壽　エ、、これは情ない奴ぢや。水が溢れるわい。
九助　溢れたら大事か。高で水ぢやわいの。
観壽　ドツコイ、大事ぢや、一大事ぢや。
九助　さうして、お侍ひが待つてぢや。ちやつと行かんせ。
ト袖を引ツ張る。
観壽　エ、、コリヤ、溢れるわいやい。
九助　ごんせと云ふのに。
観壽　溢れるわい。
九助　エ、、ごんせといふのに。
観壽　これは情ない。
ト無理に観壽院を九郎、引ツ張り入る。
きさ　よい所へ呼びに來て、マア、邪魔は拂うたわいな。
木幡　どうぞ、その難波屋とやらへ。

きさ　連れて行て、夕霧さまに引合はしてあげませう。
木幡　どうか、よいやうに頼みまする。
きさ　サア、女中さん、お出で。
ト住吉踊りの鳴り物にて、おきさ、木幡を連れ、臆病口へ入る。ト向うより、粂子岸野、同じく姫松、傾城淺澤、此町、遠里、住の江、四人。夕霧に、遣り手のたか、附き添ひ、おの〳〵出る、後より濱田織部、黒羽二重、所々破れたる形にて、古編笠をかぶり、附き出る。次に、偽り駕籠出ろ、
織部　戀も意氣地も、涙も誠も、御存じの太夫どの、お情のおあまり、通してやつて下さりませ。
ト云ひ〳〵附いて出る。
ため　オ、、しつこい。附きやろないなう。
織部　附くな〳〵と、其やうに、慳貪に仰しやるものでもござりませぬ。御器量結構な、御繁昌な太夫どの、たつた一度で助かりまする。アタ胴慾な。
ト云ひ〳〵、本舞臺へ來て、遣手たかを引退け
夕霧太夫。
ト夕霧が袖を取る。夕霧、思ひ入れあつて
夕霧　得心せぬこの夕霧に、又しても無體な事、仰しやる

やうな御仁體でも、ござんすまいがな。織部さま。
織部　ヤア。
住の　もう大概で、思ひ切らしやんせいなア。
ト織部、編笠を取る。
遠里　ヤア、お前は織部さま。
姫松　思ひもよらぬ賤しいお姿、どういふ事で
皆々　ござんすぞいなア。
織部　其方衆の手前、面目もなきこの身の有樣。太夫ゆゑ
に身持ち放埓、國元へ聞え、親人の御勘氣。たゞずみな
らぬこの態になつても、矢張り其方の事は忘れぬ。情を
立つる夕霧太夫、今の落日を見捨てゝは意氣地が立つま
い。サア、色よい返事を聞かして下されい。
遠里　そんなら、アノ夕霧さまゆゑに
皆々　お氣の毒な事ぢやなア。
夕霧　さういふお身にならしやんしても、矢ッ張りわたし
が事を、思うて下さんす、お志しに免じて、成る程どう
なりともと云ひたいが、てもマア、怖いお方であるわい
の。
織部　ヤ、なんと。
夕霧　お前樣、親御樣に勘當うけたとは、僞はりでござん

せうがな。
織部　勘當うけしを僞はりとは。
夕霧　お姿は賤しけれど、それに引きかへ、お腰の物は、
昨日に變らぬ立派の拵らへ。お侍ひのお嗜なみ、お心が
けは知らねども、沓冠りの揃はぬお詞。
織部　サア、それは。
夕霧　さてはさうかと手管に乘らば、廓中の笑ひ草。
織部　すりや、どうあつても。
夕霧　皆さん、サア、ござんせいなア。
ト唄になり、夕霧、素氣なら奥へ入る。織部、後見送
りこなしあつて
織部　知行に替へ、身に替へて、心を盡し口說く傾城
ト小蔭より、乞食一人出て
乞食　こちの働らき場へ邪魔する貮才め。連れて行て、仲
間へ入れる。來い。
ト織部にかゝるを、乞食の手を捻ぢ上げ
織部　手に入る手段は
ト振りほどいて來るを、片手で取つて投げ
ハテナア。
ト唄になる。手を組み思案して、靜々と臆病口へ入る

チヨン／＼にて返し。
造り物、平舞臺、見附け派手なる腰障子。上の方、中二階。橋がゝり、折り廻り障子屋體。すべて、住吉難波屋、座敷の體。各々衣裳、羽織にて、蒲田玄蕃は遠里、小栗典膳は此町、大野曲膳は淺澤、朝倉外記は住の江、松山丹波は岸野、難波屋松八は姫松と組合ひ、その外太鼓持ち、禿皆々、長半の拳をしてゐる。これに合して、誂らへの鳴り物にて道具とまる。
ト向うより三位國景、衣裳、羽織に改め、岩成主税、衣裳、羽織、森國平、麻上下にて附添ひ出る。
國景　國平、して、藏之進は、如何いたした。
國平　神前より御機嫌伺ひの爲、御旅館へ參りしゆゑ、かけ違ひましたと相見えまする。
國景　イカサマ、さうあらう。
ト本舞臺の方を見て
これが、彼の難波屋ぢやな。
主税　左やうございまする。大勢寄つて、騷ぎの體。
國景　あれは、何をするのぢや。
主税　イヤ、あれは只今、上方で流行りまする、長半拳といふものでござりまする。
國景　なか／＼面白さうなものぢや。
國平　先づ／＼、お越しあられませう。
ト國景、兩人を連れ、本舞臺へ來る。右の人數、これに構はず、長半拳してゐる。國景、橋がゝりより、これを見て、面白がるこなし段々あり、よき程に、玄蕃、主膳、曲膳、外記、丹波の五人
五人　長とこな。
ト一時に云ふ。國景思はず
國景　半とこな。
ト指出す。
五人　お出でだぞ。
トこの時、皆顏を見合せ
三位どのではござりませぬか。
國景　ハヽヽヽ。イヤ、いづれも、お樂しみでござる。
曲膳　拳に紛れて、貴卿のお越しを存ぜなんだ。お指圖に依つて大野典膳。
玄蕃　蒲田玄蕃允。
外記　朝倉外記。

丹波　松山丹波。
主膳　小倉主膳。
玄蕃　申し合して先刻より
皆々　お待ち居りましてござりまする。
國景　神職方に休息のうち、これなる主税が知らせにより、
直ぐさま同道。
主税　各々方には、一別以來、打絕えてござる。
皆々　左やうでござる。
松八　これは、堅いぞ／＼。マア／＼、座敷へお越しとい
ふまゝに、引立てゝこそ
ト國景が手を取り、上の方へ連れ行く。
國景　もう煽てかけるかやい。
ト云ひ／＼各々座に附く。
これは傾城も數多參つて居る。おれを始め、各々方も、
藏之進が待遇であらう。
遠里　アイ、藏さんの云ひつけで、皆樣への御馳走に、藤
屋の伊州さんに揚げられて
淺澤　この住吉の難波屋へ
皆々　來てゐるのぢやわいなア。
國景　さうあらう／＼。サア、これからは無禮講ぢや。み
な樂にゐやしやれ。イヤモウ、今朝からの公卿附合ひで、
ホツと草臥れた。ヤツトコセイ。
ト胡坐かいて
時に、貴樣達はまだ知るまいて。おりや、親仁に勘當う
け、その時分は、方々の居候ふであつた。マア、島原は
云ふに及ばず、椽下だんのう祇園新地、とつぷり八軒宮
川、おれが踏み倒さん所もない。通者仲間では、公卿富
公卿富と云はれて、刃金を鳴らした所に、親仁の右大
臣がごねてから、せうことなしの公卿商賣、イヤモウ、
いま／＼しい附合ひで、いけたものぢやないて。
主税　イヤ、公卿富どのゝお名は、京中に隱れはござらぬ。
今日向、弟子入りを仕つて、御傳授受けませう。
皆々　我れ／＼も、御指南にあづかりませう。
國景　イヤ、追ひ／＼御指南仕りませう。時に、馳走に出
たこの姫どもを
主税　これは忝ない。何がなしに身共は、この君に仕ふ。
ト遠里の手を取らうとする。
遠里　オヽ、好かん、なんぢやぞいなア。
玄蕃　我れらは又この先生を。
ト淺澤に寄り添ふ。

淺澤　エヽ、嫌らしいわいなア。
　ト突き飛ばす。
典膳　ぽつとり者は、我れらが相方。
　ト此町にかゝる。
此町　知らぬわいな。
　トあちらへ向く。
外記　兎角に、色はしつくりと。
　ト住の江に寄り添ふ。
住の　オヽ、きたな。
丹波　この丹波は。
主膳　この主膳は
丹主　藥子の正味に致さう。
　ト岸野と姫松にかゝる。
岸姫　こちや否ぢやわいなア。
　ト逃げる。
國景　コウ、皆ふくれて〱。ところでこの業平が、思わく色の仕樣を見せうか。
皆々　見たいな〱。
國景　コリヤ、亭主。夕霧を呼べ。
松八　心得たりと云ふまゝに、夕霧さんの禿衆、太夫さんをこれへ〱。
禿　アイヽ。
　ト奥より夕霧、衣裳、裲襠にて出て、よき所に坐る。
　國景こなしあつて
夕霧　皆さん、お免しえ。
國景　夕霧、いつ見ても、美しいものぢやなア。
夕霧　あなたわえ。
國景　イヤ、貴樣は知るまい。この度、この住吉へ勅使に付いて來た、在原三位國景といふ公卿ぢや。この間から折々新町へ行て、御面像を拜んだが、內裏女郎も及ばぬ容色。亭主、その杯を持つて來い。
松八　ハイ〱。
　トとさん杯を持ち行く。國景飲んで
國景　夕霧、思ひざしぢや。一つ飲んでたも。
　ト杯をやる。
夕霧　イヽエ、わたしや酒は不調法にござんす。
國景　ハテ、愛のある挨拶ぢや。惚れたに依つて、杯をさすのぢや。氣に入らずとも、一つ飲んでたも。
夕霧　わたしや、あなたに思はれる事は、否でござんす。この杯は、免して下さんせいなア。

國景　イヤ、其方は否でも、此方は金輪際惚れて、身請けして女房に持つのぢや。

夕霧　ホヽヽヽ。澤山さうに身請け／＼と云はしやんしても、さう自由には、ならぬわいなう。

丹波　ヤイ／＼夕霧、傾城の賤しい身で、國景卿に思はるゝは、冥加に叶うた身の仕合せ。得心して杯を、戴いたがよからうぞよ。

夕霧　なんぼ高位のあなたでも、人は誠に賤しい勤めの身でも、江口の君は歌の徳で、勅選に選ばれた例しもござんす。あまり傾城々々と、下さげに云うて下さんすないなア。

國景　ハテ、小むづかしい江口の引き事。地下の歌を勅選に加へらるゝは、深い仔細のある事。わいらが知る所ぢやないが、その歌詠みで、云うて聞かさう。彼の小野小町ほどの美人でも、花の色はうつりにけりないたづらにと詠んだぢやないか。若い間が花ぢや。コリヤ、婆になつた者を身請けせうと云ふ阿房はないぞよ。

夕霧　お公卿さまといふものは、歌をもて遊びにしてござると聞いたが、あなたは、歌の道を知らしやんせぬさうなわいなア。

國景　ヤア。

夕霧　花の色はの歌は、小町さんの詠み歌ではないわいなア。

國景　ムウ。百人一首の中にある、子供も知つたあの歌を、小町が歌でないといふ證據があるか。

夕霧　オヽ、武骨。御存じなくば、云うて聞かしませう。昔、後堀川の院の御宇、藤原の信實が娘の辨天の小侍從、君の寵愛、衰ろへて、山本の庵に住みし時、櫻を愛して植ゑ置きしが、あちこちより散る花を見て、わが身に添へて作りし歌とは、和歌式とやらに書いてござんすわいなア。

國景　ムウ、それを又、どうして小町が歌ぢやと記したぞ。

夕霧　サア、そこが歌道の口授口傳。一旦君の御心に背きたる、小侍從なれども、名歌を惜しむ定家卿、詠み人をお替へなされたは、上を恐るゝ選者の發明。これでも、合點がゆかぬかえ。

國景　サア、それは。

夕霧　小町さんの歌ぢやないというたが、わたしが誤まりでござんすかえ。

國景　サア、それは。

夕霧　ツイ手元にある、百人一首の歌さへ、ろくに吟味もせずに、お公卿さまで候ふとは、ホヽヽヽ、ほんまに厚かましいお方ではあるわいな。

國景　ムウ。

トむつとするこなし。最前より國平、始終心づかひのこなしあつて、この時、すご〳〵出て

國平　アイヤ、憚りながら、國景卿に申し上げます。お座敷も不興の體、追ッつけ藏之進も、罷り歸るでござりませう。暫らく奥へお越しあつて、改めて御酒一獻、召上がられませう。各々さま、よろしく。

國景　どうやら、酒が理に入つて來た。奥へ行て、暴れ呑みに呑んで

主税　然らば、我れ〳〵も

皆々　御一緒に、參りませう。

國景　夕霧、どうあつても。

ト夕霧、顏を背ける。

松八　イヤ、叶はぬ戀は片思ひ、もうこれぎり、また外の女中を。

國景　默りあがれ。サア、皆の衆。

皆々　先づ〳〵。

ト國景、大鉢を蹴かへし

國景　こんなものぢや。

ト唄になり、國景こなしあつて、敵役、皆々、國平も付いて奥へ入る。

喜里　先刻から、あの公卿づらめが、憎うて〳〵ならなんだわいなア。

佳の　夕霧さまの歌の講釋で、しゆつと消えに消えくさつた。

女皆　よい氣味であつたたア。

松八　胸がさつぱりとして、燒酎飲んだやうな。

夕霧　それはさうと、この伊州さんも、もう來てゞありさうなものぢやが。

ト所地入りのやうな合ひ方にて、向うより、乘り物一挺、舁いて來る。手代與八附き添ひ出る。本舞臺へ來て

與八　サア〳〵、爰で乘り物、立てゝもらはう。

ト乘り物を立てる。

旦那々々、難波屋へ參じましてござりまする。

ト戸を明ける。内より伊左衞門、返し前の形にて

伊左　ヤレ〳〵、窮屈や。與八、ホッとしたわいな。

與八　左やうでござりませう。みな大儀であつた。休んで下され。

駕籠　ハイ／＼。

ト乘り物舁いて入る。

女皆　伊州さん、待ち兼ねたわいなア。

夕霧　伊州さん、見れば、變つた形で

伊左　室咲きの俄練り物、なんとよう似合はうがな。

佳の　似合ふ段か、生きた業平さまぢやわいなア。

遠里　さうしてマア

女皆　どういふ譯ぢやぞいなア。

伊左　これには、マア、樣子のある事ぢや。マア／＼、後に云うて聞かさう。

ト皆々坐る。

與八　旦那、私しは今の間に、大坂へ歸つて參りませう。

伊左　オヽ、それもさうぢや。そんなら大儀ながら、さうしてくれ。コリヤ／＼、そのおれが紙入れをくれい。

與八　ほんに忘れて居りました。

ト紙入れを出す。佳の江受取る。

左やうなら、歸つて參りませう。イヤ、夕霧さま、どなた樣も、これにござりませ。ドリヤ、一走り去んで來う。

ト橋がゝりへ入る。

伊左　彼奴は、白鼠でござるわいの。

佳の　伊州さん、この紙入れは、どうやら、見たやうなわいなア。

ト伊左衞門取つて

伊左　その筈ぢや、死んだ夕霧がくれたのぢや。みな見てくれ、裏には太夫が自筆で書いた……見(い)親の手笠いとはぬ時雨かな。これが形見ぢやと思や、見る度毎に涙の種。かはゆい事をしたわいなう。

トしつぽりとなる。夕霧、こなしあつて、伊左衞門、これを見て、氣を替へ

イヤ／＼、思ふまい／＼。なんの役にも立たぬ事ぢや。ナウ、太夫、わつさりと酒にせうか。

夕霧　どうなりとも、勝手にさしやんせいなア。

伊左　なんの事ぢや。何を其やうに腹立てるのぢや。

夕霧　二言目には、死なしやんした夕霧さまの事を云ひ出して、それ程逢ひたくば、未來へ逢ひに行かしやんせ。

トつんと云ふ。

伊左　此奴が／＼。いつもと違うて、おりやお公卿さまぢやぞよ。慮外ながら、お公卿さまぢやによつて、鈍な事

云ふと、この笏がさはるぞ。
夕霧　アイ、さはるやうに云ふのぢやわいなア。
伊左　どう云へば斯う云ふと、おのれをマア。
　ト腕まくりせうとして
イヤ〳〵、お公卿さまが下作ではつまらぬ。おのれ、下馬緩怠であらうぞ。
　ト仔細らしく云ふ。
仕の　また口舌かいなア、もう〳〵
女皆　ようござんすわいなア。
伊左　イヤ、ようはない。彼奴が御殿の入口は廣い。
夕霧　エヽ。
伊左　清涼殿々々々というても、この身は神泉園内、そこで、あのやうに腹を右近の橘、彼奴、おれを騙さうといふ北面ぢや。
夕霧　エヽ、云はして置けば、あんまりぢやわいなア〳〵。
　ト胸倉を取つて振りまはす。
伊左　コリヤ〳〵、下作者め、衣紋がそこねるわい。一體おのれが助……イヤ、すけの局、宰相から、この大盡を阿房にして、外に間夫を桐壺、知るまいと思ふかい。
夕霧　そんな覺えはない。

伊左　ハテ、嘘ぢや内侍。
夕霧　エヽ。
　ト煙管にて叩く。倚にて留める。
伊左　少將、われが侍從にはなるまい。
夕霧　お前を
伊左　なにを。
　トこれより兩人、せり合ふ。女皆々分けて
女皆　マア〳〵、待たしやんせいなア。
　ト留めるを聞かず叩き合ふと、觀壽院、最前の形にて出て
觀壽　どうぞ、逢ひたいものぢやが。
　ト云ひ〳〵出て、この中へ入り、伊左衛門、觀壽院を蹴飛ばし踏む。伊左衛門、夕霧、觀壽院を叩く。
ア痛々々々。どうするのぢや。
伊夕　ヤア。
　ト悧りする。
伊左　これは麁相であつた。これを張り合ひに、口舌はこれぎり。サア、太夫、奥へおぢや。
　ト夕霧を連れ、行かうとする。
觀壽　イヤ、夕霧との、待つて下んせ。

ト夕霧見て

夕霧　ついに見た事もない山伏さん。

觀壽　ちつと内々で、話したい事がある。ちよつと爰へ。

伊左　お話しがあるさうな。お目にかゝりや。

夕霧　アイ。

ト合ひ方になる。伊左衞門、上の方へ行て、女形皆々を相手に酒を飲んでゐる。夕霧、觀壽院の側へ行て

わたしに、御用とはえ。

觀壽　おりや、觀壽院というて、こなさんの姉女郎、先夕霧が兄でござんす。

ト伊左衞門、こなしある。

夕霧　成る程、死なしやんした夕霧さん、兼ねてのお話しに、兄御様のあると云ふ事は、聞いて居りまする。その兄御様が、わたしに話したいとわえ。

觀壽　されば、妹が生きてゐるうちは五兩十兩の心付け。この春、あれが死んでから、誰れが一文出してくれる者はなし、きついひつてんになつてゐるのぢや。近頃、わりない事ぢやが、妹が世話になつた、二代目夕霧どの、姉女郎にすると思うて、どうぞ少し貸して下さんすまいか。

夕霧　お前の云うてぢや通り、大恩ある夕霧さまの兄様の事、どうなとしてあげるわいな。

觀壽　そりやア忝ない。イヤモウ、大した金の事でもごんせぬ。百兩あれば、先づ當分は凌げまする。どうぞ小判で百兩貸して下んすまいか。

夕霧　エヽ。

トこなしある。

伊左　イヤ〳〵、いま聞きますれば、死んだ夕霧が兄御、金子はこの伊左衞門が御用立てませう。併し、大坂へ取りに遣はすまで。

觀壽　ア、コレ、そんな悠長な事ぢやない。無心聞く氣なら、いま欲しい。

伊左　サア、今というては。

觀壽　ならんかえ。なりませぬかえ。おれが風左衞門が惡いによつて、疑がはんすも尤もぢや。同胞に違ひないといふ、證據はこれぢや。

ト最前の守を出す。夕霧見て

夕霧　鳥だすきの古金襴、夕霧さまが、形見に下さんしたこの守。

ト同じく出だす。

観壽　一つの裂れは同胞の證據。
夕霧　そんなら、先の夕霧さまの
観壽　同胞に違ひはない。なか〳〵深切に世話してくれた、
大事の妹、死んだと聞いたその時は、五臓六腑も惱亂し、
四十四の骨が碎けるやうにござつたわいなう。その上、
たつた一人の女房は、濕で體がずるけるし、三つになる
倅は、疱瘡の中で驚風、人蔘と熊膽とで仕上げにやなら
ぬ大病も、石で手詰めた貧の病。みす〳〵目の前で女房
子が、狂ひ死する有様を、見てゐるおれが心の中、マ
ア、どのやうにあらうと思はつしやる。推量してたべ
夕霧どの。思ひやつて賜はれなう。
　ト大泣き。伊左衛門、夕霧、顔見合せ、こなしあつて
夕霧　段々のお話し、どうぞと思へど、今というては
　ト思案して、櫛を抜き
これは、たいまいの三甲、足らぬかは知らねども、これ
なりと賣り代なして下さんせいなア
　ト出す。観壽院、取つて改める事あつて
観壽　こりやアお前、質に置いても百兩は心安い。でも、
よいすきぢやなア。斑も厚し、そんなら、これ貸して下
さんすか。

夕霧　なんの、貸すの貸さぬのと、大事ござんせぬわいな
ア。
観壽　忝ない。これさへ貰へば、もう用はない。夕霧どの、
さらば。イヤ、あなた、これにござりませ。
　ト花道の方へ行かうとする。此うち橋がゝりより、宇
田要助、深編笠、大小浪人の拵らへにて出る。この様
子を聞いてゐる。この時
要助　騙りめ、待て。
観壽　ヤア。
　ト恟りする。
要助　騙りの坊主め。詮議がある。待ち居らう。
　ト編笠を取る。観壽院、戻つて來て
観壽　侍ひ。イヤ、ざぶ。おれを騙りとは、何が騙りだ。
何が詮議ぢや。
　ト要助、観壽院に構はず、伊左衛門に向ひ
要助　さては其許が藤屋伊左衛門どの、二代目夕霧どの、
拙者は先夕霧の兄、宇田要助といふ浪人。お見知りおか
れ下されい。
　ト観壽院、恟り。
伊左　すりや、相果てました夕霧が

夕霧　兄御樣と云ふは。
　ト觀壽院、こなしあつて
觀壽　コレ〳〵、ざぶ、先の夕霧が兄といふは、この觀壽院ぢや。一腹一生、変りなしの兄御樣ぢや。
要助　して、證據でもあつての事か。
觀壽　證據といふは、この守ぢや。
夕霧　わたしが方にも。
　ト要助、左右の守を取つて
要助　裂れは一つの鳥たすき。
觀壽　なんと、慥かな證據であらうか。
　ト要助、同じく守を出し
要助　身共とても、この通り、變らぬ守の古金襴。
夕霧　ほんに、あなたも寸分違はぬ
要助　この守を所持して居る、うぬが騙りの
觀壽　コレ〳〵、おざぶ、どき〳〵と貴樣、どうあへるのぢや。守を持つてゐるのが、どういふ理屈で、どうして騙りぢや。
要助　盗人猛々しい。胴より膽の太い坊主め。
　ト要助、所持の守を開き、書付けを出し
享保四年八月五日、巳の刻の誕生、和州郡山宇田甚五右衛門悴要助。
　トまた觀壽院が守を開き
天文十七年申、二月九日の誕生、和州郡山宇田甚五右衛門娘木幡。ヤイ、山伏、わりやア女か。
觀壽　エヽ。
　ト悄りする。
要助　イヤサ、女か。
觀壽　アイ。
　ト詰まる。
要助　われが名は、木幡といふか。
觀壽　左樣な事は、存じませぬ。
要助　天文十七年申の年の誕生とあれば、當年、うぬは十五歳か
觀壽　イ、エ、十三一つ。
要助　最前身共が、騙りめ待てと聲かくれば、返答に及んだらぬが名は、騙りといふか。
觀壽　サアそれは。
要助　云ひ譯あるか。
觀壽　サア、それは
要助　白狀するか。

観寿　サア。
要助　サア／＼／＼。
観寿　こりや堪らぬ。
　ト駈け出すを、引き戻して、取つて投げ
要助　びくとも動かば、ぶち放すぞ。
観寿　ハ、ア。
　ト要助、櫛を引ッたくり
要助　全盛の表道具、夕霧が兄と聞いて渡されし深切、拙者が直ぐに、申し請けたも同然。志し忝なう存ずる。
　ト櫛を夕霧に渡す。此うち観寿院、ソッと逃げ入る。
　木幡、出かけゐて、この時
木幡　そんなら眞實の兄樣、申し、藁の上から萩塚の屋敷へ參りました、木幡でござりますわいなア。
要助　コリヤ／＼。兄とは誰が事。イヤサ、例へ骨肉同胞の兄にもせよ、他家の養子となれば、兄弟の縁は切れてあるわい。
木幡　それぢやと申して
要助　まだ／＼。後の親を本とせよ、養父養母への孝心、盡してよからう。
夕霧　さては、あなたが噂に聞いた

伊左　死んだ夕霧の妹御であつたか。ハテナウ、何はしかれ、要助どのには、初めてのお出合ひ。コレ、皆、氣の附かぬ。御酒を出さんかいやい。
要助　イヤ／＼、お構ひ下されな。今日は住吉へ參詣、其許がこれにと承はり、わざ／＼これへ。
　ト思ひ入れあつて、懐中より、袱紗包みを出して、金を伊左衛門が側に置く。
伊左衛門どの、この一品、お納め下されい。
　ト伊左衛門、袱紗を明けて、金を見て
伊左　こりや、この金子
　ト表書を見て
花岳芳春信女。
要助　即ち妹夕霧が戒名、この要助、親ども存生の砌り、仔細あつて郡山の殿よりお暇を頂き、それより拙者は武者修業に志し、諸方を巡る其うち、二人の妹、末子は武家へ養子に遣はし、姉の娘は、兩親を育くみの爲、新町へ勤め奉公、即ち先の夕霧。縁でがな其許に、馴染みを重ねて、その後兩親とも病氣に取り合せ、妹が心勞、貴殿より何かとお世話にあづかり、金子も數多遣はされしとの事。そのお庇を以て、苦界のうちに兩親を見送りし

と、拙者歸國の後、妹が物語り。其許へ一言のお禮をと存ずる折柄、その頃承はれば、萩塚の御家老、濱田出雲どの、妹夕霧を手に入れんと、廓の買ひ論、妹は其許へ義理を立て、從はじと云ふ。また其許も、承引なくとあつて、萩塚家の御用を蒙むる藤屋伊左衞門、傾城の買ひ論より、自然の事もあらば、御身の爲にも惡しからんと、如何はせんと思ふうち、去年秋の末より妹が病氣、九死一生に依つて、此方へ引き取り、去る正月六日冥途黄泉の客と

ト憂ひのこなし。伊左衞門、しつぽりとなる。要助氣を變へて

不便ながらも妹が相果てし上からは、買ひ論の沙汰も相止み、藤屋の長久。相果てし妹が、不便かけし只今の夕霧どの、身も外ならず思へば、伊左衞門どのを、隨分大切に致されたがよい。又その金子は、浪人のその間、武術の指南仕り、よりよりに門弟どもより、貢ぎくれたる三百兩、親ども恩借にあづかりし金子、只今御返納仕る。伊左衞門どの、お納め下さりませう。

伊左　段々の御懇志。併しこの金子は、矢張り、あなたへお納めなされて下さりませ。

要助　イヤ、左やうござつては、拙者が。

伊左　藤屋伊左衞門、さのみ手支へにもござりませぬから、頂きますれば、請けましたも同然。相果てました夕霧が、香奠とも思し召されまして

ト金包みを戻す。要助、こなしあつて

要助　御尤も。左やうならば、此まゝ留め置くでござらう。

松八　なんと、滅入つたぢやござりませぬか。

皆々　奥へ行て、酒にせうぢやござりませぬかいなア。

伊左　よからうよからう。サア、要助さまも、暫らく奥へ。

夕霧　お前樣も御一緒に。

要助　辭退は却つて。ナニ、他人のお女中、ソレ。

ト右の守を拋つてやる。

木幡　こりや最前、落した守。

要助　非道を構へし只今の騙り。

トあたりを見廻し

ハテ、逃げ足の早い奴。然らば伊左衞門どの。

伊左　サアサア、ござりませ。

ト唄になり、伊左衞門、夕霧を連れ、要助、その外、皆々奥へ入る。在鄕唄になり、女形皆々、大いかきに貝を入れ、持ち出で、貝をなぶつてゐる。向うより仲

居、おとく。海士おなみ、連れ立ち出で、
とく　サア、もう爰でござんすわいなア。
なみ　アイ〳〵、上方は初めてなれば、勝手を存じませぬゆゑ、いかう難儀をして居りましたが、ほんによいお方に、お目にかゝりましたなア。
ト云ひ〳〵本舞臺へ來る。
此町　おとくさん、いま戻らしやんしたかいなア。
淺澤　連れは見馴れぬ女中さん。お前は、どなたでござんすえ。
なみ　ハイ、わたしは、播磨の室の湊で、なみといふ海女でござんすわいなア。
住の　そのまた海女さんが、內方へは、なんの用事あつて
皆々　はる〳〵と尋ねてござんしたえ。
なみ　さればでござんす。今日この住吉へ、萩塚の御家中野口藏之進どのといふお侍ひが、お越しなされてゐる筈。密かにお目にかゝり度い事があつて、それではる〳〵參じましてござりますわいなア。
姫松　その藏之進さまは、殿樣の御用で、いま社家樣の所へ行てゞござんした。もう追ッつけ、戻つてゞござんすわいなア。

此町　このお女中さんは、海女さんならば、この貝の名の知れぬのを、問うて見ようぢやないかいなア。
住の　こりや、よからうわいなア。申し女中さん、云うて聞かして下さんせいなア。
なみ　それは、心易い事でござんす。貝一通りは、わたしが商賣。ドレ〳〵、お見せなさんせ。
トいかきを引寄せる。皆々おなみを取りまいて
皆々　こりや面白からうわいなア。
ト好みの合ひ方になり、おなみ、貝を取り上げて
なみ　コレ、これを見やしやんせ。この蜆貝は、皆さんのなかで云うて見ようなら、其方に居てぢや禿さんのやうなもの、月日貝を越えて見れば、梅の花貝開きそめ、つい色づいた櫻貝、思ふ殿御に添ひぶしの、思ひは深いあさり貝、起證の數もかき貝や、酢貝は愚痴と譬への通り、些細の事も悋氣の角、さるぼの貝は里の口癖、顏赤貝のせり合ひも、仲直りすりや曉の、鳥貝なけば本意ない別れ、皆さんの姫貝にも、みんな覺えがござんせうがな。
此町　ほんに、貝に准へて、こちらが身の上。
淺澤　とんと、お前の云うてぢや通りぢやわいなア

此町　殊に、室の津のお方とあれば
姬松　下の廓のお話しも聞きたし。
住の　藏之進さまの戻らしやんすまで
岸野　こちらと一緒に奥へ來て、酒でも飮んで待たしやんせいなア。
なみ　アイ〳〵、それはマア、忝ならござんす。併し、馴染みもないわたしが、馴れ〳〵しいも、あんまり不躾。
皆々　なんの、大事ござんせぬわいなア。
なみ　そんなら、御遠慮なしに。
皆々　サア、女中さん。
なみ　斯う參じませうかいな。
　ト踊り三味線になり、皆々連れ立ち、奥へ入る。ト向うより藏之進、衣裳、上下、奴一人連れ出る。橋がゝりより、淺川求馬、上下にて出て行き合ふ。
求馬　これは野口藏之進どの。
藏之　淺川求馬どの、貴殿はいづれへ。
求馬　されば、京都の御主人より、貴殿へお使ひ。
藏之　それは、御苦勞。
　ト奥より國平出て
國平　藏之進さま、只今お歸りでござりまするか。

藏之　國平、して、國景卿は。
國平　先刻よりお入りなされ、御酒宴最中でござりまする。
藏之　よし〳〵。ナニ、求馬どの、殿よりのお使ひとは、氣遣はしい儀ではござらぬか。
求馬　イヤ、氣遣ひな儀ではござらぬ。主人鳴戸之助さまには、御歸國のお願ひ叶ひ、今朝京都御出立。また貴殿には、この度の御大役、武威たくましき藏之進どの、なかなか麁略はあるまじきが、萬事につけ、短氣のなきやうにと、御主人の御内意でござる。
藏之　成る程、某が一心を見拔き、御内意を蒙むるこの度の大役、なか〳〵麁略には存じませぬ。
國平　國元御發足の砌りより、附添ひのこの國平、お役目首尾ようお勤めなさるやうにと、及ばずながら、心遣ひ仕り居りまするやうにござりまする。
　ト此うち、遠里出て、求馬を見て、寄らうとして、藏之進がゐるゆゑ、紙を揉んで、求馬に當てる。この紙藏之進に當る。
藏之　何者ぢや。コリヤ、何をする。
　ト求馬、遠里を見て
求馬　ヤア、其方は。

遠里　求馬さま、逢ひたかつたわいなア。
藏之　其方は遠里、身共には、なに遺恨があつて只今の狼藉。
遠里　エヽ、お前ぢやない。あの求馬さんに。
求馬　コリヤ〳〵、女、それ〳〵、堅いぞ〳〵。ナ、ぢやによつて
ト藏之進を教へ、仕方をして
必らずともに、麁相云ふまい。ナウ、國平どの。
國平　イヤモウ、堅い段ではござらぬ。誠に石部金吉金さいぼうでござる。
遠里　ほんにマア、久し振りでお顔を見て、飛び立つやうに。
ト寄らうとする。求馬、仕方にて押へる。
藏之　求馬どの、貴殿には先刻より、異な事を召さるゝ。
ト求馬が眞似をして
こりや、なんでござるぞ。
求馬　サア、それは。
國平　イヤ〳〵、藏之進どの、これは求馬どのゝ御持病でございまする。
藏之　病か。
求馬　左やうでござる。得てはこの持病が
ト遠里、寄るを押へて
アレ〳〵、この通り、甚だ困り入りまする。
藏之　ハテナア。身共も少々醫書を覗きましてござるが、人面瘡、應聲蟲などゝ申す、異病も數々ござるが、古今に見當りませぬ、珍らしい病氣でござる。
ト遠里、辛氣がり、思はず國平を叩く。
國平　ア痛々々。これは迷惑。
藏之　ハテサテ、無禮千萬。
遠里　これも病氣ぢやわいなア。
藏之　それも病か。
遠里　きつう怒つたら、お前樣でも叩くぞえ。
藏之　ハテ、女には惡い病ぢやなア。國平、兩人を奥へ伴ひ、保養を加へてよからう。
國平　畏まつてござります。サア、求馬どの。
求馬　失禮ながら、暫時休息。
遠里　サア、ござんせいなア。
ト唄になり、求馬を連れ、國平附いて、奥へ入る。
藏之　ハテ、異病もあればあるものぢやなア……主人鳴戸之助さまより御意を蒙むり、今日の役目、三位どのに取

入つて、十が九つは負ふたる役儀。この上は、香爐内見のお添翰、これさへ手に入らば、お家は長久、よし〳〵。

ト内にて

國景　藏之進はいづれに居る。藏之進々々々。

ト中二階の障子開け、煙草盆を提げ出て

オヽ、藏之進、そこに居やるか。

ト云ひ下りて來る。

藏之　これは國景卿、それに入られまするか。

國景　今日は、怪しからぬ馳走で、過分なぞよ。それについて、ちと其方に頼みたい事がある。サヽ、近う〳〵。

藏之　ハッ〳〵。

國景　ハテサテ、其やうに慇懃にする事はない。近うおぢやれ〳〵。

藏之　ハッ〳〵。

トにじり寄る。

お頼みなされたいとは、何事でござりまするな。

國景　イヤ、外でもない。今日知守の館に於て、國遠した萩塚萬治郎を、在國の體にもてなし、出入りの町人、藤屋伊左衛門が面體、似たるを幸ひ、萩塚萬治郎と僞はり、殊に又、紛失したる千鳥の香爐、似せ物を借つて内見を濟ましてやつたは、この國景が心一つ。この恩義、ともや藏之進、忘れはしまいなア。

藏之　主家の存亡、國の興廢は、貴卿のお執成しをもちまして、御内見首尾の納まり。御厚情の段、藏之進め、骨髓に通り、なか〳〵忘れは仕りませぬ。

國景　そんなら身共が頼む事、何事によらず、承知いたすであらうなア。

藏之　何がさて、如何やうの儀なりとも。

國景　添ない。外でもない、扇屋の夕霧太夫を、口說き落して、抱かして寢させい。

藏之　すりや、夕霧に御執心とな。

國景　面白ないが、惚れて〳〵惚れ拔いた。どうぞ取持つてはくれまいか。

藏之　ハヽヽ。これは何事かと存じたれば、そりや、いと易い儀でござりまする。早速お伽いたすやうに、申し附けませう。

國景　イヤ〳〵、其方などは、武士道の嗜みを心がけ、遊里へ入込まねば、心易う思へども、兼ねて藤屋伊左衛門と、浮名の立つた夕霧。ツイ一度で得心はせまいぞよ。

藏之　その伊左衛門儀は、主家出入りの町人、申さば家來

も同然、例へ如何やうの儀がござらうとも、貴卿へ差上げるやう、キッと申しつけるでござりませう。
國景　いよ／＼頼んだぞよ。
藏之　御念には及びませぬ。夕霧が聞入れてもござらうならば、彼の香爐のお添翰の儀を。
國景　そりや、氣遣ひ致すな。添翰は、コレこの通り、認め置けば、香爐を武將へ差上げる節には、相違なく納めるわけ。斯くの如く、添翰は所持して居るわい。いよいよ首尾の儀を。
藏之　承知仕りました。
國景　有無の返事は
藏之　後ほどキッと
國景　ぎふん祝うて、一つ呑まう。サア、其方も奥へ。
藏之　然らば、國景卿。
國景　藏之進。
藏之　先づ、入らせられませう。
ト唄になり、國景、奥へ入る。藏之進、ちやつと思案して後より奥へ入る。ト踊り三味線になる。奥より、おきさ、藤屋伊左衛門、出で
伊左　おきさ／＼、太夫はなんで、あのやうに腹を立てるのぢや。
きさ　なんでとは、伊州さん、皆お前が惡いわいなア。それでぢや。
伊左　どうして、おれが惡い。
きさ　わたしに隱してゐなさるが、この間、井筒から、藤屋の吉野どのを呼び出しなさつたさうな。
伊左　ヤア、それが知れたか。
きさ　知れた段かいな。そればかりぢやござんせぬ。西照庵で、さらへ講の晩に、藝子の吉野どのを口說きなさつた事まで。
伊左　それも聞えたか。
きさ　みんな夕霧さんに、告げ手があつたわいなア。
伊左　ヤア、どいつが注進をしをつた。ハテ、惡事千里ぢやなア。
きさ　それで夕霧さんが、あなたの心底が知れぬと云うて、大抵、機嫌の惡い事ではござんせぬぞえ。あなた、どうせうと思し召すぞえ。
伊左　どうというたら、死んだ夕霧へ度々起證も書いた書いた。もうその手は古い。おきさ、どうぞ機嫌の直る、よい思案をしてたもいなう。

きさ　ハテ、よい思案と申しましたら、心中といへば、指を切りなさらぬかえ。
伊左　ヤア。
きさ　今の霧さまには、まだお馴染みも少なし、それ程の心中をお見せなさらぬと、疑ひが晴れまいわいなア。
伊左　サア、それでは死んだ夕霧が、未來から恨むであらうし、どうぞ指でなしに、外によい思案はあるまいか。
きさ　外に思案というては、わたしも仕樣がござりませぬわいな。
伊左　と云うて、指の身替りになるものもあるまいし。
きさ　さうせんと、夕霧さんの御機嫌は、直るまいし。
伊左　どうぞ、指を切らずに
きさ　指を切るやうの
兩人　思案がありさうなものぢやが。
ト双方思案する。始終踊り三味線かすめてあるべし。この時、奧より
織部　心中の指、貸して進ぜうか。
ト織部出でる。
伊左　あなたは、濱田織部さま。
きさ　あなたが指をお貸しなされうとわえ。

織部　イヤ、戀は曲者、身共も、さる遊君に思ひをかけ、いろ／＼と致せども、彼の粹とやら、手管とやらは、一向に不得手でござる。そこで、彼の傾城を相手に、口舌の仕樣を稽古の爲に。
きさ　それゆゑの身替りでござりまするか。
織部　如何にも。
きさ　アノ、目當てのないのに、指をお切りなさるかえ。
織部　イヤ、眞實には切り申さぬ。指切る眞似を致すが、この身の稽古でござる。
きさ　どき／＼として、とんと合點がまゐりませぬ。
伊左　イヤ、斯うぢや。あなたは指を切る稽古をなされたいと仰しやる。おれは又、切る事が嫌なり、なんぢやあらうと、あなたが手をかつて、切る眞似をして、太夫に見せたら、なんとこれは、稽古になるでないか。
きさ　これは、よい思ひ附きぢやわいな。
織部　斯樣な事は、イヤ何遍も當つて置かねばならぬ。時に、此方の手を、お身に貸すワ。
伊左　わたしが借りまする。
きさ　さアといふ段になつたら、ほんまに切らねばなるまいぞえ。

根本「百千鳥鳴門白浪」挿繪

難波屋座敷の場

伊左　そこぢやて。なんでも、太夫を爰へ呼んで、段々仕打ちを見せた上で、今こそ指を切らうといふ所で、太夫の方から、コレ、心底見えた。もう指切るには及ばぬわいなアと、あつちから止めるやうに仕掛けるのぢや。
織部　出來た〳〵。それでは稽古がなるといふものぢや。
きさ　それでも夕霧さんが、あなたの指でなくば、得心はあるまいぞえ。
伊左　それも仕樣があるのぢや。所であなたが、後へ廻つて、この羽織の間から手を出して、おれがする通りをなさるゝぢや。なんと、それで心中の二人前ではあるまいか。
織部　よし〳〵、先づやりかけて見よう。
伊左　おきさ、そこらに羽織があらう。取つてたも。
きさ　ツイ、顯はれさうなものぢやぞえ。
　ト云ひ〳〵羽織を取り、伊左衛門に着せる。
伊左　サア〳〵、やりかけませう。
織部　心得た〳〵。
伊左　太夫を呼べ〳〵。
きさ　アイ、夕霧さん〳〵。
　ト夕霧、傾城、禿、皆々を連れ出る。此うち織部、伊左衛門が側へ廻り、羽織の間より兩手を出し、伊左衛門が手の心にて、片手にて扇使ひしてゐる。
夕霧　おきささん、なんぞ用でもあるかえ。
きさ　アイ、伊州さんがな。
　ト云はうとして笑うてゐる。夕霧、伊左衛門を見て、拗れた體にて、あちらを向いてゐる。
伊左　太夫、委細はおきさに聞いたが、其方が腹立つのも尤もぢや。何を隱さう、井筒から呼び出したアノ雪野が事は
　ト織部、扇にて向うを教へ
ちよつと、附合ひに呼んだのぢや。お腹が立つなら、あやまり奉るぢや。
　ト織部、手を突く。伊左衛門、轉けやうとしてとまる
夕霧　お前のその云ひ譯も、久しいものぢやわいなア。
伊左　其やうに小腹を立てやんな。マア〳〵、爰へおぢやおぢや
　ト伊左衛門立つ。織部も立つて、とり違へ、おきさを引ッ張る。
オツト、それではない。間違ひぢや〳〵。
　ト織部ともに、夕霧が側へ坐る。

夕霧　コレ、太夫、此方を向きや。
伊左　イヽエ、間違ひぢやござんせぬ。よう聞いて置いたのぢやわいなア。
伊左　今も云ふ通り、雪野が事は、この間、藏屋敷の振舞ひで、井筒屋へ行たら、亭主の作兵衞が、ヤア、伊州さんか、これはしたり
ト織部、手を間違うて打ち合す
ようお出でなされました。マア〳〵、座敷へと云ふ。それからスッと通つたら、縁先に、斯う吉野めが
トさの字なりになりて、足を出さうとして、自由にならぬこなし。
怪しからぬうづめた顏で、煙草盆を前に扣へ、煙管を取つて
ト織部、煙管をいろ〳〵探し、手に當らぬ思ひ入れ。伊左衞門、氣を揉む事。探りあたり、火皿の方を伊左衞門が口へあてがふ。伊左衞門、おとがひにて
などしてゐたが、憎さにツイなぶつたのぢや。
夕霧　イヽエ、雪野どのより、わしをなぶらしやんしたのぢや。わしや、なぶられた事と思や、口惜しうて〳〵ならぬわいなア。

きさ　申し、伊州さん、よい加減に今のをな、そろ〳〵始めたらよからうぞえ。
伊左　合點ぢや〳〵。イヤ、太夫、それ程疑がはしくば、心中を見せう。
夕霧　心中とはえ。
伊左　指を切つてやらう。
夕霧　エヽ。
伊左　後とも云はず、いま爰で、スッパリと切つてやろ。
きさ　皆さん、伊州さんが指を切るといなア。
皆々　きつい心底ぢやなア。
きさ　こりや、見ものぢやわいな。
夕霧　どうも、誠には。
伊左　切るぞよ。なんのその、おれが指でもあるまいし。
夕霧　エヽ。
伊左　イヤサ、おれが指を切つてやつたら、わが身、疑ひが晴れるであらう。
きさ　さうぢやわいな。サア〳〵、ちやつと切つてあげなされいなア。
伊左　よし〳〵、そこに脇差があらう。取つてたも。
きさ　アイ〳〵

ト脇差を渡す。織部は切つてはならぬと、いろ〳〵あせるこなし。

伊左　サア〳〵、おれがよいやうにする。おきさ、枕ぢや枕ぢや。

きさ　アイ〳〵。

ト枕を取つてよき所に置く。

伊左　サア〳〵、枕の土臺も、爰にある。指切りの始まり〳〵。

ト織部、あせる。此うちおきさ、女形皆々に囁やき、リツと外して、女皆々連れ、奥へ入る。伊左衛門、刀を抜かうといふこなし。織部、是非なく脇差の柄を持ち、抜かうとして抜かれぬこなし。伊左衛門、足にて鞘を押へ、織部、やう〳〵刀を抜き

今こそ切るぞ。太夫、止めぬか

ト織部、抜身を振り上げ、左の小指を枕の上に置く。伊左衛門、夕霧を見て

今ぢや〳〵。止めぬか〳〵。張合ひがないが、エヽまゝよ、切りもせい。

ト手を押して織部の手を持ち添へ、織部が左の指をポンと切る。

伊織　ア、痛々々。

ト織部、指を抱へ、脇へ退く。伊左衛門も痛むこなし

夕霧　ヤア、ほんまに切らしやんしたかいなア。

伊織　ア痛々々。

夕霧　定めて痛むでござんせう。ほんに嬉しうござんす。

ト指を取つて見て

コレ〳〵市彌、わしが手箱をおこしや。

市彌　アイ〳〵。

ト手箱を持ち出づる。

夕霧　コレ、この箱に入れた物は、わしが大事の物ぢや程に、隨分大事にかけてたもや。

市彌　合點でござんす。

ト手箱を持ち、奥へ入る。

夕霧　わたしや嘘ぢやとばつかり思うてゐて、此やうな事をさせました。堪忍して下さんせいえ。

ト介抱して、伊左衛門が指、揃うてあるゆゑ

エヽ、なんの事ぢやぞいなア。

ト突き放し、織部を見て

ヤア、織部さま。

伊左　南無三、謀り事が顯はれた。

夕霧　ト奥へ逃げて入る。
夕霧　コレイナア、皆さん……オ、辛氣。
ト行かうとする。織部、夕霧が裲襠の端を取つて
織部　夕霧、待ちやれ。
夕霧　イエ、わたしは奥へ。
ト行かうとするをとめて
織部　心中の小指、しつかりと受取つたな。
ト合ひ方になり、夕霧、ヅツとするこなしあつて
夕霧　サア、それはな
ト少し慄ふ。
織部　斯程の心底を見する上は、其方も又、意氣地を磨く心底が、見たい／＼。
ト突き放す。夕霧氣を鎭めるこなしありて
夕霧　織部さん、必らず恨んで下さんすな。わたしや、どうも
織部　ヤア。
夕霧　心が心で、儘にならぬわいなア。
織部　すりや、伊左衛門へ義理を立て、心を盡すこの織部は、さほどまでに憎いぢやよな。
夕霧　數ならぬわたしゆゑ、お國の首尾も惡い。その上、お主様や親御さまの事も、思ひやつて見やしやんせいなア。
織部　知行高祿、主人の事、親の事、いつかな思はぬ／＼。この織部も其方ゆゑに、不忠不孝と下げしまるゝ事も、思ひ込んだ武士の魂ひ。コレ、二度とは云ふまい。たつた一度、
夕霧　嫌でござんす。例へこの場で、一分だめしに刻まれても。
織部　身が心に從はぬか。
夕霧　オヽ、くど。
織部　エヽ、其方はな。
ト袖を取つて、キツとなる。
夕霧　堪忍して下さんせいなア。
ト振り切り、ツイと奥へ入る。織部、後をヂツと見詰めてゐる。暫らくあつて、がつくりとなる。ト此うち橋がゝりより若黨曾平、黑股引の侍ひにて狀箱を持ち出で
曾平　それにござるは、御主人織部さまではござりませぬか。
織部　家來曾平、所用ばしあつて參つたか。

曾平　されば、親旦那出雲さまより、石原三位さまへ、密書のお使ひ。

織部　ナニ、親人より三位さまへ。ホウ、その密書、これへ。

曾平　ハツ。

ト狀箱を渡す。

織部　身に御口上は無かつたか。

曾平　イヤ、御口上はござりませぬ。只今、途中にて承はれば、殿鳴戸之助さま、本國へ御入部とあつて、京都を御出立なされ、今晩は枚方に、御止宿との儀でござりまする。

織部　すりや殿には、はや御出立とな。ムウ。

トこなしあつて、右の狀を開き讀む。

兼ね〴〵貴殿と申し合せし大望の儀に付き

ト讀みさし、曾平の方へこなしあつて、後は口の内にて讀み終る。ちよつと思案して

曾平、これへ。

曾平　ハツ。

ト寄る所をボンと拔討ちに切る。織部が家來出かけゐて

家來　これは。

ト驚ろく、織部、顏にて押へ、曾平が死骸を井戸へ蹴込み、右の狀を引裂き捨て

織部　これで親人の密事も

ト思ひ入れあつて、花道へ行かうとして、振り返り、奧の方を見て

張りのある程、思ひが百倍。是非に一度

トこなしあつて、氣を替へ

供せい。

ト唄になる。織部、家來を連れて向うへ入る。ト奧より、玄蕃、主膳、典膳、外記、丹波出て

玄蕃　いづれも、只今奧にて申す通り、いづれを見ても美しい傾城ども。

典膳　我れ〳〵が云ひ合せて。コレ

ト丹波、主膳に囁やく。夕霧、出かけ、この體を見てチツと後へ寄る。主膳、丹波、外記の三人

三人　すりや、この所を擔げて退き

玄蕃　埋んで置いて、我れ〳〵が樂しみ。

典膳　よき折を見合せ、合點か。

ト主膳、丹波、外記の三人

三人　合點ぢや。
玄蕃　ござれ。
ト奥へ入る。夕霧出で、
夕霧　皆様の身の上、ほんに、怖いお方々ではあるわいなう。
トぢつと下にゐる。奥より藏之進出る。
藏之　夕霧、これに居召さるか。
夕霧　藏之進さま。
藏之　今日は勅使饗應、何かおてまへにも、御苦勞に存ずる。
夕霧　あなたにも、お心使ひでござんせう。
ト藏之進、座に附くと合ひ方になり
藏之　男女席を異にするとは聖賢の教へ、その法を破り、無禮を戒めざるは、遊里の慣ひ。また和らかなものぢやなア。
夕霧　ほんに、あなたは物堅いお侍ひさま。わけもないものぢやとお笑ひ草、恥かしい活計でござんすわいなア。
藏之　なんの〳〵。イヤ、それについて藏之進、おてまへに無心があるが、なんと聞き届けてくれまいか。
夕霧　改まつた御無心とはえ。
藏之　外でもない。あの遊里に流行いたす、纐ぢやてサ。
夕霧　エ、
藏之　おてまへに至つての執心、聞き入れてくれる所存か。
夕霧　お前様まで同じやうに、こりや、わたしをなぶらしやんすのでござんすな。
藏之　イヤ〳〵、身共ではない。奥にござる三位どの。
夕霧　エ、。
藏之　この儀を承引してくれると、其方の爲、惡しくは計らふまい。得心して、國景卿の御寢所へ行て、伽がしてもらひたい。
夕霧　エ、モウ、あなたも藪から棒に、何を云はしやんすぞいな。
藏之　すりや、不承知か。
夕霧　外の事ない何なりとも、否とは申しませぬが、こればつかりは、どうも
ト藏之進、ムツとして
藏之　外の儀ならば、ナニ女の其方を賴まうぞい。斯程勘辨こそしても、女色の道ばかりは、これ男子の手業に及ばぬ事ゆゑ、藏之進ともあらう侍ひが、折入つて御身を賴むでないか。色情を商ふ傾城の身の、右の一件には馴

れて居る事、さのみ苦勞もなりそもないもの。それに不承知の體には、田舍武士と侮どり、身が詞を用ひぬぢやな。

夕霧　たんの、さうではござんせぬけれど、わたしや、外のお客に逢ひましては、どうも伊州さんへ立たぬわいなア。

藏之　フヽ、すりや、伊左衞門に申し譯がないゆゑ、それで斟酌に。ハテ、一夜流れの遊君の身にも、それ〴〵の義理はあるものぢやな。ア、イヤ〳〵、その儀たらば苦しうない。伊左衞門には、身がよいやうに推擧いたすであらう。心配を致さぬがよい。

夕霧　エヽ、つツともう、お前樣にはお國氣質、傾城といふものは、どなたにも、金で體をば委すとばかり思うてござんすゆゑ、心易う仰しやれど、さうした譯ぢやござんせん。張りと意氣地が廓の慣ひ、殊にあの伊左衞門さまとは、ツイした譯の仲でもなし、わたしが姉さん、前の夕霧さまとは、浮名の立つた深い仲、禿の時より、あのお方の氣立も知つて、いとしらしい殿御ぢやと、思うてゐたその上に、この春から突出しの折も折と、姉樣は死なしやんす。その遺言やら、お頼みやらで、逢うてゐる伊州さん。外のお客に一夜も、帶紐解いた事もなし。爰の所を聞き分けて、どうぞ、この事ばつかりは、堪忍して下さんせいなア。

藏之　すりや、伊左衞門より外の者には、戀愛の道を結ばぬとな。

夕霧　逢ひ初めてから今日までも、伊州さんの揚げ詰めでござんすわいなア。

藏之　イカサマ、さほどの儀ならば、一應では承知せぬも尤も。然らば、大切の儀なれども、打割つて申し聞かす。あの三位どのには、萩塚が家にかゝはる大切の儀が頼みある。然るところ、御身に執心の趣きを申さるゝにつき、たゞ傾城は無情なる者とのみ思ひ居つたゆゑ、身共、しかと請合ひ置きたれば、今さら違變には及び難い。右に伊左衞門一件に於ては、甚だ尤もの事ながら、そこを又ともかうも、身がよろしく執成さうから、只管にこの頼みは、聞き入れてもらはねば、藏之進の武士が立たぬ。ぢやに依つて、無體と知つて申す程に、夕霧、不肖ながら、承知しておくりやれ。

ト夕霧思ひ入れあつて

夕霧　藏之進さま、あなた、忠義といふ事、よう御存じで

ござんせうなア。
藏之　サア、その忠義ゆゑこそ、おてまへを頼むのサ、
夕霧　お侍ひ樣の忠義と、姫御前の操とは、どちらが重う
　ござんすえ。
藏之　ヤア。
夕霧　お前がお主樣を大事に思うてぢや、そのお心に引き
　くらべて、わたしが伊左衞門さまを、大切に思ふ心を、
　推量して下さんせいなア。
藏之　すりや、その意氣地とやら、義心に依つて
夕霧　市彌、最前の手箱を持つておぢや。
市彌　アイ〳〵。
　ト持ち出る。夕霧、箱の中より織部が指を出して
夕霧　申し、これ見て下さんせ。
藏之　これは。
夕霧　サア、お名は明けては云はれませぬが、この指の主
　といふは、あなたと肩を並べる程の、歷々のお侍ひ樣。
　昨日や今日の仲でない伊州さんと、後先にわたしを呼ん
　でのお執心。深切の數々を、心に拜んでゐるけれど、わ
　ざと素氣なう云うたれば、これ此やうに、指まで切つて
　下さんしたわいなア。數ならぬわたしを、よく〳〵に思
　つてなればこそ、お侍ひ樣の一分を捨て、滿足に產みつ
　けてもらうた、親御さまの事も忘れ果て、心底盡して下
　さんす、そのお志しを無益にして、斷わり云ふ心の辛さ
　は、どのやうにあらうぞいなア。身をズタ〳〵に切らる
　るより、情の恩の締め木にかけ、戀の油を絞らるゝ、そ
　の苦しさも切なさも、皆伊州さんへ立て通す、こりや、
　心の義理でござんす。とは云ふものゝ、眞實の心から、
　いとしいと思ひ詰めた心の城、粹ほど愚痴はないものを、
　傾城に誠なしとは、誰がいつの世に云ひ初めた。あなた
　のやうな物堅い、里の所譯も知らしやんせぬお方には、
　義理も法も辨まへぬ、犬畜生同然に、下げしまるゝ淺ま
　しい。ほんに悲しい、口惜しい身の上でござんすわいな
　ア。
　ト夕霧こなしあつて云ふ。
藏之　すりや、身命に替へ、女の實義を……フムウ。
　ト奥より國景出る。藏之進、當惑の體。
國景　藏之進は、どれへ行たぞ。藏之進〳〵。
　ト云ひ〳〵敵役、女形皆々を連れ出る。伊左衞門も出
　る。
藏之　これは國景卿、御酒宴の席を立ち破り、無禮の段、

頼平御高免下さりませう。

國景　イヤ／＼、其方に代つて、伊左衛門がもてなし、隱し藝の三味線。イヤ、けうといものであつた。

伊左　不調法な儀をお耳に觸れ、恐れ入りましてござりまする。

國景　恐れ入るとは術ない。今日一日は、貴樣、萬治郎ぢやないか……ナア、藏之進。イヤ、こりや滅多に云ふ事ぢやない。藏之進、頼んで置いた夕霧が事は、定めてよいであらう。忝ない。こりや、キツと恩に着にやならぬ。この夕霧は、今日から我れらが色ぢや。なんと各々、如何でござるな。

典膳　御意の通り、美なるものをお手に入らるゝは、天晴れ卿はあやかりもの。

玄蕃　こりや藏之進が、いつかどの働らき、怪しからぬものぢや。

典膳　少とお耳でも引かうか、アノ茲な色事師め。

頼背　うまいな／＼。

ト此うち、伊左衛門、合點のゆかぬこなし。夕霧、氣の毒な思ひ入れ。藏之進、俯向いてゐる。

國景　煽てなやい／＼。コレ、太夫、其やうに外々しうする事はない。爰へ／＼。

ト夕霧、伊左衛門を見て、心遣ひのこなし。

エヽ、聞えた。今まで深う逢うてゐた、伊左衛門が居るゆゑ、それでの遠慮か。コリヤ、伊左、粹を通せ、粹を通してくつされやい。

伊左　ハイ、そりや何の事でござりまする。

國景　何の事とは、藏之進に約束して置いたに依つて、身請けして、連れて去ぬる。

伊左　エヽ。

國景　サア、太夫、來い／＼。

ト引き立て行くを、伊左衛門、隔てる。

伊左　イヤ、先づお待ち下さりませ。近頃恐れ多い儀でござりまするが、あの夕霧は、私しがアノ、なんでござりまする。隨分御酒のお相手には、差上げませうが、身請けと御意遊ばしまするは、どうも、その意を得ませぬやうなものゝやうにござりまする。

トどき／＼云ふ。

國景　コリヤ、まだ、何にも樣子を知らぬな。夕霧は今日から、この國景が北の方なりや、京へ連れて去ぬる。最前、藏之進に約束して置いたわい。

伊左　ヘイ、なんとも合點が參りませぬ。夕霧、其方、なんぞ樣子を知つて居やるか。

夕霧　アイ。

伊左　なんの、知らぬ。わが身は知らう筈がない。イヤ、申し、藏之進さま、只今國景さまの御意なさるゝを承はりますれば、委細はあなたが御存じの樣子。こりや、仔細のある事でござりませう。樣子を仰しやつて下さりませ。

ト急きこんで云ふ、藏之進、手を組み、ヂッと俯向いてゐる。

申し〳〵、どうでござりまする。物を仰しやつて下さりませ……コレ、わが身達は、なんにも知らぬか。

遠里　イヽエ、なんにも、樣子は。

女皆　知らぬわいなア。

ト伊左衞門、思ひ入れあつて

伊左　なには格別、なんぼうあなたがお公卿樣の御威光でも、この夕霧は私しが相方、藤屋伊左衞門が揚げ詰めに致してござりまする。お前樣の御自由には、マア致しますまい。

國景　なんぢや。われが揚げ詰めぢやに依つて、やる事はならぬと云ふのか。

伊左　ハイ、なりませぬ。すんどならぬ事でござりまする。

ト國景、ムッとして

國景　ヤア、素町人の毛二才め、うじ蟲同然の身で、ずんどならぬ。ヤアならぬも凄まじいわい。コレ、貴樣達寄つて、このとんぼさくめを、撮み出してしまはつしやれ。

玄典　ハッ。

ト兩人、伊左衞門が傍へ行て

玄蕃　コリヤ、ヤイ、下々の下衆め、國景卿を、どなたぢやと思ふ。雲の上、殿上人ぢやぞよ。その高位高官のお前へ出で、一體うぬが頭が高い。イヤサ、この素頭が高いわいやい。

ト扇子にて伊左衞門が頭を毆る。伊左衞門、無念のこなし。

典膳　さうしてマア、夕霧ぢやの、太夫のと、小澤山さうに吐かすが、今日から石原家の御簾中、うぬらが傍へでも寄ると、罰が當つて、コリヤ、この體が腐れるわいやい。

ト肩を突く。

玄蕃　斯くいふ、我れ〳〵も、一國一城の主、同席するは

この身の穢れ。
典膳　穢いわい。
玄蕃　汚ないわい。
典膳　早くその座を。
玄蕃　立つてうせう。
ト蹴り飛ばす。此うち夕霧、いろ〳〵腹の立つ思ひ入れあつて、行かうとしてゐるを、藏之進、裾を捕へ、ヂツと留めてゐる。伊左衛門、無念のこなし、いろいろあつて、藏之進に詰めかけ
伊左　モシ、藏之進さま。こりや、マア、どうでござりまする。そりやモウ、あなた方が仰しやらいでも知れた素町人、うづ蟲でも五分の魂ひ、慮外無禮は致しませぬ。なんにも此やうに、むごい目に會ふ覺えがござりませぬ。それもよそ外でなく、大事なけれど、アレ、太夫が側に居りまする。夕霧が見て居りまするわいの。此やうに踏まれたり、叩かれたり、わしや口惜しうござりまする。無念にござりまする〳〵。
ト泣く。藏之進、矢張り俯向いてゐる。夕霧堪えかねて、振り放して、ツカ〳〵と國景が側へゐて、ドンと坐り
夕霧　これは、下作者の安公卿さん、如何に戀の意趣ぢやというて、あのやうに踏たらしうはせぬものぢやわいなう。最前、藏之進どのが、事を分けてのお頼み、お心を推量して、帶紐は解かずとも、せめて心のいるやうに、付合うてあげうと思うてゐたが、あんまりぢやがな。アイ、お前はお位があらうが、高からうが、わたしはなんとも思やせんわいな。公卿町人の隔てのないが、色里の慣ひ。ほんに立派らしう公卿顏をして居やしやんすれども、親御樣の勘當のうちは、勝負事ばつかりにかゝつて、盜人騙り同然の、怖い事さしやんしたを、よう聞いてゐるわいなア。町人でこそあれ伊州さんは、義理も情も知らしやんした、優しいお方、それを手にあふものぢやとて、踏ましたり、叩かしたり、モウ〳〵〳〵腹が立つて立つて〳〵、其やうに肥えた顏へ喰ひ付いてやりたいわいな〳〵。
ト泣いて腹を立てる。此うち國景、いろ〳〵こなしあつて、藏之進が側へ行き、尻をグツと捲り、どつきりと坐る。
國景　藏之進、わりや二本差しや侍ひぢやと思ふか。うぬにはこの國景が、大恩を見せてあるぞよ。恩を知らぬは

犬ぢや、畜生ぢや。委細承知仕りました、夕霧を差上げませうと請合うて、ありやなんぢや。ありや何事ぢや。あの衒妻めが吐かす通り、おりや博奕打ちぢや。オオ、ぐづりぢや、なんの彼奴が心に從はにや、三十二文出して、惣嫁を買ふわい。がわりや、一旦請合うて置いて、此まゝでは濟みそむないものぢやぞよ。まだなんぞ、われが方に、なけりやならぬものがあらうが、この以後侍ひで候ふと、キヨロ〳〵した事吐かすな。アノどうならずめ。

ト此うち藏之進、いろ〳〵こなしあつて、これにてキツとなる。

なんぢや、その面なんぢや。むかついてどうさらす。まだ、われの欲しい物があらうがな。

トこれにて藏之進、ギツクりなつて、差俯向く。

どいつも此奴も、ケチいま〳〵しい奴等ぢや。面見るも、げい〳〵と蟲唾が走る。ケチいま〳〵しいわい。

玄蕃　イカサマ、これにござつては、何かお心に障る事もござれば、暫らく爰をお開きあつて、彼れらが返答をお聞きなされまいか。

國景　それもそんなものぢや。おれが突ツかけては、言句も上がらぬ筈ぢや。奥へ行て待つてやらう。貴樣達も一緒に。

玄蕃　兎も角も仕らう。

典膳　國景卿、イザ先づ

顏皆　お入りあられませう。

ト國景、立ち上がり、衣紋繕ろひ、キツとなつて

國景　イヤ藏之進、今にもあれ、夕霧に得心させ、予が心に從はゞ、無事に納まる汝が望み。我が發足は戌の上刻、それまでに有無の返答。歸京の後は、臍を嚙むとも甲斐あるまい。いよ〳〵夕霧不承知に極まらば、鳴戸之助は勿論、從類までも悉く、逆磔刑。萩塚一家の興廢に、この國景が舌三寸。善とも惡とも藏之進、奥で返答を相待ち居るぞ。

ト唄になり、國景、立派に皆々を連れ、奥へ入る。伊左衞門、藏之進、夕霧殘る。但し合ひ方。藏之進、暫らく俯向いてゐる。伊左衞門こなしあつて

伊左　藏之進さま。

ト藏之進、やう〳〵顏を上げる。

藏之　伊左衞門。

伊左　さぞ御苦勞にござりませう。

藏之　推量しやれ。遊里不案内の藏之進、君が一夜の情に、妾が百年の命を失ふと云へる、傾城の眞情を知らずして、迂濶に事を計りしは、身が一生の不覺。先刻、夕霧が貞女を初めて聞いて當惑、最前よりの一部始終に。心を碎き居るわい。

伊左　夕霧を差上げませう。

藏之　なんと。

伊左　代々お國の御用を勤め、御恩のあるお家の大事、身にも命にもと思うて居りまする太夫なれども、さつぱりと思ひ切つて、國景卿へ差上げませう。コレ、夕霧、聞きやる通りの譯なれば、おれが一生の賴みぢや程に、心には添はずとも、三位さまの方へ行てたも。

夕霧　伊州さま、そりや、眞實で云はしやんすかえ。

伊左　サア、斯う云へば其方の心にも、わしが否になつたに依つて、あのやうに云はつしやる、水臭い、聞えぬ人ぢやと思ふであらうが、さら／＼さうではない。どうでこの伊左衞門はな

　トこなしあつて

オヽ、おれは死んだ者ぢや、この世に居ぬ者ぢやと思ひ切つて、三位さまの方へ行てたもれば、藏之進さまも御安心。お國の殿樣の御恩も盡されるといふもの。爰の道理を聞き分けて、得心してたも。夕霧、賴んだぞよ。

夕霧　さうぢや。

　ト藏之進が刀にて、死なうとする。藏之進とめて

藏之　待て、聊爾すな。早まるな。

夕霧　イエ／＼、伊左衞門さまのお賴みといひ、殊に差當るお前の御難儀。と云うてあの國景に、なんと肌身が穢されう。わたしが死ぬれば三方四方、丸う納まるこの場の仕儀。それぢやに依つて

　トまた死なうとするを、よろしく留め

藏之　待て。千金より重きは一命、それを捨てんと思ふ志しは、武士に取つては戰場の討死同然。かばかりの貞女を見殺して、身が武士が立たうと思ふか。其方を殺せば、藏之進は情知らず、道知らずのうろたへ武士になるがや。サヽ、外に身共が思案もあれば、マア、死ぬるには及ばぬわいやい。

　ト刀をもぎ取る。伊左衞門こなしあつて

伊左　して、あなたの御思案は。

藏之　近う。

　ト兩人を寄せ、囁く。

伊左　すりや、その手を以て
藏之　ならぬまでも、事を計り
伊左　もし、得心せぬならば
藏之　その時こそは、絕體絕命。
伊左　イヤ、それでは。
藏之　ハテ、身共に仕して、暫らく奧へ。
伊左　苦しうござりますまいかな。
藏之　行きやれ〳〵。
伊左　ハツ、太夫、おぢや。
ト住の江の唄になり、伊左衞門、夕霧を連れ、奧へ入る。
唄〽春霞み、立ち出で見れば久方の、車がへしの花の色、こぼる心は淺澤ならで、吹くもそれかと杜若
ト右のうち、藏之進、いろ〳〵思入のこなしある。よき時分に、遠里、奧より出で、
遠里　藏之進さま、伊州さんに言傳して下さんしたは、なんの用でござんすかえ。
藏之　オヽ、最前のお傾城、どうぢや。ちと御病氣は心よいか。
遠里　アイ。

藏之　オヽ、それは重疊。其方を呼んだは、少と折入つて頼みたい仔細がある。
遠里　わたしもあなたに、お頼み申したい事がござんすわいなア。
藏之　ナニ、身共に。フム、先づ御身の頼みから聞かうか。
遠里　そのお頼みといふは、アノ、求馬さんと
藏之　求馬がなんと致した。
遠里　どうぞ添はして下さんせいなア。
藏之　ハアヽ。すりや、其方は、求馬と色情を行うたるよなア。
遠里　アイ、どうぞ、お前のお世話で。
藏之　よい〳〵。承知いたいた。身共は別して入魂の求馬どの、よろしく取計らうてくれう程に、身共が頼みを。
遠里　そのお前の頼みはえ。
藏之　夕霧が代りになつて、三位どのと添臥しがしてもらひたい。
遠里　エヽ。
藏之　承知か〳〵。
遠里　どんな事でも、お前の詞は外かぬけれど、これぱつかりは、堪忍して下さんせいなア。

ト振り放して、ツイと奥へ入る。

藏之　コリヤ〳〵、待て〳〵。なんの苦もない。ツイと逃げて行き居つた。この上は、何者にせうぞ。ト思案する。唄になり

唄〽今はなか〳〵逢ひ見ての、後の月見は一しほに、興も升の市、人の心の誠こそ、買ひ得たる市の寶なり。

ト内より、淺澤、住の江、奥より出で、

淺澤　藏之進さま。

住の　わたしらを呼ばしやんしたは。

兩人　なんの用でござんすえ。

藏之　ホウ、淺澤、住の江、二人ともに、ようこそ〳〵。傾城遊女の勤めは、萬端主人に任す事ゆゑ、不自由と聞く。

ト紙入れより金を出し

近頃あなどりがましけれど、身が志し、納めてくりやれ。

住の　忝なうござんすけれど、筋ないお前に、貰ひませう筈がござりませぬわいなア。

藏之　なにサ、これは身共が志し、これを納めて、身共が頼み。

淺澤　夕霧さまの代りに奥へ行て、公卿面と、抱かれて寢いかえ。

藏之　近頃わりない無心ながら。

住の　なんぼう、こちらがやうな新造でも、金の代りに嫌な御人と抱かれて寢る事は、なりませぬわいなア。

淺澤　新町の女郎は、そんなさもしい心はござんせぬ。

兩人　なんぢやぞいなア。

ト金を打ちつけ、ツイと入る。藏之進、思ひ入れあつて

藏之　心當りの傾城どもは、こと〴〵く不承知。外に思案は。

ト唄になる。

唄　〽霜さむけれど松ケ枝は、實にも常磐の風の聲。

トこの唄のとまりに、暮れ六ツ鳴る。これにて藏之進キツとなり

藏之　ありや、暮れ六ツ、勅使の發足。供觸れの刻限……ホイ。

ト刀を杖に、チョン〳〵にて、返し。

造り物、離れ座敷の體。植込み、飛び石のあしらひ、よき所に切り戸、右二重舞臺の上に、國景、寢腹ば

ひ、髭を拔いてゐる。合ひ方にて道具納まる。
ト橋がゝりより、藏之進出で、右切り戸より入つて、蹲まる。國景、ヂロリと見て

國景　そこへ來たは、どいつぢや、何者ぢや。

藏之　イヤ、野口藏之進めでござりまする。

國景　どうぢや、夕霧が得心して、連れて來たか。

藏之　段々と申し聞かせましたるところ、委細承知は仕れども、そこが女の儀、何やらかやらで、サ、お願ひ申すは、爰でござりまする。何卒一ヶ月ばかり、御猶豫なし下されませうならば、其うちには、とくと申し聞かせまして。

國景　やかましいわい。子供をたらすやうに、一月待ての半月待てのと、キヨロ／＼と何吐かしてうせるのぢや。べらさくめ。

藏之　ハツ／＼。然らば何卒、日數十日。

國景　ならぬ。

藏之　然らば五日

國景　否ぢや。

藏之　たつた三日。

國景　默れ／＼、默りさらせ。おりや、近がつへぢや。ちよつとも待つ事はならぬ。いま爰へ連れて來て、抱かして寢させ。

藏之　そりや餘り御無體と申すもの。

國景　なにが無體ぢや。コリヤ、千鳥の香爐も、萬治郎も尻が割れたら、おれが家に係はる事を、合點でかゝつてやつたぞよ。なら吐とぬかしや、破れかぶれ。眞柴が家來の早川帶刀へ、何もかも割らうか。

藏之　サア、それは。

國景　但し、夕霧を抱かして寢るか。

藏之　サア、その儀は。

國景　サア、

藏人　サア。

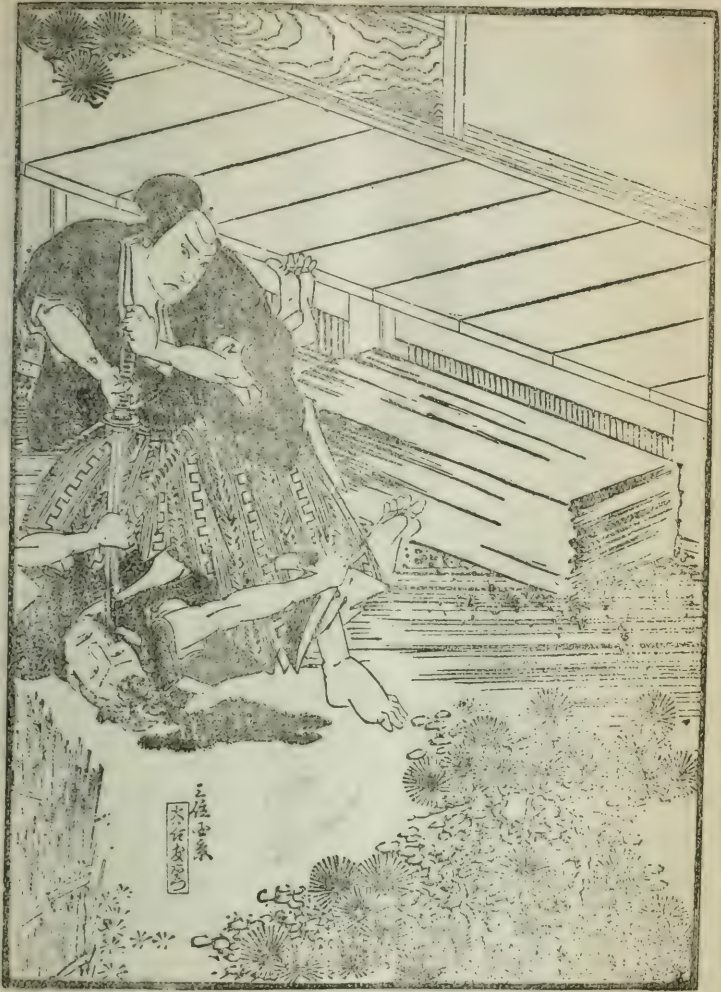
兩人　サア／＼／＼。

國景　どうぢやいやい。

ト藏之進、思ひ入れあつて

藏之　こりや、野口藏之進が一命は、今月今宵につゞまつたか。ホ、、、ホイ。

國景　ハ、、、、うぬらがやうな大腰拔けに、扶持くれて置く、鳴戸之助が大馬鹿。この腹癒せに、武將久吉に云ひつけて、追ツつけ萩塚一家の輩を、滅亡させて見せる

根本「百千鳥鳴門白浪」挿絵

難波屋庭先の場

わい。

ト藏之進、キツとなり、國景を見詰めてゐる。

コリヤ、香爐内見の添翰も、うぬが目の前で、カウ〱

カツ。

ト引裂き捨てる。

欲しくば、それを持つてうせい。うぬがやうな馬鹿者に、相手になるも隙費えぢや。ドリヤ、發足の用意せうか。

ト立つて行かうとするを、藏之進、ツカ〱と行て、拔身にて、肩へ切りつける。國景、ツイと逃げるを、藏之進、いろ〱ぼツ詰め、この立廻りのうち、燭臺打ち消す。トヾ、藏之進、國景を引き付け抉る所へ、おなみ、手燭を持ち、切戸より窺ひ出で、

なみ　ヤア、藏之進さま。

藏之　なみか。

なみ　こりや、マア、何事でござりますぞいなア。

藏之　國の納まり、家の大事。

ト慄ふ。

なみ　エヽ。

藏之　あたりに心を。

なみ　ハイヽヽ。

ト慄ひを隱し、手燭を袖にて覆ひ、あたりを窺ふ。藏之進、國景に、グツと止めをさす。この見得、チヨンチヨンにて返し

元の道具に戻る。九平次、伊左衛門と夕霧を引きつけてゐる見得。

九平　サア、伊左衛門、三位さまへ夕霧を遣るか。否と吐かすと、うぬが命はないぞ、

伊左　サア、それは。

夕霧　コレ、必らず得心して下さんすな。得心さしやんしたら、わたしや、直ぐに死ぬるぞえ。

九平　エヽ、ほてくろしい世まひ言、さう吐かしや、カウカウ〱。

トいろ〱酷くする所へ、要助、ツカ〱と來て、九平次を取つて投げ、また寄る所をちよいと當て、兩人を圍ふ。

夕霧　危ふい所へ要助さま、よう來て下さんしたなア。

要助　伊左衛門どの、勅使の公卿を藏之進とやらが、刃傷に及び、行くへなく、落ち失せし由。奧庭は、怪しからぬ大騷動。

伊夕　ヤア〳〵。
ト大バタ〳〵にて、手代與八、鉢卷して走り來る。
與八　旦那、一大事でござりまする〳〵。
伊左　與八、搗てゝ加へてなんぢや。
與八　今日お前樣が、萩塚の殿の似せ物となつた事が、代官所へ聞え、家内は元より、掛り屋敷まで、お取上げになりましてござりまする。
伊夕　ヤア〳〵〳〵。
ト大悄り。
與八　まだ京の馬町は、寺領にて、其まゝなれば、爰から直ぐに、落しませいと、番頭十兵衛が指圖でござりまする。
伊左　して、十兵衛は、どうした〳〵。
與八　あなたの代りに、代官所へ參りました。
伊左　すりや、十兵衛は代官所へ。ホイ。
與八　番頭どのゝ身の上が氣遣ひな。樣子を聞いて、直ぐに馬町へ知らせまする。エヽ、情ない事ではあるぞ。
ト云ひ捨て走り入る。伊左衛門、ウロ〳〵して
伊左　藏之進さまといひ
夕霧　お前の身の上といひ

伊左　みな一時になるといふは
夕霧　どうした因果な
伊左　事ぢやぞいなア。
ト兩人泣く。
要助　ヤア、泣いてゐる場所ぢやない。科を犯せし伊左衛門、當地にあつては身の上危ふし。夕霧もろとも片時も早く、京都の隱れ家、馬町へ。
夕霧　でも、それでは親方さんが。
要助　氣遣ひせまい。ソレ、太夫が年季證文。
ト抛つてやる。伊左衛門取つて
夕霧　誠に、これは。
要助　こなたへの返納の金子を以て、身請け致した拙者が寸志。
夕霧　エヽ、段々のお志し。
要助　コレ、それを云ふ間も、道の遲れ。
伊左　お禮は重ねて。太夫、おぢや。
ト伊左衛門、夕霧が手ら引き、向うへ走り入る。九平次、ムックと起き
九平　それやつては。
ト行かうとする。要助、引き戻して、見事に投げ

要助　あの嬉しさうな顔わい。
　ト九平次を取つて押へる。この見得、チョン／＼にて返し。

　一面の板塀、とき所に切り戸、難波屋裏手の體、暮れ六ツの本釣り鐘にて、道具とまる。
　ト橋がゝりより、觀壽院、錦に包みし香爐を持ち出る。臆病口より典膳、玄蕃、頬かむり、尻からげにて出で、兩方、透かし見て寄り
典玄　舟。
觀壽　渡。
玄蕃　兼ねての手筈。
觀壽　先達て出雲さまに頼まれ、盗み取つたる千鳥の香爐、ぼくが割れての高ぶけり。今宵は住吉で受取らうとのお知らせゆゑ、持參いたしました。
玄蕃　よし／＼。出雲どのの御入來に程もあるまい。
觀壽　サア、それまでは、どうぞ小蔭で。
典膳　大切な香爐、大事にしやれ。
　ト此うち、國平、求馬、兩方よりこれを聞いて惘り、そろ／＼探り寄つて
國平　香爐の盗賊。
求馬　寶を渡せ。
　ト雙方より、手をかける。三人惘り
觀壽　ズキが廻つた。
典膳　合點ぢや。
　ト觀壽院、振り放さうとする。奪ひ合ひの立廻り、皆キッと見て、庭神樂の合ひ方になる。觀壽院・典膳に渡す。典膳取つて駈け出さうとする。求馬とめる。立廻りのうち、香爐を取落す。この途端に、錦の袱紗離れる。これをキッカケに、空に千鳥、數多群がり、香爐を慕ひ、方々にて千鳥笛、隨分賑はしくあり。右のうちに九平次、切り戸より窺ひ出で、千鳥の聲に惘りして、右立廻りの中へ分け入り、皆々キッとなつて庭神樂やむと、千鳥頻りに鳴く。
六人　ハテ、不思議や。
觀壽　そも、秋塚の重寶、千鳥の香爐といふは、銅雀臺の黄金を以て、
　ト此うち玄蕃・香爐を持つて逃げようとするを、國平とめて
國平　周の成王の命を蒙り、理忠賢といへる金工・心を凝

らして鑄立てし寶。

求馬　さるに依つて名器の威徳、數多の千鳥、群がり鳴く。

卜この時、香爐は國平、錦は九平次取上げ、互ひに行きあふ途端に、香爐の上へ袱紗を覆ふ。千鳥シヤンと留まる、直ぐに双方へサツと別れる。また千鳥笛、頻りに鳴く。

國平　蜀紅の錦を以てこれを覆へば、鳴く音とまる稀代の重寶。

觀壽　いま、目前に千鳥の鳴く音。

九平　闇はあやなし其うちに

玄蕃　多くの千鳥

典膳　群れ遊ぶは

求馬　寶の威徳に

觀壽　錦の奇瑞か。

國平　奪ひし曲者。

求馬　寶を渡せ。

卜この臺詞、一つ〳〵立廻り、揉み合ひのうち、卜ど觀壽院、香爐を持つて逃げ出す。九平次、錦を持つて逃げ出す。國平、求馬、典膳、玄蕃も一緒に走り入る。千鳥この香爐を慕うて、橋がゝりへ入る。チヨンチヨンにて返し

三文字屋店先、夜の景色、講中の提灯、數多火をともし、仲居おまつ、おとく、仕出しを呼んでゐる、參詣の仕出し大勢、竹馬さらへ、ごろ〳〵煎餅など見合せに、捨ぜりふいろ〳〵あつて、別れ入る。バタバタにて夕霧、おきさ、傾城皆々逃げて出で

夕霧　おきさどの、今の侍ひづらが、爰まで追ひかけて來はせんかいなア。

きさ　そりや、知れません。滅多に油斷はならぬわいなア。

卜ばた〳〵にて、おたか走り出で

たか　申し〳〵、おきささん、最前の侍ひが、夕霧さんを引ツ立て行くと云うて、大勢連れで、爰へ探しに來るぞえ。

住の　おきささん。

皆々　どうせうぞいなア〳〵、

きさ　どうと云うて隠れる間はなし、よい〳〵、わしがよい思案がある。コレ〳〵仲居衆、お前方の前垂れと、手拭を貸して下さんせ。

まつ　アイ〳〵、合點でござんす。

ト人數だけ、前垂れ、手拭を持ち出づる。
きさ　サア〳〵、皆前垂れをして、手拭をかぶらしやんせ
いなア。
皆々　合點でござんすわいなア。
ト臆病口にて
瀬昔　どこへうせた〳〵。
たか　アレ〳〵、もう爰へ來をるわいなア。
きさ　サア皆さん、ちやつと〳〵
ト銘い〳〵慌てゝ仲居の形を拵らへる。おきさ、おま
つおとくに囁く、此うちに、丹波、外記、主膳、臆病
口より出でゝ
外記　ヤイ〳〵女、もしこの道へ、新町の傾城は參らなん
だか。
とく　女中さん方は、たつた今、天下茶屋の方へ
丹波　逃げて行き居つたか。
とく　息を切つて、走つてござんしたわいなア。
主膳　足の早い女郎ども。追ひかけませう。
皆々　ござれ。
ト皆々、向うへ走り、花道の中程まで行く時分
夕住　まんまと、首尾よう。

きさ　コレ。
ト住の江を、夕霧の方へ引き返し
ようおいな　お茶あがつておいな。
トチョン〳〵にて　返し　始終庭神樂なり
右の見得にて、引き道具、一面の松原、奧深に石燈
籠に灯をともし、見得よく引き出す。道具とまる。
トはた〳〵にて、臆病口より、觀壽院、右の錦の裂れ
を持ち、走り出づる。橋がゝりより九平次、香爐を持
ち、走り出て、この時千鳥、これを慕うて、求馬來る。
千鳥の笛、頻りに鳴く。双方行き當り、透かし見て
九平　觀壽院か。
觀壽　九平次さま。して、香爐は。
九平　爰に持つては居るが、アレ〳〵、あの通りに千鳥が
鳴いて亂騷ぎぢや。
觀壽　出雲さまの兼ねてのお指圖、千鳥群れ立つ鳴戸の沖
中。
九平　すりや、本國阿波の鳴門へ。
觀壽　愚僧は直ぐに神前へ。
九平　然らば、身共は。

觀壽　早くござれ。

九平　合點ぢや。

ト行かうとする。國平、求馬、おなみ、走り出で、また奪ひ合ひの模樣、いろ〳〵ある。九平次、香爐を持ち、向うへ逃げて入る。千鳥これを慕うて花道、戸屋の上へ入る。觀壽院は臆病口へ逃げて入る。此うち、おなみの手に錦渡る。おなみ、キッとなつて

なみ　詮議の種のこの一品、さうぢや。

ト凛々しく向うへ走り入る。內にて

呼び　勅使の還御。

ト音樂になり、臆病口より、仕丁二人靜かに出づると、布衣の侍ひ二人、金棒曳く。次に隨神の子役二人、舍人の子役二人、馬の口を取つて、藍總、本飾りの馬に、花英丸を乘せ、傘持ち、沓持ち仕丁附き、後押へ早川帶刀、長上下を括り上げ、侍ひ、傘持ち、草履取り附添ひ出る。この人數、靜かに花道へ行きかゝる。よき程に橋がゝりより出雲、忍び裝束にて種ケ島を持ち、花英丸を覘ふ。よき所にて、雨車。

帶刀　思ひもよらざる野路の春雨、雨具々々。

皆々　ハア、。

ト長柄をさしかける。靜かに向うへ入る。出雲、この所にて鐵砲の火繩消した心にて、ツカ〳〵と前へ出て向うをキッと見入る。音樂やんで眞の樂になり、出雲、殘念なといふ思ひ入れあつて、また氣を替へ、石燈籠の灯を消しに行く。靜かに道具引きかける。右石燈籠の蔭より、黑縮緬やうの着付け、羽織、覆面頭巾にてヌッと出る。出雲、惘りのこなし。この忍び、橋がゝりの方へ行き立つてゐる。出雲これを見て、こなしある。忍びは切り幕へツイと入る。出雲、落ちついたる思ひ入れにて、また次の燈籠を消しに行く。右同樣の忍び、松蔭より出る。出雲ギックリとなるこなし。この忍び、靜かに花道へ入る。出雲、これをとつくりと見屆け、また燈籠の灯を消しに行く。左右より、同じ忍び二人出て、出雲と摺れ違ひの模樣ありて、橋がゝりと、臆病口へと別れ入る。この間、始終神樂、靜かに引き道具になり、爰に觀壽院、奉納の狛狗に小柄を打ち込んでゐる。忍び、花道の戸屋より引返し、花道中程に立つてゐる。觀壽院、打ち終つて、前へ出て

觀壽　まんまと首尾よう。

ト出雲押へて、小判の包みを抛つてやる。觀壽院取つ

て
忝ない。
ト出雲、行けと顔にてする。觀壽院、向うへ走り入る。この時、花道にて、忍びと摺れちがひあつて、觀壽院向うへ走り入る。忍び、これを附けて入る。出雲、行かうとする所へ、臆病口よりも、橋がゝりよりも、以前の忍び三人出て、うなづき合ひ、向うへ次第に入る。出雲、とつくりと見屆け、思ひ入れあつて、ツイと向うへ入る。ト本社の内より、鳴戸之助、忍び同樣の形にて、龕燈を持ち、ツカ〳〵と前へ出で、片手に龕燈を振り上げ、頭巾を割れる、チョンと頭入れる。キツと向うを見る。よろしく、こなしあつて

よろしく幕

二　段　目

萩塚館の場
阿波の鳴戸の場

役名――野口藏之進。濱田出雲 實ハ桑名太郎左衞門。濱田織部實ハ小坂部彌三郎信久。主水娘、木幡。三谷島九平次。白山太郎。深山熊藏。蝶鳥軍吾。早房小彌太。猿猴木二郎。福芝左衞門。岩成主税。山伏、觀壽院。奴、國平。奧方、千鳥の前。萬治郎妻、眞覺の前。海女、お浪。娘、幾代。船頭、栂利甚五郎。蒲田玄蕃。大野典膳。萩塚鳴戸之助。

造り物、上の方、土手、正面より橋がゝりまで並み松、すべて本國大手先の體、御入府にて、眞中に乘り物を立てる。左右、行列の人數、見事に並ぶ。乘り物の左右に主税、九平次、十平、甚藏、衣裳、上下にて扣へる。下座に、袴、羽織の町人、大勢うづくまりゐる。窓の黑蓋下ろし、大篝を左右二ヶ所に焚き、七ツの時太鼓にて幕ひらく。ト所知入りがすめてある。

主税　殿には、去年より久々都の御在番。今朝御入部とござつて、一家中の者ども、お出迎ひの爲、伺候仕つてございます。

九平　殿樣へ申し上げます。お下の町人ども、御入部の御祝儀を申し上げんと、あれに扣へ居りまする。お目見得仰せつけられませう。

十平　ト乘り物の内より、殿、片手を出し、會釋の體。町人ども、殿にも御喜悦の體、有り難う存じませい。

町皆　ハア、。

主税　お乘り物は、直さま御門内へ。

甚藏　お先。

ト行列大勢

行大　ハア、。

ト所知入りキッパリとなつて、行列の人數、宿入りの見得にて、大手の方へ殘らず入る。九平次、十平、甚藏、續いて入る。

主税　町人ども、休息いたせ。

町皆　有り難う存じまする。

ト内にて……この御殿は、めでたい御殿よと囃し物になり、主税、臆病口へ入る。町人殘らず、橋がゝりへ入る。返し

造り物、見付け屋體、向う塗り骨障子。左右、落ち間、後寄せて網代塀。上の舞臺先に捨井戸あり。二重舞臺、上手に炬燵、結構なる蒲團を掛けあり、右の隅に、枕時計、左右に銀燭臺を灯し、鳴戸之助居間の心。右の唄にて、臆病口より、振り袖屋敷娘の形にて、腰元木幡、松野、小藤、小百合、桔梗、野菊、みどり、宮城、關屋、初瀨、龍田、卯の葉、吉野出る。橋がゝりより、十平、甚藏出て

十平　殿樣の御入府。

甚藏　奥方へ、お取次ぎなされい。

木幡　御嘉例の通り

女皆　御入府を祝ひませう。

ト立ちかゝり、十平と甚藏を、大勢にて、胴に上げる。始終右の唄……この殿は、めでたい殿よ、めでたく〱の若松さまよと、囃子に合はせて、兩人を打ちつける。

十甚　アイタ、、、。おめでたう存じまする。

ト一禮して臆病口へ入る。橋がゝりより、二人、乘り物を手舁きにして、主税附いて出る。

主税　殿樣のお入りでござるぞ。

女皆　サア〱、主税さまぢや。

ト主税を胴に上げる。始終、右の唄になり、いろ〱あつて

吉野　これから、御前をお祝ひ申さうわいなア。

ト乘り物へかゝる。主税立ちふさがり

主税　これサ〳〵、御祝儀は身共で濟んだ。殿は宥して遣はされい。
卯の　イエ〳〵、殿樣でも、どなたでも
關屋　御嘉例は缺かされませぬ。
みど　乘り物からお出ましを召さぬが憎いわいなア。
女皆　さうぢやわいなア。
　ト主税、止めるを引きかけて、皆々寄つて、乘り物の戸を明けると、内より茶坊主頓齋、頭に付け髮をして、衣裳、上下、大小にて出る。
女皆　ヤア、。
　ト驚ろく。
頓齋　なんと、鳴戸之助さまの正體を見たか。殿は御歸國の道中から、どこへやら拔けそをなされ、御入府の御名代役、本名は茶道の頓齋、正體は斯くの通り。
　ト付け髮を取る。
桔梗　そんなら、矢ッ張り殿樣も同然。
皆々　お祝ひ申しませう。
　ト頓齋を胴に上げる。この間に、主税逃げて入る。
頓齋　アイタ、、、。痛い名代に逢ひました。
　ト腰を抱へ、逃げて入る。ト橋がゝりより、九平次出づる。
松の　九平次さま、御嘉例でござんす。
　ト立ちかゝらうとする。
九平　ヤイ〳〵、うぬ等、この九平次を胴に上げるか。
　ト睨めつけ廻すこなし
無禮ひろぐと、女郎とは云はさぬ。ぶち放すぞ。
　ト反り打つて云ふ。
野菊　オヽ怖。障らぬ神に祟りなしぢや。
皆々　お通り下されませいなア。
九平　通らいでならうか。罷り通る。
　ト濟ました體にて、行かうとする。やり過ごして、皆皆、立ちかゝり、胴にあげる。右の唄、せりふの間は、かすめて、拍子よくあるべし。
皆々　おめでたう存じまする。
九平　でも、むごい目に逢はせをつた。この返報は、寢床に忍んで行て、一々念佛講にする。うぬら、待つてゐをれ。
　ト腰を抱へ、臆病口へ入る。
木幡　これで御祝儀は濟んだわいなア。
關屋　御前へ行て、續松でも取らう。

皆々　サア〳〵、行かしやんせいなア。

ト皆々隠病口へ入る。これにて大囃子やむと、これより忍び三重になる。ト前なる捨井戸より、深山熊藏、百日鬘、龕燈を提げ、灯を差出し、上を窺ふこなしあつて、片手に金作りの兜を持つて、ヌツと出る。と續いて、向山太郎、同じく盗賊の拵らへ、鰐口を抱へ出る。蝶鳥軍吾、刀五腰を持ち、早房小彌太、鐵砲、六丁を抱え、猿猴木二郎、馬鞍を持つて、右五人、各々盗賊の拵らへ、大だらをさし、皆々出て、あたりを窺ひ、右の道具を眞中に積み置き、木二郎、小彌太、左右の燭臺の灯を消し、軍吾、炬燵蒲團を捲ると、太郎、櫓を片脇へ寄せると、熊藏、炭櫃をあげ、五人とも片脇へ寄ると、右炬燵の下より、鳴戸之助、廣袖の小袖に、丸括けの帶、金糸のほくそ頭巾、大だらを差し、小さき挾み箱に、金糸の厚綿をかけしを、小脇に持ちヌツと出る。手下皆々、橋がゝりへ行て

皆々　お頭。

ト鳴門之助、額にて押へる。忍び三重やんで、常の合ひ方になる。鳴戸之助、座敷の眞中に坐り、結構なる太煙管、胴亂にて、煙草のむこなし、皆々下に、胡坐を掻いて坐る。

鳴戸　皆の者、今夜の仕事は。

熊藏　アイ、おれが働らいて來たは、金作りの兜一つ。

太郎　おれが仕事は、この鰐口。

軍吾　腰の物五腰。

小彌　鐵砲六挺。

木二　唐鞍一つ。

熊藏　仲間の者が、今夜の仕事

太郎　お頭。

五人　まぶでごんせうがの。

鳴戸　オヽ、皆々、一かどの働らきであつた。大儀〳〵。

ト挾み箱より、手帳を出して、一つ〳〵帳につけるこなし。

熊藏　なんと、こちのお頭が慰みに、盗人をするといふは

太郎　やちた思ひつきではないかいの。

軍吾　さいやい。頭の云ひつけで、金銀に目を掛けず、珍らしい器物の類、何によらず働らけとの事。

力彌　もくが割れても、首の落ちる氣遣ひはないぢや。御免の盗人ぢやと思へば、こんな面白い事はない。

木二　疊の上で臨終すると思へば、これが一つが殘念ぢや。

根本「百千鳥鳴門白浪」挿絵

鳴戸之助居間の場

熊藏　榮耀な事、吐かすわい。お頭の手並では、大名の館でであらうが、お公卿さまの寢間であらうが、欲しいものは、なん時でも自由自在。
太郎　サア、そこで濡れ手で粟を掴むといふ心持ちで、粟の十郎兵衞と、仲間の中でお頭の異名。
軍吾　それとも知らず、外をえらう探すげな。
小彌　なんぼ親玉の威光でも、盜人と云や、世間が狹い。
木二　ずきの廻らぬやうに。
熊藏　お頭
五人　油斷さんすなや。
　ト此うち、鳴戸之助、手帳を付けならべ、器物に氣をつける事あつて、また挾み箱より金包みを大分出し、これにも書付けをする事あつて
鳴戸　ハテ、氣遣ひはない。
　ト金包みを拋る。皆々、取上げ見て
五人　この書付けは。
鳴戸　今宵の符牒ぢや。
　ト皆々うなづき
五人　合點でごんす。
鳴戸　夜の明けるに間もあるまい。その品々を、いつもの所へ。
五人　はかしませうか。
鳴戸　行け〳〵。
五人　心得ました。
　ト五人、右の品々を持つて、元の井戸へ入る。ト明け六ツの目覺ましの時計鳴ると、奥より、千鳥の前、衣裳、裲襠にて、奥方の拵らへ。寢覺の前、衣裳、裲襠、後家の拵らへにて、兩人、鳴戸之助が左右へ手をつく。
千鳥　御前。
寢覺　鳴戸之助さま。
鳴戸　奥千鳥の前、寢覺の前、二人とも、堅固で重疊々々。
千鳥　御前にも、御機嫌よく御入府。
寢覺　道中のお疲れもなささうで
兩人　お嬉しう存じまする。
　ト向うより
呼び　御上使。
　ト云ふ。
千鳥　ハテ、心得ぬ。先觸れもなき俄かの御上使。
寢覺　氣遣はしい事ではあるまいか。
　ト兩人、鳴戸之助が顏を見る。鳴戸之助、こなしあつ

て

鳴戸　禮服持ちやれ。

兩人　ハア。

ト千鳥の前、寢覺の前と顏見合せ、心ならぬこなし。奥より小姓、廣蓋に小袖、上下載せしを持ち出る。鳴戸之助、衣裳を脱ぐ。千鳥、寢覺、左右より下着、小袖、長上下を着せる。いろ〳〵あつて、千鳥、小刀を差出す。寢覺、扇子を差出す。鳴戸之助、衣紋を繕ろひ、立派な見得になる。ト太鼓謠ひになり、この中へ、返しの拍子木を、チョン〳〵と打ち込み、三人右の見得にて、道具廻ると、右の道具に構はず、向うより、福芝左衛門、衣裳、長上下、管領の拵らへにて口明けの狛狗を小脇に抱へ出る。大勢、附添ひ出る。道具廻ろ。

一面の二重舞臺。見付け大瓦燈口、左右金襖、大廣間の體。上の庭先へ、柳の木を出だす。二重舞臺に、濱田出雲、衣裳、上下、大小、家老の拵らへ。濱田織部、衣裳、上下。九平次、主税、十平、甚藏、各々立つてゐる。福芝左衛門、花道に立ちとまる。これと一時に、道具納まる。出雲、その外皆々、下へ下りて出迎ふ。太鼓謠ひ、打ち上げる。

出雲　御上使には、御苦勞千萬、イザ先づこれへ

織部　お通りあられませう。

トまた太鼓謠ひになり、左衛門、上へ通り、床几にかかる。ト鳴門之助出て、眞中へ坐る。小姓、附添ひ出る。出雲、平舞臺の上、次に九平次、この後に近習、橋がゝりに、織部、主税、十平、甚藏、各々座定まる。

ト太鼓謠ひ打ち上げる。

鳴戸　何人かと存ずれば、京都の執權、福芝左衛門どの。

左衛　鳴戸之助どの、貴殿にも今朝御歸國との儀、先づは重疊々々。

出雲　當萩塚と福芝家とは、代々御家門の家筋、殿の御跡國に相續ぎ、先觸れもなき火急の御上使。

鳴戸　畏れながら、嚴命の趣き

皆々　承知仕りたう存じまする。

左衛　内縁は格別、今日は表向きの儀でござれば、鳴戸之助どの、上座御免下されい。

ト會釋して、威儀を改め

御上意。

鳴戸　ハツ〳〵。

ト平伏する。

左衛　萩塚鳴戸之助へ、久吉公より三ヶ條の御不審、返答いたされてよからう。

鳴戸　何事かは存せねども、申し開き仕るでござらう。

左衛　この度、帝の綸命に依つて、千鳥の香爐を差上ぐべきのところ、住吉の神職にて、武家傳奏内見の折柄、似せ物を以て傳奏を欺むき、剩へ藤屋伊左衛門といふ町家の者を、御邊の弟、萬治郎と僞はり、附添ひありし野口藏之進、短慮に依つて、石原三位どのを刃傷に及びし段當家へかゝる御不審の第一ヶ條。

鳴戸　某在番の砌り、國元に於て香爐紛失、藏之進が計らひにて、三位どのを相頼み、内見を濟ませしは、彼れが即智。不日に香爐詮議仕出し、禁庭へ差上ぐるでござらう。

出雲　御舍弟、萬治郎どのには、國遠を遊ばされ、お召しとあるに力及ばず、町人を以て萬治郎さまと名乘らせしは、上を騙かす藏之進が越度、禁庭への申し譯、何ともハヤ。

トこなし。

九平　サア、そこがあるゆゑ今に於て、歸國召されぬ藏之進どの、家來の越度は主人の越度、この申し譯はござりますまい。

織部　憚りながら、藏之進どのはお家の譜代、かゝる騷動を仕出さう筈もござらぬ。これには仔細もござりませう。何分藏之進どの、歸國あらば事明白に、相解りますでござりませう。

主税　織部どのゝ御意の通り、三位どのは、公卿に似合はぬ放蕩人と承はる。さすれば如何やうの無體を云ひかけ、刃傷に及びしも知れますまい。

十平　日頃愼み深き藏之進どの、短慮ばかりとも申されますまい。

甚藏　ナニサマ、歸國の上、藏之進どのゝ

主税　暫時の返答。

ト主税、十平、甚藏の三人

三人　御容赦を願ひ奉ります。

左衛　この節、盜賊の類、爰かしこにはびこり、町家は元より、隣國大名の館まで、濫りに入込みて亂暴なす。彼の族が頭たるもの、阿波の十郎兵衛と呼び、當國に隱れ住む由。名はあつて形を見ず、この吟味行き届かざるは、

國の政道鈍きに似たり。これ第三ヶ條の御不審。
鳴戸　抑々應仁以來より、四海未だ一統ならず、國に盜賊、家に鼠あり。かゝる時節に安座してゐるがゆゑ、盜賊入込み、寢首をも搔かるゝは、心掛けなきうろたへ者。それとても、彼の十郎兵衞とやらんをお召しとござれば、何時でも召捕つて差上げませう。
左衞　第三ヶ條のお科、これこそ武將久吉公より、住吉明神へ寄附の狛狗、小柄を以て身體へ打込みしは、疑ひもなき武將調伏、即ち小柄は浪の平行安、先達て久吉公より御邊の拜領、さすれば調伏の願主は萩塚鳴戸之助と評議一決、この申し譯は如何でござる。
鳴戸　諸侯滿座の席に於て、拜領の小柄、これを以て調伏いたさば、我が身の上を訴人も同然、某を罪に取つて落さんと、かゝる非道を構へし族。
ト出雲を尻目にかけ
ハヽヽヽ、ハテ、淺はかな奴。斯樣の族を詮議し、こと〲く申し開き仕るでござらう。左衞門どのには、先づ〲御安座
左衞　然らば、左やう仕らう。
トこの時、坐る。小姓、左衞門が側へ、煙草盆を持ち行く。
外ならぬ家門の大事、申し譯の手筋もござらば、共々對談仕るでござらう。
鳴戸　御懇切、忝なう存じまする。
左衞　さて申さうな、武將久吉公より御內意の趣き。その仔細と申すは、彼の先年亡びましたる小坂部刑部太夫が家に傳はる雌雄の二振り、雄龍丸は亂軍の中に在所を失ひ、雌龍丸の劍は、討死の枕に殘る。御親父將監どの、討手の軍功により、千鳥の香爐に彼の一振りを相添へ、下し置かれし、當家の眉目。斯く盜賊のはびこる時節。右の一振り、內見して、立歸れと武將の御內意。鳴戸之助どの、雌龍丸を內見いたさうかな。
鳴戸　成る程、雌龍丸の儀は、深く寶藏に籠めおき、鍵預かりは寢覺の前。ナニ、織部、寢覺に申しつけて、寶藏を開かせ、御劍を持參いたせ。
織部　畏まつてござります。
ト行かうとする。
出雲　悴、待て。寶藏を吟味に及ばす。雌龍丸は紛失いたした。
鳴戸　なんと。

ト これにて皆々驚ろく。左衛門は煙草のんでゐる。

織部　親人、雌龍丸紛失とは心得ぬお詞、仔細は如何、なんとでござる。

出雲　殿御在京のうち、蟲干しに依つて、寢覺どのと立合ひ、寶藏を開き見れば、劍は紛失。千鳥の香爐も在所知れざる折といひ、密かに詮議いたすところに、今に於て手がゝりとてもござりませぬ。

鳴戸　すりや、某が在京の砌り。

ト思案のこなし。

九平　ハヽヽヽ。二品の紛失、盗賊を捕へて見れば我が子の譬へ。當家新參、成り上がり者といふやうな和郎が、花代の算用ナ。大概、見え透いた事でござる。

ト織部へ當てゝ云ふ。織部こなしあつて

織部　九平次どの、ちよと御意得ませう。

九平　身共に。

織部　如何にも。

ト九平次、向うへ出て

九平　なんでござる。

織部　九平次どの、これに並みゐるは、いづれも御譜代。五年以前、當家へ有りつきし拙者親子、二品の紛失、傾城狂ひになくせしなどと、耳こすりの當て言、濱田織部、ちと聞き惡うござる。

九平　イヤ、拙者、耳こすりに申さぬ。殿御在京の御迎ひと云ひ立て、大坂滯留の間、新町の廓へ通ひ詰め、夕霧といふ傾城に性根を拔かしたおてまへぢやによつて、切なさの餘り、大それた盗み根性が出まいとも申されぬ。

織部　默り召され。夕霧に心をかけしは當座のわざくれ。色に迷うて武道を忘るゝ織部ではござらぬ。

九平　さほど潔白なおてまへが、傾城にほだしを打つて、なぜ指を切つた。

織部　イヤサ、その儀は。

九平　證據はこの指。

ト織部へかゝる。隱さうとするを、立廻り、織部が片腕を取る。

なんと、武士たる者が、傾城に指切つてやつても、放埒ではござるまいか。

ト皆々に指を見せる。織部、面目なきこなし。出雲ツツと出で、九平次を突きのけ、織部を背打ちにする。織部、赤面のこなし。

出雲　不所存な奴の子を、見ること父にしかずとすべく、

殿の御用にも立つべき奴と、武藝は元より、和漢の兵書に眼を曝させ、親にまさりし立身させんずものと、心を碎く親の慈悲。心を辨まへ知らぬ身持ち放埒。御上使といひ、主人の面前、その身ばかりか、親にまで、恥辱をあたへし不所存な者めが。

ト織部、こなしあつて

織部　親人のお呵り、返す詞はござりませぬ。忠義の道も孝行も、よつくこの身に辨まへながら、大坂滯留の其うちに、フト夕霧が揚屋入りを、見初めたが因果の始め。思ひ切らうと思ふ程、忘れられぬ心の煩惱。殊に彼れはお館へ出入りの掛屋、藤屋伊左衞門が相方。町人との買ひ論に、侍ひのあるまじき、指を切つて見せたは、この世からなる畜生道。例へこの場でお手討ちに會ふとも、思ひ込んだら初一念、夕霧が事は、えゝ、思ひ切りませぬ。親人、お腹が癒ずば、サア、お手討ちに遊ばされませ。

ト覺悟の體。出雲、拔身を持ちながら、猶豫のこなし

九平　出雲どの、おやま狂ひに性根を拔かした織部どの、ぶち放して〳〵まはつしやれ。エヽ、手ぬるい。ドレ、拙者がぶち放さう。

ト立ちかゝらうとする。

鳴戸　ヤイ〳〵、九平次待て。出雲も扣へてよからう。

出雲　ハツ。

トこなしあつて、拔身を納め、元の坐へ座る。

鳴戸　放埒は若氣の一旦、さのみ咎むるにも及ばぬ。武威たくましき武夫も、一度は迷ふ廓里の花。左衞門どのにも大目に見て遣はされ。織部、以來を嗜なんでよからう。この度は呵り置くぞよ。

主税　織部どの、殿の御懇情

十吉　有り難くお請け

三人　致されてよからう。

織部　冥加なき主人の御慈愛、有り難う存じまする。

左衞　とかう申すうち、時刻も延引、一家の內證。

トこなしあつて、床几にかゝる。

鳴戸之助どの、三ケ條の御返答は、如何でござるな。

鳴戸　聊か申し譯の手筋もござれば、暫しの御容赦下されたい。

左衞　早速の返答もなりますまい。併し、久吉公より火急の殿命、七ツの出汐に出船いたせば、それまでに、有無の返答いたされてよからう。

鳴戸　すりや、申の刻までに
　トこなしあつて
承知仕つてござります。
織部　御上使には、對客の間へ御越しあつて、饗應の御酒一獻。
左衛　ナニサマ、役目の外は家門の交はり、打解けて萬事の對談。鳴戸之助どの。
鳴戸　左衛門どの。
左衛　後刻。
織部　イザ、お入りあられませう。
　ト序の樂になる。左衛門こなしあつて、近習、狛狗を持ち、出雲、織部、十平、甚藏、主税各々、奥へ入る。鳴戸之助殘り、こなしあつて
鳴戸　國平、參れ。
國平　ハア、。
　ト揚幕より、觀壽院、口明けの坊主にて縄にかゝり、國平、上下、股立ちの形にて、引立て出づる。
先刻の御意に從ひ、囚人を引立て參つてござります。
　ト引据ゑる。觀壽院、キヨロ〳〵する。
鳴戸　ヤイ、坊主め、大社の狛狗に小柄を打ちしは、並々の企みではない。眞直ぐに云へ。どうぢや。
觀壽　イヤ、何も云ふ事はござりませぬ。
國平　しぶとい奴の。これでも吐かさぬか。
　トこじる。
觀壽　アイタ、、、。申します〳〵。ゆるめて下さりませ。
國平　サア、吐かせ。
觀壽　なんとせう。斯うなつたら一生懸命、有やうに申しませう。私しは觀壽院と申しまして、御城下に居ります祈禱坊主でござります、この節、錢儲けは少し、不動や愛染の力では、いけ惜いでござりますぢや。なんぞ外に錢儲けはあるまいかと、ブラ〳〵歩く御城下で、拾ひましたあの小柄、なんでもこれを玉に使うて、大金を儲けんと、いろ〳〵思案して、惡智惠出した山仕事。何も深い企みではござりませぬゆゑ、頼まれた人もござりませねば、同類もなし、ほんの愚僧が鼻の先の智惠、元はといへば錢儲けが致したさ、慾一通りの出來心、外に惡氣はござりませぬ。ハイ〳〵、どうぞ命は、お助けなされて下さりませ。
國平　ヤイ〳〵、御主人の御前に於いて、僞はりを吐かすな。骨をひしいでも云はさにや置かぬ。マア、ざつと水をく

らはしてくれう。
　ト立ちかゝる。
鳴戸　待て／＼。ちと存ずる仔細あれば、強ひて糺し問ふに及ばぬ。其まゝ廣庭へ引据ゑ置け。
國平　畏まつてござりまする。
鳴戸　行け／＼。
國平　ハッ。うせう。
　ト觀濤院を引立て、橋がゝりへ入る。後に鳴戸之助こなしあつて
鳴戸　上使の歸國は、七ッの出汐。ムウ。
　ト思案のこなしあつて、煙草盆を扣へる。序の舞やんで、和らかな合ひ方になる。ト奥より、千鳥の前。七ッばかりの姬の幾代、振り袖に子襠裲、ちよぼりの髮に、水引かけし拵らへにて、手を引き出る。
千鳥　先程より、お次に扣へまして、御上使の樣子、そしりはしりを承はりまして、及はずながら、幾世の案じ。御前には、マア、どうせうと思し召されます。
鳴戸　どうと申したら、三ヶ條の御不審、申し譯いたすわサ。
千鳥　サア、その申し譯を自らも、とも／″＼。

鳴戸　ハテサテ、何を云やるやら、斯樣の儀はお身達が構ふ事ではない。女はたゞ内の事を守るが肝要。ホヽ、娘、久々在京のうち、成人を致したな。サヽ、これへ／＼。
千鳥　それ／＼、父上が召します。おとなしう御挨拶申しあげや。
　ト幾代を鳴戸之助が前へやる、
幾代　父上樣、お久しう存じまする。
鳴戸　これは御挨拶。イヤ、奥方、お育てからでござるわサ。さて、おとなしうなつたナ。アイヤ奥、よく心得たがよい。すべて女子を育つるは、母の心得が第一、教へ導くと申しても、彼の、つれ／″＼、伊勢物語の類は、惡う讀むと、得て徒らの基。女大學或ひは孝經烈女傳など素讀の儀を申し附け置いたが、油斷なく教訓召さるゝであらう。
千鳥　かね／″＼、左やう仰せられまするに依りまして、隨分油斷なく、只今は女大學を素讀させて居りまする。
鳴戸　大學か。ムウ、貝原篤信が作、小兒には至極の讀み物、精出してよく覺えたがよいぞよ。イヤ、奥、御身が同胞とあつて、當家へ召し出せし濱田出雲、新參とは云へど忠臣無二の侍ひ、この度某が歸國の喜びに、千石

の加増を加へ、膝元の武士に取立てうと存ずるわいの。

千鳥　アヽ、イエ〳〵、憚りながら、そりや悪うございりませうと存じまする。

鳴戸　悪からうとは、なぜ〳〵。

千鳥　サア、忠臣無二と思しますが、兄様の底意は

鳴戸　ヤア。

千鳥　イエ〳〵、どう思ひましても、加増は元より、お側近う召されまするは、悪からうと存じまする。功もなくして御知行を貪るは、忠臣の耻づるところ。加増は愚か、今までの知行を減じて、役目もはるか外様の方へ仰せつけられるが御前のお為。イヤ、サア、兄様の為であらうと、自らは存じまする。

鳴戸　ムウ、加増はせずと、まだ知行を減じてくれい。さう致すが予が為、イヤ兄の為とは、ハテ、兄思ひぢやなア。

千鳥　ほんに御前にも、何かとお疲れ。暫らくお休み遊ばされませいなア。

ト鳴戸之助、思ひ入れあつて

鳴戸　ナニサマ、暫らく休息いたさう……これよ。

ト手を叩く。吉野、卯の葉、関屋出て

三人　御用でござりまするか。

鳴戸　あの一間へ床を取れ。

三人　畏まりました。

ト西の一間へ寝床を敷く。此うち、橋がゝりの障子より出雲覗き、千鳥の前へ目くばせする。千鳥の前、今は悪いと仕方をして、鳴戸之助が見はせぬかと、心遣ひあるこなし。三人こちらへ来て

三人　お床をしつらひましてござりまする。

鳴戸　行け〳〵。

三人　畏まりました。

ト入る。鳴戸之助、こなしあつて

鳴戸　奥々、コレサ奥。

千鳥　ハイ

ト仰山な返事する。

鳴戸　ハテ、仰々しい。ハヽヽヽ。なんと、在京の間は、其方も淋しう暮らしたであらうし、予もいから、つれづれにあつて。今宵はちとお部屋へお見舞ひ申さうか。

ト砕けて云ふ。千鳥の前、こなしあつて

千鳥　自らは、ちと御前へ、お願ひがござりまする。

鳴戸　願ひとは、何か〳〵。

千鳥　サア、どうぞ、その御寢所のお伽を、暫らく遠ざかりたう存じまする。

鳴戸　ハテ、變つた事を云ふわいの。寢所の伽を遠ざかりたいとは。

千鳥　サア、久々の御在京のうちには、增す花もござりませうし、お目にとまつた女中でもあらば、お側近う召されまして、自らが事は

　トこなしあつて

モウ〳〵、とんとその氣を離れまして、あの娘を育てたう存じまする。

鳴戸　すりや、娘を養育いたしたさに

千鳥　ハイ

鳴戸　寢所の伽を

千鳥　どうぞ、暫らく

鳴戸　遠ざけてくれいといふ、その本心は

　トこの時、出雲と顏見合せ、バツタリと出雲、障子さす。

　ハテ、ナア。

　トこなし。奥より九平次、長柄の銚子、杯を持ち出で

九平　殿樣、出雲どのが、一獻差上げいとあつて、手づからの調味、一つ召上がられませう。

鳴戸　これは、氣が附いた。先刻よりの鬱氣、一つ飮まうと存じた所ぢや。ドレ〳〵。

　ト杯を取り上げる。千鳥とめて

千鳥　アヽ、申し、この御酒は、上がられませぬわいなア。

鳴戸　何ゆゑ飮まれぬ。

千鳥　サア、兄樣の指圖とあれば、もしや

　トこなしあッ、

イエ〳〵、どうあつても、なりませぬわいなア。

　ト杯を取つて

九平次、マア、其方から、始めたがよいわいなう。

九平　拙者めに、それは有り難い。然らば、手酌にて下さりませう。

鳴戸　身共には飮まさぬか、これは迷惑。

　ト九平次、手酌にて飮む。千鳥、氣を附けろこなし、九平次呑み干し

九平　これは結構な御酒でござる。と云うて拙者が飮んで御主人へもさゝれまい、とさんな取替へて參らう。

　ト銚子、杯を持つて奥へ入る。摺れちがつて頓齋、袱紗に、茶碗を載せ、持ち出でゝ

頓齋　出雲どのゝ手前、一服行上がられませう。

鳴戸　薄茶か、よからう。

ト茶碗を取らうとする。千鳥とめて

千鳥　アヽ申し、憚りながら御前、毒味と申す事もござりますれば、

ト茶碗を取つて、一口呑み、こなしあつて、呑み干し、下に置く。

頓齋　いま一服、立てゝ參らう。

ト茶碗を持つて入る。

鳴戸　ハテ、茶も酒も禁制と見える。ハテ難儀千萬。

ト九平次、菓子盆を持ち出る。

九平　薄茶さうにござる。お口取りを差上げませう。

鳴戸　出雲が指圖で、新製の干菓子でがなあらう。

九平　左やうでござりまする。

鳴戸　こればかりは、許すであらう。

ト取らうとする。千鳥、ちやつと菓子盆を取つて

千鳥　イヤ、お菓子は、此まゝ、娘に下し置かれませう。

ト菓子盆を取り、菓子を紙に包み、幾代にやる。

鳴戸　それも叶はぬか。ホイ

九平　然らば、矢張り御酒の方に致さう。

ト奥へ入る、ト小姓出て

小姓　ハツ。左衞門さまのお尋ねでござりまする。對客の間へお越しあられませう。

鳴戸　ナニサマ、それへ參らう。

ト立ち上がり、千鳥を見て

予を大切に思ふあまり、酒食萬事に心を配り、剰さへ、寢所の側まで遠ざけくれいとは、ハテ、養生には、よい奥様ぢやよなア。

トこなしあつて、小姓附添ひ、奥へ入る、後に千鳥、こなしあつて

千鳥　この身につもる御厚恩、如何に兄様の爲ぢやと云うて

ト東西の奥を見やり、忍び泣きに、泣き入る。

幾代　母様、なんとぞ遊ばしたかえ。

ト千鳥、泣く目を拂ひ。

千鳥　サア、いつもの通り、素讀みをさせませう。奥へおぢや。

ト唄になる。千鳥、幾代を連れ、奥へ入ると序の舞になる。木幡、奥より逃げて出る。九平次追はへ出て、抱きつき

九平　コリヤ、しめたぞ〳〵。
木幡　悪い事をなされまするないなア。
九平　なんの悪い事を致さう。木幡どの、日頃から目顔に知らせど素知らぬ顔、心の丈を云はうにも、物堅い屋敷の内。そこで一日を忍び文、せめて一度は手に觸れて、色よい返事を、これサ、頼むワ〳〵。
ト無理に木幡が懐へ狀を入れ、じなつく。木幡、突きのけて
木幡　エヽ、嫌らしい。左やうな淫らな事は、わたしや嫌でござりますわいなア。
ト文を出して捨てる。
九平　すりや、如何やうに申しても
木幡　しつから仰しやると、御前へ告げまするぞえ。
九平　云はつしやれ。云はつしやると、身共も申すぢや。
木幡　そりや、何をえ。
九平　織部どのゝ事を。
木幡　エ、。
九平　織部どのと譯ある事、よく存じて居る。傾城と云ひ地娘まで、箸早い織部どの、上がり膳でもいとひはない。願ひを叶へてたび給へ。南無木幡大明神。
ト抱きつき、いろ〳〵ある。この時、織部出でゝ、右の文を拾ふ。
木幡　嫌ぢやわいなア。
九平　ハテ、嫌とは云はさぬ。
トいろ〳〵ある。織部、九平次を引きのけ、眞中に立つ。
ヤア、織部どの。
木幡　ほんに織部さま、よい所へ、よう來て下さりましたなア。
織部　九平次どの、其許にお目にかゝらうと存じて、先刻より相尋ね居りました。
九平　拙者に用とは。
織部　放埒の意見にあづかつた、返禮を申さうと存じて。
九平　なんと。
織部　不義一統は屋敷の掟。木幡どのへ不義を仕掛けた
九平　イヤ、その儀は。
織部　證據の艶書。
九平　南無三、それを。
ト取りにかゝる。織部、九平次を取つて投げ、背打ちに打ち据ゑる。九平次、キツとなつて

織部どの、こりや身共を、ぶつたぞよ。
織部　ムウ、ぶつた。ぶち放しても大事ない、
九平　その頭骨を
　ト刀を拔いてかゝる。よろしく押へて
織部　御前へ參つて、不義者の面縛せうか。
九平　サその儀は。
織部　なんとでござる。
　ト突き放す。
九平　誤まり入りました。
織部　以後をキッと嗜なみ召され。
　ト狀を拋る。九平次、ちやつと取つて、懷へ入れ
九平　ア、嬉しや、織部どの、後刻お目にかゝりませう。
　ト木幡、こなし、織部を見て、九平次ツイと奧へ入る。
織部、下にゐて、寶の失ひしは親の業と、手を組み、
思案のこなし。木幡、はるか脇の方にゐて
木幡　申し織部さま、法度きびしいお屋敷の、人目を包む
憂き戀路、腰元衆の仲人で、文玉章の數々も、つひに一
度のいらへもなう。この身ばかりの片思ひ、ちつとは不
便と思ひやつて下さりませいなア
　ト顏を外けながら、恥かしさうに云ふ、

織部　コレ／＼、木幡どの、御上使の御入りと云ひ、この
場に用はない。奧へござれ。
木幡　それでも。
織部　ハテサテ、ござれと云ふに。
　トきつと云ふ。
木幡　アイ。
　ト是非なく奧へ入る。織部、こなしあつて
織部　今日につゞまるお家の滅亡。ハテ、なんとしたもの
であらう。
　ト手を組み、また思案する。トこの時、奧より左衛門
出て
左衛　濱田織部。
織部　御上使樣。
　ト序の舞やんで、合ひ方。
左衛　賢を賢として色を替へよ。遊里に迷ふ放埒には引き
かへ、主君の爲に粉骨碎身、若輩の神妙、出かす／＼。
織部　ハッ、御懇切の御意、御相伴と申すにもあらねど、
莫大の御恩澤を蒙むれば、命を前に拋ち、一心曇りな
き織部が胸中、憚かりながら御推察下されい。
左衛　ムウ、さぞあらん。併し、その眼の德たる事・泰山

の大いなるを見ると雖も、我が睫毛には見えまいがな。

織部　なんと御意なされまする。

ト左衛門、扇を取つて

左衛　コレ、この扇を見よ。これを以て譬ふれば、地紙と骨は主人と家來、心を一緒に忠臣仁義の要さへゆるまずば、扇の用はなすといふもの。その家來の骨の中にも、これ親骨あり、子骨あり、この扇も、まツこの通りに不忠の親骨。

ト親骨一本折つて、織部が前へ抛る、

それを以て、忠孝全き工夫を致せ。

ト織部、扇を見て

織部　子骨に疵はなけれども、親骨が折れたれば、扇の用は達せぬ道理。

左衛　無理に使へば、主人に譬ふ地紙まで、破れ損じ、忠義も孝も相立つまい。

織部　ムウ、すりや、親人を。

左衛　二本目には與市も困る扇かな。妙手を以て要ばかりは射切るとも、親骨は射切られまい。

織部　破れば捨つるこの扇、塵芥と朽ち果つるといふ下され物。

左衛　イヤ、仁義忠臣の要ゆるまず、子骨さへ丈夫なればあながちまた捨てられもせぬその扇、折れたる親骨接ぎ合はすは、添へ竹が一つの功。

織部　親骨も取捨てず、

左衛　地紙の主人も破れぬ工風。

織部　この場の判斷。

左衛　親子主從の別れにならぬやうに、とくと工風を致して見い。

ト唄になり、左衛門、こなしあつて奥へ入る。織部、扇を見詰めて

織部　親骨も接ぎ合はすは、添へ竹が一つの功。添へ竹とは。

トきつと胸に當るこなしあつて

ホイ。

ト唄になる。思ひ入れあつて奥へ入る。向うより、バタバタにて、おなみ、口明の形にて、錦の袱紗を持ち走り出る。奥より鳴戸之助出づる。おなみ、鳴戸之助を見て、氣のゆるむ體にて、ウンと反る。鳴戸之助、下りて、おなみを引き起し、印籠の氣附けを含ませながら、手に持ちし袱紗を見て引取り

鳴戸　こりや、蜀紅の錦、携へ參りしは。

　トおなみの顏を見て

野口が國元、故郷へ歸り、海女の世渡りと聞きしが、何ゆゑ

　トこなしあつて

心を附けよ。女。

　トきつと云ふ。おなみ、氣附き

なみ　ヤア、鳴戸之助さま。

鳴戸　心が附いたか。

　トおなみ、向うを見て

なみ　エヽ、口惜しい。

　ト泣く。

お家の重寶、千鳥の香爐を。

鳴戸　ナニ、千鳥の香爐が、如何いたした。

なみ　夜前、津の國住吉に於きまして、出合ひました香爐の盜賊、奪ひ返さうと致せども、盜賊と思しき相手は大勢。爭ふうちに奪ひ包みし錦を取れば、空に群がる數萬の千鳥、爰へ渡れば、彼所に集まる。逃ぐるも追ふも、目當は飛鳥の啼く音を便り、さゝゆる相手を追ひ拂ふ其うちに、千鳥の啼く音を見失ひ、探し求むる小松原、手に殘りしはソレ、その錦。猶も在所を探らんと、濱邊傳ひに一晝夜、尋ぬれども、行くへは知れず、是非に及ばずこの樣子を、殿樣へ言上せんが爲め、海を潜つて、やうやう只今、馳せ歸りましてござります。

鳴戸　ムウ、名器は名錦を以て覆ひ隱すとばかり知つて、盜ませし曲者、これも大方

　ト奧へこなしあつて

ハテ、殘念な。

　ト思ひ入れあつて、錦を懷中して、二重舞臺へ上がる

　おなみ、あたりを見て

なみ　して、藏之進どのは。

鳴戸　その日の樣子、審かしく存ずるゆゑ、身も藏之進が歸國を相待ち居る。

なみ　その場の騷動、行く先は別れ〲。今に御歸國なされぬは、ハテ心元ない。

　ト向うを見て、案じるこなし。この時、橋がゝりの柴垣を押分けて、藏之進、口明の形にてズッと見て

藏之　イヤ、野口藏之進、疾より歸國。

なみ　ヤア、藏之進さま。

　ト藏之進、おなみに構はず、鳴戸之助が側へ行て

藏之　殿、鳴戸之助さま、今朝都より御上使御入りとの儀、歸國の折柄、御門前で承はり、わざとお次に差扣へ居りましたは、密々に御意得ん爲。して殿命の趣きは。

鳴戸　久吉公より御不審の三ヶ條。第一は、香爐の紛失、住吉神社の館に於て、町人を弟萬治郎と名乘らせ、似せ物を以て傳奏を欺むき、剩さへ石原三位どのに手疵を負はせし段。汝が麁忽は我が誤まりとなりて、久吉公よりお咎めのこれ一つ。

藏之　ムヽ、御上使の演舌なれば、委細申すに及ばず、この場にて切腹、御免下し置かれませう。

ト拔き、切らうとする。おなみこれをとめて

なみ　ヤ、こりや何ゆゑ、御切腹遊ばされますぞいなア。

ト藏之進、鳴戸之助をちやつと見て、泣き

藏之　御家中多きその中にて、忠義の武士と、殿のお目鑑に叶ひ、内意を蒙むるこの度の役目。香爐紛失の詮議の日延を相願ひ、叶はずば切腹と思ひ定めし我が一心、傳手を求めて三位どのに取入り、打明けて頼みしところ、何者にもせよ、國の守に仕立て、形代の香爐を持參いたせよ。それを以て内見を濟ませ、不日に香爐の在所を求め、大内へ獻覽に備へよと懇切の御内意、殿の名代、何者をと存ずるところ、お出入りの藤屋伊左衛門、萬治郎さまに面體の似たるを幸ひ、若殿と僞はり、似せ物を以て御内見は事なく相濟み、その後にて三位どの、我れを招き、伊左衛門に馴染みを重ねし夕霧を、手に入れよとの難題。心易く請合ひ、夕霧に相語れば、流れの身の誠を、サ、實を顯はし、女の不義は侍ひの不忠に等しと、道理を以て斷われば、これを以て力及ばず、三位どのに戀の叶はぬ腹立ちゆゑ、この藏之進へ惡口雜言、お怒りの段、尤もと存ずるゆゑ、手を替へ品を替へ、詫びれども承引なく、香爐紛失を久吉公へ申し達し、萩塚の家を滅亡させんとの我意の振舞ひ、傍若無人。この身ばかりは、しやびしほとなるとても、いとふ心はござらねど、生け置いて讒言させなば、お家滅亡、所詮喧嘩に事を寄せ、討つて捨てなば、相手向ひの遺恨となつて、お家は安穩と、所存を極めてたつた一討ち。その場を去らず切腹とは存じたれど、イヤ／＼、一先づ御主人の御高顏を

ト鳴戸之助が顏を見て、ちよつと泣く。

拜せんと、恥を忍びて歸國いたせし藏之進、申し譯の腹わた、引き出してお目にかけませう。

トまた死なうとする。

なみ　コレ。

　トおなみ、取りついて止める。

鳴戸　いま相果てゝは、預け置いた弟萬治郎が介抱は、何者が致す。

藏之　去春、國遠をなされし萬治郎さま、都にてお出合ひ申し、これなる女が親里に隱し置きしも、主人のお指圖。男まさりに健氣の介抱、よも麁略の儀はござるまい。また拙者めは、三位どのを手にかけし砌りより、覺悟を極めて罷りある。汚名を取つて相果つるも、お國お家の納まりを存ずるゆゑ。

鳴戸　イヤ、その思案、若い〳〵。いま相果てる命を長らへ、越度を償ふ忠義を立てい。

藏之　忠義を立ていとは。

鳴戸　千鳥の香爐、紛失の上、又ぞろや、雌龍丸の一振りも、紛失いたしたわやい。

藏之　ナニ、雌龍丸も紛失とな。

鳴戸　この詮議を致しなば、汝が忠義になりさうなものぢやぞよ。

藏之　イヤサア、忠義を立てようと存ずれば、主人の身の上。差あたる御上使への申し譯だ。

鳴戸　公卿を殺めし藏之進、國遠と申し立て、二品詮議の日延べの願ひは、某が胸にある。

　ト藏之進こなしあつて

藏之　數ならぬ藏之進を、さほどまでに

鳴戸　命は萬寶の隨一、死ぬるばかりを忠臣とは云はぬぞよ。

藏之　ハツ。

　トこなしあつて

　この上は御意に從ひ、一先づ館を、立退くでござらう。

なみ　わたしが故郷、室の津へお供申して、緣につながる漁師の世渡り。わたしも一緒に

鳴戸　イヤ、其方は後に殘り、申し付くべき役目もあらう。

藏之　然らば拙者は。

鳴戸　劍の詮議

藏之　草を分つて。

鳴戸　隨分堅固で

藏之　暫しのお暇。

鳴戸　行きやれ。

藏之　おさらば。

　ト唄になる。ツイと向うへ走り入る。

なみ　して、私しは。
鳴戸　後刻呼び出さう。次へ。
なみ　ハア。
　ト橋がゝりへツイと走り入る。
鳴戸　ハテ、苦勞をしをるなア。
　トこなし。琴入りの、なまめいたる合ひ方になる。庭の柳、燕二つ出て遊ぶ。東の障子あけ、寢覺の前、これを見て、懐紙に發句書く。
寢覺　今日は今日の風に隨ふ柳かな。
　ト吟じてゐる。鳴戸之助、これを聞いて
鳴戸　さういふは、寢覺ではないか。これへ來やれ〳〵。
寢覺　鳴戸之助さま。
　ト障子を明け、側へ來る。
鳴戸　先刻から尋ねて居つた所ぢや。承はれば、何か優しい口ずさみ。
寢覺　サア、青柳を我がもの顔に燕の番ひに、思はず見惚れまして。
　トこなしあつて
お恥かしう存じまする。
　ト俯向く。

鳴戸　ア、いかさまなア。父母のいつくしみ深く、深閨の内に人となる。色念の發する頃、その身一生を任す夫定まり、輿入れの日を、いつか〳〵と待つうちは、一刻千歳の思ひ、やうやく祝言の壽も相濟み、新枕の定め事、千代ぞと契る嬉しさに引きかへ、國遠せし弟萬治郎。燕の睦まじく遊ぶを見て、妬ましげなるは婦人の情、斯うありさうな事ぢや。
　ト寢覺、こなしあつて
寢覺　先程の御上使、御用の筋は、氣遣ひな事でござりませぬかえ。
鳴戸　イヤ〳〵、何も氣遣ひな事ではない。上使は此方の家門、久吉公より勳功に依つて、下し賜はりし躡龍丸の劒、御内見とあつて
　ト寢覺、ギックリ、こなしあつて
寢覺、其方は元、關白道方卿の息女、系圖正しい身なれば、一方ならず存ずるゆゑ、彼の劒を籠めし寶藏の、鍵預かりを申し付けたが、某が在京の留守中は、大切にして所持召さるゝであらうの。
　ト云ひながら、寢覺が顏を見る。寢覺、胸に當るこなしあつて、氣を替へ

寢覺　ハイ、寶藏の鍵は、大切に致しまして。

鳴戸　所持召さるゝか。

寢覺　ハイ。

トこなし。

鳴戸　ハテナア。マヽ、それはそれとして、寢覺、どうぢや、萬治郎に別れてより、班女が閨の淋しさを

ト寢覺、こなしあつて

寢覺　誰れに問ふべき便もなければ

トぢつと俯向く。鳴戸之助、扇にて拍子を取つて

鳴戸　せめて閨洩る月だにも、暫し枕に殘らずして

ト謠ひながら、寢覺が側へ寄る。この時、顏見合せ、双方心意氣あつて、寢覺、袖を覆ふ。鳴戸之助こなしあつて

驪山宮の睦言も、いつしか秋の捨て扇、拾ふ主もあるならば。

ト少し引寄せて云ふ。寢覺、こなしあつて

寢覺　別れし時の悲しさは、露霜とも消ゆる心。それも當座の花心、月日の關に隔たりては。

トこなしあつて、最前の懷紙を差出す。鳴戸之助、取つて見て

鳴戸　今日は今日の風に隨ふ柳かな。ムウ

トこなしあつて

硯。

寢覺　ハイ。

ト硯箱を取つて差出す。鳴戸之助脇を書く。寢覺見て

寢覺　月の心のおく深き春……月の心の

鳴戸　おく深さ心底かは知らねども。

寢覺　イヽエ、今日は今日の風に隨ふ、自らが誤まりを

鳴戸　ハテ、柳々でやるがよい。

寢覺　春風で、オヽ寒。

ト寄り添うて云ふ。鳴戸之助、思ひ入れあつて

鳴戸　イヤ／＼、どうも呑み込まぬ。若後家の淋しさに、じやらりくらり／＼と、深い所へ嵌めて置いて、笑ひ草に致さうと思うて。アノ嘘つきめが。

寢覺　なんのマア自らに、僞はる心はなけれども、あなたが矢ッ張り

鳴戸　ヤア。

寢覺　千鳥さまの事を。

鳴戸　千鳥がどう致した。

寢覺　いとしほがつてござる事は、よう存じて居りますわ

いなア。

鳴戸　これは迷惑。物を思うて見やれ。すべての物に古びのあるを、古雅なりとて賞翫すれど、それは器物の事。姿清げに新らしいがよいでないか。錆の乘つた女の古物は、餘り面白からぬものぢやて。すがりの花より、若木の花を。

トまた寄り添ふ。奥より、千鳥の前出かけ、これを見て、こなしある。

寢覺　それでも千鳥さまが、お聞き遊ばしたら、大抵や、大方。

鳴戸　ハテ、腹を立てうと、打ッちやつて置きやれ。

寢覺　それぢやと申して。

鳴戸　兎や斯う申さば離縁いたす。そこでこそ又、其方を奥様と定むるが、なんと嬉しいか〳〵。

ト抱きしめて云ふ。千鳥、腹立てる。

寢覺　サア、嬉しいやうで又、怖いやうで、どうも心が

鳴戸　ハテ、何も恐るゝ事はない。例へ奥がこの席へ來うと儘よ、サ、予が心に入つたゆゑ、寢所へ召し寄せたと云へばよいではないか。

寢覺　あなたは左やうでござりませうけれど。

鳴戸　これはしたり。未だその味を知らざる生娘も同樣のもてなし、どうしたものぢや。例へ一度でも、萬治郎と共に、悦喜の形を現はしたでないか。それよりは早程たえて一心爰に、たんだくせうと思へば

トこなしあつて

餘り氣もせいを燒かすな。承引ならば、この席を去らず直ぐに〳〵。

ト膝へ觸る。

寢覺　サア、マア、どうなりと致しませうが、お伽を致さぬその先に、お尋ね申したい事もあるし。

鳴戸　何なりとも、寢物語りに仕らう。先づ裲襠も脫いで帶を解いて。

ト裲襠をぬがせ、帶の結びを解かうとする。

寢覺　アレ、誰れやら人が

鳴戸　人が來うが、鬼が來うが、苦しうないのサ。

トいろ〳〵ある。千鳥の前、ズッと出て、二人を引き分け、眞中に立つ。兩人、恟りしてウヂ〳〵する。千鳥、鳴戸之助を睨み、また寢覺へ詰めかけ

千鳥　寢覺さま、御前には自らと云ふ、定まつた妻があるぞえ。それ知りながら今の樣子、徒らが、よう〳〵云

はれた事ぢやわいなア。悋氣嫉妬は姫御前の嗜みとは云ひながら、こればかりは申さにやなりませぬ、そりやモウ、幾代というて七つになる娘はあり、いま咲く花にお目の留まるは、殿様の高下、それを否とは申しませぬが、離緣までせうとは、そりやあんまりお胴慾でござりまする。聞えませぬわいなア。

ト泣いて云ふ。

鳴戸 コレ〳〵奥、それはどういたした事ぢや。御身、先刻なんと申した。寢所の伽を遠ざけてくれいと、申したではないか。

千鳥 エヽ。

鳴戸 エヽとは、今宵にお部屋へ見舞はうと申したれば、伽は免してくれいと、夫たる者に耻辱を與へたではないか。望みの通り遠ざけてやるのぢや。サヽ、退いて居やれ〳〵。

千鳥 ハア。

ト是非なく、後へ寄る。

鳴戸 寢覺、苦しうない。サヽ、これへ來やれ〳〵。

ト寢覺、側へ寄る。

斯う手活けに活けた所は、どうも〳〵。

ト引き寄せ、それなりにもたれかゝる。千鳥、腹を立てる。

千鳥 あんまり見せつけやうぢやわいなア。

ト寄らうとする。

鳴戸 コリヤ〳〵、願ひ通り遠ざけてくれる。ズツと其方へ遠ざかつて居やれ。

千鳥 ハイ〳〵。

ト後へ寄る。

寢覺 千鳥さま、さぞ憎うござりませうが、戀は心の外とやら。

千鳥 アノ、お前までが、眞實。

寢覺 濡れぬ先こそ露をもいとへ。

千鳥 現在、自らが見る前で。

鳴戸 抱いて寢る。

千鳥 エヽ。

ト寄らうとする。

鳴戸 ハテ、遠ざけてくれいでないか。

千鳥 サア、さうは申しましたけれど、これは又あんまり。

鳴戸 兎や角云はゞ、離緣せうか。

トきつと云ふ。

千鳥　エヽ。
鳴戸　其方が望みの通り、娘が養育、素讀の儀を、怠りなきやう、サヽ、行きやれ〳〵。
千鳥　なんの、これが素讀どころかいなア。
トびんとする。
鳴戸　兎角、善い事には寸善尺魔。幸ひ、あれに寢所の用意させてあれば。
寢覺　自らが思ひの丈を。
鳴戸　問ひつ
寢覺　問はれつ
鳴戸　閨の內で。
ト寢覺を一間へ引き入れる。
千鳥　コレ。
ト寄らうとする。鳴戸之助、障子をパッタリさす。
鳴戸　夫婦別あり。
トきつと云ふ。
千鳥　ハア、。
ト泣き、はろか脇へ退いて、しやんと坐り、こなしある。ト一間の內にて
鳴戸　歸國いたして久し振り。

ねざ　自らも久しう。
鳴戸　窮屈な、この帶も解きやれ。
ねざ　オ、嬉し。
ト聲する。千鳥堪えかね、ツカ〳〵と駈け込まうとする。奧より幾代、蒔繪の見臺を持ち、ズッと出でゝ、
幾代　千鳥を隔て
母樣、素讀なされて下さりませ。
千鳥　オヽ、この子わいなう。母はそんな機嫌ぢやない。奧へ行きや〳〵。
幾代　イエ〳〵、ま一度浚へませぬと、また忘れまする。
千鳥　エヽ、ほんに不器用な子ではある。サア〳〵、敎へませう。爰へおぢや〳〵。
ト云ひながら、よき所へ坐らせ、こなしあつて
ドリヤ、素讀を敎へようか。
ト面白き誂らへの鳴り物になる。寢所の前の障子、一面にしまる。幾代、見臺にかゝり、書物を持ち、讀み物にかゝる。
幾代　女大學……それ女は成長して、他人の家へ行き、舅姑に仕ふるものなれば、男子よりも親の敎へを、ゆるがせにすべからず。

ト行きつまる。

千鳥　父母寵愛して欲しいまゝに育てぬれば、必らず夫に疎まれ。

幾代　父母寵愛して欲しいまゝに育てぬれば、必らず去に疎まれ。

ト此うち、千鳥、そろ〳〵障子の方へ行て

千鳥　なんぢや、可愛い。

トこちらへ來て

アレ〳〵、可愛いと云ひくさつた。

幾代　可愛いゝと云ひくさつた。

ト口寫しを讀む。

千鳥　エ、、それは讀む物ぢやないわいの。サ、、次を讀みや。

幾代　女は、たゞ貞心に情深く、靜かなるをよしとす。

千鳥　なんぼう貞心でも、目の前に夫を寢取られたと、思へば思ふ程、エ、〳〵〳〵、腹が立つ。

幾代　エ、、腹の立つ。

ト口寫しに讀む。

千鳥　エ、、何を云ふのぢやぞいなう。

ト本の方を見て

されば婦人には七去とて、惡しき事七つあり、一つには舅姑に從はざるは去る。二つには、子なき女は去るべし。

ト教へのこなし。

アイ、慮外ながら、幾代と云ふ娘がござんす。ほんにモウ、大概や大方の具合でなけりや、嬰兒の出來るものではござんせぬわいなア。

ト奥へ聞えるやうに云ふ。

サア〳〵、其方は素讀みをしや。

幾代　アイ。

ト本を見る。千鳥、また障子を覗きに行て聞き耳立てこなしあつて

千鳥　あの樣子では。

トこなしあつて

オ、、この子わいの、モウ〳〵、餘も氣合が惡いによつて、今日は休まうわいの。

幾代　左やうなら、また明日にいたしませう。

ト兩手を突いて云ふ。千鳥、こなしあつて、見臺の本を取り、ちよつと見て。

千鳥　姫御前の身の教訓に、編み綴りし女大學、七去の法

に貞女の道も、心の內には合點して、夫大事、家大事と、思ひ詰めた女の操、胸の鏡は曇らねど、野守の水にうつり氣な、これ見よがしの添臥しを、なんと眺めてゐられませうぞ。久々都の御在番、海山つもるお話しも、わたしが方から、隔つるは、云ふに云はれぬ心の苦しみ、それに引きかへ寢覺どの、義理も道も忘れたのか。エヽ、恨めしい、聞えませぬ、胴慾ぢやわいなう。

ト奥を見やり、泣いて云ふ。ト正面の襖を明け、出雲、ズッと出て

出雲　殿を寢取られ、思ひの炎、お腹が立たう。口惜しからう。

千鳥　すりや、先刻からの樣子を。

出雲　殘らず聞いた。

トあたりを見廻し、小聲になり

妹、なぜ殺さぬ。

千鳥　エヽ。

出雲　悋氣の仕樣。

ト懷劍を出して渡す。

千鳥　すりや、二人とも。

出雲　身を捨てゝこそ、浮かむ瀨もあれ。

千鳥　身を捨てゝこそ、浮かむ瀨もあれ。

ト思案をして

同胞が日頃の願ひも、妹脊の道に踏み迷ひ、今日までは過したが、身を捨てゝこそ、お前の願ひも。

出雲　一時に叶ふ時節到來。

千鳥　成る程、仕負ふせて見せませう。

ト懷劍の寢刃を合す。

出雲　出かした。手に餘らば、身共が加勢。

千鳥　この身も共に死出の旅立ち。可哀や娘が。

ト幾代を引きよせ、顏見ようとする。出雲、引き取つて小脇にひん抱き

出雲　未練な事を。

ト唄になる。千鳥、アッと泣く。出雲、幾代を抱へ、思ひ入れあつて、ツイと入る。千鳥、思案を定め

千鳥　さうぢや、夫を寢取つた寢覺の前を刺し殺し、この身も共に自害するが、兄樣への云ひ譯。寢覺の前を。

ト懷劍構へ、ツカ／＼と一間へ寄ると、この時、障子開くと、內に鳴戸之助、煙草盆扣へ、立派に坐つてゐる。上の方に觀壽院、褥に乘り、酒を呑んでゐる。鳴戸之助、千鳥へ目を附ける。ちやつと懷劍を裲襠に隱

す。鳴り物やむ。

鳴戸　ハヽヽヽ。暗夜の婦女子に燈火を貸さず、弟が妻と定まる姉の前、不義があつてよからうか。ハテ、あざとい事を。

ト千鳥、思ひ入れあつて

千鳥　ホヽヽヽ。それで自らも落ちつきましたわいなア。

トこなしあつて、下にゐる。

鳴戸　坊主、よい加減に白狀せぬか。

觀壽　ハテ、白狀は先刻の通り、火水の責めを取措いて、錦の褥、酒肴、辛からば、一筋に辛からで、情の變るこの責め苦、蟇蛙の油取らるゝやうで、いつそ爰らへ、消えたうござりまする。

鳴戸　イヤ、さうばかりでは濟まぬ。斯程の事を企みしは、某に恨みあつて、サア。

ト千鳥を尻目にかけて

某に恨みがあつて、携へ持ちしこの懷劍

ト千鳥、ギックリこなし。

觀壽　アヽ、勿體ない。そんな氣は、夢三寶ござりませぬ。酒肴の御馳走より、命一つを助かつて、どうぞ早う歸りたう存じまする。

ト逃げようとする。

鳴戸　身動き致さば命がないぞ。

觀壽　ハイヽヽヽ。

トうつくまる。

鳴戸　奥、書物をこれへ持ちやれ。

千鳥　ハイ。

鳴戸　早く持ちやれ。

千鳥　ハイ。

ト合ひ方になる。本を取りに行く。この時、鳴戸之助立つて、下舞臺の眞中へ下りる。千鳥、本を差出だす。この途端に、持ちたる懷劍を引ッ取り、それはと寄るを、直ぐに持ち直し、切尖をさしつけ、キッとなつて

鳴戸　肌ゆるされぬ外面如菩薩、素性もそれと

トきつと云うて、氣を替へ

サア、明けて云はぬが、この場の情。

ト懷劍を捨てる。千鳥、こなしあつて

千鳥　サア、お手討ちに遊ばされませ。

鳴戸　なんと。

千鳥　これまで積るお情の數々、恩を仇なる手向ひも、云ふに云はれぬ、サア、お二人の添臥しを、惜しと思ふ戀

にて、寢覺どのを刺し通し、この身も共に死出三途と、
一途にはやる闇の内。明けて口惜しいこの場の有樣。自
らは、死にたうござりますわいなア。

ト大泣き。

鳴戶　死ぬるに及ばぬ。功を立てい。

千鳥　功を立ていとは。

鳴戶　先非を悔ひしその身の云ひ譯、功の立つべき工風が
あらう。

千鳥　差當つて、どうも。

ト思案する。觀壽院、隙を見て、逃げんとする。

鳴戶　サア、有體に申せ。どうぢや。

觀壽　サア、それはナ。

鳴戶　吐かさずば、討ち捨てうか。

トきつと向ふ。

觀壽　アヽ、申します〳〵。何をするも命が惜しさ、サア、
白狀を致しませう。狛狗に小柄を刺し込んだ、その賴み
手といふは。

鳴戶　何者ぢや。

觀壽　狐でござりまする。

鳴戶　なんと。

觀壽　サア、その日は泉州へ參りまして、通りかゝつた信
田の森、彼のとの穴とも知らず、尾籠な事を致したさう
な。それから氣がウツトリとなつて、その後はとんと覺
えませぬ。これより外に白狀はござりませぬ。ハイ〳〵
どうぞお助けなされて下さりませ。

鳴戶　再應の吟味に掛けずば、白狀は致すまい。この上は、
獄屋へ下して火水の拷問。

觀壽　エヽ。

ト慄ふ。

鳴戶　それで云はずば木馬海老責め、是非問ひ狀にかけに
や置かぬ。

觀壽　そんなら、どうあつても。

鳴戶　但し、この場で白狀するか。

ト觀壽院、思案を極め

觀壽　白狀しませう。今度こそ、ほんまの白狀、大それた
事を賴まれた、その賴み手といふは、カウ。

ト鳴戶之助の捨てたる懷劍を取つて、突きにかゝる、
程よく留めて

鳴戶　ハヽヽヽ、騙し討とは、ハテ、こそばい。

觀壽　こま言云はずと、くたばれ。

ト振り放してかゝるを、鳴戸之助、懐剣を落し、引き伏せて、下げ緒にて縛り上げ、引立て、下へ下りて、庭の柳の木に縛りつける。

アイタヽヽ。エヽ、いま／＼しい。

鳴戸　奥、この縄付は、お身に預けう。

千鳥　すりや、この者を。

鳴戸　如何にも。四海にかゝはる調伏の大罪人、責め苛なんで白状させなば、この場の功になりさうなもの。

ト千鳥こなしあつて

千鳥　成る程、及ばずながら、問ひ状にかけまして。

鳴戸　兄と夫へ、二道かけし女の操、誠正しき、コレこの大學の、素讀みをしやれ。

ト唄になり、書物を千鳥の側へ抛り、觀壽院へ目を殘して奥へ入る。あと合ひ方になる。千鳥、觀壽院が側へ行て

千鳥　サア／＼、いま聞く通り、自らが云ひ譯の種ぢやほどに、早う云うてくれいやい。

觀壽　エヽ、知らんわい。正眞正當な清僧を、科人の、イヤ、拷問をするのと、此やうに縛り上げた、あの鳴戸之助の鬼よ蛇よ、人に恨みがあるものか、ないものか、追ツつけ思ひ知らす。待つてゐよ。

ト此うち、千鳥、騙つて云はさうと云ふ思案をして、長柄の銚子と杯を持つて來て

千鳥　どうでモウ、ついは云ふまい。酒でも飲んで、ゆるゆると、詮議をせうか。

ト片脇へ退き、酒を飲む。觀壽院こなしあつて

觀壽　エヽ、誰れぞ縄を解いてくれぬかい。誰れぞ縄を

ト見廻し、柳を見て

ヤイ、柳よ、われなりと解いてくれぬか。柳よ／＼。直ぐなる柳よ、否な風にも靡くではないかいやい。オヽ、斯うした所は、なんであらう。梅に鶯、柳に燕、大概極つたものぢや。

ト思案をして

今よりは、燕法印と名乗るべし／＼。

ト立つて、柳の木のあたりを、あちこちして、燕の舞ふやうな見振りをする。いろ／＼あつて

これでも解けぬか。エヽ、どうぞ解いてほしいたア。

ト此うち、千鳥、酒を呑み

千鳥　酒も、一人は面白うないもの、誰れぞ相の仕手はない事かいなア。

ト観壽院を見る。
観壽　相をせうか。
千鳥　相してたもるか。こりや、忝ないわいの。
ト銚子杯を観壽院が側へ持ち行く。
観壽　先刻には、結構づくめで理に入つて飲めなんだが、斯うして呑めば、また格別ぢやが、頂からにも手は叶はず。
ト千鳥、酒をつぐ
千鳥　サア、一つ飲みや／＼。
観壽　オツト、あるぞ／＼。
千鳥　サア／＼、飲みやいなう。
観壽　縛られながら、打解けて
千鳥　さしつ、押へつ。
観壽　奥様。
千鳥　坊主。
観壽　こりや、話せるわいの。
ト観壽院、寝轉んで、口をとさんへ付けて、酒を呑みけうとい鹽梅ぢやわいの。時に、御返杯を仕らう。
ト口にて杯をさす。
千鳥　なんと、自らが問ふ事を、云うて聞かしやらぬかいなう。
観壽　云うて聞かさう。住吉の狛狗に小柄を刺いて、久吉を調伏したは
千鳥　何者ぢやぞいなう。
観壽　外でもない、萩塚鳴戸之助。
千鳥　ヤア。
観壽　おのれが科を、おれにかぶせ、遁がれんといふ彼奴等が企み、非道の主人を見限つた、出雲どのは大忠臣、こなたも心を入れ替へて、鳴戸之助を討たつしやれ。
千鳥　そんなら、矢ッ張り殿様の、悪心であつたか。
観壽　寝覺の前に不義はないと、口悧巧に云ひ抜けても、寝所の睦言は、とつくりと寝張つた。
千鳥　ヤア。
観壽　男を寝取られ、腹は立ゝぬか。
千鳥　サア、それは。
観壽　口惜しくば二人とも、殺らしてしまはつしやれ。
千鳥　サア。
観壽　口惜しうはないか。
千鳥　サア。
観壽　殺らさつしやるか。

兩人　サア〳〵〳〵。

觀壽　最早生けては置かれまいぞや。

　ト千鳥、こなしあつて

千鳥　さうぢやなア。悋氣嫉妬の操を守るも、姫御前の一旦、もうこの上は戀の敵。

觀壽　さうぢや〳〵。

千鳥　寢覺の前を刺し殺し、その上で殿様とても、安穩で置かうか。

　トきつとなる。

觀壽　オヽ、さうぢや〳〵、彼奴さへ殺らせば、出雲どのの日頃の願ひも、叶ふといふもの。

千鳥　仕負ふせたらば、この身も立身。

觀壽　兄貴も喜こび。

千鳥　この家國は、どうせうと心のまゝ。

觀壽　その時こそ、千鳥の香爐も、取出だして家の寶。

千鳥　それは、さうぢやが、肝心の千鳥の香爐が。

觀壽　あるぢや、知れてあるぢや。

千鳥　知れてあるとはや。

觀壽　ハテ、千鳥群れゐる海の底に。

千鳥　ムウ、千鳥群れゐる海の底とは。

　ト思案して

千鳥群れゐる

　ト思ひ入れあつて

すりや

　ト向うを見て、キッと思案のこなしあつて、ツイと入る。觀壽院、悔りして

觀壽　ヤア〳〵〳〵。拍子にかゝつて、鈍な事を云うてのけた。サア〳〵。亂騷ぎになつて來たワ。調伏の詮議の上に、香爐の事まで口走つた上は、どんな目に會はし居らうかも知れぬ。斯うしては居られぬ。エヽ、コレこの繩は解けぬか、切れぬか。日頃信ずる妙見さん、日蓮さん、金比羅御祭に、天狗神子、けたいな目に會はせ居つた。どうしたらよからう。どうせうぞいなア〳〵。

　ト始終の合ひ方、いろ〳〵あつて

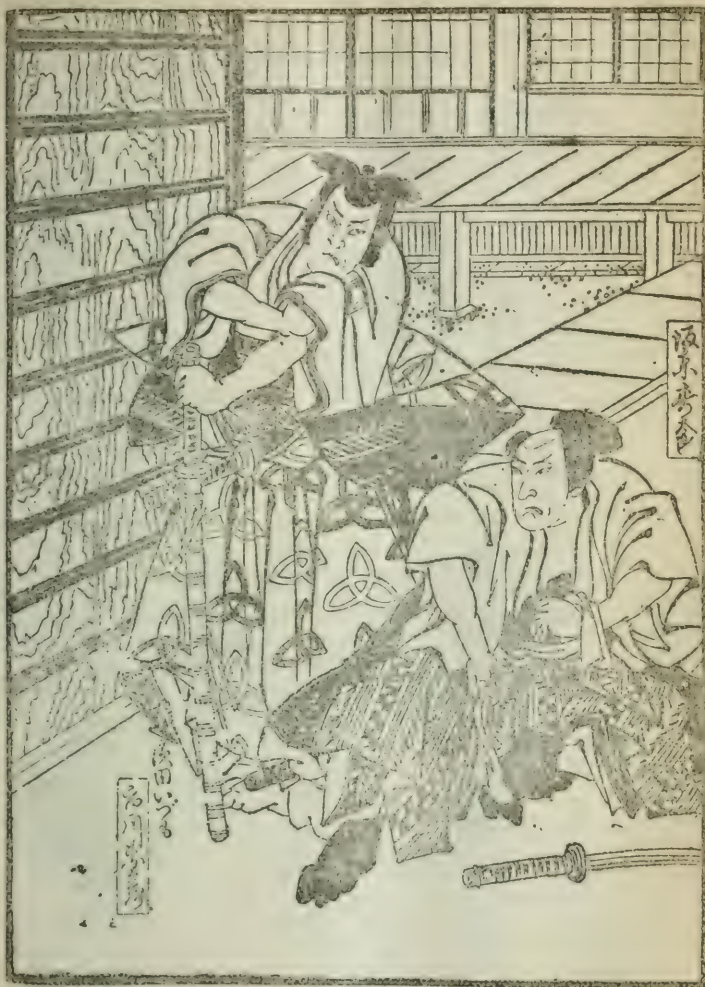
もうこの日本に、この坊主が祈る神も佛もないか。ハアア。

　ト大泣き

オヽ、それよ。畫道の雪舟、狩野雪姫、雪ね毛色の白鼠、繩を解きし例しもあり、近くは吾妻吉五郎、足の一曲獨樂廻し眞切り、その練磨には劣るとも、この繩一つ切ら

いで置かうか。
ト合ひ方、早める。おこづく事、いろ〳〵あつて、ト
ド、懐劍を見付け
オツト、あるぞ〳〵。
ト寐腹這ひ、懐劍にて繩を切り
してやつたぞ。
ト逃げようとする。國平出て
國平　づく入め、待て。
觀壽　邪魔ひろぐと、命がないぞ。
國平　大事の囚人、ちつとも動かしやせぬ。腕廻はせ。
觀壽　なにを。
ト突きかゝり、立廻りあつて、觀壽院、懐劍を打ちつけ、向うへ逃げて入る。國平、追ひかけようとして、氣を替へ
國平　イヤ、彼奴よりは、根ざしの曲者……さうぢや。
ト臆病口へ走り入る。
ト七ツの半鐘、チヤン〳〵と打つ。奥より、左衛門出て、近習狛狗を持ち、その外近習、皆々出る。
左衛　最早、申の上刻。
ト床几にかゝる。近習、狛狗を二重舞臺の眞中へ直す

ト奥より、主税、十平、甚藏出て橋がゝりに平伏して
主税　家來の者ども、一統にお願ひ。右三ヶ條の申し譯、只今と申しては主人も當惑、何卒、御上使のお情を持ちまして
十平　いま暫らく日延べのお願ひ
甚藏　御承引下されませうならば
主税　千萬
三人　有り難う存じまする。
左衛　イヽヤ、日延べの願ひ、相叶はぬ。
三人　すりや、このお願ひは。
左衛　四海の怨敵、鳴戸之助、これへ參つて返答しやれ。
近習　鳴戸之助どの〳〵。
ト呼ぶと、内より
織部　萩塚鳴戸之助、それへ參つて、御返答仕らう。
ト織部、奥より出て、眞中へ坐る。
三人　濱田織部どの。
左衛　鳴戸之助どのに成り代り、返答いたすぢやまで。
織部　恐れながら、御上使へのお願ひ。萩塚は武將へ對して勳功の家柄、殊には當殿、鳴戸之助さまは、萬治郎さま國遠の砌りより、當館へ入らせ給ひ、政道正しき智仁

根本「百千鳥鳴門白浪」挿絵

萩塚館廣問の場

の名將、計らざる香爐の紛失、公卿に敵對、武將の調伏、大罪も一つに迫る今日只今、織部めが、お願ひの筋、何卒。

左衛　ムウ、言上の趣き、聞き屆ける品もあらう。して、願ひとは。

織部　そのお願ひと申すは、斯くの通り。

ト刀を腹へ突ッ込む。各々こなし。奥より出雲、ツカツカと出て、この體を見て、大きに悔りして

出雲　ヤア、倅は切腹。

ト寄らうとする

左衛　コリヤ、一家親類、目通り叶はぬ。

近習　控へさっしやれ〱。

ト出雲、後ずさりして、橋がゝりの方へ寄り、あせる事、いろ〱あつて

出雲　エヽ、コレ、死ぬる覺悟と知つたらば、仕樣模樣もあらうものを、早まつた事いたしたなア。

ト伸び上がり見て

エヽ〱〱、殘念な。

ト下に居て、無念のこなし。織部、苦しきこなし。

織部　親人、エヽ、こなたにたう。我れ〱親子、生前は存ぜねども、浪人の身の寄るべなく、所々方々とさまよひしを、千鳥さまの緣により、親子もろとも當家へ奉公。これぞといふ功もなく、次第に立身、國詰めの重家老と家中の尊敬、皆御主人の御厚恩と思し召さぬか。その恩の辨まへもなく、日夜に募る無道の行跡。當家を滅亡しこの織部を國主に備へんと、道ならぬ思ひ立ち、御諫言を申しても、逆立つ日頃の御氣性。所詮この身を放埒に持ち崩してと、心に思はぬ廓通ひ、國主となるべき器量もなく、役に立たずと疎まれなば、自然と非道もやまんものと、思ひ過ごせしこの身の惰弱。最前、御上使の賜はりし扇の判斷、破れし扇も、孫へ竹を以て接ぎ合せと、情の數々、切腹して忠孝を全くせよとのお指圖の、割符も丁度扇腹、今ぞ判斷仕つてござります。この上は、三ヶ條のお咎め、科人は、この織部と言上あつて、この場を濟ませ、主の身の上、二つには親人の惡心を、訴人の功に助命の御沙汰、偏へに上使のお執成し。忠義と孝に挾まれて、先立つ不孝は許して下され。コレ、親人

ト出雲こなしあつて、吐息をつき

出雲　ハヽア、さうぢやたナ。不義の榮耀に浮める雲と、悟りながらも凡夫の欲心、賤を失ひ、其方を世に出ださ

んと、鹿を追ふ獵師の山も見えざる非道の企み、今とい
ふ今、悪念を懺悔し、主人に敵對し濱田出雲・御上使さ
ま・縄打つて四海の成敗。サア、如何やうとも、お計ら
ひ下されませう。

トどつかと坐り、覺悟の體。

左衛　イヤ、久吉公の賢命の、外に用なき某が役目。家中
の善悪、見聞きには及ばぬわサ。

出雲　すりや、御上使の御賢慮に。

左衛　誤まつて改むるの本文。この後、忠義を勵んでよか
らう。

出雲　ハツ。

トこなしあつて

悴、其方が最期は、父の引導善智識、詞で禮は云はぬぞ
よ。

左衛　彼の似我蜂の、我れには似ざる織部が忠臣。ハテ、
あつたら若者、忠義の切腹に愛で、三ケ條の返答、百日
の日延べ、容赦を願うてくれう。

織部　すりや、百日の日延べ。エヽ、忝ない。

主税　御上使へ申し上げます。申さは御親子、一生の別れ、
せめて介錯の儀を、御親父出雲どのに、仰せ附けられ
ならば、この上のお情。

十平　家中の者ども

甚藏　この儀一統に

三人　願ひ上げまする。

左衛　苦しうない。勝手に致せ。

主税　ハツ、出雲どの、介錯御赦免でござるぞ。

出雲　ハツ〳〵。

ト喜び、平伏する。左衛門立つて、織部が疵口を改め
る事あつて

左衛　親子一生の暇乞ひ、申し置きたい遺言もあらば、暫
時の容赦は武士の情。一家中の者ども、暫らく座を除け
遊はせい。

三人　ハツ。

左衛　役目も濟めば、某は出立。供觸れ致せ。

近習　畏まつてござります。

主税　御上使のお立ち。

内方　ハア、。

ト所知入りになる。左衛門に、近習皆々附添ひ、橋がか
りへ入る。主税、十平、甚藏、奥へ入る。あと合ひ方にな
り、出雲、我身を納め、あたりを見て、織部が切腹を改め

出雲　ムウ、急所なれども、未だ淺手、養生は叶ひさうなもの。
織部　ヤア、愚か〳〵、濱田織部が覺悟の切腹、助かるやうに切るべきか。御未練仰しやらずと、サア、御介錯御介錯。
出雲　イヽヤ、殺さぬ。年來仕込みし大望の礎。
織部　すりや、矢ツ張り、非道の心はやまぬのぢやな。
出雲　イヽヤ、非道でない。古主の鬱憤、義兵の旗上げ。
ト織部、驚ろく。
織部　ナニ、古主の恨み、義兵の旗上げとは。
ト出雲、織部が手を持つて、上座へ直し、眞中に、どつかと坐り
出雲　今日只今まで、悴となして養育なせしこなたこそ、先年久吉が下知にて、萩塚が矢先にかゝり、亡び給ひし小坂部刑部太夫どのゝ、御忘れ形見、彌三郎信久公。
織部　ヤヽヽヽ、なんと。
出雲　ハヽア、思ひ出すも無念の年月。某は譜代の臣下、桑名太郎左衞門秀遠といふ者。御父刑部太夫どの、土佐の畑の一戰に討死遊ばされ、その頃君は未だ三歲、お乳もろともに一方を切り拔け、深山幽谷に隱れさまよひ、何卒無事に守り育て、御成人の時節を待つて、再び義兵の旗上げをなさんずものと、時節を考へ暮らすうちに、幼少にて引別れし妹は、鳴戸之助が妻となり、これぞ屈竟、妹が緣を求めて、我れも當家へ仕官の身の上、主君の其方を、我が悴なりと披露せしは、世の人口を防がん爲。妹に勸め込み、鳴戸之助を失なはんと計れども、夫婦の輪廻に踏み迷ひ、未練の女、又こなたにはお身持ち放埒、迂濶に大事を明かされずと、隱し包みし長の年月、初めて聞いたこなたの本心。父を諫めん僞はりの放埒とは、孝もあり、耻かしからぬ小坂部の御公達、天晴れ名將。オヽ、よく仰しやつた。お出かしなされた。斯く御成人の上からは、密かに義兵も起さんと、忍び〳〵に味方を語らひ、當家の重寶、千鳥の香爐も、先達て奪ひ取り、海底の水屑となす。まつた小坂部重代の雌龍丸の一振り、御父君の形見なれば、手に入れんと思ふところ、幸ひなるかな、劍を秘め置く寶藏の鍵、預かりは綾瀨の前、萬治郎を慕ふを幸ひ、彼れに與ふるなりと僞はり、鍵を手に入れ、難なく劍を奪ひ取りて、人知れず隱し置く。主君の仇は眞柴久吉、討手は萩塚、斯く物語る上からは、一心の臍を固め、この場を立退き、運に乘じて義

兵の旗上げ、御父君の弔ひ軍を、思ひ立たれよ、若君信久公。

トきつと詰めかけて云ふ。織部、有物語りのうちに、肩衣を引き裂き、腹を卷くこなしあつて

織部　ムウ、今日の今まで其方の悴なりと、思ひ暮らせしこの身の俗性、すりや、小坂部刑部どのゝ胤であつたかムウ。

トきつとこなしあつて

とは知らずして、この年月、主人と尊み、忠義を盡せし萩塚は、實父の怨敵、父の落城、その折からの御無念を、思ひ廻はせば、ホヽ、爪は甲に通り、腸を斷つの思ひ。おのれ、萩塚、一戰に討ち亡ぼし、その虚に乘じて眞柴久吉、一太刀恨むの、逆意の門出。ハヽヽ、ハテ、喜ばしや、嬉しやなア。

出雲　ホヽ、天晴れ御器量。サヽ、暫時も早う。

織部　して、雌龍丸の劍はいづくに

出雲　それこそ我が腹心の家來、平作といふ者に、先達つてより預け置きて、いま播磨路に隱れ住むよし。彼の地へ立ち越え、コレ、この割符を以て、雌龍丸を手に入れ、まつた某が親人、桑名權藤太どの、九州の地に未だ在命、巡り逢うて心を合せ、在所知れざる雄龍丸を尋ね求め、お家の重代、雌雄の二振り、これを以て軍勢催促、必らず吉左右、待つてゐるぞや。

ト割符の印を渡す。織部取つて

織部　太郎左衞門。して、其方には。

出雲　矢張り此まゝ、仕官いたすも一つの手段。

織部　ムウ、これも尤も。

ト出雲、傍へにある最前の狛狗を見て、こなしあつて

出雲　眞柴久吉、住吉へ寄附せんと、心魂を籠めたる狛狗、武將調伏、當座の血祭り。

ト拔討ちに狛狗を切り割ると、仕掛けにて狼煙上がる。靜かに遠責めになる。出雲、耳を寄せ、こなしあつて

ムウ、微かに響く貝鉦太鼓。

ト織部、キッとなつて

織部　太郎左衞門、汝を討取る味方の手筈。

出雲　なにが、なんと。

ト内より

鳴戸　叛逆の張本、そこ動くな。

トどんちやん。正面の襖開くと、鳴戸之助、左衞門、軍立ての形。臆病口より主税、十平、甚藏、國平、凛々

しき形。橋がかりより、深山熊藏、早房小彌太、蝶鳥軍晉、猿猴木二郎、向山太郎、矢張り盜賊の頭にて、衣裳上下になる。右の人數、バラ／＼と出て、織部も一緒に、出雲を取卷く。この時、西の障子、一面に開く。この内に鎧、兜、錏口、或ひは、石火矢、弓、鎗、鐵砲、馬具の類、すさまじく積み重ねてある。皆々出雲を取り廻し

主稅　謀叛の張本。

十甚　遁がれぬ所ぢや。

皆々　覺悟々々。

ト詰めかゝる。織部、平舞臺の上手床几にかゝる。鳴戸之助、二重舞臺の眞中の床几にかゝる。出雲、織部を見て恟りして

出雲　ヤ、ヽ、ヽ、こりやどうぢや。

織部　叛逆人の血筋を取つて、今の主人へ忠義の奉公。

ト出雲、驚ろき

出雲　すりや、謀り事に落入つたか。エヽ。

ト無念のこなし

主稅　外科漆庵、早く來やれ。

漆庵　ハア、

ト出て、織部が疵を改める。

主稅　疵はどうぢや。

漆庵　お氣遣ひなされな。御養生は叶ひまする。

鳴戸　天晴れ、忠臣。屋敷へ下がつて保養を加へ、雌龍丸の劍の詮議。

織部　畏まつてござりまする。

鳴戸　乘り物持て。

家來　ハア、。

ト早打ちの乘り物、舁いて來る。

鳴戸　大事の役目、その手疵では。

織部　ナニ、これしきのかすり疵。

ト腹帶締める。

鳴戸　出かした。主稅、引添うて介抱。

主稅　ハツ

ト股立ち取つて附添ふ。

織部　乘り物御免。

ト乘り物に乘つて

急げ／＼。

家來　ハア、。

ト主稅、漆庵、その他、乘り物に附添ひ、向うへ走り

入る。出雲、無念のこなしあつて

出雲　ア、、云ひ甲斐なき大腰抜け。斯くと知つたら、主人の系圖を明かすまいに

ト地團駄踏んで、眞中にどつかと座し、無念の體。

左衛　鳴戸之助どのと申し合せ、濱田織部に切腹を勸め、歸國の證に見せたるは、席を開いて汝が俗性、實否を糺さん兩人が計略。鳴戸之助どの、して、三ヶ條の御返答は。

鳴戸　それこそ濱田出雲、本名は、桑名太郎左衛門、企みの段々、白狀いたせ。

出雲　イヽヤ、大望を企てしは古主へ忠義。汝が越度は汝が云ひ譯いたせ。身共は知らぬ。何を馬鹿な。

鳴戸　イヽヤ、さうは云はさぬ。汝が胸中、いま明白に申し開かさん。方々。出雲を圍へ。

ト諸士皆々

諸士　動くな。

ト種ヶ島を出雲へ向ける。鳴戸之助、下舞臺の眞中へ坐る。小姓、近習、奥の間の調度を殘らず舞臺先へ並べる。

鳴戸　右三ヶ條の申し譯、御上使それにて、お聞き下され

い。某、先殿の胤とは云へど妾腹の出生、弟萬治郎は本妻腹、父の遺言に依つて、萬治郎をして、當家の跡目、我れは分地を賜はりて、鎌倉に成長なし、手廻りの愛妾、女子を産む引き上げて奥と賞せし千鳥の前、或る時の物語りに、自らに一人の兄あり、素性も耻かしからねども、いま浪々の身の上、君に仕官を願ふのよし、聞き屆けて目見得を許せし濱田出雲、天晴れ稀有なる者たりと、膝元に近づけ、折々の物語り、馴染むにつけて、我が小身たるを悲しみ、天晴れ器量の殿たる者を、小地の艱苦に苦しめ給ふ、哀れ亂世の時を得ば、君の軍配にて勳功なすは手裏にあり。如何で屈々として、諸大名の所領の下に屈せんやなど、進むること數度なり。彼奴、一癖ある者とためらふ折柄、予が實母、萬治郎が威勢を嫉み、如何もにして失はんとあるまじき御企て、萬治郎はこれを疎み、我れを世に出ださんとて、心に思はぬ放埓惰弱、奢りの形を見せ、領分は云ふに及ばす、數多の美女を選み集め、お咎めを受けんその爲に、望んで建てし館の結構、月見の亭には唐木の階、雪に例へし夜光の玉、軒端にあやなす梅櫻、ちら／＼都にその沙汰あつて、眉をひそむる家門の面々、或ひはなだめ、或ひは諫むる其うち

に、萬治郎に行くへ知れず、大國に主なしと云はば大事と、心ならずも當の守する鳴戸之助、附添ふ千鳥が身の清計、濱田出雲は我が家老、家中の威勢は、夜に増し日に増し、彼れらが喜び、然るにこの度、予が在京の折も折、千鳥の香爐を差出だせよと嚴命に依つて、通達の使者に行き逢ひ、早打ちは右の香爐紛失と、聞くより家の大事を悟り、所勞を云ひ立て、百日のお暇を賜はつて、歸國の乘り物、空虚となし、伊賀流の忍びの者ばかり、それぞと目ざす諸大名、その家々へ忍び入れ、詮議せんとは思へども、イヤ待て暫し、後々の風聞を防ぐ爲に、程よく捕へし盗賊を、助命いたさせ各國の間、調度の粹名にいたるまで、習ひ覺えし數々の、ましてしように呼ぶは合ひ詞、また錠前をさんぴんといひ、鬮すをどめ、首尾をまぶかに一家内、押立て込み入れど、尋ぬる寶はなく、月洩る隙が家々に、兵糧または軍兵を貯へ、俵にとめたる烽火矢なんど、手前ではかす寺の緒口。火藥を仕込み、潜るゝ水に霧を伏せ、地雷火等の用意もあり、さては逆賊ござんなれと、心附けたる出雲が館、探つて取り得し一つの箱、さんぴんばらす其うちに、右の軍器を預かる者より、他言せまじき誓ひの神文、或ひは一味の連判なんど、いちいち記す、その中には、あるまじき公卿の身すがら、石原三位、彼れが連判、藏之進が無慮より誤まつたるも、この連判にては、却つて忠節、これ一ケ條の申し譯。千鳥の香爐は出雲が所爲、追ッつけ手に入れ、お渡し申さん。これ二ケ條の申し譯。國に盗賊徘徊して、十郎兵衛と聞えしは、某が寶の詮議の爲。これ三ケ條の申し譯。忠臣に劣らぬ我が心中、これに集まる百千鳥、鳴戸の白浪おだやかに、かばかりの忠節を、露まへ知らぬ京わらんべ、我が子孫に至りなば、萩塚の先祖こそ、ゆゝしき賊徒の首領なりと、呼ばるゝも恥辱にあらず、武名は輝やく表道具、末代家の業えぞと、聊か恥づるには及ばねども、ヤイおのれ、收斂の臣たるより、むしろ盗臣となる予が有樣。調伏の狗猫も汝が業、其まま置きしは、心をゆるさす詮議の種。勅使を覘ひし鐵砲の、雨に消えしは予が天運。斯く顯はれしは、天罰神罰。思ひ知つたか人外め。

ト左衞門に向ひ

この由、言上願ひ奉る。

出雲　流石の萩塚、よく見顯はした。住吉に於て勅使を覘ひ、武將調伏の術計を構へしも、斯くいふ某。斯く顯は

るゝと知つたらば、疾にもぶッ放してくれんものを、エ
エ、運強き鳴戸之助。亡君の御無念まで、思ひやられて
エ、奇ッ怪な。
ト無念のこなし。
太郎　ヤア、未練の繰り言。この上は香爐を渡して、切腹
するか。
熊藏　但し押へて逆磔刑にかけうか、太郎左衛門。
皆々　サア〳〵、なんとぢや。
ト詰めかける。出雲、無念のこなしあつて、物云はず
諸肌ぬぎ、脇腹へ突き込む、鳴戸之助、元の座へ直ろ。
左衛　ムウ、逆賊ながらも尋常の切腹、さもあるべき筈。
懺悔に十罪を滅すといへば、香爐を差上げ、せめて未來
は成佛いたせ。
太郎　ヤア、成佛とは、どこへ成佛、億萬劫を經るとも、
生き替り死に替り、一天四海を覆へさいで置かうか。千
鳥の香爐、身共は知らぬ。無駄口きかずと、介錯々々。
ト木二郎、熊藏、太郎、小彌太、軍吾、十平、甚藏の
皆々
皆々　その廣言を。
鳴戸　ハテ、網代の魚、荒立つるには及ばぬ〳〵。

出雲　エヽ。
ト拳を握る。
トこの時奥より、寢覺の前出て
寢覺　御上使さまへ申し上げます。あの出雲を誠ある武士
と思ひ、寶藏の鍵を渡せしは、この身の越度。知らぬ事
とは云ひながら、非道に組みせし申し譯……さうぢや。
ト懷劍にて死なうとする。
鳴戸　イヤ、自害には及ばぬ。劍の紛失、心得ずと思ひし
ゆゑ、色に事よせ、其方が貞心、某が見屆け置いた。
寢覺　ぢやと申して。
鳴戸　まつた、こなた事は、關白道方公の息女、自殺あつ
ては大內の聞えも如何。一旦、非道に組みせしといふ申
し譯、淡路の配所へ遣はして、寢覺の前の名を直ぐに、
寢覺が關と呼ぶならば、遠近の人の便りにも、萬治郎が
身の便を、ナ、緣と月日を待つがよからう。
寢覺　すりや、死ぬにも死なれませぬかいなア。
左衛　配所といふも四海の掟、三ケ條の申し譯も相立てば、
淡路の配所へ路次の警衞。某は、直さま歸國。
トこの時、初瀨、龍田、關屋、小藤、葛の葉、吉野、
その外子供皆々、バラ〳〵と出で

吉野　寢覺さまのお宮仕へ。
女皆　私しども〻。
鳴戸　出かした。心を附けて、朝夕を慰めい。
女皆　エヽ、有り難う存じまする。
　ト ばた〳〵にて、向うより主税走り出で
主税　申し上げます。濱田織部、大手の御門を出づると等しく、小坂部彌三郎信久、叛逆の手始めと、供廻りを切り拂ひ、御寶藏を暴れ、黑備の鐵砲引ッ提げ、獅子王の荒れたる勢ひ、組子に云ひつけ、圍ませ置きまして、御注進の爲、立歸りましてござりまする。
皆々　ヤア、
　ト 騷ろく。
出雲　すりや、我が君には、叛逆の思し召し立ちとな。ハハヽヽア、嬉しや、本望やな。即智を以て、この場を立退く、天晴れの大正。この虚に乘つて、久吉を攻め亡ぼし、父御へ〻孝養、我が存念の達するやう、草葉の蔭から、待つてゐるぞや。
　ト 向うを見て、こなし。
鳴戸　この世の念が晴れたらば、香爐の在所、白狀せい。
出雲　イヽヤ、知らぬ。

　ト この時、千鳥の前出でて
千鳥　その白狀は、自らが致しませう。
鳴戸　すりや、其方が
　ト 千鳥、物云はず、短册を差出す。鳴戸之助取つて
世の中を渡りくらべて今ぞ知る、阿波の鳴門に浪風はなし。
千鳥　香爐の在所は
鳴戸　さては。
　ト 向うを見る。
千鳥　兄樣、堪忍して下さんせ。
　ト 泣く。
鳴戸　おなみ、參れ。
なみ　ハア、。
　ト 橋がかりより出づる。
鳴戸　尋ぬる香爐は阿波の鳴門、功を立つべき時節到來。
なみ　海に馴れたる海女の手業、探し出して差上げませう。
鳴戸　出かした、行け。
なみ　ハッ。
　ト 行かうとする。九平次、ズッと出でて
九平　鳴門へは、身共が

左衛　ト駈け出す。おなみ引き戻り、立廻りあつて、おなみ、向うへ走り入る。九平次續いて追はへて入る。
香爐を手に入れ、後より獻寳。寢覺どの、イザ、お立ちなされい。

寢覺　千鳥さまのお心を、思ひ廻せば自らも、淡路島、通ふ千鳥の啼く聲に、いく夜寢覺めの關守と成り果つる。怨めしい、戀しい人に、逢ひ見ん事を力草、鳴戸之助さま、おさらばでござりまする。

鳴戸　家中の者ども、上使の見送り。

皆々　畏まつてござりまする。

左衛　然らば、此まゝ。

鳴戸　お役目、御苦勞。

皆々　御上使のお立ち。

呼び　ハア、。

ト合ひ方になり、矢張り遠責め靜かに打つてゐる。寢覺の前、しをれし見得にて、女形皆々附添ひ、次に左衛門、花道に行きかゝる。出雲、左衛門に目を附けながら、無念のこなしにて、ヂリ／＼と立ち上がり、見送る。これに構はず、近習主税、十平、甚藏、熊藏、木二郎、軍吾、太郎、小彌太後より國平附いて、右の人數、各々靜かに向うへ入る。その跡、二重舞臺の眞中に、鳴戸之助、その脇に千鳥の前、泣いてゐる。下舞臺眞中に、出雲、立ち身にて、向うを睨み詰めてゐる。右の見得にて、三人殘る。出雲、こなしあつて

太郎　エ、、返す／＼も恨みは盡きぬ我が存念。例へ、此まゝ死ぬるとも、魂魄この土にとゞまり、信久公を導く怨念。

トきりゝと引き廻し

閻羅かる羅阿修羅王、死後の大願見せしめ給ふべし／＼。

ト臓腑を摑み出して空へ打ちつける。少しドロ／＼、物凄き體。笑壺のこなしあつて

アラ、心よや。サ、、介錯。

ト鳴戸之助、千鳥に氣を附け

鳴戸　千鳥、そちや自害いたしたな。

千鳥　エ、。

鳴戸　功だに立ゝば死ぬるにも及ばじものを。早まつたよな。

千鳥　例へ功は立つにもせよ、非道の血筋を斷ち切つた、この身の云ひ譯。

ト小袖脫ぐ。自害してゐる體。

鳴戸　孝心貞女。
千鳥　どうぞ未來は
鳴戸　二世の夫婦。
千鳥　娘が事も
鳴戸　無事、養育
千鳥　エヽ、忝ない。
ト合掌する。
出雲　サア。
トさしつける。
鳴戸　四海の怨敵。
ト拔身を構へる。三人、この見得、チョン／＼にて道具廻る。返し
造り物、一面の網代塀、廣庭の體。眞中に織部實は小坂部彌三郎信久、暴れの形、組子の死骸に拔身を突き立て、空に魂ひ飛び出でるに目を附け、手を組み立つてゐる。這責めの中へドロ／＼を打ち込み、道具とまる。寢鳥、薄ドロ／＼なり。
織部　さては太郎左衛門が無念の魂魄、この土を去らず、我れに附添ひ守護の忠臣、ホヽ、出かす／＼。

ト國平、槍を持ち、ツカ／＼と出て
國平　捕つた。
ト槍をしごく。織部、切り落し、國平をポンと當てゝ、魂ひの方へ行き、聞くことあつて
織部　雌龍の劍は播磨の隱れ家。ムウ、よし／＼。
トこなし。組子六人、バラ／＼と出て
組子　動くな。
ト槍にて鬪ふ。構はず拔身を納めて、向うへ出て
織部　からくためら、寄りあがるな。
組子　やらぬぞ。
ト突きにかゝる。彌三郎、懷中の小筒を出し、左右へ向ける。皆々、一時にウンと反る。ちよつと見て嘲笑ひ、のさ／＼と向うへ入る。寢鳥、ドロ／＼の仕掛けにて、魂ひ、織部が後に付いて向うへ入る。國平起きる。橋がかりより、求馬出て
求馬　國平ではないか。
國平　求馬さま、小坂部を取逃がして、エヽ、殘念な。
求馬　コリヤ。千鳥の香爐は、鳴戸の海に。
國平　すりや、香爐は、
ト行かうとする。玄蕃、典膳、目明の形にて出で

玄典　さうはさゝぬ。

ト引き戻す。立廻つて求馬と國平として、二人を取つて投げ、向うへ駈け出す。玄蕃、典膳、追ひかけ入る。始終遠責め、上の方、切り破り、梅利甚五郎、船頭の形にて、ズツと出でて、拔身を納め、こなしあつて

甚五　織部といふは小坂部が殘黨。我れも劣らぬ河野の末葉。彼奴を語らひ、味方に付け、一方の籏大將。頼みに思ふ出雲に自滅。この場は一先づ。ムウ、よし〳〵。

ト橋がゝりより、觀壽院走り出て

觀壽　甚五郎どのか。

甚五　觀壽院。

觀壽　この館へ虜となつたを、拔けた事は拔けながら、途を失なうてウロつくうちに、噂に聞けば、鳴門へ沈めた、香爐のもくが割れて、取りにうせるぞよ。

甚五　南無三、手下の船頭に云ひつけ、此方へせしめい。

觀壽　合點ぢや。

ト向うへ走り入る。

甚五　彼奴ばかりでは心元ない。

ト行かうとする。木幡出て

木幡　曲者。

ト懷劍にてかゝる。甚五郎、もぎ取り突く。突かれながら、甚五郎が足にとりつく。

甚五　エヽ、面倒な。

ト引返し、懷劍を脇腹へ突き立て、向うを見て

水底に沈めても、在所を知らす、千鳥の啼く音。

ト木幡を蹴やり

こりや、斯うしてはゐられぬ

ト凜々しく向うへ走り入る。返し。遠責めやんで、一セイになる。

道具、手つがひよく返すと、向う打拔きの大灘、岩山を切り拔きし見得。所々に岩のはざま、小高き岡手摺り。舞臺の端、低き浪。切り幕、床の下、花道、ことごとく浪になる。二所と覺しき岩のはざま、渦の卷く體。すべて阿波の鳴戸の景なり。空は一面の霞にて、千鳥すさまじく群がる體。千鳥笛、方々にて吹き立てる。浪子の手傳ひ大勢、波濤の水煙りを方々にて使ふ。道具納まる。

ト一セイやんで、コイヤイの合ひ方になる。

ト西の岩の端へ、おなみ出て、水底を窺ひ、飛び込む

と、これより大風になる。吹き降りの體。向うより甚五郎、菅笠にて走り出で、海へ飛び込む。此うち、おなみ、海を泳ぎ、水入りして、甚五郎と東西へ現はれ、水を吹くこなし。向うより觀壽院、九平次、求馬、國平、玄蕃、典膳、各々凛々しき形にて走り出で、殘らず海へ飛び込む。これよりめい／＼水底を探す心にて段々ある。おなみ、香爐を取上げ、岩に取りつき上がらんとする。皆々、これを渡さじと、集まり合ふ。おなみ、また海へ飛び込み、向うの磯の方へ出る。甚五郎出て、大タテいろ／＼ゐつて、香爐を奪ひ合つて、花道の方へ行く。千鳥、これについて、花道の上に群がる體。殘りの人數は海の中にて摑み合ふ。この模樣いろ／＼あつて、おなみ、甚五郎、本舞臺へ來る。トこれに附いて千鳥も戻りて、その上に群がる。甚五郎、立廻つて、おなみを押へ、香爐を引取る。トこの時、橋がかりの芦原より、鳴戶之助、菅笠にて、ツカ／＼と出て、香爐を引取る。甚五郎、それをと寄るを、おなみ、起き返つて甚五郎を支へ

なみ　尋ぬる香爐は。

ト甚五郎、おなみを引きのけて、切つてかゝる、鳴戶之助、拔身を落し、見事に取つて投げ、おなみ、甚五郎を飛び越え、落ちたる拔身を取つて

まんまと、お手に。

鳴戶　入つたわやい。

トきつと見得になる。甚五郎「エヽ」と齒ぎしみ。この途端に、向うの人數、タテの見得にて、殘らず、海の中へ飛び込んで、各々、引ッ張りの見得にて、よろしく、チョン／＼

幕

小幕　下寺町正念寺の場

役名‖宇田要助。駕籠舁き、太助。同、才助。八百屋傳兵衞。石屋仁兵衞。尼、智妙。同、慈月、先の扇屋夕霧。藤屋伊左衞門。

造り物、正面より上手三間の間、二重舞臺、眞中に內佛檀、內に錦の戶張かけ、但し、出入りある。これより下落ち間、後生垣。一面の山吹の盛り、この前、池のかゝり、杜若見事に咲き、よき所に、二重

臺の石塔、但し、扇屋夕霧と記せし塔婆立てある。いつもの所に、横柱の枝折り門、橋がゝりの見切りに高塀、見越しの松、棕櫚の立ち木、取り合せよろしく、風雅なる庵室の好み。幕の内より、講中、着流し、菅笠にて、太鼓四人、鉦三人、太鼓、念佛供養の體、但し、これは六齋念佛の心にて、右太鼓、鉦の囃子あるべし。仕出し大勢、左右に見物してゐる。太鼓、鉦の打ち合せ、一くさりあつて、幕開く。

講中　願以此功德平等是一切同發菩提心往生安樂國。

皆々　南無阿彌陀佛々々々々々々々。

ト太鼓、鉦打ち納め、あと念佛にて矢張り太鼓、鉦打ちながら、橋がゝりへ入る。

ト仕出しみな／＼殘り

仕出　なんと、太鼓念佛は、氣が變つて面白いではないか。

同　イヤモウ、當世は佛法も、おだてかけねば歸依しませぬて。

ト仕出しの中に、鍼立て味噌忠、細やつし、羽織、年配の拵らへ。吉野五運、坊主頭、これも年配の拵らへ、按摩の貞藏、醫者德民、惣髮にて、幕明より出てゐる。

味噌　イカサマ、その歸依の次手に、この頃建つた新町の王の石塔、ゆかりかゝりのない者まで、花を立てるか、水を手向けるか、死んだ後まで、愛のある佛ではないかいの。

五運　オヽ、誰れやら聞いたやうな聲ぢやと思へば、味噌忠先生ではないか。

味噌　これは、五運さんぢやござりませぬか。

ト五運、德民を見て

五運　德民さまぢやござりませぬか。

味噌　導引の貞藏どのまで

德民　扇屋出入りの顏揃へ。

味噌　太夫どのゝ石碑の前で

貞藏　お目にかゝるは、これも因緣。

五運　ハテ、久しの

四人　出合ひぢやなア。

五運　誠に舊冬は、夕霧どのゝ病氣につき、各々にも、さぞ心勞でござつたであらう。

味噌　イヤ、モウ、手前が鍼術を盡しましたれど、ぶらぶら病と申すものは、とんと利き目が見えぬものでござ

る。

德民　さま／＼と配劑いたしたれど、生得の藥嫌ひ。

五運　併し練り藥は、たんと服まれました。

貞藏　私しは、晝夜脊中を撫り詰め。

味噌　大事の玉と思へばこそ

德民　煎藥と

五運　練り藥と

味噌　鍼と

貞藏　按摩で、やうやうと

門人　しまひつけました。

ト　めい／＼、憂ひのこなしにて、仕出しもろとも、門の外へ出ようとする。この時、八百屋傳兵衞、黄縞の下着、更紗染め絹丹前を着て、巾の廣き帶、少し年配の拵らへにて、下男に青物荷を荷はせ、出かけ、仕出し、門の外へ出るを、一人づゝ改むる、各々これにて、氣味惡さうに入る。

傳兵　今の中にも、伊左衞門らしい奴はなかつた。毎日毎日此やうに張つてゐるが、もううせさうなものぢやが。……コリヤ、わりや、斯うせい。嶋の內廻つて、直ぐに去ね。おりや中寺町二三軒廻つて、後から去なう。先へ去ね／＼。コリヤ、今夜は非筒勘に振舞ひがゐる。どこへも行かずに、附いて居いよ。

下男　ハイ／＼。

ト荷をかたげ入る。

ト奧より尼婆月、白無垢の拵らへにて、尼智妙、白無垢、麻の衣にて鉢を持つて

婆月　オヽ、八百傳さん、得意廻りでござんすかえ。

傳兵　今日は、何もお寺の雜用になりさうなものはない。ちらはし大根、置いて行かうかな。

智妙　オヽ、笑止。傳兵衞さん、何云ひぢや、差合ひぢやわいなア。

婆月　今日は、なんにもようござんす。

傳兵　大方、そんな事ぢやあらうと思うて、荷は先へ去なしたぢや。

智妙　ほんに先度から、毎日寺へござんすが、なんの用でござんすぞいなア。

傳兵　ちと用があつて、毎日々々お寺の門番してゐるのぢやて。

婆月　今日は、どうでござんすぞいなア。

傳兵　出直してから晩に來う。ドリヤ、一遍廻つてから來

うか。

ト唄になり、橋がゝりへ入る。

ト引違へに、黑紺に一本差しの下男出て

下男　申し、寺役でござります。どなたも、お出でゞござります。

智妙　いま行かうと思うてゐる所ぢやわいなア。これを持つて下さんせ。

下男　畏まりました。お隣の挾み箱が參ります。一緒に入れてまゐりませう。

ト鐃鉢を取る。

智妙　コレイナア婆月どの、經文は、この間の通りに云うたらよいかいなア。

婆月　オヽ、何を云はしやんすやら。ありや、女子のでござんすわいなア。

智妙　ほんに、今日の佛は男ぢやといなア。

婆月　さうして、覺えてゐやしやんすかえ。

智妙　イヽエ、覺えぬわいなア。

婆月　わたしが書いて置いたのがある。これ貸して上げる程に、持つて行かしやんせ。

ト懷より、書き物を出し、渡す。

智妙　ほんに、こりや好い物を貸して下さんした。道々覺えて行かうわいなア。

下男　サア、申し、遲うなりまする。

智妙　オヽ、忙し、ドリヤ、行て來うか。

婆月　ドレ、香盤を盛りかけうか。

ト合ひ方になり、婆月、奧へ入る。智妙、男を連れ、右の書き物を廣げながら

婆月　伏して思んみれば、大聖釋尊、ばつたいがの邊に入滅の夕をとり給ふ。時に、享保十一年巳の三月、婆婆三界の火宅を去つて、無爲の常樂の彼岸に至る。思へらくこの人存生の時、十罪ありて、一善なし、哀愍納受の大善を加へ、西方の妙道たらしめたまへ。

ト粒讀みに讀みながら、向うへ入る。

ト在鄕唄になり、要助、着流し大小、駕籠に乘り、太助、才助、駕籠舁き出る。本舞臺の門の前に駕籠下ろし

太助　お旦那、申し、お約束の下寺町でござりまする。

要助　最早、正念寺の門前へ參つたか。

才助　左やうでござりまする。

要助　神崎より、餘程精出したな。

ト太助、草履を直す、要助、駕籠より出づる。

太助　相棒、戻りが眼らにやなるまいぞや。

才助　オヽ、駕籠は爰に置いて、一杯引ツかけうかい。

要助　オヽ、大儀であつた。

ト太助、才助、橋がゝりへ入る。要助、門の内へ入る

暫らく佛參怠りしうちに、春暮れるとは、いはぬ色なる山吹の花のほころび、泥水の杜若、清げに色をすゞぐ。いづれ寺院に風雅の風情。ハテ面白い〳〵。

ト暫らく、景を見惚れゐる事あつて、塚を見て

誠に墓前の香華、皆これ無縁の志し。人は有情のものぢやなア。

ト合ひ方になる。花手桶を提げ、花を活け、水など替へる事よろしくあつて

花岳芳春信女、俗名夕霧、頓生菩提、南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛。

ト回向する。

ト奥より正念寺庵主、白無垢、綿衣、花の帽子にて出る。

庵主　これは、宇田要助どの、ようここそ御參詣なされましてござりまする。

要助　庵主には、暫らく疎遠の至り。先づ以て御堅固の體大慶に存じまする。早速ながら、先頃もお尋ね申した石碑の施主、未だ相知れませぬか。

庵主　されば、今に相知れませぬ。

要助　今だに合點が參らぬ。さりながら、悪しからぬ儀でござれば、さして相糺すにも及ばぬ事。それは格別、今日は、ちと存じ寄りの儀もござれば、いつもの如く御回向の儀を頼み存じまする。

庵主　畏まつてござりまする。

ト庵主、手づから木魚を取出し、內佛壇の前に直し

花岳芳春信女、出離生死頓生菩提、南無阿彌陀佛。

ト木魚を叩き、回向する。

ト內佛壇の內より、先の夕霧、好みの衣裳、引扱帶にて出かゝつて

先夕　合圖の木魚が鳴りましたが、出ても大事ござんせんかえ。

要助　幸ひの首尾。これへ〳〵。

先夕　オヽ、窮屈々々。

ト碎けて坐る。

要助　窮屈にあらう〱。なにか、僅か五日か十日と思ひの外、餘程の日數、よく辛抱いたして居つたなア。

先夕　イ、エ、窮屈なばかりぢやござんせぬ。尤も夜になると、人出がないによつて、庵主樣の居間で、二人のお弟子樣と、歌がるたの續松のと、本さへ讀み盡したわいなア。朝は疾から、あの佛壇の中へ入つて、晝飯は佛樣の御膳、線香でふすべらるゝか、揚句には、誰れも賴みもせぬ事に、石塔まで建てるか、水を手向けるか、なんぞ死んだ者かなんぞのやうに、大抵ぎゐんの惡い事ぢやござんせぬわいなア。ほんに、煙草さへ自由にのむ事ならぬ。オ、、かぢくろし。

ト莨盆引きよせ、煙草をのむ。

要助　イヤ、左やう存ずるは道理〱。元この起りと云ふは、萩塚の家老濱田出雲といふ者、其方に至つて執心なれども、其方は、藤屋伊左衛門と深く云ひ交し、外の客には一切肌觸れぬと立て通す、勤めの意氣地とあつて、この事あからさまに出雲へ聞えては、買ひ論の相手は、萩塚お出入りの町人藤屋伊左衛門、權威を振ひ、もし伊左衛門へ戀の意恨を含みなば、藤屋の家の一大事と、さまざまと心を苦しめ、喜左衛門夫婦と密かに申し合せ、去年の秋より病氣と云ひ立て、我が家へ引取り、妹夕霧は正月六日に相果てしと、今日までも云ひ觸らし、さてこそ庵主をお頼み申し、人目を憚り佛間の住居。世に謳ひし事は裏表、樒で伽羅の香を隱す、其方が辛抱、ハテ、出かしたなア。

先夕　イエ、わたしや、なんぼう褒められても、いつまでも此やうに佛さまになつてゐる事は、否でござんす。なんぢややら、伊州さまのお爲ぢや〱と、お爲ごかしに死んでゐい〱と、わたしや、根ッから合點がゆかぬわいなア。

要助　某、一年武者修業の志しあつて、本國を出でし後、母の大病、其方が縁によつて、伊左衛門がおろそかならぬ看病、人參の藥力で、一度は母の全快、いつの世にかこの恩を送らんと思ふ折柄、先頃住吉に於ての災難、折よく來合せ、後の夕霧の身請けして、一旦その場を落せしは、恩を思ふ身が存念。この頃に樣子を聞けば、京大佛寺町の閑居に引込み、後の夕霧もろとも、世を忍ばるゝこと事、其方にも、この由を申し聞かせ、安堵させんと參つたのぢやわい。

ト夕霧恟りして

先夕　エヽ、なんと云はしやんす。そんなら二人一緒に……サア〳〵、こりや大抵の事ぢやござんせぬわいな。

ト無性に腹立てゝ、立つたり居たり、いろ〳〵する。

要助　コリヤ〳〵妹、何をザワ〳〵立ち騒ぐ。伊左衛門どの、堅固の様子を聞き、喜びはせいで、こりや何事ぢや。

先夕　なんの、これが喜びどころか。こちや腹が立つて立つて、どうもからもならぬ事ぢやござんせぬ。兄さん、一體お前が、済まぬわいな〳〵。

トいろ〳〵振り廻す。要助、迷惑こなしあつて

要助　コリヤ妹、なんとする〳〵。

先夕　なんとするとは、その後の夕霧といふは、わたしが妹女郎初花、それをお前が身請けして、伊州さまと一緒に、なぜ京へやらしやんした。

要助　されば、伊左衛門どのへ、だん〳〵の御恩報じ、二つには、邪智深き濱田出雲、それ程に致したればこそ、其方の死んだるを誠と思ひ居つたではないか。

先夕　サア、その出雲づらは、先度死んだではないかいなア。そんなら、誰れに遠慮はござんせぬ。これから京へ行て、妹女郎を女房に持たしやんした、怨憤を云はねばならぬ。

ト帯引きしめ、身拵らへする。

要助　南無三。こりや、いかう佛が荒うなつて来た。

庵主　至つて慎しむべきは婦人の嫉妬。未来恐ろしうござるぞえ。

先夕　エヽ、腹が立つてからといふものは、未来どころぢやござんせぬ。あなたでも、大事の殿御を寝取られて見やしやんせ。なんと腹が立ちませうがな。

要助　コリヤ〳〵。庵主に大事の殿御があつてよいものかいやい。

先夕　あなたとて、女中様ぢやもの、覚えがなうていなア。大事の殿御を妹に取られ、誰れが知らぬ顔して居やうぞいな。

要助　サア、そこが後の譬への通り、知らぬが佛、見ぬが花。

先夕　イヽエ、いつまでも、さう佛さまになつてはゐぬ。誰れが見ても構やせぬ。こちや生きて出るのぢやわいなア。

要助　ハテ、困つた奴ではある。いま其方が生きて出ては、伊左衛門どのゝお爲にならぬ。お家の落着相濟ひ、あ

でたら本家へ歸られたら、その時こそ、奧樣にならるゝ
いま暫らくの辛抱ぢや。
先夕　イヽエ、辛抱も待つ事も、否ぢやによつて、生きて出るぞ〳〵。
要助　ハテ、さう云はずと、死んで居てくれい。兄が頼みぢや。
先夕　サア、その兄さんの頼みぢやに依つて、今日まで死んでゐたぢやないかいなア。
要助　サア、その死次手に、いま暫らく死んで下されといふ事ぢや。全體、佛といふものは、至極結構なものぢやが、此やうに腹を立てゝは、とんと致し方がない。御庵主、どうぞ死んでくれる引導は、無いものでござるか。
庵主　わたしも勝手が違ひまして、困つてゐますわいなア。
先夕　イヽエ、例へお釋迦さまが、挨拶さしやんしても、堪忍する事ぢやござんせぬ。
要助　さう云はずと、浮んでくれ。
先夕　イヽエ、生きて出るわいなア。
ト此うち、傳兵衛出て、
傳兵　晝中に門を閉めて、こりや、なんぢや、頼みませう頼みませう。
トけはしく叩く、要助恟りして
要助　コリヤ〳〵、大事の所ぢや。早う〳〵。呼び出す合圖はこの木魚、これ打つまでは、出る事ならぬぞ。
先夕　そんならどうでも、佛樣になるのかいなア。
要助　暫らくぢや。
ト傳兵衛、頻りに叩く、
イヤ、今お勤めの最中ぢや。御庵主、念佛〳〵。
ト庵主、木魚を叩く。
庵主　なむあみだ〳〵。
要助　なむあみ
庵主　なむあみ
兩人　なむあみだ〳〵〳〵。
ト責め念佛に、夕霧を無理に追ひ立てる。夕霧、不承不承に不念佛にて、佛壇へ入る。要助吐息をつき
要助　ヤレ〳〵、佛を浮かめるも、餘ほど苦勞なものぢや。
傳兵　頼みませう〳〵。
要助　御庵主、早く〳〵。
庵主　合點でござりまする。

ト庵主、門を開き

けたゝましい、誰れぢやぞいなう。

傳兵　イヤ、誰れでもない。私しでござりまする。

庵主　こなたは出入りの

傳兵　八百傳でござりまする。晝日中に門を締めて、こりやマア、何事でござりまする。

庵主　イヤ、そりや、なんでござる。ちと內々で勤めねばならぬ法事があつて。

傳兵　エヽ、それで白晝に門をさいて、

庵主　さうでござる。

ト傳兵衞、合點のゆかぬこなしにて、クル〳〵見廻す。要助は、素知らぬ顏にて、煙草盆を扣へゐる。傳兵衞、要助を見て、胡散らしう顏を覗く。

要助　この町人は、何か胡散らしく、武士の顏を覗き、失禮千萬

傳兵　イヤ、ちと尋ねる者がござゐまするゆゑ。もし、その者かと存じましての事。御免なされませ……年恰好と云ひ、これでもあるまい。

要助　ハテ、無法な男ではある。

ト此うち石屋仁兵衞、橋がゝりより出て、傳兵衞を見て

仁兵　傳兵衞さん、爰にか、一遍と尋ねて居りました。三百八十目で極めて、手附けはやう〳〵貳步受取り、お望みの通り、あの夕霧が石塔を立てました。お顏がお顏ぢやに依つて、今日まではお待ち申したが、ちと金子が入用にござりまする。殘りの金、お拂ひ下さりませ。

傳兵　貴樣も、よう思うて見い。節季にもならぬのに、金拂へとは、なにか、おれに掛けて置くは、覺束ないと云ふのか。

仁兵　イエ〳〵、左やうではござりませぬ。全體、石塔の代金は、掛けには致しませぬなれども、お前樣のお顏たけで、待つて居りましたのでござりまする。

傳兵　よいわいの。晩にでも、明日にでも、內へ取りにごんせ。拂ふわいの。

仁兵　それは、有り難うござりまする。左やらならどうぞ、間違ひませぬやうに。

傳兵　ハテ、八百傳ぢやわいの。

仁兵　エヽ、成る程〳〵。

ト橋がゝりへ入る。

庵主　傳兵衞どの、こなさんであつたか。

傳兵　成る程、夕霧が石塔の施主は、私しでござります。

庵主　ハテナア。

要助　して、其許は、夕霧とやらに、なんぞ由縁の人でござるか。

傳兵　イヤ、夕霧に由縁はないぢや。

要助　それに又、石碑を建てる志しは。

傳兵　サア、これには段々仔細があるぢや。

要助　して、その仔細は。

傳兵　高が斯うぢや。石原三位どのといふが、後の夕霧に惚れて、萩塚の家老、野口藏之進といふ者を賴んで、段々と口說いたところが、藤屋伊左衞門といふ蟲が附いて、得心せなんだぢや。そこで三位どのも、けたいが惡さに、藏之進をいぢめられた所が、藏之進は短氣者にて、その公卿をバッサリいはしてしまうたぢや。この元の起りと云ふは、藤屋伊左衞門、聞けば後の夕霧を連れて、どつちやらうせたとの事。その伊左衞門めを探し出してくれと、三位さまの家來、醒ケ井藤馬どのがお賴み。伊左衞門さへ引ッ捕へたら、大枚のれこになる仕事ゆゑ、あの通り、石塔の元手を入れたれば、先夕霧が菩提の爲、石塔が建つたと聞いたら、てつきりうせるであらうと、智惠を振うた、おとりの石塔。様子といふは、マア、こんなものぢやて。

ト要助、思ひ入れあつて

要助　それで様子が相分つた。して、其許は、伊左衞門とやらが面體を、よく存じゐらるゝか。

傳兵　イヤ、皆目顏は知らねども、年恰好、面ざしは、とつくりと聞いてゐまする。

要助　ハテ、それは覺束ない尋ね者、殊さら其許は町人、權威がなくては、なか／＼詮議はなるまい。幸ひ身共は伊左衞門と遊所に於て、一兩度も出合ひ、よく面體存じ居れば、この刀の威光を以て、詮議いたして遣はさう。

傳兵　これは幸ひ、すりや、あなたが面體を。

要助　イヤモウ、詳しう存じ居る。

傳兵　ハテ、話して見まいものでもないワ。そんならあなた様が

要助　刀の威光、お目にかけう。

傳兵　マア、値がなつたワ。

要助　まだ談ずる儀もあれば、何にかは奥で。

庵主　要助さま。

要助　傳兵衞どのとやら。

傳兵 先づ／＼お先へ。

要助 御庵主、御免下されい。

ト唄になる。庵主、要助、傳兵衛。奥へ入る。

ト在郷唄になり、向うより伊左衛門、着流し、三尺帯、菅笠にて、顔を覆ふ心にて出て

伊左 なんぼう夜の短かい時分ぢやというて、此やうに遲う角の消く事もあるまい。さうして、人に逢ふまいと思うて、廻り道して來たが、ア、、嬉しや、もう爰は下寺町。噂に聞いた正念寺は爰らの筈ぢやが。

トそこらを見て

オ、、爰ぢや／＼。

ト寺を覗き

あそこに建つてあるのが、夕霧の石塔であらう。噂の通りに逢ひもなし、せめてこの世が逢ふ心。それ／＼。

ト塚の前へ行かうとする。奥にて

要助 イヤ／＼、御酒は不得手でござる。よしにしませうよしにしませう。

伊左 ヤア、ありや夕霧が兄、要助どのゝ聲。住吉の難儀の時、後の夕霧を身請けして、大坂の地を立退けと、段々の深切、それに、おれが今逢うては、志し無足にたると云うて、切角下つて、墓へも參らずに去なれもせまい。どうぞ、要助どのゝ去なるゝまで、どこぞに隠れてゐたいものぢやが。

トいろ／＼そこらを見廻し、ト門前にある駕籠を見附け

幸ひの辻駕籠、さうぢや／＼。

ト駕籠の中へ隠るゝと、橋がゝりより太助出て

太助 大さうなものぢやによつて、まんざら盗みもせなんだ。相棒の來るまで、孔雀茶屋へでも行て、戻りを張らう。

ト駕籠をゆするに、重きゆゑ、合點ゆかぬこなしあつて

ハテ、合點のゆかぬ。空駕籠がえらう重うなつた。

トそつと垂れを揚げ、内を覗き、伊左衛門を見て、ハツと飛び退く。伊左衛門、垂れを揚げて

伊左 大事ない者ぢや／＼。

ト太助、これにて落ちつく。

コレ／＼、大きた聲せまい。ちつと様子のあつて、逢ひとむない人があるゆゑ、ちつとの間、隠れてゐるのぢや。頼む／＼。

太助 ムウ、そんなら大事ござんせん。あつたら體を菜種

にしたわい。そんなら爰で戻りを張らうか。
ト在郷唄になる。橋がゝりより、旅人の仕出し、花道へ行きかゝる。
旅人　親方、住吉へ行きませうか。戻りぢや、酒手で行きます。
太助　住吉を、なんぼで行く。
旅人　げんこ貰ひませう。
太助　五百ぢや、談合がならぬ。二百ぢや〳〵。
旅人　二百では、どうも行けません。
太助　エヽ、もう五十はずめ。
旅人　じぼ半とは、安いものぢや。
太助　ト駕籠の前へ來て
申し、駕籠を貸しました。出て下さりませ。
ト伊左衛門、駕籠の内より
伊左　この駕籠は、おれが借りぢや。ソレ駕籠代。
ト一歩を出して、太助に見せる。太助取つて
太助　こりや、金一歩ぢや。二百五十で住吉へ行かうより、うまい仕事ぢや。
旅人　サア、駕籠はどうぢや。
太助　お氣の毒ながら、此方へ談合が出來ました。
旅人　そんなら、もうやらぬか。

太助　こちらが先でござりまする。
旅人　なんの事ぢやい。
ト呟きながら入る。
ト太助、駕籠の脇に笠を尻に敷き、合羽の莨入れの上に、右の一歩を載せ置くと、橋がゝりより、旅人の仕出し、向うへ行きかゝる。
太助　親方、戻りぢや。乘つて下さんせぬか。
旅人　安立町まで、いくらで行く。
太助　升六もらひませうかい。
旅人　これぢや〳〵。
ト指三本出して見せる。
太助　三百はあんまりぢや。もう五十やらんせ。
旅人　五十の事なら、どうともせう。早う〳〵。
太助　イヤ、もう直でござります。
トまた駕籠の側へ來て
申し、駕籠貸しましてござります。
ト伊左衛門、太助が置きたる煙草入れの上の一歩をソツと取り、ひれくり廻して見せる。太助、うまいと云ふこなし
イヤ、親方、五十の酒手では行きませんわい。

旅人　たつた今、行くと云うたではないか。
太助　イヤモ、五百でも、壹貫でも、値がならぬ〳〵。
旅人　此奴、狂人ぢやさうな。
　ト呟き、これも向うへ入る。太助、金を取つて、無性に喜び、また煙草入れの上に置く。
　トまた橋がゝりより、旅人出て、向うへ行きかゝる。
太助　親方、堺を酒手で行かうか。
旅人　イヤ、酒手まで、いくらで乘せる。
太助　やみぢや〳〵。
旅人　こりやえらい。五百で行け〳〵。
太助　それでは、どうも。
旅人　ならぬか、百はずんで六百ぢや。
　ト此うち伊左衞門、また右の一歩をソッと取つて、捻くり廻してゐる。太助フトこれを見る。
太助　六百では、値がならぬ〳〵。
旅人　そんなら、八百やるワ。
　ト伊左衞門、矢張り一歩を捻くり廻して見せる。
太助　イヤ、八百でも、値がならぬ〳〵。
旅人　アヽ、ないワ、われが云ふ通り、九百出さう。
　ト伊左衞門、頻りに捻くり廻す。

太助　イヤ、九百でも値がならぬ〳〵。例へ如何ほど貰うても、斷わり云うて、行かんのぢや。
旅人　此奴、きつい馬鹿な奴ぢやな。なんの事ぢや。とんと合點がゆかぬ。
　ト呟やき、向うへ入る。太助、右の金を取り、無性に喜び、煙草入れの上に置かうとして、初手の金がないゆゑ、恟りして
太助　ヤア、爰に置いた金がない。誰れも取らう筈がないが、ハヽア、聞えた。こいつは鳶めが引ッかけたか。晝鳶というて、此あたりは油斷のならぬ所ぢや。とんと夢に金拾うたやうな心持ちぢや。ハテ面妖な。
　ト合點のゆかぬこなし。橋がゝりより、才助出て
才助　太助、其方の噂に、氣が附いたと云うて、呼びに來た。早う戻れ〳〵。
太助　そりや、捨てゝ置かれぬ。
才助　サア〳〵、早う戻れ。
　ト橋がゝりへ入る。
　ト合ひ方になる。伊左衞門、駕籠よりソッと出て
伊左　アヽ、嬉しや。誰れも、見咎めはせなんださうな。
　トあたりを窺ひ

要助どのの聲もせず、この間にせめて手向けなりとも。
ト花手桶を持つて、塚の前へ行き、水を手向けて
花岳芳春信女、俗名伊霧。果敢ない身になつてたもつた
なう。
ト少し憂ひのこなしにて、稱名する。傳兵衛、奥よ
り出て
傳兵　見りや、こなさんは、夕霧が塚へ參つた樣子。こな
さんは夕霧が由緣の人か。
ト伊左衛門、こなしあつて
伊左　イヽエ、なんでもござりませぬ。
傳兵　イヤ、合點がゆかぬ。面ざし恰好。こなさんは藤屋
伊左衛門どのぢやの。
ト伊左衛門、ギックリして
伊左　イヽエ、左やうな者ではござりませぬ。
傳兵　イヽヤ、大概注文の合うた恰好、伊左衛門に違ひは
ない。此方へうせい。
ト引立てにかゝる。要助、ツカ〳〵と出て、傳兵衛を
引き廻し
要助　いらざる町人の詮議立て。この詮議は、身共がする。
傳兵　成る程、おれは町人、詮議はせぬ。刀の役に、こな
たが詮議、ドリヤ、これにて見物せうか。
トこの時、伊左衛門、要助を見て
伊左　ヤア、あなたは、宇田要助さま。
ト云はうとするを、要助押へて
要助　イヤサ、諸用あつて當地へ參つた伊丹の鬼貫。
伊左　エヽ。
要助　見ず知らずの若いお人、長居すれば如何やうな災難
を受けうもしれぬ。早く去んだがよささうなものぢやぞ
や。
ト呑み込ます。伊左衛門こなし。
傳兵　コレ、要助さま、伊左衛門と疑ひのかゝつた其奴。
とつくと見極め、なぜ詮議さつしやれぬ。
要助　イヤ、詮議はならぬ。
傳兵　でも、刀を差いた、こなたの役目。
要助　イヽヤ、武士でない。
傳兵　武士でないとは。
要助　おりや伊丹の鬼貫といふ、世を遁がれたるそとした
俳人。
傳兵　それに又、宇田要助と名乘つたは。
ト要助、大小を前に置いて

要助　斯う丸腰になつたれば、風雅に遊ぶ伊丹の鬼貫。まして伊左衛門でもない人を、いかめしく丸腰で、詮議もならぬ。

　ト傳兵衛、思ひ入れあつて

傳兵　面白い。詮議がならざ

　ト要助が差したる大小を取つて

侍ひになつて詮議せうわい。

要助　その二腰は、宇田要助といふ武士の魂ひ。人手にかけさうか、馬鹿な事を。

傳兵　すりや、要助になつて、この詮議を

要助　イヽヤ、宇田要助はこの二腰、おれは伊丹の

傳兵　なんぢややら、どぎ／＼と譯が知れぬわい。

要助　コレ、お若いの。今も聞かつしやろ通り、藤屋伊左衛門といふ人を、見附け出さうと鵜の目鷹の目。その中へこなさまのやうな、年恰好の似た人が居れば、どういふ災難を受けうも知れぬ。尤も、戀しい床しいと思ふあの夕霧が塚、イヤサ、云はねど聞かねど、幻しになりとも逢ひたいと、はる／＼都より東へ下りし、梅若が塚の柳に泪の雨、その恩愛の通じてや、閻浮に歸り、一度は母に見えし梅若が魂ひ。折と時節が肝心。

　ト思ひ入れあつて、石塔の前に立てし塔婆を取つて來て、矢立の筆を取り、塔婆の後へ發句を記し

こりやコレ鬼貫が、この塚へ手向けの一句。

　ト伊左衛門に見せる。伊左衛門讀み下し

伊左　この塚は柳なくとも哀れなり……一句の心は。

要助　梅若に事ふり變り、塚の柳はなきとても、どうで逢はるゝ

伊左　エヽ。

要助　イヤサ、哀れを含む一句の心。

傳兵　どうでも胡散な。

　ト伊左衛門にかゝらうとする。要助、引き廻して

要助　何分、この場は歸られい。

　ト唄になる。傳兵衛、おこつくを押へながら奥へ入る。伊左衛門殘つて、あと合ひ方になる。こなしあつて

伊左　梅若の譬へを引き、柳なくてもあはれ……あはるゝ

　ト思案して

心ありげな當座の五文字。こりや滅多には云はれぬわい。

　ト雨車になる。

南無三、こりや降り出して來た。どうぞ暫らく。

　ト見廻し

幸ひ／＼

ト門の隅にかゝると、暮れ六ツの鐘鳴る。

これで暫らく、雨を凌がうか。

ト矢張り雨車になる。向うより智妙、鐃鉢をだかへ、走り出て花道よき所にて

智妙　北の方から眞黒になつて來たと思うたら、たうとう降り出した。ヤレ／＼、氣の急いた事ではある。

ト本舞臺へ來て

申し、お前は何をして居やしやんす。もう暮れ六ツぢやによつて、門を締めますぞえ。

伊左　イエ、わたしは、ちつとこの寺内に、居ねばならぬものでござりまする。

智妙　イヽエ、寺にゆかりのあるお方でなければ、夜に入つて門内には、置かれませぬわいなア。早う出て下さんせ。

伊左　イエ、どうも出られませぬ。

智妙　出られませぬとはえ。

伊左　アイ、雨が降ります。雨具はなし、それでどうも、出て行かれぬでござりまする。

智妙　オヽ笑止。傘がなうて行かれずば、貸して上げるによつて、そこに待つてゐやしやんせ。

ト鐃鉢を二重舞臺へ殘し、奥へ入る。

ト伊左衛門、後見送り

伊左　傘借つたら、大方去ねといふであらう。どうぞ傘借りとむないものぢやが。

ト雨車かすめる。奥より婆月、下寺町正念寺と書ける傘持ち、智妙附添ひ出る。

婆月　智妙さま、何を云はしやんすやら、誰れも爰には居ぬぞえ。

智妙　たつた今、そこに居てぢやあつた。

ト婆月、伊左衛門を見て

婆月　傘が借りたいと仰しやるは、あなたでござりますかえ。

伊左　どんな事ぢや、存じませぬ。

婆月　智妙さま、あなたではないさうなぞえ。

智妙　イヤ、あのお方ぢや。

ト智妙、傘を取り

サア、申し、傘貸して上げるによつて、早う行かしやんせいなア。

伊左　イエ、もう雨は晴れたさうにござりまするによつて、傘は貸らいでもようござります。矢ツ張り爰に、雨

宿りの方がようござりまする。
智妙　ほんに、をかしい事を云ふお方ぢやわいなア。
　トまた婆月、傘を取つて
婆月　なんぼう降りやんだやうでも、ツイ降り出しますよつて、矢ッ張りこの傘を持つて行かしやんせいなア。
　ト傘を差出す。
伊左　これは又、迷惑な。どうでも借らねばならぬかな。
　ト傘を取り、婆月をヂッと見て
ても、惜しいものぢや。
婆月　惜しいとはえ。
伊左　イヤサ、惜しいといふは、この傘。
　ト開き
なんぼう番傘でも、まだ新らしい油の乗つたこの傘さすのは、惜しいと云うたのでござります。
　ト婆月を見て云ふ。
婆月　なんぼう新らしいても、番傘でござりますわいなア。
智妙　それ／＼、こちの庵主さまは、大抵枯らしてあつた傘ぢやござんせぬ。
婆月　大方、十四五年にもならうわいなア。
伊左　イカサマ、十四五か十五六かに見える。もうコレ、丁度よい濡れしゆんぢやが。
智妙　なんのマア、あんまり枯れ過ぎてあるわいなア。
伊左　イエ／＼、十五六から、そろ／＼と濡れるがよいぢや。それをまそつと、早う濡らしかけると、怪我をするぢや。
婆月　アノ、傘が怪我するかえ。
伊左　怪我をする段ではない。
　トまた雨車、大太鼓、ドロ／＼と鳴り出す。伊左衛門悧りして
サア／＼情ない。初雷ぢやさうな。
　ト大太鼓きびしくある。婆月、伊左衛門の傘の下に入る。
婆月　こりやマア、なんとせうぞいなア。
伊左　お前より、わしが雷嫌ひぢやわいなア。
　ト次第に大きうなる。智妙、耳を押へながら
智妙　こりやモウどうも、爰にはゐられぬわいなア。
　ト奥へ駈け込む。伊左衛門、婆月もいろ／＼怖がる事あるよき時分に雷、静かになり、両人落ちつきこなし
伊左　ア、嬉しや、大分鳴りやんだ。併し、また鳴り出さうも知れぬ、今夜はお寺に泊めてもらうて、お前の雷嫌ひと

わしが雷嫌ひと一緒に、寝ようぢやあるまいかいなア。
　ト寄り添ふ。
婆月　申し、何なされます。わたしや、そんな事は存じませぬわいなア。
伊左　存じませいでは、死んでから、賽の川原で迷ふぞえ、わしや、そのお前の迷ひが晴らして上げたいわいな。
婆月　申し、大きい聲なされまするると、庵主さまに叱られまするわいなア。
伊左　なんの、未來を助ける事を、誰れが叱らう。南無阿彌陀佛々々々々々々。
　ト木魚を叩きながら、婆月を付け廻す、婆月怖さうにする。雷ドロ／＼になる。伊左衛門、木魚を叩き、念佛申すと、このドロ／＼をかつて、先の夕霧、佛壇よりズッと出る。婆月、悄りして逃げて入る。伊左衛門、夕霧を見て
伊左　ヤア、其方は夕霧。
　トなつかしさうに寄らうとして、死んだ事を思ひ出し又ゾッとしたるこなしにて、慄へながら、口の内にて稱名する。
先夕　伊左衛門さま、戀しい／＼と思うてゐたに、お前は聞えぬお人ぢや。
伊左　イヤ、今のはフトした出來心ぢや程に、堪忍して、どうぞ成佛してたもいなう。
　ト夕霧、ドロ／＼をかり、伊左衛門を付け廻し
先夕　わたしがこの世に居ぬと思ひ、妹を女房に持ちたから、まだ悪性がしたらいで、尼御を捕へてアヽ悪性な。アヽ厚かましい。アヽ胴慾な心でござすんなア。
　ト伊左衛門に取りつく。伊左衛門、ハッと云うて、飛び退かうとする。夕霧、裾を持ちながら泣く。傳兵衛出かけ
傳兵　さてこそ伊左衛門、幽靈の正體。
　トかゝらうとする。要助ズッと出て、傳兵衛を引き廻し、見事に投げ、夕霧を無理に佛壇へ押し入れる。傳兵衛起き上がつて
ヤア、夕霧は。
伊左　もうこの世を去つたか。ハア。
　ト泣き落す。傳兵衛かゝらうとするを、突き廻して手早く鐃鉢を取り、グワンと合す。傳兵衛、耳を押へ、ベッタリへたる。伊左衛門、怖々合掌して
伊左　南無阿彌陀佛々々々々々々。

ト兩人よろしく、引ッ張りにて

幕

三　段　目　　室の港漁師内の場

役名――萩塚萬治郎。山伏、觀壽院。岩成主税。漁師、平作、鍔子、淡路。娘、小櫻。同、梅ケ枝。息女、有明姫。藥子、千代野。傾城、玉琴。曳舟戸川。乳人、若草。海女、おなみ。小坂部彌三郎信久。桑名太郎左衞門の靈。漁師、磯六實ハ野口藏之進。

造り物。平舞臺、見附け赤壁、納戸口。臆病口、筋違ひに、堀付きの板塀、切り戸出入りある。この上に見越しに隣りの物干し見ゆる。橋がゝり、切り幕の上、同じく隣り家の物干し。橋がゝり、落ち間寄せて塗垂れ、この所にも出入りの切り戸ある。いつもの所に門口、すべて室の港、漁師の内の體。幕の内より親仁平作、寢腹這ひながら、煙草のんでゐる。出たらめの仁造、實は觀壽院、鼠っどてら、麻上下、側に百兩包みを置き、下の方に大物永助、實は岩成主税、同じく木綿やつし、麻上下、側に二升樽を置き、双方ゐる。踊り三味線にて幕ひらく。

觀壽　親仁どん、返事してもらいたい。

主税　こちらの返事は

兩人　どうぢやぞいなう。

平作　アヽ、やかましい。隣の女郎屋で、小びつちよどもが三味線の稽古、朝七ツから寒聲でおだてくさる。今ところとろとやりかけた所へ、一體、貴樣達は、どこから來たのぢやぞい。

觀壽　イヤ、おりや、隣り村の出たらめの仁藏といふ者、噂の高いこなんの娘。

主税　海女仲間で、一番の品者。音に聞いて、この大物永助か。

觀壽　爰の内の入り聟になりたさ

主税　お娘を女房にもらはうと思うて。

觀壽　それで今日、わざ／＼出かけて來た。

主税　ちつと押つけがましいが、頼みのしるしの貳升樽、めでたう納めてもらはうわい。

平作　ムウ、何事かと思や、娘のおなみを女房にくれいとな。

兩人　アイ、どうぞ、聟入れて下んすまいか。

平作　イヤ、和御寮達は、聞かぬか知らんが、彼奴が、どこでやら、懇ろ男を拵らへて、この春から引摺り込んだ聟の磯六、定まつた男があれば、相談はちと出來憎い。

親壽　されにいの、それぢやに依つて、敷金のこの百兩。

平作　ヤ。

ト悄りして起き上がる。

親壽　親の威光で磯六をぼいまくり、おれを聟に取れば、こゝな身代も大きくなるといふもの。

平作　こりや大分耳寄り。ハテ、何をするも、みな金づく。

親壽　得心して、聟にするか。

平作　殊に依つたら談合しようが、又こちらの和郎は。

主税　オツト皆まで云ふまい。貳升樽ばかりぢやない、しつかりとした土產がある。

平作　土產見ようか。

主税　見せうか〳〵。

ト懷中より一通出して

土產といふは、この一通。

ト平作取つて開き見て

平作　イカサマ、こりや大金になりさうな代物。

主税　なんと、それを賴みのしるしとして

平作　こいつも滅多にや手放されぬ。

親壽　そんなら、おれが百兩は。

平作　娘遣らう。

主税　こちの土產は。

平作　聟にとらう。

親壽　アノ一人の娘に

主税　二人の花聟。

平作　サ、そこが談合。百兩の賴みのしるしを、マア、おれが預かつて置いて、娘にも得心させた上、値のならぬ方へ戾しさへすりやよいぢやないか。何がなしにこの一通は。

ト懷へ入れようとする。主税引き取り

主税　祝言したその上でなけりや、この一通は渡されぬ。

平作　尤も。そんなら、こちらの

ト百兩包みに手をかける。

親壽　イヤ、娘を抱いて寢た上で、敷金も渡さうかい。

平作　これも尤も。是非一方へは遣るといふ

主税　改めて固めの杯。

平作　お持たせの貳升樽。

親壽　奧で、そろ〳〵始めませうか。

平作　二人の聟どの。

兩人　舅どの。

平作　後から、行きませうわいの。

ト唄になり、兩人奥へ入る。向うより舞子の淡路、娘小櫻、同じく梅ヶ枝、息女有明姫、藥子千代野、傾城玉琴、各々、洗ひ髮、海女の形、腰簑に目籠を持ち出る萬治郎、着流しにて長煙管を持ち、曳舟戸川、乳人若草、同じく海女の形にて、戸川、蒔繪の貫盆を持ち、若草は塗り櫂を持ち、後より出る。おなみ、これも海女の拵らへにて、備中鍬の先に藁苞を掛け、各々花道よき所にて

有明　申し、伊州さま、濱邊での酒も、氣が變つて面白かつたではないかいなア。

玉琴　どうでも、酒が過ぎたかして、足元が危ないわいなア

皆々　もそつと靜かに歩かんせいなア。

萬治　イヤ、大事ない〳〵。なんぼう醉うても、轉ける氣遣ひはないわいやい。

小櫻　ほんに、その氣遣ひのない次手に、たんと隙が入つたによつて、去んだら定めて平作さまが、また叱らしやんすであらうわいなア。

なみ　そりや大事ござんせぬ。わたしが取つて戻つたこの蛤を、皆さんの目籠へ、分けて上げるわいなア。

戸川　そんなら皆さん、氣遣ひなしに

皆々　去なうわいなア。

ト右の鳴り物にて、皆々、本舞臺へ來て、おなみ、畚より蛤を出し、めい〳〵に目籠へ分けて入れる。有明姫、玉琴、萬治郎が腰の物を取り、小櫻、結構なる褥を、上手へ敷く。萬治郎、その上に直る。

なみ　父さま、いま沖から

皆々　戻つたわいなア。

平作　いま戻つたどころかい。見りや、練り物のやうな形で、ぞべ〳〵と、今まで何をしてゐたのぢや。

なみ　何をしてゐやうぞいなア。お前の云ひつけで、蛤取りに行たのぢやないかいなア。

平作　ハテ、權柄にやつたワ。ドレ、皆の漁を見ようか。

なみ　ソレ、皆さん、お前方の精の出たのを、見せさしやんせいなア。

皆々　合點でござんす。

トめい〳〵平作が前に、籠を並べる。

なんと、精が出てござんせうがな。

ト平作、改め見て

平作　取り集めて一升あまり、三百にも足らぬ仕事。喰ひ潰しではあるわい。

萬治　イヤ、モウ、今日は砂道で、草臥れた／＼。コリヤコリヤ親仁、足を撫れ／＼。

ト平作ムッとする。

なみ　ソレ、父さま、伊左衛門さまが、足を撫れと仰しやるわいなア。

平作　なんぢや、足を撫れ。イヤ、撫るまいわい。この和郎に大坂の分限者、藤屋伊左衛門ぢやというて、去年からの掛り人、尤もこの春までは、一家からというて、養ひ料も來たれど、あの聟が來てから此方、養ひというては、粒一文來ぬぞよ。

なみ　サア、それは、なんぢやわいなア／＼。アヽ、それそれ、御一家衆に取込みがあつて、久しう音づれなんだ代りに、一時にお金を、たんと持たしておこさうと、大坂から便りがあつたわいなア。

平作　なんぢや。一時に金をおこすと、大坂から云うて來たか。

なみ　あなたの御機嫌が損じると、そのお金が來ぬぞえ。

平作　ハア、こりや足を撫らずばなるまい。

萬治　どうぢや。親仁、撫らぬかいやい。

平作　撫ります／＼。アヽ、金に使はるゝ身ぞ辛やぢやなア。

ト不承々々に、萬治郎が足を撫る。

萬治　オヽ、出かす／＼。

平作　娘、違ひはないな。

なみ　金ぢやわいな。

萬治　もうよい／＼。なか／＼出かし居つた。褒美に、これ遣ろ／＼。

ト平作、無性に喜ぶ。萬治郎、懐より香包みを出して見せる。

なみ　ソレ、父さま、頂かしやんせ。

ト平作、恭々しく取つて見て、忌々しいといふこなしにて、懐中する。

萬治　大分、肩が痞へて來た。親仁、ちと肩を揉んでくれい。

ト また平作ムッとする。

なみ　ソレ、父さま、金でござんすぞえ。

平作　嘘ぢやないかよ。

なみ　金ぢやわいなア〳〵。
平作　なか〳〵金の種蒔といふものは、しんどいものぢや。
　　ト云ひ〳〵、萬治郎が後に廻り、肩を揉みにかゝる。
萬治　オヽ、大分素直な親仁ぢやわい。褒美を遣はさう。
なみ　父さま、褒美を遣らうと仰しやるぞえ。ちやつとお禮を申さんせいなア。
平作　エヽ、有り難うござりまする。
萬治　マア、褒美には、何を遣らうぞ。衣服にせうか、馬を遣らうか、武具大小がよからうか。
　　ト平作、肩を揉みながら、喜ぶこなし。
　イヤ〳〵、武士でなければ、左やうな物、欲しくはあるまい。海邊に居れば、大船を造らしてくれう。
　　ト平作、滅多に喜ぶ。
平作　エヽ、有り難う存じまする。
萬治　先づ、當座のしるし、これをくれる。
　　ト楊枝差しを出す。平作、恭々しく取つて、また不承不承に懐へ入れる。
　コリヤ、皆の者、この間から禿どもが來て、敎へ居つた騒ぎ唄、鄙めいて面白い。彈いて聞かせい〳〵。

玉琴
皆々　イヽエ、まだとつくりと覺えぬよつて、習うてから彈くわいなア。
萬治　ハテ、初心な奴ではあるわい。覺えぬ所もまた一興、早う彈け〳〵。
なみ　皆さま、御意のそこねぬうちに、彈かしやんせいなア。
平作　師走せつぱくに、珍らしうもない田舍唄、耳やかましうて、聞き飽いてゐるわい。
萬治　ハテ、野暮な奴ではあるわい。その鄙びた所が、氣が變つて面白い。サア、皆始めい〳〵。
　　トこれより皆々彈き立て、同じなる節を繰りかへす。萬治郎、玉琴が膝を枕に横になる。平作こちらへ立つて來て
平作　どうやら斯うやら、寢られるさうな。ヤレ〳〵、しんどや〳〵……ほんに皆の者、伊左衛門どのは、もう寢られるさうな。三味線は、よしにせんかな。夜は夜とて七ツから、隣りの寒聲で寢さゝず、せめて晝なりとも聞きとむないわい。
なみ　サア、それも矢ツ張り金でござんすわいなア
平作　イヤ、おりや呑み込まぬ。なぜと云へ、元おれは云

の内へ入り聟の平作、わりや前の平作どのゝ娘なりや、おれとは生さぬ仲ぢやによつて、われが云ふ事は、どうも誠にならぬ。

なみ　サア、その生さぬ仲ぢやによつて、義理にも嘘が云はれぬぢやござんせんかいなア。

平作　そんなら眞實

なみ　お前に金があげたいわいなア。

平作　ハテ、孝行な娘ぢやなア。

なみ　見れば、すや〳〵寢入つてござるさうな。濱風が吹き込んでお寒からう。奥へ連れてまして行かしやんせいなア。

玉琴　申し、伊州さま、お目を覺まして、奥へ

皆々　起きさしやんせいなア……根ツからお目が覺めぬわいなア。

なみ　そんなら、障子をさし寄せて、お休め申したがよいわいなア。

皆々　アイ〳〵。

ト障子さす。

なみ　サア、この間に休息しませう。

皆々　さうせうわいなア。

なみ　サア、ござんせいなア。

ト唄になり、おなみ皆々を連れ、納戸へ入る。平作殘る。暮れ六ッの鐘鳴ると、直ぐに尺八入りの合ひ方になる。平作は後にて、いろ〳〵こなしあつて

平作　なんの事ぢや。掛り人が足を撫れい、イヤ肩を揉めのと、殿樣かなんぞのやうに、高が町人の伊左衞門。

ト思案して

併し、合點のゆかぬ人品骨柄、殊に彼奴を大切にする聟磯六が俗性。ハテ、どうであらうなア。

トこなし、始終右の合ひ方、これを變へて、向うより信久、虚無僧の拵らへにて出かけ、門口にとまり、竹をつける。平作、聞き咎めて

平作　思ひがけない虚無僧。但しは寒吹きなら、濱へ行かしやれ。

ト此うち信久、竹をやめて

信久　室の轡に隣れる賤ヶ家、漁りを業とする平作、在宿ならば、對面が致したい。

平作　成る程、漁師の平作は、わしでごんす。して、こなさんは。

信久　イヤ、世を憚る修行者。實名は明かされぬ。

ト平作こなしあつて

平作　御尤も。なんにもせよ、先づ〳〵これへ。

信久　罷り通る。

トずつと上がり通る。

平作　して、この平作を尋ねさつしやる、こなたの本名はな。

信久　岩谷源藤太、堅固で居つたな。

ト天蓋を取る。

平作　年來包みし我が本名、御存じなされし、その仔細は

信久　これ覺えがあるか。

ト二段目にて太郎左衞門が渡せし合ひ印を抛る。平作取つて

平作　この割符を所持なさるゝからは。

ト信久を見て、ズッと出て、表の戸を締め、合ひ方になる。

こりやコレ先達て、主人より雌龍丸の劍を預かりし節、お渡し申せし割符の印、これを所持してござるからは、

信久　小坂部彌三郎信久。

平作　すりや、主人の養育ありし、公達でござりましたか。

信久　堅固の對面、先づは重疊。

平作　ハッ〳〵。兼ねて主人太郎左衞門、君を守り立て叛逆の大望、その事ならずして無念の御最期。その頃、拙者船手の軍に在り合せ、落城と聞きしより、心ならずも引返せば、はや御主君刑部どのは討死。主人太郎左衞門は、若君を誘ひ行くへ知れずと士卒が知らせ。エヽ死なしたり、殘念や、その場を去らず、討死とは存じたれども、イヤ〳〵、一先づ立退き、御先途を見屆けんと、四國九州をさまよふうち、この家の主平作が死去の後、入り聟となつて、漁師のすぎはひ。强欲非道に貯へる金銀は、若君に巡り合ひ、まさかの御用に立てんが爲、然るに主人は、萩塚へ仕官の身の上、我が隱れ家をお聞きあつて、雌龍丸を預け置かれ、まさかの御用に立てよとありしも、思へばこの世の御遺言でありつるか。陪臣なれども主人の鬱憤、おのれ鳴戸之助が首を取り、供養に供へ奉らんと、齒ぐきを嚙んで見たれども、イヤ〳〵、某一人切り入つて、多勢の中に命を落さば、大切なる名劍も、空しく敵に渡さば無念の至りと、惜しからぬ命を長らへ居つたればこそ、不思議に今日、君に見ゆる老の喜

び、御推量下されませう。
信久　ホヽウ、健氣の老人、天晴れ忠節。某とても、その場に於て叛逆の色を隱し、一旦萩塚の館を立退きしは、劍を以て軍勢催促、味方を招き、先祖の無念を散ぜん、二つには、功無くして相果てし太郎左衞門が鬱憤、一時に散せん義兵の旗上げ。
平作　ホヽウ、お出かしなされて。老さらばうてはござれども、岩谷源藤太、一方を防ぎ奉らん。
信久　蜼龍丸の劍は、味方の吉劍。
平作　お渡し申すは、奧の隱居所。
信久　誠に今宵は、太郎左衞門が當れる忌日。せめて佛間で手向けの一曲。
平作　風吹きさらす埴生の泊り
信久　膝を入るゝも只一夜ぎり
平作　回向の竹は
信久　逆意の歌口
平作　しめし合すも
信久　味方の調子。
平作　我が君樣
信久　イザ、案內。

ト唄になり、兩人、上へ入る。
ト在鄕唄になり、向うより磯六、漁師の拵らへにて、
釣竿をかたげ出て、花道に立ちとまり
磯六　最前の一嵐で、沖から出して居たゞけ、ズップリと暮らしてのけた。
ト空を見て
ア、また曇つて來た。今日の入日の鹽梅では、今夜はどつかりと雪を持つて來さうな空ぢやわい。
ト本舞臺へ來て
いま戻つたぞや。女房ども／＼。
ト內へ入り、腰簑、草鞋など脫ぐ。
これはしたり、誰れも居ぬさうな。女房ども／＼。
ト內にて
なみ　アイ／＼。
ト云ひ／＼納戸より出て
なみ　オヽ、こちの人、今ま、ござんしたかいなア。
磯六　イヤモウ、とんと仕事の最中へ、南風が吹いて／＼吹き捲つたゆゑ、二時あまり龜島の蔭に舟を附けて居ただけ遲れたわいの。
なみ　さぞひもじうござんせう。茶々も焚いて置いたによ

つて、勝手であがらしやんせいなア。
磯六　イヤ／＼、岡山の元船で、酒をしたゝか吞んで、腹は慥かな。して、若殿樣は。
なみ　酒の御機嫌でやら、お休みなされてござんすわいなア。それはさうと、お前に話さねばならぬ事がござんすわいなア。
磯六　話さねばならぬとは、氣遣ひな事ぢやないか。
なみ　アイ、氣遣ひな事でござんす。
磯六　して、その樣子は。
なみ　サア、その譯と云ふはナ、父さまが、わたしに聟を取れと云うて、奥に二人まで來てゐるわいなア。
磯六　エヽ、びく／＼さすわい。それがなんの氣遣ひな事。女子といふものは、仰山なものではあるわい。
なみ　イヽエ、それでも片意地な父さま、モウ逹つてと云はしやんしたら、なんとせうぞいなア。
磯六　ハテ、おれといふ男のある其方、例へ男が無理にと云はれても、さうなるものではない。捨てゝ置いたがよいわいの。
ト障子の内にて、萬治郎、手を叩きながら
萬治　誰れぞ居るか、來いよ／＼。

ト磯六、聞きつけて
磯六　ソレ、お目が覺めたさうな。女中達を呼びや。
なみ　アイ／＼。
ト納戸口へ行つて
皆さん、お目が覺めたぞえ。
ト內にて
皆々　アイ／＼。
ト殘らず出て
玉琴　磯六どの、いま戻らしやんしたかいなア。
皆々　さうして、殿さんわえ。
ト大きな聲にて云ふ。
磯六　コレ。
ト押へる。合ひ方になり、こなしあつて、障子を開く。萬治郎、醉醒めのこなしにて
萬治　湯をくれよ／＼。
磯六　ハツ／＼。
萬治　オヽ、磯六、戻りやつたか。
磯六　只今歸りましてござりまする。
ト此うち有明姬、腰高の茶臺にて持つて行く。萬治郎吞んで

萬治　磯六、聞いてたも。今日は皆を連れて、汐の干潟で貝を拾うた。おれが備中鐵の使ひ鹽梅。けうといものであつた。餘ッぽど、漁師に馴れて來たわいなう。

磯六　誰れあらう、萩塚鳴戸之助さまの御舍弟、萬治郎さまともあらうお身が、家國に望みなしと、御自身御出國遊ばされ、去春都にてお出合ひ申し、御歸國の儀を、お進め申すも、御承引なく、是非に及ばず、お目とまりし女中達もろとも、この所へお供申し、當春までは女房が御介抱、また國元にて紛失せし千鳥の香爐は鳴戸の沖にて、御主人のお手に入りしと、女房が物語り、いま一種は雌龍丸の紛失、この在所を尋ね出し、若殿御歸國の儀を、お進め申し、歸參の功に致せよとある、鳴戸之助さまの御意。それゆゑ御知行をお預け申し、これへ便つて朝夕の御介抱。

なみ　底意の知れぬ繼しい父さま、それゆゑ、あなたのお名を包み、お出入りの町人、藤屋伊左衞門さまに、似合ひなされしを幸ひに、伊左衞門さまと云ひなし置くも、父さまの手前、又は世間を防がん爲。

磯六　雌龍丸紛失の折と云ひ、達て御歸國を勸め難く、力及ばず植生のお住ひ、朝夕の御自由もさぞあらんと、恐れ入りましてござりまする。

萬治　ハテ、それをなんの案じる事があるぞいやい。なんにも不自由な事はないぞよ。行平は須磨の汐風に、綾の袂を曝した事もあつたではないか。氣に入つた女子どもは側にゐる。また國に居た時と違うて、氣樂な面白い事はない。なんぢや知らぬが、國へ去ぬる事はとんとない。いつまでも爰の家に、ナア皆の者。

玉琴　傾城の玉琴も、所に馴れて洗ひ髮。

有明　父君花園宰相さまは、萬治郎さまの和歌の友、フトした事が不思議の緣。

小櫻　御上覽のお能の時、シテ、ワキのお出合ひが御緣となりし、半井豐前が娘小櫻。

梅が　わたしが兄弟は、小畑助太夫と申す、鄕代官の娘。

初音　お鷹野のその折から、お目にとまつた身の冥加。

淡路　白拍子のはしたない、わたし等までもお側の伽。

戸川　太夫さまの曳舟、戸川。

若草　有明姫の乳人の若草。

玉琴　御流浪の先々まで

有明　お供をするも、深い緣で

若々　ござんすわいなア。

磯六　いづれも、高家一國の御息女方、賤しき埴生に大勢の女中方を、隱まひ置くを聞くならば、女ありなどゝ、世の風說も如何でござれば、若殿のお名を包み、覺られぬやう、愼しみが肝要でござるぞ。

皆々　そんなら藏之進さま。

ト云ふを、おなみ引取つて

なみ　ソレ、伊州さまを、奧の間へ。

皆々　合點でござんす。サア、伊州さん。

萬治　磯六、後に逢ふぞよ。

なみ　サア〳〵、お越し遊ばせいなア。

ト唄になる。萬治郎、正面の一間へ女形皆々付いて入る。おなみ、磯六と顏見合せ、吐息をつき、こなしあつて、おなみ、奧へ入る。磯六こなしあつて

磯六　例へ劍は手に入るにもせよ、御歸國を御承引なければ、これとても詮なき事。劍も手に入れ、御歸國もあるやうの、手段がありさうなものぢやが。

トまた思案する。また尺八の合ひ方になる、思案のうち、フト音色を聽き取る事あつて

ムウ、時ならぬ夜陰の笛竹。ハテ心得ぬ、竹の音色は正しく双調。いま極寒と云ひ、殊に夜陰五穴の調子、明らかに上みんの調べに聞ゆべきに、双調の氣あるは、ムウ、さては叛逆の兆しあつて、五音五穴の調はざる調べ。正しく

トつか〳〵と一間へ行かうとする。納戸より平作ズッと出で

平作　聟どの、どこへ行かつしやる。

磯六　イヤ、おなみが居りませぬゆゑ、もしお前の隱居所に居りませうと存じまして。

平作　ハテナウ。イヤ聟どの、おりやちと、こなたに談合したい事があるて。マア〳〵、下に〳〵。

ト兩人下にゐて

磯六　談合とは、なんでございますえ。

平作　外でもない、金儲けの談合ぢや。

磯六　それは耳寄り。して、その樣子は。

平作　こなた、まだ世間の噂を聞かぬか知らぬが、萩塚の若殿、萬治郎といふ和郎が、何やら大きな科があつて、國遠との事。その萬治郎が行くへを探し出し、首にして持つて行けば、褒美は望み次第とある。なんと、うまい談合ではないかいの。

磯六　成る程、そのお人の行くへ、知つてさへゐやうな

ら、よい金儲けではあらうが、何を云うても目當がなければ、どうも仕様がござるまいてや。
平作　出來た。流石は萩塚の家老、野口藏之進どの。
磯六　ヤ、なんと。
平作　イヤ、隱しやるな。例へ萬治郎どのゝ行くへ知つてゐればとて、流石は武士の魂ひ。イヤ、驚ろき入りました。主人の訴人、金子に替へてたらうか。それでこそ一國の御家老、平作づれが聟には、過ぎてござるわいの。
磯六　イヤ、私しは元からの漁師、よし又、その藏之進ならば
平作　現在御主人の萬治郎どのなら、おれが爲にも御主人同然。身替り立て、萬治郎どのゝ身の明りを立てる思案ぢや。
磯六　して、その身替りは
平作　それ〳〵、ある。アレ、奥にゐる藤屋伊左衞門、天晴れ大名の若殿というても、耻かしからぬ人品骨柄。あの伊左衞門を身替りに立てゝ、こなたの忠義を立たさうと思ふが、この思案はどうあらう。
磯六　すりや、あの伊左衞門どのを。
平作　討ち憎いか。
磯六　イヤ、それは、
平作　三代相恩の御主人といふやうな事か。
磯六　イヤ、全く。
平作　主人でなければ構はぬ。伊左衞門を身替りに立てる、思案がよさゝうなものぢやぞい。
磯六　御尤も。シタガ只今も申す通り、腹からの武士でなければ、身替り立てる忠義にも、功にもならぬ、ほんのこれが無益の殺生。
平作　すりや藏之進でなうて、腹からの漁師。
トこなしあつて
ハテ、漁師ぢやよなア。
磯六　舅どの、私しも尋ねたい事がござる。
平作　おれに尋ねたいとは。
磯六　一間の内で、珍らしい竹の音色。ありや何者でござりまする。
平作　イヤ、あれは。
磯六　誰れでござりまする。
平作　オヽ、今夜は志しの命日、折よく見附けた虚無僧、一宿させて回向の笛の音。

磯六　ムウ、その命日と仰しやるは、こなたの古主といふ
やうな事か。
平作　イヤ、あながちさうでもない。
磯六　すりや、志しのあるによつて
平作　報謝の一宿。
磯六　ハテナア。
トこなしあつて
ドレ〳〵、修行者に
平作　イヤ、佛間へ行ては回向の妨げ。おりや又、あの伊
左衛門を。
ト納戸を目がけ行くを、磯六とめて
磯六　ハテ、忌日とあれば、いらぬ殺生
平作　底意の知れぬ
磯六　今夜の客人。
平作　金の生る木を
磯六　詮議の奥の手。
平作　何かは後に
磯六　男どの
平作　舅どの
兩人　談合しませうわい。

ト唄になる。兩人こなしあつて、奥へ入る。
ト納戸より觀壽院、玉琴と小櫻を引立て出る。
玉琴　コレ、どうするのぢやぞいなア
觀壽　頤骨たてやんな。わりや島原の傾城、玉琴であらう
がな。
玉琴　わしや、そん事は知らぬわいなア。
觀壽　こつちやな馬鹿めは大名の娘。二人ながら連れて行
て、大金にする。こま言云はずとうせ居らう。
ト引立てる。おなみ出て
なみ　イヤ、さうはなるまい。
ト引戻す。この時、觀壽院、前方の金包みを落す。お
なみを見て
觀壽　ヤア、われは
なみ　こなさんは、どうやら。オヽソレ、相好は變つたれ
ど、その時の曲者、
觀壽　イヽヤ、知らぬ。わりや女房ども。
なみ　なんと。
觀壽　ハテ、敷金持つて聟入りをしたれば、おれが女房、
現在の男が、金儲けの幸先折つて、わりやなんで邪魔す
るのぢや。

ト此うちおなみ、落ちたる金を取上げ、見てゐる。

なみ　ホヽ、こりやをかしいわいの。磯六どのといふ夫あるわたしを

觀壽　女房に持つは、敷金の威光ぢや。

なみ　その敷金といふは、これか

觀壽　ヤア、おのれは、

ト寄らうとする。おなみ持ち替へ

なみ　瓦を包んだ反古に、勸壽院といふ書付は。

觀壽　サア、それは。

なみ　もう好い加減で、化けを顯はしたがよいわいなア。

觀壽　ムウ。

トぎつくりして

如何にもおりや勸壽院といふ山伏ぢや。玆な内にゐる二才めを、引込んだ女夫の者、一々詮議がある。マア、この二人から

トおなみを引きかけ、引立てんとする。

ト奥より萬治郎、醉ひたる體にて出て、觀壽院を隔て

萬治　アヽ、醉うたぞ〳〵。ヤイ、坊主よ、おのれが面は七ツ程あるぞよ。

觀壽　ヤア。

萬治　どうも云へぬ。爰で呑み直さう。銚子を持て〳〵。

ト醉ひたる體にて、下にゐる。

觀壽　情なや、醉うてけつかる。ヤイ二才め、うぬにも詮議がある。覺悟して待つて居れ。

なみ　町人の藤屋伊左衛門さまに

小櫻　なんの詮議がござんすえ。

觀壽　なんぢや、藤屋伊左衛門ぢや。その又伊左衛門が、島原の傾城、また公卿や大名の娘どもを、なぜ内へ取込んだ

萬小　マア、それはな。

觀壽　それはなとは、何もかも、白狀さす。うぬ、醉どれめ

ト萬治郎にかゝるを、おなみ妨けて

なみ　コレ、お二人とも、構はずと、奥へ。

萬玉　それでも。

なみ　ハテマア、行かしやんせいなア。

萬玉　アイ。

ト兩人入る。

なみ　伊左衛門さまの詮議より、こなさんの身の上。

觀壽　なんと。

なみ　鳴戸の沖で、香爐の在所を探したは、叛逆人に一味の詮議。

親壽　サ、それは。

なみ　これからたぐつて詮議したらば、どのやうな事が知れうも知れぬ。逢ひたい〳〵と思うてゐたのに、よう名乘つてござんしたなう。

親壽　イ、ヤ、香爐を探したは、金儲けの爲ぢや。その日の仕事をしくじつた返しに、一儲けせにやならぬ。ぢやに依つてこの二才めを

トおなみを引きのけ、萬治郎へかゝる。信久、ズツと出て、親壽院を引取つて投げる。

なみ　ヤア、あなたは。

信久　萩塚の家臣、濱田織部。

なみ　エ。

信久　昔は昔、今は今、萩塚萬治郎。

ト萬治郎、信久をヂロリと見て、矢張り障ひたることなし。

なみ　イヤ、あなたは町人蔵屋伊左衛門どの、世に似た人もある慣ひ、麁相な事を仰しやりますなえ。

信久　ハ、、、紅は園生に植ゑても隠れなし、漁る業に似ても似つかぬ萩と萩塚。

親壽　萬治郎ならば引ッ括つて詮議するぞ。

信久　イヤ、さうはならぬ。萬治郎が身が手にかけて、討つて捨てる。

なみ　なんと。

信久　我れこそは萬治郎が父、將監が矢先にかゝつて、御最期ありし小坂部が一子、彌三郎信久。

なみ　エ、、すりや織部さまといふは、叛逆人の血筋であつたか。

信久　如何にも。親人を矢先にかけしは、久吉が下知なれども、討手は萩塚鳴戸之助を始め、一家の輩。一々に滅亡さする。覺悟して待つて居おらう。

トこれを聞いて萬治郎、キッとなる。

萬治　萩塚に敵對とあれば、聞捨てならぬ一大事なり。討つて鳴戸之助どのへ渡し、兄者人の手柄にする。腕廻せ。

ト信久を目がけ行く。平作ズッと出て、萬治郎を引き廻し

平作　伊左衛門どの、何さつしやる。

萬治　イヤ、これは。

平作　一宿を報謝したれば、おれが爲には大事の客人、叛逆人ぢやの、イヤ縄をかけうのとは、ハテ、異な事を詮議するなア。

ト萬治郎こなしあつて、また醉ひたる體になり

萬治　ハヽヽヽ、これは矢ツ張り醉ひ狂ひ。角目立つたも酒の科、コリヤ、宥しをれ、宥しくつされいやい。

ト平作が脊中を叩き

どうぢや、女ども、銚子を持たぬかいやい。

ト下にゐて、めれんのこなし

觀壽　その詮議に、公卿や武家は云ふに及ばず、町家の娘傾城までを引込んだは、誘拐かしに盗賊同然。

平作　お客人の詮議より

觀壽　われが身の上。

ト觀壽院、萬治郎へ行くを、おなみ、引き廻す。平作かゝるを、磯六ズッと出て引き廻し

磯六　舅どの。

平作　ヤア、聟どの。

磯六　先刻には、深切らしう云うて置いて、手の裏返すやうな詮議呼はり、こなたの目算、是非ともと云はつしやれば、また私しも、心得ぬあの修行者。

平作　ヤ。

磯六　サア、朋輩の濱田織部、本名は小坂部と、サア、互ひの僞性、打明けては物がない。

ト觀壽院を見て

そなた、貴樣とても、あやの拔けぬ和郎さうな。この場の詮議は五分にした方が、よささうなものぢやぞや。

ト觀壽院、こなし

なみ　とは云へ、目前

ト信久を見る。磯六、押へ

磯六　ハテ、窮鳥懐に入る時は、獵師もこれを取らず

信久　その獵人が油斷大敵、王も家來も一つに掴む鷲熊鷹。

なみ　あの廣言を。

ト寄らうとするを、磯六、押へて

磯六　これはしたり、マア、默つてゐたがよいわい。

平作　イヤ、默つてゐまい。伊左衛門の云ふは、萩塚萬治郎、大それた科がある。

磯六　ムウ、この伊左衛門どのが、萬治郎さまに極まらばどういふ事で科がある。

ト岩成主税、大小差し、ズッと出る。

主税　萩塚の萬治郎へ詮議の一條。

磯六　お身や久吉公の御家來、岩成主税。
主税　藏之進、無事であつたな。
なみ　そんなら、お前は。
主税　鄣となつて入込んだは、事の實否を探らん爲。藏之進、それ見やれ。
ト一札を抛る。磯六、開き讀む。
磯六　申し上ぐる一書、一兩年、領地物なり不順によつて、黄金百枚、有り難く拜借せしめ候ふものなり、天正辰年六月、眞柴殿下へ、萩塚萬治郎判。
ト讀み、恟りする。萬治郎こなし。
主税　去る年、領國飢渇とあつて、武將久吉公へ黄金百枚拜借の儀、家老濱田織部、出雲を以て、願ひの趣き、早速お聞濟みあつて、拜借のその一札、まつた萬治郎儀は多病によつて國隱居と聞きしところ、誠は國遠しして行くへ知れずと上聞に相達し、濱田出雲滅亡の上は、其方が行くへを尋ね、右の黄金辨まへさせよとある武將の嚴命、なんとその一札、覺えがあらうが。
磯六　萬治郎さま、この一札、覺えがござるか。
萬治　存ぜぬぢや。此方、左やうな一札を認めた覺えは、神以て御座なく候ふぢや。

ト卷き舌にて云ふ。
主税　覺えなき其方が、なぜ一札へは印形を捺えた。
ト磯六、こなしあつて
磯六　ムウ、濱田出雲が取次とあらば、疑ひもなき彼れが仕業。
主税　證據に立つべき濱田出雲は、この世には居ぬぞよ。
磯六　サア、それは。
主税　武將へ對して謀書謀判。
ト磯六が持つたる一札を引取る。
云ひ譯あらば明白に致せ。藏之進、どうぢや。
磯六　見す〳〵無實と思へども
なみ　目前の御判といひ
磯六　重なる御難儀
トおなみと顏見合せ
ホイ。
ト當惑のこなし。
信久　藏之進、萬治郎に味方をさせい。
磯六　なんと。
信久　所存を改め、此方へ味方いたさば、千金萬金は心のまゝ。鳴戸之助に首を撲はれ、埋れ木と成り果てうより

磯六　某が下知に從ひ、その身の榮を持つがよからう。渴しても盜泉の水を呑ます。非道に組みする御主人でない。

平作　おれが詮議は又格別、雌龍丸を盜み出した萬治郎、もと所持の寶といへど、國遠したれば盜賊も同然、討つてなりとも搦めてなりとも、手柄次第で大枚の褒美になる。智どの、娘、なんと金の蔓に取りついたではないか。

觀壽　大名の威光で、京洛中の女買ひ。それも今では國を出た風來人、おれが手先の仕事にして、褒美をせしめるのぢや。

主稅　藏之進、黃金の返納は如何いたす。

磯六　サア、その儀は。

信久　某へ味方さすか。

磯六　罷りならぬ。

平作　雌龍丸の劍は。

觀壽　女ばらを取込んだは。

主稅　黃金の儀は。

信久　味方さすか。

皆々　サア〳〵、なんとぢや。

ト詰めかける。磯六、こなしあつて

磯六　萬治郎さまの潔白、返答仕らう。

ト信久、平作、主稅の三人

三人　ナニ、返答とは。

磯六　例へお尋ねないにもせよ、此方から詮議せにやならぬ雌龍丸、その在所も大方

ト平作に目を附け

目當て違はぬ詮議の落着、劍さへ手に入らば、お身の明りは立つといふもの。

信久　雌龍丸は某が重代、手に入れて持ち歸る。

磯六　劍の在所は。

平作　何を云うても、劍が爰になければ、云うて詮ない水掛け論。

主稅　して、拜借の黃金は。

磯六　たんそくして差上げなば、謀書のお疑ひも晴るゝ道理、どうぞ暫らく。

主稅　早速調達もなるまい。明け六ツまでは待つてくれう。

磯六　すりや、夜明けまでに

トこなしある。

なみ　こちの人、心當てがあるかえ。
觀壽　例へ金は出來るにもせよ、首投げならぬは、娘どもを引込んだ誤まり。代官所へ連れて行く。うせい。
ト萬治郎を目がけ行くを、磯六、妨げて
磯六　イヤ、あの女中方は、萬治郎さまを慕うての事、その親御へ届けてられれば、御吟味のあらう筈がない。わりや、どこからの指圖をうけて詮議するのぢや。
觀壽　ヤ。
磯六　見え透いた謀りの賣僧め。キリ／＼と出てうせい。
觀壽　サア、それはナ。
磯六　それはとは。
ト首筋を持つて、門口へ取つて投げ
あの態な、大盜人めが。
信久　有無の返答聞くまでは、宿を求めし旅の梵論字。
磯六　互ひの詮議も、
なみ　云はず覺いず。
信久　夜明けの潔白。
磯六　マア、それまでは
平作　繋どの。
なみ　修行者さん。

主税　磯六。
三人　キツト、調べを
ト皆々萬治郎へ行くを、おなみ、妨げる。觀壽院、入らうとする。磯六、戸を立ち切る途端、一時に番うたぞ。
ト合ひ方になる。この一件、各々奥へ入る。萬治郎一人殘る。觀壽院、木蔭へ隠れる。萬次郎酔ひたるこなしにて起き上がり、あたりを見る。本釣り鐘にて、七ツを打ち出す。しめやかなる合ひ方。雪チラ／＼と降り出す、こなしあつて
萬治　蟇の鐵爪が隠るれば、小鳥はおのが心のまゝ。我れさへ爰に居ぬならば、屈之進がその身一つ、云ひ譯の立つ思案もありさうなもの。オヽ、さうぢや／＼。
ト簑と竹の子笠を取り、表へ出て、雪を拂ふこなし。花道へソロ／＼と行く。思ひ入れあつて、ツイと向うへ走つて入る。木蔭より觀壽院出て、跡を慕ひ入る。
ト西二階、座敷内にて
内で　この雪を見ては、寢てもゐられぬ。内の障子を皆あげて、夜明かしぢや／＼。こりやア存まにやならぬわい。子供衆、目を覺まして、雪見を遣はうぞや。

子供　アイ〳〵
ト聲する。東の物干しへ、子供大勢出て・寒弾きする
見得
東の物干しにて
〽身を捨てる、里あらばこそ浮かむ瀬も、あるを頼みに
憂き勤め、渡りくらべて名を流す。
ト唄のうち・雪頻りに降る。磯六、思案をしい〳〵出
る。
〽夜毎に變る肌々の、實と嘘とをとひかけられて。
ト唄の後、下の合ひ方へ取り、磯六こなしあつて
磯六　苧を亂した今夜の切端。何かの詮議は後へとして、
差當る黃金百枚、本國へ通達せば、調ふべき手段もあら
うが、何を云うても火急の事。いま聞いた七ツの鐘、夜
明けと云うても今暫らく、力業にも才覺にも、叶はぬ金
づく。貧は諸道の妨げとは、よく云うた譬へぢやよなア。
ト西の物干しにて
〽憂きを知らずや草に寢て、花に遊びて朝には、露に養
ふ蝶々の。
ト内にて鷄笛ふく。
磯六　ヤア〳〵、ありや・隣りの寒聲。明け方近き鷄の聲
聲に、いま半時に金のたんそく。火急になつたかエ、、
コレ、あの鷄が空寢にはなつてくれぬか。函谷關の嬉し
さと、引變りたる今宵の一時。金が出來ずば主人の身の
上、絕體絕命の場所になつたか。エ、、、、。
トいろ〳〵あつて・ドッサリ下にゐる。この時納戸よ
りおなみ、髮を結ひ直し、小袖を着替へ、銚子、杯を
持ち出で
なみ　こちの人、今夜はきつう雪も降るし、お前も何やか
や・氣あつかひ。酒一つ飲ましやんせぬかえ。
磯六　ア、イヤ〳〵、酒機嫌には。よしにしや〳〵。
なみ　アイ、そんなら、酒はよしにしませう。申し、こち
の人、わたしや、ちつとお前に、願ひがござんすわいなア。
磯六　改まつて願ひとは。
なみ　暇を下さんせ。
磯六　ヤア。
なみ　ちつと急に望み事が出來たけれど、お前から暇の出
ぬうちは、思ふに任せぬわたしが思案。どうぞ、わたし
に、暇を下さんせいなア。
ト愁ひを隱して云ふ。此うち雪降り、磯六、おなみが
形を見て

礒六　いつにない髪もさつぱり小袖まで着替へて、暇を下さんせとは。

トちよつと思案して

ムウ、聞入れた。今に始めぬ事ながら、慾に迷ひ、義理を忘れ、又しても聟を取らうの、嫁入りのと、まんざらの非義非道も、義理ある親と詮方なく、他家へ嫁入りする其方が心か。

トおなみ、頭振り泣く。

それでもないか。それに又、暇を願ふといひ、髪の飾り、小袖まで着替へた譯は

なみ　今宵中に出來ねばならぬ黄金百枚、金ゆゑ苦勞をさしやんす、お前に忠義が立てさせたいばつかりで、隣りの女郎部屋へ、博多の親方衆が來てゐるのを幸ひ、裏から這つて何かの相談。

礒六　ムウ。すりや、其方が苦界に身を沈めてなりとも、身が武士を捨てさすまい爲、この仕儀であつたか。出かした女房、過分な／＼。

ト泣いて云ふ。おなみ、こなしあつて

なみ　例へこの身は貞女に外き、心に染まぬ二つ枕、辛い辛抱してなりとも、お主や夫の志しを立てうと、思ひ込んだ一心、とは云ふものゝ、夫に別れて何樂しみ。憂き命さへ捨てられぬ、金が敵の世の中と、思ひ切つても夫婦の別れ、藏之進さま、わたしや輪廻に迷ひましたわいなア。

ト大泣き。礒六こなしあつて

礒六　オヽ、しをらしい女房、よう云うてくれたなア。身共と云ふ緣に引かれ、萬治郎さまといひ、大勢の女中まで、長々の介抱、殊には又、生さぬ仲の男どのに心を置き、いろ／＼と辛苦をさせ、まだその上に主人の爲、夫の爲と思ひ、勤め奉公に行かうとは、天晴れ貞女、末來まで忘れぬ。忝ない、嬉しいぞよ。

ト泣き、こなしあつて

併し、たんぞくあるは黄金百枚、小判にして七百五十兩、呑み込みのよい親方でも、それほどは調ふまい。切角の志しも、水の泡であらうわいの。

なみ　イヽエ、そりや案じて下さんすな。わたしで足らぬ金のたんぞく、その譯と云ふは。

ト納戸に向ひ

サア、皆さん、爰へ來て下さんせ。

ト内より

女皆　アイ〳〵。

ト西の物干にて淨瑠璃。

〽不便やなこの井は、重たる思ひ面やつれ、いつ取上げし黒髪の、亂るゝ思ひしよんぼりと、夫と我が子に今一度、逢ひたい見たいの外よりは、なく〳〵白洲に畏まる。

ト淨瑠璃について玉琴、小櫻、初音、有明姫、淡路、若菜、戸川、皆々立派に髪結ひ、衣裳を着替へ、しをしをと出て並よく並ぶ。

磯六　すりや、皆の衆も。

玉琴　おなみさまと一緒に

小櫻　勤め奉公に

皆々　行くのぢやわいなア

なみ　わたし一人が身を賣つたとて、多くの金がなんで出來うぞ。萬治郎さまのお爲と云うたら、皆さんも、よう得心して、辛い勤めも苦にもせず、物見遊山かなんぞのやうに、俄かに髪の身仕舞ひのと、隨分けよい程、この身につまされ、おいとしうござんすわいなア。

ト泣く。

玉琴　アヽ、コレ、おなみさん。もう何にも云うて

皆々　下さんすないなア。

ト一時に泣く。隣りの切り戸より親方出かけて

親方　お内儀、御亭主は得心かな。

なみ　よう聞分けてゐられます。

親方　それは重疊。イヤ御亭主、わしや博多の津の女郎屋でごんすが、この隣りは此方の出見世。來合した折から、お内儀がわせて、段々のお頼みゆゑ、奉公人は以上九人で、身の代七百五十兩。サア、渡しますぞや。

ト大財布を磯六の前に置く。

磯六　皆の衆、なんにも云ひませぬ。手詰めになつた今夜の仕儀、金調へて迎へに行くまで、辛抱して下されませや。

親方　船場までは、駕籠のつもりで、約束もして置いた。ちつとも早う。

ト門口へ出て、手を叩く。橋がゝりより駕籠九挺舁いて出る。

玉琴　ほんに思へば二度の勤め

小櫻　わたしらが行た跡で、

初音　殿様が叱つてないやう

玉小　よう入り譯を

皆々　云うて下さんせえ。

磯六　ハテ、後の事は案じずと、隨分達者で

なみ　お前も、まめで
皆々　さらばでござんす。
　ト段々駕籠に乘り、此うち隣りにて
〽前後左右を圍まれて、父は元より籠の鳥、雲井の昔忍ばるゝ、さすらへの身の御嘆き、夜は明けぬれど心の闇路、照らすは法の下海邊、道明らけき寺の名も、道明寺とて今も猶、榮えまします御神の、生けるが如き御姿、茲に殘れる物語り。
　ト右の間に八挺の駕籠、段々に花道へ並ぶ。雪頻りに降る。駕籠一挺殘る。この内に、おなみ、磯六へ名殘を惜しむ心にて、戸棚の鍵を持つて來て、渡したり、漁船の帳など取り集めて、後の見まつべをする心の模樣、右八挺の駕籠、花道に並ぶまでに、しか〲あつて、この時おなみも駕籠に乘る。駕籠花道へ行く。
〽盡せぬ思ひにせきかねる、涙の玉のもくれんじゆ、珠數の數々繰りかへし。
　トこの間に駕籠、おの〱向うへ入る。おなみの駕籠花道中程へ行き上がる。磯六、忍び泣きに泣いて出で
　この時、門口へ出て
磯六　コリヤ、皆の衆の介抱を、くれ〲も頼んだぞよ。

なみ　アイ、さらばでござんす。
〽嘆きの中にたゞ一目、見返り給ふ御顔ばせ、これぞこの世の名殘とは。
　トおなみ、駕籠の垂れ下ろす。
〽知らで別るゝ涙なり。
　ト段切れの節一ぱいに、親方付いて、おなみの駕籠、向うへ入る。磯六、見送るこなしあつて、内へ入る。伊達なる合ひ方になる。
磯六　志しのこの金、一時も早う。
　ト財布を取らうとする。平作、ズツと出て、財布に手をかける。磯六とめて
舅どの、何さつしやる。
平作　何せうにや。先の平作が死んだ跡へ、入夫したこの平作なりや、娘が爲にも義理ある親。身の代のこの金は萬治郎を始め、大勢の女子を養うた飯代、不足ながら取つて置くのぢや。
磯六　イヤ、親子の義理も、忠義には替へられぬ。女房が身の脂、こなたには、エヽ、渡しますまい
　ト主稅ズツと出て
主稅　拜借の員數、揃はば身共が

磯六　ト財布に手をかける。イヤ、底意の知れぬ岩成主税、金子は直ぐに都へ送る。
主税　磯六、勘當ぢや。
磯六　ヤ。
主税　聟舅の縁を切つて、古主へ貢ぐ軍用金。
磯六　ならぬワ。
主税　然らば此方へ。
　ト三人立廻つて、主税、磯六を隔て、
　先刻にこの家を立退いた萬治郎。
磯六　すりや、御主人は。
　ト驚ろく。
平作　阿波の淡路へ渡るは必定。濱邊にもやつた早船で
主税　ぼツかけさつしやれ。
平作　藏之進を逃がすな。
主税　合點ぢや。
平作　ソレ。
　トついと向うへ走り入る。兩人立廻つて、主税を當て、拜借の一札を取つて改め、懷中して、袋綱へ右の金子を殘らず入れ、腹にしつかと卷き、しかじかあつて

磯六　目當は知れねど、主人の安否、ソレ
　ト行かうとする。主税支へる。この時、橋がゝりの切り戸より、信久袋入りの劍を持ち出で
信久　藏之進、今宵の報謝は雌龍の劍、只今請取つて、只今歸る。
磯六　さてこそ、うぬ。
　ト表へ駈け出す。主税支へる。信久これに構はず、しづしづ花道へ行く。磯六、追ひのけんとする。
　ト寢鳥、ドロドロにて魂ひ出て、磯六を支へる。この見得にて、タヂタヂと戻り
　ハテ、心得ぬ、この幻術
信久　イヤ、幻術でない。桑名太郎左衞門が死後の忠誠、この劍が手に入るからは、時日を移さず大望成就、草葉の蔭で滿足いたせ。
磯六　うぬ。
　ト行くを主税支へる。
信久　藏之進、さらば。
　ト靜々向うへ入る。磯六、主税をボンと切る。
磯六　逆意の張本、うぬ
　ト駈け出すと、大ドロドロ、寢鳥、本舞臺の眞中へ、

根本「百千鳥鳴門白浪」挿繪

室の港の場

太郎左衛門、死骸の傍らへにて、白衣裳、上下、亂髮、凄き面體にて、セリ上がる。窓の黑蓋を下ろし、風の音すさまじく、連理引きにて磯六を引き戻す。花道にていろ／＼あつて、キッと留まる。

太郎　古主の鬱憤晴らさん爲、閻浮に返る太郎左衛門、若君に敵討なさば、共に冥途の奴となさん。藏之進、なんと。

ト始終ドロ／＼。

磯六　何を小癪な。

ト刀にて切り拂ふ事。いろ／＼あつて、行かんとする。太郎左衛門、引き戻す。磯六、苦しき體、本舞臺へ引き戻され、惱まさるゝ事あつて、トゞばつたり下に居る。ドロ／＼しやんとやむ。磯六、拔身を構へながら、

エ、、、、。

トきつと向うを見込む。この見得、大ドロ／＼。
よろしく幕

四段目

淡路島の場
景事の場

役名――萩塚萬治郎。寢覺の前。腰元、松江。同宮城。同、梢。同、桔梗。同、みどり。同、野菊。同、小百合。局、岩木。山伏、觀壽院。三谷島九平次。漁師、平作。同、磯六。實ハ、野口藏之進。萩塚鳴戸之助。森岡平。飛脚、丹下。先の夕霧。後の夕霧。吉田屋おきさ。弟子、いや風。同、てんれつ。同、小れん。藤屋伊左衛門。

造り物、向う一面の山の方、よき所に見事な糸櫻、本釣り鐘をかけ、この櫻の元に、御陵の石、仕掛ある。山々に櫻數多、その外樹木、數多ある。殘らず折れる仕掛け、三間の間に坂口あり。諸人この上に登る事を不許と禁制の高札立てある。臆病口の方に、萱葺き屋根、丸太作りの綺麗なる屋體、折り廻り障子、向う襖、隨分風雅にして、臆病口より、舞臺前、花道西の通り、戸屋の內へ谷川の流れ。橋がかりの方、しをらしき枝折り戸。すべて淡路島、山の景色。松江、宮城、元の形にて、梢、桔梗、みどり、野菊、小百合、着流しにて、三方に供物の白き箱を載せ、持ち出て、立つてゐる。靜かになり、コイヤイの鼓になる、

梢　千早ふる科戸の風も納まりて

桔梗　浪靜かなる淡路島。

小百　この島の高根に後を引き給ふ

宮城　帝さまの御陵を

野菊　おいさめ申す神祀り

松江　神すゞしめの供へもの

梢　おきつ鏡……邊顏鏡……八握の劍……生玉……死反玉。

桔梗　足玉……道反玉……蛇比禮……蜂比禮……品々比禮合して十種の神寶。

宮城　白木綿襷取り結び、神をいさめの小忌衣。

梢　この島へさすらひのお姫樣、宮仕へするからは

桔梗　身は自から六根淸淨。

みど　サア〳〵早う、御陵へ

皆々　お供へ申さうかいなう。

ト局岩木、着流しにて、局の形にて出づる。

岩木　なんぢや、みな巫女どのゝやうな形をして、ざわざわと、さつしやるは、エヽ、聞えた、この間から寢覺さまが、願望があると仰しやつて、あの一間に一七日の物忌み。役にも立たぬ事を。措いたがよいわいの。

ト此うち腰元皆々、供物を山の中程、岩組みの間へよろしくならべ

桔梗　御法度なれば、上までは行かれず、爰に供へて置いたがよからうかいなう。

皆々　それがよからうわいなう。

岩木　アヽ、どこなとなり、上げて置きやいの。

梢　また岩木さまの、垣破りな事ばつかり云うておぢや程にの。

岩木　イヤ、垣破りぢやない。あの寢覺さまは、關白さまのお姫樣であつたれども、この國の萩塚萬治郎どのとせせくり合ひ、やう〳〵お願ひが叶うて緣入りはなされたけれど、萬治郎さまは出奔。あの寢覺さまは、大切な劍を紛失の誤まり、既に死罪に極まるところ、殿鳴戸之助さまのお情で、この淡路島へ流し者といふは表向き、若い者ばかりは置かれず、お見出しにあづかつた新參の局役、わしお始め、こなた衆も、此やうに召仕ひを賴んで、たんとつけられ、隨分ともにお氣をおいさめ申せとの仰せつけられ。主と病には勝たれず、せう事なしに宮仕へしてはゐるものゝ、此方等も矢ッ張り流し者もおんなじ事、琴三味線は勿論、流行り唄さへ聽く事もならず、

明けても暮れても浪の音ばつかり、なんとマア、詰まらぬものではないかいなア。

桔梗　イエ〳〵、島は愚か、山の果て、海の底までも、御奉公申すが宮仕への道ではないかいの。殊にこの間から、この山の帝さまの御陵へ、御心願があつて、御物忌み遊ばしての神祀り、とも〳〵お願ひ申すが、及はずながら忠義とやらではないかいなア。

梢　それ〳〵、どうぞ御劍の在所も知れ、一日も早う寢覺さまが、お國へお歸り遊ばしまして、寢覺さまと若殿樣とお二人、御一緒に御座なさるゝやうに。ナウ、皆の衆。

宮城　それ〳〵、何をするも御奉公。

みど　こちらも共々にお願ひ申して

皆々　お國へお供するやうに

梢　年役に岩木さま

皆々　お前も頼ましやんせいなア。

岩木　ア、、うたてやの。わしやついぞ神佛に、手を合して拜んだ事はない。主の子を養ふも、身が助かる爲といふに、先も見えぬ流し者の番せうより、よい加減にお暇を願うて、いま流行る女醫者でもせずばなるまいわいの。

トこのせりふのうち、臆病口の谷川より、古猷な書きたる栞り四五枚、だん〳〵に舞臺前、花道の谷川を戸屋の内へ、程よく流れ行く模樣、この間、矢張りコイヤイ。

松江　お前は、醫者になる氣でも、かゝる人があるまいぞえ。

宮城　それ〳〵、お醫者さまより、開帳場の西國順禮の唄を謳うて、よう踊る、かみさまになとならしやんせいなア。

みど　イエ〳〵、それよりは、嬰兒さまを産む時の婆さまがよからうぞえ。

岩木　云はして置けば、づう〳〵と、おれを取上げ婆になれと云ふのか。

野菊　丁度それがよからうわいなア。

岩木　あんまりぢやがな。

ト摑みかゝらうとする。

皆々　マア〳〵、待たしやんせいなア〳〵。

トいろ〳〵止める。岩木、腹立てる。

みど　踊りのさまぢやない。怒り婆さまぢやわいなア。

岩木　エ、、その口を。

ト腹立てゝかゝらうとする。梢、桔梗とめる。此うち

に、屋體の障子、靜かに開く。寢覺の前、衣裳襠褌、結構な姫の形にて、蒔繪の机にもたれ、亂木に古歌を書いてゐる模樣よろしくある。

桔梗　ソレ、お姫樣のお出でぢやが。

岩木　それでも。

ト寢覺姫を見て悧り。

ヤア、お姫樣。

皆々　シイ。

ト皆々下にゐる。

寢覺「春の夜の月毛の駒よ我が戀ふる、雲井をかけれ、その間にも見ん。」誠や、古へ須磨にさすらひ給ふ、源氏の君に比べては、恐れある事ながら、自らとても戀路ゆゑ、浪の淡路の島守りと、朽ち果つる身はいとはねど、戀しい人に今一度、逢うて館の別れより、訪ひおとづれもなきくらし、明石の浦に澄む月も、我が身に曇る罪科を、何卒晴らさせたび給へと、この山上にあがめさす、帝樣の御陵へ、一七日の立願。千首の古歌を栞に認ため、この谷川を御秡川、かへる願ひも萬治郎さまの、お身の納まり、二つには、命のうちにたゞ一目、逢ひたい見たい、自らが心の中を、皆の者、推量してたもいなう。

皆々　お道理でござりまする。

ト皆々しつぽりとなる。

岩木　其やうに、逢ひたい〳〵と仰しやつても、萬治郎どのは、身持ち放埒ゆゑ、國を出奔して天竺浪人、雲つかむやうな身の上、なか〳〵この國へ足踏みはなるまい。もし立寄らば合圖を以て、執權松田將監さまから、御內意を受けてゐる。わたしは隱し目附け同然。所詮顏出しのならぬ日蔭ものに、心中立つるは唐人に、流行り唄を聞かすやうで、なんの役にも立ゝぬものぢやわいなア。よい加減に思ひ切つて、常々わたしが云ふやうに、エヽ、エヽ。

ト此うち姫、構はず、栞に古歌を書いてゐる。

人にばつかり物を云はせて、經木に蓋の附いたやうな物を、書いては流し、委細、たのみ寺の流れ灌頂。菩提の爲と書きなされたえ。

トやかましく云ふ。姫こなしあつて

寢覺　唐土の許由といひつる人、水をも手してさゝげて呑みけるを見て、鳴ひさごといふものを、人の得させければ、ある時木の枝にかけしが、風に吹かれて鳴りけるをかしがましとて捨つる。また手にむすびてぞ水を呑みけ

ると、喧嘩好の筆すさみ。ア、、儘ならぬ浮世ぢやなア。

ト面白き合ひ方になる。此うち、鶯、山の上にて鳴く

鄙こなしあつて、上を詠め

年毎に、時ならぬ櫻の盛りに、諸人のうは氣。かゝるいぶせき身となりしゆゑ、その盛りは見ながらも、科なくてぞ見るならば、月も花も、いとゞ詠めは深からん。殊さら梢に色鳥の囀り、春にまさつて聞ゆるは、自らが心を憐れと思し召すか、神のお告げか。コレ、腰元ども、神拜の用意をしや。

皆々　ハア〳〵。

ト矢張り合ひ方。椿、桔梗、香爐を盆に載せ、姫が前へ直す。姫、香を焚き、上の方を拜む。よろしくあり。

トの合ひ方を替へて、花道より萬治郎、世話やつしの形にて、栞を取つて歩き〳〵

萬治「吉野山、去年のしをりの道かへて、また見ぬ奧の花をたづねん。」こりやコレ西行法師のしをりの古歌。別れて程經し寢覺殿が手蹟。ハテ、合點のゆかぬ。

ト此うち、花道の中程まで來ると、本舞臺の谷川より姫が流せし栞、花道へ流れ來る。萬治郎、また取り上げ見て

「逢はでふる淚や末のまさるらん、妹脊の山の中の瀧津瀬」……これも同筆。堀川大臣の戀の歌。兄鳴戸之助どのゝお情により、先達て、この島へさすらへと聞き及びし、寢覺の前が手蹟の亂木、この谷川へ流れ來るは、我れを慕うて谷川へ、流せし栞の道しるべ。この上は……正しくこの家へ。

ト切り戸の際へツカ〳〵と來て、こなしあつて、栞を懷中して、戸を明けて、ツカ〳〵と内へ入る。

岩木　ヤイ〳〵、女子ばかりのこの内へ、入つたわりや、何者ぢや。

萬治　イヤ、私しは旅の者でござりまする。

岩木　その又、旅の者が。

萬治　ハイ、室の津から繪島の島へ渡りましたところが、けしからぬ船心で惱みまするから、どうぞ暫らく、お庭の端でなりとも。

岩木　イヤ、ならぬ。旅の者であらうが、胸絆の者であらうか、爰の主といふは、流し者のお姫樣、男ぎれといふものは、片時も置く事はならぬぞ。

萬治　すりや、流し者。

トこなしあつて

左やうでござりませうけれども、不知案内と申し、難儀の折柄、ほんの旅は道連れにはぐれましたもの。世は情でござりまする。

岩木　エヽ、出ぬと、おれが引き出すぞ。

ト寄るを、梢、桔梗とめて

桔梗　道連れにはぐれて難儀といひ、所の案内も知らぬとあれば、いとしい事。

梢　殊に船醉ですぐれぬとあるからは、少しの間はお上のお叱りもあるまい。ナウ皆の衆。

皆々　さうでござんすとも。

萬治　ハイ〳〵、結構な御料簡でござりまする。そちらなお年配の女中さん。皆さんもちつとの間、どうぞ

ト此うち、姫、山の上を拜みゐて、フト萬治郎と顏を見合ひ、恟りして

寢覺　ヤア、お前は。

萬治　其方は。

寢覺　イエ〳〵、知らぬ旅の人。

萬治　コレ、何を云やる寢覺

寢覺　サア、寢覺にも、夢にも知らぬ旅のお人。サア、爰は所も寢覺の關。

ト岩木へ心意氣あつて

萬治　人目の關……せかずとチッと氣を鎭めて

寢覺　旅のお人ぢやなア。

トこなしあつて、栞に歌を書いてゐる。

岩木　なんぢややら、胡散らしい男、一體こなたは、どこぢや。どこの人で、どこを當に行く人ぢや。

萬治　ハイ、私しは河内の者か、大和の者か、和泉か紀州か、近江でもなし、筑前、筑後、壹岐、對馬、いつそ飛んで長崎に致しませうか。

岩木　何をキョロ〳〵と、どうでもこなたは、狐つきぢやわいなう。

ト萬治郎、思ひ入れあつて

萬治　よい推量ぢや。ついてゐるぞ〳〵。

皆々　ついてゐるとはえ。

萬治　オヽ、常のものと思うてゐたら、當が違ふ。無理に追ひ出したら、祟るほどに、跡でこん悔せまいぞ。

岩木　サア〳〵、ひよんな者が來た事ぢや。

萬治　ひよんな者ぢや。斯う來たからは、いつまでも、爰にいなり樣ぢや。お定まりの赤飯で馳走せい。あしらひ

が悪いと、婆め、おのれが穴の稲荷へ砂持ちをさすぞ。
岩木　いろ／＼の事を云ひ居るがな。サア、出て行かぬか。
意地張ると引き出すぞ
萬治　狸婆と、狐つきとの出合ひぢや。サア、ならば手柄
に出して見い。
岩木　おのれを。
ト掴みつかうとする。萬治郎後へ投げ、岩木が帯を持
つて、くる／＼と廻し、突き放す。兩人ブラ／＼とし
て、ベッタリ坐る。岩木、目を廻す。萬治郎、腰元皆
皆惘りする。
萬治　オヽ、こりや目が舞うたさうな。
皆々　ヤア、岩木どのが、氣を取失なうてぢや。
ト皆々側へより、介抱する。萬治郎あわて
萬治　どこぞ、近所にお醫者はないかな。マア、これなり
と。
ト手洗鉢の水を杓にすくひ、岩木が顔へ打ちかけ、足
で腹を踏む。この間、よろしくをかしみの思ひ入れあ
つて
皆々　岩木どのいなう／＼。
ト岩木、少々氣の附いたるこなし、卒中のやうなるこ
なしにて
萬治　ヤア、こりや、卒中になつたわい。
桔梗　病の發つたは、勿怪の幸ひ
梢　それ／＼、部屋へ連れていて、寢かして置かう。そ
の間にナ。
桔梗　それ／＼、様子は推して居りまする。寢覺さまと
こう　何かのお話し。
梢桔　若殿様。
萬治　コリヤ、シイ……その後は云はぬ事。
皆々　合點でござりますわいなア。
ト岩木を皆々寄つて舁き上げる。岩木、矢張り卒中の
心にて、仰向きにしやばつてゐる。皆々、わや／＼云
うて入る。後合ひ方になる。此うち、姫・萬治郎こな
しあつて
寢覺　萬治郎さま、おなつかしうござりましたわいなア。
ト取りつき泣く。
萬治　寢覺の前、其方も無事で喜ばしいが、計らず御劒の
紛失ゆゑ、爰へ流罪のよし。我れとても、國元を退きし
が、未だ對面はせざれども、鎌倉にて成長ありし、兄鳴
戸之助どのゝ實母、存生のうち、某を追ひ失ひ、兄者人

へ家國を讓りたき底意と知るより、放埒者となつて、其方を殘し、國遠せしも、親兄の禮儀を思ふ萬治郎が深き心底、孝心ゆゑの放埒とも知らず、さぞかし恨みに思やつたであらうなう。

寢覺　そんなら、兄御への御孝心ゆゑに、家出遊ばしたのでござんしたか。さうとも知らず、女子の淺い心から、叛謀人とも露しらず、濱田出雲を忠臣と思ひつめ、預かり置きし寶の鍵を渡せしばつかりに、御太刀紛失、自害と覺悟を極めしを、鳴戸之助さまのお情にてのこの島守り、命の內に只一目、お前に逢ひたいばつかり、立願を神に祈りて栞の古歌を流し

萬治　サア、思はず、我が手に入りたるも、緣を導くこの栞、

ト最前の栞を出して見せる。

寢覺　そんなら、それがあなたのお手に。

萬治　入るも矢ッ張り夫婦の緣。

寢覺　神の御利生、名歌の奇瑞。

萬治　其方の心が屆いたしるし。

寢覺　よう顏見せて下さんしたなア。

萬治　オヽ、道理々々。某とても漂泊のうちは、野口藏之進夫婦の介抱にて、暫らく室の津に身を寄せしが、計らずも罪人となりし萬治郎、其方の父御、道方公へ便り、この身の汚名を雪がんと、密かにこの國へ來りしところ不思議に逢うたも、盡きせぬ緣。

寢覺　焦れ慕うた念願屆き、嬉しいは嬉しいが、所詮都へは歸られぬ自ら。いづくの浦、いづくの里にも身を忍び、あなたと一緒に暮らすが樂しみ、サアー〳〵、連れて退いて下さんせいなア。

ト萬治郎が手を取つて行かうとする。

萬治　イヤ〳〵、一旦流し者となされたる政道を、破つては兄者人の手前といひ、殊に又、行く先の心當途も存じての事かいなう。

ト向うの戸屋の中より、鹿笛聞える。

寢覺　イエ〳〵、當というてはござんせぬ。けれど、この海を渡りさへすりや、行けるだけは歩くのぢやわいなア。

萬治　滅相な。マア、いつまでも其やうに歩いてゐらるゝものぞいなう。

寢覺　エヽ、さう云うてゐるうち、人が來れば惡い。サアござんせいなア。

萬治　ハテ、滅相な。

寢覺　イエ〳〵。

ト無理やりに萬治郎が手を取つて、花道の方へ行かうとすると、鹿笛とまり、一セイの大小になる。ト向うより、鳴戸之助、騎射の形にて靱を負ひ、弓を持つて騎射の笠を着て出る。近習三人とも、騎射の形にて付添ひ出る　花道中程まで來て、萬治郎、姫に行き合ふ。鳴戸之助が顏を見て、姫、恟りして

寢覺　ヤア、鳴戸之助さま。

鳴戸　寢覺の前、いづくへ。

ト萬治郎、驚ろき。

萬治　すりや、あなたが。

寢覺　コレ。

トとめる。

鳴戸　令を下せば龜鑑となる。言を出せば法となる。我が計らひにて流人の其方、見馴れざる男子を連れ、いづくへ行く。

寢覺　サア、アノこれは

ト付け廻しながら、本舞臺へ來て、鳴戸之助、上へ行き、姫、萬治郎を圍ふ。

鳴戸　雄鹿を慕ひ、その身を亡ぼす夢野の鹿。大伴の黒主が詠歌に似たるその樣、冬野の狩の矢先を恐れぬは、危ふい〳〵。

寢覺　さうして、あなた樣は。

近習　先達て亡びたる小坂部が家來、桑名太郎左衛門といふ者

同　濱田出雲と變名し、本國へ入込みしかど、天これを罰し給うて、自殺に及ぶ。

同　猶も餘類を詮議の爲、山野の狩する體に見するも、皆御主人の

三人　御賢慮サ。

鳴戸　して、その者は。

寢覺　サア、此お方は。

萬治　イヤ、私しは、この島の浦人でござりまする。寢覺さまが、これへお出でなされて、折々御用を承はりまするにつきまして、この浦の風景を、どうぞ敎へてくれいとなア……イカサマ、この配所にばかりござるもお氣詰まりと存じまするから、爰の名所をと申され、敎へてあげませうと存じまして

鳴戸　ムウ、すりや其方は浦人か。

萬治　うらも表も、御覽じました通りでござります。
鳴戸　ハテ、浦人ぢやなア。
　トこなしあつて
　ナニ、近習の者、われ達は、濱手へしつらひ置く、遠見の場所に扣へて居れ。
三人　畏まつてござりまする。
近習　併し、先達て御内意を申し上げし、彼の船手の
鳴戸　その儀は苦しうない。行け〱。
三人　ハツ。
　ト皆々向うへ入る。鳴戸之助こなしあつて
鳴戸　ナニ、そな者。浦人とあれば。隨分土地の儀は案内であらうなア。
萬治　ハイ、イヤモウ、島に育ちまして、又そこの浦、この島の山に木が何本ござりまして、浦々には斯うした岩があると申します事までも、よう存じて居りまするも、住み馴れし一德でござりまする。
鳴戸　イヤ、なか〱調法なものぢや。尋ねたい用事もあれど、先づそれより寒氣の逍遙、殊の外の疲れ、休息のうち、一獻酌まうか。寢覺、申し附けやれ。
　ト此うち姫、萬治郎、いろ〱仕方してゐる。

寢覺々々。
　ト姫、愕りして
寢覺　ハイ〱〱。何とぞ御意なされましたかえ。
鳴戸　ハ、、、これはいかな事、最前より、酒一獻所望いたし居るではないか。
寢覺　左やうたらば、用意申しつけませうわいなア。
鳴戸　早く。
　ト姫、萬治郎に心を殘して入る。萬治郎、氣味惡きこなし。
鳴戸　コリヤ、ヤイ、早速ながら、尋ねたい仔細がある。苦しうない。サ、、、近う寄れ〱。
萬治　イヤモウ、これが勝手でござりまする。
鳴戸　何も遠慮には及ばぬ。餘の儀でもない、當國の產物、米穀の外、海邊の運上は、何を以て上納をする。汝よく存じ居らうな。
萬治　ハイ、その儀は、
　ト迷惑なこなしあつて
　私しは、そと致した百姓でござりますれば、海邊の儀は不知案內でござりまする。
鳴戸　すりや、存ぜぬとな。然らば又、米穀の石高は、何

程納まるぞ。

萬治　そりや、知れました事でござりまする。石高は凡そ十五萬七千石とは申しますれども、凡そ員數は五十萬石も上がりませうかい。こりや、あなたにもよう御存じでござりませうがな。

鳴戸　南北わづか十五里餘、東西七里に足らぬこの島山。ハア、餘程の石數ぢやな。

ト萬治郎、氣味惡きこなしあつて

萬治　下々の私しが、貴人のお側に長居は畏れ。もうお暇申しませう。

ト逃げ支度する。

鳴戸　ハテ、よいわサ。まだ尋ぬる事もある。遠慮には及ばぬはサ。

ト萬治郎、腹を押へ、こなしあつて

萬治　アイタヽヽ。冷えまする加減か、血の道が胸先へ突ツ張りまして、頭痛が致しまする。さぞかし內に待つてゐるでござりませう。最早お暇申しませう。

ト切り戸へ出ようとする。

鳴戸　浦人、待て。

ト云ふを、聞えぬ體にて、行かうとする。

萩塚萬治郎、マア待ちやれ。

ト合ひ方になる。萬治郎はギックリして

萬治　拙者を。

鳴戸　これまで對面はせざれども、父の骨肉を分けられし弟萬治郎、知らいでならうか。申し聞かす仔細ある。サヽヽ、これへ〳〵。

萬治　兄者人、鳴戸之助さま、すりや某を採らん爲。

鳴戸　オヽ、それとは疾より知つたれども、猶も實否を糺さん爲。今の仕儀。先づは堅固で

萬治　あなたにも御壯健で

鳴戸　ハテ、珍らしい

萬治　御對面で

鳴戸　あつたよなア。

ト鳴戸之助、我が持ちし弓を恭々しく二重舞臺に置き萬治郎が手を取り、上座へ据ゑ、下座に下がる。萬治郎、合點のゆかぬこなしあつて

萬治　兄者人、これは。

鳴戸　矢張り其まゝ〳〵。

ト下にゐる。

改めて云ふに及ばねども、弟ながらも其方は、國元にて

出生したる奥方の正統。我れは鎌倉表にて、成長せし妾腹、さるによつて、分地を賜はる。臣下も同然。然るに情なや我が母清光院どのには、國隱ありし存生の砌りより、某に家國を繼がせんと、道ならぬ御心底。それと悟つて國遠したる放埒惰弱は、繼母への義理と察しながら、片時も國に主なくては家の亂れと、某が家督相續。疾にも讓り返すべき家國なれども、佞人はびこり、その上、計らざる寶の紛失。本意ならずも延引せし我が胸中、非道の仕業と、さぞかし恨み暮らしたであらうなア。

萬治　こは御勿體なき兄者人の仰せ。身の惰弱より出國いたしたる萬治郎、元來國に望みなければ、何しにあなた樣を恨みませうぞ。假にも左やうのお詞は、却つてお恨みに存じまする。

鳴戸　すりや、いよ〳〵我れに別心はないぢやまで。

萬治　弓矢神も照覽あれ。

鳴戸　ハテ、性は善なりぢやよなア。

ト姫、三方に土器を乘せ持ち出る。梢、長柄の銚子持ち出る。鳴戸之助が前に置き、梢、銚子を取る。奥へ行けと仕方する。梢、入る。

寢覺　樣子はあれにて承はりました。斯うなるからは包み隱さうやうはござりませぬ。御兄弟初めて御對面いしるし、このお杯を萬治郎さまへ、おあげなされて下さりませいなア。

鳴戸　寢覺の前、暫時ながらも最前は、さぞ心配したであらうなア。

ト前なる三方・銚子を取り、二重舞臺の前に置き・元の所へ戻り

父萩塚將監さまより、嫡々相傳の萬治郎へ、家督相續いたせよとある御杯。立寄つて頂戴しやれ。

ト萬治郎、心得ぬこなしにて

萬治　訝かしい御意と申し、殊に先年、歿り給ひし

寢覺　親人樣とはな。

鳴戸　御存生の砌り、殘月と名付け、至つて御秘藏ありしあの弓に、握り革に御手形の殘されしは、爰に御座あるも同然。

萬治　すりや、この弓が親人の御秘藏とな。ハッ〳〵

ト平伏して云ふ。

鳴戸　三年父の道を改めざるは、子たるの敎へ。弟ながら本腹の其方、嫡子に順ずる式目。二品の寶揃ひなば・家督相續の古格に隨ひ、その杯を。

萬治　サア、只今も申す通り、惰弱と申し、愚かなる私し、家國を治むる器量にござりませぬ。

寢覺　現在の兄御樣を差措き、なんの萬治郎さまが、家督をお繼ぎなされませうぞ。左やうに仰しやるは、まだお疑ひのお心が解けませぬかいなア。

萬治　この儀は會得いたしませぬぞ。

鳴戸　尤もには思へども、この鳴戸之助は……サア、今日あつて、明日をも知れぬ武門の常。今にも自然の事あらば、國の強きも遠きを慮る某が采配。

萬治　イヤ〳〵、兄に憐れみあれば、敬まふは弟の道、如何やうに御意なされても、自他ともこの儀は。

鳴戸　すりや、斯程まで理を述べても。

萬治　こればつかりは。

寢覺　お免しなされて

兩人　下さりませ。

鳴戸　ハテ、是非に及ばぬ。

ト手を組む。バタ〳〵にて花道より近習走り出て

侍ひ　申し上げます。眞柴家執權職の船印と相見え、鳴尾の沖より入り來る樣子。それゆゑ、早速御注進申し上げまする。

鳴戸　すりや、鳴尾まで來りしとな……船の樣子を、猶も見極め、早く知らせい。

侍ひ　ハッ。

ト引返し入る。

萬治　ナニ、執權職の船印とは。

寢覺　心元ない。

トこなし、又バタ〳〵にて、花道より近習走り出で

近習　只今御注進の元船、次第に間近く、三四里隔てゝ見えまする。船印は即ち松田將監さまの御定紋、先達て福芝左衞門さまよりの御內意の如く、雕龍丸を受取りの爲御上使の御乘船に相違なく見えますれば、早く御用意あつて然るべう存じまする。

ト云ひ捨て、引返し入る。萬治郎、姬、驚ろき

萬治　すりや、紛失の雕龍丸、受取りの爲

寢覺　都より上使の船が來るのかいなア。

トうろ〳〵する。

鳴戸　ハテ、仰々しい家來が知らせ。着岸に程もあるまい。萬治郎、寢覺、隨分と堅固で

ト云ひ捨て、行かうとする。

萬治　兄者人、暫らく。

鳴戸　弟、さらば。

ト鳴戸之助、振り返り、ちよつとこなしあつて

トまた行かうとする。

萬治　兄者人、只今の御返事いたしませう。

鳴戸　今の返事とは。

ト萬治郎、弓の方を見返す。合ひ方になる。三方に備へたる杯を取つて

萬治　家督相續の古格の杯、斯くの通り。

ト呑み干して杯を懐中する。

寢覺　そんなら、あなたが家國を、お繼ぎなさるお心かえ。

鳴治　兄者人、國へ歸ります。

鳴戸　なんと。

萬治　サア、大名の子と生れながら、一生日蔭者で朽ち果つるは、先づ差當つて先祖へ不孝。國の守になりさへすれば、誰れが意見するものもなし、傾城を請け出さうが、舞子を抱へ踊らさうが、日にさへ乘つたら、女子八百人が千人でも自由自在、鳴門を泉水にして、びいどろの橋を掛けて置かうが、國守の威光ぢや。出來る事を、どううろたへて、今までウカ〳〵としてゐた事ぢやしらぬまで。

寢覺　ヤ、そりや、御眞實でござりますかえ。

萬治　眞實とも〳〵、國の守になりたうて〳〵、斯うしてゐるうちも、氣がモヤ〳〵。

トこなしあつて

申し、兄者人、一刻も早う、國へ連れてござつて下さりませ。

鳴戸　今の今まで否みし弟、紛失の雌龍丸、受取りの上使來ると聞くより、俄かに承知いたせしは。

ト萬治郎、ツカ〳〵と鳴戸之助が側へ行て

萬治　兄者人、在所知れざる御太刀の云ひ譯に、切腹なされんとの、こなたのお心でござりませうがな。

ト鳴戸之助こなしあつて

鳴戸　紛失の雌龍丸、詮議の日延べも今日限り、武將より上使として松田監物、着岸までに在所知れずば、國守たる我が越度を覺りて、鳴戸之助に成り代りて、切腹して云ひ譯せん爲、家督を承知いたしたのであらうがな。

寢覺　エヽ、そんなら兄御に成り代り、切腹なさるお心で、國へ去なうと仰しやるのかいなア。

萬治　イヤ〳〵、全くさうでは

ト鳴戸之助、萬治郎が手を取り、ヂツと顏を見て

鳴戸　國鎌倉と隔たりしが、初めて逢うたる弟、腹は替れど骨肉同胞、それ程までに

萬治　すりや、あなたに代つて、相果てるこの身の覺悟を

寢覺　エヽ。

鳴戸　知らいでならうか。六度契つて兄となり

萬治　七度結んで弟と

寢覺　假初めならぬ血筋と血筋

　ト鳴戸之助、萬治郎を引き廻し

鳴戸　道の道たる汝が孝心。

萬治　兄者人

鳴戸　弟

萬治　實に

寢覺　親は

三人　泣き寄りぢやなア。

　ト手を取り交し泣くこなしある。姫、氣を替へ、前へ出て

寢覺　サア、首討つて下さんせ。

鳴戸　なんと。

寢覺　萬治郎さまのお爲ぢやと、濱田出雲に騙かられ、離龍丸の御劍を失ひしこの身の科、お情ながらの流罪なら、御上使への御返答に、自らが首討つて、この上にも日延べのお願ひ、命はサラ〳〵惜しみませぬが、たゞ亡き後で、萬治郎さまの事を

　ト泣かうとして

サア、片時も早う。

　ト首さしのべる。

鳴戸　萬治郎が妻女ながら、關白道方公の御息女、殺害する程ならば、斯程にまで心配せうか。

萬治　さうぢや。

　ト切腹せうとする。鳴戸之助留めて

鳴戸　コリヤ、早まるな。

萬治　御劍受取りの監物どの、着岸あらば兄者人のお身の大事、それまで待たず拙者が切腹。

鳴戸　ヤア、うろたへ者。國遠せし其方、家督の屆けもなきうちに、腹切つたりとて、申し譯にならうと思ふか。

寢覺　さうでござりまする。御返答には、自らが首を

鳴戸　イヽヤ、切れぬ。紛失の誤まりは、一旦濟んだる掟の流罪、首討つたりとて、申し譯にはならぬわい。

萬治　御意、尤もにはござれども、危急に迫りし兄者人の御難儀、どうマア見捨てゝ。

鳴戸　ならぬというて、犬死するか。

寝覺　そんなら、わたしを

鳴戸　其方を殺せば、殿下のお怒り、家國ともに滅亡さするか。

寝覺　サア、それは。

萬治　どうぞ、拙者を。

鳴戸　切腹叶はぬ。

寝覺　そんなら、わたしを。

鳴戸　それも叶はぬ。

萬治　矢ッ張り拙者が。

鳴戸　ならぬと云ふに。

萬姫　すりや、どうあつても。

鳴戸　兩人ともに叶はぬ事ぢや。

萬姫　ハア、、

ト泣く。鳴戸之助、落ちたる栞を取り見て

鳴戸　吉野山、去年のしをりの道替へて、まだ見ぬ花の奥を尋ねん。

トきつとこなしあつて、矢立を取り、五文字を書き替へ制札を取つて

コレ、この上の五文字、この高札。

ト栞を姫と、高札を萬治郎とに渡す。

鳴戸　吉野山の五文字を、淡路島と書き替へて

萬治　諸人、この山へ登る事を許さず……この高札。

寝覺　この栞を

鳴戸　大炊の君、この島へさすらひとなり給ひ、あの山上に崇めまつる。又その頃、唐土錦山寺より、我が朝へ渡りし釣り鐘、故あつて、この島山にとゞまるところ、この釣り鐘を撞く時は、山川動搖して逆風大波を起す。これ全く、龍神この鐘に望みをかくるゆゑならんと、山上へ人を禁じ、勿論、鐘を撞く事を戒むる。その爲に立て置きたるその高札。時ならずして、盛りを見する地變の陽氣、今を盛りのあの花を散らし、その高札の掟を守つて、掟を破らば兩人が功になりさうなものぢやぞよ。

寝覺　エヽ、花を散らさば、その高札の掟に背く。

萬治　守れば遠目に見るばかり、風を待たねば散らぬ花。

鳴戸　サア、そこを散らすが貞女の工風。

寝覺　底意ありげなお詞なれど、えゝ汲み取らぬ自らは

萬治　智惠の釣瓶の屆かぬ思案。

寝覺　殿樣。

萬治　寢覺。

兩人　ハテ、どうがなア。

ト思案する。鳴戸之助、萬治郎を引き立て、門外へ突き出し、戸を締め、弓を門に入れ、下げ緒にて括る。

萬治　これは。

鳴戸　寢覺が功を立てるまでは、夫婦にもせよ、流人の女、一緒に置かれぬが定まる大法。

萬治　でも。

鳴戸　戸前に掛けしこの弓は、親人の御形身、理不盡に開き、もしこの弓を損ずる時は、親人をあやまつも同然。

萬姫　そんなら功の立つまでは。

鳴戸　散ればこそ、いとゞ櫻はめでたけれ。

寢覺　また來る春に

萬治　兄弟夫婦。

鳴戸　盛りを見するか。

寢覺　悲しい別れか。

萬治　生死の二つは

鳴戸　上使の着岸。

萬姫　すりや、それまでに

鳴戸　とくと工風を致して見よサ。

ト唄になると、鳴戸之助こなしあつて、奥へ入る。あと合ひ方。

萬治　思慮深き兄者人の今のお詞。ハテ、どうがな。

ト思案のこなし。

寢覺　切角めぐり逢うた萬治郎さま、一緒に居ながらも、お側へも寄られぬ隔ての、この垣一重が星合の、天の川にもまさつた思ひ。申し、どうぞ今の謎を解いて下さんせいなア。

トこなしあつて、枝折り戸の側へより

エ、、つツともう、戸を明けるにも明けられぬ。アタ辛氣な、この

ト叩かうとして

勿體ない。舅御さま、お宥しなされて下さりませ／＼。エ、、マア、此やうにしてゐるうち、御上使の船が着いたら、鳴戸之助さまのお身の上。

萬治　兄者人に成り代り、死ぬるにも死なれぬ成行き。どうぞ思案は

寢覺　あるまいかいなア。

ト兩人、立つたり居たり、いろ／＼して泣き落す。トバタ／＼にて、向うより侍ひ一人走り出て

侍ひ　先刻申し上げし船、當島の沖中、はや二三町と相見えますれば、殿樣にも早お出迎ひの御用意あられませう。
ト云ひ捨てゝ入る。
萬治　御上使の船は、はや二三町とな。
寢覺　謎が解けねば、あの花も散らされず、こりやマア、どうせうぞいやア。
萬治　危急に迫るこの場の難儀。
寢覺　鳴戸之助さまに過ちあらば。
萬治　某とても、共に切腹。
寢覺　ア、コレ、必らず早まつて下さんすなえ。
萬治　ぢやというて、生きてはゐられぬ。
寢覺　サア〳〵、花を散らす謎が解けさへすれば、御切腹には及ぶまいがな。
萬治　その謎が解けたと云やるか。
寢覺　サア、その謎は。
萬治　サア
寢覺　サア
兩人　サア〳〵〳〵。
ト姫、ウロ〳〵して、フト山の上の釣り鐘を見て、膝を叩き、靜かに修羅の合ひ方になる。

寢覺　オヽ、さうぢや。いま鳴戸之助さまのお詞、あの山の上の鐘を撞けば、龍神怒つて風波烈しく、風を起してあの花を散らせば、海も荒れ、自ら漂ふ上使の船、例へ立てたる高札の、國の掟は破るとも、まだ見ぬ山のあの花を、散らせと謎に替へたる五文字。兄御のお心を覺り上は、罪に罪を重ぬるとも、高根へ登つて、あの花を、散らさいで置かうか。
トきつとこなしあつて
さうぢや。
ト合ひ方、段々烈しくなる。姫、坂口へ上がらうとする。萬治郎あせる。ト臆病口より緣の下に觀壽院、窺ひ出で、立ちふさがり
觀壽　萬治郎めが後を慕ひ、室の津から渡つて來て、何もかも殘らず聞いた。滅多にこの山へ、やる事はならぬ。
寢覺　そちや觀壽院、邪魔せずと退きや。
觀壽　猪口才な女郎め。
ト支へる。姫、引きのけ、正面の坂の上へ行かうとする。觀壽院、續いて登る。
ト臆病口より九平次出て
九平　お尋ねの萬治郎。われを

ト弓を取り、切り戸を明け、萬治郎にかゝる。少し立廻りあつて、萬治郎、内へ入り、山の口へ行かうとする。九平次、支へる。山の中程には姫、觀壽院、兩方立廻りのうち、垣を破り、トゞ姫、山の上へ上がる。觀壽院も上がり、烈しきタテとなる。よき程に九平次、萬治郎を引きつける。

鳴戸　エイ。

ト臆病口の障子の内より、鳴戸之助、矢の手裏劍を打つ。九平次に當り死ぬる。

萬治　ヤア。これは。

ト鳴戸之助、臆病口より出で、右の矢を取り上げ

鳴戸　父の形見を土足にかける悪黨者。某が一矢の成敗。

ト萬治郎、また山へ上がらうとする。鳴戸之助引きとめ

ヤレ待て弟、女ながらも甲斐々々しき、寢覺が貞節を無足にさすか。

ト兩人、山の上にて、いろ／＼面白きタテのうち、姫に觀壽院切りかける。姫、身をかはす途端に、櫻の枝を切り落す。姫、この枝を持ち

寢覺　今こそ、願ひを

ト立の間に枝をかける、本釣り鐘をゴンと撞くと、ドロ／＼にて花散る。觀壽院また切りかける。姫、見得よく枝にてとめる。鳴戸之助キッと上を見て

鳴戸　アレ／＼／＼、飛花落葉は今日の前、誠や釋尊前生の時、この鐘を撞き、大法を得給ひしに、水晶四方を圍むと御經にも說き給ふ。この音、耳に入る時は、百八煩惱の無盡、罪障を消滅する稀代の撞き鐘。

萬治　さるによつて恒河の魚くず、龍神龍女山神河伯に至るまで、この音を聞いて怒りを起し、山河草木に至るまで、動亂するとは聞けど、見しは初めて。

ト姫、觀壽院、タテのうち、また、鐘を撞く事。立廻りある。この間、大ドロ／＼にて雨車、稻光り、雷の音すさまじく、櫻は殘らず散り、山の樹木皆々風に吹き折れる仕掛け。臆病口の屋體の障子、屋根も吹き捲る仕掛け。震動雷電の模樣よろしくある。バタ／＼にて又、侍ひ走り出で

侍ひ　御上使の御座船、既に汀に着くところ、俄かに大風、大波、大山の崩るゝ如く、滄海一度に古今の大暴風。これによつて上使の船も、殊に怪しく相見えまする。それゆゑに、上を下へと騒動仕りまするやうにござります

る。

鳴戸　ハテ、稀代の大變。

萬治　女の念力。

寢覺　岩をも通す。

ト姫、觀壽院、タテあつて、始終此うち釣り鐘せはしく撞く。ト又大ドロ〳〵にて稻光、雷の音すさまじく鳴る。石碑より水氣立ち上がる。ト金作りの太刀を吹き上げる。觀壽院、姫、タテ見事にとまる。皆々キッと太刀に目を附け

鳴戸　さてこそ我が推量に違はず、鐘の響きに金氣を誘ひ、金性水を相剋し、水氣を卷き上げ、顯はれしは

寢覺　黄金作りに金龍の芝引、帶取りにまで黄金をちりばめ、頭に雄龍の形を顯はし

觀壽　紛失せし雌龍丸に、寸分違はぬその拵らへ、殊に陽氣の寸尺とは、疑ひもなく雄龍丸、水氣によつて顯はれしは

萬治　鍔と目貫は南蠻金、陽を象る劒の寸尺、

鳴戸　小坂部刑部、討死の砌り、この所に隱し置きしに違ひなし。

萬治　すりや、時ならず咲く花も、劒の威德に陽氣を發して

寢覺　かゝる不思議を見せけるか。

觀壽　その太刀を

ト兩人太刀をせり合ひ、立廻りあつて、觀壽院、太刀を取り、姫をちよつと當てて下へ下りる。鳴戸之助、觀壽院を引き戻す。

猪口才な。

ト鳴戸之助、右の太刀、拔きとり、少し立廻りあつて、鳴戸之助、太刀を取り、觀壽院をボンと切る。

鳴戸　雌龍丸は失せたれども、計らず手に入る雄龍の劒。

萬治　掟を背きて掟を守る一つの功に。

鳴戸　流罪は赦免。

寢覺　エヽ、忝ない。

鳴戸　ヤレ、心たゆます、その鐘を

寢覺　大願成就。

ト姫、烈しくつく。ドロ〳〵。皆こなしあつて、道具一面にセリ上がる。これに構はず、鳴戸之助、萬治郎、劒をキッと見て

鳴戸　小坂部が先祖より、家に傳はる雌雄の二振り、雌龍丸は帶せしかど、雄龍の劒を深く惜しみ、討死の時に至

つて、隠し置いたる雄龍丸。
萬治　二振り合體するときは、利運全き四海の寶。
鳴戸　貞女の試に
萬治　劍の在所
鳴戸　稀代の不思議を
兩人　見る事ぢやなア。
ト右せりふ一杯に道具セリ上げ、よき所に霞下りると、島山、麓の景色。橋がゝりより、浪の打ち寄せ。矢張り大ドロ〳〵、大風の體。浪頭打つてゐる。ト橋がゝりより漁船二艘、一艘は平作、一艘は磯六、大風に船を卷き上げられながら、兩人磯へ着く。ト一時に飛び上がり、平作行くを、磯六立廻りてとめる。
磯六　親仁、コリヤ、どこへ行く。
平作　萬治郎を引ッ捕へ、褒美にする。爰はなせ。
磯六　さうはさゝぬ。
ト兩人立廻つて、キッと留まる。この時、臆病口より鳴戸之助、萬治郎寢覺を連れ出る。風靜まる。コイヤイになる。
鳴戸　野口藏之進。
磯六　御主人樣。
ト立廻つて、平作をポンと當てる。
鳴戸　何ゆゑ、これへ。
磯六　雌龍丸を携へ、立退きし小坂部彌三郎、出雲が魂魄に支へられ、無念や取逃がしてござりまする。
鳴戸　苦しうない。雄龍の劍、手に入る上は、一旦武將への申し譯。
萬治　でも、拜借の黃金は
磯六　七百五十金、即ち調達。
鳴戸　ホヽ、天晴れ。これを功に藏之進、めでたく歸國いたしてよからう。
磯六　エヽ、有り難い。
鳴戸　劍を持參し、萬治郎は都へ。
萬治　然らば、直さま。
ト姫を連れ、行かうとする。平作起きて
平作　うぬ。
ト鳴戸之助にかゝる。ポンと切る。
鳴戸　發足の血祭り。
ト萬治郎、寢覺、磯六の三人
三人　おさらば。
鳴戸　行きやれ。

ト血を拭ふ。三人、向うへ走り入る。チョン／＼

幕

造り物、一面の淺黃幕、松原の體。國平、着附け黑股引、脚絆、三尺帶に大小にて。丹下、飛脚の形。兩人狀箱を爭つてゐる見得、バタ／＼にて幕明く。

國平　この狀箱渡せ。

丹下　大切なる密書、うぬには渡さぬ。

國平　面は見知つた濱田が家來、うぬには大分、詮議のある奴。

丹下　萩塚が家來國平、うぬにも詮議がある。

國平　先づはこの狀箱。

丹下　なにを。

ト立廻つて狀箱を引き取り、丹下をポンとあて、狀箱より密書を出して讀む。

國平　「兼ねての謀計、大半相調ひ候ふ間、豐前小倉の古城に立籠り、不日に都へ押寄せるべく、裏切りの手段、肝要たるべく候ふ、松田監物どのへ。桑名權藤太。」ムウ、この權藤太といふは、小城部が家臣、當春亡びし太郎左衛門が實子。すりや謀叛の張本彌三郎信久は、小倉の古城に立籠るとな。主人への手土產、よい物が手に入つたわい。

ト密書を懷中する。丹下起きて

飛脚　その密書を

トかゝるを立廻つてとまる。代官、捕り手、バラ／＼と出て

代官　ソリヤ。

捕手　動くな。

ト取卷く。

國平　何ひろぐのぢや。

代官　萩塚の家來、召捕つて萬治郎が行くへ、白狀さす。腕まはせ。

國平　さては、うぬらも小坂部が殘黨。此方から生かしては置かぬ。覺悟ひろげ。

ト丹下を取つて投げ、身拵らへする。

代官　踏みつけて、縛ぶて。

捕手　捕つた。

ト皆々かゝる。丹下も拔いてかゝる。タテいろ／＼あつて、トヾ國平も拔いて、皆々を切り捲り、橋がゝりへ追ひ込む。ト景事の口上出る。

造り物、大佛馬町の貸座敷の體。井戸屋形車、前に走りあつて、二重舞臺、一間半、數寄屋がゝり、眞中、よき所に爐あり、側に炭取り、櫓、絹蒲團あるべし。夕霧、水汲んでゐる。但し、衣裳、襠褊、太夫の拵らへ。伊左衛門、羽織衣裳にて、米かし桶の中へ杓子を入れ、米をかしてゐる。この見得、ゆるやかなる在郷唄にて、幕ひらく

ト あと合ひ方になる。

夕霧　申し、うちまきは、もう洗へたかえ。

伊左　杓子でこねまはして、水を流す度々に、うちまきは井戸走りへ、大方うちまきぢや。

夕霧　今日はどうぞ、ほんまの飯になればよいがなア。伊州さん。

伊左　アレ、まだ伊州さんといふほどにの。今度からこちの人と云やいなう。太夫。

夕霧　それ〳〵、お前も矢ツ張り太夫と云ひなます。

伊左　イヤ、なますは、朔日に致しませう。

夕霧　エヽ、あの口はいなア。

ト伊左衛門の顏を叩かうとする。伊左衛門とめて

伊左　オット、顏くらはさずと、飯くらはしたり。

夕霧　そんなら早う、飯仕掛けう。

伊左　然らば我れらは、炭いたさう。

ト爐の前へ行き、炭をする。夕霧、米かし桶を持つて上がり、釜へ米を入れる。

飯も炊けるは宗德釜の一德ぢや。

夕霧　ア、辛氣。しんどやなア。

伊左　マア〳〵、休んで、炬燵へおぢや〳〵。

ト伊左衛門、爐の上へ櫓をかけて蒲團をかける。夕霧、煙草盆を抑へ、伊左衛門の側へ持つて行く。いろ〳〵トある。ト謠になる。

〽手枕の肩かへて、持てども持たれぬそも戀は、なんの重荷ぞ。

ト向うより、いや風、てんれつ、小れん、衣裳、袴、五升樽をさし荷ひ、いや風先肩、てんれつ後肩にて、花道よき所にとまり行き、仔細らしく構へ

てん　これは洛中に住居いたす有德の者でえす。この頃難波より上られし、粹の骨頂、大通軒と申すゐらの先生、傾城買ひの傳授、粹の指南を致され、數多の弟子を集めらるゝ。

いや　さるに依つて、我れらもその弟子になつてござるが、なにが下地の粋な上を、毎日々々粋がる事ぢやによつて粋のおくびばかりが出る事でござる。

　ト三人、顔見合して笑ふ。

小れ　イヤ、何かと申すうち、はや先生の方へ程近し。急いで參らう。

三人　心得た〳〵。

てん　これから拍子で行くのぢや。、さつ〳〵サ。

いや　さや豆こ。

小れ　なた豆こ。

てん　そら豆こ。

いや　えだ豆こ。

小れ　あを豆こ。

てん　しろ豆こ。

いや　くろ豆こ。

小れ　女豆こ。

てん　足の裏の豆こ。

三人　アヽ、しんどやの。

　ト夕霧、表を見て

夕霧　オヽ、いや風さん、小れんさん、てんれつさんも、それは、なんぢやぞいなア。

伊左　これは、いづれも、洒落た御趣向ぢやの。

　ト三人、内へ入ろ。樽を下ろし

てん　イヤ、申し先生、今日は御夫婦へ、一杯をお進め申さうと存じて

小れ　都の名酒

いや　瀧の水とは、なる口でござりますわい。

伊左　それは千萬忝ない。それならば、御家來衆に持たせはなされいで。

てん　アイヤ〳〵。これが戀の重荷ぢやてな。

いや　と申す譯は、どうしてなりと、斯うしてなりと、惚れられたうて〳〵、熱氣の覺める間はないぢや。ところで先生が、女に惚れさす御傳授を、惜しまずなされて下さるやうに。へヽヽヽ。

てん　御機嫌取りのお神酒を、供へようと存じまして。

小れ　めい〳〵肩を腫らして持ち運ぶ。

いや　戀の重荷。

夕霧　重荷といふもおも荷なり。

伊左　誰が踏みわけし戀の道。

夕霧　巷に人の迷ふぢやなア。

いや　アヽ、ちまたぐらに、おれは迷ふぢやなア。
　ト皆々笑ふ。
伊左　時に各々方、御執心に依つて、傾城買ひの指南から粋の傳授、口舌の口傳を、殘らず教へるぢや。して、いや風スには、傾城買ひのお望みとござるが、どのやうな形がお好みぢやな。
いや　拙者が好みは、紫縮緬、對の長羽織、ほうろく頭巾で行つて見たうござりまする。
伊左　それは、時代な傾城買ひぢやな。
夕霧　サア、稽古の衣裳、着替へなされ。
　トいや風に、紫縮緬衣裳、羽織を渡す。いや風取つて着る。
伊左　褄は一つ前に合した方がよいぞ。昔の大臣は衿を抜き衿に着たけれど、今の判官は、衿を詰めて着るのぢや。
　トいや風、衣裳、頭巾きせる。ト櫓を取つて
伊左　これをそこらへお据ゑなされ。
いや　爰らでござりまするか。
伊左　オツト、そこらで、よし／＼。
いや　てんれつ公、御苦勞ながら。
てん　エヽ、ちよぼかな。

小れ　拙者、糸に仕らう。
いや　それは御苦勞。
小れ　テン。
てん　心を盡せし身のまはり、大盡小袖長羽織。
　トいや風、をかしき振りする。
伊左　アヽ、それではどうもならぬ。左の袖を、斯う流し右の袖を握るのぢや。
いや　斯うかな。
小れ　テン
てん　心を盡せし身のまはり、大盡小袖長羽織。
　トちんばに歩く。
伊左　それ／＼、それでは足元がちんばぢや。
いや　サア、先刻にこけた時、筋が違うたかして、面妖、ちんばになりまする。
伊左　そこで、ズッと通ると、傾城が負け惜しみで、姫達に腰かけ、煙くらべん淺間山など、外らさぬ顏で、鼻唄うたうてゐるぢや。サア、貴公、何か仕掛けた詞を云うて御覽じ。
いや　サア、云ふは云ふけれど、向うにほんまの女子が居ぬと、えらうやり憎うござりまする。

伊左　そりや、尤も。太夫、型になつて進ぜましや。
夕霧　これは、迷惑。
ト不承々々炬燵に腰かけ、頼む。
いや　コレ、唄どころぢやない。來たわいの。
ト夕霧、構はずゐる。
てん　來たわいの……ヤ、來たわいな。
小れ　ござんした。
伊左　これはしたり。
トいや風引ッ込む。
いや　オヽ、こちのやうな、濡れたがる入梅大盡の、黴びた衿には付かれまい。
てん　ずんど立つを
小れ　ツン。
ト夕霧、ウツカリしてゐる。いや風、いろ〳〵こなし
いや　いま一應おやり下され。黴びた衿には付かれまい。ツン。
ト伊左衞門、見かねて
伊左　それ〳〵、太夫、留めて進ぜやいなう。
夕霧　アイ。
ト袖を持つ。

小れ　テンテン。
てん　袖から袖へ手を入れて、ちつと抱きしめ引き寄すれば
トいや風、ほんまに抱きつく。伊左衞門、飛んで下り引分け
伊左　アヽ、コレ〳〵、そこまで身を入れる事はないてや。
いや　あまり性根過ぎまする。
伊左　これから別れて去ぬる段ぢや。
てん　積おこしてたもんなと、別れてこそは歸りける。
トいや風、俯向き、フッ〳〵歩く。
伊左　これはしたり、ひだるさうな歩きやうぢや。ちよつとおやりなされ。
ト右の文句にて、伊左衞門、仕方して見せる。
いや　巧いものなア。さう巧うはとんとゆかぬ。
てん　そりや、ゆかぬ筈ぢや。弟子が先生程出來りや、稽古もいらぬ。
三人　ハヽヽヽヽ。
伊左　さて、次はどなたぢやな。
小れ　ハイ、私しでござりまする。私しは、口舌がやつて見たうござりまする。

伊左　口舌なら、無理な事を云うて、マア、ひぞるぢや。或ひは胸倉を取つて、振り廻すか、煙管で灰吹を、カッチカチといはずぢや。

小れ　マア、やつて見ませう。

てん　我れは、その相手になつて受けませう。

小れ　それは、御苦勞。

トてんれつ、頭巾をかつぎ、裲襠を着て、向うへをかしき振りして坐る。トこの時、脇差を抜き置く。

てん　アタ阿房らしい、なんぢやぞいなア。

小れ　サア、書いてたも、書いてくれ。

てん　書け〳〵とは、何をいなア。

小れ　なんぢやあらうと書いてくれ。

てん　ひぜんなら、否ぢやわえ。

小れ　書け〳〵。

てん　書かぬ〳〵、

小れ　イヤ、書け。

てん　書かぬ〳〵〳〵。

ト舞臺を叩き、拍子惡う云ふ。

伊左　ア、、さう惡間では、どうもならぬ。書けなら書け、書かぬなら書かぬと、拍子ようやらねばならぬ。

小れ　ハイ〳〵、サア。

ト舞臺を叩く。

てん　か

ト同じくたゝく。

小れ　エ、、どうぢやぞいの。サア、か

てん　ぬ。

伊左　ハテ、呑み込みの惡い。コレ太夫、ちよつと相手になつてたも。

ト夕霧、伊左衛門が相手になる。

サア、やるぞや、書け。

夕霧　書かぬ。

伊左　書け。

夕霧　書かぬ。

伊左　書け。

夕霧　書かぬ。

伊左　書け。

伊左　か

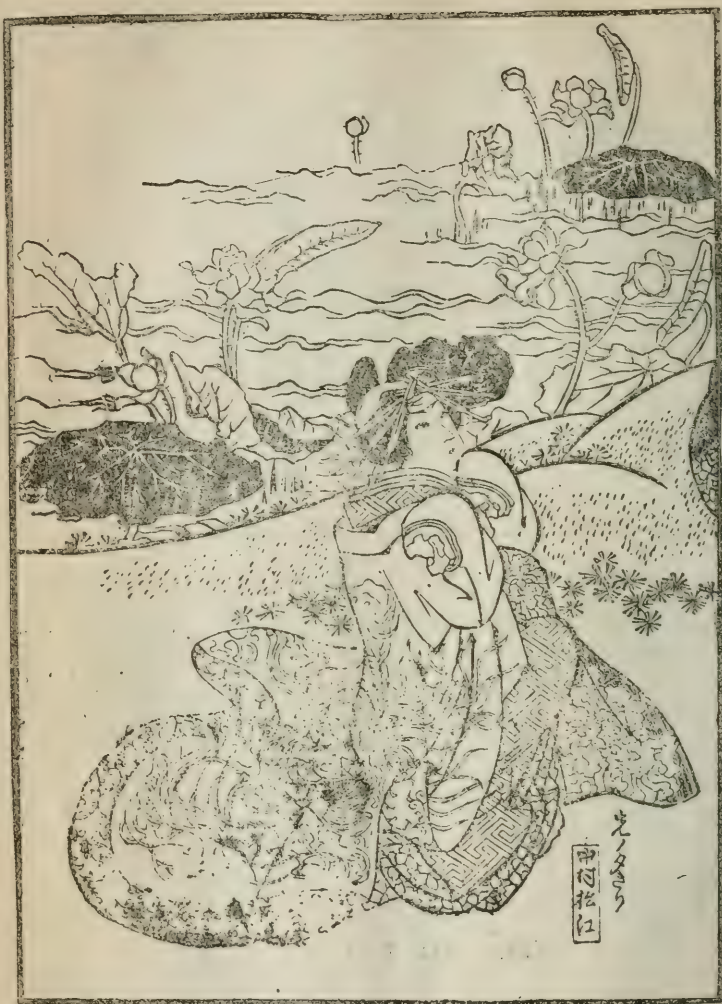
夕霧　け

伊左　か

夕霧　け

伊左　か
夕霧　か
伊左　か
夕霧　かん
伊左　か
夕霧　かん
伊左　か
夕霧　かん
伊左　と斯うやるのぢや。
てん　エヽ、巧いものぢやなア。
いや　イヤモウ、どのやうに稽古して粋にならうが、好い男であらうが、兎角これこがなうては、戀にしよげるぢや。
小れ　ハテ、阿彌陀も金次第ぢや。
てん　オヽ、その阿彌陀の光りをせうかい。
伊左　それにかゝらう。
伊夕　サア、阿彌陀ぢや／＼。
ト合ひ方、チリ／＼となる。紙撚拵らへ、めい／＼書いて、開き見る。
てん　なんぢや、琉球芋を、かぶり／＼戻るに當つた。
小れ　おれは、鯡の昆布巻ぢや。

いや　下拙は、草履買ふのかいやい。併し法華に念佛申せと云ふやうにもないか。
てん　先生は／＼。
いや　御内室は、なんぢや／＼。
夕霧　イエ、たんにも書いてないのぢやわえ。
てん　書いてないといふ事はあるまい。ドレ／＼。
ト紙撚を取らうとする。夕霧見せぬを、無理に取つて見て
これぢや／＼。
いや　女子に蛸はえらいワ。
三人　買ひに行たり。
夕霧　わしや、否いな。
ト又これより、チリ／＼の拍子に掛けて云ふ。
いや　否とは云はさぬ。行てもらはう。
てん小　一散ぢや／＼。
三人　出た／＼／＼。
ト夕霧を無理に後から押しやり、橋がゝりへ入る。ト伊左衛門、殘り、そこらを片附けてゐる。所へ三つ物屋、男二人引連れ出で、内へツカ／＼と入る。
三物　ソレ、男ども、炬燵の蒲團から引ッたくれ、

根本「百千鳥鳴門白浪」挿繪

傾城買指南所の場

男皆　合點ぢや。
ト蒲團、脱ぎ捨てある衣裳、その外を引き出し、風呂敷に包む。
炬燵の櫓から、稽古三味線の胴にまで、家主の烙印がおしてある。
三物　そりや、座敷付きぢや、取るな〳〵。
ト伊左衛門、ウロ〳〵して、合點のゆかぬこなし。
伊左　コレ、三つ物屋どの。こりやどうするのぢや。
三物　どうするとは、貴様がどうするのぢや。十兩をそこらの目腐り金で、おれを食ひ付かし、仕送りの算用、〆めて見れば百貫あまりの不足。せがんでも、とんと明かぬワ。ハテ、やられたおれが厄拂ひ、その代りに、炬燵も衒妻も剝いでしまへ。男ども。
男皆　合點ぢや。
ト三人して伊左衛門を剝ぐ。伊左衛門、下に文盡しの紙子着てゐる。
三物　ハア、、紙子着てゐるな。
伊左　イヤ、この紙子は大事の紙子。
男皆　エ、、そんなもの取つて、入れおふものかい。
ト伊左衛門、掛けてある編笠を取つて

伊左　これも取つて去にや。
三物　アノ、百貫の代りに
伊左　編笠一蓋。
三物　エ、、謡へか唄のやうな事吐かすわい。
ト伊左衛門が頭へ着せて、
これは、われが頭へ着せて、謡なりとも謡うて、鼻の下を養なへ。サア、來い〳〵。エ、、いま〳〵しい。
ト呟やき、突き飛ばし、皆々入る。
伊左　コレ、この笠も時節が來ねば捨てられぬ。ア、、浮世ぢやなア。
トちよん〳〵にて、塀折りかへす。唄三味線出語り。
〽多あみ笠の垢ばりて、紙子の火折ひざのさら。
伊左　ア、、冷えるわいの
トつか〳〵と爐の側へ行き、火箸にて火を探す。
〽今日の寒さをくひしばる。
ト伊左衛門、下へ下り、てんれつが忘れし合口を取つて
〽はれもせぬ、はみ出し鍔の小脇差、小尻つまりの師走の日、胡散らしくも貸座敷の、内を覗いて。
トおきさ、橋がゝりより内を覗き

きさ　申し、卒爾ながら、あなたは伊州さんではござりませぬか。
伊左　オヽ、わが身、吉田屋のおきさか、きさ〳〵。
〽鼻に扇の大蓋風、昔通りに横柄なる。
きさ　マア〳〵、おなつかしや〳〵。何より御無事でお嬉しい。さうしてあなたは、二代目の夕霧さまと、御一緒にござるのぢやなア。これも御無事にござりますかえ。
伊左　オヽイノ、達者で、悋氣ばつかりしてゐるわいの。
きさ　いつでもあなたは浮き〳〵と、お變りなうておめでたい。
伊左　サア、心はとんと變らねど、變つたはおれが形。
きさ　ほんに、紙子を召してござりますなア。
伊左　コレ、七百貫目と釣替への、死んだ夕霧が文ぢやわいなう。
きさ　アノ、これが太夫さまの文かえ。
　ト見る。
伊左　アヽ、コレ〳〵、紙子ざはりが、荒い〳〵。
〽引けば破るゝ、掴めば跡の師走浪人、昔は槍が迎ひに來る。
　ト伊左衛門、草履を肩の先にかけ

〽今はやう〳〵長刀の、草履を脱ぎて、奥座敷もなき侘び住居。
きさ　何事も、昔になりましたなア。雪月花の御趣向の時、あなたと霧さまとの連彈きは、何やらでござりましたなア。
伊左　「面影」ぢやわいなう。
きさ　オヽ、それ〳〵。
伊左　アヽ、面白かつたなう。
きさ　面白うござりました。その時分の御盛んに、お返りなさるゝやうに、ぎえん祝うてお彈きなさらんか。
伊左　マア〳〵、其方、彈いてたも。
　トおきさ、三味線を取つて來て
アヽ、冥途へ知れるものならなう。
きさ　あなたのお心を
〽知らせたや、枕につながる曳舟の、中禿の辰三郎が、きつう逢ひたがらうけれど。
〽それさへ心に叶はぬは、どうもならぬかえ。
〽無慘やな夕霧は、昔の音締めなつかしく、忍ぶ心も袖にあまりし露涙、かけし契りは神々に、誓ひし中も隔たりて、たゞ一筆のとわせさへ、便り渚に啼く千鳥、どこ

にどうして入綾の月は、とんと見捨てゝ今咲く花に、移り心の夜も日も分かず、二人枕の契りは憎や、逢うて辛さを語り明かさん。

ト先の夕霧、連翹の中から出て、伊左衛門が側へ行く。伊左衛門、悔りし、いろ／＼怖がるこなしあつて

先夕　申し／＼。おなつかしうござりました。

伊左　なつかしいは道理ぢやが、さう切々出てもらうては堪らぬ。南無夕霧幽靈、浮かみ給へ／＼。

きさ　イエ／＼、霧さまは、いつまでも浮かまずに、あなたのお側にゐたいといなア。

伊左　エヽ、智慧なき幽靈に、智慧附けるといふものぢや。よい／＼、さう意地悪うすると、退くぞ／＼。オヽ、幽靈を退くのぢや。

先夕　エヽ、胴慾ぢやわいなア。

ト取りつく。伊左衛門逃げ廻り、夕霧戻しにかゝる。

〽こりや堪らぬと後ずさり、折柄表へ夕霧が、戻りかゝつて見て悔り、すまぬ心を物蔭に、忍びて樣子を窺ひゐる。内にも夕霧袂より、取出す文の片端を、おきさが取つて押開き、目早く讀み取る伊左衛門。

トこの文の文句のうち、夕霧柴垣へ隱れる。伊左衛門、文をひろげ見て

伊左　すりや、阿波の大盡が、無體の身請けを遁がれん爲死んだと世間へ云ひ觸らし

〽さア、死んだと云うて嘘云うて、今日まで人目忍ぶ草、秋の末よりぶら／＼と、寢たり起きたり面痩せてゐたわいなア。嘘は出次第、薄い脣、くれんでん、いつぞや廓で待つ客に、蹴られたからは、誠に彼奴は間夫にて候ひけると、蹴ちらかす、あゝこれ申し、誠に短氣に候ひける。萬歳傾城賣つたる物は何々、切つた小指に鬢の髮は起請誓紙は數知れず、昨日は吾妻へ嘘をやり、今日は筑紫の入れ黒子、やいた糯いは焦熱の、さつてもあつ皮な三味線の、一期くるわで婆になるまで勤めけるは、誠に不便に候ひける／＼と蹴散らかし、譯も差別もなかりける。えゝ、胴慾な捨て詞、つれない男を忘れかね、それが嵩じてこの病、煎藥と練り藥と、鍼と按摩でやうやうと、命つないでたまさかに、逢うてこなんにあまようと、思うてゐるに胴慾な、わたしが心が變つたら、抓つてばつかり置かんすか、叩いてばつかり置きなますか。これ、蘇生した夕霧ぢや、機嫌直して下さんせ。これ、申し、笑ひ顏見せて下さんせ。これ、申し、さりとては

心強やとかき口説き、わが身を横に投入れの、水仙きよき姿なり。隱れ忍びし夕霧が、アタ阿房らしいと投げこむ礫、內には悔り飛び退いて。

ト後の夕霧、ツカ／＼と入る。三人の中に立つて、伊左衛門こなしあつて

後夕　オヽ、怖かろ／＼。わしは一昨日より、一昨年の〽彌生なかばに突出しの、太夫となりしその日から、抱かれて寢たが大事かえ、如何にお前が全盛の、姉女郎さんでもなんのまア。怖い事はない、えゝなんぢやいな、戀に遠慮があるかいな。斯うしてゐたは姉樣に、勝山もどきのはしげ髮、長わげもどきやめて主さんも、今は眞身のほんぼの／＼な、夫婦仲とは知らずかえ、味な所へ幽靈の、出場が違うた消えさんせ。そりや云やんな先樣の戀紫の藤屋とは、古いゆるしの色、ついした事ぢやと思うてか、嬉しい事も悲しい事も、皆しつくして濟んである、心底淸き鴨川の、水くさい氣でなろかいな。つべこべおしやんす唇、さア、抓られるなら抓らんせ、出過ぎさしやんすその顏を、さア、叩かれるなら叩かんせと、互ひに摺れ合ふその中を、吉田屋が氣あつかひ、殿御大事とお二人が、互ひに貞女を磨き合しやんす、さつてもさつてもやう／＼月鏡、うつり氣やめて旦那樣、口でなりとも堪能さしてやりなまし、互ひの殿御、こんな事云うたらお二人樣に睨まれう。お免しえ、なんのいなア、旦那さん、どうでござりまする。梅もよし、櫻も同じ一つ眺めに二人を並べ。

伊左　三人一緒に

三人　世帶事。

ト　これより、砧になる。先の夕霧、伊左衛門と、張り物より段々仕立て物の體する。後の夕霧、おきさ、洗濯物、仕立て物の體すると、皆々、縫ひ上げし心にて

伊左　サア／＼、揃へが縫へたら伊勢參り。

三人　よござんしよ。

伊左　そんなら一緒に

四人　鹿島立ち。

〽こがれ登るや、くらがり峠、手引き袖引き追分も過ぎ、奈良の都の名所を數へ、六つか七つか十三鐘の、三輪の女郎衆に、いとしと撫でゝ、長谷で必らず松屋が泊り、とろり／＼と紅鐵漿つけて、男たらしの化粧坂、越えて指折り數へ月よみ日よみ、神の惠みにあひの山、お杉お玉が彈き唄ふ、唄は一諷伊勢比丘尼、ちとくわん／＼、

島さん紺さん中乘りさん、お江戸さん、鉢卷さん、やつて行かんせてんつゝしや、張り臂ぢや、拍子揃へて摺るさゝら、振りやれ振るや神樂の五十鈴川、末社々々の宮めぐり、稻荷は五穀きたいの神、住吉の宮、石清水は弓矢神なり、蛭子の社はこれ爰に、誕生ありける折からに。なんだが口より熱湯を出し、はりたが口よりぬる湯を出し、產湯をひかせ添り、綾や錦の產衣を召させ奉り、天の岩戸をあしわけの、手ぐりくり／＼船に乘せ奉り、海をゆづりに受取り給ふ、西の宮の戎ござん、命長きをいともかしこき釣り針下ろし、あらめで鯛を釣り／＼釣つた姿のいよさてしをらしやな、變る枕が物云ふならば、ほんに耻かし床の內、菊にませ垣ゆひこめられし、今は偲ぶに偲ばれぬ。

ト向うより、てんれつ、小れん、いや風、その外中通り五人、子供三人、皆々揃への形にて、手桶を下げて小判を入れ、摺り鉦入りの鳴り物、皆々出る。

皆々　女房呼んだ、金をぼッ込め／＼。

ト云ひ／＼、皆本舞臺へ來て

〽てんれつ、小れん、いや風が、一はた立つて元氣讚。

いや　弟子になつて、入込みし我れ／＼ども、去年よりお家へ新參の千代ども。

小れ　阿母樣よりお迎ひの、御勘當ゆるし、その上に、三千兩のこの金。

てん　あなたの諸拂ひ、お心任せ。

ト皆々拍子にかゝつて

伊左　めでたい祝ひに、蒔いたり／＼。

いや　女房呼んだ。

皆々　金をぼッ込め

ト皆々、桶の小判を蒔き散らす。

〽滅多やたらに蒔き散らす、笑顏吉田屋、おきさが浮き浮き、手を引き連れ立ち、太夫さん方、やりましたがよいか、どうあらう。

皆々　だんない／＼。

〽旦那がだんなのお喜び、歸り咲きなる藤屋の花嫁、お二人あつて。

皆々　だんない／＼、祝うて打ちませう。

皆々　シャン／＼、シャ／＼シャンノシャン

〽しゃんと手拍子、口拍子、仕合せ拍子打ちつれて、おきさが浮かれ。

ト三重になつて、伊左衛門、夕霧二人、その外皆々後

より、おきさ、浮かれながら向うへ段々入る。

チヨン／＼幕

五　段　目

博多揚屋の場

役名――小坂彌部三郎信久。桑名權藤次、船頭、栂利甚五郎、水主、友八。同、綱藏。同梶六。同、日和八。同、押右衛門。同、渚藏。傾城、高窓。同、雛鶴。同、賤機。同、三國。花形屋才兵衞。淺川求馬。森國平。傾城、環太夫、實ハおなみ。松田監物。野口藏之進。早川帶刀。萩塚鳴戸之助。

造り物、一面の通り二重舞臺、向う長暖簾。上の方、中二階、その前、植込み、手水鉢、柴垣などよろしく取り付く。すべて、博多揚屋の體。二重舞臺の上手に、甚五郎、おも船頭の拵らへ。着付け、羽織にて褥に坐り、刀掛けに大小を掛け、酒呑んでゐる。傾城高窓、唐糸、花紫、雛鶴、賤機、振り袖傾城、三國、高尾めい／＼莨こ盆を扣へ、禿一人づゝ附添ふ。平舞臺に亭主才兵衞。水主、友八、綱藏、梶六、日和八、押右衛門、渚藏、各々揃への拵らへ。着附け羽織。環太夫、着附け、丹前の上を、引しごきにて括り、下の傾城の拵らへ、太鼓を叩きゐる。右の見得、幕の内より

〽博多浦から船漕ぎ出でゝ。

皆々　なんとした。

〽沖に見ゆるは小倉の天守。

皆々　サアトサア。

卜踊り賑はしき體、幕明く。

〽里の女郎衆の云ふ事聞けば。

皆々　なんとした。

〽明日はお立ちか、お名殘惜しや。

皆々　ヤアトサア。

卜だん／＼音頭を繰返し、皆々踊る。此うち甚五郎、酒呑んでゐる。

亭主　コレ／＼頭、こなたもちつと酒をやめて、皆と一緒に踊らんかいの。

甚五　何を吐かすやら、わいらが間拍子合はぬ踊りも、そこにゐる環太夫が趣向、否とも云はれず附合ひに受けてゐるのぢや。

亭主　時に、酔が醒め切つた。一丁入れませうかい。

皆々　よからう／＼。

高窓　環さま、マア休んで
女皆　一つ呑ましやんせいなア。
環　わしには構はず、始めさんせいなア。
亭主　そりや、許しが出た。お銚子々々々。
禿　アイ〳〵。
ト銚子杯を幾つも持つて來る。めい〳〵臺詞云うて酒呑む。
甚五　イヤ、環、大勢の傾城を揚げて金銀を湯水のやうに蒔き散らすは、みな君への奉公。これ程、實を入れて口說くも、まんざら昨今の馴染みでない。覺えてゐやらう。それ、變つた事が緣になつて
環　昔は蜑の蜑乙女、鳴戶の沖で奪ひ合うた千鳥の香爐が橋渡し。
甚五　それから魂魄思ひ込んだ、我れらが戀人
環　廻り廻つて
甚五　廓の出合ひ。
環　味な緣で
甚五　あつたよなア。
亭主　おも船頭でも誰れあらう。當國の殿のお抱へ、梅利甚五郎どの

押右　その下を働らく水主のおいらは
友八　おも船頭のよざにかゝつて
綱藏　酒と色との遊び事。
梶六　極樂の追手が吹く
日和　弘誓の船に乘つた心。
清藏　皆一統に
皆々　浮かみ上がつてゐやんすわいの。
甚五　イヤ又、云ふぢやないが、恐らくこの甚五郎が棍棒を取つたら、日本の地は愚か、唐天竺までも、思ふ湊へ漕ぎつける。得手に不足の丈夫な船頭、その覺えがあればこそ、三千石といふ知行を戴き、この通り帶刀御赦免、用人格で武士の附合ひ、その下を働らくわいらは、水主の冥加に叶うた仕合せ。恩に着せぬ。喜べ〳〵。
友八　なんと聞いたか、船頭の威勢は、きびしいものぢやや。
皆々　さればいやい。
甚五　時に、おれが總揚げの女郎どもは、わいらへの褒美思はしき目當、抱いて寢い〳〵。
皆々　こりや、忝ない。
高窓　イ、エ、わたしらは、罪のある身の上なれば、ナ

ア皆さん。
唐糸　さうでござんす。座敷ばかりは苦界の表。
花紫　無體な酒のひら強ひも
三國　勤めする身はいとひはなけれど
賤機　抱かれて寐る事は
皆々　否ぢやわいな。
友八　おも船頭の許しが出たら、否應は云はさぬ。皆氣に入つた元船へ乘るべい。
皆々　合點ぢや。
ト女形へ寄らうとする。環とめて
環　みな待たしやんせ。木折りに行かぬは所謂の手管、濡れ一通りはわたし次第。先刻にも云ふ通り、この杯で勝つたお方に、取持つて上げるわいな。
友八　ヨウ。その杯で吞みこくらをするのか。
環　サア、わたしが始めるぞえ。
ト大杯にて酒を吞む。
亭主　ア、コレ〳〵環、さう吞んでは、體が續かぬ。もう酒ならば、よしにしや〳〵。
環　わたしに構はずと、皆さん、踊らんせ〳〵。
亭主　君の御指圖ぢや。サア、みな踊れ〳〵。

皆々　オウサ、合點ぢや。
友八　下の女郎衆が意氣張り持ちやる。
皆々　なんとした。
友八　金の威光で抱いて寐て見せうぞ。
皆々　そんなもの。
友八　否ぢや〳〵がいろともなしに
皆々　なんとした。
友八　可愛い〳〵と云はせて見せう。
皆々　云はうかの。
トこの文句を、皆々繰返し踊る。此うち奧より、淺川求馬、國平、衣裳、羽織にて出で、この體を見て、不興なる體にて
國平　この家の亭主は、どれに居る。亭主〳〵。
亭主　ハイ〳〵、亭主はわたしでござります。
トこれに構はず、皆々踊つてゐる。甚五郎、兩人を見て、こなしあつて、矢張り酒を吞んでゐる。
國平　うぬが亭主か。
亭主　ハイ、花形屋才兵衞は、私しでござりまする。
國平　うぬ、憎くい奴だ。我れ〳〵が主人、當地へ御逗留の御鬱散、この所へお越し、御遊興なされんとある。そ

れになんぞや、給仕の一人も出さず、粗末な硯蓋只一つで、銚子は初手のまゝにて、替へにも參らず、女ばらは殘らず、この席へ參り居つて、手の皮の破れるほど叩いても、返事さへひろがず、無禮とや云はん。何ゆゑ、斯樣に致す。云ひ譯いたさぬか。仕樣が惡いと手は見せぬぞよ。

ト反りうつ。

求馬　イヤ〳〵國平、待ちやれ。お身のやうに、きつぱ廻しては、恐れて挨拶も出まい。

國平　ぢやと申して

求馬　ハテサテ、扣へてゐやと云ふに……ナニ、亭主、我れ〳〵が主人は一國一城の主、至つての御大名、お忍びの御遊興なればこそ、かゝる所へ御入りなさるゝ。冥加に叶うた、有り難い事と存じて、大切に致すべき筈。よく見れば、船頭風情を重くもてなし、主人をないがしろに致す段、不屆きとや云はん。法外であらうぞ。

亭主　さう仰しやれば、御尤もでござりますれど。

甚五　皆の者、ざぶに構はずと、踊らんかい。どうぢやい。

皆々　合點ぢや〳〵。

ト また音頭とる。皆々踊る。

友八　此方の座敷に踊りがはずむ。

皆々　面白い。

友八　奥の客衆はてくされさんす。

皆々　淋しかろ。

友八　そこで、りやんこがへんねしおこす。

皆々　尤もぢや。

友八　ぬるい顔してねだりにうせた。

皆々　えらいがぢや。

國平　ヤイ〳〵、聞いて居れば、法外もない惡口雜言。うぬら一々、ぶち放してくれる。

ト反り打つてかゝる。求馬とめて

求馬　ハテサテ、高が遊里の仇口、取上げるには及ばぬわサ

國平　でも、餘りと申せば、御主人を馬鹿にひろぎますわい

ト此うち、亭主、氣の毒なるこなしにて、環の側へ行き

亭主　コレ〳〵、環、見やる通り、わしが難儀、其方さまよいやうに御挨拶、頼む〳〵。

環　ようござんす。わたしが云ひ譯をするわいな。

ト兩人、環を見て

求國　ヤ、其方は

環　モシ、水の流れと人の行く末、知れぬが浮世。
求國　ハテ、傾城であつたよなア。
環　あなた方は、この里の勝手を御存じないによつて、大事の御主人を粗末にするかと、お腹を立てなんすが、總じて、この博多の廓では、貴人高位のお客より、お船頭さま方が、大事々々のお客人でござんすわいなア。
求馬　大名高家の人々より
國平　水主船頭を大切に致す
求國　その仔細は。
環　ハテ、お大名さま方は、お身柄が重いに依つて、廓へお出でなんすはたまさか。入江湊の女郎屋は、年が年中、客人といふはお船頭さん、上方の色里で、粹と云ふのは爰では野暮、お前方もこの里で、女郎さん方や揚屋の衆に好かれたくば、もそつと沖の汐風に揉まれ、重楫、取り楫、樣子を覺えなんしたがよいわいなア。
國平　ムウ、尤も。
友八　理窟云はれて、閉口したぞ。
皆々　よい氣味ぢや。
國平　默り居らう。その頤を切り下げてくれう。
ト怒るを求馬とめて

求馬　ハテ、苦しうない、郷に入つては郷に從ひ、荒氣を出しては、御主人の御名が出る。先づ／＼抑へやれ。
國平　左やう存ずれども、彼奴等が惡口を聞いては、ムカムカ蟲唾が走りますわい。
トむつとしてゐるを、求馬押へ、こなし。
甚五　コレ／＼、ざぶ、いま聞く通りぢや。總體、爰に限らず、船着きの廓と云ふは、船頭が大名同然。貴樣達のやうなこけ作は、相手にせぬが所の風ぢや。へゝゝゝ變つた事でないか。
ト國平ムツとするを、求馬抑へる。
イヤ、大切がるも無理ではない。金に飽かした總揚げ。ナニ、環、いつにない今宵の機嫌、あじいな詞のひツぱづし、なんと又、この甚五郎が眞實に、惚れ込んだか。
環　そりや、合うたり叶うたり、わたしより、大事の客にして
甚五　イヤ、客は否ぢや、間夫にならう。
環　エヽ。
甚五　但し、間夫にする事は否か。
環　なんのマア。
甚五　客の外に、間夫といふものを拵らへては、實の夫、

根本「百千鳥鳴門白浪」挿繪

博多席の場

環　野口藏之進へ立たぬと云ふのか。浮き川竹に沈んだは、夫を立てる女の道、退けば今では他人向き。

甚五　ムウ、そんなら外に

環　間夫がござんす。

甚五　その間夫といふは

環　サア、それはな。

ト向う戸屋の内にて信久

信久　環太夫が間夫の大盡、それへ參つて、近附きになりませう。

ト揚り鉦入りの祇園囃子になる。向うより信久、衣裳、羽織、大盡の拵らへ、禿二人附添ふ。

甚五　環が間夫といふは

國平　逆賊の張本。

トきつとなる。

求馬　コリヤ。

ト押へる。

甚五　ハテ、あじいに仕込んで來たなア。

信久　里に名高き環太夫に、一夜は廓け柳町、通ひ盡せし間夫の大盡、ちとお座敷へ推參いたさう。

ト始終、右の鳴り物にて、本舞臺へ來る。鳴り物打ちやむ。

禿一　太夫すの云ひつけで

禿二　信さまのお迎ひ

二人　連れまして來たぞえ。

環　信さま、待ちかねたわいなア。

亭主　これは〳〵。そんなら太夫すの間夫といふは

信久　身共が事サ。

亭主　アノ、信大盡さま。

環　イヽエ、あなたぢやない。

亭主　ハテ、間違ひか。

環　あなたも客人

信久　なんと

環　間夫ではござんせぬわいなア。

甚五　そんなら、間夫にする氣か。

環　否でござんす。

求馬　然らば、我れ〳〵が主人。

環　それも又、ほんの一見。

信久　して其方が

甚五　意地を立てる

四人　間夫といふは
環　身請けしてくれなんせ。
四人　なんと。
環　金に任せた苦界のこの身、例へ千萬思うても、まゝにならぬが勤めの悲しさ。里に根曳の御心底さへ屆いたら、一生この身を任すわいなア。
求馬　ムウ、上方の傾城ならば、身請けと云へば、辭退いたすがお定まり。
國平　それに引きかへ、傾城の方から、身請けしてくれいとは。
求國　ハテ、田舍ぢやな。
亭主　イヤモウ、身請けあるは亭主が喜び。福の神さま達、揃うて御來迎、ヤア、待つてゐた。
ト無性に騷ぐ。
友八　エヽ、やかましいわい。
亭主　ハイ〳〵。
環　皆さん、わたしへの御返事わえ。
甚五　イヤ、滅多に返事はならぬ。
信久　身請け致せば宿の妻。
求馬　實を盡して心底を
國平　見屆けたその上で
環　この身の納まり。
甚五　身請け次第に、一座の太夫へ
信久　殘らず根曳。
女皆　イエ、わたしらは。
環　ハテ、わたし次第に、この座は此まゝ。
求馬　一人も殘さず
國平　身請けの相談。
環　して、その時刻は
甚五　古いやつぢやが
信久　夜半までに。
環　そんなら後夜の
甚五　鐘を合圖に。
信久　金子のたんぞく
求馬　廓の切端、
環　必らず後まで。
甚五　違變はない。マア、それまでは、わつさりと呑みかけう。
信久　身も小座敷で酒一獻。
國平　我れ〳〵も、主人の御前へ

環　そんなら、皆さん

信甚　環、キッと詞を番うたぞよ。

ト騒ぎ唄になる。この一件、皆々奥へ入る。直ぐに踊りと三味線になると、向うより、權藤太、總白髪、頑丈なる親仁にて、着附け、輕衫にて、苞に包みし物を脊負ひ出る。後より、五郎藏、清眼、町人にて付き出る。

五清　親仁どの、どうぞ呪ひを頼みまする。

權藤　サア、えいてや。宿老の太郎左衛門が頼み、この柳町の花形屋へ來てくれいと云ふゆゑ、人を助ける後生、一遍こなた衆の病氣も、呪うて進ぜる。サア、ござれござれ。

ト云うて、本舞臺へ出る。奥より太郎左衛門その外、町人出る。

町人　これは、奇妙權兵衛どの、待ちかねた〳〵。

權藤　さうであらう〳〵。

ト内へ入る。

太郎　そんなら噂のある、呪ひの名人といふは

權藤　この親仁でえすわい。

太郎　早速ながら、おれが病氣は瘧でござる。瘧おこりぢやが、アレ〳〵、寒うなつて來た。オヽ寒。

五郎　聞いて下され、この間女夫喧嘩で、女房を去りましたが、時々目の先へ出て來て、それから無性に惱みますどうでも、生靈がついた業かと見えまする。

清眼　この間、猫を一疋殺したが、それから此方は、釜の下へ入りたうなつて、人を見ると尻ごみばかり致す。猫めがつき居つたさうにござる。

權藤　よし〳〵、呪つて進ぜう、皆そこへ並んだ〳〵。

皆々　それは忝ない。

ト皆々下に居る。權藤太、脊負ひし藁苞を取つて

權藤　當病平癒奇妙頂來々々々々々々々々。

トめい〳〵に戴かして居る。薄ドロ〳〵、此うち、二階の障子明くと、内に鳴戸之助、衣裳、羽織、大盡の拵らへにて、莨をのみながら、この體を見てゐる。

權藤　なんと皆、心持ちはどうぢや。

太郎　ヤア、こりや瘧がさつぱりと落つた。

五郎　生靈が退いたかして、心がハッキリなつた。

清眼　おれがのも退いたさうな。

皆々　これは奇妙ぢや。

權藤　これしきは僅かの驗目。如何なる難病異病でも、おれが呪ひをするがいな、立ち所に平癒さす。そこで異名

を奇妙の權兵衞

亭主　えらし〳〵。次手に我れらも、呪ひ賴みたい。

町人　和御寮のまじなひとは。

亭主　サア、外に病氣はないか、明けても暮れても、欲しいが病ひ。一夜のうちに萬福長者になるやう、どうぞ呪うてもらひたいぢや。

權藤　でも、慾な和郎ぢや。祈禱も、呪ひも、慾一通りは叶ひませぬ。そこで粒で三文はしかたし、謝禮は受けぬ旅行の呪ひ。

鳴戸　邪宗門の鏡を以て、人を迷はす異法にもあらず、少事の利慾にかゝはらず、ハテ、稀代の老人。

權藤　あなたは。

亭主　初對面のお大盡。

鳴戸　諸病治する目前の奇瑞、其方が尊むその品は。

權藤　イヤ、何かは存ぜず、さる尊い御出家から、授かりましたこの一品、持つて戻ると持病の癪、癒るも不思議これ奇妙と、一人二人癒ると、あらゆる病の呪ひ、祕府のまゝ開かぬは、正直一遍、これがほんの鰯の頭も信心からと、譬へに洩れぬ呪ひの因緣、樣子と云ふは、この通りでござります。

鳴戸　すりや、授かりし祕府のまゝで。

權藤　解かぬが正直、奇妙のまじなひ。

鳴戸　ハテ、呪ひぢやよなア。

トこなしあつて、障子シャンとさす。

權藤　なんの事ぢや。

太郎　イヤ、預かり物と紛らしたらば、皆去なうぢやないか。

皆々　權兵衞どの、段々御苦勞。

權藤　なんのいなう。

太郎　呪ひも、してもらへば、才兵衞どの、わしも一緒に去にます。

ト皆々連れて、橋がゝりへ入る。

權藤　時に御亭主、この內へ信大盡といふが、宵から來てゐる筈ぢやが。

亭主　ござるとも〳〵。さては信さまの御連中、皺を延しにおこしか。あの茲な蓆破りめ。

權藤　ハヽヽヽ、ハヽヽヽ。

亭主　サア〳〵、ござりませ。

權藤　ドリヤ、行きませう。

ト藁苞を持ち、中二階をちよつと見込む。訛らへの獨

環　吟になり、右文句のうち、奥より環めれんになりて
もう、堪忍して下さんせ。醉うたわいなア。
ト矢張り獨吟の中にて、いろ〳〵切なきこなし、其まま、横になる。右唄のめりやすにて、奥より女形、皆々出て
高窓　環さまが、きつう醉ひさしんしたわいなア。申し、環さま、氣合が惡うはござんせぬかえ。
ト皆々立ちかゝり、いろ〳〵介抱する。高窓、鏡袋より藥を出だす。賤機、水を持つて來て飲ます。環、心よい體。
環　もう、ようござんす。毎夜々々。わたしが酒に醉ひ、度々お前方の介抱、忘れはおきませぬ。嬉しうござんす。
高窓　なんの、禮に及ぶ事でござんすぞいなア。殿樣のお爲に、この里へ身を賣つてより、只の一夜もお客へとて出して下さんせぬ。
唐糸　何事も酒に紛らし、お前一人で吞ましやんす事ぢやに依つて
三國　譯はしやんすも、尤もでござんす。
高窓　なんぼう、わたしらが勤めをせぬが、嬉しいというて。
賤機　もし、お前の身の上に、病でも出たら、
花紫　大抵、力ない事ぢやないわいなア。
環　よう云うて下さんした。お前方は皆、殿樣のゆかりのお方、お身の上を頼むぞと、夫藏之進どのゝくれ〴〵との云ひ附け。例へこの身は苦界に沈めても、お前方に勤めをさせましては、殿樣へ、夫が云ひ譯がないと思ひ、色と酒とを替へての勤め。なんぼうこの身は苦しうても、お前方を再び、夫へ手渡しするまで、煩らふ事ぢやござんせぬ。必らず案じて下さんすな。その上今宵、鳴戸之助さま、この家へ御入りなされたれば、追ッつけ殿樣のお側へ連れまして、去ぬる綱があるといふもの、喜んで下さんせ。
高窓　何から何まで、お前の苦勞、忘れはおきませぬ。
賤機　嬉しうござんすわいの。
環　また奥から呼んだら惡い。皆々座敷へ、早う〳〵。
皆々　合點でござんす。
ト皆々奥へ入る。また獨吟となる。環、後を見送りこなし
環　ア、ほんになア。わたし一人を力にして、遠い海山隔てたる廓の勤め。ひよつとわたしが煩らうたらと、案

じさしやんすも道理である。それはさうと、鳴戸之助さまに、夫の安否を聞きたいものぢや。

ト橋がゝりより人音するゆゑ、環、氣を替へて、また醉ひたるこなしにて、横になると、踊り三味線になり奴、橋がゝりより、狀箱を持ち出で、呼子を吹く。奥より甚五郎出る。

中間　高濤さま。

ト云はうとするを押へ、環を見て、こなしあつて、顔にて行けとする。奴、橋がゝりに扣へる。

甚五　環々、醉うたな〳〵。また狸か。その手は喰はぬ喰ぬは。

ト足にて搖り起し、いろ〳〵試す事あつて、ツッと橋がゝりへ來て

合圖の呼子の、次第はなんと、

中間　斯く姿を替ゆるも、こなたの御下知。かねて一味合體の面々、時刻を定め、九州へ渡す手筈の密書

ト渡す。甚五郎取つて

甚五　計らず入込みし鳴戸之助。引包んで討ち取る計略。船手の合圖は七ツの滿潮。疾と計らひ置いたか。

中間　ハア、仰せ渡されし通り、諸所の渡海漁船、元船、傳馬まで、悉くもやひを切つて流したれば、入江湊は荒濱同然、例へ鳴戸之助逃げ失せんと致すとも、餘國へ渡る便りなく、陸地はかねて味方の惣勢、飛び道具にて取圍めば、逃げのびん事、いつかな〳〵。その儀は、そつともお氣遣ひあられますな。

甚五　ホ、ウ、出かした〳〵。猶も味方をてうじ合はし、供へ亂さず討入る手筈、心得たか。

中間　畏まつてござります。

ト甚五郎キッと向うを見て

甚五　北斗半天に光りを放つ。最早今宵も子の上刻。滿潮までは今二時。かねての大望、時節到來。

中間　然らば拙者が。

甚五　早く行け。

中間　ハア。

ト奴、橋がゝりへ入る。踊り三味線かすめる

甚五　この上は、味方の兵船、潮に連れて渚に集まるこの密書。

ト狀箱の蓋を取らうとする。環、この時寢返る。甚五郎、恟りして、手水鉢の脇へ狀箱を隱す。環、起き直り

環　誰れぞ水一つ下さんせぬかいなア。

甚五　環、わが身は起きてゐやるか。
環　イヽエ、寝てゐたさうなわいなア。
甚五　すりや、今の様子を
環　なんにも知らぬわいなア
甚五　ても、危ない。
環　エ。
甚五　イヤサ、危ない足元ぢや。奥へ行て寝たがよい。
環　イヤ、わたしや、ちつと爰に用があるによつて
ト手水鉢へ寄らうとするを引き廻して
甚五　環、こりや、何をする。
環　アノ、あんまり酔つたによつて、水を呑まうと思うて。
トまた行かうとするを、立廻つて
甚五　ハテ、手水鉢の水が呑まるゝか、の。
環　ホヽヽヽ、ほんになア、わたしとした事が、こりや、矢ツ張り酔うてゐるさうなわいなア。
トこなしあつて、コロリと横になる　甚五郎、ツツと狀箱を取りに行かうとする　環、寝ながら留めて
手の悪い甚さま、また爰を外すのかいなア。
ト甚五郎こなしあつて

甚五　イヤサ、おれも酔うたによつて、水を呑まうと思うて。
環　ハテ、手水鉢の水が呑めるものかいの。
甚五　ほんに、おれも餘ツぽど、酔うてゐるさうなわい。
ト酔うたるこなしあつて
環　甚さま、なんぼう酔はしやんしても、酒の酔ひ本性忘れず。最前云はしやんした事を、よもや忘れはしやんすまい。
甚五　最前云うた事は。
環　今鳴つた鐘は夜半、わたしが身請けにどうして下さんす。
甚五　舟玉冥理、嘘はつかぬが、わが身が心底、二八月に玄海灘を乗るやうで、いつどんな早手が来うやら、流石のおれもえゝ見ぬて。
環　イヽエ、わたしより、お前の心、慥かに叛逆
甚五　なんと。
環　イヽエ、ほんに殿御の心は秋の空、とんと知れぬ雲行きぢやなア。
甚五　どうやら大事を聞いたやうな。イヤサ、大事の大事の懸人、嘘はつかぬ、心中見せう。

環　その心中に。
甚五　その心中から
　ト切りつける。ちよつと留めて
環　こりや何さしやんす。
甚五　心中に指を切らうと思うて。
環　ハテ、仰山な指の切りやうでござんすなア。
甚五　指が否なら、新らしう氣を替へて、斯う。
　トまた切りにかける。
環　お前の心中見ようとて、切らるゝ事に否ぢやわいなア。
甚五　でも心中に。
　トおこつく。
環　指より望みは、お前の腕。
　ト甚五郎が左の腕捲りにかゝる。
甚五　コリヤ、何する。
環　サア、心中に入れ黒子と。
　トかゝるを、突き廻し
甚五　ハテ、入れ黒子とは、野暮な奴なア。
　ト上手の柴垣より、高窓窺ふ。環、見て
環　ア、コレ、まだ早い／＼、早うござんす。

甚五　環、早いとは。
環　イヤサ、早いとは、ナア。お前の心も知れぬうち。寐るはまだ……早い／＼と云ふのでござんすわいなア。
　ト高窓に掛けて云ふと、下手の柴垣より、友八出かけ窺ふ。甚五郎見て
甚五　コリヤ、まだ早い。まだ早いぞ。
環　甚さま、早いとはえ。
甚五　イヤサ、その早いとは、わが身の心中見ぬ先に、身請けするはまだ……早いと云ふのぢやわい。
環　お前の心中見た上で、わたしが心中。マア、この入れ黒子を
　ト腕を見ようとする。立廻りのうち、甚五郎の左の腕を見、キツとなる。
　さてこそ、あり／＼三ツの鱗。
　ト振りほどき、兩人見得よくなりて
　最前聞きし謀叛の密書、推量は違はぬ河野の末葉、十郎高清であつたよなア。
甚五　ハテ、小ざかしくも存じたよな。何を包まん、我が先祖は伊豫の道清、豫州の三嶋大積明神へ參籠あつて祈る。代々身に、三ツの鱗を生す。

環　さるによつて子孫に至るまで、異相にして、謀叛の兆し止む事なし、元來、舊領の仇を思ひ、萩塚を恨み、四海を望み、天下の科人、遁がれぬ所ぢや。河野十郎、尋常に覺悟しや。

甚五　ハテ、小癪な女め、殊さら今宵は鳴戸之助を討ち取る密計、聞き知つたらぬ。生けては置かれぬ。覺悟せい

環　さう云ふ其方を

甚五　覺悟いたせ。

ト切つてかゝる。立廻つて燭臺を切つて落すと、忍び三重になり、くらがりの立廻り。この時向うより藏之進、忍び裝束にて、龕燈を持ち出で、ちよつと舞臺を見込み、龕燈を隱し、ソロ／＼出で舞臺へ來る。奥より信久、手燭を覆ひながら出る。藏之進、タテの中を摺り抜け、上手の柴垣へ隱れる。信久、よき所にて環をちよつと當てる。ウンと反る。甚五郎見て

甚五　これに。

ト常の合ひ方になる。

信久　初めて知つた御邊の實名、河野高淸。

甚五　小坂部信久、われも變らぬ反逆の類族。

信久　合體なれば龍に翅、して、萩塚を討ち取る手段は。

甚五　時來りし今月今宵、味方の手筈に。

ト隱せし狀箱を取つて來て、密書を出し、信久に見せる。手燭にて讀み

信久　徒黨の者ども、合圖に攻め寄せんとある知らせの密書。

甚五　事成るまでは隱すが肝要。

ト手燭にて密書を火中する。

信久　天晴れ、萩塚だに亡ぼさば、その虚に乘つて久吉を討ち取るべき手段の極意。

トこの時監物出かけ

監物　その手引き、身共が致さう。

信甚　其方は。

監物　眞柴の昵近、松田監物、裏切りして一味同然。

信甚　ホウ、頼もしい。別心なくば、イザ血判。

ト連判を出す。監物見て

監物　最早、日本大半一味。

ト血判する。甚五郎取つて見て、こなし、額を割り、血判を据ゑ。

甚五　河野十郎、一味合體。

ト連判を見得よく、信久に見せる。

信久　ヤレ、遊里の密會、仲見の虞れ。
ト手燭を吹き消す。唄になり、信久連判を懷中して、
皆々こなしあつて、奥へ入る。あと合ひ方になる。
環、ムウと起き、思ひ入れあつて
環　すりや、いよ／＼叛逆人の徒黨、それ
トつか／＼と行かうとする。藏之進、ズツと出て、環
を留め、龕燈を見せる。
ヤア、こちの人、よう來て下さんしたなア。
ト云ふを、藏之進押へ、あたりを窺ひ
藏之　若殿、御爲とは云ひながら、大勢の女中達を、長々
の介抱、出かした／＼。して、鳴戸之助さまは。
環　疾から奥へお入りなされてござんす。そして、お
前のこの姿は。
藏之　叛逆人たる信久、この家を逃げ延びんも計られず、
人目を忍ぶ我が姿。
環國　すりや、今の云ひ合も
藏之　殘らず聞いた。委細は、コリヤ
ト囁く。
環　そんなら。
藏之　密かに、これへ。

環　合點でござんす。
トついと走り入る。橋がゝりより、黒裝束七人、金箱
を持つて出て並べる。奥より高窓出て
高窓　ヤア、お前は
ト云ふを、押へ、囁く。また奥より賤機、雛鶴、花紫
出て
三人　あなたは。
ト云ふを、顔にて押へる。ト唐糸、高尾、三國出る、
皆々右の通りにて、侍ひ一人づゝ女形を連れ、花道へ
行て居ならぶ。
皆々　然らば、此まゝ。
藏之　早く。
皆々　ハア。
ト皆々向うへ入る。この前より亭主出かけ見てゐる。
亭主　ヤア、盜人ぢや。
ト惘りして慄ふ。藏之進、押へて
藏之　コリヤ、傾城は殘らず身請け、その金子。
ト龕燈にて、金箱を見せる。
亭主　ヤア、こりや、拾貫目箱、金にて貳千兩。
藏之　口外いたすと爲にならぬぞ。

亭主　なんのマア、御勿體ない。エヽ、有り難う存じます
る。
ト友八、清藏出て
二人　藏之進──
ト切りかゝる。立廻りあつて、二人をポンと切る。亭
主、愕りするを押へ、あたりを窺ひゐながら、血を拭
ふ。この見得にて道具廻る。ト博多踊りの唄になる。
造り物、眞中に見事なる櫻の木、一面に枝垂れ櫻、
枝々に誂らへの雪洞、燈火をてんじ、見附け常の塀
上手に切り戸、所々に花見床几、毛氈を掛け、これ
に大火鉢、幾つも置いて、眞中の床几に鳴戸之助、
杯を受け、禿、酌してゐる。禿大勢、附添ひゐる
下座の方に、信久、辭儀してゐる。すべて奥座、夜
櫻の景色、よろしくあるべし。道具納まると、博多
踊りの合ひ方になる。
信久　御前、お一つ召上がられませう。
ト鳴戸之助、杯を持ちながら、花を見て
鳴戸　西宮夜靜かにして、百花香し。珠簾を巻かんと欲
して春恨長し……朧に見ゆる夜櫻の、眺めも一入、なん
と一興には思はぬか。
信久　御意の通り、遊里の花を詠むるにつきましても、お
國元にて、彼の御秘藏の蒲櫻、一入でござりまする。
鳴戸　さぞあらう。其方と斯う致して、酒をくむも、珍ら
しいたア。
信久　左やうでござります。
鳴戸　杯をくれう。サヽ、近う〱。
信久　ナニ、お杯を頂戴、ハツ〱。
禿　申し、酒がさめました。燗直して參ぜうかえ。
鳴戸　冷酒になつたか。その大火鉢をこれへ持て。
禿　アイ。
ト二人して大火鉢をよき所へ直して、銚子を火鉢へか
ける。この時、櫻の小蔭より、權藤太、以前の形にて
出で、よき所に坐り、各々目にかゝらぬ體。
鳴戸　ハテ、堅い奴、遊里の酒宴は和らぐが肝心、禮儀を
やめて、サヽ、安座々々。
信久　ナニサマ、御意にもとづくは却つて無禮。
禿　申し、燗が出來ましたぞえ。
鳴戸　よいか、一つつげ〱。
ト禿、酌をする。酒を呑みほし

サ、其方へさゝう。

信久　頂戴仕りませう。

ト　にじり寄り、杯を頂く。

鳴戸　ソレ酌いたせ。

ト　禿、酌する。信久受け、呑まうとする。

イヤ、待て。その杯が三世の別れ。

信久　なんと御意なされまする。

鳴戸　汝が父、刑部太夫を追討の儀は、全く君命とは云ひながら、討手の役は某が親人、當の敵たる鳴戸之助に、主従のちなみあつては、大義の妨げ、それを存じて、暇をくれる印の杯。

信久　すりや、長のお暇を。

鳴戸　君臣の禮も今宵限り。

信久　ハ、ハツ、お暇の杯。

ト　ぐつと呑み干し

有り難く頂戴仕つてござりまする。

鳴戸　禿ども、次へ／＼。

禿　アイ。

ト　皆々入る。

鳴戸　他人となつて、物語りも一興。承はれば、當國鐘ケ崎に根城を構へ、旗上げを致すと聞いたが、さうか

さうか。

信久　思ひ立つたる義兵の旗上げ、先づ一番にあなた様の御居城を攻め落し、その勢ひに乗じ、都へ込み入り、久吉が居城、桃山をも打ち砕き、四海一統の武勇を顯はし、親人の修羅の存念と、藤元にて相果てし家來、出雲が妄執をも晴らしくれんと、より／＼味方を語らひ居りまするやうにござりまする。

鳴戸　そりや、某が居城を攻め落すとな。馴染甲斐にむごい目に會はすなア。併し、さほどの大義を思ひ立てば一方も預ける心腹の家來がなくては叶はぬ。忠義を加へし家來があるか。

権藤　イヤ、お力には、慮外ながら、この老人が居りまする。そつともお氣遣ひ下されな。

ト　この時、鳴戸之助、初めて目にさへぎりし心にて

鳴戸　其方は、いつの間に。

権藤　イヤ、先刻にから

ト　鳴戸之助、権藤太が顔色に心を附けて

鳴戸　ハテナア……先刻見受けし呪ひの老人。

権藤　権兵衛と申すは世を忍ぶ假の名、小坂部譜代の舊臣

鳴戸　桑名權藤太秀之と申すもの去春、我が計略に亡びたる、濱田出雲が實父とな。

權藤　左やうでござりまする。

鳴戸　世になき主人を見すぎる忠義の魂ひ、天晴れ健氣。して行年は

權藤　星霜積つて、七十三歳に罷りなりまする。

鳴戸　人生れて七十は、古來稀れなる長命ぢやなア。勿論壯年の者よりは、健やかに見ゆれども、至つて老年の儀なれば、まさかの合戰の駈引きは、イヤ、心元ない。

ト權藤太、眉にて笑ひ、火鉢を引寄せ、火せゝりしてゐる。

信久　イヤ、卑屈の權藤太、一騎打の勝負など、覺束なく思されんが、力量百人に當り、十貫目の大筒を、中ために致す程の力量でござりまする。

權藤　まだ〱、五十人や百人は、苦に致すやうな親仁ではござらぬ。

鳴戸　ナニサマ、彼の三浦大助は、百六歳にして、若者どもが陣立を歯がゆく思ひ、出馬いたした例しもあり、その大助に比ぶれは、まだ〱血氣盛んな最中ぢやなア。

權藤　只今には、和子の御大事とござらば、日頃好み置きました、大なはめの鎧取つて投げかけ、爺が手練の鐵砲を持つて、なぎ廻つてござらうならば、容易く面を向くもの、一人もござらぬが、あなた樣には、大國の御主。數多ある御家來、其うちには定めてハヤ、大力の勇者もござらう。合戰に及びなば、その時こそは花々しき、老が手並、百萬騎の强敵なりとも、只一ひしぎに粉微塵

ト右せりふのうち、鐵火箸を、思はず紙撚に捻りし思ひ入れあつて

これはしたり、話しに實が入りまして、御覽なされ、流石は田舍の遊所。生金を以て作りましたこの火箸。思はず知らず、アハヽヽ。イヤ、爺めが力量は、ざつと斯樣なものでござります。

鳴戸　流石の老人、天晴れの力量、なか〱、常體の及ぶ所でない。併し、火は熱するを用とし、水は又冷すを徳とす。あたら火箸も、その如く、紙撚になれば、火を用ゆる用を缺く。俗にこれを無益のてんがうといふ。なんと、さうは思はぬか。

權藤　御尤も。

トこなしあつて、元の如く、捻ち戻す。

斯う仕れば、元の火箸、御用なれば、お使ひ遊ばされま

せい。

ト鳴戸之助の前に、火箸を抛る。

鳴戸　當意卽妙、驚ろき入つた。イヤ〱、鳴戸之助、感心々々。

權藤　イヤモウ、これしきは放下師のわざくれ、お目にとまるは、へ、、、お恥かしう存じます。

鳴戸　織部、この上は、汝が武邊、心掛けが、見たい〱

ト信久、櫻の梢にキツと目をつけ

信久　花を塒に、夜陰の胡蝶。

トこなしあつて、莨盆を引寄せ、懷中より香包みを出し、火鉢に入れ、香をつぎ、扇にてあふぐ。トこのかをりにて、塒の蝶々、バラ〱と立つて、信久が側へ寄る。

香を以て敵を欺むき、仁を以て人をなづけ、香のかをりに寄り來る蝶は、取りも直さず諸國の士卒、一度軍配を取つて差招かば、アレ〱、爰に集まる味方の軍卒。

鳴戸　して、大敵を挫く手段は。

信久　その機に依つて臨氣應變。

ト扇を疊み、蝶を打つ。驚ろき、四方へ散亂する。

斯くの通り。我れに子房が智なくとも、孝心通ずる先祖の導き、天なんぞ憐れまざらん。只今三世のお暇ありし情を仇の御敵對、恐れながら、御前の首級は、織部が頂戴仕るでござらう。

鳴戸　ムウ、孝心といひ、勇義の道も耻かしからず。その武備を見込み、某が望みの一儀、承引いたしくれうか。

信久　何がさて、如何やうの儀なりとも。

權藤　御前の賴みを承引あらば、此方よりも、賴みの趣き

鳴戸　すりや、其方にも賴みの儀が。

信久　分けまして、お願ひの儀がござりまする。

鳴戸　して、その望みは。

信久　イヤ、先づ御前のお望みから。

鳴戸　汝が所持する雌龍丸の一振り、此方へ返してくれまいか。

權藤　すりや、雌龍丸を

トこなしあつて

ずんどお易い事、何時なりとも。

鳴戸　早速の承知、先づは過分。

權藤　その代りには、和子がお願ひ。

鳴戸　隨分、聞き屆け遣はさう。その願ひと申すは大軍の調度、心苦しく、武器などの望みであらう。鎧百領、鎗

三百筋、鐵砲二百挺、玉藥五十片、名馬八十疋、當分用立ちくれう。

信久　イヤ、軍器調度は大牟相調ひ、なか〳〵不足はござりませぬ。

鳴戸　然らば、兵糧三千石、粟、稗、大豆の類五百俵送り遣はさう。

信久　イヤ、兵糧も隨分澤山に、三四年籠城を致しても少しも事は缺きませぬ。

鳴戸　すりや、武器の類も兵糧も、望みにない。然らば所望は

權藤　徒黨を集めて、連判狀に。

信久　貴殿の姓名。

權藤　御所望が申したい。

鳴戸　なんと。

ト信久、連判狀をサラリと流し、權藤太、端を取つて見せつける。鳴戸之助、眞中にてキッと見る。合ひ方キッパリとなる。各々こなしあつて

筆頭は鵜三郎信久……中國に、浮田豐前……南海にては淺野一統……九州にては菊池大友……北國に淺倉義景………その外五畿七道に名ある勇士、その數凡そ七百餘人………僅か一年のその間に

ト姓名を見渡す事あつて

ムウ、しかも歷々。ハレ、勇ましい。

權藤　この筆末に、殿の姓名をお記しなされ、一味血判下されたば、大望成就、掌を指すが如し。大國の主とい ひ、四海に轟く當時の御威勢、御前一人お味方あらば、千騎萬騎の勇士に勝れし和子の片腕。サ、お味方下されい。

信久　眞柴を滅ぼし、父が素懷を達しなば、其が望みは足んぬ。その時こそは以前の主從、殿の馬前に一命を擲つ所存。一旦の義兵は亡父の追善、近頃慮外には存ずれども、この信久めが麾下におなり下されうならば、この上の御高恩、千萬有り難う存じます。

鳴戸　萬卒は求め易く、一將は得難しとの古語。龍の腮を潛つて、予が目前に推參し、血判いたしくれよと云ふ、流石の大膽、力ともなり得させたけれども、當時將軍家に居城を構へ、西國守護職を承はる餘儀なさの汝が企みなれども、この儀に於ては相叶はぬ。見聞きせし、一味の者ども、悉く召捕り、仕置に行ふべきが、其方が孝心の切なるに免じ、打捨て置くが武門の情。

權藤　すりや、血判の儀は。
信久　この座限りに見ぬ顔して。
權藤　一味に附くが不承知ならば。
ト種ケ島を出して見せる。鳴戸之助見て
鳴戸　オヽ、それこそ我が家の重寶、鹽筒の鐵砲、去年退去の砌り、奪ひて立退きしと聞いたが、それ謀ねてゐるわい。
信久　サア、連判の儀、御承知なさるゝか。
權藤　さもなくば、火蓋を切らうか。
信久　サア〳〵。
ト權藤太、火蓋を切らうとする。國平求馬、ツカ〳〵と出て
求馬　御主人に敵たはど。
求馬　我れ〳〵が
ト權藤太にかゝる。信久、連判を手早く卷きとり、鳴戸之助、二人を引き廻し
鳴戸　イヤ、苦しうない。鳴戸之助が身體髮膚は仁なり、骨は義なり、小筒は愚か、石火矢を以て向ふとも、いつかな引かぬ。望みならば、サア、爰を〳〵。
ト胸を叩く。

信久　敵に取つては手に餘る鳴戸之助。
權藤　手短かに
ト火蓋を切らうとする。信久、鳴戸之助にかゝる。求馬、國平、支へる。鳴戸之助、刀をスラリと拔いて、權藤太に切りつくる。トどろ〳〵にて、權藤太、切り穴へセリ下がりにて消える。側に種ケ島殘る。三人、恟りする。
三人　これは。
鳴戸　死靈を案する劍の威德。
信久　何がなんと。
ト鳴戸之助、劍をしやんと納める。求馬、手早く、種ケ島を取つて、鳴戸之助へ渡す。
鳴戸　形あつて影なきは、この世を去りし不思議の業。父子血肉の緣によつて、權藤太が姿を假に、出雲が幽靈、其方を守護せしも、この雄龍丸の德に依つて、幻の如く消え失せしが、さほどまでに古主の事を。ハテ、不便の者の有樣ぢやなア。
信久　すりや、その劍が
ト寄らうとするを、求馬、國平、隔てゝ
鳴戸　淡路の御陵より、不思議に手に入るこの一腰。

信久　我が先祖より傳へし名劍。
鳴戸　合體すれば、四海の重寶。
信久　雌雄と揃へば、軍勢催促。
求園　イヤ、雌龍を取つて、お家の寶。
信久　イ、ヤ、身共が
求園　イヤ、我れ／＼が
信久　イヤ、小癪な。
ト兩人を引きのけ、鳴戸之助を目がける。この時、奥より權藤太、矢張り右の形にて、ツカ／＼と出て、眞中へ分け入り
權藤　イヤ／＼、和子、待たつしやれ。殿にも暫らくお鎭まりなされませ。
ト鳴戸之助、權藤太を見て、こなしある。
鳴戸　幽魂ならぬ桑名權藤太。
求馬　そちや、今までこれに
權藤　イヤ、私しは先刻にから、離れ座敷で一寢入り。
求馬　ハテなア。
ト こなし
信久　雌龍の劍。
鳴戸　雄龍の劍一振り

信久　所望いたすを
鳴戸　なぜ留める。
權藤　さればでござりまする。萩塚家にも此方にも、雌雄と揃へてなければならぬ劍、無理に所望さつしやりましても、雄龍丸に凶事があつては、和子、こなたの本意が立つまいがの。お二人とてもその通り、達て所望と云はつしやるは、理不盡と申すもの、貰ひやらうも、遣りやうも、理窟によつてはありも致さう。殿樣の御用にも、此方の役にも立てる、互ひの案が、この場の治まり。和子、なんと、そんなものぢやござりませぬか。
信久　ナニサマ、御前がお方下されなば、双方全く揃ふ
求園　逆意の信久。
ト信久にかゝるを、鳴戸之助、押へ
鳴戸　雌龍の在所知るゝからは、最早我が手に入つたも同然。
求園　ぢやと申して。
鳴戸　ハテ、其まゝ／＼。
權藤　サ、それぢやによつて、一先づこの場は
信久　未だ敵とも味方とも
鳴戸　見分け難きは深夜の一德。

求國　雌龍の劍を受取るか。
信久　御前の血判申し請けるか。
權藤　そりや、お二人のお心次第。
求國　先づそれまでは
鳴戸　遊里の相客。
信久　追ツつけ、お首か血判か、是非一方は拙者の手の裏。
國求　その廣言を。
ト行くを、鳴戸之助、押へて
鳴戸　ハテ、健氣の若者。
ト兩人、うぬと行くを、ヂツと留めて
ア、、親なけれど子は育つぢやな。
ト唄になる。鳴戸之助、兩人を連れて上手の切り戸へ入る。ドロ／＼にて、魂ひ出る。信久見て
信久　そちや、太郎左衞門。
權藤　宙に迷うて、伜が魂魄。
信久　我が身を守護する忠義の有樣。
權藤　和子の前途を親に任して、成佛いたせよ。
信久　出離生死頓生菩提、南無阿彌陀佛。
トどろ／＼にて、魂ひ消える。信久、こなしあつて奥へ入らうとするを、權藤太とめて

權藤　和子、こりやどこへ。
信久　鳴戸之助を討ち取り、雌龍の劍を手に入れる。
權藤　イヤ、待たしやれ。味方の調練、時刻を定め、引込んで彼れを討てば、再び手に入る雄龍丸の劍。
信久　して、預け置いたる雌龍丸は
權藤　肌身離さぬこの劍。不思議を見せ、貴賤をなづける手段の一つ。それと見ながら詮議もせぬ、鳴戸之助が、心の一物。
信久　手伸びにならぬ彼れが一命。
權藤　味方の者へ調子合して、追ツつけ吉左右
信久　すりや、其方は。
權藤　待つてござりませ。
ト唄になり、ツィと橋がゝりへ入る。信久殘ると、櫻花ハラ／＼落ちくる。信久、キツと見得。合ひ方になる。
信久　花に夕の鐘に誘ひ、春風曉の雲絶えたり、颯々として散るべき今、計らずも梢みだれて、落ち散る花びら當時萩家の英名も、嵐を待たず散りうせる前表なるか。
ハテ、心地よき風情ぢやよなア。
トこなしあつて、此うち、求馬窺ひ出て

根本「百千鳥鳴門白浪」挿絵

大詰淡路島の場

求馬　信久、覺悟。

ト十手にて打つてかゝる。ちよつと立廻り、よき所にて求馬、櫻の枝へ手裏劍打つと、狼煙上がる。其まゝ井戸へ飛び込む。遠責めになる。信久、キッと見て

信久　あの貝鉦は、ムウ。

トパタ/\にて、船頭、走り出で

舟頭　鳴戸之助が計らひにて、味方の手筈悉く相違いたし、十郎どのにも大勢に圍まれ事危ふく見えまする。某は十郎どのに加勢いたさん、必らず御油斷あられますな

ト引返して入る。信久、こなしあつて

信久　味方の大事、今この時に極まつたり。

國平　小坂部、覺悟。

ト國平出て打つてかゝる。信久、始終、權藤太を氣遣ふこなし、立廻りよろしくあつて、トゞ見得よくタテ留まる。チヨン/\にてまた道具廻る。

一面の網代塀、眞中に甚五郎、大童、拔身を構へ、キッと見得、軍兵大勢、長柄にて取卷きゐる。ドンチヤン。

捕手　謀叛の荷擔人、河野十郎、遁がれぬ所ぢや。

皆々　觀念々々。

甚五　高淸が絶體絶命、寄つたら一々死人の山だ。

トこれより華やかなる大タテ、いろ/\あつて、トゞ皆々橋がゝりへ逃げる。甚五郎、切りまくり、追つて入る。ト遠責めかすめる。忍び三重になる。ト前なる井戸より、權藤太、袋入りの劍を持ち、一腰差し、ヌツと出て、上へ上がりあたりを窺ひ、行かうとする。左右より組子ツカ/\と出て

捕手　その劍を・

ト取りにかゝる。權藤太、拔討ちにポンと切る。トばた/\にて、橋がゝりより、甚五郎、軍兵と切り結び出て

甚五　權藤太。

權藤　高淸どの。

甚五　半途に同じき味方の大望。

ト軍兵をポンと切る。

權藤　貴殿はこの雌龍丸を携へ、鐘ケ崎へ立越え、味方の手配り。

甚五　して、其方は。

權藤　後に殘つて、和子の御加勢。

甚五　然らば此まゝ。

權藤　片時も早く。

甚五　さらば。

ト劍を持つて、向うへ走り入る。權藤太、見送り、こなしあつて、軍兵四人、槍を構へ、左右より出て

軍兵　動くな。

權藤　うぬらが手にあふ爺ではない。惡くよつたら、命がないぞ。

軍兵　やらんぞ。

トかゝるを、よろしく立廻つて、石燈籠の笠を礫に打つ。トゞ燈籠を差上げ、キッと見得になる。返し

一面の淺黄幕になる。始終ドンチャン、監物、荒れの形、玉琴、小櫻、初音、梅ケ枝、若草、戸川、いづれも以前の傾城姿、右六人取まき出る。

監物　女郎ども、寄りやアがるな。

皆々　やらぬぞ。

トタテいろ／＼あり、よき所へ奴出て、この中へ入り皆々を兩人して切つて出る。求馬、國平出て、よろしく支へる。

求國　爰構はずと、早く／＼。

皆々　合點でござんす。

ト走り入る。後に四人、タテいろ／＼あつて、監物を切り倒し

求馬　主人の御前へ。

國平　ござれ。

ト兩人、走り入る。返し

造り物、向う淡路島、山景色、提灯數多、大篝を焚き、信久、大童、軍兵大勢、梯子にて取卷きゐる。

遠責めきびしく、大タテいろ／＼あつて、トゞ皆々を切り散らし、キッと見得。バタ／＼にて權藤太、矢を切り立て、刀にて走り出る。

信久　深手の體には心元ない。なんと／＼。

權藤　斯く八方を取圍めば、一先づ古城へ引き退き、時節を待つて萬事の謀り事。

信久　イヤ／＼、雄龍丸を取り得ずば、切つて／＼切り捲る。うぬ、鳴戸之助。

トこの時、上の方より鳴戸之助、采配を持ち、早川帯刀、教書を捧げ、おなみ、その外、女形皆々凛々しき

形、橋がゝりより藏之進、求馬、國平、軍兵大勢、鈴に弓張り、提灯を持ち、バタ／＼と出て、兩人を取卷く。

鳴戸　叛逆の張本、彌三郎信久。
藏之　桑名權藤太。
求馬　逃がれぬところぢや。
皆々　覺悟々々。
信久　なにを。寄りあがつたら、雌龍丸の劍を、破却するぞ。
鳴戸　梶利甚五郎、參れ。
十郎　ハア、。
ト　ドンチヤンきびしくなる。向うより甚五郎、右の劍を持ち、走り出る。
信久　これは。
甚五　萩塚の仁政によつて、屈伏したる河野十郎、一味と見せしも、雌龍丸、奪ひ返さん計略。藏之進どの、イザお受取り下されい。
ト　劍を藏之進に渡す。
藏之　今こそ揃ふ雌雄の御劍。
帶刀　某こそ早川帶刀、御劍見屆けの御教書。

鳴戸　寶揃へば我れは後見、弟は家名相續、其方は藏之進が女房。
なみ　エ、忝ない。
藏之　逆賊たる小坂部主從、尋常に切腹するか。
十郎　但し押へて掻き首せうか。サア／＼、なんとぢや。
ト　詰めよる。權藤太、信久、いろ／＼あつて
信久　斯くなる上は、死物狂ひ。
權藤　寄つたら撫切りだぞ。
藏之　なにを小癪な。
鳴戸　ヤレ待て、運にのする勝負は戰場。
信權　重ねて再會。
皆々　さらば。
鳴戸　この場は、めでたう凱歌々々。エイ／＼オウ。
時の聲打出し

百千鳥鳴門白浪（終）

花の東都に都鳥
いざ事とはん白川の
吉田の家の重寶は
梁の武帝の鯉魚の一軸
行方たづねて褄からげ
その俤を鐘ケ淵の由來記
うつしたる當世風世話事

縫合御誂向

隅田川續俤

三冊

初演繪番附の表紙

隅田川續俤

口明

深川宮本の場
八幡裏手の場

役名――永樂屋權左衞門。同娘、おくみ。同手代。要助 實ハ吉田宿位之助松若。代官、澤田彌九郎。丁稚、太郎作。番頭、正八。道具屋、市兵衞。山崎屋勘十郎。仲居、おかん實ハ淡路七郎女房早枝。惣賣り、おため。同、おこの。同、おはつ。同、おせん。藝者、おさき。同、おいく。仲居、およし。花園息女、野分姬。同家老、山上文治。道具屋、甚三郎。聖天町の法界坊。

造り物、二重舞臺、中葭簾。上手の床の間に半簾、宮本と云ふ紅摺りの提灯一面に掛け、橋がゝりの端に宮本屋と云ふ掛け行燈。床几三脚程直しある。おさき、およし、おいく出て來る。江戸騷ぎにて幕あく。

いく　モウ〳〵、呑めぬ〳〵。堪忍して下さんせいなア。
さき　おいくさん、ちと爰で醉を覺まさうぢやないかいな。
よし　アノ、おさきさままであのやうに云うてぢや。奥からお前方を尋ねて連れて來いと、大抵やかましい事ぢやわいなア。
いく　アヽ、およしどの、よいわいなア。あの五中さまや里遊さん程、忙しなう云ふ客はない。ありや師走の生れぢやあるぞいなア。
さき　その癖、來るから去ぬるまで彈かし詰め。酒は無理強ひ詰め。
よし　ソレイナ。お前方が云うてぢやに依つて、云ふぢやないが、あの粹顏が憎いなア。
いく　なんぢややら、大通ぢやの、粹氣ぢやのと、我ればかり合點して
さき　人を去なしたり、惡口云うて手柄のやうに。
よし　ほんに嫌味の親玉ぢやわいな。
トまた江戸騷ぎにて、おかん、仲居の形にて奥より出

でゝ
かん　これはしたり、いくさま、さきさん、およしどのも何ぢや、同じやうに。奥からお前方を呼んで來いと、えらぢやぞえ。ちやつと、行き〳〵。
さき　アレ、又おかんどのまで忙しない。わたしらも最前から彈き通しで
いく　雨は過ぎる、ちと爰で。
かん　オツと、野がけはならぬ〳〵。早う呼んで來いとの御託宣。およしどのも一緒に、早う〳〵。
よし　オ、忙しな。行くわいの。
さき　サア、そんなら、おいくさん。
いく　また責めに會うて來うか。
よし　おかんどの、後から。サア、行かしやんせ。
ト江戸騷ぎにて、三人入る。
かん　およしどの、頼むぞや。オ、暑。けうとう呑んだわいなア。ほんに、水の流れと人の身の上、これが吉田少將さまの家老職、淡路の七郎猶兼が女房の姿。如何に時世なればとて、夫七郎どのは隅田川の渡し守。わたしはこの宮木屋の雇ひ仲居とまで成り下つて辛勞するも、再び寶を取り返し、若殿樣を御代に出だしたいばつかり。夫が今度の大病も發らいでなんとせう……ア、まゝよ。こんな事云はうより、ドリヤ、奥へ行かうか。
ト また江戸騷ぎにて、奥へ入ると、向うより
葱賣　葱いらしやんせんかいなう。
ト在郷唄にて、おせん、おはつ、おため、おこの、四人葱賣りの姿にて、葱籠を戴き出づる。
ため　コレ、おせん、おはつ、お姫樣や文治さんが見えぬぞや。
はつ　アレ〳〵、向うへ見えるわいの。
二人　オ、イ〳〵。
ト在郷唄になる。野分姫、振り袖にて、葱賣りの姿、葱の荷を擔げて出づる。跡より若黨文治出る。
文治　オ、イ〳〵。さて〳〵、各々を見外したかと存じて、一遍と尋ねました。
しや　わたし等も、逸れたかと、大抵案じた事ではござりませぬわいなア。
野分　皆の衆の志し、道々の介抱、忘れは置かぬ、嬉しいぞや。
文治　左やうでござりまする。イヤモウ、各々方のお情ゆゑに、難なく東國へ參りました。これよりは、彼のお

方を尋ぬる一件。これと云ふも、あなた達の志し、千萬祝着に存じまする。

ため　これはマア、結構な、御家老樣の御挨拶。私しどもは殿樣の御領分、八瀬や、大原に住ひまする者ども。

はつ　この江戸に、葱の問屋が出來て、商ひに下る事をお聞きなされ

せん　わしも連れて行けと、勿體ないお姫樣、御家老樣まで同じやうに。

この　私しらが手業なさるも、焦れてござる殿御を、お尋ねなさるゝ爲の御辛抱。おいとしい事ぢやないかいなう。

ため　ソレイナウ。どうぞこちらも共々に、尋ねてお逢はせ申しませう程に、必らずお氣遣ひなされますなえ。

野分　兎角、其方達を頼みましたぞや。

ト奥より、おいく、おさき、およし、出づる。

いく　コレ〳〵皆さん、珍らしい京の葱賣り。

さき　葱は皆買ふ程に、奥へ來て、酒一つ呑ましやんせ。

よし　お客樣が呼んでぢや程に、早うござんせいなア。

文治　サア、結構な買ひ手が出來た。その上、座敷へ行て酒呑むのぢや。

ため　サ、早う行て賣り付けう。おこの、おはつ、おせんも、おぢや〳〵。

よし　コレ、そちらの娘の葱賣りさん、お客の望みはお前ぢや程に、早うござんせ。

野分　イヤ、自らは。

文治　イヤ娘、ハテサテ、行たがよい、ナア、今の人を尋ぬる綱にもならう程に、マア、アイと云うて行きやいなう。

野分　そんなら、アイでござんす。

さき　ドレ、わたしが手を取らう。

ト野分が手を取る。

よし　サア、皆ござんせいなア。

ト江戸騷ぎになる。この一件奥へ入ると、向うより、權左衞門、襟卷、羽織。おくみ、帽子、振り袖、抱へ帶。おかれは下女の形。下男太郎作、阿房にて辨當を脊負ひ、野掛けの心にて出る。始終騷ぎ唄なり。

權左　ほんに娘は思ひの外、よう歩いたわいの。

くみ　わたしよりお前が、おしんどうはござりませぬかいなア。

權左　イヤモウ、おりや杖とともに三本で歩くゆゑ、しんどい所へは行かんてや。

太郎　こちや二本はかない上に、眞中の前巾着が、ブラブ

ラと、邪魔になつて歩かれるこつちやない。ちと旦那さん、休まんせんかい。
權左　今日はこのお組の叶はぬ用があるゆゑ、深川の二軒茶屋まで行く道も、おれが嬉しさに任せて、とつぱかつぱ歩くに依つて、阿房めが追ひ付きかねるのぢや。ナア、娘。
くみ　左やうでござりまする。さうして今日はマア、何やらめでたい事があるに依つて、二軒茶屋へ行く程に、サア、早う拵らへいと、急に仰しやつたゆゑ、出て參じたが、めでたいとは、何の事でござりますえ。
權左　サア、そのめでたいと云うたは。
くみ　めでたいと仰しやつたは
ト權左衞門、云ひかね
權左　サア、それは、マア、正八や要助が來てから話さう。
くみ　ムウ。アノ、要助が爰へおぢやるかえ。
太郎　旦那さん、今日爰へ來たのは、深川の二軒茶屋で遊ぶのかえ。そんならアノ、旨い物を、たんと喰ふのであらうなア。
權左　サア／＼、向うだもう宮本屋ぢや。早うおぢやおぢや。

トまた騷ぎ唄にて、本舞臺へ來る。太郎作、先に立つて
太郎　ものも／＼。
トやかましう云ふ。
よし　アレ、表に案内があるぞえ。誰れも居ずかいなア。
ト云ひ／＼、奥より、およし出る。
オヽ、權左衞門さま、御連人さまを連れまして、ようマア、お出でなされましたなア。
權左　オヽ、およし女郎、よい色でござる。さて、早速問ひませうは、爰へ山崎屋の勘十郎は見えませなんだかの。
よし　イヽエ、まだお出でなされずでござりまする。お約束なされたのなら、もう追ツつけお出でなされませ。その間、奥座敷で御酒でもお上がりなされませ。
權左　イヤ／＼、奥へ行て、もし間違うてはならぬ。暫らく爰で見合せませう。
太郎　エヽ、奥へ行たがよいのになア。口果報のない旦那めではあるわい。
權左　サア、娘、爰へ掛けい。
ト皆々、床几に腰を掛ける。向う戸屋の内より
法界　江戸淺草、龍泉寺へ納め奉る釣り鐘の建立、お志し

はござりませぬか。

ト花道より、婆、尼、四五人、鉦を叩き先へ出る。後より法界坊、破れ衣、穢なき着物、がつさうにて、釣り鐘を畫きたる幟を持つて、片手に釣り鐘を臺に乘せ、婆皆々綱を引ッ張り、引摺つて出る。婆皆々念佛申し申し出る。

婆　コレ／＼、法界坊どの、もう爰が深川の二軒茶屋。ちと休んで、茶でも呑んでいなう。

法界　エヽ、滅相な。やう／＼聖天町から爰までの間に、米が四升程と錢が三百位ほかない。こんな事で釣り鐘の建立はならぬ。まちつと辛抱して、あゆびなさいあゆびなさい。

尼　何をよい口な事ばかり。この鐘も久しいものぢや。毎晩々々、壹斗かしの米と、一貫餘りの錢は上がる筈ぢや。ナア、おくのさん。

婆　それ／＼、此方は信心一通り。もじきなか取りはせん。三四年もかゝつて、この釣り鐘は、いつ龍泉寺へ上げるのぢやぞいなう。

法界　アヽ、流石は凡夫、迷うたなう。物を思うても見さつしやれ。今の壹貫は銀に直しては八匁八分、米は壹斗で六百二十四文はかせぬわいの。なれども愚僧が行法修行の達したる印に、見やしやれ、釣り鐘も大方出來たれども、鐘鑄の方へ埋める借金と、鼻の下頤、三椀づゝでも賄はねばならず、合には鮹の足、八つあるかと云うては取られ、護持院ケ原で化倒しては引ッこくられ、こなさん方の思ふやうに出來て堪るものではごんせぬわいの。

婆　イヤモウ、聞けば聞く程、興の覺めた道樂坊主。おいらは日がな一日も休ましもせぬやうに精出さして、賭博や、お山狂ひに遣ひ果す事は、ならぬぞや。

尼　それ／＼、そんな事で鐘の供養が出來るものか。あんまりな道樂坊主。モウ／＼、こちとらは構やせん。爰から去なうわいの。

婆　さうぢや。あんな坊主に構はずと、去なしやれ去なしやれ。

法界　アヽ、婆さん達、待つておくれ。錢や米の溜るのも、お前方の廻つてくれるゆゑでござんす。おればかりでは、くれる者は一人もないわい。コレ、あやまつた／＼。

婆　ハテ、其やうに云やりや堪忍もせうが、休みたい所で休ましやるか。

法界　知れし御事。

尼　中食も煮賣り屋で喰ふ程に、その拂ひも奉加の中で其方がしやるか。

法界　知れし御事。

婆　酒も呑みたい時に呑むが、合點か。

法界　知れし御事。

尼　そんなら料簡して、爰で休んでやらう。妙閑さんも掛けなんし。

尼　アイ〳〵。

ト皆々床几に腰掛ける。法界坊、おくみを見て、こなし。おくみも、いろ〳〵思ひ入れあり

くみ　このマア要助は、なぜおぢやらぬぞいの。

權左　イヤ、要助は、おれが云ひ附けた掛け地を持つて來るので、暇の入る事もあらうが、この勘十郎どのや正八は、なぜ遲い事ぢや知らん。

くみ　こちや外の者は、なんぼう來いでも大事ない。要助が遲いのが氣にかゝる。早うおぢやらいで。

トいふうち、法界坊、おくみの床几へ腰掛け

法界　淺草龍泉寺へ納め奉る釣り鐘の建立、お志しはござりませぬかな。

ト云ひ〳〵、側へ摺り寄る。おくみ、嫌がり、あちらの床几へ腰掛ける。權左衞門、合點のゆかぬ思ひ入れ、いろ〳〵あり、おくみを連れて此方の方へ來る。同じく法界坊付いてくる、權左衞門、おくみ、太郎作、一時に退く拍子に、法界坊、床几より落ちて、いろ〳〵思ひ入れあるなり。

法界　アイタ、、、、、。うぬら、マア、この尊い名僧知識長老を、ちよろけん舐めに合はしをつた。腰骨が痛うてならぬ。飛んだ事だ〳〵。どうも動かれない。アイタアイタ、、、。

トやかましう云ふ、權左衞門、皆々を庇うて

權左　コレ〳〵坊樣、これ程たんと遊んである床几があるのに、おれや娘の掛けて居る床几に腰を掛けさつしやるに依つて、娘が嫌がり、あちらの床几へ行けば、又あちらへ付いて行かしやる。こちらへ來れば又ござるゆゑ、一緒に退いたれば床几が傾むいて、こなさんが獨りでに轉けたのぢや。云はゞ怪我といふものぢや。料簡さつしやれ〳〵。

法界　否ぢや。この尊い知識長老を、ひどい目に會はした娘。料簡せいと云うて事が濟むか。なんでもおれが相手

は娘ぢや。おれが腰打たせた程、打つて〳〵打ちのめし腰拔けにせにや腹が癒ぬ。誰れが挨拶も、聞かぬ〳〵。

權左　ハテサテ、無法な人もあるもんぢや。聞かんと云うて、なんとするのぢや。

法界　オヽ、聞かんと云うたら金輪際、おれが又存分にするのぢや。

權左　存分と云うて、どうしやる。

法界　オヽ、斯うする。

ト　お組に抱き付く。お組、嫌がり、アレエ〳〵と云ふ。權左衞門、引き離す。立廻りゴッチヤになりて、およし、おかれ、太郎作は權左衞門を留めて、マア〳〵ようございます〳〵と云ひ〳〵、お組を連れて奥へ入る。法界坊、聞かん〳〵と云うて居る。婆、尼、皆々留めてヲヤ〳〵云うて居る所へ、町人走り出で

町人　お代官様のお通りぢや。下に居やれ〳〵。

トやかましう云ふ。これにて、法界坊、皆々靜まり、下に居る所へ、彌九郎、羽織野袴、家來大勢連れ出る。後より町人四人程付いて出る。

彌九　町人ども、先達て其方どもへ相觸れ置いたる、吉田宿位之助久春が、在所は相知れたか、どうぢや。

ト　番頭、正八出かけ、様子を窺ふ。

法界　澤田彌九郎さまぢやございませぬか。

彌九　法界坊、兼ねて其方にも申し付け置いた、宿位之助が詮議は、どうぢや。

法界　お氣遣ひなされますな。大方詮議の綱に取り付いては置きましたが、委細の事は。

彌九　出かした〳〵。この上とも隨分心を付けい。ぬかるな町人ども、宿位之助は、主人常陸の大掾さまの仇なれは、そのお下に住む汝等、お上の奉公、見付け次第注進いたせ。キッと申し渡したぞ。次の町へ案内いたせ。

法界　左やうならば、彌九郎さま。

彌九　法界坊。

法界　ようお出でなされました。

彌九　家來、供せい。

ト　唄になり、彌九郎、町人を連れ、入る。

法界　うまい〳〵。イヤナニ婆さん達、いま聞かんす通りおれもちつと急に用が出來たに依つて、今日は休みませう。こなさん方も、もう休まんせ。

婆　そんなら、今日は休みにして、去にませうわいの。

法界　コレ、去なんすなら、その釣り鐘を聖天町まで引

いて去んで下さんせ。
婆　合點ぢや〳〵。法界坊さん、後から戻らしやれ。サ
ア、皆さん、ござんせ〳〵。
　ト婆、皆々、釣り鐘を引いて入る。法界坊、後を見送
り見送り。
法界　靜かに去なんせや。ようごんした。轉けたら起きて
去なんせや……これからぢや。宿位之助さへ見付け出だ
したら、約束の通り褒美の金、存分にせしめうし、おれ
が好物、鰻や玉子の暴れ食ひ。惚れたお娘を手に入れて
色事はなされ次第。どうやら拍子まんが直つて來た。
　ト獨り喜ぶ。
正八　法界坊、うまい事があるなア。
法界　正八さんか。そんなら最前からの樣子。
正八　あそこから皆聞いた。うまい仕事があるなア。それ
に付いて、ちつとおれも、われに相談がある。
法界　金儲けの筋なれば、なんなりとも。
正八　ハテ、慾の深いづく入ではあるぞ。
法界　當世でごんすわいの。
正八　併し、何を云うても爰は端近。
法界　久し振りぢや、一ちやうキウと立てなんせ。
正八　もう呑みたがるか。
法界　ハテ、當世ぢやわいな。
正八　サア、來い。
法界　行かんせ。南無阿彌陀佛々々々々々。
　ト踊り三味線になり、兩人連れ立ち入る。手代の要助、
掛け物の箱を持ち、向うより出て來る。
要助　ア、騷ぐ〳〵。慥かにあそこは宮本屋。旦那がご
ざるも宮本屋と仰しやつたが。
　ト云ひ〳〵、本舞臺へ來るうちに、おかん奧より出る。
かん　もう飲めぬわいな。宥して下さんせ。ちよつとあそ
こまで行て來るわいなア。
　ト云ひ〳〵、要助と顏見合せ。
要助　ヤア、其方は淡路七郎が女房、早枝ぢやないか。
かん　宿位之助久春さま。この間はお目にかゝりませぬが、
先づお變りもない樣子、お嬉しう存じます。
要助　コレ早枝、喜んでたも。大切な家の重寶、鯉魚の一
軸、在所が知れたわいなう。
かん　エヽ、それはマア、お嬉しう存じまする。して、そ
の一軸は、どうなされましたえ。
要助　イヤ、未だわしが手へは入らぬが、追ッつけ手に入

るその譯は、ゆるりと話さう。して、七郎が病氣は快い方かいの。

ト野分姬、文治、出かけ立ち聞く。

かん　イエモ、さして變りませぬ樣子でござりまする。あなた樣も御存じの通り、先つ頃お家の騷動の砌り、梅若さまは、人商人の手に渡りお果て遊ばし、御家中も散り散り、お家は伯父御常陸の大掾さまに押領せられ、私しが兄の軍助も行き方なく、また先年お家を立退きました中兄甚平も、今は當地に道具屋甚三郎と名を替へ、あなたの御代になるまでの町人、夫七郎どのも、隅田川の船頭とやつし居りまするも、折を見合せ、吉田家のお家を再び取立てたいばつかりでござりまするわいなア。

要助　七郎といひ其方衆同胞の忠義、忘れは置かぬ、嬉しいぞや。

ト云ふうち、野分姬、いろ〳〵思ひ入れあつて

野分　ヤ、申し、松若さま、逢ひたかつた〳〵、逢ひたうござりましたわいなア。

ト取り付く。

要助　ヤア、さう云ふ其方は。

文治　アイヤ、御不審は御尤も。それなるは主人、花園中納言秀則が娘、野分姬、斯く申す拙者は、花園家の執權、山上文治と申す者、ござりまする。

要助　さては幼少で云ひ號けありし、花園中納言秀則卿の娘、野分どのであつたか……と云うても、とんと合點がゆかぬわいの。

野分　木にも萱にもお心を置き、お疑ひなさるゝもお道理でござりまする。云ひ號けの野分ぢやと云ふ證據、自らよりあなたにある筈。少さい時にお別れ申し、後の形見と書いて上げました私しが歌。

要助　成る程、形見の袱紗、コレ爰に……「またとだに思はぬ仲の別れ路は。

野分　詞殘りて名をや恨みん。」

要助　そんなら其方が、云ひ號けの姬であつたか。

野分　松若さま、お懷しうござりましたわいなア。

ト泣く。

要助　ハテ、思ひも寄らぬ。女の身ではる〴〵と、この吾妻路まで、何用あつてござつたぞいなう。

野分　何用とは聞えませぬ。松若さま、幼ないからの云ひ號け、一生連れ添ふ殿御のお前、吉田家の騷動から、お行くへを方々と、尋ね求めた甲斐あつて、この吾妻路に

根本「春景茅原」挿繪

宮本の場

と聞いたを便り、山上文治が介抱にて、やう／＼お目にかゝつたもの、なんの用とは餘所々々しい。お胴慾でござります、お胴慾でござりまするわいなア。

ト泣く。この間におくみ出掛け、悔りして、いろ／＼悋氣の思ひ入れあるうち、フッと顔見合せ

要助　ア、惡いぞ／＼。

トいろ／＼仕方する。おくみ隱るゝ。

かん　申し、久松さま、お云ひ號けの操を立てゝ、慕ひ焦るゝお姫樣を、惡い／＼と、何が惡うござりまするぞいなア。

要助　イヤ、サア、今おれが惡い／＼と云うたは、ありや、ソレ、なんぢやわいなう。オヽ、それ／＼、大切なる鯉魚の一軸、尋ね求むるまでは日蔭の身、中納言家の御息女は、例へ云ひ號けあるにもせよ、斯ういふ所で詞を交すと、惡い／＼と云うたのぢやわいなう。

野分　そんなら、これ程までに心を盡しましても、夫婦にはおなりなされては下さりませぬか。

要助　ハテ、マア、緣と月日を待たつしやれいなう。

ト野分、思ひ入れあり

野分　さうぢや、南無阿彌陀佛。

ト懷劍にて死なうとする。おかん留め、

かん　コレ、お待ちなされませい。

トおくみ、腹立ち、出ようとする。

ア、コレ、出まいぞ／＼。コレ、文治さま、男の差出所ぢやござりませぬ。爰はわたしに任せて、マア、チッとして居やんせいなア。

ト奥へ掛けて云ふ。おくみ、思ひ入れにて入る。

文治　イヤ、拙者差出は仕らん程に、姫君をしつかとお留め下されい。

野分　イヤ／＼、離して死なしてたもいなう。

かん　イヤ、死なしませぬ。姫君樣、このおかんが請合うて添はしまするが、それでもお果てなされまするか。

野分　ヤア、そんなら其方が、松若さまと祝言さしてたもるかや。

かん　ハテ、なんにも御意なされますな。マア、わたしにお任せなされませ。

ト奥より、およし出で

よし　申し／＼、要助さま、御寮人さまが、急にお呼びなさる。早う奥へお出でなされませ。

要助　なんぢや、御寮人樣がお呼びなさるゝ。

よし　いま連れて來いといなア。早うお出でなされませいなア。
ト要助を無理に引き立て、奥へ入る。
野分　ア丶、申し、宿位之助さま。
ト行かうとする。おかん留めて
かん　サア、ようござりまする。私しが一旦添はしませうと云うたら、例へ日蔭の殿樣のお身にもせよ。お云ひ號けあるからは、誰れ憚らず御祝言さしませうが、今は、アレ、御奉公先の御用、奥へお出でなされては、却つてお互ひにお身の爲にもなりませぬ。爰は一旦御旅宿へ。
ト野分、頭振りて泣く。
と云ふは云ふもの丶、折角巡りお逢ひなされたもの。離れ惜しう思し召すも無理ではない。ようござりまする。イヤ申し、文治さま、いつそ斯うではどうござりませう。今宵はお姫樣に、わたしが念晴らしをさして上げたう存じまする。さういふ場所に、結句殿御は邪魔なもの。あなたはマア、お先へ御旅宿までお歸りなされたがよからうかと、わたしや存じまするわいな。
文治　段々の御深切、御尤ものお取捌き。然らば拙者はお詞に從ひ、大切なる姫君なれども、こなた樣にお預け申す。萬事お得心の參るやうに、よろしくお取計らひ下さりませう。
かん　その段は、ちつともお氣遣ひなされまするな。して、あなたの御旅宿は。
文治　石町の借座敷、丸に井筒の旅宿が目印。
かん　後程私しが、お送り申しませう。マア、それまでは、
文治　早枝どのとやら。
かん　文治さま。
文治　お別れ申しませう。
かん　ようお出でなされました。
ト唄になり、文治は橋がゝりへ入る。野分姫、おかんも奥へ入る。あと合ひ方になり、奥より要助、おくみ、せり合ひながら出る。
くみ　もう堪忍してたもいなう。
要助　イエ、存じませぬ〳〵。
くみ　もう堪えてたもいなう。
要助　ア丶、あんまり側へ寄つて下さりますな。なんぢややら、阿房らしい、如何にわたしがやうな騙しよい者ぢやというて、あんまり其やうに嬲り者になされて下さりまするな。なんぢややら、アタ〳〵阿房らしい。ア

タ悪々しい。アタどんな。腹が立つて〳〵なるものぢやない。

ト いろ〳〵腹立てる。

くみ 要助いなう。

要助 なんでござりまする。

くみ 誰れがわが身を嬲るぞいなう。

要助 誰れであらうと、面々が心に問うて見たがよい。ハア、イヤ、其方より外に可愛い者にない、末は女夫になつてくれいの、なんの彼のと、ほんにようマア、あの可愛らしい口元から、大きな嘘が云はれた事ぢや。アタどんくさい。この煙草盆の煙管は、一つも通るのはない。ほんに、どこやらの徒ら娘が土根性に生寫しぢや。エ、、アタけたいの悪い、阿房らしい。

ト 煙草盆引寄せ、煙草のむ。

くみ とツとモウ、何ぢややら、面妖、たつた一人腹を立て、エ、、何かいなう、あの山崎屋の勘十郎さまと、今日祝言さすと云ふ事、聞きやつたに依つて。

ト 此うち、法界坊出かけ、立ち聞きして、いろ〳〵腹立てる。

要助 それ〳〵、問はずと語るに落つると、それ程よう祝言の事を知つて居て、なぜわたしに今まで隠してはござりませした。

くみ サイナウ、わしもやう〳〵今が聞き始め。父様にそれと聞くと、悔りして、其方がおぢやつたら、ちやと知らさうと思うて、コレ、此やうに文まで書いて持つて居る。マア、疑ひ晴らしに、これをちよつと讀んで見てたもいなう。

ト 渡す。法界坊、いろ〳〵思ひ入れあり

要助 知りませぬわいな。又これでわたしを釣るのかえ。此やうな罠にかゝる事は、マア、よしに致しませう。

ト 投げる。法界坊ちやつと取り、懐中へ入れる。

くみ 要助、そりやあんまりぢや〳〵。

ト 泣く。

要助 何があんまりでござりまする。いま旦那様の仰しやるには、其方を今日呼びにやつたのは、娘おくみと聟の勘十郎と、爰で後に内祝言さゝねばならぬ。それについて、頼みの印に来た、高麗刷毛目といふ茶碗の代りに、此方からも聟引手に、この鯉魚の一軸を遣らねばならぬゆゑ、持つて来いと云ひつけたが、持つて来たかと仰しやつたは、祝言の座敷にかける床掛けの、この一軸でご

ざりまするな。

ト法界坊聞いて、うまい／＼と云ふ思ひ入れあり

くみ　サイナウ、それぢやに依つて、其方がおぢやつたら、こんな事も相談せうと待つて居るのに、外の美しい娘御を捉へて、そして此やうに、あちらこちら、エヽ、ヅットモウ、そりやわが身、胴慾ぢや／＼わいなう。

ト泣く。

要助　そりや、お前がよい抜け句と云ふものでござりまする。内祝言のあると云ふ事、お前の知らぬと云ふやうな事があるものか。それに美しう髪を結うて身仕舞ひして喜んで勇んで祝言しに來るとは、アタお聟様め。そのお好様に、わたしや、すつぽん抜けに逢ひましたわいな。

くみ　それでも父様が、わしに隱して、なんぢややらめでたい事があるとばつかり云うて。

要助　イエ／＼、何にも云うて下さりまするな。

くみ　コレ、誓文神かけての。

要助　存じませぬ／＼。

ト此うちに法界坊、ソッと掛け物の箱を取り、釣り鐘の幟を外し、手早に仕替へ、頂き、懷へ入れ、ツイと入る。

くみ　コレ、ほんまぢやわいなう。誓文、今日の事は眞實。

要助　オット、その眞實も喰べぬ。知りませぬぞえ。物云うて下さりますな、腹が立ちます……と云うたは、お前の心を引いて見ようばつかり。疾から疑ひは晴れてあるわいなア。

くみ　ヤア、そんなら疑ひは晴れてあるかや。

要助　お前の心は、疾から存じて居りまするもの、疑うてよいものでござりますかいな。

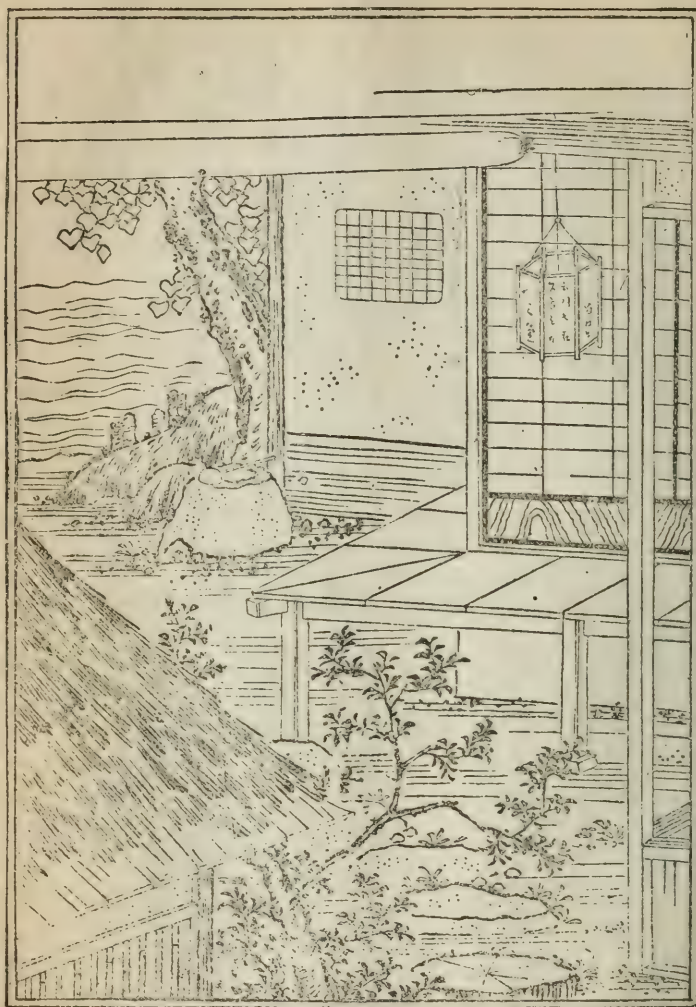
くみ　アノ、眞實疑ひは晴れたかいの。

要助　日本晴れでござりまするわいな。

くみ　オヽ、嬉し。

ト抱きつく。野分姫、臆病口の葭簾の内より覗き見て腹立てる。おかん、いろ／＼と宥めて、留めて居る。勘十郎、よい衆の旦那の拵らへにて出る。後より供男、甲斐絹の風呂敷包み持ち附いて出る。この體を見て悔りし、供に囁く。先へ入らせ、立ち聞きして居る。

要助　時に、モシ、御寮人樣、お前樣にも兼ねてお話し申しました、この鯉魚の一軸は、私しがいろ／＼と尋ね求めまする家の重寶。また勘十郎さまのお手に入つては、何かの障り。どうぞ此方へ請け戻しまするやう、旦那様

木春「景浅茅」原繪

宮本の場

へ、よろしうお願ひなされて下さりませい。
くみ　そりや合點ぢやわいなう。
要助　その代りには、この恩は一生忘れは致しませぬ。これでござりまする。
ト泣く。
くみ　コレ、勿體ない、女房のわしに、なんの禮云ふ事があるぞいなう。
要助　何仰しやるやら。それが勿體なうござりまする。コレ申し、あなたはお主樣、私しは家來でござりまする。
くみ　また、主ぢやの何かのと、こちや疾から女房ぢやと思うて居るのに、エヽ、先刻の娘御樣に心中立て、それで女房ぢやと云やらぬのぢやの。
ト此うち勘十郎、腹を立てる思ひ入れありて、思案し、床の間の掛け物を外し、箱の掛け物と摺り替へ、ツイと奥へ入る。
要助　なんのマア、滅相な。
ト此うち、奥より正八出掛け、見て悔りする。
くみ　そんなら、女房と云うてたもいなう。
要助　ヤア、そんなら、女房どものおくみさま。
くみ　こちの旦那樣。
要助　女房ども。
くみ　旦那樣。
ト顔見合せ、ちよつとこなし、抱きつく。正八、をかしき身になり、こなし。
さうして、アノ要助、その掛け地請けるには、百兩と云う金がいる。其方、その金があるかや。
要助　エヽ。
くみ　その金を拵らやる心當でもあるかいなう。
要助　その金の心當は。
正八　ソレ、百兩。
ト財布ともに百兩抛り出す。
くみ　ヤア、其方は。
要助　正八どの。
くみ　この金を貸してたもるかや。
正八　要助、わりや御寮人樣をいがめたな。
要助　ア、コレ。
ト　おくみも思ひ入れある。正八、小さい聲をして
正八　わりや御寮人樣をいがめたな。ハテ、大事ないわい、隠す事はない。そこらは番頭ぢやわいの。二人が素振り五音呂律でも、ちよつと睨んだらさすものぢやない。誰

れぢやと思やる、番頭ぢやわいの。また一體、今日の內祝言も、この番頭が不心得ぢや。あの意地惡の勘十郎さまに、御寮人樣を添はすとは、あんまりな事ぢやと思ふ矢先、この金は尾張町の兩替から爲替の百兩。マア、當分間に合はして、その一軸を質請けすりや、聟引出が間違うて、今日の內祝言も延びると云うもの。すりや、兩方よしの錢思案ぢや。けれども、百兩といふ金がなけりや、いかぬ事ぢやと見たゆゑ、貸してやるも、御寮人樣の氣休め。朋輩のよしみ、爰らが番頭の情といふものぢやわいの。

要助　何にも云はぬ、忝ない。そんなら、この金を遣うても

正八　オヽ、知れた事いの。が遣へは遣へぢやが、念の爲一本書いてたも。

要助　書けとは何を。

正八　ハテ、大枚の百兩といふ金、預かつたと云ふ借り手形書いてたもいの。

要助　エヽ、成る程〳〵。

ト硯取つて來て書きかける。

正八　畢竟これには及ばぬ事ぢやけれども、この金はわが身も知つて居やる通り、旦那の金ぢやに依つて、おれが自由にすると思はれては濟まぬに依つて、さういふ證文があれば、親方への云ひ譯、天道への潔白。これといふも、根が正直正路な、この正八ぢやに依つて、斯うして置かねば氣が濟まぬぢや。書いてさへたもれば、直ぐに後はしやぶつて捨てるに依つて、わが身も氣遣ひなし。

トこんな事云うて居る間に、手形書きしまふ。

要助　これでよいか。

ト渡す。正八取つて

正八　オヽ、これでよい〳〵。斯うして置くが、互ひの念ぢやてなう。

要助　イヤモウ、この恩に一生忘れぬぞや。

正八　なんのいやい。

ト云うて居るうち、およし出で

よし　申し〳〵、要助さま、旦那樣がお呼びなされてござりまする。早うお出でなされませいな。

正八　ソレ、要助、旦那が呼ばしやると。早う奧へ行て、右のうつろひも、ナウ、合點か。

要助　そんなら、わしや奧へ行くぞや。おくみさま、正八どの。後に。

正八　ハテマア、行きやいの。
よし　サア、ござんせいなア。
　ト唄になり、要助およしを連れて入る。正八おくみ殘つて、合ひ方になる。正八ソロ〳〵思ひ入れあつて
正八　おくみさま、申しお前、要助に百兩貸してやつたら嬉しいかえ。
くみ　嬉しいわいなう。
正八　お前、嬉しけりや、わしは猶嬉しいわえ。
くみ　この上ながら、其方を賴む程に、どうぞ要助と、早う夫婦になるやうにしてたもや。
正八　エヽ、してたも。又アレエ〳〵は古いぞえ。ちよつと爰で。
　ト抱きつく。おくみ惘りして
くみ　コレ、正八、何しやるぞいの。爰離しやいなう。
正八　イエ〳〵、離さぬ〳〵。
くみ　アレエ〳〵。
正八　それ〳〵、アレエは古いと云ふに。
くみ　それでも、わが身惡い事ばかり。アレエ〳〵。
正八　シイ〳〵、大きな聲して、なんぢやいな。恩のある正八おやぞえ。惡い事はせぬわいな。よい事をするのぢやわいな。お前マア、よう物を思うて見たがよい、大枚百兩といふ金を、要助に貸してやつたも、お前にこのお禮を受けうばつかりぢやぞえ。それに、なんぢややら、ピンシヤン〳〵と、要助ぢやてゝ、わしぢやてゝ、別に男振りに勝り劣りはなし、喰うて見なされ。わしが方には風味があるぞえ。おくみさん。
くみ　エヽ、ツツトモウ、惡い事しやると噛みつくぞや。
正八　噛みついておくれ。心中に齒形入れておくれ。紅粉つけて。
くみ　エヽ、しつこい。アレエ〳〵。
　ト逃げ廻るうち、法界坊奥より、正八さま〳〵と呼び呼び出る。正八取り違へ、法界坊に抱きつき、無理に口を吸ふ。顏見合せえづく。
正八　エヽ、今の口々はわれかいやい。エヽヽヽ。
法界　ちつと手水も使うたがよい。人に得心もさゝず、無理無體に、てもきつい口熱ぢや。エヽヽ。
正八　何吐かす。うぬが口が千兩やろ程に吸うてくれと云うとて吸へるものか。いろ〳〵の所へうせあがつて、思ひ掛けなう。さうしてわりや、ねぶか汁吸うてうせたな。エヽヽヽ。

法界　逢ひなし〳〵。今のを思ひ出しや出す程、エヽヽエ。

正八　エヽ、忌々しい。大事の所ぢや、早う奥へうせう。

法界　イヤ、お前を勘十郎さまが尋ねてぢや。そして件の。

正八　エヽ、ツケ〳〵と何吐かす。

法界　それでも、とつくりと談合して置かにや。

正八　ハテ、キヨロ〳〵と、サア、よい。いま奥へ行く。エヽ、とつと悪い所へうせあがつて、あつたら所を、エヽ、忌々しい。

ト唄になり、奥へ入る。法界坊、おくみを見て、ニッタリと笑ひ、こなし

くみ　エイ、つッと氣味の悪い。正八、コレ、わしも一緒に行くわいなう。

法界　オット待つたり。おくみの君樣、一緒に行くわいなうとは、オヽ、嬉し。

ト抱きつく。

くみ　アレエ〳〵。

ト藻掻くうち、いろ〳〵しなだれる。

エヽ、汚ない。とつとモウ、坊主だてら、アタ嫌らしい。なんのこつちやいの。

ト腹立て、行かうとする。

法界　ドッコイ〳〵、逃がさぬ〳〵。なんぢや、嫌らしい、汚ないとは胴慾な。アノ、いつやらであつた。はつち開きに出た時、お前が表の格子から覗いて居て、アレ御出家樣ぢや、入れてたもと云うて、ツイと内へ入らんしたその美しさ、優しさといふものが、ヒヨッと見初めてから、阿彌陀樣の顔も、閻魔樣の顔も、皆お前の顔に見えて、氣味の悪い目に何遍會うた事ぢややら。コレ、出家に施す事ぢや。エヽ、何も後生と思うて、たつた一度。マア、わしが心の丈を書いて置いたこの文。コレ見ておくれ。

ト文を無理に懐へ捻ぢ込む。

くみ　エヽ、こんな物は知らぬわいなう。

ト取つて抛る。

法界　なんぢや、知らぬ。知らぬとは胴慾な。知らぬ合邦外ケ濱、鬼住む里の勤めでも、お前ゆゑならするわいなア。

くみ　アレモウ、しつこう悪い事しやると、父さんに告げるぞや。

法界　なんぢや、告げる。告げるとは胴慾な。告げる合邦外ケ濱、鬼住む里の勤めでも。

ト云ひ〳〵付け廻しになる。おくみ逃げしなに、煙草盆の灰を蒔く。法界坊、灰をかけられながら追ひ廻す。よき所へ、道具屋甚三郎、市兵衞、連れ立ちて

甚三　今日のしまひ物は、儲け物であつたなう。
　ト釜を繩にて括り、持つて出る。

市兵　イヤモウ、近年の掘出し脊ござりました。
　ト葛籠を脊負ひて、古道具持ち出る、

甚三　二軒茶屋ぢや。ちつと休もかい。
　ト云うて居るうち、おくみ、やう〳〵奥へ逃げ込む。法界坊、うろたへ、甚三郎に抱き付く。
こりや何ぢやい。
　ト恟りする。法界坊も恟りして奥へ逃げ込む。
今のは何ぢやあつた。

市兵　狸ぢやなかつたか知らぬ。
　ト此うち内より男ども出て、吊り提灯に灯を入れる。

甚三　イヤ、人は人ぢやが、日暮れ紛れに抱きつくので恟りした。

市兵　わしも、何ぢやと思うて恟りした。

甚三　とつと、肝を菜種にした……時に市兵衞どん、こなたも重たからう、何さんせ。この中のがらくたや傘や下駄は、爰の外れの道具屋へ持つて行て、おれが云うたと云うて預けて、葛籠ばかり持つて戻つて下んせ。わしや爰に、ちつと用があるに依つて、隙が入つても大事ない。ゆるりと行て來て下んせ。

市兵　左やうなら、さう致しませう。ヤレ〳〵、それは助かつた。
　ト云ひ〳〵入る。

甚三　ゆるりと遊んでござんせや。だんないぞや。
　ト後を見送り
ア、、今日は大分好い儲けがあつた。時に今の狸めは、何であつた知らぬ。
　ト云ひ〳〵、法界坊が落して置いた文を開いて
おくみさま參る、法界坊より。ハ、、、、今の狸坊主めが色事ぢや。あのやうな者に相手になる女子があるとは、イカサマ、色の世の中ぢやなア。
　ト奥で、バタ〳〵するゆゑ、甚三郎隱れる。

勘十　イヤ〳〵、濟まぬ〳〵。サア、譯立てゝもらはおうもらはおう。
　ト喚き出る。後より權左衞門、正八、太郎作、附いて出る。

權左　ハテサテ、其やうに聲高に云はしやんな。おれも永樂屋權左衞門ぢや、逃げも走りもしやせぬ。譯立てる品なら譯も立てる程に、靜かに云うたがえゝわいなう。

正八　左やうでござります。御一家中の勘十郎さまなり、旦那なり、私しは何も存じませぬ事だから、靜かに仰しやつても、譯の立ちさうな事でござりまする。

勘十　立たぬぞや。オヽ、立たぬ〳〵、ずんど立たぬのぢやぞ。

太郎　番頭さん、お前、何にも知らんせぬか。

正八　何にも知らぬ。

太郎　高が斯うぢやわいな。勘十郎さまが、立たぬ〳〵と云はんす譯は、御寮人樣が祝言を嫌がつて、寄せ付けさんせんに依つて。そこで立たぬ〳〵と云はんすのぢやわいの。

正八　何をおのれが、すッ込んでけつかれ。

太郎　すッ込んだら猶立つまいぞや。

正八　又うぬが。

ト太郎作、ちやつとすッ出む。

勘十　正八、おれが無理か尤もか、一通り聞いてもらはう。短かう云へば、權左衞門どのゝ娘おくみ、おれが疾から惚れて居るワ。これが他家といふぢやなし、權左衞門どのに後取りというてはなし、一人娘のお娘、殊におれとは從兄弟同志、幸ひの緣ぢやと、仲立ちを入れて聟に行こなり、貰ふなりと約束して、賴みの印に高麗刷毛目と云ふ茶碗を遣つた。その代りには聟引手に、梁の武帝の描かれた鯉魚の一軸を、貰ふ筈に極めてあるワ。それから祝言を段々と催促すれば、イヤ、今日の明日の明後日の、イヤ一昨日來いのと、人を蜘蛛かなんぞのやうに釣り付けたワ。今日祝言させうと云うて、この深川三界まで呼び付け廻つて、揚句の果には、肝心のおくみが、腹が痛むのなんの彼のと、引摺りたい程引摺るワ。エヽ、何か、こりや一軸が惜しうなつたに依つて、聟入りを變替への下拵へぢやな。この聟入り變替へしられては、山崎屋勘十郎、男が立たぬ。ほんに云ふぢやないが、いま吉原で丁子屋の花里から、五十兩の無心、高が一夜流れの傾城にさへ、云ひかけられては後へ引かぬ氣質。この通りぢや。

ト懷中より、金財布に五十兩入りしを出し

勘十郎是非は云はぬ。

ト云ひ〳〵、名當の所を引破り

この通りの心底ぢや。お山にでもこの通り、惚れて居るおくみを女房に持つたら、どのやうな心中立てうも知れぬ。斯う云ふ眞實な男氣なおれを嫌がつて、親子とも悪う出りや、可愛さが餘つて憎さが百倍、高麗刷毛目の茶碗も失うたとやら聞いたが、その茶碗も取返す。サア、茶碗なりと、娘なりと、どちらへなりと、我が物にさへ手に入りやよい。權左衛門どの、返事さつしやれ。どうぢやぞいなう。

正八　イヤモウ、承はりますれば、勘十郎さまのが皆御尤もでござります。旦那樣、こりやどうでござりまする。

權左　イヤモウ、段々勘十郎どのが尤もぢやに依つて、せめて内祝言なりともさゝうと思うて、それで娘を連れて、しかも掛け地も持たせて來たは・全ヽ、この權左衛門如才は

勘十　あるぞえ、ずんとあるぞえ。おれが目からは如才だらけぢやわいの。

權左　なんで又、この權左衛門に如才があるぞ。

勘十　コレ、女房に貰うにおくみは、間男して居るわいなう。

權左　ヤア、。

正八　申し〱、勘十郎さま・御一家の旦那ぢやと云うて、云はして置けば、ずばら〱と、なんぢや、御寮人樣が間男なされてござる。滅相な、あのおぼこ娘が、なんの其やうな大それた事があつて堪るものか。但し、それにはなんぞ、慥かな證據でもござりまするか。

ト内より、要助お組を法界坊、引ッ立てゝ出て

法界　オヽ、證據は爰にある。うせう〱。中の間で酒呑んで居たれば、閨ひの内で何ぢややら女の泣き聲。合點がゆかぬと覗いて見れば、永樂屋の娘を、この青二才めがせしめ、願以至功どく〱の所を、引ッ摑まへて來た。なんと、これが證據にはなるまいかな。

權左　すりや、娘と要助と。

ト云ひさし、當惑のこなし。

勘十　權左衛門どの、イヤサ權左衛門、慥かな證據が出たぞや。例へ、この證據が出いでも、最前おれが來しなに、抱きつき吸ひつき、疾に手目はあがつてあるのぢや。賴みを取交せば、おくみはおれが女房ぢやぞや。サア、權左衛門どの、勘十郎が世間へ面出しのなる思案、付けてもらひませう。

ト煙草盆引寄せ、煙草のんで居る。正八、ツト要助を

引付けて

正八　ヤイ、二才め、知らなんだわいやい〳〵。うぬが御寮人様をそゝのかしたばつかりに、旦那のお顔が立たぬやうになつたワ。旦那が立たねば、おいらまでが立たぬ。おりやモウ最前から、勘十郎さまの手前が、面目なうて面目なうて、えゝ顔を上げぬわい。この正直正路な番頭は、斯ういふ不埓な悪者を、今まで蔭になり日向になり、茶屋狂ひから引負ひから、大賭博を打つ事まで、隠してやつたが腹が立つわい。もう朋輩のよしみもお家方の難儀、家の疵には替へられぬ。さう云ふ畜生のやうなわれに、大枚百兩、取替へて置く事はならぬ。最前貸した百兩の金返せ。

要助　ヤア。

正八　ヤアとは、最前の金返せやい。

要助　サア、そりやソレ、あの掛け物を。

正八　ハテ、掛け物も化け物もいらぬわい。この百兩を。

ト懐へ手を入れ、財布引出し

これ程持つて居つてから、太い奴ではあるわい。待て待て、中をちよと改めて。

ト云ひ〳〵、財布の紐を解いて、中を改め見て

そりやこそな〳〵。この百兩は壹兩もいけぬ、皆胴脈ぢや。

要助　ドレ〳〵。

ト改めて

オヽ、ほんにこりや皆似せ金。そんなら、最前誠らしう云うて、此やうな似せ金を、

正八　なんぢや、似せ金をどうぢや。どうした。

要助　サア、こなんに借つた金は、皆此やうな。

正八　貸した金は尾張町の封の儘ぢやあつたぞよ。見りや封も違うてある。こりや、なんぢやな、正真の金は其方へこかして、似せ金をおれに掴まし、旦那の手前をしくじらさうといふ、われが悪企み。そりやアわれ聞えぬ、胴慾ぢやわい。われが事と云や、悪い事も好い事にして、執成しするこの番頭を、しくじらさうとは怖い者ぢや。サア、千も萬もない、出さす。出さいでも出さす。出しても出さす。足元の明るいうちに、キリ〳〵出せ。

くみ　正八、そりやあんまり。

權左　ハテ、われが差出る所ぢやない。默つて居やいの。

正八　出さぬか。われ出さにや、痛い目するぞよ。

要助　コレ、正八どの、そりや胴慾ぢや。わしや此やうな

正八　事した覺えはない。知らぬ〳〵。

正八　知らぬ者が、借りる時に改めもせず、今になつて百兩は、なぜ此やうな

要助　サア、それは。

正八　それは。サア、それはとは、爰な大盜人め。大事な御客人樣をいがめやがつた上、大それた騙り事、うぬがやうな奴は

ト割木引提げ

この薪雜把で、斯うして。カウ〳〵〳〵。

ト打ち据ゑる。太郎作、留めて

太郎　マア〳〵、待たんせ〳〵。その金借つたは要助さまぢやない。

正八　何を馬鹿めが。要助でなうて、金を借つた者が外にあらうか。

太郎　オヽ、ある。

正八　そりや誰れぢや。

太郎　おれぢや。

正八　なんぢや、おれぢや。さうして、うなア大枚の百兩と云ふ金を、何にした。

太郎　サア、それは。

正八　それは。

太郎　それは、アノ、ナニ、オヽソレ、その百兩の金は。

正八　金は。

太郎　饅頭買うて、喰つてしまうた。

正八　大白痴め。

ト割木にて毆る。太郎作、アイタヽヽと逃げて入る。

勘十　エヽ、正八、手ぬるい。間男ひろいだ毛二才め、ぶち殺してしまやいの。

正八　合點でござりまする。

法界　ドレ、愚僧も手傳うてやらうわい。

ト踏みのめす。

正八　金の在所、吐かせ。

要助　なんの誓文。

正八　盜まぬものが、なぜあのやうな、胴脈と摺替へた。

要助　ぢやと云うて。

法界　惚れ手の多いこの娘を、なぜ圍ひで泣かしやアがつた。

要助　なんのマア、そんな事を。

正八　似せ金、云ひ譯があるか。

要助　サア。

勘十　間男の云ひ譯があるか。
要助　サア。
三人　サア〳〵〳〵。
勘十　云ひ譯がないか、蹈み殺せ。
法界　合點ぢや。
ト法界坊正八、打擲する。この間に要助の着物、所々引裂ける。よき所へ甚三郎出て、要助を圍ひ、法界坊を取つて投げつけ、正八を捻ぢ上げる。
正八　アイタヽヽヽ。コリヤ、息がはずむ。どいつぢや、どうするのぢや。
甚三　イヤ、どいつでもごんせぬ。要助が請けに立つた、道具屋甚三郎、道具甚でごんすわいの。
ト取つて投げる。
要助　オヽ、甚三郎どの、よい所へ。よう來て下さつた下さつた〳〵。
ト取りつき泣く。
甚三　左やうでござりまする。こなさまは何も構ふ事はない。樣子はあらまし、あれから聞いて、もう出ようか出ようかと思うて居たのぢや……マア、後へ寄つてござりませ。

ト介抱する。法界坊起きて
法界　アイタヽヽヽ。ヤイ、茲な馬の骨の好い男め。かけも構はぬ所へ出さらして、この尊い名僧知識を、なぜ投げた。サア、なぜ投げた〳〵。なぜこんな目に會はしたのぢや。
正八　甚三、わりや卑怯な者ぢやぞよ。投げるなら投げると、なぜ頭から斷わらぬ。うつかりとして居る者を、ずんでんころりとなぜ投げたのぢや。わりや。
甚三　ハテ、やかましう云はんすないの。今のはお前方を投げたのぢやない、裁人ぢやわいの。
正法　なんぢや、裁人ぢや。
甚三　番頭さん、要助はわしが請け人に立つて、權左衞門さまの所へ奉公におこした者。惡い事があるなら、請け人の役、マア、一番にわしに答へがありさうなもの。若い人をば人中で、打つたり踏んだり、もしも目鼻が舞ふまいものでもない。その時はこなさま、どうする。
正法　ヤ。
甚三　わしが一走り、恐れながらと喰はしたら、嫌でもこなさま達は下手人。
正法　ムウ。サ、それは。

甚三　それぢやに依つて、ちよと裁人に、入つたのでごんすわいの。
法界　ハテ、裁人面白うないぞよ。裁人なら、なぜ又この名僧知識を、ゐのころ見るやうに、首筋摑まへて、取つて抛つた。
甚三　うぬは取つて抛つたばかりぢやない、叩き殺しても大事ない。
法界　此奴、途方もない事を申し上げるが、なんで又この名僧知識を、叩き殺しても大事ないぞいやい。
正八　わりや、御寮人様と要助の、間男の證人ぢやないか。
法界　オヽ、證人ぢや。
甚三　さうして、何を見付けて證人に立つたのぢや。
法界　ハテ、こちら二人の圍ひへ入つて、話して居たを見付けたに依つて、證人に立つたが、なんとした。
甚三　御寮人様が要助に、なんぢや御用があつて、圍ひの間で云ひ付けてござつらしやらうがな。さうでござりませうが。オヽ、云ひ付けてござらしやつたか。ソレ、云ひ付けて居たと仰しやる。なんと又、主が家來に物云ひ付けて居たら、間男になりますか。主が家來に物云ひ付けて間男になるなら、世界中に女房や娘のある家へ、手代に行く者は一人もござりますまいかと、慮外ながらこの甚三は、ハイ、思ひますわいなう。
勘十　でも、こりや、見ず〳〵。
甚三　サア、達て間男ぢやと仰しやると、聟様、お前のお顏が立ちませぬ。お前の顏が立たにや、親旦那も立たず、どう廻つて御緣邊の妨げに、なるまいものでもござりませぬ。あなたはマア、默つてござるがよからうかと存じまする。
勘十　エヽ、コレ、おくみと緣が切れるが悲しさに、何にも云はぬぞよ。命冥加な毛二才め、うぬ。
甚三　イヤモウ、間男の曇りさへ晴れたら、清淨潔白なおくみさま、要助にも科はないぞえ。如何に番頭の高下ぢやと云うて、請け人に答へず、打擲するとは、ちと出來過ぎるかと存じます。
正八　ムウ。そりやアノ
甚三　まだ云ひ分がござりまするか。

ト正八、氣味惡がる。

坊樣、貴樣、名僧知識の身を以て、間男の證人に立つて、手傳うて要助を打擲しても大事ないか。

法界　サア、そりやな。
甚三　それで叩き殺しても大事ないと云うたが、この甚三が誤まりか。
法界　御尤も。
甚三　よもや誤まりでもござるまいかい。
法界　ムウ……オツト、思ひ出したぞ。まだ證據がある。オヽ、グツと上々の證據があるぞ。
正八　エヽ、そんな證據があるなら、最前からキリ〳〵出したがよいわい。
法界　今のぎくつきで、とんと忘れて居た。
　ト先に拾ひし文を出だし
　忘れぬ君さま參る、焦るゝ身より、とサ。
　トおくみ要助、二人とも惘り、取らうとする。
　なんと動きは取れまいがな……思ひ忘れぬ君樣參る、焦るゝ身より。こりや、おくみから要助へ遣る濡れ文。最前ちやんといがめて置いた。ようしたものか。なんと、これでも間男ぢやないか。コレ、そこな好い男、大きな聲で讀んで見てもらひませう。
　ト甚三郎へ渡す。
甚三　そんなら、此やうな慥かな證據が出るからは、いよいよ間男に違ひはない。エヽ、コレ、見下げ果てた不義徒ら。
　ト以前の法界坊が文と摺替へ
　私しでさへ、腹が立つて〳〵ならぬもの、聟樣は猶でござりませう。
勘十　猶の段か、猶から上ぢやわい。
甚三　左やうでござりませう。モシ、なんと書いてあるかいつそ爰で讀んで御覽じませぬかい。
勘十　憎さも憎し、讀んで見よう。
法界　隨分高聲に大音上げて、讀んで御覽じませ。
勘十　なんぢや、汚ない手ぢや。エヽ、アノ……雲に掛け橋霞に千鳥、及びないとて惚れたが因果にてござい。
正八　エヽ、ほてくろしい。アタ忌々しい。
勘十　忌々しいから上ぢやわい。エヽ、なんぢや……因果にてござ候ふ。あなた樣のお姿を見る度毎に、思ひの種、寐ても覺めても、覺めても寐ても、只忘られぬ面影は、宗玄が庵室の場も呆れ果て參らせ候ふ。
法界　ヤア。
　ト心付きたる體。甚三郎をかしがる。
勘十　哀れ不便と思し召し、出家に施す事、惡ふは報い候

根本「春景浅茅原」挿絵

宮本の場

ふまじ、何も後生と思し召し、叶へてくれのかねてしめ
し參らせ候ふ。

ト法界坊術ながる事、いろ／＼あり。

法界　ア、、違うた／＼。それぢやない／＼／＼。

正八　ハテサテ、これでなうて詰まるものか。默つて聞い
てゐやいの。

法界　途方もない。これが默つて居られるものか。

正八　ハテサテ、よいと云ふのに。

法界　何を、ろくに知りもせいでから。

ト術ながる。

勘十　知つても知らいでも、讀まにや譯が知れぬわい。

ト法界坊、いろ／＼こなしあり。

たつた一目のお情が、廣大無邊の御慈悲と、觀音樣かけ
て祈り參らせ候ふ、めでたくかしこ……おくみの君樣參
る、焦るゝ法界坊より。ヤア／＼／＼。

甚三　なんの事ぢや／＼。ドレ／＼。

ト文を取る。

おくみの君樣參る、焦るゝ法界坊より、ヤア／＼。

ト法界坊、ソロ／＼向うへ逃げようとする。

甚三　コレ／＼、坊樣どこへ。

法界　イエ、ちよつと。

甚三　ちよつととは、どこへ

法界　ツイ、小便しに。

ト這うて行かうとする。甚三郎、法界坊が足を捉へ

甚三　可愛と思うてくれの鐘。ドッコイ／＼、お前を逃が
してよいものか。グッと上々の證人ぢやないかいの。

法界　エ、モウ、ようござりまするわいな。

甚三　思うてくれの鐘。

法界　ア、モウ、よいわいな。

ト術ながるこなし。

甚三　おくみさま參る、焦るゝ法界坊より。時に、この法
界坊とは、誰れやらの事ぢやなア。

法界　されば、わたしも聞いたやうにもあり。

甚三　法界坊……法界坊。

要助　法界坊。

法界　法界坊。

甚三　オ、、法界坊とは貴樣ぢや。

法界　エ、、

甚三　ア、、爰に居る名僧知識ぢや。

法界　なんのマア。

甚三　名僧知識の身を以て、觀音樣かけてとは、オヽ、出來ました。
法界　なんのマア。
勘十　そんなら、こちらの肩持つ顏して、おのれも、おくみに惚れてけつかるな。
法界　ちつとばかり。
勘十　忌々しいづく入めぢやわい。
ト突き飛ばす。正八に轉けかゝる。
正八　エヽ、極道めが。
トまた突きこかされ、法界坊、眞面目になる。
甚三　サア、これでもおくみさまと要助どのが、不義間男か。
法界　なんのマア。
甚三　おくみさまと要助は、間男ぢやないぞよ。
法界　その通り。
甚三　どなたも云ひ分はござりませぬか。坊さん、云ひ分はないか。
法界　エヽ、けたいの惡い。いつそ、うぬ。
ト割木にて叩きかゝる。甚三郎引ッたくり、法界坊を打ち据ゑる。花道へちやつと逃げ

法界　なんぢやい、磔刑柱め、人を張子かなんぞのやうに、滅多無性にぶち喰はしあがつて、アタ痛い。此まゝでは濟まさぬぞ。忌々しいぞ。けたいが惡いぞ。斯う云はるるが口惜しくば、相手になれ。爰へうせい。アノ大たくらの大馬鹿の、大泥坊よ。べら坊よ
ト云ひ〳〵、逃げて入る。
甚三　腕なしの癖に、ようしやべる奴。口から先へ生れ居つたか知らぬ。サア、これからが番頭さんぢや。要助に不義はないぞえ。
正八　イヤ、間男の明り拔けても、要助は大騙りぢや。騙りも騙り、大騙りぢや。
甚三　なんぢや、要助とのを大騙りとは。
正八　屋張町の僞替金、百兩といふもの、斯ういふ胴脈と摺り替へたからは、なんと騙りではあるまいか。
甚三　そんなら、騙りの金の百兩が、胴脈になつてあるゆゑ。
正八　詮議するは番頭の役ぢや。オヽ、この番頭樣のお役目ぢや。盜人の名が付きや、どいつでも、どなたでも、叩き殺してなりとも、金の吟味するが云ひ分があるか。甚三、云ひ譯はあるまいが。イヤ、云ひ分あるなら、金出

して置いてから云へ。サア、要助出せ。出さにや、この
蒔雑把で、うぬをぶち殺しても出して見せるのぢや。
ト行かうとする。
權左 正八待て。
正八 イヤ、大枚の百兩といふ金の詮議を。
權左 その大枚といふ百兩の金は、どこから出た金ぢや。
正八 ハイ、尾張町の紀伊國屋から、爲替の金の戻つた百兩でござります。
權左 そんなら、われが金ぢやない、おれが金ぢや。親方の大枚の百兩といふ金を、おれにも斷わらず、わりや又内證で、なぜ要助に貸してやつた。
正八 エ、、、、
權左 サア……詮議といふは爰らが詮議ぢや。尾張町から戻つた金が、似せ物であらう筈もなし、持つて戻つて貸したはわが身。そんなら正八、其方にも疑ひかゝるまいものぢやない。こりや、かゝり合ひと云ふものぢや程に、マア、其やうにわれ一人働らかすと、待てと云はば、マア待ていやい。
正八 さう仰しやらうと思うた事ぢや。そこらをぬかるものかいな。誰れぢやいな。番頭でござりまするわいな。最前要助が云ふには、急にいる事がある程に、どうぞその爲替の金、其まゝで貸してくれと、とち程な涙を、パラリ／＼滾して頼むゆゑ、不便にもあり、朋輩のよしみ、併しこの百兩は、親方の金ぢや、おれが自由に貸しては天道様が恐ろしいと云うたら、もし旦那がやかましけりや、これで云ひ譯してくれと、慥かに借つたといふ、要助が自筆の證文を取つて置いたわい。取つて置きましてござります。即ち、證文を取つて、ハイ、取つて置きましてござります。即ち證文は、ござりまする。
ト懐より最前の一札を出す。
甚三 ドレ。
ト正八、證文を取り直し
正八 ドッコイ、それから御覽じ。なんと動きは取れまいがな。斯ういふ證文をして、後で胴脈になつたとは、おりや知らぬ。親方の金を我まゝに遣はぬといふ證據は、この證文ぢや。欲しいかえ。ドッコイ、取らうとは横着な。我れ辛からば、人又我れに辛しと、ようしたものか。最前禮仰しやらぬゆゑ、この通り。ナア、魚心あれば水心あり、水心あれば魚心ありぢや。
トしやべッて居るうち、おかん出かけ、吊り提灯をソ

ツと外し、中の蠟燭にて證文へ火をつける。證文燃える。

熱々々……オヽ、南無三。證文が燒けた。アヽヽヽ。

トいろ／＼うろたへる。甚三郞、笑ひ／＼、思ひ入れ。

甚三　どうぢや、番頭さん、要助に貸したといふ證文はあつかな。

正八　サア、その證文は。

甚三　その證文は。

正八　燒けたわい。

甚三　燒けたと云うて、事が濟みますか。

正八　サア、それはな。

甚三　慥かな證據は。

正八　サア。

甚三　どうぢやいな。

正八　オヽあゝ。證據がある。

甚三　なんぢや、まだ證據がある。

正八　オヽ、慥かな證據がある。

甚三　して、その證據は。

正八　火傷が證據ぢや。

甚三　何を馬鹿な事。

正八　ても面妖な。

ト呆れて居る。勘十郞、おくみが手を取つて

勘十　サア、おくみ來い。

くみ　エヽ。

勘十　見す／＼知れた不義間男も、ないと云やないにしてやるも、祝言がしたいばかりぢや。徒らかはかにや、約束の通りおれが女房。奧へ行て祝言する。サアおぢや。

ト引立てうとする。權左衞門留めて

權左　ハテ、聟どの、急く事はない。徒らがないからは、祝言さゝいでなんとせうぞいの。

くみ　イヽエイナア、父樣。

權左　ハテマア、何も云やんないの。

勘十　間男の云ひ譯は立つにもせよ、此やうな奴を、おくみが側に置くは、正直の猫に鰹節。

正八　さうでござります。證文がなうても、何がなうても、爲替の金が失せたら、百兩は要助が引負ひも同然。

勘十　この仕舞ひは、どう付くのぢやな。

權左　甚三どの、聞かつしやる通りの仕儀ぢや。最前からの樣子、何も彼も白い黑いは、よう知つて居るけれども何分百兩の金が失せたれば、差當る誤まりは要助。請け

人なれば、マア、當分こなたに預けまする程に、さう思うて下され、

甚三　成る程、御養人樣の内祝言、マチ〳〵と見ても居憎からうし、もし短氣な事があつてはと……左やうなら、要助どのは預かりましてござります。また金子の事は私しが、キッと埒や明けまして、あなた樣に御損は掛けませぬ程に、左やう思し召して下さりませ。サア、要助どの、立つた〳〵。

要助　イヤ〳〵、百兩の金は騙られ、その上、此やうに打擲に會ひ、なんとこの場が。

甚三　ハテ、大事ござんせぬ。大事ないわいの。おれが居る。追ッつけ何も彼も譯立てゝして見せませう……そしてマア、着物も此やうに。エヽ、此やうに打擲すると云うやうな。

ト我が着物を脱ぎて襦袢一つになる。

サア、これを着替へさつしやれ。

ト着替へさせ

そんならもう、連れて參じます。

權左　もう行かつしやるか。必らず短氣の出ぬやう……氣を付けてやつて下され。

甚三　お情深い旦那樣の御一言。サア、お禮〳〵、

要助　有り難う存じます。

ト泣く。

勘十　エヽ、うぬ、助けて去なす奴ぢやなけれど、内祝言の喜びに、助けてこます。命冥加なアノ大泥坊め。

權左　ハテ、よいわいの。サア娘、正八も來い。

正八　甚三、金の濟むまで、おれが毎日催促ぢやぞ。さう思へ、

要助　エヽ、おのれを。

ト行かうとする。甚三郎引廻し留める。

くみ　コレ、要助。

ト寄らうとする。權左衛門、引廻し留め、双方一時に

甚三　旦那樣、

權左　甚三どの。

甚三　おさらばでござりまする。

權左　ようござつた。

勘十　ドリヤ、奥へ行て祝言せうか。

ト唄になり、一件皆々入る。要助、甚三郎、殘る所へ

おかん出で

かん　兄樣。

甚三　妹、
かん　危ふい難儀の證文を。
甚三　其方の機轉、出かしやつた〳〵。シタガ、何や彼や、氣味の惡い事だらけ。もし要助どのが宿位之助さまといふ事が知れて、常陸の大掾より討手來らば、兼ねて七郎どのと云ひ合せし通り、隅田川から船でズイと。コリヤ。
ト囁く。
かん　そりや合點でござんす。さうしてアノ、コレ。
ト囁く。
甚三　そんなら姫君が。これは又、搗てゝ加へて……そりや、コレ。
ト囁く。
かん　合點でござんす。
甚三　早う行きや。
かん　アイ。
ト走り入る。
要助　思へば〳〵。
ト奥へ行かうとする。
甚三　ハテサテ、マア、ござりませ。
ト繩からげの釜を提げ、襦袢の上に帶して、要助を連れて入る。

返し

造り物、一面の松原、石燈籠のあしらひ、火を灯しある。正八、駕籠舁き二人に駕籠を舁かせ出る。
正八　二人ともに、道々話した通りぢや、合點か。
兩人　そりやア呑み込んで居りまする。
正八　お娘を盜んで來るまで、待ち遠にあらうが、あの鳥居前で待つて居て下んせ。
兩人　合點でござりまする。
ト二人とも入る。
正八　ソリヤと云うたら、直ぐぢやぞよ、よいかの。巧い巧い。なんでもモウ素直にはゆかぬ。お娘を連れてズイ。盜んで置いた爲替のこの百兩で、おくみと二人世帶して、水も汲みましよ。手鍋も提げましよ。夏も炬燵でとりかけ山の時鳥。さらば君の初音を聞いて來う。
ト唄になり、喜び入る、法界坊、ソロ〳〵出て
法界　エ、、忌々しい。あつたら所を、あの甚三めとやらが出やがつて、茶々無茶苦茶にしやあがつた。時に、おくみめを得しめる事を、手延びにして置く間に、弟めがいがめ居るは定だ。なんでも今夜中にかたげて退きたい

ものぢやが。
ト云ふうち、野分とおかん、連れ立ち出る。
かん　サア、お出でなされませ。
野分　自らを、どこへ連れて行きやるぞいなう。
かん　サア、折角要助さまにお逢はせ申しませうと存じますうち、最前の騒動。マア一旦、文治さまにお渡し申し、また重ねてお逢はし申す、私しに思案がござります。今宵はお歸り遊ばされませいな。
野分　イヤ〱、例へこの身はどうなつても、松若さまと離れはせぬ。死なば一緒に、早う甚三とやらの家へ伴なうてたもいなう。
かん　サア、さう思し召すもお道理ながら、要助さまは日蔭の身、あなたと一緒に置きましては、まさかの時の足手纏ひ。マア、一旦御旅宿まで。
野分　イヤ〱、去ぬる事は否ぢや〱。否ぢやわいなう。
ト泣く。
法界　コレ〱、姉さん、お前方は最前、あの二軒茶屋で、要助と話して居た衆ぢやが、大方要助を尋ねるのであらう。
野分　アイ、その要助さまを尋ねるのでござんす。こなさん逢うてぢやあつたかえ。
法界　逢うた段か、たつた今、アレ〱、彼所な辻を斯うひじ曲つた、
野分　あそこな道を。
ト行かうとする。
法界　オツト待つたり、行て逢はうと思うても、埒明かん埒明かん。
野分　そりや又なぜえ。
法界　要助は、あの永樂屋の娘と懇ろして、互ひに死ねば死なうと云ふ深い仲ぢや。今も手に手を取つて歩き〱云ふ事を聞けば、イヤモウ、舌たるうて、しつかうて、けなりで一向目當てゝ見られるものぢやない。エヽ、話して聞かしたいなア。
野分　コレイナウ、要助さまが、なんと仰しやつた。早う云つて聞かしやいなう。
法界　云ふまいと思へども、お前が其やうに尋ねるを、隱せば罪になるが嫌さに、話して聞かすぞえ。今爰を二人連れで、手を引き合うて歩き〱、おくみが云ふには、お前は國から美しい云ひ號けの娘御が尋ねてござんしたに依つて、もうわたしを秋風であらうな、申しと云へば、

要助答へて、イヤとよあの、娘は慥かに臭い。
野分　エヽ。
法界　遠い所を歩いて來たゆゑ、慥かに日向臭い。日本國中は愚か、唐天竺を尋ても、女房に持つ女子は其方一人ぢやわいなうと云ひさま、脊中をポンと叩けば、娘は涎をタラ〳〵と出して、そりや要助さまほんの事かえ、なんで嘘を云ふものかと云ひさまに抱きついて、そのしつこさ厚かましさと云ふものは。
野分　そりや、ほんかいなう〳〵。
法界　出家が嘘をつくものかいなア。
　ト野分姫、腹立てる。
かん　ハテサテ、申しお姫樣、人も尋ねぬ問はず語り悋氣から付け込んで、要助さまのお身の上を、聞き出さうとする敵よりの廻し者。
法界　ヤ。
かん　構はずと、サア、お出でなされませ。
　ト合ひ方になり、野分を連れてツイと入る。
法界　コレ〳〵、姐さん、まだ云うて聞かす事がある。オオイ、コレエヽ、殘り多い。要助が身の上聞き出す、あつたら囮を取逃がした。時に氣にかゝるは、おくみぢや。どうぞソッと盜み出す魂膽が、ありさうなものぢやが。
　ト内バタ〳〵するゆゑ、木隱れする。正八、おくみを引立て出る
くみ　正八、わしをどこへ連れて行きやるぞいの。
正八　どこへとは、ソレ。オヽ、さうぢや。お前、今夜猫さんと祝言しては、要助へ立つまいがな。
くみ　さうぢやわいなう。
正八　これサ、さうぢやに依つて、わしが連れて駈落ちするのぢやわいな。
くみ　イヤ、其方と駈落ちする事は否ぢやわいの。
正八　惡い合點ぢやわいな。マア、わしと駈落ちして置いて、その後で要助と夫婦にするのぢやわいな。
くみ　イヤ〳〵、其やうに云うて、又わしを騙すのぢや。エヽ、其方はなう。
正八　そんなら、どのやうに云うても、おれが云ふ事に聞かぬのぢやの。
くみ　知らぬ〳〵、知らぬわいなう。
正八　エヽ、しぶとい。さう云や斯うぢや。
　ト荒繩出し、縛る。
くみ　アレエ〳〵。

ト聲立てる。

正八 やかましい〳〵。

ト手拭を出し、猿轡にして、無理に駕籠に乘せ、荒繩にてグル〳〵卷きにし

六兵衞々々、太助々々。エヽ、また酒喰うてとぶさつてけつかるさうな。ドレ、一走り呼んで來う。コレ、その間、手が痛くとも辛抱して、ちつとの間待つて居いや。

ト走り入る。法界坊、後を見送り、巧い〳〵と駕籠の繩解き、手拭を解く。おくみ見て

くみ アレ、又かいな。

法界 又かいなとはどうおやいな。愚僧は又、あのやうな荒い事は致さぬ。眞實可愛がる。爰で逢うたは福德の三年目。幸ひあたりに人もなし、つい爰でちよつとちよつと。

トいろ〳〵と追ひ廻すうち、市兵衞、葛籠を脊負ひ出て

市兵 エヽ、グツタリと寐たうな、この甚三さんは宮本屋にでもなし、先へ去なれたか知らん。甚三さん〳〵。

ト云ひながら來て、おくみと法界坊が揉み合ひの中へ行き當り、ウンと倒れる。おくみ、法界坊、愕りして、おくみ、逃げうとする。捉まへながら思案して、おくみを件の葛籠の中へ入れ、紐を締め、市兵衞を駕籠へ乘せて、以前のやうにグル〳〵卷きにして、葛籠をかたげうとするうち、勘十郎、要助が一腰差して居るを捉へ、うせう〳〵と引摺り出て

勘十 ヤイ、青二才め、うぬは在前請け人へ預けられた身を以て、侍ひらしう脇差を差し、このあたりをうろつくは、エヽ何か、云ひ交してけつかるおくみと、今夜おれが祝言するに依つて、おれをどうぞせうと思うてうせたか。但し、おくみをかたげにうせたのか。エヽ、なんであらう。おれが懷に金が五十兩あるゆゑ、嫌味を付けて、病づかしにうせたのであらう。アノ大盜人めが。

ト蹴る。

要助 勿體ない、なんのさう云ふ心でござりませう。あなた樣も御存じの通り、覺えのない似せ金の惡名、その上に踏み打擲に遭ひ、なんとオメ〳〵生きて居られませう。私しも腹からの町人でもござりませぬ。覺えない無實の難、正八に逢うて只一言、恨みを云はうと、差いて來たこの脇差。なんのマアあなた樣を。

勘十 云ふないやい。そんなてれん喰ふのぢやないわい。

今夜祝言したら、直ぐにおくみは抱いて寐る。腹が立つなら、この脇差を拔けやい。相手になつてやるわい。拔けやい。

ト足にて脇差を蹴る。

拔かぬか。拔けぬか。なんとして〳〵、滅多に拔けるもんぢやない。今わりやなんと云うた。以前は武士ぢやな。武士か何武士ぢや。鰹節か、きぶしの粉か。煙管の潰しの雁首二才め、聞さやアうぬ、百兩の金盗んだも、この鯉魚の一軸を請け出さう爲とやら。こりや聟引手に貰うて持つて居るワ。コリヤ、見い。

ト以前の掛け物を出して見せる。要助、思ひ入れ。

この鯉魚の掛け地は、吉田家の重寶、それを欲しがるおのれが素性、詮議ある奴なれど、今夜はマア宥してこます。なんぢや、手を出してモヂ〳〵と、この掛け物が欲しいか。遣りたいなア〳〵。

要助　申し、どうぞその一軸を。

勘十　欲しいか。欲しか遣ろ。畢竟おくみさへ手に入れりや、この一軸がふつても無うてもぢや。品に依つたら遣りもせうが、要助、この掛け物の代り、われをおれが存分にするが合點か。そんなら如何にも一軸は、われに遣らうわい。

要助　イヤモウ、一軸さへ下さりますれば、私しが身はどのやうになりましても大事ござりませぬ。御存分になされて、どうぞその一軸を。

勘十　よいワ。其やうに賴む事。この掛け地は遣らうが、その代りには、うぬをおれが斯うするわい。

ト引きつけ

ヤイ、とんぼめ、うなアおくみが大事の〳〵お初穗を、この聟樣に斷わらず、うまい事ひろいだなア。手入らずの箱入り娘、初心な〳〵と油斷して居るうち、慰みものにようさらしたなア。その代りには、うぬを斯うして斯うして〳〵腹癒るのぢや。見れば見る程、澁皮の剝けた、けちなしやツ面。この面でおくみを蕩し、間男ひろいだがよいか。これがよいか〳〵〳〵。

トいろ〳〵酷い目に遣はす。要助、思ひ入れあつて

要助　サア、お腹立ちは御尤もぢやが、もう此やうになされた上は、どうぞ御料簡遊ばして、その一軸を私しに。モシ、お情でござりまする。お慈悲ぢや〳〵、申し、勘十郎さま。

ト泣く。

根本「春景淺茅原」挿繪

八幡裏手の場

勘十　よいワ、其やうにとこ吠えて頼む事、存分にした上は、如何にも遣らう。遣らう程にワンと云へ。
要助　エヽ。
勘十　犬つく這ひにつくばうて、ワン／＼と云うて、この掛け物を頂け。
要助　左様なら、ワン。斯様でござりまするか。
勘十　まだ云へ。
要助　ワン。
勘十　まだ。
要助　ワン／＼／＼。
勘十　まだ云へ。まだ／＼／＼。
要助　ワン／＼／＼／＼。
　ト云ひ／＼泣く。
勘十　ハヽヽヽ、大分よいワ。よう云うた。とてもの云ひ次手ぢや、今度は笑うて見せい。
要助　エヽ。
勘十　笑へ。遣るわい。ヤイ笑へ。ヤイ、笑うたら遣らうぞ遣らうぞ。
要助　ハヽヽヽ、ハヽヽヽヽ、ハヽヽヽ。
　ト泣き笑ひする。

勘十　よう笑うた。イヤ、なか／＼よう笑うた。えらいものぢや。けうといもんぢや。その褒美はこの一軸、斯う斯う／＼して遣らうわい。
　ト云ひつゝ引裂く。
要助　ア、コレ、ア、。オヽ、こりやこなた、大切な一軸を。
勘十　破つた。破つてしまうた。なんぢや、おれが物をおれが破つたのぢや。その面なんぢや。血相變へて反り打つは、わりやおれをどうするぞ。イヤサ、掛け物を破つたら、おれをどうぞせうと思うてひこつくか。アノ大泥坊めが。
　ト踏み飛ばす。
要助　もうこれまでぢや。
　ト抜いて切りかけるを、品よく請け留め
勘十　コリヤ、何さらすのぢや。悪心流の印可まで取つた勘十郎ぢや。わいらが手に合ふものかいやい。
　トこれより、合ひ方になり、早目に暗がりのタテいろいろあり、兩人、切り合ふ。法界坊、最前より窺ひ居て、立出で
法界　戀の敵の要助め、思ひ知つたか。

ト勘十郎が刀を取り。間違うて勘十郎を切る。この立廻りいろ〱。要助は我が切つたと思ひ、たうとう勘十郎を切り倒し、止めを刺す。勘十郎、声立てるゆゑ、袖を口へ當てる。袖を喰ひ破る事あり、此うち、正八。六兵衛、太助を連れて出て、顔見合せ

正八　要助か。

要助　正八か。

法界　コレ、要助は抜いて居るぞ。

正八　合點ぢや。ソリヤ、二人とも抜かるな。

ト暗がりにて、叩き合ふ。皆々切り立て、要助入る。法界坊出る。

法界　この間に葛籠を……エヽ、また提灯がうせる。

ト小隠れする。甚三郎、弓張り提灯持ち、スタ〱出て

甚三　エヽ、コレ、折角連れ立つて戻つたに、脇差を差いて又出やしやつた。慥かに爰へござつたに極まつた。

ト云ひ〱來るうち、大バタ〱ゆゑ、ちやつと隠れる。駕籠舁き二人相手に要助出て、二人を追ひ込み、息つき

要助　エヽ、正八を討ち洩らしたが残念ながら、とても逃がれぬ命。さうぢや。

ト腹へ突ッ込まうとする。甚三郎、出て

甚三　要助さま。

要助　甚三どの、南無阿弥。

ト切腹せうとする。甚三郎、留めて

甚三　コレ待つた。こりや何事ぢや。コリヤ。

要助　甚三どの、遅かつた〱わいなう。鯉魚の一軸をば勘十郎が、此やうに引裂いてしまうたわいなう。

ト泣く。

甚三　ヤア。ドレ。

トいろ〱うろたへ、引裂いた掛け物を取り、石燈籠の火にて透し、とつくと見て

エヽ、何仰しやるやら。ほんまに引裂いたかと思うて、お家の断絶と思ひ慟りした。こりやコレ、釣り鐘を畫いた幟でござりまするわいの。

要助　ヤア、ドレ……オヽ、ほんに、こりや釣り鐘の繪。そんなら今破つたは、鯉魚の一軸ではなかつたか。

甚三　マア、とつくりと、よう見たがよいわいの。

要助　ホイ。

ト甚三郎、慟りして

甚三　こりや、なんぢやいな。

要助　コレ甚三、ひよんな事したわいの〳〵。

ト泣く。

甚三　ナニ、ひよんな事したとは、どんな事なされました。

要助　鯉魚の一軸を破つたと思うて、勘十郎を思はず知らず

甚三　殺らさつしやりましたか。

要助　おいなう。

甚三　ホイ。

要助　南無阿彌陀佛。

ト死なうとする。甚三郎、留めて

甚三　コレ、待つた、早まるまい。大事ない、大事ござりませぬ。見た者は私し一人。お前の命一つは、吉田家の浮沈、幾千人の命に拘はつてござりまするぞ。高で町人の勘十郎風情。大事ござりませぬ。何もかも私しにお任せなされませ。して、その死骸は。

要助　爰にあるわいの。

ト甚三郎、いろ〳〵探し廻り、死骸を見て、思ひ入れあり

甚三　だんない〳〵。幸ひのこの葛籠、死骸をコッソリ。お前はあたりに。

要助　合點ぢや〳〵。

トあたり見廻し居る。甚三郎は葛籠を解き開ける。内よりおくみ出る。

甚三　ワアイ。

ト愕りする。おくみ、驚ろき、要助を見て

くみ　要助ぢやないか。

要助　御寮人樣。

くみ　逢ひたかつた〳〵。

ト取りつき泣く。甚三郎、この間に死骸を葛籠へ入れいろ〳〵あり

要助　合點のゆかぬ。あの中にはどうして。

くみ　サイナア、正八が無理無體に、わしを連れて駈落ちすると云うて。

甚三　シイ〳〵。その長い事は何もかも。マア私しが内へ去んでから。

要助　アノ、連れ立つて去んでも

くみ　大事ないかえ。

甚三　大事があつても無うても、もう無茶ぢや。

くみ　そんなら早う。

要助　おくみさま。

くみ　要助。

甚三　マア、ござりませ。

ト三人、向うへ走り入る。正八、後へ出て、駕籠を見付け、してやつたと云うて

正八　六兵衛々々々、太助々々。

ト云ひ〳〵、駕籠舁けぬゆゑ、先肩舁いて見たり、後を舁いて見たり、いろ〳〵ある。駕籠を揺ると、中より市兵衛、轉び出て、それなりにて、正八、擔げて入る。市兵衛、心付いて

市兵　誰れぢや〳〵。甚三さまか。オヽイ、甚三さま〳〵。

ト正八が後を追つて入る。ト法界坊、出て、後を見送り、さま〴〵あつて、葛籠を見て、いろ〳〵喜び、葛籠を頂き、辭儀したり、いろ〳〵あつて、連尺にして擔げ、向うを見て

法界　いかい白痴の。

ト舌を出し、葛籠を脊負ひ、向うへ入る。

幕

二つ目　洲崎の場

役名――淺山主膳。平田藤藏。澤田彌九郎。永樂屋番頭、正八。庄屋、與次兵衛。甚三女房、おさく。

造り物、向う淺黄幕、所々に稲村、洲崎領と云ふ杭立てあり、この前に男の死骸あり、本釣り鐘、虫の聲、蛙の聲にて、庄屋、百姓二、三人、棒持ち、ワヤワヤ云うて居る。在郷唄にて、幕明く。

庄屋　サア〳〵、夜が明けた。百姓衆、御檢分の掃除をせにやならぬ。

皆々　オイ〳〵、合點ぢや。

庄屋　庄屋の不念になつてはならぬ。御檢分のござる床几直して置かつしやれ。

皆々　オイ〳〵、心得ました。

ト床几を直す。掃除しながら死骸を見付け

百一　コレ〳〵、爰に誰れやら寐て居るさうな。

百二　滅相な。御檢分がお出でなさるゝ。退かしやれ〳〵。

ト側へ寄り、口々やかましう云うて、死骸をとつくり見て

皆々　ヤア〳〵、こりや死んで居るさうなぞや。

庄屋　ヤア、。滅相な事云ひ出した。

トとつくりと見て

ほんに、人が切つてあるワ。

百三　この通り申し上げざなるまい。

庄屋　サア〳〵、大抵の事ぢやない。百姓衆、皆ござれ皆ござれ。

ト口々やかましう云うて、花道へかゝる。向うより、主膳、彌九郎、藤藏、皆々野袴、大小、ぶツ裂き羽織その外侍ひ大勢付いて出る。

主膳　ヤア、百姓ども、騒々しい、なんぢや。

庄屋　ハイ、切つてござりまする。しかも私しが畑の前に、人が殺してござりまする。

主膳　ナニ、人が殺してある。えいワ、案内いたせ。

庄屋　ハイ〳〵、斯うお出でなされませ。

ト皆々、平舞臺へ來る。

ハイ、これでござりまする。

ト主膳、死骸をちよつと見て

澤田彌九郎どの、平岡藤藏どの、お聞きの通りでござる。その死骸検分なされい。

ト兩人、死骸を改め

彌九　未だ年若な男の死骸。町人體と相見え、旅人とは相見えませぬ。口に男の片袖を咬へ居ります。

ト主膳、取つて

主膳　紋は石持に桐の薹。後日の證據、取納められい。

ト彌九郎に渡す。

庄屋百姓、この村の者ではないか、とくと見い。

皆々　ハイ〳〵、畏まりました。

ト皆々死骸を見て

庄屋　イエ〳〵、この村の者ではござりませぬ。見知らぬ者でござりまする。

彌九　見知つた者ではないか。

皆々　ハイ、左様でござりまする。

彌九　とくと詮議を遂ぐる間、暫らく往來を留めい。

庄屋　ハイ〳〵、畏まりましてござりまする。コレ百姓衆、往來を留めさつしやれ。

皆々　ハイ〳〵、畏まりました。

ト二人づゝ、棒を突き、東西に別れ留める。主膳、死骸

の側に寄り
主膳　家來、死骸を俯向け、右の手を上げい。
侍ひ　ハア、。
ト家來、死骸を俯向け、右の手を上げる。
主膳　ムウ、肩先より一刀……脇腹に一ケ所。
ト死骸を改め、よろしくあつて
かすり手とも疵は七ケ所。懐中を改めさつしやれ。
藤藏　ハツ。
ト懐中を改め、金を出し
これに金子が一包み。書付けに五十兩とござる。
主膳　所書きでもござらぬか。
ト彌九郎、包みを解き改める。女の狀出る。彌九郎、見て
彌九　女の狀はござれども、宛名の所は破れてござります。
ト渡す。主膳、狀を見る。
主膳　こりや、女よりの無心狀……ハテナア。
ト思案する。此うち東西より、旅人五六人通らうとする。
百一　ア、、コレ〳〵、通す事はならぬぞ。
百二　人が切つてあるに依つて、通す事はならぬぞならぬぞ。

旅人　私しどもは旅の者、どうぞ通して下さりませ。
百三　ハテサテ、ならぬわいの。
ト口々に云ふ。
旅人　これは又、ひよんな事ぢや。
ト兩方へ入る。
主膳　死骸はまだ間もない事と見える。もし喧嘩口論などはなかつたか。
庄屋　イエ〳〵、私しどもが參つた折は、そんな事はござりませなんだ。
藤藏　少しでも僞はり、後にうぬら顯はるゝと、身の上ぢやぞよ。
庄屋　ハイ、僞はりは申し上げませぬ。
主膳　百姓ども、少しでも心當りあらば、包まずとも申したがよいぞ。この度主人の御領地御加増に付き、この邊も御知行所ゆゑ、檢分に參つた我れ〳〵。思ひ依らぬこの場の檢使、さぞ難儀と思はうが、所の難儀にはせぬ程に、安堵して居れ〳〵。
皆々　ハイ、有り難うござります。
ト在鄕唄、橋がゝりより、おさく、菅笠・抱へ帶にて、

風呂敷に刀を包み、何心なく通らうとする。

庄屋　ア、、コレ／＼女中、通る事はならぬぞ。

百姓　通る事はならぬ／＼。

　トおさく恟りして、風呂敷包みを後に隠し

さく　ハイ／＼、なぜ通られませぬか。

庄屋　爰に人が切つてあるゆゑ、御詮議の最中ぢやに依つて、通す事はなりませぬ。

さく　ハア、、それはひよんな事でござりますなア。私しはちよつと急ぎの者でござりまする程に、お通したされて下さりませ。

　ト行かうとする。

皆々　ア、、コレ／＼、通す事はならぬわいの。

さく　さうではござりませうけれど、私しは叶はぬ用事で、昨日から遠くへ參りまして、今朝五ツまでのうちに歸りませねば、どうもなりませぬやうにござりまする。女子の事でござりまする。御料簡なされて下さりませ。

庄屋　ハテ、聞分けのない、通す事はならぬわいの。

さく　どうでも通られませぬかえ。

皆々　ならぬわいの／＼。

　トまた刀を後へ隠し

さく　これは又、難儀な所へ來かゝつた事ではあるぞ。どうぞ通られぬ事かいな。

　ト好き所へ坐り、氣の毒なるこなしにて居る。

主膳　彌九郎どの、これは慥かに意趣切りと見えます。斯う見ましたところが、この男、大抵の奴ではないと見えまする。先の者が一分がすたつて、數ヶ所切つたと見えまする。こりや侍ひの仕業でござらう。

彌九　イヤ／＼、武士の仕業ではござらぬ。こりや盗賊の業でござらう。

主膳　然らばこの金を取りさうなもの。

彌九　サア、人音に驚ろき、うろたへて逃げたと見えまする。

　ト此うち、おさく、右のせりふには氣の付かぬこなし、心の急くこなしにて、日足を見たり、いろ／＼あつて、風呂敷を持ち、立たうとして、主膳を見て、ちやつと後へ隠し

さく　イヤ申し、お百姓様、五ツまでに歸りませねば、大勢の難儀になりまするでござりまする。どうぞお斷わり仰しやつて、お通しなされて下さりませ。

庄屋　ハテ、こなたばかりぢやない、通りの衆も皆待つて

ぢや。あれが目にかゝらぬかいの。

さく　成る程、さうではござんすけれど、刻限が延びますると、人の生死にも及びまする事でござりまする。心が心なりませぬ。どうぞお斷わりを仰しやつて、お通しなされて下さりませ。

ト此うち、主膳、莨をのみて、始終おさくに氣の付くこなし。

庄屋　ハテサテ、また云はつしやるわいの。それ程急くなら、道を替へて行かつしやれい。

さく　その道を替へますれば、日のたけるのが氣の毒さに、申すのでござりますわいなア。

庄屋　それでも、どうもならぬ。

さく　そこをどうぞ仰しやつて。

庄屋　ハテ、ならぬわいの〳〵。

トおさく、百姓、口々せり合ふ。おさく、思はず風呂敷包みを取上げ、百姓とせり合ふ。此うち、主膳、始終目を付けて居る。藤藏に煙管にて教へる。藤藏、呑み込み、侍ひ二人囁く。此うちも矢張り、おさく、百姓とせり合うて居る。

庄藏　ハテサテ、どのやうに云はしやつても、こちとが儘にはならぬわいなう。

さく　これは又、難儀な事ではあるぞ。

ト風呂敷の刀を突きて俯向く。

侍ひ　渡せ。

ト取りにかゝる。おさく、見得好く突き退け、刀を膝の下へ敷き

さく　コリヤ、何をなされます。

侍ひ　その風呂敷包みを渡せ。

ト又かゝるを立廻りあつて

藤藏　女め、うぬ、狼藉を働らくな。

さく　わたしは狼藉は致しませぬ。こりやお前方から狼藉をなされまする。

藤藏　默らう。役目にて詮議をする此方、狼藉とは慮外な奴の。

さく　その又詮議とは、なんの御詮議を。

藤藏　われが持つて居る風呂敷包み。ソレ、引ッたくつて改めい。

百姓　渡せ。

トかゝる。よろしく立廻りあつて、風呂敷包みを隠し後向きに留める。

侍ひ　女め、渡さぬか。

　ト十手振り上げる。

主膳　ハテ、仰々しい、扣へ召され。

藤藏　でも女めが。

主膳　高が女の儀。マア、扣へさつしやれ。

　ト皆々引く。

女、驚ろく事はない。その刀を見しやれ。

さく　ハイ、そりや何ゆゑでござりまするえ。

彌九　何ゆゑとは猪口才な女め。人が切つてあるゆゑの詮議。其方が刀を隱し持つゆゑ、怪しう思うて、その刀を改め見るのサ。

さく　エヽ。

　ト驚ろく。

藤藏　サア、その刀を、此方へ渡せ。

さく　そりや止しになされませ。刀を持つて居りますれば、私しも侍ひの女房。アイ、浪人しても武士の妻。御詮議なされて、この刀に血でもしたうてあるならば、お役目も立ちませうが、刀に凶事のござらぬ時は、なんとなされうと思し召しまするぞ。

彌九　ハヽヽヽ。理窟張る女め。疑ひ晴れたら通してくれるわサ。

さく　イヤ、さうばかり仰しやつては、お役目は立ちませうが、どうもわたしは濟みませぬ。なぜと仰しやれ、業物やら鈍刀やら、知れませぬ夫の魂ひ、是非々々見ようと思し召せば、凶事のない時のお捌きを、御思案なされてから御覽じませ。滅多に刀は見せ申さぬ。

侍ひ　見せぬは曲者。ぶち据ゑて引ッたくれ。

皆々　渡さぬか。

　ト取卷く。

主膳　ハテ騒がしい、扣へいと云はゞ、マア／＼、扣へて居れい。

皆々　ハアヽ。

主膳　女、苦しうない、近う來やれ。

　ト皆々扣へる。

さく　ハイ。

　ト刀を持ち、油斷せぬこなしにて、主膳が前へ出る。

主膳　誠に武家の育ちと見え、驚ろき入つた其方の一言。權威をかる役目の慮外、こりや此方の不調法。慮外の段は身共がお詫び申す。御料簡にあづかりたい。

　ト小腰を屈める。

さく　これは御慇懃な。其やうに仰しやつて下さりまする
と、ほんに迷惑に存じまする。わたしも氣の急く儘に、
あられもない、はしたない事ども。慮外と申すはわたし
が事。お宥されて下さりませ。
主膳　イヤ、此方が不調法。
さく　イヤ、私しが。
主膳　イヤ、此方が。
さく　ホヽヽ。
兩人　ハヽヽヽヽ。
　ト笑ひながらこなしあるべし。
さく　イヤモウ、お疑ひ晴れますれば、私しの仕合せ。き
つう心急きにござりまするゆゑ、もう參じまする。御縁
もあらば、又お目にかゝりませう。
　ト花道へ行かうとする。
主膳　女中待ちやれ。
さく　ハイ、御用でござりまするか。
主膳　此方の無禮は、手を下げてお詫び申した。改めてそ
の刀の身を、吟味いたさう。此方から手はかけぬ。サア、
刀の身をお見しやれ。
　トおさく、胸にこたへし思ひ入れにて

さく　すりや、どうあつても、この刀の身を。
主膳　改めて通さねば、疑ひかゝつた役目が濟まぬ。
　トおさく思案して、橋がゝりへ行かうとするを、また
主膳呼び留める。
主膳　女中、待ちやれサ。
さく　なぜお留めなされまする。
主膳　そちやどれへ行きやる。
さく　サア、爰を遁らうと申せば、刀の改め。そこを存じ
て、元道へ歸ります。
主膳　さうは拔けさせぬ。是非とも刀改めるぞ。
藤藏　主膳どのゝ詞を背くと、打ち据ゑても改むるぞ。
さく　エヽ。
　ト思ひ入れ
主膳　達て見せまいと云やれば、是非に及ばぬ刀の役目、
どうむづかしくならうも知れぬ。そこを存じて、身が改
める。此方から手をかけうか。
さく　サア、それは。
藤藏　刀を見せるか。
さく　サア。
主膳　サア。

さく　サア。
兩人　サア／＼／＼。
皆々　どうぢや。
さく　ハア、。
　ト俯向き、こなし。
成る程。得心いたしました。この刀の身をお目にかけませうが、お侍ひ樣、あなた一人これへお出で下されまして、御苦勞ながらお改め下さりませ。
主膳　ムウ。すりや身共一人に。
さく　ハイ、他見はお免されて下さりませ。
主膳　聞き屆けた。御兩所、お扣へ下され。皆の者も扣へて居れ。
皆々　ハア、。
　ト彌九郎、藤藏、床几にかゝる。皆々引く。主膳、悠々とおさくが側へ行き
主膳　サア、お身が拔いて見しやるか。身共が手をかけうか。
さく　イヤ、私しがお目にかけませう。
主膳　勝手次第。
　トおさく、あたりへ心を付け、見る思ひ入れあつて

さく　只今お目にかけまする。
主膳　早う／＼。
　トおさく、こなしあつて、刀を拔くと木太刀。主膳、恟りして、兩人、外へ見せぬこなしあつて
さく　夫の魂ひ、お改め下さりませせ。
　ト差出す。面目なき體愁ひにて云ふ。主膳、改めるこなしあつて
主膳　ハテ、思ひもよらぬ。
　ト云はうとして、外へ隱すこなし。
ハレ、天晴れの業物。血もしたはず、刃もこぼれず、疑ひは晴れ申した。ハテ、珍らしい業物。外の手前も……先づ／＼お納められい。
さく　お疑ひは晴れましたかな。
主膳　疑ひは晴れ申した。
　ト兩人へ隱すこなし。おさく、刀を納め、ちやつと下に置き、見せぬこなし。主膳、元の床几へかゝる。
彌九　主膳どの、怪しい儀はござらぬかな。
主膳　少しも怪しい儀はござらぬ。女中が見せまいと申すは理り。ハレ、天晴れの業物。女中、珍らしい銘の物。どうして所持召されたぞ。

さく　お尋ねにあづかりまして、お恥かしう存じまする。わたしが夫は不慮の浪人、仕付けぬ世渡り、尾羽打枯らし、永々の憂き艱難、積り／＼ての大病。人參づくめの其うちに、お國より歸參を願へと、或る朋輩衆の內意、聞かれますると心は張り弓。今一度本腹して、武士の身になつて死にたいと、氣は焦つても因果な大病。あんまり見る目が悲しさに、わたしが兄さん、さる方に居られまするを頼んで金の才覺。出來ぬものは金づく。どうも致し方なきに、人參代にこの一腰、夫に隱して知るべの方へ持つて參り、散々の云ひ譯云うて、この刀の身を二十兩の質に。

ト云はうとして、二十兩包み出し

サア、二十兩に賣ります筈で、持つて參りまするところ、あなた方の思し召しにも、國へ歸參するならば、刀は放さぬ筈の事と、お笑ひなさるゝでござりませうが、どうぞ本腹を致されたらば、その時は請け戻し。

ト云はうとする。主膳、咳拂ひをする。

サア、その時に買ひ戻しまする相對なれば、仕樣模樣はあらうものと、心一つに兎や角と、思ひ付いたも、どうぞして大病を本服させたさ。元の武士に致したさ。夫の恥を隱したさに、最前からのお詞を、背きましたのでござりまする。必らず／＼斯うした、サア、斯うした話しはこの場ぎりに、お賴み申し上げまする。はがねを鳴らす知行取りも、浪人しての身の上程、口惜しい悲しいものはござりませぬわいなア。

ト泣くこなし。

主膳　ハテナア、誰れしも浪人の身の上とならば、さうした事もござらう。併し、歸參とあれば本腹第一。役目でなくば御用に立つ品もあらうが、殘念千萬。して、宿所はどれにござりまするぞ。

さく　ハイ、小石川飛坂に居りまする。

主膳　ムウ。して苗字は。

さく　ハイ、岩木氏と申しまする。

主膳　岩木氏。わざとお名は問ひますまい。由ない者が殺されて、思はぬ隙取り、氣の毒に存ずる。女中、追つてお尋ね申す事もござらう。サア／＼、早う通り召されい。

さく　左樣ならば、お暇申しませう。

ト行かうとする。西の方にて

旅人　ア、由ない男が殺されて居て、これは迷惑な事ぢや。

ト東の方にて

旅人　あの男は、どいつが殺した事ぢやぞい。

皆々　早う通して欲しい事ぢや。

ト口々、男が殺してあると云ふ事やかましう云ふ。おさく、氣の付いたるこなしにて、立ちとまり、思案して後へ戻りて

さく　申し、最前から氣の急くまゝ、上の空に聞いて居りましたが、只今も承はりますれば、殺されて居る人は、若い男ぢやげにござりまするが、ちよつと見られますまいかな。

主膳　易い事。心がけの事あらば、立寄つて見られよ。

皆々　サア／＼、見さつしやれ。

ト菰を捲り見せる。おさく見て惘り。

さく　ヤア／＼／＼。こりや誰れが殺した／＼、殺したぞいなう。

ト泣く。皆々惘り。

彌九　コリヤ女、この死骸は其方が知るべの者か。

さく　知るべの段ぢやござりませぬ。こりやわしが兄さんぢや／＼、兄さんぢやわいなア。

主膳　ムウ。其方が兄は、なんぞ殺される覺えがあるか。

さく　イエ／＼、殺される覺えはござりませぬが、それはわたしが家へ養子、譯あつて兄さんは、少さい時から別家の住ひ。この度の金の入用も、くれ／＼頼んで置きましたを、きつう氣にかけて居られましたが、昨日までも昨夜までも、好い便宜もござりませなんだ。夫の大病さへあるに、兄さんまで此やうに殺されさしやんすといふは、こりやマアなんの因果ぢやぞ。こりやマア、どうした因果ぢやぞいなう。

ト泣く。此うち、主膳、最前の金を出し、狀を披き讀み、割符の合ふこなし。

膳主　して、その兄へ無心の高は。

さく　アイ、五十兩無心申しました。

彌九　すりや、最前の五十兩。

主膳　頼みのこの狀……女中、兄御の才覺召された金五十兩に無心狀、取つて置きやれ。

ト二種を投げ出す。おさく取つて。

さく　こりや、わたしが文……又この金……そんならこの金を拵らへて下さんしたを、取らう爲に殺したのか。但し意趣切りか。浪人こそすれ、兄もわたしも武士の風。申し、どうぞこの敵を、詮議なされて下さりませ。エ、

何者が殺した事ぢやぞいなう。
彌九　我れ〳〵が主人の知行所。此方よりも役所へ訴へよう。女中、この死骸、どうしめさる。
さく　夫も案じられますれば、ちよつと宿へ歸りましてから、駕籠を持たせ、直さま迎ひに參ります。暫らくのうち、所の衆へお預けなされて下さりませ。
主膳　易い事。迎ひの駕籠の來るまで、百姓ども、番をして居い。
きく　ハイ〳〵、畏まりました。
主膳　此方よりも、其方の所の家主町役人を呼びに遣はし、代官所へ召連れ歸る。して、所の名は。
さく　小石川飛坂、岩木玄蕃と申して、只今の浮世は醫者。
主膳　武士は相身互ひの難儀。病人へ早くその金。
さく　アイ〳〵。段々のお志し、忝なうござりまする。いとしや兄さん、この金ゆゑに。
ト泣く。
彌九　早く行きやれ。
さく　アイ〳〵、内へ歸りましても、なんと夫へ申しませうぞいの。
ト合ひ方になり、泣く〳〵花道へ行き、戸屋際にて、キッと氣を替へて、ツイと入る。
主膳　コリヤ、庄屋年寄り、死骸の筋は立つたれば、往來を早う通せ〳〵。
庄屋　ハイ〳〵、畏まりました。百姓衆、往來を通さつしやれ通さつしやれ。
百姓　サア〳〵、通らしやれ〳〵。
旅人　ヤア〳〵、えらい目に會うた事ぢや。サア、ござれござれ。
ト口々やかましう云うて、兩方へ別れ入る。花道より正八、その外手代三人付き出る。
正八　今の噂は、ほんの事かいの。
手代　サア、それでなけりやよいが。
ト此やうな事云ひ〳〵出て、本舞臺へ來る。死骸を見て
正八　ヤア、切つてあるぞ。大方これぢや。皆見さつしやれ見さつしやれ。
皆々　オイ〳〵。
ト皆々、死骸をとつくりと見て
正八　ヤア〳〵〳〵。こりや聟どのぢや。勘十郎さんぢや。どいつが切つたぞ。エヽ、酷い事しをつたな。

手代　サア／＼、大事ぢや／＼。

　トやかましう云うて立騷ぐ。

彌九　ヤイ／＼／＼、うぬら、何奴ぢや。詮議の濟んだこの死骸。コリヤ、身共が上役もこれにござるぞ。キョロキョロと狼狽へ者めが。

正八　イエサア、狼狽へぢやござりませぬ。このお人は、私しが旦那の御一家、山崎屋勘十郎と云うて、歷とした町人衆、昨日から五十兩といふ金を持つて、家へ去なれませぬゆゑ、家內は上を下へと亂騷ぎでござりまする。狐にでもつまゝれさつしやれぬかと、この近邊を大勢して、一遍尋ねて居りまするところに、人殺しの噂を聞いて來て見れば、私しどもが尋ねまする、勘十郎どのでござりまする。

彌九　ヤア、。

　ト驚ろく。主膳、悔りするこなし。

手代　盜賊の業か。えらい事をしをつたわい。

主膳　して、其方は何者ぢや。

正八　ハイ、私しは永樂屋權左衞門が手代、正八と申す者でござりまする。ハイ、番頭でござりまする。

主膳　然らば、切られて居るその者の身の上、主人の一家とあるからは、詳しう知つて居るであらうが、勘十郎は侍ひの胤か。武家に一門があるか。

正八　なんの／＼、山崎屋勘十郎さんは、親代々生拔きの町人、武士の家は微塵聊かござりません。

主膳　ムウ。して、女の兄弟はないか。

正八　イエ／＼、一人息子でござりまする。女子の兄弟はないかと存じまする。

彌九　ヤア、。

　ト兩人悔り。正八、他の手代も合點ゆかぬこなし。主膳が側へ行き

正八　モシ、お代官樣。

藤藏　主膳どの。

正八　なんとぞ

皆々　なされましたかな。

　ト此うち、主膳、始終向うを見て居て、思はず扇を落す。皆々主膳に眼を附けゐる。

主膳　すりや、今の女は……ムウ。

　ト向うをキツと見る。よろしく

　　幕

三つ目

甚三内の場
三園堤の場

役名━━淺山主膳。澤田彌九郎。永樂屋權左衛門。同娘、おくみ。同手代、要助實ハ吉田宿位之助松若。肝煎り、六兵衛。道具屋、甚三郎。同女房、おさく。同娘、おいと。番頭、正八。花園息女、野分姫。聖天町の法界坊。

造り物、三間の間、赤壁。納戸口、折り廻り障子屋體。よき所に門口、その側に古道具屋の書割り。非人、菰に卷かれて寢て居る。門口に、市兵衛、仕出し大勢、市立てゝ居る。内には、要助、おくみ、せり合ひ居る。この模樣・幕の内より

市兵　サア、なんぼ〳〵。
仕出　三百々々。
同　三百五十。
市兵　三百五十々々々々。
仕出　四百に買はう。
市兵　オツト四百。六間堀庄兵衛。
くみ　どのやうに云にしやんしても、こちや知らぬ〳〵。
　ト耳を塞ぐ。
要助　ハテマア、わしが云ふ事も聞いたがよいわいの。
くみ　イエ〳〵、聞かぬ〳〵。どうでわたしがやうた者は、云ひ號けのお姫樣とは違ひませうぞいなア。
要助　いろ〳〵の事を云やるわいなう。なんぞと云ふと、云ひ號け〳〵と、その云ひ號けも、もう古いわいの。
市兵　サア、古い六枚屏風、片しで、なんだ〳〵。
くみ　アレ又、云ひ號けの事を、エヽ、嫌ぢやわいな。
要助　マア、聞きやいの。
くみ　嫌ぢや〳〵〳〵。
市兵　サア、嫌ぢや〳〵〳〵。
　ト市立てる。
仕出　コレ市兵衛、そりや何を云やるぞいの。
市兵　これはしたり、内のせりふとごつちやになつた。サア、なんは〳〵。
仕出　六百々々。
同　六百五十。
要助　マア、わしが云ふ事聞きやいの。

くみ　何を云はしやんしても、嘘ぢやわいなア。

市兵　嘘なら八百々々。

仕出　エヽ、八百に買へ。

市兵　嘘八百、鐵砲屋の太郎四郎。

要助　白い黑いを立てゝ見せう。

くみ　見るぞえ。

要助　見せるぞよ。

　ト せり合ふ。奧より、おさく出て

さく　これはしたり、要助さま、おくみさま、何を其やうにせり合はしやんすぞいなア。

　ト 表には矢與り、市な立てる。

要助　サイナウ、おりや温なしう、奧で本讀んで居たれば側からおくみどのが邪魔をして、なんぞと云ふと云ひ號け云ひ號けと、滅多無性に疑うて、聞かぬ〳〵てゝ、それでのせり合ひぢやわいなう。

くみ　面々の方から、お姫樣の事を云ひ出して、腹立てさして置いてから……皆あなたから起つた事ぢやわいなア。

要助　イヤ、其方から起つた事ぢやわいなう。

くみ　イヽエ、あなたから。

要助　イヤ〳〵。

くみ　イエ〳〵。

さく　又せり合はしやんすかいなア。イヤ、市兵衞さん、もうこちの人も戻らさんせう。市をしまうて、お前も休んで下さんせいなア。

市兵　ハイ〳〵。イヤモウ、内のせり合ひと、表のせり市と一つになつて、上氣して諸事夢中で立てゝ居りました。

仕出　ソレ〳〵、美しい娘御の腹立てぢやので、市よりにひよんな物が立つて、大分買ひかぶりをしましたわいの。

同　おいらも往んで内で市立てう。サア、皆去にませう。

市兵　そんなら、わたしもお暇申しませう。サア、どなたもお出でなされませ。

皆々　サア、ござれ〳〵。

　ト 皆々、しか〴〵あつて入る。トおさく、いろ〳〵と挨拶ありて

さく　どなたも、よう御出でなされたえ……それはさうと、要助さま、如何に主の留守ぢやと云うて、端近へ出て、はしたない今のせり合ひ。おくみさんも、嗜なんだがよいぞえ。サア、氣嫌直して、奧へお出でなされませいなア。

要助　さうせう〳〵が、おさく、其方も知つて居やる通り、無實とは云ひながら、引負ひの百兩の金、今日中に譯立ていと、番頭の正八が催促。百兩の金を立て、再び永樂屋の家へ歸らねば、鯉魚の一軸も手には入らず、吉田の家も埋れ木とならうかと、案じ過しがせらるゝわいなう。

さく　お道理でござりまする。併し、お案じなされますな、その金の心當があると云うて、娘を連れてこちの人が、出やしやんしたが、追ッつけ吉左右が知れませう。日頃男氣な甚三どの、この譯が付かいでは、なんと致しませうぞいなア。

くみ　どうぞ早う金が調なうて、要助さまが内へ戻らしやんすやうにして下さんせえ。

さく　それに如才はござりませうかいなア。

ト云うて居るうち、權左衛門、息せき橋がかりより表を叩いて

權左　ちよつと爰明けてもらひませう。

さく　アイ〳〵、どなた樣ぢやえ。

權左　イヤ、大事ない者でござる。甚三どのが内にならば、逢ひたうござるが、ちよつと爰明けてもらひませう。

ト此うち、要助、おくみ、權左衛門が聲を聞き、悄りして、おさくに囁く。おさくも悄りして

さく　サア〳〵、そりや大抵の事ではない。マア、お前方も押入れへ隱れて。

ト皆々うろたへ押入れへ入る。

權左　これはしたり、晝中に表をさいて。ちよつと爰を明けてもらひませう。

ト表忙しく叩く。

さく　アイ〳〵、いま明けますわいなア。

トうろたへ、表の戸を明ける。權左衛門、内へ蹟き入る。おさく、悄りして

ものも。

ト大きな聲にて云ふ。

權左　どうれ。

ト顏見合せ

ハヽヽヽ。

さく　ホヽヽヽ。わたしとした事が。さうしてあなたはどなた、どこからお出でなされました。

ト此うち、權左衛門、簪を拾ふ事あり

權左　イヤ、わしや永樂屋權左衛門と云ふ者でござる。

さく　そんなら、要助さまのお主様でござりまするか。これは〳〵、ようお出でなされましたなア。

ト此うち、甚三、戻りかゝり窺ふ。

權左　イヤ、ようは來ませぬ。さてはこなさんが、甚三どのゝお内儀ぢやの。サア、内の娘おくみを戻して下され。サア、早う戻して下され〳〵。

さく　ア、申し、權左衞門さま、滅多無性に戻せ〳〵と仰しやつても、あなたの所の御奉人樣を、私しが方に隠して置きや致しませぬぞえ。

權左　イヤ、云はつしやんな。要助ととち狂うて、駈落ちした徒ら者。爰に居いで詰まるものか。さうして、この甚三どのは、どこにぢや。マア、甚三どのに逢ひませう。サア、早う出さつしやれ。甚三どのに逢ふのぢやぞ。

さく　イエ、甚三どのは留守でござりまする。

權左　そんなら、こなさん、娘を早う戻して下され。

さく　ハサ、おくみさんの事は知りませぬわいなア。

權左　イ、ヤ、知つて居やしやる筈ぢや。此方には慥かな證據がある。

さく　エ、ナニ、證據とはえ。

ト權左衞門、簪を出し

權左　コレ、この簪の稻の丸と、七ツ目の鳥とは、好みでおれが誂らへて、買うてやつた簪。これが爰の内には、どうして落してあつた。

さく　サア、それは。

權左　サア〳〵〳〵、早う娘を出して下されいなう。

甚三　イヤ、證據があつても何があつても、お娘御は存じませぬぞ。

ト入る。

さく　ヤア、こちの人。

權左　甚三どの、これ程慥かな證據があつても。

甚三　サア、その慥かな證據があるに依つて、お娘御は此方の内にはござらぬわいの。

權左　そりや又なぜに。

甚三　この簪の紋は稻の丸、この稻の穗に出た今度の色事。これを早稻に苅りたくれば、却つて稻に藁が出る道理。申し、折角あなたの稻を下ろし、苗代時に引分けて、男めばかり照り付けたら、二人ともにツイ枯れ果てまする。そこを思うてこの百姓が、年貢も未進も取込んで、首尾ようあなたの米藏へ、納めてお目にかけませう程に、マア、爰に匿まはれぬと云はゞ、匿まはぬにして、早うお

歸りなされましたが、よからうと存じまする。ナウ、嚊。

さく　さうでござりまする。いま主の申されまする通り、離れぬ仲を引分けては、結句サア、怪我でもあつては、案じ過しも要助どのゝ身が大切。

權左　成る程、聞分けました。おれも年寄つて此やうに云うて來るのも、ひよつと娘に、サア、ものしの事があつてはと、思ふも彼奴が不便さゆゑ。要助どのゝ褄はづれ賤しからぬ素性とは、始めからよう知つて居る。ハテ、聟の勘十郎が死跡、後家になるなり、娘が好いた男を入れてやるは、家の相續、何もかもその入り譯は、よう嚙み分けて居ますわいなう。

甚三　サア、そのお心ならわたしに預けて、とサア、此方にござるなら申しませうもの。居ぬ人に逢ひもなし。

權左　そんなら、こなたを男と見かけて、娘が事をと、爰に居るなら賴みませうもの。

さく　お氣遣ひなされまするな。女子は相身互ひ、わたしが隨分心を付けて、と云ふに云はれぬこの場の仕儀。

權左　何も云はぬ、甚三どの、何もかもこなたを賴みます。

　わしやもう去にまするわいの。

甚三　そんなら御得心で、もうお歸りなされまするか。

權左　ア、初めて來て、お內儀、やかましうごんしよ。

さく　なんのマア。申し、また後に夜に入つてから、お出でなされませ。御機嫌な顏も見せませうわいなア。

權左　それは忝なうござる。詞に甘へて、後に逢ひに來ませう。どうでこなさんの世話でござる。これはコレ、あなづりがましけれど、わしが初めて來た手土產、取つて置いて下され。

　ト紙包みを出す。

さく　なんのこれに及びまする事。此やうになさるゝと結句

　ト云ひ〳〵明けて見て

　これは。

權左　こなた衆の欲しがらしやる掛け物の質札。要助にと云うては遣らぬ。勿論甚三どのにも表向き。こりやこなさんが、この掛け物の引負ひの百兩さへ出來たれば、この質札を持つて、お內儀、こなさんが取りにござれ。この掛け物を渡すが、要助が歸參の印。甚三どの、もう歸りまする。

甚三　段々のお志し。

さく　お情のこの質札。エ、。

ト拜まうとする。

權左　ドリヤ、お暇申しませう。

　　ト唄になり、權左衛門、入る。あと合ひ方、兩人、見送り

甚三　お靜かにお歸りなされませ。モシ、年寄つてアタフタフタと、ア丶、子ゆゑの闇ぢやなア。そのアタフタで思ひ出した。女房ども、お二人樣は。

さく　ほんに、わたしも忘れて居た。權左衛門さんがお出でなされたので、悔りして押入れへ隱して置いた。ほんに息が詰まりやせんか知らぬ。

　　ト云ひ〳〵押入れ明ける。内より、要助、おくみ、出る。

要助　甚三どの、最前から逢はなんだが、どこへ行てゞあつたぞいの。

甚三　イヤモウ、昨日今日は、彼の一軸質請けの工面ごとで、女夫のものは一向譯はござりませぬが、女房ども、昨日其方に預けた彼の代物は。

さく　そりや氣遣ひさしやんすな。首尾よう二十兩に。

　　ト金を出す。

甚三　これでよい〳〵。

要助　コレ甚三、引負ひの金は百兩。あと八十兩の足らずはや。

甚三　お氣遣ひなされますな。その後金も、大概調ならうて、爰に三十兩持つて居ります。

　　ト金を出す。

要助　ヤア、そんなら五十兩金が調ならうたか。マア、嬉しい嬉しい。

　　トおくみも喜ぶ。

甚三　調へいでなんと致しませう。私しが兄は軍助と申しまして、吉田のお家には、舊老のお草履取り。

要助　彼の鯉魚の一軸と云ふは、唐土梁の武帝の御筆。暗夜に開けば鱗より光を放つ、奇瑞ある掛け物。我れ松若と云ひし時、弟梅若誤まつて、繪絹の鯉に眼を入れしかば、忽ち拔け出て庭前の池に入りしをば、其方が兄軍助、組み留めて掛け物へ戻せし功の者。

甚三　その弟に生れし甲斐もなう、身の徒らに依り、お國を立退き、方々と流浪のうち、お家の騒動、掛け地は紛失。少將さまにも敢へなく御最期。聞いた時は悔りせまいか、直さまお國へ駈け付けましてござりますれども、早お國は伯父御・常陸の大掾百連どのが押領して、御一

門御家老中も散り〳〵。
要助　サア、この松若も、既に危ふき難儀を、家老山田權之頭が計略にて、天狗に取られしと僞はり、密かに元服して、いま宿位之助と改名し、寶の一軸詮議の爲、姿をやつす手代奉公。憂き艱難の其うちに、不思議と知れた寶の在所。請け出さうにも引負ひの、金の才覺諸事萬事、其方衆夫婦の志し、忘れは置かぬ、嬉しいぞや。
甚三　これは有り難いお詞に、あづかりましてござりまする。三代相恩のお主ぢやもの、お世話いたさいでなんと致しませう。ナウ、嬶。
さく　左樣でござりまする。こちの人、そのマア三十兩、どうして調たうたえ。
甚七　サア、これは、アノナニ……聞きや。出家といふ者は賴もしいものぢや。靈岸寺の御隱居へ、この度主筋のお方、歸參させますと、何かの入り譯を話したれば、成る程取込みであらうと、祠堂金のうち呑み込んで、三十兩貸して下さつたのぢやわいなう。
さく　ハテ、それは深切な事ぢやなう。そして、娘のお糸は、どこへ遣らしやんした。
ト云ふうち、肝煎り、お糸を連れ、內へ入る。

肝煎　甚三どの、內方にでござりまするか。オヽ、甚三どの、爰にぢや。さて娘御、親方に見せたところが、えら乘りのえら喜びぢや。
ト云ふを甚三打ち消して
甚三　ア、コレ、靈岸寺のお使ひ、娘を連れて、ようお出でなされました。靈岸寺のお使ひ〳〵。
トいろ〳〵仕方して云ひ、呑み込ます。肝煎り、外の事と心得、矢ッ張り云ふ。
肝煎　イヤモウ、三十兩の金は渡すし、早う件の證文を。
甚三　サア、その金……サア、金々、娘を貸してくれいと仰しやつたなア。仰しやつたに依つて、茶の給仕に貸しましたな。貸したに依つて、送つてお出でなされたのであらうがな。
ト呑み込ます。肝煎り呑み込んで
肝煎　エヽ、成る程、送つて參りましたのでござりまする。
甚三　とつと娘を靈岸寺樣へ、茶の給仕にやつて置いて、おれもとんと忘れて居た。ハヽヽヽ。ナア娘よ、茶の給仕に行て居たなア。
ト呑み込ます。

いと　アイ、給仕に行て居りました。母さん、わたしが留守のうち、さぞ淋しかつたでござんせうなア。
　トこなしあつて
さく　こちの人、ア丿娘に、二人が仲の子ぢやぞえ。
甚三　ハテ、それがなんとしたぞいの。
さく　サア、それぢやに依つて、給仕にやらしやんすならわたしにも相談づくで……なんぢやが、併し靈岸寺で金借る事は、止めにして下さんせいなア。
　ト泣く。
甚三　妙な事を云ふものぢや。そんなら靈岸寺で金借らいでも、どこぞで金の工面が。
さく　サア、その心の心當は。
　ト云はうとする。
甚三　心當があるか。
　トおさく、詰まつて
さく　そりやないけれど。
甚三　何をキヨロ〳〵吐かすやら。コレ、靈岸寺のお使ひ、キヨロ〳〵として居ずと、もうお歸りなされませぬか。
肝煎　サア、證文さへ出たら。
甚三　ハテ、サテ、マア、お歸りなされませ。晩程までにな。ようお出でなされました。
肝煎　ア丶、成る程、その間に兩國橋の、綿屋まで行て參りませう。暮れ早々には駕籠を持たして……又お糸さんを茶の給仕に、雇ひ貸して下さりませ。ドリヤ、お暇申しませう。
　ト肝煎り入る。引違へて歩き出て
あるき　甚三どの、内にか〳〵。人殺しの御詮議ぢや。會所までごんせ。サア〳〵今ぢや。
　ト此うち、甚三郎、ヤツクリ。要助おくみも思ひ入れ。
甚三　ア丶、おりやきつう腹が痛むが、女房ども、大儀ながら。
さく　わしも次手に、尋ねて來たい事もあり、そんなら行て來うわいな。
　ト歩き、サアござりませと云うて連れ立ち、表へ出て、おさく、思ひ入れあつて
兩國橋の綿屋。大方……ドリヤ、行て來うか。
　ト唄になり、歩きを連れ入る。甚三殘りて、思ひ入れあつて
甚三　お二人ながら、爰は惡うござりまする。マア、奧へお出でなされませい。

要助　そんなら甚三。
甚三　ハテマア、お出でなされませ。
　ト唄になり、兩人、奥へ入る。甚三、思ひ入れあつて
マア、質請けもよし……これもよし。差當つての難儀は
要助さま。お若いとて、世を忍ぶお身の上で、勘十郎を
……人を殺せば下手人。まさかの時はお身替り……わり
やお糸よ、最前云うた通り、お主の爲、親の爲、白拍子
屋へ賣られてくれよ。
いと　お前や母さんの爲なら、わたしが身は、どのやうに
なつても大事ござんせぬ。白拍子屋へなりと傾城屋へな
りと、賣つて下さんせいなア。
　ト泣く。甚三もヂツと泣く。
甚三　オヽ、賢い事をよう云うて。コリヤ、嬶に何にも云
ふたよ。
いと　そりや合點でござんす。
甚三　勤めは辛いものぢやが、辛抱してくれるか。
いと　お前や母さんの爲なら、どんな辛抱もするわいな
ア。
　ト甚三郎、お糸を抱きて
甚三　よう云うてくれた。可哀や／＼。

　ト泣く、ト主膳、家來を連れ、向うより出る。
主膳　さて／＼、國元とは違ひ、賑はしき事ぢや。誠に花
のお江戸ぢやてなア。
家來　左樣でござりまする。
　ト云ひ／＼、本舞臺へ來る。
主膳　慥かに爰と聞いた。家來、案内せい。
家來　ネイ／＼。頼みませう、道具屋甚三どの宅はこれで
ござりますか。
甚三　甚三はこれでござりまするが、どちらからお出でな
されました。
主膳　イヤ、苦しうない者でござる。甚三どのは御在宿か
な。
甚三　ハイ、宿には居りまするが、ついぞ見受けぬお侍ひ
樣。して、あなた樣は。
主膳　吉田家の家老、山田權之頭が伜、主計之助武季。
甚三　すりや、あなた樣が主計さま。
　トはつと當惑の體。
甚三　イヤ、驚ろき召されな。ちと御意得たい事があつて、
わざ／＼訪ねて參つた。苦しうなくば通りませうか。
甚三　先づお通り下されませい。

主膳　其方は旅宿へ歸れ。
家來　畏まつてござりまする。
　ト主膳、上座へ通る。家來、入る。
甚三　さては、あなた樣が、承はり及びました、主計さまでござりまするか。面目もない御對面を仕りまする。
主膳　軍助が弟簡平、今の名は甚三郎とやら。先づは別儀ない體、珍重々々。
甚三　あなたの親御武岡さまには、御恩にあづかりました甲斐もなく、お妹御おさくさまと不義密通。剰さへ連れ立ち退きました不屆き者、さぞ御立腹でござりませう。
主膳　幼少で引別れた妹、其許と密通せしとて、藁の上より養子に參り、他門となつた果、なんの腹立ち。手前その儀には參らぬ。
甚三　左樣ならば、なんぞ外に御用事か。
主膳　如何にも。拙者其許にお頼み申す仔細と云ふは、騙りの女の詮議でござる。
甚三　ナニ、騙りの女の詮議とな。
主膳　仔細ござつて詮議仕るが、何を申しても當所不案内の拙者。幸ひかた其許、當所住居と云ひ、この詮議なされ下さらば、それを功に、浪人してござれども、伯父武國どのへ御存生のうち、勘當の詫の綱。この儀御承知下されうか。望み首尾よく仕負ふせなば、夫婦とも勘當の儀は、某が胸にある。氣遣ひしやるな。
甚三　エヽ、有り難う存じまする。何がさて、望みまするところでござりまする。お氣遣ひなされますな。その女が詮議、私しが命にかけて、尋ね出してお目にかけませう。コリヤお糸よ、用がある。ちやつと來い／＼。
いと　アイ／＼。最前からの樣子は聞きましてござんす。そんならあなたが、伯父樣でござりまするか。ようお出でなされましたなア。
甚三　ちよつぼりと、御挨拶でござりまする。
主膳　ハヽヽヽ。こなたの娘御かな。サア／＼、爰へ／＼。
　トアイと主膳が側へ寄る。
中々よい器量ぢや。隨分こりや母が云ふ事を聞いて、悧巧者になれよ。して、母はどつちへ行たぞ。
いと　母樣は留主でござりまする。もう戻つてござりませう。
甚三　エヽ、コレ、早う戻りはせいで、どこへ寄つて居る事ぢや知らぬ。
主膳　イヤ、其やうにお世話召されな。もう歸るでござら

う。拙者も奥にて休息いたし、妹が歸るを相待ちませう。

甚三　左樣なら、お頼みの樣子も。

主膳　奥にて詳しうお話し申さう。甚三どの。

甚三　サア、斯うお出でなされませ。

ト唄になり、皆々入る。トあと合ひ方。おさく、肝煎りを連れ、戻つて來て

さく　それに違ひはござりませぬかえ。

肝煎　なんの嘘を云はうぞいの。

さく　マア、此方へ入つて下さんせ。

肝煎　さうして、道々も、立てる／＼と、どうぢや、譯が立ちまするかな。

さく　ハテ、父さんが合點しても、この母が合點せぬ奉公人、高で三十兩の金を返しさへすりや、よいぢやないかえ。

肝煎　金さへ戻りや、ようござりまするが、その金がござりまするか。

さく　サア、その金は爰にあるさかいで。

ト云ふうち奥より、甚三郎、お糸を連れて出て

甚三　オヽ、女房ども、いま戻りやつたか。

トおさく、ムツとして。

さく　アイ、いま戻りましたさうにござります。

ト甚三郎、肝煎りを見て

甚三　そちらに居るは誰れぢや。

さく　靈岸寺の御隱居から、金を返してくれとの、お使ひでござりまする。

トムツとして云ふ。

甚三　ハアン。

ト空惚けるこなし。おさく、ツカ／＼と行て、胸倉を取る。

さく　コレ、こちの人。エヽ、こなさんは。

甚三　コリヤ、恨みなら後で聞かう。マア、喜ばす事がある。

さく　あんまり好い事ぢやあるまい。

甚三　國から兄貴が見えた。

さく　兄貴とはえ。

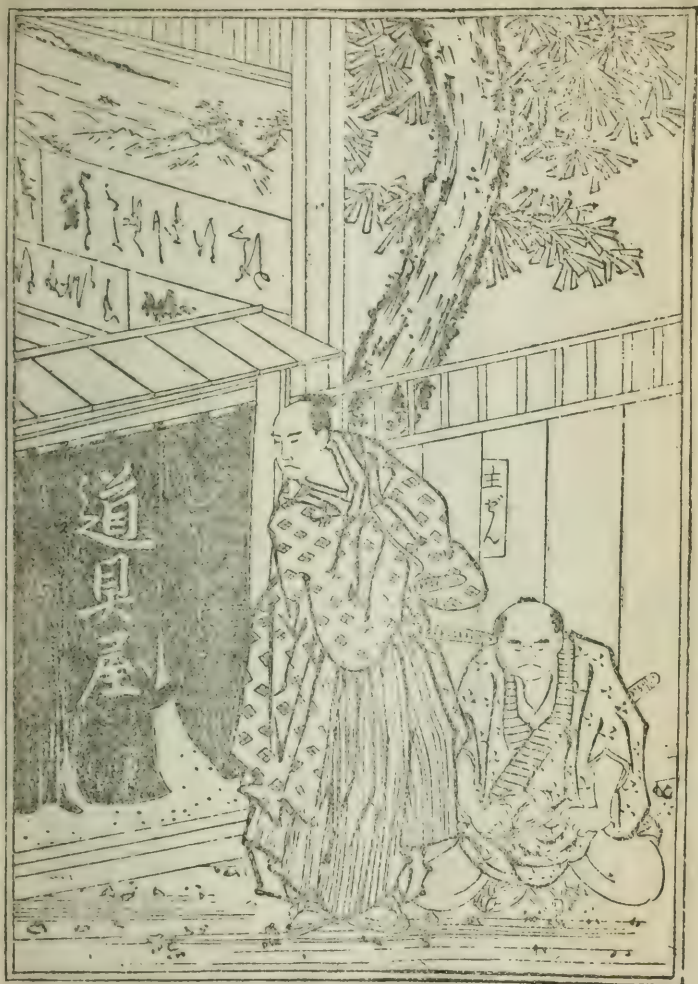
甚三　其方の兄御、主計之助さまが見えた。

さく　エヽ。

ト驚ろく。

甚三　恟りしやんな。呵る所へはいかで、其方やわしの勘

根本「春景浅茅原」挿絵

甚三内の場

當を赦させうと、好い詫の種を云うて、奥に待つてござるわいの。
いと　わたしもお目にかゝりました。ちやつとお前も逢はしやんせいなア。
さく　幼ない時に別れた兄樣、それが見えたと聞いだに依つて、お前やわしが不義の科、何とぞ云うて見えたかと思や、父樣へお願ひ申して、お前やわしが勘當を赦ささうと云つてかえ。
甚三　イヤモウ、主も逢ひたがつて、大抵待つてぢやないわいなう。
さく　オヽ嬉しや。てもマア嬉しや〳〵。日頃神佛樣を祈つたので、わたしが願ひが叶うた。コレ、喜ばや。其方を國へ連れて去んで、侍ひの緣取つてやるぞや。モウモウ、こんな嬉しい事はない。
甚三　ハテ、きつい喜びやうぢや。
さく　これをマア、喜ばいで、何をマア喜ばうぞいなア。
甚三　マア、ちやつとお目にかゝりや。
さく　イエ〳〵、久し振りで逢ふ兄樣、ちよつと櫛を入れて、洗濯袷なと着替えうわいな。
甚三　何を贅な事を云ふやら。

さく　イエ〳〵、何やらも身祝ひでござんすわいなア。
肝煎　さうして、わたしやどう致しませう。
さく　イヽエ、モウ、娘は賣るこつちやアござりませぬ。
肝煎　そんなら三十兩の金を返して下さりませ。
さく　サア、その金は今。
　ト甚三郎、こなし。
いま聞いて居やしやんす通り、兄さんに逢うた上で、五十兩や百兩は、ツイ貰うてお前に返す。マア、納戸へ行て待つて下さんせ。
肝煎　イカサマ、最前からのお話しでは……如何にも納戸で待ちませう。
甚三　コリヤ女房、三十兩の心當が
さく　ござんす〳〵。その金は爰にアノ
　ト出さうとして、こなしあり
マア、わたしに任せて置いて下さんせ……サア、肝煎りさん、娘もおぢや。こんな嬉しい事はない。
　ト二人を連れ、喜び入る。
甚三　ても、きつう喜ぶワ。イヤ、それはさうと、主計さまがさぞお待ち兼ねなされてござらう。主計さま、それにござりますか。

主膳　イヤ〳〵、それへ參りませう。
ト一間より出て
ちよつと餘所ながら承れば、妹が戻つたさうにござる。どれに居ります。
甚三　只今これへ參りまする。何はなくとも女房ども、お杯持つて來い。お糸よ、お莨盆お茶も持つて來いよ。
トやかましう云うて喜ぶ。ト奥より
さく　アイ〳〵、何もなけれど、祝うてお杯なりと。
トお糸、盃を向うへ持つて出て直す。おさく、銚子を持つて出で、恥かしさうに俯向いて居る。正八、出かゝり、入らうとして立戻り、外に窺ふ。
甚三　ハイ、これへ出られましたが、私しが女房、あなたのお妹御でござりまする。らつちもない不調法、お免されて下さりませ。
主膳　イヤモウ、そりやあつこ過ぎた事なれば是非がない。この上は夫婦仲よう、住み遂げたがよい。
さく　アイ〳〵、お宥されて下さりませ。小さい時から、あなたは養子にお出でなされる。父さんの側で育ちまして、温なしうして居りましたが、ツイひよつとした事で、主と女夫のやうなものになつて、父さんを捨てゝ置いて、マア此方から勘當したやうなものでござりまする。それやモウ、ひよつとした拍子でござりました程に、兄さん、お赦されて下さりませえ。
ト恥かしさうに俯向いて居る。
主膳　褒められた事ではなけれど、戀は心の外と云ふ。何事も縁でがなあらう。幼ない時に別れたが、マア、成人したなア。
甚三　イヤモウ、くどう云ふ程くだが出る。勘當のお詫の手がかりに、お杯を頂きや。
さく　アイ〳〵、左樣いたしませう。兎角兄さんのお慈悲で、父樣へお詫び申して、勘當のゆりますやうに、お頼み申しまするぞえ。
甚三　それに如才はないわいの……サア、一つ上がりまして、おさしなされて下さりませ。
ト燗鍋取る。
主膳　然らば左樣いたさう。イヤ、これは慮外でござる。
ト受ける。甚三郎注ぐ。主膳、呑み
サア妹、改めて兄妹の杯、一つ呑みやれ。
さく　アイ〳〵、お頂き申しませう。この上ながら勘當の儀は。

主膳　兎角夫婦仲ようして。
甚三　一つ呑んであなたへ戻しや。
　ト此せりふ、三人目々に云うて、主膳、おさく、せりふのうち、顏見合せ
さく　ヤア、お前は。
主膳　其方は。
さく　ハア、、、。
甚三　久し振りで逢うたとて、きつい驚ろきやうではある。コレ、主計さまのござつたは、わが身を尋ねて、逢はうと思し召してのお出でぢや。
さく　そんなら、わしを尋ねん爲に。
主膳　其方を妹とも知らず
さく　お前を兄さんとも知らず、顏を知らねば名も違ひ、昨日は僅かに主膳さま。
主膳　常陸大掾さまの家臣、淺山隼人が養子に參り、只今にては淺山主膳。
さく　お顏も見知らぬその上に、お名まで違うて……ハアア。
　ト泣く。ト主膳、捕り繩を出し、繩捌きして、おさくが側へ立寄る。ト甚三郎、留めて

甚三　ア、イヤ／＼、主計さま、血相にして、こりやどうでござりまする。
さく　こちの人、わしや繩かゝる覺えがござんす。
　ト泣く。
甚三　繩かゝる覺えがあるとは。
さく　騙りの科で。
甚三　ヤア、そんなら最前奥で、主計さまの仰しやつた、騙りの女と云ふは。
主膳　現在の妹とも知らず、血を分けた兄とも知らず、五十兩の騙り事。
　トおさく、五十兩の金を出して、主膳が前に直し
さく　人殺しの場所で、お前を騙つた五十兩、お返し申しまする。
　ト甚三郎、恟りして、おさくを捕へ、向うへ打ちつける。
いと　コレ、父様。
　ト取支へるを甚三郎突き退け
甚三　構ふな、退いて居らう。ヤイ、面汚しめ、貧乏につばうかわいても、この甚三は男ぢや。殊に大小まで差いた身の、たんぼう落ぶれても、文字きたか盗んだ事して、

この面が立たうと思ふか。假初めながら五十兩と云ふ金、この甚三が云ひつけて、騙り盗みをさすやうに、思し召すが他人の千人、萬人より恥かしうて、この面が上げられうか。サア、なんの爲に騙りやアがつた。おのれが内證事にいるのであらう。おれが顏ばかりぢやない、可愛いと吐かすお糸にまで、面恥かゝす人外め。なんの爲に騙りしたのぢや。サア、吐かせ、吐かさぬか。アノ大盗人めが。

ト腹立てる。

さく　こちの人、内證使ひにいつたかとは、そりやあんまり胴慾な。胴慾でござんすわいなう。

ト泣くを。突き飛ばし

甚三　何が胴慾。ヤイ、おのれが爲にせぬ金を、今までなんで隱して居つた。

さく　こちの人。

甚三　なんぢや。

さく　宿位之助さまを世に立てたい、吉田の跡目を立てないと、日頃からのお前の願ひ。少將さまに御拜領の刀をば、質屋へ預けにやらしやんした、その金はと問うたれは、おれが心當てがあると、苦もなう云うては居やしやんすれど、心にかゝる金の事。案じ／＼二十兩の、質に入れて戻る折から、金持つて餘所の男が、殺されて居るとの噂を聞けば五十兩。ア、欲しやなアと思ひながら、氣の急くまゝに通りかゝつて、刀の詮議。現在の兄樣とは見知らず、名も違うて主膳さまと云ふお侍ひ。お情深いお詞に甘へ、フッとした出來心。殺された人はわたしが兄、五十兩の金はわたしが無心に遣はしましたと、騙り負ふせた昨日の金。嬉しや、お前の用に立て、喜ばさうと、とつかは戻つて敷居を越すと、ゾッと怖さも身に浸んで、借りた金とは云ひ惜さ。どうか斯うかと出し遲れ、案じるうちに最前の、肝煎りどのが詞のてん／＼。お前の素振りも合點ゆかずと、會所へ行たも上の空、直ぐに兩國へ行て聞へば、矢ッ張り傾城奉公。ハッと思うて胸も板。暮合ひまでに譯立てうと。肝煎りどのを連つて戻つて、お前に何かの相談せっと、思ふ間もないこの仕合せ。なぜあの子を賣るならば、相談づくにはやらしやんせぬ。如何にお主の爲ぢやとて、子を賣らしてのう／＼と、見て居るやうな女房と思うて居やしやんすか。内證事の身の慾に、盗み騙りをするやうな、わしが心と思うてか。大事のお主といとし可愛い、夫や子供に身を捨てし、命

お的の騙り事、內證にいる金かとは、よう酷い事云はしやんした。そりや胴慾ぢや〳〵わいなア。

ト泣く。甚三郎、こなしあり、主膳と顏見合せ、主膳、顏を外けて泣く。甚三郎もこなしあつて

甚三　女房ども、日頃の心は知りながら、恨みを云うたは面目ない。堪えてたも〳〵。

ト泣くこなし。

主計　せめては山田主計之助と名乘らば、その場に斯う云ふ事も出來まいに、流石は實父武國どのゝ胤、主夫ゆゑの騙り事、出かしたなアと褒められもせぬこの場の仕儀。

甚三　せめて仕損ひなりとすりやアよいに。

さく　騙り負ふせた身の因果。

主膳　見遁がしならぬも身の因果。

甚三　因果同士の

三人　寄合ひぢやなア。

トじやん〳〵の半鐘打つ。おさく、胸に當る思ひ入れ。正八、ツイと走り、向うへ入る。

甚三　ありや暮れ六ツ。

主膳　始めての役目先、赦して置かぬ。覺期せい。覺悟よくば。

ト繩かけうとする。甚三郎、留めて

甚三　待つた。主計さま、女房、其方にや繩かゝる事はなるまい。

さく　繩かゝる事ならぬとは。

甚三　權左衞門の最前の詞、其方ならで一軸を渡さぬとの事、いま繩かゝつて何者が、掛け物の質請けするぞ。

さく　エ、。

甚三　一人の娘を勤め奉公、拜領の刀まで、心を盡した忠義も、其方が騙りの功も立たず、死に損になると云ふところへ、心が付かぬか、女房ども。

さく　成る程、わたしが行かねば渡らぬ掛け物。

甚三　受取つたその上で

さく　繩かゝるとも、云ひ譯するとも

甚三　忠義を立てた後の事は勝手次第。

さく　どうぞ暫時の御猶豫を。

主膳　イヤ、そりやならぬ。義父淺山伴人どのゝ、主君と頼む百連公の、讎敵たる吉田一家、宿位之助を世に立てんと、鯉魚の一軸手に入れるを、見遁がしては武士道が立たぬ。

兩人 すりや、御容赦は
主膳 叶はぬ〳〵。
ト兩人、顔見合せ、ホイと當惑する。
が甚三どの、まだ妹は歸りませぬか。
兩人 なんと仰しやる。
主膳 主計め、この程は眼病氣にござる。誰れが側に居る
やら、一向に分りませねば、一軸を請け戻すまで、イヤ
サ、妹が戻るまで、これで休息仕らう。
ト莨のんで居る。
甚三 エヽ、有り難い今のお情。
さく コレ、こちの人、昨日の質の二十兩。
甚三 娘が身の代三十兩。
さく 兩方合せて五十兩。
甚三 後五十兩の手當は。
ト顔見合す、ト主膳、以前の五十兩を抛り出す。
兩人 すりや、この金を我れ〳〵に。
主膳 ア、もう何時であらう。
兩人 エヽ。
ト拜まうとする。
甚三 早う行きや。

さく アイ。
ト唄になり、おさく、向うへ走り入る。ト引違へて、
橋がかりより、彌九郎、正八を先に立て、家來引連れ
て出る。
彌九 ソリヤ。
ト家來、バラ〳〵と入る。甚三郎、立廻りにて引退け
甚三 待つた、狼藉な。こりや、なんとなされまする。
彌九 慮外者、うぬ、手向ひか。
甚三 イヤ、手向ひは致しませぬが、さう云ふあなたは。
主膳 コリヤ、身共が相役。必らず粗相召されな。
甚三 すりやお役人。ハッ。
ト扣へる。
彌九 主膳どの、科人の女に繩打つしやれたか。
主膳 彌九郎どの、科人の女がこれに居る樣子。貴殿はど
うしてお知りなされた。
正八 その注進はこの正八、勘十郎どのが持つて居た金を、
騙り取つた女の恰好、彌九郎さまのお話しで、思ひ合せ
ば甚三が女房。形恰好が合うたゆゑ、引負ひの金催促が
てら來かゝつて、何もかも立聞きして注進したのぢや。
彌九 主膳どの、妹と云ふ血筋に引かれ、御詮議が手緩う

見えます。

ト奥より、肝煎り出る。

肝煎　最前から始終の樣子は聞いた。一體わりやマアおれをやつたのぢやな。サア、三十兩の立て金するか。娘を渡すか。どうするのぢや。

甚三　ソレ、三十兩の奉公人。

ト お糸を突き出す。

彌九　科人の女めは。

ト主膳、肝煎り、甚三を突き退け

主膳　盜賊捕つた。

ト お糸に繩かける。

皆々　これは。

主膳　騙りの女は逐電したれば、親子は一體、科人の出るまで、この娘は人質。

肝煎　ア、イヤ申し、その娘は三十兩に。

主膳　三十兩がなんと致した。人買ふは人買ひ、先年権若どのを害し、仕置に會うた惣太が同類か。

肝煎　イエ、左樣では。

主膳　但し、娘を庇ふは、この騙りの腰押しか。

肝煎　サア、それは。

主膳　何にもせよ、怪しい奴。ソレ、家來ども。

家來　ハツ。

ト寄らうとする。

肝煎　ア、イヤ、申し〳〵、人買ひぢやござりませぬ。これは又迷惑な。

ト頭掻く。

主膳　左樣でなくば、扣へて居らう。

彌九　ハヽヽヽ、金のかゝつた娘に繩かけ、この場を助ける情の間に合ひ。盜賊は甚三が女房。こなたの妹。見す見すの身替りだて。人違ひ召されては、お役目が立ちますまい。

主膳　ハテサテ、いらざるお世話。騙られたは手前が誤まり身替り立てうが人違ひ致さうが、申し譯は拙者一人、腹仕る分の事。餘の人の腹は借りませぬわサ。

彌九　口でばかり腹々と、貴殿は腹の掛替へがござるか。腹と思へど、切れば痛いものでござる。ハヽヽヽ。

甚三　主膳さま、何も申し上げませぬ。奉公代りの情の捕り繩。エヽ。

ト拜む。

主膳　騙りの女、召捕つたれに、彌九郎どの、最早歸りま

せうか。

彌九　イヽヤ歸られませぬ。騙りの詮議は落着しても、人殺しの詮議がござる。

ト懷より片袖を出し

勘十郎が殺された場所に、殘つてあつたこの片袖、

正八　御寮人樣の事を根に持つて、勘十郎どのを殺したは、要助に違ひはあるまい。

彌九　その要助こそ我れ〳〵が、尋ね探す松若丸。いま元服して宿直之助久春と名乘る由、引出して面縛せん。ソリヤ、家來ども。

家來　ハッ。

トかゝるを甚三郎、立廻りにて、見事に投げ退ける。正八、かゝるをポンと當る。

彌九　コリヤ、うぬ、慮外働らくか。

甚三　イヽヤ、留めまするがあなたのお爲。

彌九　ナニ、身共が爲とは。

甚三　下手人が違ひました。

彌九　でも、この。

甚三　片袖の紋は石持に桐の薹の紋、即ちこの袷の紋と同じ事。要助が紋は三升に川の字。

彌九　ヤア。

主膳　人違へ召されては、お役目が立ちますまい。貴殿はお腹の掛替へがござるか。腹切れば痛いものでござる。ハヽヽ。

トこの間、正八、いろ〳〵思案して

正八　オヽ、さうぢや。いま思ひ出した。如何にもその片袖は、われがのぢや。そりやこの間深川の八幡で、要助に着替へさした事を、おれがとつくりと見て置いた。矢ッ張り人殺しは要助に違ひはない。なんと動きは取れまいが。いま要助をば引出して、何もかも糺して見せう。まだ人殺しばかりぢやない、鯉魚の一軸を欲しがるので、大方素性も知れた。要助が本名は、大掾さまからお尋ねのある、宿直之助久春、今おれが引摺り出して、

ト行かうとするを、主膳、ポンと切る。

彌九　こりや、町人を

主膳　殺して苦しうござらぬ。

彌九　そりや又なぜな。

主膳　人殺しの吟味を糺すは拙者共許、差配する町人めは、以後の見せしめ、役目先の慮外は切捨て。

彌九　ムウ……御尤も。

主膳　家來ども、死骸片付けい。
家來　ハッ。
　　ト舁いて入る。
肝煎　どうやら雲行が惡うなつた。藁の出ぬうち、ドリヤ、お暇申しませう。
　　ト逃げて入る。
彌九　主膳どの、なんぼ科人の肩持たつしやつても、要助は松若丸、成人の名は宿位之助久春。
主膳　して、宿位之助久春と云ふ、なんぞ慥かな證據がござるか。
彌九　その證據はこの正八。
　　トあたりを見て
何を云うても死人に文言。エヽ、忌々しい。
主膳　證據もないに詮議呼はり。マア〱、扣へさつしやれ。
彌九　イヤ、扣へますまい。宿位之助でないにもせよ、要助は人殺し。
主膳　イヽヤ、人殺しはこの家の主。
甚三　自身白状いたす上は、下手人に相違ござりませぬぞ。
主膳　天晴れの白状。勘十郎が下手人甚三郎、腕廻せ。

　　ト主膳、甚三郎に繩かける。
いと　アヽ、コレ。
　　ト寄らうとするを彌九郎引付ける。奥より、要助・おくみ、出ようとする。
主膳　アヽ、イヤ、これサ、出まいぞ。イヤサ、娘、差出るな。例へ古主にもせよ、なんにもせよ、今は主君の仇敵、目に遮つては免されぬと、サア、免されぬ人殺しの甚三郎、騙り女房諸共に、淺山主膳が召捕つた。ナ、主膳が何もかも引取つて、サア、召捕つてナ、旅宿へ歸ればツイ解く……とくと詮議を糺すのサ。
彌九　すりや、貴殿がとくと詮議を。
主膳　糺してお目にかけう。
彌九　ハテナア。
甚三　お糸、コリヤ、さぞ手が痛からうなア。
いと　イヽエ、お前や母さんの爲ぢやと思へば、手の痛む事は、なんともござんせぬ。お前もわしも縛られて行たと、母さんが聞いてぢやなら、さぞ泣かしやんすでござりませうなア。
甚三　可愛や。
　　ト泣かうとして

氣遣ひすな。おれも云ふ譯立てゝ、ツイ戻つて來る。少つとの間おやと思うて、行て來いよ。ナア、申し、お役人樣、少つとの間でござりますなア。

彌九　何を馬鹿な。サア、主膳どの、歸りませう。

主膳　御同伴いたしませう。

彌九　家來、繩付き引立てい。

家來　科人、立たう。

ト奧より、要助、おくみ、出ようとする。彌九郎、見ようとするを、主膳、引き廻し、兩人、障子ピッシャリ。

主膳　家來、供せい。

ト唄になり、甚三郎お糸を引立てる。彌九郎、主膳、向うへ入る。後におくみ要助、一間より揉み合ひ出る。

要助　イヤ〳〵、放しや〳〵。

くみ　待つて下さんせ。お前はなんで死なしやんすぞいなア。

要助　これが死なずにゐられうか。人殺しの科を引受け、繩かゝつた甚三郎が志し、お糸、難儀、もう出ようかと思うても、情ある主膳が詞、一軸も手に入らぬ。先づ早まつては甚三夫婦が苦勞も、無足と扣へて居たが、例へ寶が手に入つても、親子の難儀ノメ〳〵と、見捨てゝ家が立てられうか。なんと生きて居られうぞいなう。

くみ　さうでござんす。道理でござんす。サア、そんなら、とても事に、わたしから先へ殺して下さんせいなア。

要助　なんと云やる。

くみ　死なば一緒と云ひ交したではござんせぬか。

要助　そんなら其方も死んでたもるか。

くみ　お前を先立てゝ、なんの樂しみに。

要助　三途の川も手を取つて

くみ　必らず渡つて下さんせえ。

ト唄になる。これより、兩人、いろ〳〵、死用意ある。此うち人音して、おさく、行燈に書置、いろ〳〵ある。權左衞門も出て來る。

さく　權左衞門さま、段々のお世話、お嬉しう存じまする。

權左　イヤモウ、あの百兩には及ばねども、大勢の人を遣ふ永樂屋權左衞門、外の手代の手前もあれば、見世の代物、只遣つたと云うては濟まぬ。最前の百兩で、一軸の質請け、引負ひも濟んだれば、要助を連れて去にたうござる。

ト云ひ、一軸を渡す。

さく　段々のお志し、この一軸の手に入つた事を、早う要助さまに。
權左　コレ、次手に娘にも逢はして下されや。
さく　お逢はせ申さいで、なんと致しませう。
ト連れ入る。要助、おくみ、これを聞いて灯を消し、探り出る。兩人、内へ入る。
權左　燈火が消えた。こりや暗がりぢや。
さく　どうして灯が消えたしらぬ。
ト云ひ〳〵、おさくは火打出して、カチ〳〵打つ。この紛れに、要助、おくみは危ふい仕組みにて表へ出て、向うへ走り入る。
權左　どうぞして火が付きませぬか。
さく　忙しなう云ひなさんな。火口が濕つて根ツからつく事ぢやない。
權左　娘よ、おくみはどこに居るやら、聲がせぬぞや。
さく　よう寐てござるか知らぬ。要助さま、こちの人、お糸や。
權左　マア、早う燈火を灯して下され。
ト云ふうち、火を灯し、行燈を見て
さく　ヤア、なんぢや、行燈に。

權左　ほんに、なんぢや書いてある……書置の事。ヤアヤア。
さく　コレ〳〵申し、この裏にも要助さまの手で、書置がござりまする。
權左　涙の隙に書き殘し參らせ候。
さく　我れら事より事起り、甚三郎親子が思はぬ牢舍。ヤア、……。
權左　生き長らへては義理立たず、先立つ不孝の程。
さく　科なき人に科をかけんより、所詮この身は亡きものと、覺悟極め申し候ふ。
權左　隅田川邊の藻屑とならば、一遍の御回向賴み上げ參らせ候ふ。
さく　一軸手に入り候はゞ、如何なる者にも世を讓り、吉田の後目相續賴み入り候ふ。
權左　返す〴〵も御免し、これのみ涙の種に候ふ。
さく　南無阿彌陀佛。
權左　めでたくかしく。これがなんのめでたい事か。
さく　そんなら娘は、わしが身替りに。
權左　娘は死にゝ行たかいやい。
さく　權左衛門さま。

權左　お内儀。
兩人　こりやマア、なんとせうぞいなア。
ト泣く。ジヤン／＼の鐘。表の乞食起きて
乞食　そんならおくみは隅田川へ……要助と云ふは宿位之助……先へ廻つて……さうぢや。
ト走り入る。
權左　コレ／＼、泣いて居る所ぢやない。隅田川の藻屑と書いてあるからは、一時も早う追ひ付いて。
ト尻からげる。
さく　さうでござんす。何よりは大切な鯉魚の一軸。
ト披き見て
ヤア、こりや眞赤な似せ物。
權左　ヤア、ほんに、こりや似せ物。すりや正八めが摺替へたか。
さく　コレ、それ云うて居る間に、お二人の命が危ない。
權左　隅田川へ追ひついて。
さく　行かしやんせ。
權左　合點ぢや。
ト權左衞門、向うへ走り入る。おさくも行かうとする。彌九郎、窺ひ寄り

彌九　ソリヤ、家來ども。
家來　やらぬぞ。
トおさくを取卷く。
さく　こりや狼藉な。なんとさしやんす。
彌九　吐かすな。要助と云ふは吉田宿位之助、主人常陸の大掾が腹心の病、討ち殺して手柄にする。ソリヤ、家來ども、家探しせい。
家來　ハア、。
ト皆々奧へ入る。おさく、行かうとする。
彌九　待て。
さく　そこどころぢやござんせぬ。
ト振り切り、いろ／＼立廻りあつて、兩人見得よくなると、奧より、家來バラ／＼と出て、動くなと、おさくを取卷く。返し。
造り物、眞中、大なる鳥居、兩方藪垣、すべて三圍稻荷の體。兩方に大稻村、隨分物凄き景色。舞臺前は砂場。橋がかりより泥船。大ドロ／＼にて、道具とまる。
ト向うより、序の忍賣り三人程出る。

ため　この三圍の中の鄕へ、京の問屋から蕊が來たと云うて來たゆゑ、早取りに行かうと思うて出たが、もう何時であらうかや。

この　また八ツ時分であらう。夜深な上に空雷鳴がゴロゴロと、アヽ、氣味の惡い事ぢやなア。

はつ　さうして、お姫樣は、どこへ行かつしやつたいなア。

ため　お姫樣に、後の三人連れが近付きぢやと云うて、殘つて話してぢやわいなア。

この　アヽ、また光つた。降らぬうちに中の鄕へ行かうぞや。

ト又ドロ／＼にて、皆々慌て、桑原々々と云うて、蕊籠を二つ程置いて逃げて入る。ト向うより要助、野分姫、おくみ、權左衞門と四人連れにて出る。

野分　宿位之助さま、好い所でお目にかゝりましたなア。

權左　娘、好い所で逢うたなア。

くみ　どのやうに云はしやんしても、わしや去ぬる氣はないぞえ。

權左　サア／＼、よいてや。最前からの話しで、要助の身の上も聞いて悔りした。さう云ふ事なら、これまで仕樣もやうもあつたもの。マア／＼、三人連れでこちの内へござりませ。

トこの模樣にて、本舞臺へ出る。

要助　權左衞門さまの志し、御寮人樣の志し、嬉しけれど、所詮この身は助からぬ人殺しの科人。人に難儀かけうよりは、潔う死ぬる覺悟。野分どの、わしが事は思ひ切り其方は國へ去んで下されや。

野分　また胴慾な事仰しやります。親の許した妹背中、あなたが死ぬると仰しやるを、見捨てゝどう歸られませう。どこまでもお供いたしまするわいな。

くみ　イエ／＼、要助さまにはわたしが付いて居りまする。お前は構はずと、國へ去なしやんせいなア。

權左　コリヤ娘、あなたは御大身のお姫樣、滅多な事云ふな。

くみ　イエ／＼、大事ござんせぬ。戀に上下の隔てはござんせぬわいなア。

權左　こりや、親の前で一向徐體いぢや。

野分　其方に大事がなうても、此方にある　自らは親々の許した云ひ號け、云はゞそもじは假の妻。

くみ　イエ、假の妻でも江戸づま、先に云ひ交したはわた

しぢやわいなア。

野分　先でも、萬でも、其方が殿様に添はす事はならぬわいなう。

くみ　イエ〳〵、わたしが添うて見せるわいなア。

野分　イエ〳〵、さうはならぬわいなう。

くみ　イエ、なります。

野分　ハテサテ、ならぬわいなう。

くみ　イヽエ、なります〳〵〳〵。

ト兩人せり合ふと、大雷鳴の音頻りに鳴る。皆々耳を塞ぎ、俯向いて、顔見合せ

権左　オヽ、今一つはひどい音ぢやあつた。サア〳〵、其やうに夜がなよつぴて、せり合うて居ても果しが無い。マア〳〵、こちの内へ戻つて、ゆつくりとせり合うたがよいわい。

くみ　アイ〳〵。サア、そんならこちの内へござんせ。

ト要助が手を取ると、野分姫、引き放し

野分　エヽ、厚かましい。お供してよくば自らが…旅宿へお供するわいなう。

ト手を取り、引ツ張る。おくみ引き放し

くみ　イエ、〳〵、わたしが連れまして去ぬるわいなア。

野分　イエ、自らがお供する。

くみ　イヽエ、わたしが。

ト兩方へ引ツ張る。

要助　アヽ、これは又、二人ながらはしたない。マア、爰を放しやいなう。

権左　マア〳〵、爰で放せやい。

ト権左衛門、おくみの手を放す。おくみ、取違へて権左衛門が手を取つて

くみ　イエ〳〵、わたしが。

ト権左衛門と顔見合せ

エヽ、お前ぢやないわいなア。

ト突き飛す。この間に、野分姫・要助に取りつき、お胴慾ぢや〳〵と云うて居る。この模様のうちに大雷鳴る。野分姫、要助にしがみ付いて居る。おくみ、権左衛門に取りついて居る。稲村より、法界坊、大欠伸して出る。

法界　アヽ、グッタリと寐入つて居るものを、今の雷めが起しさらした。さうして、耳の端で、なんぢや、ぽい〳〵ぽいと、エヽ、業腹な。ドレ、莨なとのんでこまさう。

ト摺火打ちを出し、カチ〳〵と打つ。四人、顔見合せ、

氣味惡さうなこなしにて

權左　雷鳴ばかりかと思や、なんぢや氣味の惡い。どうやら雨も降つて來さうな。サア、お二人ながら、こんな暗がりでお話しなされうより、マア、私しが所へお出でなされませ。サア、娘もおぢや。

　　ト皆々立つ。

法界　ハア、。うまいな〳〵。つく二人にびり二枚、心中かと思や、内へ行かうとけつかる。わいらはぼんやがもう寐たが、どこまで行くか、送つてやらうかい。

權左　イヤ、それには及びませぬ。サア、彼れこれのないうち、お二人さま、おくみもおぢや、

　　ト手を引いて行かうとする。法界坊、立ち塞がり

法界　なんぢや、おくみぢや。

　　ト透かし見て

　オヽ、ほんにおくみぢや。

權左　さう云ふこなたは。

法界　南無地藏の法界坊ぢや。

皆々　ヤア、。

法界　お前は一昨日逢つた爺様ぢやの。いゝ所で逢つた。なんと物は相談ぢやが、あの娘、わしにおくれんか。さふすると可愛がる。お前、おれが男にして大切がる。どうぢや〳〵。

權左　イヤモウ、志しは嬉しいけれど、緣組みの事は親のまゝにもならぬもの、例へおれが得心しても、ナア娘。

くみ　さうでござんす。誰れが又、あのやうな乞食坊主と二夫になるもので。嫌でござんす。嫌ぢやぞへ。

權左　アレ、あの通りに云ふに依つて、マア、緣がないと思うて。

法界　おきあがれ。なが〳〵云うて居れば、つき上がりのした。乞食坊主ぢやないぞ。今に元服してお侍ひ樣におなりなさるゝ、果報いみじき名僧ぢやぞやい。おくみ、なんぼう否の應のと吐かしても、この法界坊さまがお惚れなされたら、鯨に鯱、鱶が見入つたと思うて、得心して應と云や。否と云や、其まゝには置かんのぢや。

　　ト此うち權左衛門、皆々に目交ぜにて、行けと云ふこなしする。要助、野分姬、おくみを連れ、權左衛門、後よりソロ〳〵花道へ行かうとする。法界坊、しやべつて居て、よき所にて、皆々を見付け、

法界　コリヤ。

　　ト皆々「ハイ、」と坐る。

どこへ失せさらずのぢや。

權左　イエ、ちつと。

ト逃げうとする。大雷の音にて、皆々動かれぬこなし。

法界　ハア、、こいつはよいわい。雷鳴さん、おれを贔屓ぢやさうな。隨分役奴等が動かれぬやうに、ひどう鳴つておくれなされませや。ア、、有り難い〳〵。

ト云ひながら、おくみ、野分姫が手を引ッ張り、無理に本舞臺へ連れて來る。要助、權左衞門とこなしにて戻る。法界坊、姫おくみ二人を引据ゑる。權左衞門、寄らうとするを法界坊、唾吐きかける。法界坊、また、野分姫を見て、ニツと笑ひ、

此奴も美しいものぢや。そんなら最前のぼい〳〵は、わいらぢやな。エ、、けたいな。あの二才め、巧い事ひろぐな。どうぢや、おくみ、ウンと云やいなう。

くみ　エ、汚ない、嫌ぢやわいなう。

ト野分姫、そろ〳〵逃げうとする。

法界　姐さん、待つた、どこへ行かしめす。

野分　イエ、わたしやちよつと。

ト逃げうとするを捕へ

法界　コリヤ、チツとして居い。われにも用がある。

ト權左衞門、この間に尻をからげ、身拵らへする。

野分　自らには何の用がある。

法界　ハア、…此奴は昆布のやうな名ぢや。コリヤ、自らよ、喜べ。われにも惚れてやるワ。これで双方依怙贔屓なし。嬉しいか〳〵。

權左　エ、、おのれを。

ト法界坊に摑み付く。

法界　ひんこめ、何さらしやがる。

ト突きこかす。權左衞門、起きて又かゝる。捻ぢ付けるを、要助、かゝらうとする。

權左　コレ要助、爰構はずと、二人を連れて、この間に早う早う。

ト三人逃げうとする。

法界　吉田宿直之助待て。

要助　ヤ、なんと。

法界　うぬが本名は宿直之助と云ふか。

要助　エ、。

法界　しめた。常陸の大掾さまより、お賴みの松若丸、引ツ縛つて連れて行たら、褒美には還俗、侍ひになる約束。

氣に入らずと鰻玉子の暴れ食ひ。おくみに本妻、自らは
お妾。どうぢや、二人とも嬉しいか。
兩人　嫌ぢや〳〵、嫌ぢやわいなう。
法界　エヽ、しぶとい引裂かれめら。こりや酷い目見せに
やなるまいわい。
　ト要助、こなしあつて
要助　さては伯父大掾よりの廻し者よな。宿位之助と知つ
たらば、われを。
　ト脇差にて、法界坊に切りかける。法界坊、かい潜つ
て直ぐに要助が手元を捕へ
法界　コリヤ、何さらす。わいらが手くさいでゆく坊主ぢ
やない。こりやマア一體われ、おれを切らうと思つて、
ひこつきやアがるのか。おれ樣を切らうと思うてひこつ
くか。アノおれ樣を。
　トこれなりにて振り廻す。要助、手の痛むこなし。
ゆくまい。わたしや切れまい。まツことゝ切りたか切らし
てやらう。誰れがよからう。うぬにせうか。
　ト野分姫を切らうとする。野分姫、慄ふ。
要助　サヽ、野分どの、早う逃げて下されいなう。
野分　ぢやと云うて、あなたを置いて。

權左　うぬ、妾を放し居らぬか。
　トかゝるを
法界　うぬから先へくたばり居らう。
　ト權左衛門に持ち添へたる刀にて切る。ウンと反る。
くみ　ヤヽ、父さんを。
　ト寄るを、法界坊、おくみを當てる。野分姫、これは
と寄るを又これも當てる。權左衛門、いろ〳〵あつて
權左　こりや、おのれ、切つたな。
法界　御意の通り。お年寄りの最前からの御苦勞、餘り見
る目がお笑止さに、わたしが慈悲でお殺し申して上げま
する。
權左　エヽ、おのれはなア。おれが命はいとやせぬけれど、
定めしおれが死んだ後で、娘も殺すであらう。おくみ、
ちやつと逃げてくれい、娘やい。
　ト起きる所を右の腕を切る。權左衛門、ウンと反る。
要助、振り放して又切りに行くを、手早に縄かける。
要助　こりや、おれを何とする。
法界　騒ぐな〳〵、悪いやうにはせぬ。ヂツとして居い居
い。
　ト權左衛門、苦しみながら起き上がり。

權左　こりや要助どのを。

法界　御叮嚀にお縛り申して置きまして、これから二人の衒妻を〆めるのぢや。これを未來の土產に、心よう死になされ。

權左　エヽおのれを、

ト寄らうとするを、左の腕を切る。權左衞門、ウンと反る。

法界　サア、これからぢや。ヤイ、青二才め、よう二人の女子の衒妻を取りさらしたなア。サ、宿位之助と有やうに吐かせ。

要助　エヽ人非人め、知らぬわいやい。

法界　早う吐かせやい。云へやい。ほざけやい。吐かさにやアいつそ、カウ／＼／＼。

ト背打ちに打ち据ゑる。

サア、どうぢや、吐かせぬか。

要助　エヽ覺えない身を非道の責め。知らぬ事はいつまでも、知らぬわいやい。

法界　エヽしぶとい毛野郎。よいワ。ツイやちよつとでは吐かすまい。ドリヤ／＼。

ト繩の端を稻村へ縛り付け

しやべり出りやア惡い。

ト襤褸の袖をちぎり、猿轡にはませ、轉けて居るおくみ野分姫を見て、ニツタリと笑ひて立寄り

法界　焦るゝ君が寐姿、これから月花と樂みかけう。

ト思ひ入れあつて

待つたりや。得て斯う云ふ所へ、藤川八藏によう似た男が出て來て、おれを泥へ投げ込み、此奴等を連れて、構はずとござりませ、チヨン／＼の幕ぢや。それでは狂言は詰まつても、おれが詰まらぬ。甚三めがうせぬうち……よいワ／＼。

トこれより、砂場を鮑貝にて掘り、穴を拵らへるこなし。權左衞門、よろぼひながら起きて

權左　早う娘、逃げてくれやい。おくみや、要助どのいなう。

法界　此奴はまだ死なぬワ。ハテ、根のよい親仁めなア。ヤア、德利子は見たが、德利親仁は今が見初めぢや。とつくりと御覽じませ。見るも後生、見らるゝも後生、アア、親仁ぢや／＼。

ト云ひ／＼穴を掘り、よろしく砂を繕ろふ。權左衞門よろぼひ寄り

權左 エヽ、おのれを喰い付いてなりと。

ト かゝるを切り倒し

法界 苦しくばもう死ね。南無妙法蓮陀佛。

ト切り倒す。權左衞門、死ぬる。

先づ一疋は片付けた。さてこれからぢや。思へばこの自らも美しい顏ぢや。此奴からいがめうか。おくみにせうか……一に二に達磨どの、夜も晝も赤い頭巾かつぎ通した。ハヽア、自らめに當つた。此奴も捨てられぬ。ちよつと當つて。

トよろしくこなし。大雷の音に、野分姫、突き退け、起き上がりて

野分 エヽ、穢らはしい。何をするのぢやぞいなう。

法界 エヽ、うぬも口果報のない奴ぢやなア。

野分 さうして、宿位之助さまは、どうしやつたぞいなう。

法界 邪魔になるゆゑ引ッ縛つて置いたわやい。

野分 さア云や其方を。

ト懷劍にて突きかゝるを叩き落し、野分姫を切る。野分姫、苦しきこなし、いろ／＼あつて

こりや自らを殺すのか。いま死んでは、とうも宿位之助さまと女夫になる事がならぬ。死にともない／＼わいなう。

法界 オヽ、道理ぢや／＼。コリヤ、自らよ、われが不便さに、ほんまの事を云うて聞かすワ。有やうはわれが惚れて居る毛二才が、おくみと女夫になる邪魔になるわれぢやに依つて、殺してくれいと頼んだから殺すのぢや。

ト要助、頭を振り、物の云はれぬこなし、いろ／＼あり

コリヤ、恨みがあるなら宿位之助に云へ。おりや知らぬ。南無阿彌陀佛々々々々々々。

ト扶る。また雷の音、靜かに鳴る。

野分 エヽ、恨めしい久春さま、これ程思ふこの野分を、ようも／＼殺さしやんす。これも誰れゆゑ、おくみゆゑ。生き替り死に替り、この恨み云はいで置かうか。

法界 オヽ、可哀や、その通りに恨みを云へ。

野分 エヽ、恨めしい。

法界 道理ぢや／＼。

ト扶り殺す。其うち雨車頻りに鳴る。

たうとう降つて來た。オヽ寒む。更けた加減か、ぢいわりとなつて來た。ドリヤ／＼。

ト野分姫が上着を脱がし、襤褸の上へ着て

オヽ、又おかひこは濡いワ。サア、これからおくみぢや。
ト此うち、おくみ、雨にて正氣になりて
くみ　エヽ、穢らはしい。さうして要助さんを、どこへ連れて行たぞいやい。
法界　要スな。要ス事は瀧村と相住ひしてござるわい。
トおくみ、寄らうとするを引退けて
まだそればかりぢやない。これ見い、おれが云ふ事を聞かぬゆゑ、自らめもこの通りぢや。
トおくみ見て
くみ　ヤア、お姫樣を。
ト慄ふ。
法界　なんと見たか。云ふ事を聞かぬと、いつでもこの通りぢや。よい態な。又これにかゝらせ給ふは、手向ひして殺らされた德利親仁でござる。近う寄つて御拜あられませう。
トおくみ、權左衞門が死骸を見て
くみ　ヤア、父さん、誰れが切つた／＼。
法界　腕立てさらすゆゑ、おれが切つた。
くみ　ヤア。
ト泣き慄ふ。

法界　うぬもピンシヤンすりや、いつでもこの通りぢや。サア、尋常におれが心に隨ふか。
くみ　サア、それはな。
法界　嫌と吐かしやア要助めを。
くみ　ア、コレ。
法界　殺さうか。
くみ　サア。
法界　サア／＼／＼。
トおくみを引き廻す。おくみ、ヂリ／＼と廻り、穴端へ寄る。
法界　コリヤ／＼、そこは穴ぢやわやい。
ト手籠めにする。雨頻りに降る。
くみ　アレエ／＼。
ト云ふうち、法界坊、いろ／＼ある所へ、向うバタバタにて、おさく、俵をかぶり、走り出て、法界坊に行き當る。
法界　エヽ、どいつぢやい。
さく　お免されませ／＼。氣の急く者でござりまする。お免しなされて下さりませ。
ト云ひ／＼透かし見て

明治十四年九月新富座上演

中村芝翫の法界坊　九世市川團十郎の甚三

おくみさんぢやござんせぬか。
くみ　ヤア、おさくさんか。遲かつた〳〵わいなア。
ト取りつき泣く。
さく　して、要助さまは、どこにござります。
くみ　要助さまは口を縛つて、稻村に縛り付けてあるわいなう。まだそればかりぢやござんせぬ。父さんがわしらに近付いて、去ぬると云うて居やしやんしたを、あの法界坊が、父さんを切つたわいなア。
さく　ヤア、。
ト恟りして、野分姫が死骸に行き當り
こりや、お姫樣も殺してある。そんなら野分さまも
くみ　法界坊が殺しくさつたわいなア。
さく　さうして、その法界坊とやらは、どこに居りまする。わたしが參じまするからは、蹤い付いてもその坊主めを。
ト云ひ〳〵法界坊に行き當り
こなさん、誰れぢや。
法界　おれか。われが望みの法界坊ぢや、
さく　エヽ。
ト大きに恟りして、おくみを圍うて禦うて見せる。
法界　ヤア、、えらい奴がうせたかと思うたら、女郎さいめ。此奴も一疋殺さにやならぬ。ア、、また殺生せにやなるまい。コリヤ、見い。邪魔になる親仁めもこの通り。次に自ら姫もこの通り。また此の上に要助めも、打ち殺して。イヤ、此奴は殺されぬわい。白狀させて金儲けぢや。おれが云ふ事聞かぬと、おくみめも打ち殺す。うぬも怖か、ちやつと逃げい。邪魔すると、こいらがよい手本ぢや。マア、ざつと筋はこんな物ぢや。
さく　エヽ、聞けば聞く程大惡人。エヽ、こんな時にこちの人が居やんすりや……ようござります〳〵。わたしが一走り呼んで參りませう。
くみ　それでも甚三どのは牢へ。
さく　しい〳〵。
ト目交ぜする。
法界　なんぢや、甚三が牢へ入つたか。ア、、よい手番ひの。この間おれをどえらい目に會はした罰は早いものぢやなア。甚三が牢へ入つたら、さらば一服下されう。
さく　何よりはマア、要助さまを。
ト要助が繩を解く。要助、猿轡を取つて
要助　おさく、よう來てたもつた〳〵。コレ、姫は殺されたわいなう。

さく　刀が欲しい〳〵。
　ト身を揉み泣く。
法界　ヨウ〳〵、泣き様〳〵。サア、二才め、宿位之助か有やうに吐かせ。
要助　知らぬわいやい。
さく　そんなお方ぢやない。早う其方は去にやいなう。
法界　嫌ぢやわいやい。
さく　去んで下されいなう。
法界　ならぬわいやい。
さく　どうぞ去んで下されいなう。
法界　退けやい。
さく　アレエ〳〵……この間に早う。
　ト両人が手を取り、逃がさうとする。法界坊、引き戻し、要助とおくみを一緒に引きつけ、おさくを捻ぢ付け
法界　こなとち女郎めは太い奴の。金になる毛二才を、逃がさうとしたがよいか。これがよいか〳〵。
　トおさくを酷う捻ぢつける。
さく　サア〳〵〳〵、腹が立つなら、わしをどのやうになりともして、どうぞお二人を助けて下さんせ。法界坊さんとやら、コレ、拝むわいなア〳〵。
法界　やかましいわい。まだ頭は坊主でも、佛は嫌ひぢや。うぬに拝まれて三文にもなるか。それよりは褒美をズッシリと。マア、その二才を。
　トかゝる。立廻りにて、おさく引き廻す。法界坊、何なとおさくを突きとばす拍子に、懐より一軸落ちる。
要助　ヤア、その一軸は。
　ト取らうとするを、要助を引退けて、法界坊、ちやつと取る。
法界　これが欲しがる正眞の鯉魚の一軸。
三人　それを。
法界　寄つたら引裂くぞ。
三人　ア、コレ。
法界　サア、宿位之助か。有やうに云へ。
三人　サア、それは。
　トこれより附け廻しになる。
法界　おくみをおれにくれるか。
三人　サア、それは。
法界　嫌と云や引裂かうか。
三人　サア。

法界　サア〳〵〳〵。
　ト付け廻す。よき所にて、最前掘つたる穴へ踏みかぶり、おさく、法界坊が持つて居る一軸を引ッたくり、最前の刀にて、無性に切る。法界坊、苦しむ。要助、おくみ、喜ぶ。おさく、無性に切る。
さく　コレ、お二人樣。隅田川の船場に、主の妹おかんさんが先へ行てござる。この間にちやつとお出でなされませ。
要助　でも、大掾どのゝ討手の者に逢はゞ。
　ト　おさく、あたりを見廻し
さく　幸ひの葱籠、葱賣りと姿をやつし、隅田の船場へ、早う〳〵。
要助　合點ぢや、とは云ふものゝ、野分姫が不便の最期。
くみ　父さんの果敢ない妻。
さく　コレ、うろたへて怪我のないうち
要助　そんならおさく。
さく　お二人樣。
要助　おくみ、おぢや。
　ト要助、行かうとするを、寢鳥、ドロ〳〵にて、野分の聲にて

野分　宿位之助さま待つた。おくみ待ちや。エヽ、羨ましい二人連れ。妻と定まる自らを、よう胴慾に殺さしやつたなう。恨みの數々、安穩で添はさうかいなう。
　トどろ〳〵にて、兩人、苦しみ、バツタリ轉ける。
さく　申し、お二人樣。
要助　サア、野分の聲にて呼ぶやうで
くみ　おようつとも行かれぬわいなう。
さく　さうぢや。吉田家の鯉魚の一軸、暗夜に光を増し、陰邪を拂ふ稀代の掛け物。
　ト開く、ヒヨン〳〵にて、後の鳥居、兩方の藪垣、皆皆絹張りにて、灯入り燈籠にて、明るうなる仕掛けなり。
要助　ヤア、俄に光明輝いて、身心ともに自由になるは。
さく　掛け物の奇特。
　トこの明るうなりしに、法界坊、心付き
法界　その掛け地を。
　トかゝるを、おさく、ボンと切る。見事に轉ける。
さく　この間に早う。
要助　合點ぢや。
　ト向うへ走り入る。一軸を納める。後より、燈籠暗う

なる。野分が斉替へ、追ひかけ入る。法界坊、起きて

法界　ヤア〳〵、おくみと云ひ、要助めを取逃がした衒妻め、ようも切り居つたな。

さく　ようお姫樣や權左衞門どのを殺したなア。

法界　惚れて居るおくみを逃がした代り、うぬを打ち殺す。覺悟せい。

さく　さう云ふ其方を。

　ト切りかけ、法界坊、刀を引ッたくる。

さく　アレエ〳〵。

法界　爰へ來い。ぶち殺す。

さく　危ないわいなう。

法界　爰へ來いやい。

　トいろ〳〵あろうち、おさく、野分が懷劍に蹴つまづき、懷劍を取る。ト法界坊、おさくを引付ける。直ぐに法界坊が胴腹を懷劍にて突き通す。法界坊、苦しむ。この立廻りのうち、チョン〳〵にて、本雨頻りに降る。兩人、ひた濡れの立廻り、いろ〳〵あつて、法界坊、死ぬると、おさく、よろしくあつて

さく　お姫樣の敵、權左衞門さまの仇、思ひ知つたか。

　ト切り倒し、俵を着て、向うへ行かうとする。ト法界坊が死骸、ムックと起きて

法界　女め、待て。

　ト大ドロ〳〵、大雨頻りに降りて、おさく、遲理引きにて、いろ〳〵あつて、好き所にて坐ると

さく　ヤア、法界坊どの、まだ死なずかいなう。

法界　魂は冥途に赴けど、戀しと思ふおくみゆゑ、魄はこの土にとゞまつて、迷うた〳〵。

　トおさく、こなしありて

さく　掛け地の奇特。

　ト一軸を開くと、チョン〳〵、後の道具パッと明ろうなる。法界坊、泥船へバッタリと轉ける。おさく、向うへ走り入る。すべて途端よろしく

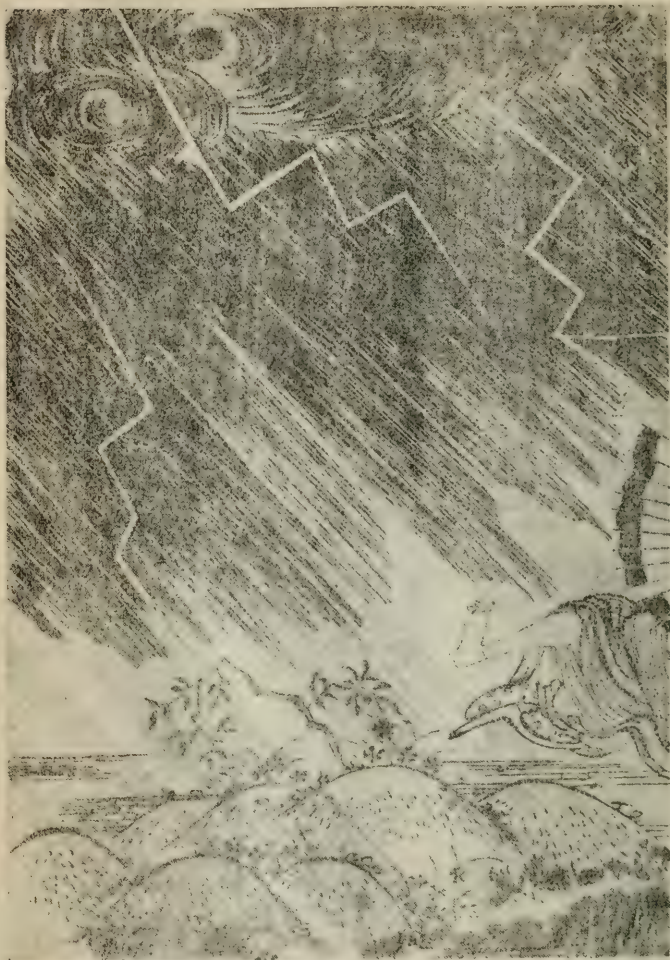
幕

大切　隅田川の場

唄淨瑠璃「垣衣戀寫繪」鈴木萬里

役名――法界坊野分姫の亡靈。道具屋甚三　實ハ奴鐘平。永樂屋娘、おくみ。同手代、要助　實ハ吉田宿位之助松若。甚三女房、おさく。澤田彌九郎。

根本「百恭景浅茅原」挿絵

三圍堤の場

直木權平。

造り物、向う黑幕。在郷唄にて、幕明く。

ト直木權平、胸當、脚絆にて、飛脚提灯、狀箱を首にかけ、菅笠にて、出て來る。橋がかりより、澤田彌九郎、家來を連れ出る。兩方より出て、本舞臺にて、顏見合せ

權平　澤田彌九郎さまおやござりませぬか。

ト笠を取る。

彌九　其方は直木權平、見れば急ぎの體ぢやが、何ゆゑのお飛脚に參つた。

權平　御主人百連公より御用の趣き、御披見あられませう。

ト狀箱を渡す。彌九郎、披き見て

彌九　ナニ〳〵。花園中納言の姫野分姬、宿位之助と云ひ號けの縁を以て、禁廷へ奏聞を遂げ、吉田の跡目相續の儀、宿位之助に御免なされ候ふ間、この上は見付け次第、宿位之助を討取り、寶の一軸を持つて上京いたさるべく候ふ、月日、澤田彌九郎どの、百連判……すりや、吉田の跡目は叶はじとな。

權平　して、宿位之助が隱れ家、心當りがござるかな。

彌九　その儀に於て油斷はない。即ち法界坊と云ふ者に申し付け、宿位之助が在所知れたらば、釣り鐘を合圖に、我れ〳〵討手に向ふ手筈ぢやわい。

權平　天晴れの手段。して、その釣り鐘は何所にござるな。

彌九　當所隅田川のほとりにあれば、其方も油斷いたすな。

權平　畏まつてござります。

彌九　まだ云ひ聞かす仔細もあれば。

權平　あなたの旅宿へ。

彌九　權平、參れ。

ト唄になり、上の方へ入る。チョン〳〵にて、辻當引いて取る。黑幕切り落す。ト口上出て、これより道行景事、夢の俤と詳しく役割あり、いよ〳〵左樣に御覽下さりませう、ト口上終る。前彈きになる。

造り物、向う一面の浪幕、蛇籠の見得よろしく、眞中に苫船一艘あり、上の方に櫻の大木、これに釣り鐘、吊りある。よき所に太夫座。

〽名にしおふ、武藏の國と下總の、中に流るゝ隅田川、瀨戸の白浪しげくして、霞を分くる春の日に由なき人の事問はゞ、有りのまに〳〵都鳥、それに昔の業平の、古

き名所も名にふり　、所がらたる水馴れ棹、これも世渡る慣ひぢや。

ト文句留まる、六ツの鐘鳴る。ト船の苫を上げ、甚三郎、船頭の形にて居る。

甚三　今の鐘は明け六ツ。宿位之助さまが、もうこれへお出でなさるゝ時分ぢやが、但しおれが爰に待つて居るとは御存じなく、もし脇道へ……イヤ〳〵、この渡し場より外へ、よもやお出でなされう筈もない。ハテ、どうしたものであらうぞ。

ヘ案じ入つたる折柄に、危ふき場所をやう〳〵と、遁がれおさくは氣も張り弓、走り爪づき顏と顏。

トおさく、向うより、走り出て、甚三郎と顏見合し

甚三　女房どもか。

さく　甚三どの、要助さまの科を引受け、牢舍さしやんしたお前が、爰にはどうして。

甚三　主膳さまの情で、繩かゝつたも表向き、内へ戻つて樣子を見れば、お二人の書置、南無三方とこの隅田川へ横ぎれに先へ廻り、渡し守のこの形。して、お二人は。

さく　サア、わたしもその書置が見ると其まゝ、後を慕うて來る道、法界坊に出逢ひ、眞の一軸を取返し、お二人樣を葱覓りと姿を替へ、先へ落しましてござんわいな。

甚三　すりや、誠の一軸は手に入つたか。エヽ、忝ない。さりながら、心元ないはお二人樣。もし途中で敵に出合ひ、御難儀な知れぬ。其方はこの所に待ち受け

ト囁き

合點か。

さく　そんならお前は片時も早う。

甚三　例へば道は違ふとも

さく　忠義の道は只一筋。

甚三　氣遣ひせずと、待つて居や。

ヘ忠義一圖の一筋道、飛ぶが如くにかけり行く。

ト甚三、向うへ入る。

さく　嬉しや〳〵、こちの人が行かしやんしたからは、例へ敵に出合うても千人力。この上は爰に待ち受け、お供するが肝要。さりながら、この姿では。

トあたりを見廻し

幸ひの簑笠、渡し守と樣を替へ……さうぢや〳〵。

ト船へ乘る。

ヘ戀に心をやつせと云うた、その言の葉を忍ぶにはよき、徒歩や裸足で人目の關を、葱覓る身は斯うもあらうかと

小褄をしやんとどり／＼さま／＼、葱めさんか川千鳥・ちどり鴎の名所なる、隅田川原に着きにけり。

ト この文句にて、要助、おくみ、好みの形にて、葱の籠を持ち、向うより出て、本舞臺へ來る、三人顔見合せ

さく　お二人様、待ち兼ねて居りましたわいなア。

要助　さう云ふはおさく。合點のゆかぬはその姿。

さく　詳しいお話しは道々、夫甚三どの。兄様の情で、縄目を助かり、只今あなた方のお迎ひに、行かれましてござりまする。

くみ　そんなら甚三どのは

要助　助かつて戻りやつたかや

さく　この上は夫が歸られ次第、一緒にお供申しまする。必らずお氣遣ひなされますな。

くみ　これに付けても、お姫様の御最期。

ト 要助、袱紗を出し

要助　筐こそ今は仇なれこの一首。又とだに思はぬ仲の別れ路は。

さく　詞残りて名をや恨みん。」

要助　この筐の袱紗を煙になさば、せめては姫か菩提の爲。

ト 船の篝の中へ袱紗を燻べる。

三人　南無阿彌陀佛々々々々々。

ト 回向をする。この時、掛け煙硝立つ。ドロ／＼にて三人「ーッン」と悶絶する。

〽白浪の雲かあらぬか妄執の、姿を爰にあり／＼と。

ト どろ／＼寢鳥にて、花道へ女形姿、同じ出立ち、葱賣りの形にて、法界坊の役人、出て來る。

〽同じでたちの優姿、わしか在所は京の田舎の片ほとり、八瀬や小原や芹生の里、世を忍ぶゆゑ姫御前の身で褄からげ、葱いらしやんせんかいなア、買はんせんかいなア、世を忍ぶしのぶの亂れ限りなき、恨みの刃に情なや、浮みもやらでその人の、連れ添ふ事の恨めしう、うつらうつらと迷ひ來て、小舟間近く立寄れば。

ト どろ／＼にて、三人ともに氣付きたるこなしありて

さく　お心が付きましたか。

要助　氣は慥かなわいなう。

さく　おくみさん、怪我はなかつたかえ。

くみ　イエ／＼、わたしより要助さん、お前、怪我はないかえ。

ト 此せりふのうち、おさく、右の女形とおくみを見て、

三世坂東三津五郎の双面の亡魂

恂りし
さく　申し殿様、たつた今まで一人のおくみさんが、二人になりしやんしたが、こりやマア、どうでござりますぞいなア。
ト要助もよく／＼見て、同じく恂りして
要助　ほんになう、此方もおくみ、此方もおくみ。ハテ、合點のゆかぬ。
さく　申し、おくみさん。
くみ　なんでござんすえ。
さく　お前がほんのおくみさんかいなア。
くみ　アイ、わたしをのけて、外におくみがあつてよいものかいなア。
さく　そんなら、また此方のおくみさんはえ。
トこちらの女形に問ふ。
亡靈　アイ、わたしをのけて、外におくみがあつてよいものかいなア。
さく　がそれ、こりやとんと、どちらがどうぢや知れませぬ……オヽ、よい事を思ひ出した。いつやら深川で、舞子さんの會の時、娘御達の中で、お前が荵賣りの振りをさしやんしたが、それ覺えて居やしやんすかえ。

亡靈　アイ、それを忘れてよいものかいなア。
さく　そしたら、その時の荵賣りは、ちよつと見たいわいなア。
亡靈　アイ、その時の荵賣りは、ちよつと小褄を。斯う取つて。
〽わしが在所は京の田舍の片ほとり、八瀬や小原や芹生の里、世を忍ぶゆゑ姫御前の身で褄からげ、荵いらしやんせんかなア、買はんせんかいなア。
ホヽヽヽヽ。
さく　ほんに、どうでもほんまのおくみさんぢや。そんなら又、此方のおくみさん、お前、殿様と馴染めの初めを、覺えて居やしやんすかえ。
くみ　おさくさんとした事が、大切の殿御と馴初めを、なんの忘れてよいものかいなア。
さく　マア、そんならその話し。
みく　サア、その話しは、恥かしい事ながら。
〽過ぎし彌生の月初め、目見得初めと手を突いて、ふつと見合す顔と顔、いとしらしうて可愛らしうて、又とあるまい殿御振り、心で惚れていつしかに、桃と櫻の品比べ、雛の遊びの酒事に、わたしがさいた杯に、紅が付いたと戯いで、あじやら変りの妹背事、派手な噂が嬉しう

て、人の譏りも世の義理も、いとひはせじと取付いて、彼方へ引けばこなたへ縺れ、縺れつ縺つれつ糸柳、風に揉まるゝ風情なり、おさくはそれと見るよりも、中を隔てゝ立寄つて、此方も〳〵蕾の花、梅の若木の香にめでて、見惚れて居さんすその中へ、内の子がいの太郎作が、阿房の癖に嫉らしい、幼な遊びをかこつけて、めんない千鳥、かくりよばア。

トよろしくあつて、亡靈、宿位之助おくみ二人を兩方留め、姫の聲にて

亡靈 宿位之助さま。(姫の聲にて)

同 おくみどの。(法界坊の聲にて)

〽人の恨みの深くして、刃にかゝりし身の因果、生きてこの世にあるならば、いとし殿御と添ひもせう。可愛ゆい女と寐んものを。(法界坊の聲)

〽なまなか出家を遂げし身は、苦患に誘はれ法心の、中立を忘れしも、皆誰れゆゑぞおくみどの、わたしが迷ひは松若さま、幼な馴染みの云ひ號け、末を願ひの甲斐もなき、思はぬ人に三瀬川、胸に漲ぎる思ひの淵、淺いは縁、深いは恨み、人をも世をも、思ひ思はじ只その人こそ、憎し辛し、情ないぞとかこち泣き、かつぱと伏して泣き居たる。

さく こりやモウ、どちらがどうやら、とんと知れぬ。宿位さま、どうしたらようござりませう。

要助 どうと云うて、とんと仕樣がないわいの。

トこの間、おさく、思案して

さく ほんに、好い事を思ひ出しました。最前の熱賣りの後で、そう〳〵が踊りがあつたが、それ覺えて居やしやんしたかえ。

兩人 アイ、それもよう覺えて居るわいなア。

さく そんなら、わたしが踊りの目利き。

兩人 サア、その踊りは。

要助 ソレ。

兩人 ソレ。

三人 ソレ〳〵〳〵。

さく ドリヤ、あなた方と一緒に、さらば見物いたさうか。

ト鳴り物にかかり、三人、身拵らへ。おさく、始終合點のゆかぬこなしにて扣へる。よき時分に

〽衣紋坂、今宵廓の逢瀬の首尾も、通ふ五百崎駒形や、千鳥がもとのこたへがあらば、白鬚さんへ願かけて、ちよつとお顏を三圍ならば、それこそほんに首尾の松。そ

れそれ〳〵もさうかいなア。

ト右のうち、踊り二くさりあつてとまる。

さく　こりやモウ、どうも合點がゆかぬ。最前よりいろいろと試し見るに、女子の形は顯はせども、自然と備はる男の障化。さては疑ふ所もなく、お姫樣と法界坊の、二人の死靈の障化ぢやよなア。

要助　ヤア、。

ト慄ふを後に圍ひ、右の一軸を出し

さく　怖い事はござりませぬ。如何なる死靈惡靈も、立ち所に退ける奇瑞は、即ちこの一軸。怨敵退散々々々々。

ト一軸を開く。ドロ〳〵にて亡靈、苦しむ事いろ〳〵あつて

亡靈　娑婆の業因深きゆゑ。

〽あら恐ろしや苦しやな、娑婆の因業深きゆゑ、思はぬこの身に苦患を受け、共に奈落の底までも、引立て行かんとせしかども、觀音薩埵の誓ひに恐れ、我れと我が身を責めに責め來る冥途の使ひ、かげもよしなや恥かしの、もりて餘所にや白露の、見えつ隱れつ姿は消えて失せにけり。

トこの間薄ドロ〳〵にて、亡靈、いろ〳〵苦しみながら鐘の中へ入る。この時、本釣り鐘の音殿しく鳴る。皆々驚ろきよろしくありて

要助　さては疑ふ所もなき、二人の死靈にてあつたよな。

さく　今の不思議を見るからは、ちよつとも爰には置きまされぬ。隅田川を渡つて、夫の歸りを待ちませう。

くみ　兎角よいやうに頼むぞえ。

さく　マア、早う船へお越しなされませ。

ト此うち、奥にて、早太鼓を打つ。おさく、キッとなつて

ムウ、合點のゆかぬあの太鼓は、川を隔てゝ合圖と覺しく、亂調に打ち立てると云ひ

ト川の向うを見ろこなし。兩人、慄ふ。おさく、また向うを見て、思ひ入れあつて

さては今の鐘の音を、合圖に爰を取卷くか。何にもせよ心元ない。

要助　ヤア、そんなら百連からの合圖かや。

くみ　どうぞ好い思案はないかえ。

さく　この體では、迂濶に川も越されず、と云つて後へは戻られず。ハテ、なんとしたものであらうぞ。

ト思案のこなしある。ト橋がゝり、人音多くする。

市川小團次の亡靈　澤村田之助のおくみ

くみ　アレ〱、大勢の人音。どうせうぞいなア〱。

さく　ようござります、大事ござりませぬ。マア、この船へ暫らくお忍びなされませ。

要助　大事ないかや。

さく　マア、お忍びなされませ。

　ト無理に忍ばす。此うち、橋がゝりより、彌九郎、家來四人連れ出て來る。おさく、木蔭へ忍ぶ。

彌九　參れ〱、家來ども。

家來　ハア、。

彌九　最前の釣り鐘は、兼ねての合圖。察するところ宿位之助を、このあたりにて見付けたに相違にない。詮議して手柄にせい。

家來　畏まつてござります。

彌九　その上、此方よりも知らせの太皷を以て、次の村へ知らせたれば、追ひ〱爰へ馳せ集まるは必定。引ッ包んで討取れ。合點か。

家來　ハッ。

彌九　最前より心得ぬこの苫船。者ども詮議いたせ。

家來　ハア、。

　ト船へかゝろ。おさく、木蔭より出て、突き退け、よろしく見得。

彌九　コリヤ、女め、何ゆゑの手向ひ。そこ退け。

さく　イヽヤ、この船の主は、女ながらもわたし。聊爾なされたら許しませぬぞ。

彌九　イヤ、猪口才な奴の。宿位之助を詮議の我れ〱、その船の内を改めさせろ。支へ立てする汝こそ、さては吉田家の餘類ぢやな。

さく　サア、それは。

彌九　左樣でなくば、船の中を吟味さするか。

さく　サア、それは。

彌九　サア。

兩人　サア〱〱。

彌九　エ、面倒な。引退け。詮議いたせ。

家來　ハッ。

　トおさくにかゝる。立廻りあつて

〽下知に從ひ右左、かゝる多勢を是非なくも、既に危ふきその所へ、驅け來りたる甚三郎、數多の家來を投げ退け引退け、おさくを圍うて突つ立ちしは、心地よかりし有樣なり。

さく　こちの人か。よい所へ、よう來て下さんしたの。

甚三　おれが來たからは、大船に乘つたやうに思へ。サア、百連方の惡人めら。一人も生けては置かぬ。覺悟ひろげ。

彌九　ヤア、いらざる廣言。彼奴から先へ討つて取れ。

家來　動くな。

ト取卷く。

〽討つてかゝるを事ともせず、追ひつまくりつ手練の手の內、目覺ましかりける。

ト此うち、おさくも彌九郎と立廻りあつて、彌九郎を追つて橋がゝりへ入る。文句のとまり、引取り三重にて、ドッコイと見得になる。トこれより、鳴り物入りにて、面白き合ひ方になる。甚三郎・四人の家來と大タテいろ〳〵ありて、皆々を追ひ込む。

〽次第なり、忠義に凝つたる働らきに、叶はぬ免せと逃げ行くを、遁がさじものと追つて行く。

ト船より、要助、おくみ出て、ウロ〳〵して

要助　甚三おさく、長追ひしてたもんないなう。

くみ　早う戻つて下さんせいなア。

トうろ〳〵して居る。おさく、走り戻つて

さく　サテ〳〵、もうこの船にも置かれませぬ。

要助　そんなら、どうせうぞいなう。

さく　どうと云うて、この上は、追手を出し拔く手段が大事。幸ひのあの鐘の蔭。

兩人　合點ぢや〳〵。

ト鐘の蔭へ忍ぶ。此うち、向うより、鱗形の袢纏に小手脛當にて、八人の捕り手、鉢卷凛々しくして出て來り

捕手　參れ〳〵。

ト出て來て、花道にて

所々方々より打ち立てる、太鼓を合圖に驅け付けしが、宿直之助に渡さぬぞよ。

皆々　左樣でござります。

捕手　待て〳〵。見ればあれに女がゐる。ヤイ〳〵、女、此あたりに二十一二、生白けた男、見付けはせぬか、どうぢや〳〵。

さく　イヽエ、左樣なお方々は、見受けませなんだが。

捕手　イヤ、知らぬでは合點がゆかぬ。何にもせよ、合圖の太鼓に相違のあらう筈がない。ハテ、合點のゆかぬ。

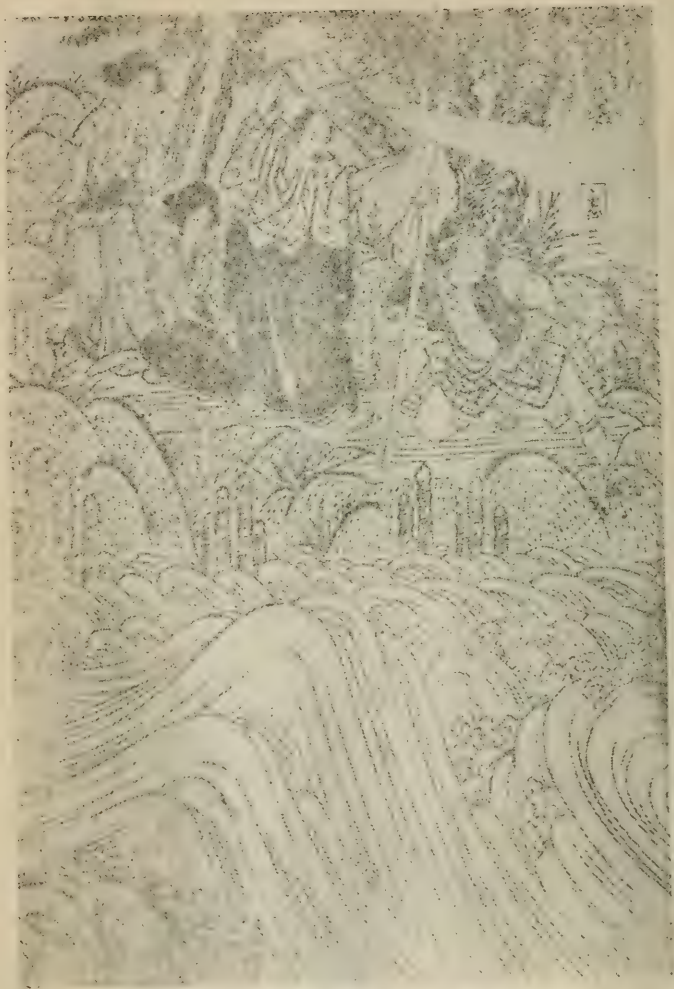
ト云ふうち、釣り鐘を見付け

きぶさいなは、この釣り鐘の落ちてあるは。

さく　ナニ、この鐘が。

根本「春景淺茅原」挿繪

大詰景事の場

捕手　合點のゆかぬは、この

〽突き鐘こそは、

三〽すた／＼鳴くぞ、祈れたゞ／＼、引けやてんでにせんじゆに陀羅尼々々々、程なく鐘樓に引き揚げたり。

トぐわん／＼／＼、鳴り物にて、鐘引き上げる。内より亡靈、鬼女の拵らへ、よろしくありて、舞臺の眞中へツカ／＼と出て、キツと見得。

〽なう恨めしの仇人や、六趣四生を出でやらず、人間不淨芭蕉葉の、消えて果敢なき身の果てを、問ふ人さへもなか／＼に。

トこれより、太鼓へかけて、亡靈、いろ／＼ありて、花道へ行き、よろしくキツと振り向く。ト大小入りにて

〽謹請東方青龍清淨、謹請西方白虎白龍一大大千世界の恒砂の龍王・哀愍納受・哀愍りきんのみぎんたれば、いづくに大蛇のあるべきぞと、祈り祈られかつぱと[illegible]に、入るよと見えしが、執着念の[illegible]は、日高にあらぬ隅田川、鐘ヶ淵とて今も名を、傳へてその名を殘しけり。

トよき所にて、甚三、走り出て、捕り手のうち、二人を押へる。此うち、亡靈は釣り鐘の上へ上がる。[illegible]は一軸を披きて、おくみを後に囲ふ。各々この見得よろしくあり、ト口上出て

口上　先づ今日はこれぎり左様。

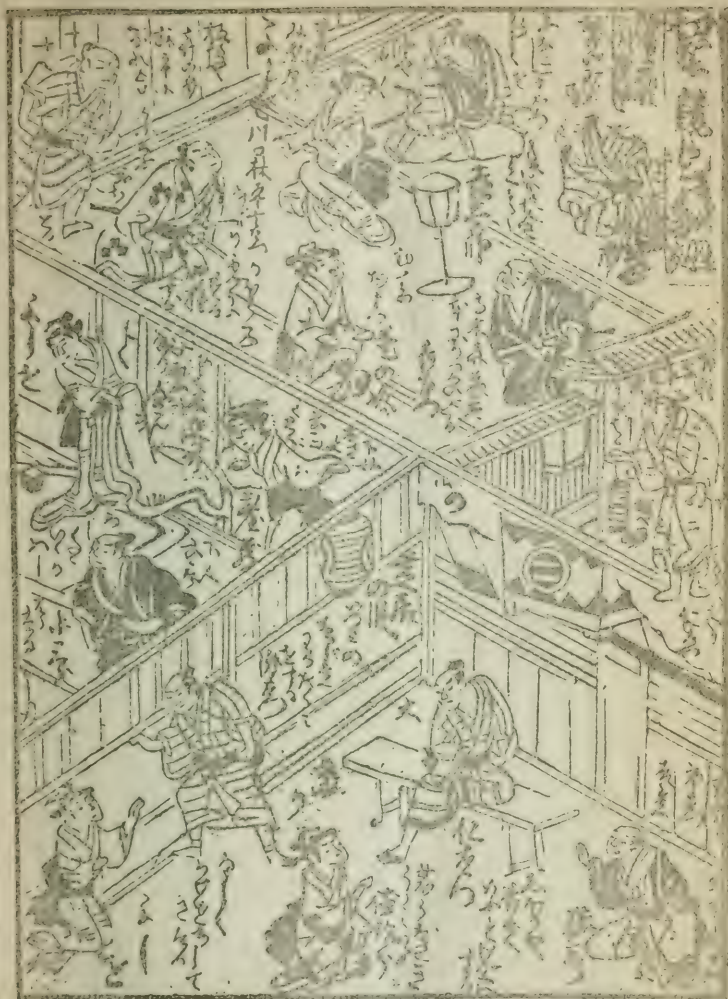
打出し

幕

隅田川續俤（終）

船越十右衛門
あぶら屋かしく

競かしくの紅翅

三冊

初演の繪番附

競かしくの紅翅

口明

北新地河佐の場

役名——絞屋の職人、六三郎實ハ櫻井要人。松坂屋七郎助。川口林兵衛。奴、宅平。松江息女、園生姫。藝子・さきの。同、初音。同、小まき。同、ちとせ。幇間、杵八。大仁村の與三次、判方、太治兵衛。油屋喜助。樋の長太、高木喜藤太。かけ屋、與七。油屋かしく。船越十右衛門。

造り物、通り二重舞臺。見付け、打抜き、奥深う茶屋暖簾。植込み、石燈籠、通ひに橋かけてあり、橋がゝりの方、切り戸口、門口、いつもの所に河佐と書きし掛け行燈、藝子さきの、初音、小まき、ちとせ、幇間杵八、並び居る、騒ぎにて幕明く。

さき　わしがお客は、松坂屋の七郎助づら、大嫌ひぢやわいなア。

ちと　そりやお前ばかりぢやない、わしらもみんな大嫌ひぢやわいなア。それに引替へ、この間からのお客、西國方のお侍ひ、船越十右衛門さまは、田舎に似合はぬ、粋なお方ぢやないかいなア。

初音　さうして、男振りのキツとした所は、どうも云へぬぢやないかいなア。

杵八　とんと嵐吉と云ふ所に、生寫しでござります。

小ま　そんなら七郎助さんは、誰れに似てあるぞいなア。

杵八　カウツ、待ちなされや。あの意地の惡い仕打ちの鹽梅、オ、、それ〳〵、文五郎と云ふ所でござりませうかい。

さき　ほんに、そこらであらうかいなア。

杵八　オツト、皆まで云ふまい。人ごと云はゞ、目代置けとやら。向うから七郎助さんが、お出でござります。

ト向うより七郎助、着流し、羽織を手に持ち、一本差し、町人の形。丁稚、附添ひ出る。

七郎　サア〳〵、來たぞ〳〵。さきのも小まきも來て居るか。今日は、川口林兵衛さまのお出で。いんつく澤山の

七郎助さまのお越しゆゑ、道理で河佐の内が目ばゆいやうになつたわい。

小ま　七郎助さま、お前のお出で

七郎　待ちかねて居たか。

皆々　なんのいなア。

七郎　エヽ、何ぬかしくさる。コリヤ、三吉、其方は先へ去んだがよい。戻りは、駕籠であらう。迎ひには及ばぬぞよ。

丁稚　畏まりました。

ト入る。

七郎　時に、川口林兵衛さまが、首ツたけのかしく、返事はわいら、聞いてくれたか。

杵八　ありや、百萬だら云うても出来ぬ戀、もう止めになされませ。

七郎　ハテ、押しの強い。かしくが、どのやうに意地張りでも、金の威光で靡かす手段。

杵八　私しどもも、お勧め申しませう。

七郎　そんなら、かしくを知らせにやりや。

皆々　サア七さん、奥へ行かしやんせいなア。

ト騒ぎ唄になる。皆々、入る。

ト向うより仲居、軒吊り提灯を持ち、先へ行く。續いて船越十右衛門、川口林兵衛、田中曾平次、増山大八川口伴蔵、着附け袴、大小、後より奴宅平、供にて出る。手代與七、羽織着て、附添ひ出る。

林兵　なんと十右衛門どの、お國と違ひ、當地は賑はしい事ではござらぬか。

十右　イヤモウ、繁華と申し、殊更ら遊里はまた格別。大坂表のお役目は、お羨ましう存じまする。

ト云ひ〳〵舞臺へ来る。皆々、よろしく並ぶ。

ト藝子、幇間、バラ〳〵と立ち出で

皆々　皆さんのお出でが、遅いと云うて、七郎助さんが、待ち退屈がつてござんすわいなア。

林兵　イカサマ、さうであろ。何は格別、イヤナニ、十右衛門どの。只今も途中でのお詞に、大坂藏屋敷の役儀は毎々斯様に参るから、羨ましいとの御様子。貴殿も亦、今度の御用の次手、暫らく當所に御逗留あつて、いろいろお氣晴らしの、御遊興なされたがよくござる。定めて十右衛門どのにも、お目に止まりし女郎がござらう。その女郎は、何屋の誰れぞ。

曾平　但しは、藝子のうちでもござらうか。我れと包むと

思へども、化け顯して

伴藏　白狀々々。

十右　これは〳〵、存じも依らぬお尋ね。拙者どもは、田舍に育ちし武骨者、なか〳〵左やうの儀は思ひ寄らず。取分け、この度の逗留は、本國備後松江の城主、將監さまの御息女、園生さま、京都、[illegible]宰相さまの御子息、兼房卿へ御緣談相きまり、結納の印として、空蟬の香爐、先達て登りこされしゆゑ、三月下旬、國元を發足仕り、婚禮萬事の誂らへ物、調ふるその間、折々の遊里通ひ、殊さら今日の川遊參などは、國元で見馴れぬ、珍らしき慰みでござつたわい。何かにさて置き、ナニ與七、お屆子黒棚、いよ〳〵明朝までに出來いたさば、直さま旅宿まで、持たせ越さるゝとた。

與七　今度の御用向き、殘らず調へ、差上げませう。即ち御用金は、二千兩の御應對も、先達て千七百兩は、お受取り申し置きました。相殘りまするは三百兩。

十右　如何にも。その金子、只今お渡し申さう。宅平、申し付けた三百兩の金子、與七に遣はせ。

宅平　畏まりました。

　ト金子三百兩、出し、渡す。

與七　ヘイ〳〵、これはお有り難うございります。左やうなら、お暇き申しませう。

十右　まだ申し付ける用事もあれば、暫らく勝手へ參り、酒でも呑みやれ。

與七　畏まりますでござります。

　ト入る。揃り鉦入りの合ひ方になりて、向うより百姓與三次、弓張り提灯、持ち出て

與三　宵[illegible]まで、火をともさず戻つたれば、もう暗うなつて來た。幸ひのお內方。どうぞ灯を一つ、お貸しなされて下さりませ。

　ト內へ入り

ハイ〳〵、お免しなされて下さりませ。イヤ、これはお取込みさうなに、お氣の毒な。次手に一服、吹ひ付けさして下さりませ。ハ、、、、、

　ト追從笑ひをしい〳〵、十右衛門と顏見合はせ

ヤア、わりや宗太郎ぢやないか。

十右　ヤア、そなたは。

　トあたりへ心意氣のこなしある。

林兵　ドリヤ、身共は江戶狀認め次第、君達を集めて一臨

ぎ。船越どの、お先へ参らう。
十右　拙者も後から。
林兵　皆もお出やれ。
皆々　サア〳〵、ござりませ。
　ト騒ぎ唄になる。皆々、入る。あと合ひ方、與三次、ヂッと十右衛門が顔を眺め、嬉しきこなしあつて
與三　矢ッ張りさうぢや。矢ッ張り宗太郎に違ひはない。
十右　さて〳〵、お懐かしい親人様。先づは御息災の御様子を拝しまして、斯様な喜ばしい儀はござりませぬ。
與三　ハテ、思ひがけもない所で逢うた事ぢやの。其方は幼少の時分から、侍ひになりたい〳〵と云うたが、マアマア、立派なその體を見て、こんなマア嬉しい事はない。餘り思ひがけがたいに依つて、何やらかやら、云ひたい事がたんとあれど、とんと口へ出ぬわいの。
十右　私しとてもその通り。イカサマ、思ひ出だせば十七歳にて家出たし、所々方々と遍歴いたし、只今にては、よろしき主取り仕りました。本國は備後、松江將監さまに仕官の身となり、今度殿様の御用に付き、先日より當地へ罷り上り居りますれど、あなた様が當地にござらうとは、夢さら存ぜねば、誠に親子の緣の盡きざるところ。斯様な喜ばしい儀はござりませぬ。即ち只今の名は、船越十右衛門。
與三　それはめでたい〳〵。十年以前、其方が家出せしやつてから、わしが不仕合せ、若狭の小濱を、ちと仔細あつて立退き、今の住所はこの北在、大仁村と云ふ所。今日は黒谷のお上人様が御下向ゆゑ、ちよつと參つた戻りがけ、久し振りで我が子に逢うたも、矢ッ張りお上人さまのお引合はせ。エヽ、有り難い事でござる。
十右　すりや、この北在にお住ひとな、して、また母人にも、お達者でござりますかな。妹八重も、定めて成人いたしたでござりませう。
與三　さればやい。十年此方、だん〳〵の不仕合せ。その上、かくは大病に取付き、去年の夏、遠い國へ隠居をしやつたわいなう。
十右　エヽ、なんと御意なさるゝ。すりや、母人には御死去とは、ホイ。
與三　即ち、祥月命日は、五月九日。戒名は、貞岳信女と云ふわいなう。
十右　アヽ、神ならぬ身の悲しさは、正しく母の忌日さへも、知らすに過せし不孝者。眞平御免下さりませ。親

人様、即ち拙者は、中の島に旅宿いたせば、程近き大仁村。して、只今の御名は。

與三　花の茶店と云つたら、隠れ紛ひはない程に。

十右　然らば明朝、お尋ね申しませう。

與三　違はぬやうに、來てたもれ。待つて居るぞや。

ト此うち十右衛門、金子の包み、取出だし

十右　輕少ながら、この金子は母の佛前へ、香花の料にお供へ下さりませう。

與三　それなら、これは納めて置きませう。シタガ、マア、よからぬ所に、若い者の長居はいらぬもの。得て碌な事は出來ぬ程に、用事しまやつたら、早う旅宿へ去んだがよい。コレ、奴さん、御慮外ながら　その提灯、爰へ下んせ。

宅平　ネイ。

ト提灯に灯をともし

すりやあなたが、お旦那様の御親父様でござりますか。さて／＼、お年に似合はぬ、お達者な御様子。存じ寄らぬ所にての御對面、下郎めも承はりまして、斯様な喜ばしい儀はござりませぬ。

與三　何かはこなさん、賴みます。そんなら十右衛門、明日は必らず、待つて居るぞや。

十右　ようござりました。

ト與三次、行かうとして

與三　シタガ、女郎の油揚げにかゝらぬやうに。

ト顔を見合せ

ヘテ、よい男になり居つた。

ト唄になり、向うへ入る。あと合ひ方。宅平、十右衛門の側へツカ／＼と坐りて

宅平　姫君様の用向きも、いよ／＼今日中に調ひますれば直さま御歸國遊ばされますお積りでござりますかな。

十右　如何にも、最早歸國に程もあらねば、里の名殘りに今宵は夜ととも。

宅平　イヤ／＼、それは御無用。下郎の身で、慮外をも顧ませず、申し上げるは推參ながら、どうやら遊所のお遣ひも、張りまするやうに見受けまするが、憚りながら、あなた様の御頂戴遊ばされます、御知行と比べますれば、拔群の相違。そりや、外に御用意の金子もござりませうなれども、只今御親父さまのくれ／＼とのお詞。是非に今宵は、御旅宿へ。

ト十右衛門、こなしあつて

十右　いらざる其方が意見だて。重ねて云ふな。聞く耳持たぬ。
宅平　すりや、どのやうに申しても。
十右　今宵一夜は里の名殘り。ドリヤ、奥へ行かうか。
　ト唄になり、十右衛門、ツイと入る。宅平、いろ〳〵心意氣あつて、切り戸口へ入る。あと合ひ方。林兵衛七郎助、出で來り
七郎　あなた樣のお頼みゆゑ、かしくをいろ〳〵口說きても、聞き入れぬ死太い女郎。併し、金で面張る七郎助、やがてお心に從ひませう。
林兵　何かは貴殿にお任せ申す。又、先達て盜み取つたる唐橋家の紹納、空蟬の香爐、いよ〳〵慥かに、お預け申す。
七郎　その儀は、ちつともお氣遣ひ下されまするな。
林兵　紹納紛失の科にて、國家老を貶め、越度を拵らへ、日頃の望みを成就させん。
七郎　イヤ〳〵、それは大事ならん。先づ差當り、手段は斯う。
　ト囁く。
林兵　すりや、十右衛門を越度させ。
七郎　彼奴から仕舞ふが、手段の近道。
林兵　出來た〳〵。して、その趣向は。
七郎　それも、ちやんとして置きました。細工は流々、仕上げを御覽じ。
林兵　マア、それまでは、奥へ行て
七郎　あつさりと、呑みかけませう。
　ト唄になる。兩人、奥へ入る。
　ト六三郎、着流し、下男の形にて出る。
　ト奥より藝子、仲居、出て
藝子　六三さま、よう來て下さんした。
仲居　さうして今日は、お休みでござんすかいなア。
六三　さうぢや。今日は休みで、座摩の芝居でも見に行て、三角の强飯でも喰はうと、樂しんで居るものを、吉兵衛さんが云うてぢや事にや、この狀を、かしくさんに渡して來いとの事。どうも親方樣の詞を、如何に休みぢやとて、聞かずにも居られず、それで持つて來たのでござるわいなう。
仲居　ほんに、毎度お前さんの、いかい御苦勞でござんす。それはさうと、先度から、こちらが云ふ事、六三さま、聞いて下さんせんかいなア。

六三　エヽ、じやら〳〵と何云はんすぞいな。わしのやうな者ぢやと思うて、お前方が寄つてかゝつて、嬲るのかいなア。

藝子　なんの、嘘を云ふもので。眞實の事ぢやわいなア。

六三　イヽヤ、そんな事は、わしや知らぬ〳〵。

ト鳥刺しの合ひ方になり、六三郎、逃げて行く。皆々、追ひ廻し入る。

トあと唄になり、太治兵衞、出て來る。奧よりかしく、藝子の形にて思ひ入れにて出る。

太治　どうぞ、逢ひたいものぢやが。オヽかしく、爰にゐるか。この間からの手合ひの惡さ。サヽこれサ、三兩貸してくれ。よ、どうぞならう事なら、いま貸してたもいなう。

かし　又しても〳〵、金の無心。わしぢやとて相應に、身上がりもござんす。さう〳〵お客に無心も云はれず、今日はどうもならぬわいなア。

太治　コリヤ、かしく、なんと云ふぞ。身上がりも大分ある、おれが無心は、聞かれぬと云ふのか。わりや、絞屋吉兵衞と云ふ、素寒貧の職人に打込み、よい客を袖にするとの事。それは格別、請け判なり、兄分なり、わが爲には大切ない、この太治兵衞さまが、難儀の所は目にもかけず、吉兵衞とやらにばつかり、打込んで居るのぢやなア。

かし　コレ、太治兵衞さん、其やうに、兄親々々と云はんせいでも、そりやよう知つて居ます。出來さへするなら上げたいけれど、今と云うては、どうもわたしが手に。

トこの前より十右衞門、二重舞臺に立ち聞きして居て、この時、金を抛る。太治兵衞、悚りして

太治　こりや金ぢや、のゝさんの草鞋ぢや。して又、あなたさんは。

十右　問はねど知れた、この場の仕儀。とつとと持つて歸れ。

太治　そんなら、かしくさま〳〵。

ト入る。合ひ方になり、かしく、ツイと奧へ行かうとする。

十右　かしく、待つた。

かし　イヽエ、わたしや書かねばならぬ文があるゆゑ、ちつと奧へ。

十右　隙は取らぬ。暫らく爰へ。

かし　わしや知らぬわいなア。

十右　ムウ。すりや、どうあつても、つれないが勤めの法

か。

かし　一圖に思ふ男への、義理でござんす。十右衛門さんお志しは嬉しうござんすけれど、爰のところを聞き分けて。

十右　ハテ、それ程に締め搦む

かし　緣の糸筋一筋に、思ひ込んだ女の操、破られませぬ。

ト行かうとするを、十右衛門、止めるを、無理にかしく、行かうとする。十右衛門、憎いと云ふ心意氣。この前より油屋喜助、浴衣着て、團扇を持ち、門口に窺ひ居て、この時、ツカ〳〵と入り、十右衛門に向ひ

喜助　ハア、イヤ〳〵、先づお待ちなされて下さりませ。

かし　お前さんは、親方さん。

十右　かしくが譯を知つて止めるか。

喜助　ハイ、譯を知らぬでもござりませぬが、私しは、このかしくが親方、油屋喜助と申しまする者でござりますもう先日から、かしくの事を思し召して下さります段、承はり及んで居りまする。斯樣な道樂な商賣いたしますれど、油屋喜助でござります。どうぞ一日も早う、女郎の身の納まりの出來るやうな、相談があれかしと、思ふが親方の常でござります。聞けば、このかしくには、この頃どうか間夫とやら、色とやらがあるとの噂。この事も、とつくりと糺しませうと思へども、私しが口から申しまするも、どんなものでござりますゆゑ、女房どもに云ひ含め、いつぞはとくと意見して、御執心おかけ下さるお客樣の、お心に隨ひますれば、その身も出世、親方も大慶と思ふ矢先に、この場の體裁。イヤ申し、お侍ひ樣、かしくが臺詞は、私しにお任せ下さりませうならば、及ばずながら、遣ッつけてお目にかけませう。

十右　イヤ、面白い其方が云ひ方、かしくを身が身請けせう。

かし　エヽ。

喜助　あなた樣の、お心に隨ひませぬかしくを、身請けなされたところが、面白うない事。それよりは、とつくりと云ひ聞かせた上で。

十右　して、その返事は。

喜助　長うとも申しますまい。今宵、夜中までには、キッと御返事を。

かし　長い浮世に、短かい命。

十右　ハテ、張りの強い女ぢやなア。

喜助　そこが戀の味でもござりませうかい。

十右　ナニ、馬鹿な事を。

ト「仇なかしくが散らし書き」と云ふ唄になり、十右衞門、こなしあつて、入ろと、かしく、いろ／＼思案の心意氣ある。あと合ひ方。

喜助　コレかしく、其やうに何もキナ／＼思ふ事はないわいなう。

かし　それでも、わたしが身請けの返事。

喜助　ハテ、ありや當座の間に合はせと云ふもの。何も案じる事はない……と、サア、云ふこの喜助が心腹を、一通り聞いてたも。コレ、かしく。この北の新地で、油屋の喜助と云うては、昔は歴々にもして居たれど、此おれが代になつて、身代しもつれ、裏町へ逼塞して居たところへ、フト其方を抱へてから、次第々々の繁昌、間もなう、二丁目へ出て、昔に變らぬ油喜と、云はるゝやうになつたも、こりやコレかしく、みんなわが身の庇ぢやわいの。さずれば、油屋の内の守り神と、大事に思ふ其方ぎ、氣にはまらぬ所へ身請けさせては、どうも、おれが義理が立たぬ。シタガ又、紋の吉兵衞とやらの事を聞き合はして見たれば、女房子もある人さうな。そりやかしく、悪いぞや。重井筒の文句にもある通りぢや。マア、とつくりと思案しや。また十右衞門どのぢやあらうが、七郎助どのぢやあらうが、わが身の氣に染まぬ先へ、滅多に遣りはせぬ程に、何も其やうに案じる事はない。おれが心はマア、この通りぢやわいなう。

かし　そりや親方さん、お嬉しうござんすけんど、十右衞門さんへの斷わりは。

喜助　ハテ、その場／＼の、風次第にして置きやいなう。おりや今、風呂屋から戻りがけ、佐右衞門どのが内になりや、一杯ゆかうと思うて、來かゝつて見りや、今の體裁く。奥へ行て、一杯飲まう。かしく、わが身もおぢやいなう。

かし　わたしやちと用もあり、酒はよしに致しませうわいな。

喜助　今日のやうな日は、一杯飲むがよいわいの。また氣がわつさりとしたら、よい思案が出るものぢや。さりとは、おぢやいなう。

ト潮來の鳴り物になり、喜助、かしく、こなしあつて、入る。矢張り潮來の鳴り物にて、向うより園生姫、振り袖姿にて、出て來ると、悪者二人、附きて出て、臺

う存じまする。

園生　都への嫁入りは、わしや、嫌ぢや〳〵。

宅平　憚りながら、左やうな御意なされてはお家の大事。

園生　さうぢや。

ト尾の長太が差して居る脇差にて、死なうとする。皆々恟りする。長太、大きに怯て、脇差を押へ

長太　滅相な、これを抜かれて堪るものか。

ト此うち十右衛門、出かけ居て、この時、ズツと出て

十右　拙者儀は、船越十右衛門と申す者。して、お使者の御姓名は。

長太　ハア知れた事、唐崎家の雑掌、岩村久之丞。

十右　ハテナ、先達て御結納の節、国元へお越しあつて、某もお近付となつたる、久之丞どのは六十有余の御老人。

長太　ヤア。

ト恟りする。

十右　但し、唐崎家には、同名二人あるか。

長太　サア、それは。

十右　サア。

長太　サア。

十右　サア。

長太　南無三方、こりや堪らぬ。

ト逃げうとするを、十右衛門、とめて

十右　宅平、ぬかるな。

宅平　ハツ。

ト門口をピツシヤリ締める。

長太　そんなら、いつそ。

ト十右衛門に切りかゝる。立廻りにて十右衛門、長太を見事に投げ

十右　騙りのお使者、有やうに吐かし居らう。

長太　ハイ〳〵、吐かします〳〵。さらば、騙りの正体、お目にかけませう。

ト上下、帷子、脱ぎ捨てると、郡山染め木綿やつしになる。

何を隠しませう、私しは、天満砂原の夜番、梶の長太と申しまする者でござりまするが、北の新地の河佐へ行て、斯う〳〵してくれとの頼み、即ち、その頼み手は、爰に居られまする、七郎助さまでござりまする。

七郎　ヤア〳〵うぬ、そりや何を吐かすぞい。

長太　なに吐かすも餘りぢや。銭一貫文、褒美にやろと云はんしたぢやないか。もう斯うなつたら是非がない。胸

はドキ〳〵、早鐘を鳴らすやうになつて來て、どうした拍子木や、さつぱり譯は割り竹や、なんと鳴る子の音ましや、早うこの場をチリリンチリリンとしたいわいなア。

七郎　阿房吐かせ。おれが、いつそんな事を頼むもので。

長太　あれ程わしに、頼んで置いて。

七郎　イヤ、頼みやせぬ。

　トこんな事、互ひに云ひ〳〵、七郎助は長太を引立てわざと門口へ突き出す。長太、走り逃げて、入る。

エヽ、いま〳〵しい。逃げてしまひ居つたわい。

十右　サア姫君、都へお輿入りあられませう。

園生　嫌ぢやわいなう。自らは、二世と契りし殿御を慕ひ、遙々と、この遠い大坂へ來たわいなう。

　ト云うて居る所へ、高木喜藤太、ぶッ裂き羽織、大小、すべて田舍侍ひの旅姿にて

喜藤　イヤ、ちつと物を尋ねたうござる。この家に、船越十右衛門どのと申す、お客人が居なさるなら、對面が致したい。

　ト云ひ〳〵入り、十右衛門と顔見合せ、

ヤア、これは〳〵。幸ひこれにお出でか。ヤレ嬉しや嬉しや。

十右　貴殿は、國許の高木喜藤太どの、存じ寄らず、火急のお登り。して、あわたゞしきその形は。

　トこの時、喜藤太は、姫を見付けて

喜藤　ヤア〳〵、姫君樣には、御安泰にて、これに御入りか。ハッ〳〵〳〵。

　ト座を改め、手をつかへ

先づは御安泰の御樣子を拜し奉り、斯樣な喜ばしい儀はござりませぬ。これに付いて、ちと内々、十右衛門どのへ、だん〳〵のお話しもござれども。

　ト七郎助へ心遣ひのこなし。

十右　イヤナニ、七郎助、暫らくこの場を、開いてくりやれ。

七郎　いつそ自棄ぢや。これから奥へ行て、荒れ飲みしてこまそ。

　ト入る。宅平も切り戸へ入る。あと合ひ方になり

喜藤　ナニ十右衛門どの、一通りお聞き下されい。誠や姫君樣には、この度唐崎家への御縁組みを、お嫌ひ遊ばされ剩さへ、腰元三人を召連れ、御母公樣へ書置を殘し置かれ、卽ち夜半に紛れ、國元をお立退き。これに依つて、

大殿樣の御機嫌以ての外、急ぎ追手をかけよ、落ち着き先は大坂ならん、船手の用意と、嚴しきお指圖。それに引替へ、御母公樣の事ないお案じ。それゆゑ、この喜藤太を密かに召され、姫が今度の國遠は、定めて都の緣談を嫌ひ、全く他にまた人知れず、戀ひ詫び慕ふ戀人があつての事ならん。まゝしき仲の義理なれば、どうぞ姫が思ひを叶へてやりたし、何卒都へ結納を戻し、その戀人は誰れならんと、內々にて、いろ／＼御吟味ありしところ、當家中にて、櫻井要人と云ふ若侍ひなりと、腰元が言上。其また要人と云へるは、先達て朋友の妬みゆゑ、後難を恐れて國遠なせば、これとても行くへ知れず。然るところ、だん／＼吟味の上、此ごろ樣子を聞けば、その要人は、當時大坂に罷り在りとの事にて、北の新地の女郎に、深く云ひ交し居る色客が、即ちその要人どの。其また女郎の名は、エ、何とやら、つい筆を持つて書くやうな名でござる。ハテ、何とやら。オヽ、それ／＼、かしく、かしくと申す女郎の客との事。その女郎に尋ねなば、早速相知れるよし。聞くと其まゝ拙者は、早船に相乘り、やう／＼先刻、中の島の旅宿へ參りしところ、これに御出でとあるゆゑ、直さま參つたのでござる。

十右　ムウ。すりや、なんと御意なさるゝ。姫君の戀人がアノかしくが色客。アノかしくが色客とな……ハテナア……この儀は、ゆる／＼吟味も出來やうが、先づ差當つて唐崎家へは、姫君御病氣の由僞はり、結納の印、空蟬の香爐を差戾しなば、なんと申しても、公の政道、底の底まで御吟味もあるまじ。爰は遊里、人目に立てば御身の大事。コリヤ／＼、宅平。

宅平　ネイ／＼。

　ト宅平、出づる。

十右　其方は、姫君をお供いたし、旅宿へ歸れ。

宅平　畏まりました。幸ひ旦那のお駕籠を、申し付け置きましたが。

　ト云ふ所へ、仲居、出て

仲居　疾からお駕籠は、待つて居ります。

　ト云ふ所へ、駕籠を持ち出づる。

十右　サア、姫君樣、お駕籠にお召し遊ばされませう。

園生　そんなら十右衞門、喜藤太。

宅平　イヤ申し、旦那樣、是非に今宵はお宿へお歸り……

　サア、駕籠やつてくりやれ。

　ト宅平、駕籠に附添ひ、一緒に花道へ入る。

喜藤　拙者は直さま歸國いたし、この場の樣子をも、まつた、姫君樣御安泰の由をも、御母公さまへ申し上げ、御安心いたさせませう。
十右　然らば、左やうになし下されい。殊更御老人の、遠路御苦勞。
喜藤　猶また國元にて、ゆる〳〵お目にかゝりませう。
ト合ひ方になり、喜藤太、入る。跡に十右衛門、思案のこなし。
十右　思ひよらざる姫君のお身の上。かしくが色容が姫君の戀人、櫻井要人とや。あのかしくが、深う云ひ交したとあるからは、絞屋吉兵衛とやら。すりや、その吉兵衛が、要人であらうとは思ひも寄らぬ。ハテ、どうしたものであらうぞ。
トばた〳〵にて、奧より七郎助、かしく、六三郎を引ッ立て、林兵衛、藝子、仲居、皆々、出る。
六三　こりや、おれを何とするのぢや。
七郎　何とはおのれ、野太い青二才め、此方へ身請けの相談してゐるかしくへ、うぬ、狀の取り遣り、毛太い野郎め。
林平　それが氣ぶさいなに依つて、打ちのめすのぢやわい。
かし　そりやお前方が、無理と云ふものぢやわいなア。なぜと云うて見やしやんせ、絞屋吉兵衛さんと云ふお客から來た、文の返事を、あの六三さんに渡したが、なんで胡散にござんすえ。
七郎　その絞屋の吉兵衛が、氣に喰はぬわい。
六三　此方の旦那どのが、なんとして氣に喰はぬ。尤もお前方は、侍ひやら、金持ちやら、また此方の旦那は、高の知れた絞屋ぢやけれど、粒三文、爰の內へ損はかけぬ。さすれば、五文と五文ぢやないか。又お前方が、かしくさんを、身請け〳〵と云はんすけれど、かしくさんの身請けは、此方の旦那どの、アイ、絞屋吉兵衛がして見せます。
七郎　ハヽヽ、こりやをかしいわえ。かしくが身の代は、三百兩ぢやが。
六三　エヽ。
七郎　絞屋風情が、夢にも見た事はあるまいが。この七郎助さまはナ、たんと金は持つて居るわい。コリヤ、ちよつと爰にも五十兩。
ト出して見せ

これを親方へ手付けに渡し、内へ去んだら、何時でも後金の二百五十兩、耳を揃へて渡すわいやい。なんと、きよといものか。

六三 ナニ、おれだとて、三百兩の金があらいでか。梅ケ枝の手水鉢、叩いたとて。

七郎 オヽ、出來ぬ事に、息せい張るな。おりや親方に手付けの金、渡して來う。

ト行かうとするを、十右衞門、とめて

十右 七郎助、待ちやれ、

七郎 オヽ、十右衞門どの、なんぞ用がござんすか。

十右 かしくが身請けは、身共が致すぞ。

かし エヽ。

七郎 こりやをかしい。十右衞門、貧乏侍ひの分として、かしくの身請け。

十右 如何にも拙者が。

七郎 して、その金は。

十右 サア、その金は。

七郎 どこにあるぞい。

ト云うて居るうち、手代與七、出て

與七 イヤナニ、十右衞門さま、だん〳〵と夜も更けまして、用心も悪うござります。私しはもう、お暇申しまする。

十右 アイヤ〳〵、與七、先刻の金子は、如何めされた。

與七 即ちこれに、しつかりと持つて居りますでござります。

ト最前の金を出して見せる。十右衞門、その金を手早く取り

十右 この金子、明朝まで、十右衞門が借用いたした。

與七 エヽ、その金は。

十右 ハテ、明日返せば事は相濟む。

與七 それでは、却つて親方に。

十右 十右衞門が借り受けたと、申して置け。

與七 これは、迷惑でござります。

ト十右衞門、金子の封を切り

十右 サア七郎助、貧乏侍ひが取り扱ふ三百兩、とつくりと見て置き居らう。

林兵 用金を私用に遣ひ果しては。

十右 イヤ、苦しうござらぬ。この十右衞門が胸一つ、貴殿のお世話にやなり申さぬ。

林兵 ハテナア。

七郎　後で吠え面かくを見るやうな。ハヽヽヽ。
十右　油屋喜助、どれに居めさる。
　ト後より、ハイ／＼と云ひながら、前へ出で
喜助　最前からの様子を、殘らず承はり居りましたれど、
　その金で、かしくが身請けは。
七郎　ぼくの高いあの金、氣の毒なものぢや。
かし　親方さん、受取つて下さんせ。十右衛門さんの方へ、
　請け出されて行かうわいなア。
六三　エヽ。
　ト悔り。
アノ、嫌がつた十右衛門の方へ。
喜助　わが身や、行く氣になりやつたか。
かし　アイ、これには深い入り譯はあるけれども、爰では
　どうも。
喜助　すりや、最前の意見を聞き分けて……オヽ、それで
　こそ、全盛のかしくぢや。よう行く氣になりやつたなう。
六三　なんのそれが全盛。いとしほうに、此方の吉兵衛
　さんを、よう看板持ちにしたなう。この事を吉兵衛さん
　が聞かんしたら、さぞ腹が立つであらう。エヽ、かしくさ
　んぢやない、かしくめ。ようも今まで騙しやがつたな、
狐め、狸め。
　ト最前の狀を出し
嘘ばつかり書いたこの狀、斯うして。
　トさん／＼に破り
早う去んで、吉兵衛さんに、さうぢや／＼。
　ト花道へ行かうとして、また立戻り、かしくをキッと
　見て
エヽ、去んでこまそ。
　ト走り入る。
七郎　ドリヤ／＼、おれも去んでこまそ。身請けは十右衛
　門の方へ極まる。なんの用も無い所に居やうより、林兵
　衛さまも、お歸りなされませぬか。
林兵　イカサマ、身共もお暇申さう。
與七　私しもお暇申し、お供いたしませう。
七郎　女郎は彼方の物、金は此方の物、又わつさりと、馴
　染みでも拵らへませうかい。サア、お出でなされませ。
　ト三人、入る。此うち喜助、受取書いて
喜助　即ち、これは假受取、かしくが年季證文は、明朝お
　渡し申しませう。
女昔　かしくさん、めでたいやうで悲しい別れ。

かし　また主にさう云うて、折り／＼遊びに來るわいなア

皆々　わたしらも、中町まで送りませうわいなア。

ト摺り鉦入りの、華やかなる唄になる。十右衛門は氣の濟まぬと云ふ模樣にて、かしくの手を引き、藝子、仲居、みな／＼附添ひ、花道へ行き、よき所にて

かし　思ふ事、一つ叶へば又二つ

十右　苦は色かゆる、

ト兩人、喜助と顏見合はせ

喜助　ようござりました。

ト皆々、よろしく、

幕

二幕目　北新地芝居前の場

役名―絞屋吉兵衛。判方、太治兵衛。吉兵衛女房、おさき。一子、吉松。家主、市右衛門。講中、伊右衛門。川口林兵衛。野田嘉十郎。油屋かしく。

造り物、平舞臺。見付け、芝居の木戸口、臆病口の方、煮賣り屋の門口、暖簾、行燈かけ、所々に茶屋床几、並べ、すべて北の新地、芝居前の體。仕出し三人、捨ぜりふ、ワヤ／＼云うて居る。芝居の果て太鼓にて幕明ける。太治兵衛、口幕の形にて走り出て

太治　オヽ、お前方、よい所で逢ひました。こなたさん方も知つて居やんしよ。おれが肝煎つてやつた、この新地の油喜のかしく、田舎侍ひが立て金して置いたところが、昨夜からかしくは駈落ち。それで諸方をば、尋ね歩いて居やんす。

仕出　ムウ、なんと云はんす。あのかしくは、高ぶけりしたかいの。

太治　サイナウ。大方埋んである先は、絞屋の吉兵衛が所であらうと睨んで居れど、待て暫し、爰が思案の一つぢや。立て金の三百兩と云ふも、根を糺せば、ぼくの高い金ぢや。それぢやに依つて、かしくの駈落ちは、おれの爲には幸ひぢや。吉兵衛めに引上げさして置いて、侍ひの方から片付け、その上でかしくめは、また側へ仕替へに遣るおれが手段ぢや。

仕出　イカサマ、こいつはよい料簡ぢや。

太治　もし、今でもかしくを見付けなんしたら、おれが方へ連れて來てくんなんし。その時は、ズッシリと分け口ぢや程に、合點でごんすか。

仕出　こいつはちと耳寄りな。なんでも氣ぶさいなは絞屋吉兵衛。どうぞ手繰つて見たいものぢや。

太治　おれは、北邊を探して來る。皆の衆、頼んだぞや。

皆々　そんなら、太治兵衛さん。

太治　早う／＼。

ト　ついと皆々、入ると、太鼓、打ち上げる。向うより家主市右衛門、羽織着て、吉兵衛、同じく着流し、羽織、手に持ち、捨ぜりふ、云ひ／＼出づる。

吉兵　此やうに方々と家を捜し歩きましても、とんと思はしい家も、ないものでござりますなア。

市右　さればと云うては、イヤモウ、とんとないものぢや。全體、貴様の所は、なんで又、宿替へするのぢやぞいなう。

吉兵　なんと申しましたら、ちと勝手が悪うござりますか。

市右　ニヽ、よい口な事云ふ人ぢや。おれが、ちよいと聞いたところが、貴様、とんと家賃を遣らぬげな。そこで、家明け云ひつけられ、せう事なしの、山科宿替へであらうがな。

吉兵　御存じの上は、何を隠しませう。元は私しが家賃を遣らぬからの事でござります。

市右　イヤ又、人に家貸して置きながら、家賃を取らうなどゝは、言語道斷、憎い家主ぢやわいなう。

吉兵　そこで、私しが思ひまするは、コレ、これを見て下さりませ。

ト　懐中より金包みを出して

絞りの手間代、金七兩、只今得意先で受取つて、歸りましたけれど、どうやらあやまつたらしう、家賃をお受取り下されいと、持つて行くも、卑怯なと存じまして、もうこの金は遣らぬ積りでござります。

市右　さうとも／＼、それがよい。時に吉兵衛、なんと、物は相談ぢやが、いつそわしが、借家を借つてたもらぬかいなう。

吉兵　アノ、お前の貸し家を、貸して下されますか。

市右　貴様が、家賃を遣らぬと云ふところが、頼もしい男ぢやと思ふゆゑ、そこで一番、借つてもらふ積りぢや。

吉兵　アノ、家賃やらぬを、男氣と見込んで。

市右　そんなら吉兵衛、借つてくれるか。吉兵衛、なんにも云はぬ、忝ない。

　ト拝む。

吉兵　そしてマア、その家は、どこでござります。

市右　ほんに、肝心の所を云はんと居るわい。その貸し家は、天満の砂原、間口が三間半。奥行き十五間。

吉兵　そして、附き物には、なんぼ程でござりますな。

市右　マア、奥の締りよしと、敷居鴨居は附いてあるワ。裏口、雨戸もよいワ。大方銭で三貫文ほどあろかい。

吉兵　オット、それもよいワ。時に、斯うぢやござりませぬか。家賃と云うては、とんと上げませぬは、御合點でござりますか。

市右　勿論々々。

吉兵　家賃さへ上げぬ位ぢやに依つて、いつそ附き物の代は、お前様から出して下されませ、

市右　勿論々々。そりやハヤ、知れた事いの。

吉兵　それもよしと。時にお家主様。

市右　ヤア〳〵、なんぢや、もうお家主様あしらひぢやなア。

吉兵　家賃は遣らず、附き物代は遣らず、オットまだござりますワ。町内への祝儀も、近所への配り物も、お前からなされて下されますか。

市右　念に及ばぬ、知れた事いの。

吉兵　これもよいワ。イヤ申し、お家主様、まだござります。

市右　なんぢや〳〵。

吉兵　こんな事のお極まりが出来ると、酒にするものぢやが、あなたのお宅へ参るのも面倒、幸ひなあの呑み酒屋、向うでぱい一つ振舞ひなされませぬか。

市右　アノ、切合ひとも云はず、わしに一杯振舞へとは、さて〳〵貴様は、頼もしい者ぢや。その代り、なんにも取らぬワ。煮た肴に、刺身一鉢、鰌汁とは、何より以て安う候ふ。

吉兵　先づ、お家主から。

市右　イエ〳〵、貴様から。

吉兵　其許お入りなくては、いつまでも入り候ふまじ。

市右　ア、ラ、ようがましや、こなたこそ。

　トひしぎになる。三番叟の鳴り物にて、家主、をかしき身振りあつて

　サア、入らうかえ。

根本「かしくの紅翅」押繪

芝居前の場

ト兩人、入ると、向うより講中伊右衞門、同おいは、おどり婆、住持僧、米箱持ち五人、出ると、橋がゝりより吉兵衞女房おさき、悴吉松が手を引いで出づる。

伊右　下寺町常念寺、地藏堂の建立。

皆々　お志しはござりませぬか。南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛。

ト鉦打ち鳴らし、皆々、本舞臺へ來て、おさきと顏見合せ

伊右　絞屋のおさきさん、なんで爰へ來やしやんしたのぢやえ。

さき　ほんに、どなたもお奇特に、ようお參りなされます。マア、聞いて下さんせ。此方の吉兵衞どのが、何を思ひ出したやら、急に宿替へせにやならぬと、今朝から、家見に出やしやんして、今に戻らずぢやによつて、一遍と捜し歩いて居ますわいなア。

婆　おさきさん、お前、吉兵衞さんの譯、知らずかいな

さき　此方の吉兵衞どのゝ譯とはえ。

伊右　今も今とて中の島での噂、北の新地の油喜の女郎、かしくと云ふは、お前の連合ひの吉兵衞さんが色客、そのかしくと云ふおやまは、十日ほど前に、西國方の侍ひに請け出され、圍はれてゐる其うちに、昨夜そこを駈落ちしたといな。そこで、その侍ひや肝煎りが、方々と捜して居るげな。

婆　大方かしくが居所は、絞屋の吉兵衞が所であらうとの噂であつたわいな。

さき　そんなら、なんと仰しやります。此方の吉兵衞どんが、馴染みのおやま、かしくとやらが駈落ち。ムウ、こりや、てつきり……よう知らして下さんした。今までは、折々の新地通ひも、大方友達衆の付合ひでがなあらう。なんの生若いと云ふのでもなし、其やうな事に悋氣して、去られでもしたら、わたしばかりか、この子を始め、堀川の叔母樣も難儀であらうと、なんにも云はずに居たが、こりやモウ、悋氣せにやならぬわいな。

婆　ちと悋氣さんすが、結句吉兵衞さんの爲ぢやわいなア。

吉松　コレ、母さん、父さんに抱かれたいわいなう。

さき　エヽ、コレマア、鈍な事ぢや。この子を連れて來なんだらよかつたに。

ばゞ　おさきさん、吉さんは、わしが連れて去んで上げう程に、お前、吉兵衞さんの行く先を、早う捜しなんせ。

さき　そんなら、どうぞさうなされて下さりませ。それで大きに助かります。これは／＼、大きにお慮外さんでござります。吉よ、温なしうしやゝ。追ツつけ母は去ぬる程に、待つて居やゝ。

吉松　アイ／＼、母さん、早う戻つてや。

ト婆、吉松を脊負ひ

婆　オヽ、この小母が、がん／＼さんへ連れて行て、おまん買うてやらうや。ヤレ／＼、賢い子やの。

皆々　そんなら、おさきさん。

さき　よろしうお頼み申します。モシ、どなたさんも、御苦勞さん、お靜かに。

伊右　下寺町常念寺、地藏堂の建立。

皆々　お志しはござりませんかな。

ト皆々入る。

さき　子仲なした吉兵衛どの、年にも恥ぢず、おやま狂ひほんにマア、愛想の盡きた人ではあるわいなア。どうぞマア、早う逢ひたいものぢやがなア。

ト小首、傾け居るところへ、臆病口より下男一人、走り出で

下男　ホウ、これはおさきさんぢやござりませぬか。

さき　ほんに彌助さん。お前、どうして爰へに。

下男　ハイ、わたしや爰な料理屋へ、手傳ひに來て居りますが、モシ、あなたの吉兵衛さんは、今の先から爰の内で、お連れのお方と酒盛りなされ、一つお上がりなされてゞござります。あなたもあれへ、ちとお出でなされませ。

さき　ムウ、そんなら此方の吉兵衛どのが來て、連れの人と酒飲んで居てかえな。

下男　ハイ、お二人連れでござります。あなたも、ちやつとお出でなされませ。わたしは、ちやつと使ひに、

トついと走り入る。

さき　そして、その連れと云ふは、どのやうな。エヽ、あの人とした事わいの。わしが云ふ事、ろく／＼聞きもせず、オヽ、辛氣、ツイとどこやらへ走つて、あんまり阿房らしい。よし／＼、大方その連れと云ふのが、かしくめであらう。いつそ捕へて、云ひまくつてしまはうか。

ト思案して

イヤ／＼／＼、ひよつと其やうな事して、愛想つかされなどしたら、大抵や大方の恥ではない。こりやマア、どうしたらよからうなア。

ト神樂の合ひ方になり、向うより林兵衞、袴、羽織、大小にて、下部に提灯を持たせ、出づると、臆病口より野田嘉十郎、ぶッ裂き大小にて、飛脚提灯、持ち出づる。おさきは、ちやつと橋がゝりの方へ隠れる。嘉十郎、林兵衞、顏見合せ

嘉十　貴殿は、川口林兵衞どのではござらぬか。

林兵　これは野口嘉十郎どの、思ひも寄らぬ所での對面。して、貴殿には、何方へのお飛脚。

嘉十　されば、その儀でござる。この度、姫君の國遠に付き、唐崎家へ差戻す蜜蝋の香爐、疾より紛失。ほゞ樣子を承はれば、當大坂表にて、質物に入れある由。その詮議も、十右衞門に申し付けよとの御内意を、十右衞門どのに申し達せん爲、只今參る所でござる。

林兵　すりや、十右衞門が行跡は、未だ國元には御存じなき樣子。さて〳〵氣の毒なは船越氏、傾城狂ひに身持ち放埒、お家入りの御用向きは投げやり三方、剩さへ、御用金三百兩を、私用に遣ひ果して、有頂天の十右衞門にお逢ひなされてからが、一向緒隙。もう旅宿へのお出では、御無用になされませ。

嘉十　なんと御意なさるゝぞ。すりや、十右衞門どのは、身持ち放埒とは。ハテ、合點のゆかぬ。

ト懷中の狀箱を出し、いろ〳〵思案。此うち吉兵衞は後へ出かけ、立ち聞きして居る。

左やうならば、この御狀に、何か御内意の御用向き、所詮、申し付けても勤まるまい。とあつて、また此まゝにも歸られず、何分旅宿へ參り、十右衞門どのに對面なした上の事。

林兵　そんなら、どうでもお出でなされますか。

嘉十　實否を糺したその上で、また計らふ旨もござれば、林兵衞どの。

林兵　嘉十郎どの。

兩人　お別れ申す。

ト嘉十郎、合ひ方にて、向うへ入る。跡に林兵衞、少し思案して

林兵　嘉十郎が今の詞。ハテ、合點のゆかぬ。

下男　モシ、香爐の在所を捜し、明白に顯はれなば、盗人は。

林兵　コリヤ、聲が高い。その儀は、ちつとも氣遣ひ致すな。七郎助に香爐を預け置きたれば、先づは安堵。何分屋敷へ歸り、嘉十郎の歸りを待つて、事を計らはん。家

來、參れ。

ト向うへ入る。吉兵衞、いろ〳〵思案のうち、家主、出で來り

市右　コリヤ吉兵衞、手の惡い。ちやつと外したな。そんなら、いよ〳〵家は借つてたもるか。

吉兵　ハテ、御念には及びませぬ。

市右　そんなら、一つ打つて置かうか。

吉兵　しやん〳〵、ま一つせい、しやん〳〵。

市右　祝うて三度、しやん〳〵のしやん。

ト橋がゝりよりバタ〳〵にて、かしく、走り出で、吉兵衞に行き當り

かし　アヽ、お免されて下さりませ。餘り心急きにござりまして。

ト云ひ〳〵、兩人、顏を見合せ

吉兵　ヤア、其方はかしくか。

かし　オヽ、吉兵衞さん、逢ひたかつたわいな〳〵。

吉兵　わりや、聞けば昨夜、十右衞門どのの所を駈落ちしたとの事、仔細は知れてあれど、矢ッ張り十右衞門どのの方に、チッとして居れば、かしく、其方の爲ぢや程にマア、さうしてたもいなう。

かし　それや吉兵衞さん、お前、約束が違ひますぞえ。どんな貧しい暮らしでも、添ひ遂げるが勤めの誠、詞違へるやうな、かしくぢやござんせぬわいなア。

吉兵　サイナウ、わが身の心底は、よう知れてあれど。

かし　わたしが望みの叶はぬ時は、死ぬるに兼ねての覺悟でござんす、さらばや〳〵。

ト剃刀を出して、死なうとする。此うち、おさき窺ひ居て、始終、腹の立つこなし。

吉兵　エヽ、短氣な、何するのぢや。

ト剃刀をもぎ取る。

かし　そんなら、矢ッ張り女夫になつて下さんすか。

吉兵　サアどうなりと、御勝手々々。

かし　嬉しうござんす。

ト抱きつく。家主、轉ける。兩人、恟りして

吉兵　これは〳〵お家主樣、どこもお怪我はございませんだか。

トいろ〳〵介抱する。

市右　吉兵衞、ちつと嗜なめやい。この家主の目の前で、餘りぢやがな。そんな事してくれては、堪らぬがな、堪らぬがな。

吉兵　ほんに幸ひぢや、お家主様、これでちよつと、お引
　合はせ申しませう。わたしが嫁は、即ちこの新地の、油
　喜のかしくと申す者でござります。
市右　フン、さては聞き及んだ、かしく女郎か。なんとわ
　つさりと、斯うぢやござらぬか。今度、此方の内へ宅替
　へして、女房もさつぱりと新らしう、ほんにこりや、め
　でたい〳〵。
　ト おさき、ヌッと出て
さき　イヤ、とんとめでたうはござんせぬわいなア。
吉兵　ヤア、わりや女房ども。爰へは、どうして來て居る
　ぞ。
さき　てつきりと、こんな事であらうと思うて居た。家見
　に行くと云うて、今朝から出て戻らしやんせぬゆゑ、方
　方と捜して、最前からの様子は、とつくりと聞いた。コ
　レ、吉兵衛さん、腹が立つわいな〳〵。吉松と云ふ子ま
　でなした女房を差措き、さうさうはなりますまい。ア
　イ、絞屋吉兵衛の女房は、わたしでござんすわいなア。
吉兵　エ、、此奴が〳〵、ズケ〳〵と、何吐かしやがるぞ
　え。男の子は男に附くが習ひ、吉松置いて去んでしまへ。
さき　否ぢやわいな。わたしには、なに科、なんの仕落ち
　があつて去ぬのでござんす。
吉兵　ハテ、一も二もないワ。男が飽いた女房、去つて去
　つて、去りこくつてしまふのぢや。
さき　否ぢやわいなア。否でござんす。お前に去られ、堀
　川の叔母さんの所へ去んで、なんの、マア、叔母さんが、
　よう去られて戻つたと云はしやんすもので、否ぢやわい
　なア。アイ、わしや、去られる覺えはござんせぬ。
吉兵　エ、、此奴が〳〵、役にも立たぬ世迷ひ言、吐かし
　居るなえ。張りこくるぞ。
市右　ア、、氣の毒なは、先のお内儀。かしく女郎と比べ
　たところを、譬へて云はゞ深山木と、都の花ほどの違ひ、
　粹も不粹も、なんにも知らぬこの家主。どう挨拶してよ
　からうやら、ハテ、困つたものではあるわいなア。
かし　これには、だん〳〵深い様子のある事なれど、爰で
　はどうも。
吉兵　ハテサテ、わけも無い事云やんな。女房ども。
さき　ハイ。
吉兵　エ、、おのれの事ぢやないわい。すツ込んでけつか
　れ。
さき　すツ込んでゐぬわいな。よし〳〵、斯うなつたら、

堀川の叔母さんを連れて來て、白い黒いを分けてもらはにや、わしやなんぼでも去らりやせぬ程に。

吉兵　勝手にどうなとさらせ。ごくにも足らぬ世迷ひ事吐かさずと、キリ／＼と失せやがれ。

市右　ア、、氣の毒なものぢや。コレ／＼お内儀、又どうなりとなろぞいなう。マア、氣を鎭めて、茶なと呑ませ。

ト茶碗を出す。

さき　エ、、知りませぬわいな。

ト茶碗を叩き落す。

市右　アッ、、、、。

吉兵　おのれ、大事のお家主を、なんとしをるのぢや。

さき　斯うなつたら、なんぢややら、譯はないわいなア。

吉兵　うぬ、さう吐かしやがりや。

ト神樂の合ひ方になる。あたりにある物を把る。家主かしく、止める事、いろ／＼あつて、吉兵衛、取り違へ、家主をポンと投げ、散々に叩く。

市右　アイタ、、、、吉兵衛。こりやなんとするぞい。

ト橋がゝりより太治兵衛、立出で

太治　ヤアかしく、爰に居るか。われに逢はうと思うて、一遍と捜して居るわい。

ト太治兵衛、かしくの方へ行かうとするを、吉兵衛、止め

吉兵　コリヤ、かしくをなんとするのぢや。

太治　ハテ知れた事、ぼくの高い金で、身請けしたこのかしく。オ、、この太治兵衛が引上げて去ぬ。金持ちの妾にやる積りぢやわい。

かし　わしや、嫌でござんすわいなア。

太治　嫌でも應でも、親判ついて居る。肝煎りの太治兵衛かしく、われが體は、煮て喰はうと、燒いて喰はうと、おれが儘ぢや。

吉兵　イヤ、さうはなるまい。

太治　とは又、どうして。

吉兵　ハテ、ぼくが高からうが、低からうが、十右衛門どのが身請けしたかしく、貴樣の判は投げてあるわい。

太治　イカサマナア。

吉兵　その十右衛門も嫌うて、駈落ちしたもこの吉兵衛ゆゑ。そんならぞつこん、女房に持つて見せるのぢや。

太兵　面白い。そんなら、お祝ひ戴かうか。

吉兵　如何にも、遣らう。

さき　叔母さんに、めつきしやつきしてもらはにやならぬわいなア。

吉兵　こま言吐かすな。去り狀は後から遣らう。キリ〳〵と去にくされ……ほんに、お家主樣、近頃なんとも憚りながら、お歸りなさるも同じ道、この女郎めを、堀川の叔母が所まで、送らしやつて下さりませぬか。

市右　ヤア、去つた女房まで、おれに送らすか。

太治　サア、お祝ひの金せうか。

　ト吉兵衛が胸倉を取る。

市右　そんなら、吉兵衛。

　ト吉兵衛、太治兵衛をポンと投げて、幕明きの金を抛る。太治兵衛、こりや金ぢやと云ふこなし。

吉兵　お家主樣。

　ト互ひに、顔見合せ

　明日、お目にかゝりませう。

　ト吉兵衛、かしくを連れ、花道よき所にてよろしく

幕

三つ目　砂原紋屋の場

役名――紋屋吉兵衛。同女房、おさき。同職人、六三郎實ハ櫻井要人。同下女、およ。松坂屋七郎助。家主女房、おいは。一子、吉松。奴、宅平。油屋かしく。船越十右衛門。

造り物、平舞臺、見付け納戸口、押入れ、上手、折り廻り障子屋體。橋がゝりの方、切り戸口の塀。門口、いつもの所にあり。すべて砂原、紋屋宅替への體。紋りの職人二人、障子、八方行燈などの埒を拂ひ居る。家主の女房おいは、前垂れ、襷がけにて、そこらを拭いて居る。この姿にてよろしく、在郷唄にて幕明く。

職一　なんと八兵衛どん、そこら片付けたら、一服くせうぢやあるまいか。

職二　ムウ、よかろ〳〵。イヤモウ、宿替へ〳〵と仰山さうに、何も道具と云うては無い内ぢや、ツイ片付けてしまふわいの。

いは　コレ〳〵、そんな惡口を云はんすな。爰の吉兵衞どんは、前方から心安うするに依つて、それで今日も、手傳ひに來て居るのぢやわいなう。

職人　ほんにお前は、えらい世話好きぢやなア。

　ト いろ〳〵捨ぜりふを云ひ〳〵、そこらを片付けて居ると、在鄕唄になり、花道よりかしく、何なりと世帶道具を持ち、吉兵衞は、絞りの看板と障子を持ち、下女およしは、吉松を脊中に負ひ、後より附き出で來る。

六三　オ、イ〳〵。

　ト 六三郎、藍汁の桶と酒樽、肴籠に魚を入れて持つて出る。

最前から呼んで居るのに、マア、もそつと、ソロ〳〵行かんせんかいの。

さよ　アノ云うてぢや事わいの。かれこれ云ふうち、もう向うが內ぢやわいな。

六三　ムウ、向うに見える內が今度、宿替へして來る內かいの。

吉兵　なんと、寛濶に見えて、好い內であらうがな。

かし　途中で話しせすと、早う行かんせいな。

　ト 捨ぜりふ云ひ〳〵、皆々、本舞臺へ來て

吉兵　先づ商賣第一の道具は、爰へ掛けうわい。

　ト 看板を門口へかける。

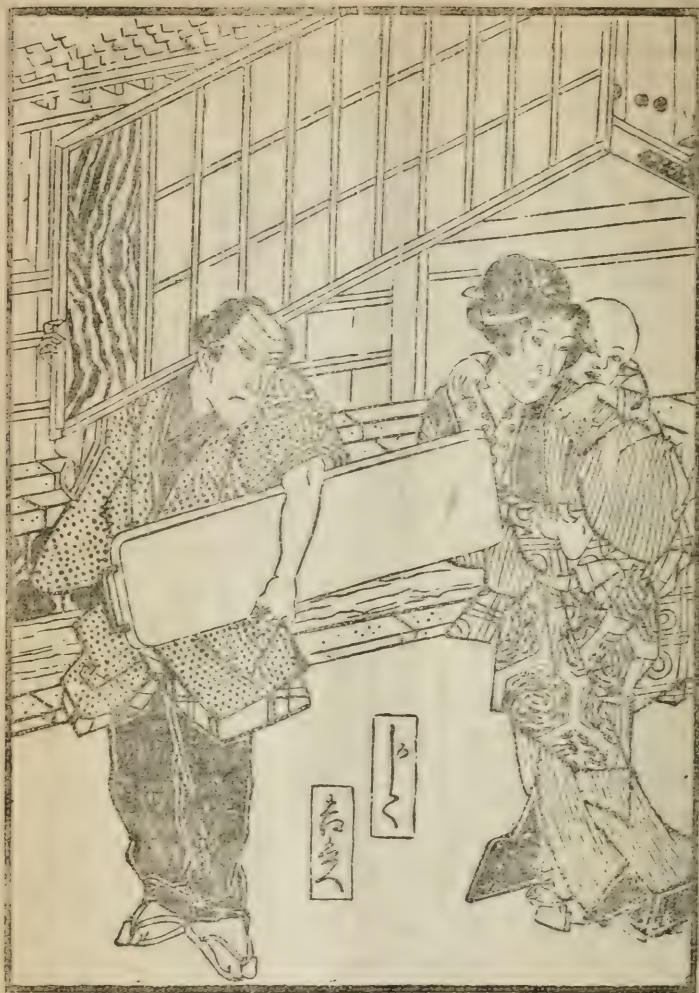
いは　吉兵衞さん、もうあちらの內は、片付きましたか。早い事でござんすなア。

吉兵　イヤモウ、案じるより産むが易いと、お前さんがお世話なされて下されますので、思惑よりは、早う片付いてしまひました。それはさうと、次手ながら、ちよつとお引合はせ申しませう。おさきめは、樣子がござりまして、不緣に致し、これに居りますが女房、下地に變らす、御懇ろになされて下されませ。

いは　ほんに、おさきさんには、別してお心安くしましたに、これも氣の毒な事でござりました。シタガ、めでたい家移りに、こんな事は云はぬ事。どうで每度參じまして、御厄介でござりませう。マア、吉兵衞さん、おさきさんとは違うて、お年も若し、そして、一向、美しうもあるし……さぞマア。

かし　何にも、勝手も存じませぬわたし、この上ながら、よろしうお賴み申します。

六三　サア、家移りの御祝儀、まんざら、白粥ばかりでも濟むまいと思うて、買うて來たこの魚、今度のお家さん

根本「競かしくの紅翅」押絵

砂原紋屋の場

に、吉兵衛さんが吸ひついて居るやうに、蛸もあり、鰻も元は、穴から出たもの、生酒も一升取つて來た。サアサア、料理せにやならぬ。皆さんも手傳うて下んせ。

さよ　アイ〳〵、合點でござんす。

いは　わしもとも〳〵、手傳はうわいなア。

ト高砂やの唄になり、めい〳〵肴の料理したり、そこらを片付けたり、いろ〳〵する。

吉兵　コレかしく、職人の女房に、そんなピロ〳〵した事ではならぬ。マア、前垂れでもしたがよい。

さよ　ハイ、下地のお家さんのが、爰にござります。

ト前垂れを出す。

吉兵　エ、おさきの前垂れか。見るもいま〳〵しい。そりや、よしにせい〳〵。

六三　オット、おれがのを貸しませう。

ト六三郎、前垂れを解き、かしくに渡す。かしく、前垂れを取つて、する。

吉兵　よし〳〵、それで、お家さんらしくなつた。

さよ　わたしや、白粥の米洗うて來うわいな。

吉兵　かしく、わが身も、米の洗ひやうを、おさよに傳授してもらや。

かし　アイ〳〵。

ト兩人、いろ〳〵米を洗ふ事あるべし。

いは　大方、これで片付いた。煮炊きは、臺所へ持つて行かう。

ト納戸へ入る。

吉兵　坊めは、もう寢入り居つた。

かし　わたしに抱かして下さんせ。

吉兵　サア、奥へ連れて行きや。

かし　アイ〳〵、そんなら。

トかしく、吉松の寢て居るを、抱き上げて、納戸へ入る。唄になると、皆々、入る。あと合ひ方。六三郎、絞りの仕事道具を、こて〳〵と出し

六三　マア、今日はめでたい家移り、仕事初めもしまふわい。ほんに、おりや、この間、新地の川佐で、七郎助めが金持ち風、吹かし居つた其むやくしさ。十右衛門めが御用金の封切つて、かしくさんの身請けし居るその時は、濟まぬはかしくさんぢや。ようマア、此方の旦那をたろうに懸けをつた、惡い奴ぢやと、惡口のたら〳〵、間もなう駈落ちして、吉兵衛さんと連れ立つて、戻らしやるそれを思へば、この間、川佐で惡口云うたのが、今ではど

うやら氣の毒な。云はいでもだんない事を、ひよんな事を云うてのけた。

ト獨り言を云うて居る。此うちおさよ、納戸より出で來たり、いろ／＼色どろこなしあつて

さよ　コレ六三さん、お前、もう仕事始めてかいな。その仕事の上手さでは、さぞマアどこやらも……、思ひ廻せば今日の家移り、あの旦那さんも新米のお家さんに、引ツついてばつかり、わたしや一向けなりうなつて、心は上のそら豆や、戀ゆゑに身は黑豆や、なんぼわたしがやうな者でも、女子の中にまぜり豆、あの業平の豆男は、どんな嫌ひな女でも、惚れたと云へば情ありと聞くものを、ほんにつれない男づら、わしが思ひの數々は、大抵杓子あたりでも、知れてあらうに、エヽ、聞えぬ六三さん、腹の立つ、男づらではあるわいなう。

ト六三郎に取り付き、泣く。

六三　エヽ、アタ穢ない、知らぬわい。

ト突き放し、ツイと奥へ走り入る。

さよ　あの憎てらしい男づら。マア、待ちくされ／＼。

ト續いて走り入る。花道より若者大勢、襦袢一つにて、手桶をめい／＼に持ち、水祝ひの姿にて、七郎助、口明けの姿にて、一緒に出て來たり。皆々、同音に

皆々　女房呼んだら、川へほツこめ／＼。

七郎　コレ／＼皆の衆、いかい御苦勞。即ち紋屋の吉兵衞の內に、爰でござんすが、彼奴も又大抵の奴ぢやない。必らずコレ、引け取らぬやうに。

皆々　オヽ、そりや合點でごんすわい。

トこの時、暮れ六ツの鐘鳴る。

七郎　ヤア、ありやモウ入相の鐘、戀の叶はぬ意趣晴らし、とは云ふものゝ今にもどうぞ、かしくが嫁いて暮れ六つの、鐘に腹やへるらん。

皆々　祝うて、若水々々。

ト一同に聲を揃へて云ふ。この時、奧より吉兵衞、煙草盆提げ、かしくを連れて出る。

吉兵　コリヤ、うぬ等、理不盡な、何をさらすのぢや。

七郎　イヤ、なんともせぬ。吉兵衞、聞けばわりや、味な嫁呼んだとの事。それで、水祝ひに來たのぢや。それとも、四の五の云はずに、かしくを此方へ渡せばよし。

吉兵　イヽヤ、さうはマアなるまい。かしくは、もうこの吉兵衞が手活けの花嫁、落花狼藉な事はさせぬわい。

七郎　こりやをかしい。あのかしくは、十右衞門が、ぼく

の高い金出しこの身請け。それゆゑ、十右衛門が今の流浪。この間から、かしくが行くへを、方々と尋ねてゐるとの事。さすれば今の間に、爰の内へ尋ねて來るは知れた事。こんな危ない所にゐやうより、かしく、大金持ちのこの七郎助さまの方へ來りや、直ぐに奥様、吉兵衛の手を切つて、おれに從へ。かしく、返事は、ド、どうぢや。

かし　知らぬわいなア。十右衛門さんの屋敷を、駈落ちして出るからは、この身は兼ねて無いものと、覺悟に極めて居ますわいなア。例へ、どのやうな憂目に逢ふとても、吉兵衛さんゆゑなら、わしやいとやせぬ。一日でも此やうに世帯したらば、わしや嬉しい。今でも十右衛門さんが尋ねて來てどあつたら、切いるゝ心でござんすわいなア。

七郎　すりや、どのやうに口說いても。

かし　お前の心に、今さら從ふやうな、かしくではござんせぬ。ドリヤ、わたしや髪撫でつけて來うか。

　ト唄になり、かしく、こな[illegible]つて、納戸へ入る。あと合ひ方。

七郎　そんなら、どうでもかしくの挙との。こりや若水を.祝はにやならぬわい。

吉兵　マア待つた、七郎助。

七郎　ムウ、待てとは、なんぞ用があるか。

吉兵　おれが女房のかしくなれど、いま改めて貴樣に、この取持ちして進ぜうかい。

　ト七郎助、吃驚りして

七郎　ヤア、なんと云ふぞ。アノ、かしくが事を思ひ切つて、この七郎助に取持つてやらうとは。

吉兵　さればいの。事と品とに依つたら、かしくを、こなさんに遣るまいものでもないが、七郎助、爰は物も相談ぢや。出して下んせ。

七郎　ムウ。出せとは、そりや何を。

吉兵　イヤ、外でもない、貴樣が持つてゐる、空蟬の香爐。

七郎　ヤア、イヤ、そんな物は知らぬわい。

吉兵　ハテ、隠さんすな、七郎助、手が悪いぞや。昨日、北野の芝居前で、田舍侍ひが口走つたを、チラリと聞いて置いた。唐崎家とやらの結納の印、空蟬の香爐は、七郎助、貴樣の所に埋んであらうがの。

七郎　ムウ。如何にもさう云や、もう隠すに及ばぬ。成る程、香爐はおれが肌身離さず、爰に持つて居る。

・卜香爐を出し

が、この七郎助、香爐を埋んでは置かぬぞよ。こりや、さるお侍ひから、三百兩の質物に取つてあるのぢやが、又この香爐が、どうしたぞえ。

吉兵　されば〻、その品が、ちとおれが入用なと、云ふ譯は、外でもない、彼の十右衞門の方に、無ければならぬその香爐、又かしくゆゑに、御用金の三百兩、遣ひ果した身の誤まり、剩さへかしくは、十右衞門どの〻心に從はず、駈落ちした今日の體裁。十右衞門どの〻心を思ひ遣つて、この吉兵衞が一思案。おれも男ぢや。人に知られた、縮りの吉兵衞、人の難儀するを、高見から見ては、よう居らぬ日頃の氣質。おれさへかしくを思ひ切つて、貴樣の心に從はさば、あれが身の代は三百兩、又その香爐の代も三百兩。さすれば、かしくと香爐を引替へにすりや、貴樣も思ひが晴るゝと云ひ、また十右衞門どのに、その香爐を渡しなば、三百兩の御用金を償なうたも同然、双方無事に納まりなば、かしくが義理も立つ道理。なんとさうではごんせぬか。

七郎　面白い。流石の吉兵衞、よく思ひ切つた。如何にも香爐を渡さう、と云ひたけれど、今はならん。貴樣の詞は違ひもすまいが、もし又、かしくが從はぬその時は。

吉兵　サア、そこでごんす。マア、おれが料簡には、今宵夜半の鐘がゴンと鳴ると、貴樣、此方の內へ忍んでごんせ。そこで、おれが合圖をするワ。それまでに、とんとかしくに納得させ、得心したら、これにも合圖をさすワ。なんぼそれ者のかしくでも、今の今まで嫌ひぢやと、云ひ通した七郎助、手の裏返すやうに應とは云はれまい。合圖をしたら、得心が行たのぢやと思うて、香爐とかしくを引替へにして下んせ。なんと、この手段はどうあらう。

七郎　成る程、こりや天晴れ妙計、出來た〱。して、その合圖と云ふは、どうするのぢや。

吉兵　サア、夜半が鳴つたら、忍んでごんせ。そして、そこらは眞暗がりにして置けば、お前はお猫の物眞似をするワ。ところで又、かしくが鼠の眞似をするワ。それが得心の行た印ぢやよいか。さう思うてゐやんせ。

七郎　こいつはえらいワ。そんなら吉兵衞、かしくさへ抱いて寢さしたら、その時には香爐を渡す。

吉兵　何かは今宵の、夜中を合圖に。

七郎　猫の眞似して忍んで來う。シタガ、折角仕込んだ、

水あぶせのこの趣向。
皆々　どうやら七郎助さん、お前の方になつて來たぞや。
七郎　エヽ、なに吐かすぞえ。そんなら吉兵衞。
吉兵　七郎助どの。必らず香爐、忘れぬやうに。
七郎　それを忘れてよいものか。皆の衆、サア、去なうかい。
吉兵　ようごんした。
ト唄になり、皆々、入る。吉兵衞、思案のこなし、いろ／＼ある。夜番、太鼓を持ち、出て來り
夜番　ヤレ／＼、宵からグッタリと、よう寢た事ぢや。申し、何時でござりますな。
吉兵　エヽ、夜番が時を問ふと云ふ事があるものかい。あつたら思案を、どこへやら遣り居つた。
夜番　出たらめなとこ打つてこまそ。
ト無茶に太鼓を打つて入る。合ひ方になり、かしく、寢卷の姿にて、蒲團を持ち出で
かし　サア、こちの人、今日は定めて草臥れてゞござんせう。もう寢やしやんせんかいなア。
吉兵　オヽ、さうせう／＼、宿替へと云ふものは、ほつと草臥れるものぢや。

トこの時、六三郎、六枚屏風を持ち出で
六三　この屏風は、爰らに引き置かう。時に、家移りの床堅め。改めて、祝言の杯やら、旦那さんも、サア一杯やらんせ。
ト云ひつゝ、行平鍋にて酒の燗をする。
即ち、肴はめで鯛の鹽燒に、お二人が吸ひつきの蛸の酢の物とは、なんと、よい出合ひでごんせうがの。
ト云うて居る所へ、下女さよ、出て
さよ　コレ、六三さん、見れば見る程、けなりい事ぢや。どうぞ、わたしが云ふ事、叶へて下さんせいなア。
六三　エヽ、アタ嫌らしい。否ぢやわい。
ト沒義道にする
吉兵　コレ／＼六三、其やうに素氣なうは云はぬものぢや。イカサマナア、おいら二人が此やうに仲のよい所を見ては、そりや羨ましがるのも道理ぢや。ハテ、おれが許した程に、六三、なにも後生ぢやと思うて、云ふ事を聞いてやりやれ。
六三　エヽ。
さよ　そんなら、旦那さんの仲人で。こんな嬉しい事はたいわいなア。

吉兵　コリヤ〳〵、おさよ、併し今まで否々と思うてゐた六三、ツイ應とも云はれまい。マア、おれがとツくりと、云ひ聞かして置から程に、夜半になつたら忍んで來るがよい。なんぞ、それには合圖をしたいものぢやが。カウツト、オヽ、それ〳〵、わりや鼠の眞似して來い。そこで六三も又得心したら、猫の眞似をするワ。さうすると、互ひに得心した印ぢやが、なんと、よい合圖であらうがの。

さよ　フム、そんならアノ、わたしや鼠の眞似して、忍びますのかえ。必らず待つてゐて下さんせ。オヽ、嬉し。

　トいそ〳〵喜び、納戸へ入る。あと砧の合ひ方になり、砧の音する。

吉兵　ありや、近所の夜鍋と見える。まだ夜中には間もあらう。六三、ちよいと爰へおぢやいなう。

六三　ヘイ、なんぞ、用でござりますか。

　ト坐る。

吉兵　ちと、其方に頼みたい事があるが、思案極めて、頼まれてたも。

六三　ハテ、改まつたお詞、親方の云ひつけなら、思案極めるには及びませぬ。どのやうな事でも承はります。

吉兵　それ聞いて、先づは過分。

六三　して又、其お頼みとは。

吉兵　女夫になりや。

六三　そりや、誰れと。

吉兵　ハツ、知れた事、このかしくと。

かし　エヽ。

　ト恟りする。合ひ方になり、吉兵衞、六三郎の手を取り、かしくの側へ坐らせ、吉兵衞は下座へ坐り

吉兵　エヽ、聞えませぬ若旦那、この吉兵衞を、まだ疑うて、お身の上をさつぱりと、お明かし下されませぬな。如何やうにお隱しなされても、備後の國、松江の御家中櫻井隼人さまの御子息、要人さまでござりませうがな。サヽヽヽ、驚ろきは御尤も。斯く申す吉兵衞が母と申しまするは、あなた樣に、お乳を上げました、乳母でござります。

六三　エヽ。

吉兵　先達て、私し方へ奉公を望んで、お越しなされました、あなた樣の形恰好、なか〳〵絞屋の手間取り、職人をなされますやうな御人體ならず。由ある歷々のお侍ひの御子息ならん。定めて、若氣のお誤りにて、御勘當で

根本「競かしくの紅翅」挿繪

砂原絞屋の場

も受けさつしやつて、それゆゑの事であらう。ア、お氣の毒な事ぢや。いつぞはお身の上も承はり、及ばずながら、御歸參のお詫びも致して進ぜましたいと、思ふ折り節、いつぞや風呂場に掛けてあつた守り袋の裂れ、合點のゆかぬと思ひ、私しが所持の守り袋と、引合はせ見れば同じ裂れ。いよ〳〵不思議に思うて、明けて見れば、さてこそ〳〵、思ひも寄らぬ櫻井さまの御子息。さすればおれが爲には、お主なり乳兄弟。又いま一枚はかしくが起請。すりや、北の新地、油屋のかしくどのと、深う云ひ交し、それゆゑの御勘當であらうが、併し、いま爰で御意見申し上げ、二人の仲を引分けるやうにしたら、互ひに若氣の水の出花。もしもの事があつては、結局お爲にならぬと思ひ、心に思はぬ新地通ひ。四十に餘る身を捨て、表向きはおれが色客。かしくの狀の取り遣りにお前樣を遣はしますも、かしくどのゝ顏が見せたさばつかりでござります。これも、死なれた母の育てたお前、ひよつと短氣な心でも出やうかと、案じ過しをしまするも、忠義と孝とつ絞り染め。吉兵衞が心底はこの通り。色に迷はぬ身の云ひ譯、かしくどのが、知つてゞござりませうわいなう。

六三　さては、さう云ふ心であつたか。さうとは知らず、今までは疑うて居やしやんした、吉兵衞さんとわたしが仲の、

かし　樣子は解りましたかえ。

六三　イヤモウ、解つた段ではない。だん〳〵の深切、忝ない。

かし　月の曇りも今晴れて

六三　思ふ港へ入り船の

吉兵　今宵は夜とともゆつくりと。

六三　そんなら、吉兵衞。

かし　オヽ、嬉し。

ト抱きつき、屏風引き廻す。

吉兵　千秋萬歳の、千箱の玉を奉る、テン〳〵。

トこの前より女房おさき、門口に窺ひ居て、樣子を立ち聞きして居ると、屏風の内より手を叩く。

ハイ〳〵、もうお茶ぢやさうな。

ト茶を汲み、持ち行く。此ところへ吉松、出て

吉松　母さんは、どこにぞ。早う呼んで下されいなう。

吉兵　オヽ、目を覺まして、母を尋ねるか。コリヤ、よう聞けよ。母はな、ちつとした事があつて、去なしてしま

うた程に、これから余所の小母さんや、この父と寝るのぢやぞよ。
吉松　否ぢや〳〵、母さん呼んで。
吉兵　其やうに、否ぢや〳〵と云うて、あつゝ揺ぶるぞよ。ドレ〳〵、おれが寝させてやらう。ねん〳〵ねて〳〵ねん〳〵や、ねんねの守りはどこへ行た、山越えて……その山家の事で、かしくどのは人の花。ハテ、厄介ものではあるわいの。
ト唄になり、入る。女房いろ〳〵あつて
さき　定めて坊が、乳を呑みたがつて居やう。母はコレ、爰に戻つて居る程に、コレ、吉兵衛どの、爰を明けて下さんせ。昨日のやうに悋氣したは、わたしが悪うござつた。あやまつて居りまする。どうぞ機嫌直して、コレ、矢ツ張り元の女房ぢやと、云うて下され。何かの様子はみんな爰から聞いて居りました。其やうな、深い料簡があらうとは、夢さら知らぬ女子の淺はか、鼻の先智惠、もう堪忍して下さりませ。吉兵衛どの、コレ、申し〳〵、かしくさん、どうぞ、詫びして下さりませ、賴みますわいなう。わたしや吉松が不便にござんすわいなう。
ト戸を叩き、いろ〳〵ある。

エヽ、此やうに云ふ聲が、これが耳にも入らんかいなアハア。
ト泣く。唄になり、花道より十右衛門、着流し、ぶらりの提灯を持ち出で、門口の看板を見る。此うち女房おさきは、橋がゝりへ隱れると、あと合ひ方になり
十右　すりや、絞屋の吉兵衛の宅は、この家とな……賴みませう〳〵。吉兵衛どの、在宿なら、ちよつと對面が致したい。爰、明けて下されい。
ト嚴しく戸を叩く。もの音に、かしく、六三郎、起き出て恟りし
かし　ヤア、ありや十右衛門さんの聲。
六三　そんなら、爰へ搜しに來をつたか。こりや堪らぬ。どうしたらよからうぞいの。
かし　どうと云うて、どうなるものぞいなア。
ト兩人、いろ〳〵あわてる。十右衛門、頻りに戸を叩く、吉兵衛、目を擦り〳〵出て
吉兵　ハイ〳〵、明けます〳〵。どなた様でござります。
十右　船越十右衛門と申す者でござる。ちと內々にて、御意得たき事ござつて、參つたのでござる。早く爰を、明けさつしやれ。

吉兵 ハヽ、。

ト恟りして

船越十右衛門さまと仰しやりますか……さてこそなア。そんなら、もう疑ました。どうぞ、明日お出でなされて下さりませ。

ト慄へ〳〵云ふ。

十右 イヤ、今晩、是非にお尋ね申さねばならぬ儀がござつて、わざ〳〵参つたれば、早く爰を明けさつしやれ。

ト頻りに戸を叩く。内には、皆々、慄へ〳〵、吉兵衛ソツと、両人に囁き、上手の障子屋體へ無理に二人を押しやり、蒲團、屏風を片付ける。此うち十右衛門、頻りに戸を叩く。

早く明けさつしやれ〳〵。

吉兵 ハイ〳〵、只今明けまする〳〵。

ト戸を明け、慄へ〳〵居る。

十右 然らば、許さつしやれ。

ト内へ入る。この時、女房おさき、ソツと内へ入り、納戸へ忍び入る。

して、紋屋吉兵衛と云ふに。

吉兵 わたしでござります。

ト十右衛門、吉兵衛と顔見合はせ

十右 すりや、吉兵衛どのと云ふは、貴殿となア、アノ、吉兵衛どのが。

ト合點のゆかぬこなし

吉兵 ハイ、左やうでござります。

十右 拙者ことは、船越十右衛門と申す：田舎侍ひでござるが、先頃より、フト北新地へ罷り越し、油喜のかしくと申す女郎に心をかけ、三百両を出して、彼のかしくを身請け致せしところ、昨日、其かしくが駈落ち致し、行くへ相知れ申さす、諸々方々と手分けを致し、捜しますれども、なんの手がゝりもござらぬ。ほゞ様子を聞きますれば、其かしくが色容と申すは、吉兵衛どの其許との噂ゆゑ、夜中ながら尋ね参つて、お目にかゝれば、吉兵衛どのゝ、年恰好、かしくが間夫とは合點ゆかざる事なれど、吉兵衛どの様子御存じでござらば、かしくをお出し下されい。

吉兵 成る程、お疑ひなさるゝは、御尤もながら、油喜のかしくは、折々呼んだ事もござりますれど、そりやほんのモウ一通り、それねば世間では、間夫ぢやの、イヤ色客ぢやなどゝ、モウさま〴〵、いろ〳〵に申しますれど

みな人の、こりや、説と申すものでござります。勿論、かしくが駈落ちした事ぢやゝら、又どこに隱れて居る事ぢやゝら、とんと、私しは存じませぬ。ハテ、それはマア、お氣の毒な事でござりますなア。

十右　イカサマ、一應では、かしくをお出しなされぬも尤も。シタガ、吉兵衞どの、爰の所をお聞き下されい。この十右衞門は、大切なる本國の御用を承はつて、即ち當大坂表へ罷り登り、御用を調ふ某。君傾城に魂ひを奪はれ、切つたりはつたり致すやうな、十右衞門ではござらぬ。國元の御用も、最早相濟みましたから、いよ／＼明日は、出船仕る筈。暫らくにても、近付きになり申したかしく、暇乞ひなりとも致さうと存じて、參りましたれば、どうぞかしくにお逢はせ下されい。

吉兵　成る程、お侍ひ樣の、だん／＼のお詞。よもや僞はりはござりますまいが、イヤモウ、其かしくさへ、私し方に居りますれば、つい、ハアと申して、お逢はせ申しませうが、何を申すも知らぬが定。得ては又、こんな內の押入れや、長持ちの中に隱して置いて、出まいぞ／＼と云ふやうな、マア事を、芝居で每度見て居ります。サア、十右衞門さまとやら、お疑ひの晴れるやう、どこなりと、開けて御覽じませ

ト障子屋體、押入れの戶など、引き明けて見せる。十右衞門、心意氣あつて

十右　すりや、この內には居ぬとな。ハテ、合點のゆかぬ。

ト思案の所へ、バタ／＼にて奴宅平、走り來り

宅平　お旦那樣には、これにお越し遊ばされましたか。ヤレ／＼嬉しや、先づは御別條なき體、宅平め、安堵仕りました。即ち、お國元より、火急の御狀到來。イザ、御披見遊ばされませう。

ト狀を差出す。十右衞門、手に取つて、開き見る。

即ち、お飛脚は嘉十郞さま。御旅宿へお越しあつて、まだ外に、いろ／＼の御用事もこれある由、是非々々、只今、中の島へお歸り下さりませう。

十右　すりや、嘉十郞どのお內談とな。

ト思案して、そろ／＼立ち上がり、この家に氣を配り、門へ出る。宅平、供して出る。吉兵衞、戶をピッシャリと締めて、胸を擦り居る。十右衞門、ヂリ／＼と花道、よき所にて

奥方よりのお頼みと云ひ

宅平　必らずともに、御短慮を。

十右　宅平、供せい。

ト　ついと入る。

宅平　旦那の顏色、さうぢや。

ト後より走り入る。

吉兵　ヤレ／＼嬉しや。ほんまに去なれたさうな。一生に覺えぬ、ひあいな目に會うた事ぢや。身内がさつぱり汗になつたわい。

ト　この時、おさき、納戸より出かけ居て

さき　お茶上げませう。

ト　茶臺へ茶碗を載せて出す、吉兵衛、思ひがけなく、恟りし

吉兵　ヤア、わりや女房、ぢやない余所の女中、いつの間に戻つて居るぞい。

さき　今のお侍ひが、入らさんした後から、ソツと入りまして、お前の心底、樣子も、みんな聞いて居ました。わたしが悋氣したのは、惡うござんした。どうぞ昔のよしみに、堪忍して下されいなア。

吉兵　ア、、まざ／＼と今での後悔。一旦去つた女房を、呼び戻す吉兵衛ぢやないが、それとても、また時節があらう。

さき　成る程、そりやよう合點して居ります。そんならいつそ、乳のあるが幸ひぢや、爰の内へ、乳母奉公がしたうござんす　なんと吉兵衛さん、物は相談ぢやが、置いて見て下さりませ。

ト　吉兵衛、ちよつと心意氣あつて

吉兵　イカサマ、こりや面白い。三行半の年季證文。緣のものぢや。勤めて見やんせ。

さき　ヤレ／＼嬉しや、先づ吉松に、

ト　唄になり、おさき、納戸へ入る。後、合ひ方。方々に時の太鼓、打つ。

吉兵　ありやモウ夜中、大方、七郎助が來るであらう。此方の手筈も、さうぢや。

ト　入る。花道より七郎助、その外三人、同道にて來り

仕一　いよ／＼、川口林兵衛さまのお賴みの通り

仕二　手筈はよいか、七郎助どの。

仕三　なんぢや、キヨロ／＼とした、こなたの目付き。

三人　こりや、どうぢや

七郎　ちつと此方に叶はぬ用事が出來て、林兵衛さんどころぢやないわいの。

仕一　なんの事ぢや。

仕二　そんなら、この由、林兵衛さまへ。
仕三　エヽ、阿房らしい。皆ごんせ。
　ト入る。あと近江源氏、九段目の合ひ方になり、七郎助、いろ〳〵をかしき身振りにて、内へ入る。
七郎　にやん〳〵。
　ト猫の眞似をすると、下女おさよ、窺ひ出て
さよ　ちう〳〵。
七郎　にやん〳〵。
さよ　ちう〳〵。
七郎　にやん〳〵。
　ト兩人、探り合ふ。雨車になる。かしく、窺ひ出て、暗がりにて三人、探り合ひ、七郎助、うまい〳〵と云ふこなし。
　ソレ、香爐ぢや。
　ト出す。かしく、ソッと取り、下女おさよ、七郎助が手を取り、障子屋體へ連れて入る。かしく、心意氣あつて、六三郎、手燭を持ち出で、かしくと顏見合はせ
六三　かしく、して香爐は。
かし　首尾よう手に入れましたわいなア。
　ト六三郎に渡す。

六三　忝ない。
　ト行燈に火をともす。トこの時、納戸より十右衛門、窺ひ出で、屛風の後に正面に向ひ、立ち聞きする。
折角、吉兵衛の情で、二人が面白う話して居る最中に、あの十右衛門めがうせをつて、ひいやりとさしをつた。
かし　わたしは一向足が立たなんだわいなア。
六三　よもや、爰の内で、二人が斯うして居やうとは、十右衛門も知るまい。大方、夜がなよつぴて、方々を尋ね歩いて居るであろ。
かし　ほんに、おいとしい事でござんす。
六三　なんの、おいとしい事があるもので。この間、川佐で七郎助が云うた通りぢや。高の知れた貧乏侍ひが、其方を身請けせうとて、殿樣の御用金を、我まゝに遣ひ果し。
かし　それもみんなわたしゆゑ。十右衛門さま、どうぞ堪忍して下さんせ。
　ト拜む。十右衛門は屛風の外にて、始終、腹の立つこなし、いろ〳〵。
六三　大方、やがてお國から尻が來て、首をコロリと落され、木の空へ上がらにやならぬ筈のところ、吉兵衛が男

氣で、この香爐の手に入つたに、こりやコレ、十右衛門が歸參の種。吉兵衛を命の親と、拜んだがよいわいなう。

かし　どうぞ首尾よう、歸參がさせましいわいなア。

六三　なんの、あんな奴は、以後の見せしめ、首をコロリと落すがよい。

ト この時、十右衛門、屏風を引き上げ

十右　そりや、誰れを。

六三　ハテ、知れた事、船越十右衛門を。

十右　うぬ。

ト 引拔き、兩人、十右衛門が顏を見て、恟りして逃げうとするを、引きとゞめ、十右衛門、心急きたることなし。

武士たるものが、戀は心の外。知行に離れ、諸人に笑はれ、忠義の道も忘れ果て、斯くなり行くも、おのれ、かしくゆゑ。今一度逢うてこの恨みが云ひたさに、裏より忍んで最前から、逐一樣子を聞くに付け、憎さも憎し、恨みの刃、思ひ知れ。

ト 十右衛門、切らうとする。吉兵衛、走り出て

吉兵　待つた／＼、先づ暫らく。

十右　なにを。

ト また切りかゝる。バタ／＼にて、七郎助、下女おさよ、出づる。十右衛門、皆々を一かせ切る。

さき　アヽ、人殺し／＼。

皆々　人殺しぢや／＼

ト ばた／＼にて、捕り物太鼓になり、夜番、うろたへ走り出で來たり、一かせ切らるゝ。

夜番　人殺しぢや／＼。

ト 逃げて入る。町人大勢、めい／＼弓張り提灯を持ち出でゝ

大勢　アリヤ／＼。

ト 入り亂れになり、皆々、逃げ行くを、十右衛門、追ひ廻る事、いろ／＼あつて、皆々を橋がゝりへ追ひ込み、入る。バタ／＼にて花道より奴宅平、走り來る。おさき、うろたへ出る。

宅平　心元ない旦那の身の上。

さき　十右衛門とやらが、大勢人を殺めて居るわいなア。

宅平　南無三方。

ト 橋がゝりへ走り行き、入る。吉兵衛、六三郎、走り出る。

さき　ヤア吉兵衞どの、こなたも切られさんしたかいなう。
吉兵　要人さま、早うこの場を逃げて下さりませ。大切なその香爐に、凶事なきやうに、早う〳〵。
ト内にて大勢
大勢　アリヤ〳〵〳〵
六三　ぢやと云うて、こなたの手の深手を見捨てゝは。
吉兵　エ、くど〳〵と。愛構はずと、早うござらしやつて下さりませ。
六三　そんなら、吉兵衞。
ト走り入る。
吉兵　かしくの身の上、心元ない。
さき　コレこちの人、待たつしやれいなう。
ト吉兵衞に附いて入る。チョン〳〵、返し。
造り物。平舞臺。高塀、用水桶あり。裏町の模樣。矢張り。バタ〳〵にて捕り物太鼓。大勢、人靡する。臆病口よりかしく、深手を負ひ、よろぼひ〳〵出て
かし　六三さまいなう〳〵。
ト後より十右衞門、窺ひ出て
十右　おのれ、かしく、思ひ知つたか。
ト切り付ける。
かし　ウア、、、。
トあちらこちらへ逃げ廻り、いろ〳〵あつて、よき所にて十右衞門、ポンと切り下げる。この時、夜番、出で來たり
夜番　人殺しの十右衞門。
ト取つてかゝるを、ポンと切り殺し、かしくの死骸をキッと見て
十右　戀と無常の
ト血刀を拭き
境ぢやなア。
トこの見得、よろしく

幕

大詰

大仁村花の茶店の場
神崎川の場

役名――大仁村與三次。松江息之、園生姫、娘、おとく。てんてつ和尚。代官、狩山藤内。川口林

根本「競かしくの紅翅」押繪

砂原裏町の場

兵衛。野川嘉十郎、紋屋職人、六三郎實ハ櫻井要人、船越十右衛門。

造り物、正面、二間の間、二重舞臺、鼠壁、納戸口、臆病口の方、落ち間、二階障子屋體。下に切り戸附きの塀、人の出入りあるべし。その前は杜若、板橋をかけ、池の體。橋がゝりの方、落ち間に糸櫻の棚、所々に皐月の花盛り、枝折り戸口の門口、いつもの所に何れも綺麗に据ゑて、大仁村の花の茶屋の模樣、二重舞臺に園生姫、白絆の振り袖帷子、娘おとく、紺がすり振り袖帷子に前垂れして、兩人ともに世話娘にて、酌して居る。侍ひ二人、町人三人、拳を打つたり、いろ／＼遊び居る模樣にて、白囃子にて幕明く。

町一　いつから。

町二　ちゑ。

町三　さんな。

侍一　玉で。

侍二　おはね。

町一　こりや叶はぬ。サア／＼、一杯つぎ召され。

園生　アイ／＼。

ト園生姫、酌する。

町二　時に、おとくさん、このお娘は、これまでとんと見馴れぬ子ぢやが、こりや、與三次どのの娘御でござるかの。

園生　イヽエ、わたしは。

とく　サイナア、此お子は、與三次さんの妹御の、お子さんぢやによつて、與三次さんの爲には、姪とやら云ふものぢやといなア。

町三　イカサマ、由來を聞けば有り難し、斯う二人まで、美しい者揃へたら、花の茶店は花くらべ。追ひ／＼に、客が來ませうわいなう。

とく　どうぞ、御贔屓なされて下されませ。

町一　イヤモウ、贔屓にしませいでわな。此方からも贔屓に來ませう程に、お前方も亦、薩摩訛りぢや無いけれどりんによがつてくれめせよ。ハヽヽヽ。

町二　サア／＼、これから又、二丁目へ行て、呑み直さうぢやあるまいか。

皆々　さうせう／＼。お娘、さらばえ。

園と　ようお出でなされました。又お近いうち。

ト皆々、捨ぜりふ、ワヤ／＼云うて、橋がゝりへ入ると、在郷唄になる。花道より與三次、親仁の形にて、木綿やつしの羽織着て出る。後より、てんてつ坊主、みの衣に一升樽提げて、オ、イ／＼と云うて、同じく出て來り、花道よき所にて、

坊主　コレ／＼親仁さん、お前、年寄りでも、餘程足が早いわいの。わしは又、好物の樽を提げて來たゆゑか、なんぼ急いで歩いて見ても、こなさんの足には、叶はぬ叶はぬ。

與三　さいなう、おれも内に年端のゆかぬ、近所のお娘を、雇はかして置いて寺參り。ひよつと又、留守の内に客でもあれば、忙がしかろと思うて、氣が急くゆゑ、それで自然と、足が早うなるのでござるぞいの。

坊主　イヤモウ、彼れこれ云ふうち、こなさんの内ぢやわいなう。

與三　サア／＼、てんてつ和尚、お入りなされませ。

ト内へ入る。

とく　父さん、今お歸りでござりますか。

與三　ホウ、これは／＼おとくさん、毎度留守番、大きに御苦勞でござりました。時におまつ、わが身やなア、此やうな端近い所へ出やんなと、云ひ付けて置いたに、なんで又、出やるぞいの。

園生　イ、エイナア、奥にばつかり入つて居ると、退屈ぢやに依つて。

とく　そして、今の先まで、堂島のお客さん達が、大勢見えてゞあつたに依つて、手傳うてもらひましたのでござりますわいなア。

與三　フム、そんなら何と云はしやゑ。堂島から、お客達が見えたとなア。それは／＼、さぞ忙がしかつたであらう。御苦勞々々々々。

坊主　イヤ、ナウ與三次どの、こちらのお娘は、毎々見受けるが、近所のさうなが、又あちらのお娘は、ねつから見ぬが、矢ッ張り近所のかいなう。

與三　イヤ／＼、これは。

ト行き詰まり

オ、それ／＼、わしが妹めは、大坂の町中に居りますが、その娘、この子たれば、おれが爲には姪でごんすがこの中は、ちと氣分が悪いさうなゆゑ、この内の庭の花盛りでも見て、また氣が替へたらばよからうと、それで、この間中は來て居るのでごんすわいなう。

坊主　ヤレ〳〵、よい姪御があるなア。ほんに、餘ッぽど位高い、よい娘ぢやわいの。

與三　時に、おとくさん、もう大方、客も見えまい程に、お前は早う去んでおくれ。毎度御苦勞でごんした。内へお歸りたらば、母さんによう云うておくれ。毎度おとくさんを借りまして、定めてお内のお事缺けにござりませうと、ようお禮云うて下さんせや。

とく　アイ〳〵。左やうならば、もうお暇申しませう。おまつさん、去んで參せうえ。

　トおとくは橋がゝりへ入る。

坊主　ほんに、爰のお娘のお八重どのから、便りでもござるかいの。

與三　これは、つい近くに居りますから、毎日便りをしてくれまする。さうして、良い客があるかして、五兩三兩は、度々おこしてもくれるゆゑ、此やうに小綺麗に普請したも、みんな彼奴が世話で、花の茶店々々と、評判になりますわいの。それはさうと、てんてつさま、一杯やつてから、娘の祥月命日の、回向してもらひませうかいの。

坊主　イヤ〳〵、用事が片付かぬと、ゆるりと飮まれぬ。マア、酒は後へ廻し、奧へ行て、回向からしてしまはう。

與三　そんなら、さうして下され。

坊主　オット、合點ぢや〳〵。

　トてんてつ坊、納戸へ入ると、入相の鐘鳴る。

與三　サア、おまつも、奧へ行きやらぬか。

園生　この間、敎へてもらうた、糸つむぎの稽古せうか。

　ト行かうとするを、與三次、ちよつと止めると合ひ方になり、與三次、門口を締め、園生姫を上座へ直し

與三　今さら改めて申すに及ばねども、誰れあらう、中國歷々のお大名のお姫様、主從の緣あればこそ、悴十右衞門方より、暫らくお匿まひ申してくれと、細々と書面での頼み、悴が大切に致すお主様なら、隨分麁略には致さねど、御覽の通り、此やうな場狹い在所の事ゆゑ、人目に立つては、結句あなた様の、お身の障りにもなりませうかと存じ、勿體ない大名のお姫様を、おまつ〳〵と澤山さうに申しまする。無禮の段は幾重にも、眞平御免下されませう。

　ト手を突く。

園生　アノ云やる事わいなう。十右衞門始め其方までに、いかい苦勞をかけるのも、みんな自らが徒らから。堪忍

してたもいなう。

與三　必らず忰十右衛門から、お迎ひに參るまでは、餘人に覺られぬやう、矢ツ張りおまつ〳〵と申しますゝ程に、さう思うてござらしやつて下さりませ。シタガ、與も人目に立つ。御窮屈にはござりませうけれど、あの二階座敷へござらつしやつて下さりませ。

園生　そんなら與三次どの、ぢつゝない。叔父さん。

與三　ドリヤ、お坊の酒の、相伴しようか。

ト　れんころゝの流行り唄の合ひ方になると、園生姫は池の橋を渡り、切り戸へ入ろ。與三次は最前の樽を提げて、納戸へ入る。蛙の鳴く聲すると、十右衛門、着流し、大小、三度笠を持ち出て、花道、よき所にて

十右　カウツ、慥かに所は大仁村、花の茶店とあるからは大方向うに見ゆるが、親仁樣のお宅であらう。さうぢやさうぢや。

ト　舞臺へ來て、門口に立ち

誰れぞお頼み申しませう。

ト　云ふ聲、聞いて與三次、納戸より丸行燈を提げ出で

與三　エ、、爰の家は、其やうな慇懃らしう、案内乞ふやうな住居ぢやござらぬ。どなたが存じませぬが、つい內へお入りなされませ。

十右　然らば、御免下されませう。

ト　入り、與三次と兩人、顏見合はせ

與三　エ、、誰れぢやと思や、兄かいなう。其方なら猶の事、なんの遠慮せずと、入りやせいで。マア〳〵、此方へおぢや。

ト　上手へ坐らせ、煙草盆を持ち出て

ヤレ〳〵、よう來てたもつた。どうでも侍ひと云ふものは、親子の仲でも堅くるしいものぢや。イカサマ、それもさうかい。十年も遠ざかり、若狹の小濱から、この村へ來た事ぢやに依つて、內も變つてあり、マア〳〵、何事も云ふにや及ばぬ。サア〳〵、マア、ぬるいけれど、一杯飮みやいなう。

ト　茶を汲み、差出す。

十右　モウ、なんにもお構ひ下されますな。

ト　戴き、飮む。

與三　さて、この間には、思ひがけなう久し振りで、新地で逢うた時の嬉しさ、嬉しうて〳〵、夜の目も合はなんだわいの。時に十右衛門や、この間逢うた時、是非々々、明日はキツと參るであらうと、云やつたに依つてなう、

今日は來てたもるか、明日はおぢやるかと、心待ちに待てども／＼、來てたもらんに依つて、これは又、どうしたものぢや知らん、ちよつとなりとも、來てたもりさうなものぢや。何も旅宿からぢやと云うたとて、格別遠いと云ふ所でもなし、これはてつきり、新地の女郎の、油揚げにかゝつたものであらうと、親の身では案じまいものか。如何にお屋敷の御用が多いてゝ、ついちよつと來る程の事が、ならぬと云ふ事もあるまいがと、恨んで居た所に、其方の家來衆が手紙を添へて、お姫様を連れまして來て、暫らく匿まひくれよとある頼みの文言。様子は何も知らねども、こりや、なんぞ大切ない事であらうと推量し、随分大事にしては居れど、何を云うても、根が場狹い在所の事ゆゑ、人目に立てば、お身の爲にもなるまいと、近所隣へは、大坂の姪が遊びに來て居りますと云ひ紛らし、今日まではマア無事に、お匿まひ申したわいの。

十右　それは千萬忝ない仕合はせ。十年の餘も闊遠なし、親を見捨てたる不孝の悴、親なればこそ、お叱りも顧みず、却つて斯様な御厄介をお頼み申し、お禮は何とも申されませぬ。

與三　なんのいやい。こんな嬉しい事はないわいなう。心措きなうしてたもるが、實の親子。

ト此時、納戸よりてんてつ坊、盆に茶碗と銚子鍋を持ち出で

坊主　千秋萬歳の千箱の玉を奉る。

ト謠なうたひ、立ち出で、二人が前へ盆を直し

睦まじい親子の話しも、素話しでは退屈だ。わしも、獨り呑まうよりはと思うて、持つて出たわいなう。

與三　これは／＼てんての和尚、よう氣が付いた。ほんに、お前の兄はお馴染みぢや。ソレ、若狹の小濱に居りました時、宗太郎と云ひました兄は、これでござります。なんと、大きうなり、さうしてマア、好い男振りでござりませうがな。

坊主　イカサマ、さう云はつしやれは、幼な顔を思ひ出す。さて／＼、立派な侍ひにならしやつたの。わしも近頃小濱から、福島の庵へ轉住し、これの與三次どのとは、相變らず闊からの別懇。それゆゑ、今日も死なされた婆様の、祥月命日の回向に來て、大きに御馳走になりましたわいの。

十右　これは／＼、お久し振りの御對面。お名さへとんと

失念仕りました。

坊主　おれが名は、てんてつ坊、よう覺えて置いて下され。

十右　親人へ先刻より、申し上げませうと存じて居りました、この度、殿の御用向きも相調ひ、いよ〳〵明朝は、出立仕りまする手積りゆゑ、お暇乞ひ方々、また、お預け申し上げました姫君、イヤサ、預け置きたる品も、受取りの爲、推參仕りましたのでござります。

與三　ムウ、すりや、なんと云やる。もう明日の朝に出立とな。それは又、忙しない事ぢやが、もそつと逗留にならぬかいなう。

十右　イヤ、何かと事しげき國元の御用、片時も猶豫なり難き仕儀。また寸暇もござりませうならば、ゆる〳〵と別段に、罷り登りまするでござりませう。

與三　オヽ、さうしてたも〳〵。この度の御用向き相濟まば、必らず殿樣へお願ひ申し上げ、一夜泊りにても來てたもれ。シタガ、めでたい出立に、婆の祥月命日、精進物とは氣にかゝる。と云うて、今日は精進の事ゆゑ、何も肴の用意はなし。オヽ、ほんに、それ〳〵、うるめなと焼からうわいなう。

坊主　これはよからうわいなう。おれも、うるめは大好物ぢや。ハヽヽヽヽヽ。

十右　イヤ〳〵、それは必らず、御無用になし下され。國遠いたせし不孝の上、母の祥月命日に、左やうた事は恐れあり。南無貞岳信女、頓生菩提、南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛。

坊主　マア、愚僧から始めませう。

ト てんてつ坊、杯を取上げる。與三次、注ぐ。てんてつ、呑んで、與三次へさす。與三次、杯を取る。てんてつ、酌する。與三次、飲んで、十右衞門へさす。

與三　十右衞門、一つ呑みやいなう。

十右　お久し振りのお杯、頂戴仕りませう。

ト 杯戴いて、てんてつの酌にて、十右衞門、呑んでてんてつにさす。

坊主　然らば、お戴き申す。

十右　それに近頃、御慮外に存じます。

ト てんてつ、杯をとる。十右衞門、酌する。

誠に、拙者は仕官の身の上、別して遠方に隔つて居りますれば、親人の儀も、よろしう頼み存じます。今日は斯樣にお目にかゝれども、夜半の嵐の吹かぬものかや。翌日をも知れぬ、人の身の上。

ト ちやつと嬉ひの心意氣あつて

隨分親人樣には、御健勝で。

與三　遠いが花の香、ゆる〲と、早う來てたもいなう。

坊主　ヤレ〲、ひどう呑んだ。最早愚僧は、住家へ去なうやれ。

與三　もそつと、お上がり、されせせぬか。

坊主　イヤ〲、もういけませぬ〲。

與三　それなら、提灯、上げませう。

坊主　イヤ〲、通りつけたこの道筋、提灯代りは、愚僧が名を小唄節で、てんてつ〲てんてつや、ハヽヽヽ。ドリヤ、お暇申しませう。

ト 花道へ歸る。あと合ひ方になり、十右衞門、こなしあつて

與三　ハヽヽヽ、氣の輕い坊樣ではあるわいの。ほんに、わが身やマア、ひだるかろに、ドリヤ、茶漬でも拵らへてやりませう。

十右　イヤ〲親人、食事は望みにござらぬ。其まゝ〲……最前より、妹八重に逢ひたく、相待ち居りますれども、未だにちよつとも出ませぬは、どこぞへ參りましたか。

ト 聞いて、與三次、愕りし

與三　ヤア……イヤ、近所ではない。

ト うじ〲する。

十右　ムウ、左やうなれば、大坂へでも、奉公にお遣はしなされましたと、申すやうな事でございますか。

與三　オヽ、奉公も〲、奉公の中でも

十右　奉公の中でも

與三　辛い、悲しい

十右　辛い、悲しい

與三　勤め奉公にやつたわいなう。

ト 泣き落す。

十右　エヽ。

ト 愕りする。與三次、手拭にて泪を拭ひ

與三　さればいやい。話せばこれも長い事。十年以前、其方は家出する、それより打ち續きこの不仕合せ。六年前の大旱から、少々の田地田畑も賣り拂ひ、とうと若州にも居られいで、この大仁村へ引越した、ところで又婆の大煩らひ。遂に一昨年の五月九日に臨終する。その間の藥代やら、何やらかやらの手詰まりゆゑ、八重が云ひ居るには、わたしをどうぞ勤め奉公にやつてくれいと、あ

れが深切。道ならぬ事とは思へども、日々の借錢乞ひ、誠に貧乏に迫つて、據なく勤め奉公。娘を賣つたその金て、借錢もさつぱり濟まし、剩つた金で、この家の取り繕ろひ。四季の草花を植ゑて、大仁村の花の茶店と呼ばるゝも、みな妹が世話して、安樂に、暮させてくれるのでおぢやるわいなう。

ト憂ひの思ひ入れ。

十右　すりや、親々の爲に苦界の勤め。妹、ハ、ア、出かした、よう勤めに出てくれたなア。

ト憂ひ、泣き聲にて

それに引きかへ、この身の上、女に劣つたこの兄が態。思へば〳〵、先非を悔いても、歸らぬ不孝。生きて再び歸らぬ身。

與三　ヤア。

ト十右衛門、氣を變へて

十右　イヤサ、歸らぬ事を、まだ〳〵と申さんより、ちよつと暇乞ひが致したうござる。して、その勤めの先は、いづ方でござりますな。

與三　奉公に遣つたは、北の新地で、油喜の內で、かしくと云ふわいなう。

十右　ナ、、、なんと仰しやる。すりやアノ、北の新地の油喜とやらの、かしくと云ふが……アノ、かしくと云ふが。

ト大きに驚ろき、慌てる。

與三　オイナウ、あのかしくが、妹のお八重ぢやわいなう。

十右　チエ、、、すりやアノ、かしくが……アノ、かしくが、眞實の妹お八重であつたよなア。

トへたり、俯向き居る。

與三　ムウ。スリヤわが身や、この頃にでも、新地で出逢うたと云ふやうな事かいの。

十右　如何にも、度々出逢ひました。女郎のかしくが妹とは、誠に思ひも寄らぬ。

與三　そんなら猶よいワ。つい親方に斷わり云うて、暫らくのうち、借つて來う程に、その間、つゝくりともして居られまい、一寢入りしたがよい。コレ〳〵、枕も爰にあるぞや。

ト枕を渡し

ドリヤ、一走り行て、かしくを連れて戻つて來う。

ト行かうとするを、十右衛門、止めて

十右　親仁様、それには及びませぬ。
與三　なんのいの、遠い所ぢやなし、つい呼んで來るわいなう。
十右　イヤモウ、呼びにお出で下さるには及びませぬ。妹のかしくは、疾から戻つて居りまする。
　ト十右衛門、いろ／＼こなしあつて
與三　ムウ、そんなら、連れ立つて戻りやつたか。そんなら、さうと云うたがよいのに。どこに居る、妹よ、門に居るならば、入らぬかえ、かしくよ、八重よ、妹よ。さりとては、どこに居るぞいやい。爰へ來る道で、もし迷うてども居やせぬかよ。
十右　サア、道に迷うて……エヽ、なんの、道に迷うて居りませう。
與三　そんなら、かしくは。
十右　即ち、これに。
　ト小袖に包みしかしくが首を出す。
與三　妹よ、どこに居るぞいやい。この夜の更けてあるに全體マア、早う内へ入らんかいやい。どんなものぢや。
　ト云ひ／＼かしくが首を見て惆り、驚ろき門口の柱にしがみ付き、慄ひ／＼
妹よ、入らんかい／＼。
　ト云ひ／＼切り首をとつくり見て、飛び付き
ヤア、こりやかしくが首ぢや。ア、コレ、妹めが首ぢや。
　トハアヽヽと大泣きして、立つたり居たり、いろいろ悶へ、十右衛門の前へドツカリ坐り
これには何ぞ仔細があらう。コレ、十右衛門、わが身や、コヽ、この首を持つて來るからは、仔細は知つて居やう。サア／＼、ちやつと切り手を聞かしてくれ。可哀や、いぢらしや、切つた奴は、ダ誰れぢや。ドヽ、どこの奴ぢや。定めて知つて居るであらう。サア、名は何と云ふ。なんの意趣で切つた。どうした譯で切り居つた。相手はナヽ、なんと云ふ奴ぢや。云うても、サア／＼、早う聞かしてくれ。コレ十右衛門。
　トいろ／＼せり立て云ふ。此うち始終、十右衛門は手を組み、默然として居ると、大勢、提灯を持ちて、砂原の町人、日暮のかしくが衣類ばかりを持ち來り
町人　大仁村の茶店の、與三次どのゝ内は爰かな。
　ト叩く。
與三　ハイヤイ。

ト出て、戸を開ける。

皆々　開けば、清蕎のかしくと云ふ女郎は、こなさんの娘やぢげた。昨夜、砂原の此方の町で、それは〳〵むごたらしう殺された。それで町内に、上を下へと騒ぎでごんす。

町二　時に、肝心の首は、切つた奴が持つて去にをつた。この體は早く假おほひ。町内の宿老の云はしやるには、この女郎には、親達があるげな。せめての心ゆかしに、この着物を、形見に持つて行てやつてくれとの事。それで持つて來ましたる程に、切つた相手は侍ひぢや。必らずお上へ願うて、敵を討つてもらはしやれ。

町三　ア、氣の毒な事ぢや。折角お悔みなされませ。

ト皆々、捨ぜりふを云ひ〳〵入る。

與三　すりや、切つた奴は侍ひとなア。この妹になんの科、どんな仕落ちで切つたのぢや。コレ十右衛門、いま聞く通り、相手は侍ひぢやといなう。コレ、どうぞ其方が妹の仇、その侍ひめを、ズタ〳〵に切つて切り苛なみ、殺してしまうたその後で、おれにも片鬢なとそがしてくれい。コレ、早う敵を取つてくれよ。十右衛門、頼むわいやい。コレ、早う敵を殺してたもいなう。

ト大泣き、いろ〳〵あり。十右衛門、矢ツ張り、ヂツと手を組み居る。與三次、少し腹立て、氣を替へて

ヤイ十右衛門め、最前から百萬だら、これ程までに云ふに、相返答うたぬは、妹の敵を討つ事が不承知か。但し又、相手が侍ひと聞いて、わりや怖いか。サアどうぢや、十右衛門、返答せい〳〵。

ト急き込み

エヽ、腹の立つ。なんぼでも押黙つて居をるは、エヽ、卑怯者めが。よいわい、もう十右衛門、わが身には頼まぬ。オヽ、年こそよつたれ、おれも男ぢや。おのれ、侍ひめ、待ち居れ、妹めの敵、ぶち殺さいで置くものか。おのれ、侍ひめを〳〵

ト腹立て〳〵、尻からげし、身構へして、行かんとするを、十右衛門、止めて

十右　先づ、お待ちなされませ、親仁様。

與三　イヽヤ、爰放し居れ〳〵。

ト意地張る。

十右　イヤサ、お急きなされな、親仁様。妹の敵、外を尋ねるにや及ばぬ。斯く申す船越十右衛門、某が妹かしくを、手にかけました。

與三　ヤア。
　ト惘りして尻餅をつく。
ヤ、、、なんと云ふぞ。すりや、妹を切つたは、十右衞門、われぢや。
　ト呆れ
そりや又、どう云ふ譯ぢや。早う樣子を聞かしてくれいやい。
十右　ハア、、申すも便なき事ながら、斯くなりし上は、何をか包まん。仔細殘らず申し上げん。親人樣、お心いらちは無理ならねど、急き立つお心を、マアとつくりと、お靜まり下されい。
　トちよつと泣く。
與三　ド、、どう云ふ譯ぢや、ちやつと云へ。樣子は、どうぢやぞいやい。
十右　さればノ、、事長たらしき事ながら、荒まし聞いてたべ。親人樣……この度・主人の息女、園生姫さま、唐崎樣へ御縁談相極まり、右お嫁入りに付き・何かの御調達の御用を承はり、當所中の島に旅宿を構へ、罷り在るうちに、北の新地に誘はれ參りしその折り節、本國の姫君には、唐崎家への御縁組みを嫌はせたまひ、同家中、櫻井要人と申す者を、戀ひ慕はせられ、剩さへ國遠なされ、當所にて諸々方々のさまよひ給ひ、計らず北の新地へ來らせ給ふ折り節、家來が見付け奉り、御介抱を申すその所へ、奥方のお附き役人、高木喜藤太と申す者、奥方よりの御内意を承はるには、何とぞ手を替へ、品を替へて、唐崎家より結納の印とて、この方へ來たる空蟬の香爐を差戻し、無事に破談計らふ手段あらまほし。まつた、差當り姫の國遠の元はと云へば、櫻井要人に戀慕ゆゑ、その要人と云へる者は、先達て家中の妬みに依つて、後難を憚り、行くへ知れず。何卒要人の在所を捜し、姫の思ひを晴らさせよと・淵引きならぬ奥方よりのお頼み。然るところ、かしくが深く云ひ交せし、吉兵衞と云へる者は、ほゞ要人ならんと心付きし事のありしゆゑ、かしくさへ遠ざけなば、要人は自然と姫君に從ふ道理と思ふゆゑ、この度の調達金のうち三百兩を出し、かしくを拙者が身請けなし、知るべの方に預けしも、要人が實否を探らんと、思ふ間もなく、かしくは駈落ち。察するところ、落ち着く所は紋屋吉兵衞ならんと、彼れが住居、天滿の砂原に立ち廻り見れば、拔群相違の形恰好。思ふに違ふ吉兵衞は、四十餘りにて妻子あ

り。さては彼れが文使ひとて、毎度來れる六三郎と云ふ若者こそ、要人に相違あるまじと、事を糺せど、何分知らぬとばかりの吉兵衛が云ひ分。武士たる者のあるまじき疑念を殘し、裏道より立歸り、樣子を聞けば、思ふに違はず、かしくが濡う云ひ交せし、六三郎こそ要人にて二人が睦言聞く度に、所詮かしくがあるうちは、蝶の思ひは遂げまじと、我が惡の意趣と見せ、不便ながらもかしくを、なんの苦もなく。

ト與三次、いろ／＼心意氣ある。

只一討ちに、切り殺したは眞實の、我が妹であらうとは夢さら知らぬその場の次第。何かの樣子は、あら／＼斯くの通りでござります。

ト泣く。

與三　ムウ。すりやなんと云ふぞ。實の妹と知らず切つた。他人樣の娘なら、酷たらしう切つても大事ないかいやい。エヽ、アノ慈な魔王め。エヽ、おのれは鬼か蛇かいやい。憎さも憎し。エヽ、おのれは／＼。

ト十右衛門が髻を摑んで散々に叩いたり、擦り付けたりする。

これを思へばこの三月に、中山寺の無緣經の戻りに、ちよつと廻りして寄りましたと、云ひ居つたその時が、親子一世の別れであらうとは、知らなんだわい／＼。

ト泣く。

エヽ、これもなんぞの罰であろ。切つたは兄、切られたは妹。

ト泣き落す。本釣り鐘、ゴン／＼と鳴る。

十右　ありや圓通、諸行無常を知らす鐘の音。

與三　妹の年忌の逮夜の今宵。

ト切り首をかき上げ。

持佛堂の前で回向せん。

十右　庭の草木も

與三　逢には枯るゝ。

十右　有爲轉變の

兩人　世の中ぢやなア。

ト合ひ方になり、兩人、いろ／＼心意氣ありて、與三次は首を抱き、納戸へ入る。十右衛門は小首を傾け、しを／＼と切り戸へ入る。ト花道より林兵衛、野袴、大小、羽織にて、中間を連れ、出で來り

林兵　かしく、七郎助、その外大勢を殺めたは、舟越十右衛門、見付け次第に、搦め取らん。けふさいなは、この

家の内。

中間　併し、十右衛門めは、大抵の奴ではない。迂濶に入らば、危ない〳〵。

林兵　家來、來やれ〳〵。

ト橋がゝりへ入ると、花道より藤内、捕り手大勢、召連れ來たり、この家の内へ

藤内　ソリヤ。

ト指圖に從ひ、捕り手、内に入らんとするところに、與三次、スタ〳〵と立ち出で、立ち塞がり

與三　こりや何ゆゑに、理不盡な事なされますな。

藤内　ヤア、とぼけまい。この家の内に園生姫、匿ひある段、明白なり。縁談違背への科に依つて、姫の首討ちて立歸れとある、宰相家の仰せ。それゆゑ討手に參つた某は、狩山藤内。なんとこれでもあらがふか。

與三　サア。

藤内　サア。

與三　サア。

兩人　サア〳〵。

藤内　なんと。

ト二階、障子屋體の内にて

園生　南無阿彌陀佛。

十右　エイ。

ト首討つ音する。

與三　ヤア、姫君を。

ト吃りするを、十右衛門、切り首を持ち出で

十右　縁談承引なきゆゑ、據なく姫君の、御首を討ち來りました。イザ、お受取り下されませう。

ト渡す。

藤内　未だ面體知らねども、姫は並びなき美人と聞く。この首に相違もあるまい。急ぎ宰相家へ差上げん。家來、供せい。

ト橋がゝりへ入る。

與三　ヤイ天魔め、おのれはなア〳〵。エヽ、そんな根性には、なんでなり居つた。勝手のよい所にや、姫君を預けにうせをつて、又おのれが手で、首を討つと云ふやうな事があるものかいやい。

ト腹を立て、力む。この時、園生姫、出かけ出で

園生　與三次、自らは無事で、爰に居るわいなう。

與三　ヤア、あなたには御安泰とな。

園生　十右衛門は忠義の侍ひ。

與三　それに又、いま渡したあの首は。
十右　矢ツ張り妹、かしくの首。
與三　成る程は成る程ぢやが、善か悪かは、とんと解らぬ。
園生　みんな、この身の徒らから、かしくが非業は、堪忍して下されい。南無阿彌陀佛。
　ト ちよつと泣く。
十右　敵同士が兄となり
與三　また妹と生れ来て
十右　死して貞節。
與三　生きての忠義。
十右　思ひ遣せには
與三　切ない身ぢやなア。
　ト花道より、バタ〳〵にててんてつ坊、尻からげ、走り来る。
坊主　コレ〳〵、十右衛門に意趣ある侍ひが、馬方を大勢語らうて、追ツつけ爰へ来ると聞いたゆゑ、道から引返して、知らせに来た。
與三　日頃の深切、忝ない。
十右　すりや、川口林兵衛めに極まつた。大切なる姫君は親仁様にお預け申す。裏道から、早う〳〵。

與三　オツト、合點ぢや〳〵。
坊主　おれが附いて居るから、百人力ぢや。
與三　サア姫君、ござりませ。
　ト與三次、園生姫を連れて、橋がゝりへ走り入ると、馬方大勢、ワヤ〳〵云うて来たり
馬士　サア、さる侍ひに頼まれた。十右衛門、われが命は、おいらが仲間へ、討手に欲しい。
　ト十右衛門、凜々しく身構へして
十右　組み手も大概知れてある。いらざる頤叩くなやい。
馬方　なにを。
　ト大勢、一緒にかゝり、大タテになる。また捕り手大勢、出て来り
捕手　ソリヤ。
　ト総がゝりに入り亂れになり、いろ〳〵大タテありて橋がゝりへ追ひ込む。馬士とてんてつ坊とよろしく立廻りありて、てんてつ坊、したゝか喰はされて
坊主　阿房よ。
　ト逃げ吠えに逃げて入ると、拍子、チヨン〳〵、淺黄幕になると、向うより野田嘉十郎、上下、大小にて家来を召連れ、走り出で、臆病口より六三郎、若衆しに

て香爐を持ち出で

六三　あなたは野田嘉十郎さま。

嘉十　これは〳〵、珍らしや栗人どの、姫君始め十右衛門の身の落着は、この御書にあり。何かはさて置き、空蟬の香爐は、首尾よくお手に入りましたかな。

六三　如何にも手に入り、即ちこれに。

嘉十　重畳々々。然らば、これより十右衛門どのに對面せん。栗人どの。

六三　先づ、ござりませ。

ト橋がゝりへ入る。拍子木、チョン〳〵。淺黃幕、切つて落す。

造り物、向う一面、打拔き、遠見に神崎川の模樣。馬方、捕り手大勢、十右衛門を取卷き、大タテいろいろあつて、皆々、追ひ込むところへ、林兵衛走り出で

林兵　うぬ。

ト十右衛門にかゝる。よろしく立廻りあつて、十右衛門、見事に林兵衛に繩かける。この時、園生姫、與三次、てんてつ坊、六三郎、嘉十郎、走り出で來る。

園生　ヤア、わが身や栗人。

ト園生姫、六三郎の側へ寄る。

十右　いづれも、面目ない。かしくを殺し、御用金三百兩の申し譯を。

ト腹切らうとする。與三次、とめて

與三　ヤア、待つた十右衛門、何かは一先づ本國に立歸り、裁許はお上のお指圖次第。

嘉十　死ぬるには及ばぬ。十右衛門が忠心、即ち裁許はこの一書に。元の起りは川口林兵衛。香爐、首尾よく手に入るからは。

ト十右衛門に渡す。

十右　すりや、本國へ歸參とは、エヽ、有り難し、忝なし。

與三　めでたし〳〵。

皆々　この場は、お立ち〳〵。

ト打ち出し

幕

競かしくの紅翅（終）

解題

渥美清太郎

本集には、寛政を中心として、その前後にわたり、京坂に書き卸された世話狂言の中から、有名且つ戯曲史上重要なるものを選んで七種收めた。

思花街容性（おもわくくるわかたぎ）

天明四年八月廿四日初日で、大坂角の芝居に初演された初世並木五瓶の作である。白井權八と幡隨院長兵衞、いはゆる「比翼塚」の世界を扱つた狂言は、江戸には無數にあるが京坂には割に少ない。その中で本篇と、「平井權八吉原衞」との二つだけは盛んに上演されたものである。上方人の描いた江戸ッ子は、常に生緩いものであるが、これなぞも御多分に洩れず、ひどく歯切れの悪い脂ッこい長兵衞が出てくるが、それでも四世市川團藏の長兵衞は天晴れ江戸の男達振りを發揮するものとして喝采を博し、江戸へも持つて來て見せたものである。團藏當り藝の一として數へられてゐる。

初演の役割は左の通りであつた。

上杉貞次郎（嵐三十郎）車傳吉（三桝松五郎）更科金兵衞　實ハ平井權八（藤川八藏）松葉屋小紫・長兵衞女房お澤（二ヤク芳澤いろは）傾城幾浦（嵐村次郎）比良友之進（中村治郎三）荒井宮藏（藤川鐵九郎）品川伊平太（中山他藏）仁木主計頭（今村七三郎）比良正右衞門（嵐七五郎）伊平太女房お崎（山下龜之丞）岡の谷。長兵衞母（二ヤク姉川大吉）佐竹李之頭・幡隨長兵衞（二ヤク四世市川團藏）

大詰の小紫權八の道行は、上方特有の景事になつてゐる。その名題は「道行吾妻からげ」で、宮古路世里太夫、ワキ宮古路島太夫、三味線・濱富士龍の出語りであつた。男達と傾城の道行に、相の山のお杉お玉を踊ませるなぞは、飽くまで上方式である。

この脚本は、享和三年正月、京都の吾妻富次郎座で上演された時、根本となつて刊行された。その名は「戯場言葉草」と替へられてゐたが、初演の臺本と對照して見ると、一字一句違つてゐない。京坂脚本の根本は、可なり刊行されたものであるが、この書がその嚆矢だと云はれてゐる。

伊勢音頭戀寢刃（いせおんどこひのねたば）

寛政八年五月四日の夜、伊勢古市の油屋清右衛門方で、宇治の醫者孫福齋宮が、馴染の茶汲み女お紺と酒を飲んでゐたが、そこへ阿波の藍玉商人岩次郎と孫三郎が立寄り、二階へ上がつて同じ茶汲み女のお岸とお鹿を相手に酒宴を始め、お紺までその席へ連れて行つてしまつたので、元來酒癖の悪い齋宮は機嫌を損じ、表へ出て脇差を受取ると其まゝ、突然下女の萬に切りつけ、それから荒れ狂つて九人まで傷けたといふ椿事があつた。

この事件は直ぐと伊勢松坂の芝居で、「伊勢土産菖蒲刀」といふ名題で脚色され、嵐三五郎が齋宮を演じたのであるが、餘り早過ぎた爲に却つて世に傳はつてゐない。

七月二十五日を初日にして、大坂角の芝居では、この事實を脚色して上演した。「伊勢音頭戀寢刃」がそれである。少し遅れて京都南側芝居でも、同じ材料を脚色した「川崎踊拍子」が上演されたが、これは前者の盛名に壓せられて評判にならなかつた。後者で主人公の遠山齋宮を演じたのが、「伊勢土産菖蒲刀」を演じた同じ嵐三五郎であつた所を見ると、「菖蒲刀」と「川崎踊拍子」とは、似た狂言でもあつたらう。前者は近松徳三作で、僅か三日の急作であつた所爲か、太々講の場へは近松の「長町女腹切」を其まゝ借用し、外にいろ／＼と他人の創意も借りてはゐるのだが、組立てが巧みなので持囃され、今日まで絶えず上演を續けて來たものである。「川崎踊拍子」の方は奈河篤助の作で、似たやうな作意であつた。敵役が白木屋武助であつたり、齋宮が後に母に愛想づかしを云つたり、齋宮の女房お菊が自害したりする點が違つてゐる位なものである。藤浪左膳といふ同じ名の裁き役の侍ひも出る。これが「菖蒲刀」の後身であつたとすると、或ひは却つて「戀寢刃」の方でその作意を取入れてあるのかも知れない。僅か十日上演が遅れたばかりで「戀寢刃」の方にその功を奪はれてしまつたのは、篤助も残念がつた事であらう。

「伊勢音頭戀寢刃」の初演の役割は左の通りであつた。

福岡貢（中山文七）藍玉屋北六（山村儀右衛門）女郎お鹿（[illegible]）次郎助（大谷徳次）[illegible]（[illegible]清藏）油屋お岸（[illegible]）孫太夫娘[illegible]（芳澤[illegible]）[illegible]太夫（[illegible]五郎）[illegible]（[illegible]左衛門）油屋お紺（芳澤いろは）貢伯母おみね（[illegible]）徳島岩次（三桝他五郎）今田萬次郎（坂東[illegible]太郎）仲居萬野。正直正太夫（二代目中山文五郎）奴林平（藤川八藏）料理人喜助（嵐[illegible]助）藤浪左膳（[illegible]十郎）安達大藏（淺尾友藏）桑原丈四郎（[illegible]十郎）

これを江戸へ初めて持つて來たのは、三世坂東彦三郎で、享和三年二月河原崎座で、原作のまゝ上演した。その時の役割は

おみね、お紺（ニャク中村大吉）正太夫（市川友藏）猿田彦太夫（桐の谷門藏）萬野（坂東彦左衛門）左膳（山科四郎十郎）喜助（市川荒五郎）貢（坂東彦三郎）

等であつた。この型を見習つて三世尾上菊五郎が度々勤め、遂に東都に音羽屋型を今に殘すに至つたのである。

近松徳三は寛政から文化の京坂劇壇では一流の作者で、俳人小野紹連の孫と生れ、父は大枡屋勝右衛門といふ坂町の遊女屋であつた。徳三の幼名は勝助で、子供の時から芝居好きが、遂に近松半二の門に入る事になつて、最初は淨瑠璃作者たるべく修行したのだが、父と同業の伏算といふ者が劇場の金主をやつてゐた關係から、勸められて歌舞伎へ入り、徳三を名乘つたのである。また徳叟の字を以てした事もある。五瓶や萬作の下で腕を磨き、丁度篤助とは競爭相手であつたが、寛政七年、四十四歳で初めて立作者となり、翌年、伊勢音頭の競爭で篤助に勝つてから、彼の名聲頓に揚り、同時に篤助は江戸と京坂を度々往復するうちに名聲を落し、榮冠は彼れの手に落ちた。徳三の作には今日まで殘る名脚本も少なからず、長壽を得たなら猶傑作も發表したらうが、文化七年八月二十三日、五十九歳で死んでしまつた。時事問題を脚色する事と、小說を劇化する事とは、彼れが最も得意としたところで、全作は殆んどこの二種類に分ち得る位である。

戀飛脚大和往來

梅川忠兵衛の情死は事實なのであるが、その傳說は幾種も傳はつてゐる。正徳元年正月には、大坂榊山四郎太郎座で切狂言に脚色し、同じく京都都萬太夫座の「けいせい九品の淨土」京都夷屋座の「けいせい本願記」等が、何れも同じ題材であるのを見ても、事實が有名だつた事は解る。

近松門左衛門の「冥土の飛脚」は、正徳元年三月、竹本座の切狂言に現はれたので、歌舞伎より少し遲れたが、作としては、一の好評を占め、後の梅川忠兵衛は、すべてこれから出發してゐるのである。正徳三年十月には紀海音も同じ材料を「傾城三度笠」に書いた。割に巧い作ではあるが行はれなかつた。兩者とも其まゝ歌舞伎に入つてはゐるが、それは極めて近頃の事で、昔は原作のまゝでは舞臺に入つてゐなかつた。

「戀飛脚大和往來」は僅かに歌舞伎の方で改作したもので

あるが、刻本はいつであるか、脚本がどういふ段取りになつてゐるか、明瞭でない。記録には寶暦七年七月、大坂大西芝居の上演を記してゐるが、刻本は恐らくこの以前であらう。隨つて役割も解らない。後世この名題で上演する狂言は、上の巻が「生玉神社の場、亀屋見世の場」で、爰は八右衛門の奸策や、云ひ譯けのお國訛の賃貸を見せる幕で、中の巻が「封切り」下の巻が「新口村」で、時によつては新口村の次へ、忠兵衛が八右衛門と立廻つて仕返しする件を附ける事もある。この「新口村」は、安永二年十二月に菅専助が改作した「けいせい戀飛脚」其まゝであるが、これは後に附けたので、刻演には新口村の場があつたとしても、行き方は變つてゐたらうと思ふ。或ひは又「けいせい戀飛脚」が、歌舞伎の「戀飛脚大和往來」を其まゝ淨瑠璃化したのではないかと、疑へない事もない。

本作へ取つたのは、中の巻と下の巻である。底本は天明頃のものであるが、年月座名は明記でない。併し今日の舞臺と、それ程の相違はない。

戀飛脚は、この頃では「こひびやく」と讀んであるが、この底本にはハツキリと「こひのたより」と假名が振つてある。この方が本當であらう。

江戸へも早くから入つてゐるらしいが、果して「戀飛脚」である事やハツキリしない。新口村をお千代半兵衛に其まゝ直して常磐津で演じた事もある。天明三年四月の森田座が、戀飛脚を江戸で上演した最初かと思はれるが、正確だと云はれぬ。僅かに「戀飛脚大和往來」なのは、文化七年九月の森田座に、市川市藏の忠兵衛、藤川友吉の梅川、荻野伊三郎の孫右衛門で演じた時である。以來江戸でも上方系の俳優に依つて度々上演されてゐる。江戸根生えの俳優がやる時には、多くは江戸向きに改作されてゐたやうである。

銘作切籠曙（めいさくきりこのあけぼの）

享和元年九月、大坂中座に上演した二番目もので、近松徳三の作である。その頃、高槻の城下で盆踊りの夜、鏖殺しの慘事があつて名高かつた。際物作りの名人徳三は、直ちに「伏見京橋諍實錄」といふ古い狂言から星見伊助といふ似たやうな人名を探し出し、擬寶おせんの名に附會して二幕物に脚色したので、當時の名を高津市場として高槻を暗示したのである。盆踊りの夜の鏖殺しといふ場景が、如何にも歌舞伎の妙所を摑んだ面白い趣向である上に、由來夏狂言は數が少ない爲、この狂言は頗る歡迎されて、京坂では每夏殆んど上演された程であり、東京でも又時々舞臺に上された。

初演の役割は左の通りであつた。

鷹津左市郎（中山兵太郎）横井惣左衛門（中山文藏）中津萬五郎。松ヶ端五作（ニヤク藤川鐵九郎）樽屋娘おせん（中山一德）番頭長九郎（大谷友右衛門）岩瀬十平次（淺尾友藏）樽屋後家お千枝（澤村國太郎）松江姫（山下龜松）梶川新十郎（片岡仁左衛門）里見伊助（嵐吉三郎）

江戸での初演は、文化十二年六月の市村座で、名題を、「其噂色聞書」と改め、左の役割であつた。

新十郎（嵐三五郎）伊助（關三十郎）おせん（岩井粂三郎）おちゑ（市川團之助）有田文藏（惣左衛門の役——助高屋高助）

百千鳥鳴門白浪

寛政九年正月、大坂角の芝居に上演されたもので、いはゆる二の替り狂言である爲に、無暗と筋が複雜で、矢鱈に華やかで、夥しく役が出て、斯種の脚本の長所と短所を遺憾なく出してゐる。作者は近松德三であるが、これは別に際物を脚色したのではないらしい。近松半二の「夕霧阿波の鳴渡」の世界に依つて、正月向きのお家世話を書いたものであらう。德三のものとしては可成り繰返されてゐる。

就中好評だつたのは「傾城買指南所」の景事で、これは役には獨立した一幕としても上演された事が度々あり、鴛鴦の所作や植木屋の彌七や女夫狐などゝ共に、三五郎の家の狂言となつた當り藝である。初演のこの出語りは、宮薗文字太夫。ワキ宮薗磯太夫、三味線、時澤鶴孔、同じく時澤幸八であつた。三五郎はこの役を一世一代にして、その後、四國順禮に出たのであつた。

初演の役割は左の通りである。

萩塚萬次郎、藤屋伴左衛門（ニヤク嵐三五郎）漁師平作。石原三位國景（ニヤク嵐三津右衛門）野口藏之進（嵐吉三郎）霞覺の前。後の夕霧（ニヤク芳澤いろは）濱田織部（嵐雛助）福芝左衛門。宇山要助（ニヤク關三十郎）濱田出雲（山村儀右衛門）淺川求馬（坂東重太郎）森岡平（藤川八藏）山伏祐壽院（中山文五郎）海女おなみ。吉田屋おきさ（ニヤク吾妻藤藏）娘木幡。尼智月。玉琴（三ヤク芳澤萬代）千鳥の前。先の夕霧（ニヤク澤村國太郎）有明（芳澤國次郎）萩塚鳴戸之助（尾上鯉三郎）

江戸での初演は、天保八年二月の森田座、「群集衛鳴戸白浪」であつた。傾城買指南所に「鬮花街文章」といふ名題で常磐津に直し、全篇を通じて江戸向きに訂正して上演したのだが、上方狂言の移入でいつも成功してゐた澤村

訥升も、これでは失敗したらしい。江戸での上演はこの時只一回ぎりである。その時の役割は

萬次郎、伴左衛門、藏之進（三ヤク澤村訥升）千鳥の前、おなみ、前の夕霧（三ヤク岩龜之丞）勅使院、平作（二ヤク大谷友右衛門）鬮芝左衛門（市川清十郎）織部（關三十郎）おきさ（叶みんし）寢覺の前、後の夕霧（二ヤク坂東玉三郎）出雲（市川壽美藏）石原三位、要助、鳴戸之助（二ヤク坂東三津五郎）留月、求馬（二ヤク森田勘彌）

隅田川續俤（すみだがはごにちのおもかげ）

江戸の淨瑠璃には幾つかの系統がある。「淺間」「石橋」「道成寺」の類であるが、「双面（ふたおもて）」もその一つである。女或ひは男の同じ姿が二人現はれて、その情人を惑はすといふのが中心である。その源は遠く謠曲の「二人靜」に發し、近松の「赤染衛門榮花物語」で戲曲に入り、常磐津の「妹背塚松竹」で書き改められ、それ以後幾多の曲が出來、その殿りとして安永四年三月市村座の「色模樣青柳曾我」が演じられた。その淨瑠璃「垣衣戀寫繪（しのぶぐさこひのすがたゑ）」は、修行者大日坊の幽魂が、葱賣りお菜となつて現はれ、一體男女二人の動作を見せるのが主眼で、初世中村仲藏が、これを勤めた。在來の双面に、「垣衣千鳥紋日（しのぶぐさちどりのもんび）」といふ常磐津から葱賣りの姿を借りて來て組み合せたに過ぎず、淨瑠璃の作者は初世河竹新七であるが、こんな譯で純創作とも云へぬ譯である。その葱賣りの女姿を引立たせる爲、前身を景清の伯父大日坊といふ破戒無慚の惡僧とし、油屋のお染久松や、野分姫を苦しめ、阿古屋の手にかゝつて死ぬといふ筋に書いたのは、初世櫻田治助であつた。この狂言は大當りで、この時同座してゐた四世市川團藏が自家の狂言にしたいと考へ、大坂へ歸る早々、奈河七五三助に命じて書き直させた。曾我狂言にそれ程の興味を持たぬ京坂の看客に、大日坊を突きつけても興味を感じる譯がない。そこで七五三助は世界を松若梅若の「隅田川」に改め、團藏の話に依つて全部を創作的に書き直した。但し淨瑠璃の文句だけは、原作を尊重して其まゝにして置いた。これが「隅田川續俤」で天明四年五月、大坂角の芝居が初演である。「續（ごにち）」といふ所に、改訂といふ意味が籠めてある。

七五三助は隅田川の世界に直す爲に、隅田川劇の先蹤ともいふべき、近松の「雙生隅田川」の人名を借りて來たので、法界坊といふのは山伏で近松の作にも現はれてくる。それを大日坊の役に當嵌めただけの事なのだから、安永頃に實在したといふ近江の國の法界坊とは、勿論何の關係も無いのである。

初演の役割は左の通りである。

道具屋甚三（藤川八藏）同市兵衞（山下平九郎）永樂屋權左衞門（今村七三郎）澤山讃九郎（市川友藏）番頭正八（三桝松五郎——正八は番附には庄八とあるのだが、正本の字に據つて置いた）山崎屋勘十郎（中村治郎三）野分姫（嵐村次郎）手代要助 實ハ吉田宿位之助（染松七三郎）永樂屋娘おくみ（芳澤いろは）仲居おかん（山下龜之丞）丁稚太郎作（鐵谷仲藏）平田藤藏（藤川仲藏）甚三女房おさく（山下金作）聖天町の法界坊、澤山主膳（二ヤク市川團藏）

團藏はその後又江戸へ下つて、寛政十年九月の森田座に「振袖隅田川」の名題でこの法界坊を見せた。珍らし物好きの江戸人は、この上方出來を歡迎して、それまで度々再演された本家の大日坊劇を蹴飛ばしてしまつた。以來、双面に法界坊と定まり、これが又江戸向きに手を入れられて、今日に殘つたのである。だから本卷收錄の法界坊は、現今上演されるそれとは大分違つてゐる所がある。最近の法界坊脚本は、「世話狂言傑作集」第一卷に入れてあるから、御參照を願ひたい。また大日坊の方の脚本は、本全集「化政度江戸狂言集」の中へ入つてゐる。

「振袖隅田川」の時の役割は左の通りであつた。この狂言は上演每に役名の變更される事は珍らしくない。蒔姫とは原作の野分姫、幸吉は要助、おきのはおさく、三郎は主膳の事である。

蒔姫（市川德之助）權左衞門（山科四郎十郎）おくみ（山下民之助）幸吉（佐野川市松）庄八（市川友藏）甚三（中山錦八）おきの（小佐川常世）法界坊、山田三郎（二ヤク市川團藏）

この時、初めて押戻しが出た。松浦五郎直秀といふ役名で市川團三郎が勤めた。又、渡し守も甚三女房でなく、都鳥のおしづといふ別な役で、常世が二役を兼ねたのである。

奈河七五三助は、大坂道頓堀の蔦新といふ茶屋の息子で、幼名を金次郎といひ、後に日本橋で米吉屋といふ旅宿を營んでゐた。奈河龜助の門人になつて作者道に入り、寛政を中心に大いに働らいたものである。江戸へも一兩度來た事がある。傳奇作書は彼れを「法流物の七五三助」と罵つてゐるが、彼れは決して古狂言の添削や院本の燒直しばかりを專らにしたのではない。立派な創作を澤山書いてゐる。この評は大いに當らぬ次第である。文化十一年十月二十日、六十一歲で歿した。

競（いろくらべ）かしくの紅翅（べにがき）

文化五年五月、大坂角の芝居に上演したもの。作者は近

松德三で、矢張り際物を脚色したのである。その實說を傳寄作書から引かう。

これは文化五辰の春、北の新地の或る茶屋にて振舞ひあつて、藏屋敷の留守居行かれ、この供の者、臺所に坐りしところへ、名うての妓女來て、二階へ上がらんとする時、簪を落しけるを僕、下に居けるゆゑ拾うて渡せり。藝子、憚りと云ひさま、僕の手を共に握つて戴き取りける、この僕、遠國に育ち、始めてかゝる美女に手を握られし事ゆゑ、嬉しさ心魂に徹し、屋敷へ歸りても片時も忘られず、女郎と遊び藝子なれば、小金にては求められず、人の花と詠めさせんよりはと、無分別なる料簡を發して、その後曾根崎の途中にて一刀に切り殺しけり、藝子は元より馴染にてもなく、思ひもかけぬ者の手にかゝり、不便さ云はんやうもなく、彼の僕はその場を逃げ去り、大仁村麥飯屋の簀の子の下に隱れ居しが、翌夕方空腹になりしかば、這ひ出て食を乞ひし所を、召捕つて出しけり、この頃は大仁村茶見世賑はひし時分なり。

この事實を「八重霞浪花濱荻」の世界に切り嵌めて脚色した一夜漬けの狂言なのであるが、京坂では度々再演されてゐる。江戸では一度も上演しなかつたやうである。

初演の役割は左の通りであつた。

綾屋吉兵衞。大仁村與三次(ニヤク片岡仁左衞門)川口林兵衞(桐の谷權十郎)松屋七郎助。でんでつ和尚(ニヤク中山文五郎)油屋喜助(市川市藏)高木喜藤太(吉右衞門)家主市右衞門。奴宅平(ニヤク嵐猪三郎)園生姬(藤川勝二郎)吉兵衞女房おさき(三桝德次郎)職人六三郎實ハ櫻井要人(中山小三郎)娘おとく(片岡愛之助)下女おさよ(柴崎蔦藏)判方太治兵衞(瀧右衞門)油屋かしく(中山よしを)船越十右衞門(嵐吉三郎)

斯う書いたものゝ、考證、年代、カタリの殆んど全部は山形の秋葉芳美氏から教へられたもので、小生はお取次に過ぎない。前回の「赤穗義士劇集」も同樣である。記して謝意を表す。

編纂校訂責任
渥美清太郎
鈴木 侃

日本戯曲全集・第九巻
寛政期世話狂言篇・第八回配本

編纂者検印

昭和三年十二月廿七日印刷
昭和三年十二月三十日發行　（非賣品）

編纂者　渥美清太郎
發行者　和田利彦
印刷者　高見靖藏
製本者　高崎鐵五郎

東京市京橋區南傳馬町二丁目六番地
發行所　春陽堂
電話京橋　六五二
　　　　　四四一五一
振替東京　一六一七

製版所　新倉東文堂

小石川區・諏訪町・五十六番地・常盤印刷所印刷